
ハードボイルドワルツ有機体ブルース

N . r i v e r

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

流れるような紋様が虹色に混ざり合う加鉍石カウンターを眺めて押し黙ること、かれこれ地球基準時換算で二時間あまり。どれほど周囲から怪訝な視線を投げかけられようと『ヒト』の発声器官しか持たないアルトにとって、ここ『ラウア』語専用カウンターでのやりとりはまったくもって不可能だった。

目の前には注文を要求するホロメニユーが浮かんだぎり。透けたその向こうには今にも営業妨害だとまくし立てそうな店員が一体、エラをなびかせて立ち尽くしている。他にこのカウンターの利用者は誰もいない。

もちろん注文のひとつもすませたなら、この気まずさも少しは紛れるのだろうが、見てのとおりメニユーはどれも馴染みのない『ラウア』語圏の伝統料理ばかりだ。その得体の知れない流動食に、つかの間でも興味を持ってという方がこれまた無茶なハナシだった。

『兄さん、あんた症候群か？』

半ばからかうように、背後から言葉が投げられる。生真面目に反論するほど、まだ冷静さを失ったわけではない。聞き流すべく、アルトはカウンターに投げ出したままのホロレターへ指を伸ばした。すかさず開いたなら、折り目の投光レンズから文字映像は飛び出してくる。

ハッピーバースデイ アルト 獅子の口は真実を語る

その下に円形の俯瞰図は広がり、その一点を指し示す数列と、添付されて光学バーコードは白く浮かび上がった。言わずもがな光学バーコードはここへの圧縮ナビプログラムだ。俯瞰図はこのフロアで、時刻で間違いない数列は『ラウア』語カウンターの位置に引つ

掛けられている。

何度確認したところで待ち合わせを示しているだろうほかに、思い当ることはない。にもかかわらず送り主の記録はといえば残されていなかった。その胡散臭さがまたアルトからため息を引き出させる。ホロレターを投げ出した。その手は無煙タバコを探すと、うんざりする気持ちを紛らわせて作業着の胸ポケットを無意識のうちにまさぐり始める。

ここは広大な宇宙の僻地に浮かぶ中継コロニー『フェイオン』。蜂の巣がごとく格納庫を並べた二つの発着リングを串刺すメインシヤフト第二十八階層、そこを陣取るハウスマジュール『ミルト』だ。フロアはシヤフトを輪切りにした形状そのままと円形かつ広大で、壁沿いにアルトの寄りかかる『ラウア』語を含む総計三千とんで二十八種の言語別カウンターを、一枚板でぐるり並べている。

利用者が出入りするゲートは時計の文字盤さながらカウンターを等間隔に区切ると口を開き、そのどれにも隣接モジュール名を連ねたアーチを掲げていた。

言うまでもなくこうした中継コロニーには昼夜の境がない。そのためゲートをくぐり出入りにする利用者に切れ目はなく、カウンタ―周辺はもちろんのこと、その広大な円の中央、変化自在なフレキシブルシートが散らばるラウンジスペースまでもが万種入り乱れての大盛況を繰り広げていた。

もちろんそのほとんどは燃料補給の傍ら訪れた、長距離航行就労者たちとなる。

安直なグローバル化の果てに世界は今や情報同様、物理面での同時性をも強く要求して止まなかった。伴い今や長距離航行就労者数は、全労働者数の三割にまでのぼっている。もちろんこれは認識されているうちの統計にすぎず、もぐりの数に入れたなら五割に達するかという勢いでもあった。そしてその誰もが広大な空間でのスピ

ーディな輸送を要求され、どれほど運搬路が整備され輸送船機能が向上しようと追いつかぬ即時性に、過酷極まる労働環境の元で奔走していた。

補って通信や映像技術の革新は数度、起きている。だが限られた刺激と空間に長らく閉じ込められた者が発症する『イルサリ症候群』問題は、今だ解決されていない。

この『イルサリ症候群』、そのもそもはホームシックからくる鬱状態だ、とあしらわれてきた各種症状の集まりだった。具体的に説明するなら、極端な感情の萎縮を経て、不可逆的な外部刺激への無反応状態が病の特徴的だ。果てに自我消失を招くことから、発見された当初は長距離航行就労者の奇病と呼ばれ、ホームシックを越えてひどく恐れられもした。

つまり発症はもっぱら航行中と決まっている。果てに船長を失った船は失踪し、ある日、突然、放置船となって発見されるといふ成り行きがオーソドックスでもあった。その中からミイラと干からびた主が見つけ出されるたびに同業の者は明日は我が身と表情を曇らせ、震えあがってきてもいる。

積りに積り、過去、物流関係から就労者離れが起こったことは当然のなりゆきだろう。だが放置すれば世界はたちまち立ち行かなくなるのが実際だ。政策はすぐにも打ち出されると、それがこうした連邦によるハウスマジュールの運営だった。

『いかなる種族も持ちつる郷愁と、枯渇している物理他者を利用することで、埋没しつつある感情を掘り起こす』

ハウスマジュールの設営理念はといえば実にご立派なものだ。

きつかけを作った症候群研究の権威は、病名にも名が残されている亡き連邦局名医、ドクター・イルサリである。名は病と共に、今や既知宇宙で広く知られることとなってもいたのだった。

そろそろ目の前の『ラウア』語店員も黙りこくる自分を本気でそんな症候群患者だと疑い始めているのではなからうか。

アルトはうがる。

もちろん保健員に通報されてはかなわないと、最初、優勢十三種の言語で構成された公用語、いわゆる混合造語で話しかけもしていた。だがネイティブ店員などという仕事につくこと自体、造語が話せないせいだという偏見通りか、店員が答えて返すことはなかった。いや、混合造語は連邦政府がごり押しで公用化を決定した言語だ。おかげで普及の際、自らの文化を、言語を保護すべく、少数派の言語圏種族がテロまがいの抵抗を試みたという歴史もある。果てに造語に解体されていった弱小種族は少なくない。それでも現地語を貫いた一部種族に至っては経済活動からつまはじかれ、略奪で生計をたてる船賊になり下がった種族もあるほどだった。

閑散としたカウンターを見ての通り『ラウア』語は少数派、拒絶組のようだ。敵言語と、造語を無視したところで気持ちくめれば文句こそ言えはしないだろう。なおさら店員へかける「言葉」をなくして黙り込む。

ただタバコの手先へ火を点けた。そう、同情されたいのはこんな場所ですねばり続ける自分の方なのだ。内心、毒づく。

そんな『ラウア』語カウンターへ近づく者の影は、まだ見当たらない。

『金の手配は整ったぞ。ジャイロの方はどんなあんばいじゃ？』

コトは五十六万セコンド前にさかのぼる。

その時、馴染みのギルド、種族名『デフ6』^{ハナタマリ}のサス・フォーは、特徴でもある鼻と口の一体化した袋、^{鼻溜}を揺らし、強化アクリルで設えられたドーム型のコクピット、そこへ投影された通信ウインドよりアルトを覗き込んでいた。

さて、世間からどれほど泥棒呼ばわりされようと、エコロギーをモットーに廃棄衛星、放置コロニーに放置船、あらゆる浮遊物からリサイクル可能品を回収するのがジャンク屋だ。そんなジャンク屋からジャンクの買取りを一手に引き受けるギルドから、大型貨物船『ドリー』の超空間ジャイロ買取りが発表されたのは、さらにさかのぼること二十五万セコンド前のことだった。

その価格はギルドが活動を始めて以来、最高を示す百七十万GK。サスの通信は、たぶんにもれずその争奪戦へ参加したアルトの、『ドリー』一番乗りを知らせるメールへの返信だった。

『万事、うまくいっとなるのか？』

ギルド加盟店として引き取れば、本部から買い取り価格の二割を手数料として受け取ることとなっているサスの目が、聞けばのけぞるような年齢を帳消しにして鋭い光りを放つ。

見上げてアルトは操縦席で座りなおした。もったいぶると心待ちにするサスの前へ、ジャイロどころか何の変哲もないホロレターを突き出してみせる。とたんサスの表情が張り付いたことはいままでもない。しばし瞬きを繰り返し、その目へ老眼鏡をあてがった。念には念を入れてホロレターをなめまわし、アルトへ会心の一撃を放つ。

『なんじゃ、ジャイロはその中でも入っておるのか？』

食らってアルトはホロレターを下げた。

『なわけないだろ。だったら百七十万のドリーどころじゃすまない世紀の大発明だ』

何しろジャイロは三メートル四方の大物だ。引き取り側のサスがそのことを知らないはずもなく、アルトは軽く舌打ちする。それ以上の悪態を飲み込んだ。

『いや、お前のことじゃ。思わず期待したわい』

とぼけるサスに気にした様子はない。はずした老眼鏡を振り回して高らかと笑う。

『そのあつかましさ、見習いたいね。まったく』

『ならせいぜい、お前も長生きすることじゃな』

付け加えたサスの調子は、そこで真剣なものへ改まった。

『で、一体、何がどうした？』

逸れた会話を本題へ引き戻す。

『化けちまったのさ』

吊り上げた片眉で、アルトは切り出していた。

『化け、た？』

『ドリーの船体に回収の足場を組んだとたん、物理配送員が自宅の警報に引っかけたってね。考えもしなかったぜ。ほんの十数分だ。ほんの十数分、通配送員とやり取りを交わしている間に、ジャイロをさらわれちまった。終わった時はもぬけのからさ』

聞いたサスの鼻溜が、ため息のようなものにととき大きく膨む。

『そいつは新手じゃのう』

同情するというよりも、感心するかのようなそれは口ぶりだ。

『ああ、しかも相当に斬新な相手だね』

付け加えてアルトも言う。

『ただの囮じゃないらしい。転送されてきたホロレターの中には、コーニーフェイオンへのナビプログラムと、待ち合わせらしき見取り図が保存されていた』

今一度、持ち上げそれを開いた。

『今から行つて、野郎と話しをつけてくるつもりだ』

中身を晒せば諸々は浮かび上がる。

『何だ？ つまりそいつはお前にジャイロを買取れ、と言つてきておるのか？』

サスの面持ちはあからさまに胡散臭げだ。目もくれずアルトは体を傾ける。

『さあな』

閉じたホロレターを尻ポケットへと押し込んだ。

『やめとけ、やめとけい。いくら大金が動くとはいえ、相手は物理配送なんぞ値の張る罠を仕込んだやからじゃ。その日暮らしのジャンク屋ではあるまいて。お前、まさかツーフアイブの一件をもう忘れたというのではなからうな』

ツーフアイブの件とは、禁止されていた生物実験に失敗した新進気鋭の創薬会社、ツーフアイブメデイカルが、その処分にジャンク屋を利用した前代未聞の案件のことだ。ウイルスの蔓延したラボをマニア垂涎の骨董A Iサーバーと情報改ざんし、乗り込み汚染されたアルトラ四名を滅菌ゲル送りにしたのである。

『あれは対象がジャンク屋全体だった。だがこいつは名指しだせ。放つておけるかよ』

アルトの唇が、それこそ悪戯を咎められた子供のように尖る。返す言葉をなくしてサスは、腕を組むとしばしうなった。

『とにかく、送金のラインは確保のままだ』

向かつてアルトは放つ。

『それからギルドヘジャイロが持ち込まれたようなら、すぐに連絡を頼む』

『わかるとる』

答えたサスは、またもや歯切れ悪げと鼻溜を振ってみせていた。

『じゃがなあ……』

その目は遠くを見つめもする。

『お前に何かあつたら困るのう』

『そいつは、いたみいるね』

だがサスの心配は、アルトの思うところと明らかにちがっていたらしい。

『なにせわしの抱えるジャンク屋の中で、お前が一番の稼ぎ頭じゃからのう』

やおらすわるアルトの目。

『じいさん、あんた、そのあつかましさで身を滅ぼすぜ、きつとな』

煙が揺れる。

そうしてたどり着いた『フェイオン』。指示通り居座り続けた『ラウア』語カウンターで、かれこれ二時間、いやさらにもう十五分経ってしまっているか。だというのに今だアルトの元へづいてくる者は誰もいない。

またもやため息を吐き出し、ぎよつとしてその目を見開いた。

言うまでもなくコロニーでの有煙行為は厳禁だ。だからして持ち込んだのは無煙タバコのはずが、その先から心地よく煙は立ち上っている。

慌ててカウンターへ押し付けていた。

遅かったか向かいで店員は動き出している。消化活動さながらアルトへ強烈な息を吐きかけた。胸を突く刺激臭が鼻を刺し、悶絶することしばし。残して店員は保健員などどこか警備を呼びに向かうつもりか、背後に設置された背蛇腹扉の業務用エレベータへ乗り込んでしまう。

「ったく、ドリーの呪いかよ」

万が一を想定して作業着の背裏へは護身用として、コロニーへの持込が唯一許可されたガス銃、スタンエアを張り付けてきている。だがリミッターを解除したそれに相応の資格はなく、言葉で晴らせるイルサリ症候群の疑いならまだしも、警備員に見つかればそちらの方が厄介だった。

むせ返りながら手近なゲートをアルトは探す。
見定めるが早いか踵を返した。

「ジャンク屋のアルトとは、あなたのことか？」

『ヒト』語はそのとき、投げかけられる。

振り返っていた。

目の当たりとしたものに面食らう。

なぜならそこに立っていたのは、オレンジ色のつなぎを着込んだ、たてがみもパンクな一頭の、いやヒト同様の手足から察するに一人とでも言うべきか、ともかくライオンだったのだ。確かにメッセージにあつた文言は『獅子の口は真実を語る』だろう。だがまんま現れるなどナンセンスが過ぎた。ぐうの音も出ないどころか、張り詰めていた気さえ抜ける。

「違う、のか？」

啞然としていれば、ライオンはそこで首を傾げていた。

だからして抜けた気を詰めこみなおすべく、アルトはカウンターへ手を伸ばす。「く」の字に押し潰したばかりのタバコをつまみあげると、再びくわえて噛み潰した。早いか、放り出していたホロレターもまた引き寄せ突きつける。

「つまり、こいつを出したのはあんたってワケだ」

開けばホログラムは飛び出して、ライオンは琥珀色した目をそこへと寄せていった。

「何だ、これは？」

「ご挨拶としかいいようがない。

「その顔で現れておいて、よく言つぜ」
瞬間だ。

「よかつた！」

ホロレターが払いのけられる。

「この顔を知っているのか！ このまま誰も気づかなければ、どうなることかと！」

やおらライオンはアルトへと抱きついた。食らった衝撃は肉体的

か、精神的か。アルトの口からぶ、とタバコも吹き飛ぶ。

いやそもそもだ。ペットにしていたライオンを泣く泣く近所の惑星に捨てた記憶もなければ、夏、暑苦しいからという理由だけでライオンをフツた記憶もありはしない。それら全てがつまらない冗談だとして、こんなかぶり物を愛用する知人こそ記憶にないのだから、見知らぬ何某に抱きつかれて覚えるのは至極生理的な「居心地の悪さ」だけだった。

「離せッ、この野郎ッ」

縄抜けさながら身をよじる。

「心配ない。ちゃんとウィルスカーテンはくぐってきた」

「ああ、そりゃ接触感染なら、俺もどんな菌を持つてるやら分かったもんじゃないからなッ」

余計、しがみつかれて身悶える。手繰った腕をどうにか掴み、力任せとひねり上げた。

「俺はあんたの発表会に興味はないんだよ。獅子の口は真実を語る。とつととハナシに入ろうぜ」

引き剥がしてその体を突き飛ばした。ならカウンターへ背を打ち付けたライオンはもう、ライオンというより猫が相当だ。

「わ、分かった。忘れていたわけではない。だがつい安心してだ。なともかくこんなことには慣れていないのだ。それだけは理解しておいてくれ。なら取り急ぎ、お望みのものをあなたへ渡そう」

落ち着け、と突き出した手で制し、立ち上がったところで開いた両の足を踏みしめなおす。突き出していた手をやおら、パンクに逆立つたてがみの中へと押し込んでみせた。

「……きさま、何しやがるッ」

その手が何かを探って動いたなら、ホロレターを投げ出しアルトは掴んで制する。身に覚えがあるからこそだ。もう片方の手で同時に、背にあるスタンエアのグリップを握った。

「そ、それはこちらのセリフだ。こんな場所でわたしを脅すつもりか？」

勢いに驚くライオンの目は丸い。

「その頭に何やら仕込んできたあんに言われたくないね」

「わたしが？」

言うものだから、見せつけそうつと、たてがみの中からその手を引き抜いてやる。手はそこで、確かに宙を泳いでいた。

「何を警戒している」

「上等だ。話すんなら、そのかぶりものを取ってからだ」

だというのに、そこでライオンはうるたえる。

「と、とんでもない！ あなたはその意味を知っているのか
！」

つまりそれはひん剥け、という意味だ。

「そいつは上出来な……」

だからして触れていたスタンエアから手を離す。

「返事だッ」

あるとはその手でライオンの面へ掴みかかった。

叫び声を上げてライオンは身をすくめ、そのたてがみの一房に、伸ばしたアルトの指は触れる。

いや、そう感じた瞬間だった。

辺りが闇に包まれる。

「……なん？」

「だ？」

動きは止まり、飲んだ言葉をライオンがつなぐ。ままに暗闇の中、互いは辺りへ目をやっていった。経てふたりはこれが『ラウア』語力ウンターだけの停電であることを知らされていた。

「まさか！」

とたんライオンの視線が弾き上がる。

「はあ？」

動きにつられてアルトもアゴを持ち上げた。

そこに明け明星よろしく、光の点はきらめいている。見つめるほどにふたりの前で、その光は天井をたわませると、次第に大きく膨

ね上がるといいな。

覇気のない降船客の列に紛れてネオンは宙を見上げた。

とはいえ、ついたばかりのそこはまだコロニー『フェイオン』の発着リング、その一角に据えられた大型船用格納庫内だ。機能性のみ、デザイン性のカケラも感じられない鉛色の天井が数多くのメンテナンス機材をぶら下げている。ままに振り返れば、超大型船『サウスプンカ』は停泊していた。

かつては豪華な客船だったのだろう。古代デザイン、今となっては専門家でしか知りえぬだろう曲線をまとった『サウスプンカ』は、格納庫一杯、重力に反するかのごとく反り上がると刃物のような美しいラインを見せつけている。船底の膨らみも熟れた果実と申し分ない豊かさをたたえていたが、繰り返された塗膜補修跡のせいだ。今や表面はツギハギで、その全てを台無しにしていた。

切り取り開かれた乗降ハッチから降船客の列は、いまだ途切れることのなく連なっている。そして長旅に重くなつた足取りの彼らから、混合造語が聞こえてくることはなかった。

瞬間、ネオンの中でくすぶっていた疑念は確信へと変わる。おかげでヒールを鳴らすと周囲の迷惑かえりみず、降船客の流れの中で立ち止まっていた。

「また出稼ぎ船だったって、ワケね」

苦々しく吐き捨てる。

間違いない。

『サウスプンカ』はどう見ても廃棄される寸前の払い下げ船だ。乗って向かったこの場所もまた、僻地の中継コロニーときている。そこへ造語が使えぬ低所得者がごまんと送り込まれているというのだから、これはハウスモジュールのネイティブ店員、そう呼ばれる出稼ぎ就労者の交代要員輸送船だと判断するに十分だった。

そんなネオンの内心を知らぬ降船客たちは、迷惑そうにこそすれ、同情のかけらも見せず立ち止まったきりの背を追い抜いてゆく。

と、避け切れなかったのだろう、ネオンの提げる黒革のケースへぶつかる者はあった。

「いいえ、これはあなたが早く借金を完済するためです」

聞き慣れた声は体長五十センチ余り、体内にトラクボールを内包したネオンの自律モバイロロボット、通称モバイロだ。黒革ケースの後ろで起き上がりこぼしと体を揺らしていた。

「なによそんなタテマエ。いくら安く上がるからって、航行規定に抵触するようなもぐりの船で、仮死強制かけられて移動の連続だなんて、これじゃ非人道的にもホドがあるわ」

ネオンはオフホワイトのライダージャケットを翻す。そんなモバイロへ体ごと振り返った。

「あたしは荷物じゃないの。だいたい仮死強制が嫌いなことも知ってるんでしょ？ それともあたしが造語、苦手だつてこと、皮肉り続けてるワケ？ とにかく、三回に一回くらいはヒトとして観光船で移動させて。これじゃ、仕事に響く」

だがモバイロの返事はない。

「いいえ、これはあなたが早く借金を完済するためです」

その小さな体に長距離移動をサポートする機能を詰め込んだがゆえ、最低レベルとなってしまうたAIの限界をみせつけられる。おかげで幾度となく聞かされたセリフをまた浴びせられ、当り散らした自身をネオンはただ悔いた。

「どうせあんたなんて、ギルドのつけた見張り役よ」

再び床へヒールを突き刺す。追い抜かれた分を取り戻し、猛然と降船客の中を急いげば同様に、モバイロもトラクボールを唸らせ追いかけてくる。

「それは違います。あなたには特殊なスキルが備わっているのです。ですからこうして完済の機会が与えられました。わたしはそのサポートを目的とした自律型モバイロロボットです。見張り役ではありません」

ません」

「だからそれを見張り役だって言ってるのに」

噛み付こうともその声をモバイロが捨う気配はない。だからしてセリフはいつものくんだりへ突入していった。

「でなければ、あなた自身とその所有物は名前に至るまで、今頃ギルド独自のルートによつて換金が済まされていることでしょう」

聞き捨てネオンは、格納庫の壁面にかけられた淡いグリーンのウィルスカーテンをくぐりぬける。格納庫と居住空間の合間に作りつけられた、チエックインエリアへと出ていった。

そこでジャケットに忍ばせていたチケットを引つ張り出す。降船客と同じ就労ゲートを潜るべく、乗船チケットの光学バーコードをゲートの読み取り機へかざした。

「我々は観光ゲートを利用します」

読み取るべく機械が走査線を広げたところで、モバイロに教えられる。

「ここで観光者扱いなわけっ？」

「いいえ、これはあなたが早く借金を完済するためです」

唸れども、モバイロはただ繰り返し返したただけだった。

……聞くところによると、それは貨物船だったらしい。

もちろん『それ』とは、ネオンが黒革のケースと共に仮死ポットに入つたままの状態で見えられた放置船のことだ。発見したのは、もとい、ギルドへ持ち込んだのは、換金を目的に回収したジャンク屋だとネオンは聞かされている。そのジャンク屋は懸賞金のかつた船でもなかつたため、中身もあらためず鉄屑価格で丸ごとギルドへ売り払つたそうだ。

他に同乗していた有機体はいない。

もちろんギルドは、すぐさま船の何もかもを解体、転売した。

そう、ネオンの入つた仮死ポッドだけを残して、だ。

そしてネオンもまたポッドから解放された。恐らくネオン自身を含め、黒皮のケースもまた転売せんと、その中身を確認するためだったのだろう。

果てに聞かされた話は、こう続く。

ポッドからの救出は放置船ゆえ、ポッドに生じていた数々の管理不備により困難を極めた。蘇生を断念しこじ開けることも可能だったが、人道の見地から丁重に取り扱った結果、かかった費用は莫大となった。その全てをギルドが負担することは不可能である。そこで利息不要というかたちでの蘇生費用の完済を求めると。

言いがかりにもホドがあった。だが全ては後の祭り、すでにネオンのIDは船ごと転売されてしまっており、何よりそれが管理不備の影響なのか、蘇生以前の記憶もすっぽり消えてない。一文無しのうち自分がどこの誰なのかも分からないなどと、ギルドから逃げ出す以前の大問題だった。

ギルドの要求を受け入ることにしたのは、彼らの言い分が正しいと思っただけではない。ネオンには行く当ても、成すこともなかったからだ。借金を返す。記憶が戻るまではそれをひとまず、自らのよりどころにしておこうと考えただけのことだった。

改め、乗船チケットを観光ゲートのバーにかざす。読み取りが終われば、霧のごとくゲート内部に立ち込めていた熱煙シャッターは両サイドへ吸い込まれ、ネオンの前に通路が開いた。そこに『ようこそフェイオンへ』の文字映像は走る。導かれ、ケースを握りなおした。外へと向かい、ネオンは最初一步を踏み出す。

つまり現在使用している『ネオン』という名は、仮死ポッドに記されていた名だ。その名で星間移動が可能となっているのも、モバイロが人質よろしく管理しているギルドの偽造ID、そのおかげだ

った。さらにそこまでギルドが支援し、ネオンに借金返済を求めるわけこそ、ケースの中に眠るコミュニケーションツールに原因があった。

世界が広大になりすぎたため生じた物理移動の限界に伴い、デジタル配信にすりかえられたことで今となつては滅亡したといわれる希少文化のひとつ。造語が確立するよりも遙か昔、言語代わりと異種間で重宝されていた地球の道具。サキソフォンというアナログ楽器は黒革のケースの中に納められていたのだった。

その価値が破格であることは言うまでもない。だが滅亡したといわれる音色の単価はその比ではなかった。何しろ無尽蔵に紡ぎ出せるのだ。ゆえに生音ライヴサウンドに憧れを抱く通称「ログジャンキー」を相手にすれば相当うまい商売は成り立ち、言うまでもなくギルドが目をつけ借金完済のあてにし、モバイルが絶賛するネオンの特殊なスキルこそ、このサキソフォンの演奏技術だったのだった。

気密隔壁二枚分の厚みがあるゲートを通り抜ける。

記憶はなくしたが、技術はその体に染みつき今もネオンに残っていた。だからして借金を返済するため、今日もネオンは依頼者の元へ向かう。

「僻地に行くほど中継コローニは大きくなるって聞くけど、こんなに巨大な所は初めて」

そうしてなぞり視線を持ち上げてゆく。なら遠心力を利用して重力を保つ発着リングは行き交う利用者をモザイクのごとく貼り付け、果てまで通路を伸ばしていた。

同じように無数とある格納庫から姿を現した利用者が、ぶら下がるインフォメーションホロより行き先のマップを取り込んでいる。終えた者はメインシャフトへ移動すべく、シャトル乗り場へ身をひるがえしていた。そのたび混ぜ返される空気が、航行中には決して味わうことのない活気をつくり続けている。広大な無の中でまさに生きとし生ける物の世界を紡ぎ出していた。

「誘導および、スケジュールの最終確認に入ります」

まさに目が回るほどと見回すネオンの足元から、モバイルがそんな活気の中へ飛び出してゆく。頭頂に埋め込んでいたモニターへ、早くも目的地までのナビ映像を再生し始めた。

確かめながら後を追うに、今回の依頼者はドクター・イルサリと名乗っているらしい。種族、性別、年齢共に情報の提供はなく、指定演奏開始時刻は三十二分後が予定されていた。場所はメインシャフト第二十八階層、ハウスモジュール『ミルト』。ミルトへは申請済かつ、バックヤードパスが発行されているらしい。演奏はモバイルの管理するそれを起動した入店後で、演奏内容に指定はなく、ドクター・イルサリからの接触があるとすれば演奏後が予定されているらしかった。

「って、なにそれ」

導かれるまま奥まったシャトル乗降口前に立ったところで、ネオンは我に返る。

「接触があるとすれば、ってどういうこと？ あたしにどっち向いて演奏しろっていうの？ それにドクター・イルサリはふざけすぎよ。いくらあたしだって知ってるんだから。死んだヒトの名前使うなんてなんだか気味が悪い」

だがモバイロが、その不快を共有することはない。

「演奏対象者はミルト利用者全員を予定。依頼者は他の利用者にまぎれての鑑賞を希望しています」

「きつ、しよく悪い。死人に成りすましたうえにコソコソ聞くなんて」

聞かされさらなる不気味さに身震いする。

ならシャトル乗降口のドアも受けた風に震え、シャトルが到着したらしい、開いたそこから詰めていた利用者を吐き出した。入れ替わりでネオンはモバイロもろとも乗り込む。

チューブの中を走行するシャトルは球形だ。中でビンゴボールよろしく浮かび上がると、やがてシャフトへ向かい滑り出す。音も振動もありはしない。時間さえ勞せず目当ての第二十八階層に到着していた。

開いたドアの向こうでは、シャフトの形に沿って緩やかなカーブを描くと、左右に分かれ通路が伸びている。シャトルを降りたほとんどの客はそのどちらかへ散ると、随所に設けられた『ミルト』のゲートへ消えていた。

だがネオンはモバイロに連れられ右手へ進み、シャフト側の壁面に設置されたインフォメーション端末へ向かう。そこでバックヤードパスの暗証記号をエントリートした。次いで乗船チケットもまた、典型的な光学バーコードスキャナへかざす。引っ込めたところで蛇腹扉は勢いよく端末を覆うと、入れ替わりと一基のエレベータはそこへ呼び寄せられていた。

臆することなく乗り込むモバイロにはついてゆくほかないだろう。一人がちょうどスペースへ、ネオンも潜りこむことにする。

カプセルのようなエレベータから外をうかがうことは出来ない。

ただ感覚だけで下層へ移動していることだけを感知取る。ままに吐き出されたのは、シャフト沿いの壁面に閉まったきりのドアを無数と並べる通路だった。

降りるさい、スリットから出てきたバックヤードパスをもぎ取りネオンは、おっかなびつくりそんな景色を見回してゆく。

「勝手に入るなー、なんて怒られないわよね」

静かだ。

静かすぎて言っていた。

「パスは帰りのエレベータに必要となりますので、紛失しないでください」

さらに聞き流したモバイロが、告げて通路をさらに右へと進んでゆく。

「分かりましたっ」

追いかければヒールの音がひどく辺りに響いて止まない。

呪いながらネオンはモバイロと並び、歩いて、歩いた。

歩いて歩き、さらに歩く。

がしかし風景はまったくもって変わらない。

並ぶドアだけが、ネオンの左右を淡々、流れているかのようにだった。

その内側にネオンの靴音とモバイロの駆動音だけがメトロノームと響き続け、閉じ込められに等しい堂々巡りがネオンの感覚を塞ぐ。だからしていくらかも行った所だった。たまらずネオンは鼻歌を口ずさむ。

それは何とも名もない、思い付きのメロディーだ。

だがそのメロディーは、単調だった足音を絡め取る。

シンコペーション。

裏をとるエイトビートのスネアドラムが、鼻歌の底を支えてリズムを刻みだした。

感じ取れば前進が、やおらネオンの中で心地よい疾走感へ様変わりしてゆく。視界はとたん沈黙の世界へ一色、挿したように華やぐ

と、色は靴音のグルーヴをさらに高みへ押し上げていった。

気づけばまったくもってノリノリだ。

決まっていけない今日の演奏はこれでいこう、とネオンへ決意させる。なら消えてしまいかねないこのメロディーの真ん中を掴んでおくためにも、連なる音のはらんで教えるイメージへ、ネオンはその顔を持ち上げていった。

広がる空は深く、飛び込み投げ出して五感を開く。

漂うイメージで胸をいっぱい満たしていった。

瞬間、声は降る。

「ネオン、どこにいる!」

それは嫌と言うほど聞かされたダミ声だ。

引き戻されてネオンは驚きのあまり飛び跳ねる。のぞき込んだのはモバイロの頭頂モニターで、そこにはネオンの知る限り、唯一、造語を使わずに会話の出来る『テラタン』種族、トラは映し出されていた。

ギルドから借金返済の管理を任されている、と言うトラは今日も『テラタン』の特徴であるところの深いシワ、いや、ここまでくれば皮膚のたるみといったほうが的確だろう、に埋め尽くされた顔をブルンと震わせ、郷土菓子『エスパ』なんぞを口いっぱい頬張っている。

「今、どこにいと聞いているんだ!」

言えば口から菓子クズは飛び散り、その有様に掴みかけていたイメージこそ、ネオンの中からきれいさっぱり吹き飛ばしてしまっていた。

「何なのよお……」

がっかりより、がっくりだ。うなだれてネオンは返す。

「何だ、その返事は。仕事はどうなっているんだと、ワシはさつきから何度も聞いておるんだ」

続けるトラから吐き出される菓子クズは、何億光年離れていようと生理的に受け付けられない類のものだ。

「今、向かっているとこですっ」

が、トラから反応はこう返される。

「ふん、口からでまかせを言うな。なら『ガニメダ』行きの船にお前のIDがないのはなぜだ」

「へ？ 何、それっ？」

寝耳に水の話だろう。同時に過る顛末が、ネオンの声を震わせる。　「て、ま、まさか、あなたまた、やったんじゃ……」

何しろどういいうわけだかギルドから一銭の報酬も与えられていないトラの仕事ぶりは、目も当てられないほどヒトかった。舞い込む演奏依頼を調整することなくモバイロへ転送したかと思えば、ダブルブックキングなど日常茶飯事。そのうえ、そうして焦げ付いた経費をネオンの借金に上乘せするものだから返済額もまるで減らない。

「いいがかりはよせ。わしがいつそんなヘマをした」

そしてその失態をトラが今まで、認めたことは一度もない。

聞かされネオンは深く、深く、息を吸い込んでいった。

「言いがかりは、そっちでしょっ！ あたしは今、フェイオンで、ドクター・イルサリを名乗る依頼主の元へ向かっているの。それに、そっちがモバイロへ依頼情報を転送してるんだから、あたしが好きでここへこれるわけじゃない。だいたいモバイロもモバイロなのよ。ダブルブックキングしてることくらい判断できなくて何がAIよ。早く積み変えてって言うてるのにつ！ いい？ とにかく、ガニメダなんて無理。その依頼はそっちで処理してっ！」

ありつたけの力で吐き出せば、おかげではあはあ、息も上がる。

「ふん、ドクター・イルサリは死んだ。油を売るための言い訳なら、もっとマシな方法を考えるんだな」

あしらわれて怒り心頭、ネオンのこめかみへ血管も浮かんではかり。

「上等よっ！ どうせ油売らんならこんな僻地より、地面のあるところへ行つてやるうっ！」

「いいか、先方はスケジュールを八十時間ずらしてもいいと言って

きた」

だがトラがうるたえることはない。

「二往復分の船賃を無駄にするな」
言い切る。

「二往復分っ？」

様子にむしろ、ネオンの方がうるたえていた。

「む、無理っ！ だからここ僻地中の僻地なんだったば！ 一番近い所だつて八十時間なんかじゃっ、無理っ！」

モバイロはそんな口論を涼しい顔で聞きながら、ネオンを導着し続けている。

「お前次第だ」

トラは言い、哀れむようにかぶりを振って指先に残った最後のエスパをシワの間に、いやそれは口だろう、押し込んだ。通信を切るべくモニターへと、その手を伸ばす。

「わ、わわ！ 話にならないのはどっちよっ！ 聞いているのっ？」
ここで切られてはたまらないのだから、食い下がるネオンも必死だ。

「この、エビの尻尾野郎っ！」

ここぞで『テラタン』の侮蔑語を口走る。無論、それはしばしばトラに浴びせられることで覚えた文言だ。本来の意味は皆目不明だったが、通信を切らせないためなら、このさい何だつてかまわなかった。なら願ったりかなったり。トラの動きはピタリ、止まる。みるうちにその顔でシワを複雑奇怪と折りたたんでいった。奥まったところにある針の穴のような小さな目を、赤く潤ませさえする。

「わ、ちよっ、ご、ごめんなさっ……」

まずい、と気づくが遅かった。

それきりだ。

映像はプツリと切れる。

呼べど叫べどトラが答えて返すことはもうなかった。

静寂に、いつしか立ち止まっていたネオンの肩もわなわな震える。

「エビの尻尾野郎の、どこが悪いのよーっ！」

宙へ向かい吠えれば向かってモバイロだけが、そんなネオンへ言っていた。

「いえ、これはあなたが早く借金を返済するためです」

「……じゃなくて、また増えてるんですけど」

もう鼻歌など出てきやしない。足を引きずり、ネオンは道なりにコの字と通路を二度、曲がる。わずか数分の移動中にすっかりやつれて目的地へ到着していた。

「何、ここ？」

広がる空間の奥をのぞき込む目が死んでいようと、かまいはしない。何しろ明かりがなかいのだ。ただぼつぼつと灯された作業灯が、かろつじて鉄骨らしきバツ印に組み上げられた重機を照らし出している。伸びあがったその重機はどうやら天井を支えているらしく、見上げてネオンは口を開く。

「帰ろう……」

呻いた。

と視界で何かは動く。

依頼者かと閉じた口で見つめたなら、それはまたちらり、動いた。やおらネオンの元へと駆け寄ってくる。

「わらあおう！」

あっけらかんとした歓声は亡霊などと、ほど遠い。ネオンの前へ体長一メートル余り、顔の真ん中に鼻溜を持った『デフ6』は飛び込んできていた。

『メンテナンスをしておけていわれたから、きっと何かあると思っっていたんだ！』

鼻溜はまだ左右非対称だからして、幼体だ。

『はじめまして。ぼく、デフ6のデミ』

フェイオンスタッフか。作業用つなぎを着込んでデミと名乗った『デフ6』は、ネオンへ満面の笑みを浮かべていた。

微笑んで餌を待つひな鳥とて、デミはネオンの返事を待つ。

反応するモバイロが代弁せんと、小さな体へ無理やり詰め込んだ翻訳機能をフル働、互いの間へ割り込もうとした。

『ネオン。約束。ここで会う。演奏』

慌てて造語をこま切れとネオンが口にしたのは、そんなモバイロの翻訳こそ事態を混乱させこそすれ、潤滑なコミュニケーションの橋渡しになった試しがなかつたせいだ。

活躍の場を奪われてモバイロは、クルリ向きを変えている。バツ印へ向かい走り去って行った。

『あんまり近づきすぎちゃ、挟まれちゃうよ。あ、でも乗っかるのは大丈夫なんだ』

声をかけたデミは続けさまネオンへも教えて言う。その無邪気な笑顔はやはり子供ならではの、万族共通の愛らしさに満ちていた。

『駆動系もプログラムも単純だから、壊れようがなかつたみたい。だから安心して』

証明すべく、作業つなぎのポケットから小さなバーを取り出す。バツ印へ向けボタンを押した。とたんバツ印は鈍いうなり声を上げて動き出し、押し上げていた天井を下げてゆく。天井にはぽっかり穴はあくど、そこから光と喧騒は暗くうすら寒かった空間へどつと一気に流れ込んだ。

デミの心配とおりバツ印に巻き込まれかけてモバイロは、少し離れた位置でトラックボールをしまい込んでいる。

「十二分後、こちらの昇降機でフロアへ上がります。起動は、昇降機に備わっているものを使用してください」

最後の段取りをネオンへ告げた。

聞いていたように、デミもそこから握っていたバーをネオンへ差

し出している。

「せり上がれってことね。さすが派手さはドクター・イルサリを名乗るだけはあるってわけだ」

受け取りネオンはデミへ片目を閉じた。

『ありがとう』

さあ仕事だ。受け取ったバーをジャケットのポケットへ落とし込む。提げ続けた黒革のケースを床に寝かせ、片耳のピアスを外した。そこには古典的な凹凸が刻まれたアルミ製の物理鍵が飾りとしてぶら下げられており、握ってネオンはケースの前に屈みこむ。その側面にある小さな穴へ鍵を差し込んだ。

『これ、物理ロックなの？』

そんなネオンをデミは興味津々とのぞき込んでいる。

『ぼく、初めて見たよ。中には何があるの？ ねえ、ぼくも見ていい？』

少しばかり悩んでネオンはうなずき返し、差し込んだ鍵を手首ごとひねってみせた。とたん跳ね上がった左右の金具を外し、押し上げるようにしてふたを開く。中から、無数の傷にまみれ複雑な構造をまとい付かせた金管は三つ、姿を現していた。

『すごいや……』

目にしたデミが大きく息を飲んでいる。

『これって、地球のアナログ楽器でしょっ？』

振り返ったその目に隠しきれない好奇心を浮かび上がらせた。

ネオンは微笑みでもってしてイエスと答え、首元からネックレスよろしくかけっぱなしにしていたストラップを引き出す。そこへまず、一番大きな「U」の字の管をつないだ。立ち上がり、さらにケースに埋まっていた「L」字型の小さい管を引き抜く。「U」字の片側へ差し込んでつなぎ目のネジを締め上げていった。

『ぼく、初めて見たよ！ 本物？ だったらなんて名前？ ホントにミルトで演奏するの？ それともレプリカ？ 約束があるって…、会うつて言ったのはもしかして演奏のため？ そんなの頼める

なんて聞いたことないよ!」

鼻溜を振るデミはすっかり興奮した様子だ。

聞きながらネオンは、クッションへ突き刺さるように埋めこまれていたもう一つの小さなパーツもつまみ出した。L字の先端へねじ込みつなげ、デミへ一言、告げる。

『サキソフォン。本物。分からない』

ねじ込んだその先には至極薄い板切れが固定されており、これこそが震えて音を作り出す要、リードと呼ばれるものだったなら、外してネオンは唇で軽くくわえた。

『ふーん。でも、本物じゃなくてもいいや! 現存するアナログ楽器を見たなんて、帰ったらみんなに自慢できるもん!』

言われれば、どこか照れくさい。はにかんで、湿って程よく弾力の戻ったリードを元の位置へ固定しなおした。

そうして組上がりを確認めべく、両手で管を支えるようにして掴む。とたん複雑な構造は整然とネオンの手の内におさまると、指先に丸い小さなキーはあてがわれた。

それを下から順に弾き上げる。

てことバネの応用だ。そのたび管まわりで穴を塞いでいたフタは開くと、カタカタ軽い音を立てた。動きで、そのどこにも不具合がないことをネオンは確かめてゆく。不備はないと知れたところでケースから、予備のリードもまた拾い上げた。もしものためとパンツのポケットへしまっておく。

『少しだけ聞かせて!』

と声を張り上げたのはデミだ。

『ちよつとだけ、いいでしょ?』

言い分に、本当のところ困ったな、と思ってみる。何しろおねだりされているその音は大事な商品なのだ。そうやすやすと振舞えはしなかった。しかし依頼主と向かい合う前、ひと鳴らししておかなければならないのも事実なら、昇降台をメンテナンスしてくれたお礼でいいだろう。ネオンは目配せでオーケーと返していた。

『やった!』

跳ね上がるデミに、悪い気こそしない。

立ち上がり、抱きかかえるような具合でストラップと握った両手で管を固定しなおす。しなおし、軽く体へ引きつけた。這わせた舌で己が唇もまた湿らせたなら、最後に差し込んだパーツを浅くくわせる。

それだけだ。

それだけでいつも集中力は、がぜんネオンの中で高まっていた。そしてそこから先、ルールは消え去り、あるとすればネオン自身とすり替わる。

任せて、立ち消えとなった通路の鼻歌へ、ネオンは再び意識を集中させた。ダミ声にかき消されたイメージを捕らえなおすべく、静かにまぶたを閉じてゆく。

だがうまく思い出せない。

待つて得られるものがあるなら待つてもみるが、当てがないならええい、と諦めていた。意を決し、ため気味のワン・ツーを細いヒールで打ち鳴らす。切れると同時に。ネオンは腹の底まで深く鋭く吸い込んだ息を、一気に管へ送り込んだ。

とたん音へ変換されたネオンの息はビリリ、空気を震わせる。呼び戻されてあるとき見上げた空は頭上へ広がると、不鮮明だったメロディーはそのときどっかネオンへ降った。

もう出し惜しみなどありえない。

爆発的スピードでキーを弾き上げる。

つむぎだされた音はあたかも一音であるかのようにつねり連なり、先を争い絡まった。その縦横無尽な響きは、まるでついでにできることのない空中戦と展開される。

圧倒されてデミが全身を硬直させていた。

それほどまでに音は、聞いたというよりも触れたというにふさわしい圧と厚みを持っていた。だからといってこれが何であるのか言葉を手繰ればその正体は遠ざかり、放棄すればするほど輪郭はくっ

きり浮かびあがって耳にした者をまた翻弄する。

つまりは感動。

それともただの暴動か。

わずか八小節。

ネオンはそこで管から唇を離した。

『ありがとう』

本日最初の客に軽く会釈する。

軽い身震いと共に、デミが我を取り戻していた。

『……びっくりした。びりびりくるよ。すごく不思議な音だね』

『続き、上』

ストラップの長さを調節し直しつつ、ネオンは目でフロアを指し示す。

『そうしたいけど』

初めてデミが言葉を詰まらせた。一呼吸おき、その顔を上げる。

『ぼく、次の船でうちへ帰らなきゃいけないんだ。まだ荷物もまとめてないし。だから、今、聞きたかったの。遅れると困るもんね』

なら仕方ないと、ネオンは肩をすくめていた。

『帰ってみんなに自慢しなきゃ！』

そうして潰れたバツ印へ向きなおったなら、デミは跳ねて通路へ駆け出す。

『時間です』

モバイロも、ちょうどと知らせて促していた。

『修理。ありがとう』

『バイバイ、おねえちゃん！』

呼びかけて、ネオンはひとまたぎとバツ印へ飛び上がる。千切れんばかりに手を振るデミへと同じように手を振り返した。

『バイバイ！』

誰かを見送るなどと、久方ぶりが贅沢だと思えてならない。おかげで緩んだ頬を今一度、引き締めなおした。

『さてと、行きますか』

せり上がるべく、ジャケットからバーを取り出しボタンへ指をかける。

だが押すか押すまいか、その時だった。

ネオンの頭上で破裂音は鳴り響いていた。

膨れ上がった光が天井をたわませ、零れ落ちそうに揺れていた。抜け落ちる。

過った刹那だ。ライオンが身を躍らせた。

引きずられて倒れ込み、喘ぎアルトも床を蹴り出す。

だがわずか二歩だ。その足先を何をやに引っかけ、蹴り飛ばせないならアルトの方こそ吹き飛んでいた。

瞬間、白飛びしたのは視界だ。

続き、破裂音は頭上で鳴り響く。

浴びてどろっ、と床へ身を叩きつけた。

追いかけて降り注ぐ破片が周囲で音を立てている。

一部始終にフロアのバカ騒ぎはピタリ、止み、追い打ちをかけ『ミルト』の全照明が落ちた。

心もとない悲鳴が方々で上がる。

聞きながらゆっくりと、アルトは体を起こしていった。明かりのないはずの視界に光りが白く灯っている。閃光の残像だ。ほかに怪我らしい怪我はない。証拠に足元から聞こえてくる微かな呻き声もまた、しつかり耳に届いていた。

と、青緑色の非常灯は灯される。

振り返れば照らし出されてライオンが、そんなアルトの足先で丸まっていた。さらにその向こう、黒焦げとった『ラウア』語力ウンターが茹で上がったかのように煙を上げている。のみならずつながる左右のカウンターでも、飯を食らい、酒をたしなんでいた利用者が吹き飛ばされて倒れていた。

高圧放電銃、スパークショット。

光景に、アルトは確信する。

この一撃はその固め撃ちとしか考えられず、咄嗟に作業着の背か

らスタンエアを剥ぐ。銃床をヒザへ叩きつけ、エアを装填するが早いか、低い姿勢のままライオンの元へ床を滑った。

その音に気付いたライオンも息を吹き返したように床をかきだが、手足の動きがバラバラなら全くもって要領を得ない。覆いかぶさりその襟首を掴み上げた。力任せにひっくり返した体を押さえつけ、おののく獣面へ握る銃口を押しつける。

「よおく分かった。学芸会の意味はこの時間稼ぎか？ あんたも捨て身だつてのなら上等だ。いいか、今すぐ仲間の武装を解除させるッ。でなければ今度こそその頭、吹き飛ばすッ」

「待て、撃つな！」

などと、先にブツ放しておいてそれこそない。

知ったことかとトリガーへ指をかけたその時だ。視界の隅で何かは動いた。黒焦げとなった『ラウア』語カウンターの上からだ。

ロープは一本、垂れてくる。出入り口こそそこになく、おっつけ視線を這わせてアルトは目を疑っていた。

「じよ、冗談だろ」

船賊だ。

身の丈ほどのスパークショットを背負うと棒切れに腕を四本、足を二本刺したような体型へ、感電防止のラバースーツとフルフェイスのガスマスクをまとった極Y種族らは、ミルトフロアへ降りてこようとしている。そんな彼らこそ造語習得の波に乗り遅れ、経済活動からつま弾かれたことで強盗、略奪、闇売買等、行うことで生計を立てるならず者に違いなかった。

「あれのどこがわたしの仲間だ！ あなたたちに関わって以来、やつらにつけまわされているのはわたしの方なのだぞ！ 武装解除させたいのなら、あなた自身で交渉してくれ！」

指を突きつけ言い放つライオンこそ必死の形相だ。

ラバーソールのおかげで音もなくカウンターへ着地した極Yたちは、言い合ううちにも下二本の手で磁気ハーネスをロープから切り離し、上二本の手で棒術さながらスパークショットを振りかざして

いる。目の当たりにして、これ以上の問答こそ無用だった。アルトとライオンの息はそこで合つ。

「とにかくっ」

「逃げるッ！」

きびすを返せばフロアの利用者たちもまたそこで、悲鳴を上げて四方、ゲートへ引き潮のごとく逃げ出している。

その中へ、ふたりも身を踊らせた。

狙い定めてスパークショットの青白い閃光は放たれ、後方で見知らぬ利用者が焼かれて接触していた周囲の数体が感電すると四方へ弾け飛ぶ。

「せつかく奴らをまいて来たというのに！」

吠えるライオンの、どうやらそれがことごとく遅刻してきた理由らしい。

「つか、全然まけてねえぞッ」

「ただのボイスメッセンジャーにこんな依頼を押し付けるあなたたち、無謀なのだ！」

「お前がボイス、メッセンジャー？」

記憶補助装置と模擬声帯を体内に埋め込み、声帯模写でもってして肉声のメッセージを届ける福祉事業、それがボイスメッセンジャーだ。ボイスメッセンジャーとはその事業に従事する者の呼び名で、遠く離れた家族や恋人同士のやり取りから、遺言や生体認証の代行等、肉声ゆえの臨場感を売りにし幅広く依頼をこなしている。そしていうまでもなくアルトにそんなものをやり取りする相手こそ、いなかった。

カウンターからあふれて極Yたちは、ついに群衆に消えたふたりを追ってフロアへ向かい走り出している。

様子に逃げまどう利用者たちは許容量オーバーと、ゲートを詰まらせていた。

「あんだだッ」

見回して、だからこそアルトはライオンの頭へ手を伸ばす。どう

考えても目立つかぶり物を極Ｙから隠し、押さえ込んだ。

はずが、その手は空を切る。それどころか頭の中へめり込み、ライオンのアゴ付近から突き出した。支えをなくしたアルトはライオンへのしかかり、ライオンは悲鳴を上げて、ふたりそろって踏み荒らされてあられもないフロアへと倒れ込む。

「まさかこいつ、義顔か」

痛みに歪めた顔でアルトはライオンから手を引き抜いた。

「おい、起きろッ」

すぐにも揺さぶるが、それきりのされたように気を失ったライオンに答えはない。ならタイミングは最悪だ。前方ゲートを逆流し、スパークショットを放つ新たな極Ｙたちがフロアへ雪崩れ込んでくる。あらゆる言語の悲鳴と怒号は頭上で飛び交い、おかげで叩き起こされたか、がばとライオンも起き上がった。

「馬鹿もん！ パラシエントの頭を触るとは、どついう了見だ！」

光の屈折率を操ることで様々な義顔を使い分け、一生素顔を隠して過ごす種族『パラシエント』だと豪語してみせる。そうまでする彼らにとって素顔を晒すことは、ましてや触られることは、屈辱かつ破廉恥の極みだ。なるほど『ラウア』語力ウンターで素顔について探られることをひどく嫌ったわけだと思いが、全てはもう後の祭りだ。

「そこまで気が回るかよッ」

「何を言う。この顔を待ち合わせの目印にと、パラシエントのボイスメツセンジャーを選んだのはそちらだろう！」

なるほど、と思えばアルトの語気も強くなる。

「選んだ？ 冗談。なら俺は、アンタの依頼主にはめられたってことだ」

ライオンの襟首を掴んでいた。ともかく踏み荒らされ続ける床から立ち上がる。

「あんたの依頼人は誰だ」

放電音は刻一刻と迫りつつあった。

「このような怪しげな依頼、面と向かって受けていなら断っている。依頼主には会っていない。依頼は匿名のホロレターで受けた」

「また匿名のホロレターかよッ」

いつからブームは電子メールから物理配送なんぞに変わったのか。「そのメッセージ、本当にあるんだな」

確かめる。

「あるから仕事を片付けに来た。そして、その仕事を途中で邪魔したのはあなただ」

「なら責任もって聞いてやるッ」

こうなればライオンの再生する声色のみが、仕掛けた輩の唯一の手がかりだ。そのためにもここからとにかく脱出する。決めてむさぼるようにアルトは周囲へ視線を走らせた。利用者の引けたフロア中央の円形ステージに、黒く影を落としてくぼみが口を開いていることに気づかされる。

「あんたッ。俺に遅れるなッ」

この状況で迷うなどと、命取り以外の何ものでもない。一喝してそんなステージめがけ走り出す。ゲートへ殺到する利用者たちから抜け出すと、蹴散らされて折り重なったフレキシブルシートの影へ身を紛らせた。かき分け、這い出し、ほふく前進で円形ステージへ急ぐ。目前において転がるフレキシブルシートの影へ背を押しつつけると、真似て肩を並べたライオンへ口を開いていた。

「分かったから、その顔、いい加減ほかのヤツに変えてくれ」

「無茶を言うな。やつらをまくのに義顔を全て使い切った。もう公用の顔しかない。さらして、やつらと顔見知りになるつもりもない」慣れないアクロバットの連続にアドレナリン全開のライオンが教えて言う。

片耳にアルトはそうつと極Yの様子をうかがった。

ゲート前を焼き払い終えた極Yたちはそこで、見失った、と言わんばかり辺りを見回している。

「おい、待てよ、あんた」

だからこそ気づかされてもいた。

「それじゃ、話がおかしいぜ」

アルトは咄嗟とライオンへスタンエアの銃口を突き付ける。

「あんたはホロレターで依頼を受けたと言ったが、なら会わずに誰の声をコピーした？」

「カ、カウンスラーだ。受け渡しにこの顔を使うことと、メッセジはカウンスラーの音窟で採取すると、指示があった」

唐突さに両手を挙げたライオンは声を上ずらせていた。

そして音窟はといえば、無限反響洞窟とも言われる惑星『カウンスラー』の音窟で間違いなかった。原住種族たちの声を封じ込めた無数の小部屋が惑星全体を覆い尽くす、既知宇宙でも一位、二位を争う巨大遺跡のことだ。

近年になってようやくその価値は見直されると保護活動も進められていると聞くが、盗掘の進んだ小部屋は今や記念メッセジを吹き込むための観光名所ともなっており、そこから採取したという話にはまんざら嘘だとも言い難い。

「奴らにつけられ始めたのも音窟からだ」

加えて明かすライオンから、アルトは少しばかりもったいをつけ銃口を逸らす。

頭上を、火の玉と化したフレキシブルシートは飛んでいった。

唐突さに首をすくめたなら、中に詰め込まれた液状シリコンへ火を回したそれは、古い手品よろしくボン、と宙で爆発する。辺りに黒煙はもう、と広がり、飲み込まれてふたりは思わず身を伏せた。

「もう、終わりだ」

うめくライオンを放って背後を確認すれば、極Ｙたちは見失ったふたりをいぶりだすべく、床に転がるフレキシブルシートを端から順にスパークショットで弾き飛ばしている。

「バカ言つな」

吐きつけアルトは、そのアゴで円形ステージを示した。

「いいか飛び込むぞ」

「な、底は……！」

「メンテナンス上、モジュールサイズは一定だ。これだけ天井がありゃ、底はしれてる」

言って返すがアルトにとっても憶測を出ない。そして確かめておれる猶予こそなかった。

「あんたが先だッ」

言い残すと共に飛び出す。ステージへアルトは踊り上がった。その姿に、目にした極Yの下二本の腕がざわめく。あちこちで振られると、手信号ともとれる独特のジェスチャーはあつという間に集団の中を伝播していった。

そう、この極Y地方が造語の流れに乗れなかった最大の理由は、元来音声言語を使用しない種族だったせいだ。

「ぼやぼやしてるなッ」

ステージ上からライオンへ怒鳴りつける。

「ええい、くそ！」

もう引けはしない。吐き捨てライオンもステージへ這い上がる。

目指して極Yたちはぐるり三百六十度からだ。目指し一斉に駆け出していた。

追い立てられてライオンは、それこそ獣よろしく四つん這いで穴へすり寄る。

「どうだッ？」

背に回してアルトは投げ、知らせてライオンはその顔を持ち上げた。

「下に何か……」

だが視界へそのとき、たわむ天井は映り込む。背を向け立つアルトの頭上か。とたん破裂音は鳴り響く。閃光は天井を突き破り、まさにふたりが飛び出してきたばかりのフレキシブルシートへ突き立った。

勢いに潰れて中から液状シリコンが飛び散る。

表面を閃光は駆けた。

かと思えば火薬よろしく爆発は起きる。

黒煙が周囲のシートに食料を巻き上げていた。

食らってアルトもステージへ伏せる。

ここぞとばかり駆け寄っていた極Yたちの足は止まり、やがて降り注ぐあれやこれやを電極で払いのけた。確保しなおしたなら、その電極をステージへ構えなおしてみせる。

「ジャンク屋、前だ！」

知らせるライオンのタイミングにこれ以上はない。

聞こえてアルトは体を持ち上げた。

「くっそッ」

スタンエアを突きつけ返が、複数を相手に狙いは定めようがない。ないなら爆発の勢いで足元へ吹き飛ばされてきたシートを狙い撃っていた。食らったシートはひしゃげて吹き飛び例のごとく宙へ中身をぶちまける。間髪入れずそこへスパークショットは放たれると、散った液状シリコンへ閃光を走らせた。

爆発は巻き起こり、伏せ損ねたアルトの体はステージの上を転がる。

かろうじて張り付き上下をとらえなおしたなら、煙の粒子で乱反射を起こし穴だらけとなったライオンの顔を目にしていた。

「構えてろッ」

ステージを押し出す。あも、うもありはしない。駆け寄り、そんなライオンの尻を蹴りつけていた。もともと覗き込む格好だったライオンの体はあっけなくも穴へ消え、追いかけてアルトも身を翻す。その頭上をかすめて閃光は、四方から放たれ宙で交差していた。

明かりは、続けさまに落ちていた。暗闇がネオンを包み込み、その中にモバイロの動作ランプだけ浮かび上がる。

「第二十八階層、ハウスモジュールにて電気系トラブル発生」

だからなのか、重なり悲鳴も降っていた。

なだめて遅ればせながら青緑色の非常灯が辺りをフラットに照らします。

「および、発着リング、トップサイドに使用制限あり。使用制限は無許可船体、複数の横付けによるものと確認」

ただなかではちくり、ネオンは目を瞬かせていた。

「む、きよかせん、たい？」

「その中の一艘は、広域指定流奪船と判明。管理センターは五分四十三秒前、救難信号を発信。二分九秒前、全モジュールに退避勧告を発令しました。これより現在フェイオンは、船賊の強襲を受けているものと判断します」

「だーっ！ 何がドクター・イルサリよっ！ この疫病神があっ！
今すぐ逃げる。トラに連絡とってっ！」

とたんこめかみもまた引きつらせる。

にもかかわらずしれっと伝えるモバイロは、わざとなのか否か。

「現在、強力な磁場の発生により、通信状況が安定しません」

「もういいっ。避難路確保っ！」

目掛けてネオンは指を突きつけ、反応したモバイロの頭頂モニターに主観映像による避難経路は映し出された。だがコトは電気系のトラブルに始まっている。

「現在、モジュール内、全システムダウン。エレベータ再起動まで十五分の予定。回避ルートは正面通路を右折。右折。T字路を右折。道なり、進行方向十字路を左折。従業員通用口から非常階段機密八

ツチをパスで解除。スロープで隣接モジュールへい、い、いど……
どう……」

音声もろとも目で追うが、どういつわけか終わらぬうちにモバイル口の調子が怪しくなった。

「ちよ、ちよっと、しっかりしてよっ！」

そのモニターへノイズは走り、それがアナログの極致だろうと思わずネオンはモバイル口を叩きつける。

と、ついにモバイル口から火は噴き上がった。

「きゃっ！」

同時に頭上で炸裂する、とびきりの破裂音。

飛び上がって、縮めた体で耳をふさぐ。目さえ閉じかけたその時ネオンの傍らをかすめて空から何かは落ちてきた。足元から伝わる衝撃に無視など出来ない。目をやり、ついた手足はヒト同様ながら穴だらけの頭にこれでもか、と悲鳴を上げる。

「ぎゃああっ！」

「どけえッ」

掻き消し降る怒号に、あいた口もそのままと顔を上げた。

飛びのくが相当だ。覆いかぶさる影に握っていたバーさえ放り出す。

なら入れ替わりと影は、ネオンの立っていた場所へ着地した。

「寝てる場合かッ」

穴だらけの頭へ駆け寄り、揺さぶり起こす。

「蹴り落とすなど、あなたこそわたしを殺す気か！」

言う顔で穴は、みるみる塞がってゆくのが分かった。やがて毛むくじやらの顔をそこに象る。

「つべこべ言うなッ。緊急事態だろうがッ」

「な、なん、なの……」

それきり押し合いへし合い、ふたりは昇降機を飛び降りる。

「それから、あんたッ」

ふたり目が、ネオンを指して振り返った。その手にはスタンエア

が握られている。

「ぼ、暴力反対っ」

もう両手は上がるほかない。

「何言ってるッ。聞こえてんなら早くそこから逃げろッ」

「へ？」

そこでようやく言語に容姿が『ヒト』の男である、と気づく動転加減だ。だがその間にもふたりは通路を奥へ走り去ってしまった。た。

「ち、ちよつとっ………!!」

そんなネオンの視界が陰る。

次は何かと思うほかない。

おや、と見回し、ネオンはアゴを持ち上げた。

「げ………」

こぼす。

なにしろそこにラバースーツにガスマスクの団は、ずらり、並んで穴からネオンを見下ろしている。しかも今日はそんな穴へやら身を投じる輩が多いらしい。一呼吸おいたその後だ。ガスマスクたちは多分に漏れずネオンの頭上へ次々降った。

「うっそーお！」

逃げるといふより押し出されるが相当だ。身の置き場を奪われネオンは昇降機から飛び降りる。非常灯がぼんやり灯る通路に飛び込めば、追いかけて放たれた閃光が視界の隅で蒼く爆ぜた。

頭を下げ縮こまる。そのままの姿勢で行き当たった曲がり角を、体当たりと押し出し曲がった。

「冗談でしょおっ!!」

胸元に吊られた楽器を掴んで身を起せば、立ち往生する男と毛むくじやらを見つめる。シャフト沿いの通路へ出たところだ。右へ行くのか左へ行くのかで迷っているらしい。

「そこ右っ!!」

上げたネオンの声に、ふたりが振り返っていた。しばし迷ったよ

うに足踏みすると、言った通りと床を蹴り出す。おっつけネオンも通路へ飛び出せば、あつただろうパニツクの痕跡だけを残して開け放たれたドアは、緩いカーブの向こうへ向かい延々と並んだ。

「あんた、ここの従業員なのかッ？」

投げたのは、速度を落としてネオンへ肩を並べた男だ。

「まさかッ！ モバイロで退路を探させただけよ」

言うしかなく、ネオンはオフホワイトのライダージャケットを引っ張り身分を示してみせる。

「助かった。ここは不慣れなのだ」

言う毛むくじやらが、振り返っていた。

「そのモバイロはどこに？」

男が続ける。

「スパークショットの影響でしょ。わたしのIDごとパンクッ！」

それはもう、卒倒しそうな現実だ。

「そいつはご愁傷様だな」

している場合でないのだから、聞き流す男が放った。

「とにかくこの先を左折したら、あたしの持つてるパスで開く扉があるわ」

「助かるッ」

傍らを、モバイロと降りたエレベータの蛇腹扉が流れていく。やりすこせば左手に目指す三岐路は姿を現した。

さんにな連なり、最短距離でカーブを切る。

突き当りには電気系トラブルとは無縁の、循環式光粒子ロックの重たげな鉄扉が立ちふさがっていた。

が鉄扉はそのときゆう、と壁から浮き上がる。

「うそッ！」

奥から現れたのがガスマスクなら、そこで回れ右を強制される。

「クソッ」

「一体、どれだけいるのだ！」

それぞれの足が、けたたましく床を打っていた。

「とにかく、前進っ！」

シャフト沿いへ戻れば、そんなこんなタイムロスか、増えた背後の数のせいか、控えめなラバーソールの靴音は身近に大きく迫っている。拳銃の果てに閃光は放たれて、行く手を黒く焦がし始めた。「だあああ、もう駄目だ」

毛むくじやらの叫びは間違っていない。だからして男も、逃げ出し開け放たれたままのドアを掴む。

「こっちだッ」

中へと身を滑り込ませた。行き過ぎかけた毛むくじやらに、足をもつれさせたネオンもどうにか身を躍らせる。

見届けドアを男は閉めた。

ノブにつけられていた磁気錠のコイルを落として外へとしばい、耳をそばだてる。

ドア向こうを駆け抜けてゆくラバーソールの足音に、迷う素振りはない。はうかがえない。ままに消え入りかけたかと思えば、入り乱れて戻ってきていた。

「くそッ」

ここにいることを知っているかのようだ。やおら乱暴とひねられるドアノブが、さんにんの目の前でこれでもかと思える。落とされていた磁気錠のコイルが小刻みに震え、見る間にショートすると薄く煙を立ち上らせていった。

「あ、あたしのせい？」

なにしろアナログ楽器という、至極高価な逸品の持ち主だ。

「悪いが、俺を追って来たって話だ」

ただす男が背でネオンと毛むくじやらを奥へ押しやる。

後ずさりながらネオンは脱いだジャケットで楽器をくるんだ。

「ならあなたラッキーかも。これ見たら、きつと向こうも気が変わるわ」

縛り上げた袖へ腕を通し、簡易のリュックに変えて背に楽器を担ぎあげる。

とたん揺さぶり続けられた磁気鍵から火花は飛び、小さな炎が揺らめき上がった。そんなドアへスタンエアを男は持ち上げる。

だからして気づき、ネオンは息をのんだ。

そう、磁気錠は稼動中なのだ。

モバイロが言っていたシステム再起動は、思ったより早く終了していたらしい。つまり、と部屋を見回す目が泳ぐ。その目は有り難くも壁面に、据えつけられたエレベータをとらえていた。

「あれっ！」

「どうしたッ？」

駆け出すネオンへ男が視線を投げる。

「エレベータが動くかもっ！」

ネオンは返し、エレベータの前に立った。

所詮、ちやちな磁気錠は見せ掛けだけの防犯鍵だ。この辺りが限界と炎がコイルを焼き切る前に、懐へ指を伸ばす。空を切つて違つと、楽器をくるんで背中へ回したジャケットを手繰り寄せた。よれたそこからパスを引つ張り出せば、拘束状態から開放された光学バーコードはフワリ、ネオンの前へ立ち上がる。再起動で登録が抹消されていないことを祈りつつ、蛇腹扉へそれをかざした。

「お願いっ！」

瞬間、走査線はそこに広がる。光学バーコードへ吸い付くとIDを読み取っていった。ものの数秒だ。下りていた蛇腹扉は開く。

「やったっ！」

跳ね上がつて振る手に加減はない。

「こっちっ！」

見て取った毛むくじゃらが踵を返していた。ドアへ背を向けることをためらいつつ、男もやがて床を蹴る。

その背でコイルが焼き切れていた。

堪えきれず押し倒されたドアの向こうから、わんさとなだれ込んでくるガスマスクが床を踏み荒らす。

エレベータの蛇腹扉が下りるのが早かったのか、そんなガスマス

クたちが室内へなだれこんでくるのが早かったのか、もう分かった
ものではない。ただ男が乗り込んだのを最後にエレベータは、上層
へと跳ね上がった。いった。

「やだ、なにこれ」

そうして再び開いた扉に啞然とする。

我先にとエレベータを降りたそこに、『ミルト』フロアは広がっていた。その中でも外周をグルリ取り囲む言語カウンター、その内側に放り出されたことを知る。

「奴ら、上がって来るつもりだぞ！」

どうやら飛び込んだあの部屋は、言語ブースごとに備えられた従業員の控え室だったらしい。今さら腑に落ちるも後の祭り、蛇腹扉を閉じようとしているエレベータは間違いなく下層から呼び戻されていた。

すかさず男がそんな扉へ転がっていたワゴンを挟み込む。

だがエレベータはこの言語ブースにのみに設置されているわけではない。扉の動きは延々左右へ伝播していった。あつという間にカウンターの四分の一ほどを埋め尽くすと、そこでエレベータはいそ下層へ呼び戻されてゆく。

「い、一体、何をすればこんなことになる。あなたは相当の悪党か！」

見回した毛むくじやらが、抜けそうな腰で後ずさっていた。

「何にも覚えがねえから、逃げてんだよッ」

吐き捨て男がステップを踏む。

「とにかく向かいのゲートまでだ。走れッ」

言うなり飛び乗ったカウンターを尻で滑り越えた。

「簡単に言ってくれな！」

「待ってっ！」

毛むくじやらがその後につき、置いて行かれまいとネオンもカウンターへ身を持ち上げる。

背で、逃すものかと動くエレベータはピストン移送だ。カウンタ―内へガスマスク姿の船賊を、二体一組で次から次へと吐き出していった。なおのこと逃げ足に火はついて、フレキシブルシートが散らばり、黒煙を立ち上らせる言語カウンターに、焼け焦げた利用客が転がるフロアを突っ切る。

はずが、ちょうどフロア中央へさしかかったその時、体は空を切っていた。

「ウ、ウソっ！」

のみならず、撒き散らされていたあらゆる物もまた周囲でえふわり、宙へと浮き上がってゆく。

「マズいぞ！」

腕を振り回してバランスを取る毛むくじやらが、巨大なコロニーの疑似重力装置からでは考えられないスピードで始まった重力解放だと、眉間に生えたテグスのようなひげを逆立て教える。

おかげで当初のロケットダッシュの効果はてきめんだ。カタパルト射出よろしく、今や誰も体は制御不能と飛ぶようにフロアを移動していた。まさに、中央に高く設えられた円形ステージへ激突する。

「掴めッ」

跳ね上がる体はまるでスローモーションで弾け飛ぶピンそのものだ。辛うじて背を反らせた男の手がステージのへりを掴み、もう片方の手をネオンへ伸ばした。この状況で遠慮などしておれない。握りしめてネオンもまた、毛むくじやらへ足を突き出す。その足を毛むくじやらが掴んだところで、互いは互いを引き寄せ合った。有様は前衛オブジェか。まさに首をひねる。そこで船族たちはこの低重力を無視すると、床を蹴りつけ駆け付けようとしていた。

「ありや、軍の装備だろッ？」

男の声が裏返る。

「どういうことだ。船賊ではないのか！」

「聞きたいのは、こっちだっつーのッ」

「言ってる場合じゃないでしょっ！」

その動きはとにかく機敏、極まりない。

と、ステージへかけていた手が滑りかけて咄嗟に掴みなおしたのは、アルトだった。そうして目にした光景に眉間を詰める。

ススだ。

こびりついていたせいで滑ったようだった。

つまり、と視線は天井へ飛ぶ。見据えて両眼へと、みるみる力をこめていった。

「お前ら、俺に掴まれッ！」

放ち、ステージから手を放す。

両手で強く握りしめたスタンエアの銃口を、遠慮なく床へと向けた。

「ええい！ 本気か？」

見て取り、女を小脇へ抱え込みなおしたライオンは懸命と言えよう。

そう、ここはつまり二度発目の落雷ポイントだ。だからしてあけられた穴は今、頭上にぼっかり口を開いている。

「本気って、え、何っ？」

ついてこれない女だけが疑問符を連発させていた。

迫る船賊たちといえば、再びさんにんへスパークショットの電極を抱え上げている。

「下だの上だの、あなたにはついてゆけんな、まったく！」

「そのうち慣れるってのッ。いいか、離すなよッ」

「もちろんだ！」

「待って、何っ！ どうなるのっ？ せ、説明してっ！」

省き、アルトはスタンエアのトリガーを絞る。

吐き出されたエア弾の反動はすさまじく、とたん体は宙へと跳ね上がった。

「ぎゃあっ！」

追加してさらに数発。

女の悲鳴を引きずりさんには、一直線に天井へ駆け上る。空けられた穴をくぐり抜けた。

さらに、船賊たちがくり貫きフロへなだれ込んで来た断熱シートを、やたらと分厚い三枚目の隔壁を、次々に通り抜けてゆく。あっという間に、巨大な筒状の空間へと抜け出していった。

薄暗いそこが巨大な筒だと判断したのは、周囲に一定間隔で取り付けられた作業灯らしき明かりからそのような形状を想像したからだ。おかげでそれまで感じていたスピードも突如、ゆったりしたものにへすり変わっている。

覚えた余裕に、追手がついていないことを確かめていた。

が、巨大といっても所詮は限りある閉鎖空間に違いない。終えたところで、すかさず現実を知らされる。筒の外壁だ。頭上を塞ぎ浮かび上がった。同時に舞い戻るのは冗談かと思うほどのスピード感で、そこにこれまでほぼ垂直に連なっていた船賊の侵入口こそ見当たらない。

アルトは頭上へスタンエアを振り上げる。

「そろそろ止まるぞ。覚悟しろッ」

「ウ、ウソでしょっ！ 後先、考えてよっ！」

もつともだが、うなずく代わりだ。トリガーを絞った。見えない力が両肩を突き返し、確かとスピードは緩む。が、減速したのはアルトだけが、物理の法則だ。ライオンの体はそのままアルトを追い越し飛び上がり、掴んでいた作業着を裏返した。引っ張られてアルトは回転し、同様に逆立ちする格好となった女の体が抱え切れなかったライオンの腕から抜け出してゆく。悲鳴と狼狽の声は体勢そのもの、もつれにもつれ、頼りなく宙をかいて前後不覚の真ただ中で、さんには外壁にぶち当たった。

だというのに跳ね返らない。体は格子状になったそこへ、なぜにや吸いつけられる。なら重みに耐えかねたか、やがて格子はガタリと外れた。

「わっ」

「お」

「なんだッ」

足をすくわれたような感覚にこだまする、それぞれの悲鳴。照明ひとつない空間を、さらに奥へ吸い込まれてゆく。

果たしていかほどの距離を移動したのか。縄と編まれたコードの収まる細長い一角に縦一列でフン詰まってようやく、その動きを止めていた。

ややもして、容量オーバーにぱっくり開いた片側から放り出される。

遠ざかる視界に、共に放出されたコードの束が映り込んでいた。開いたパネルもまた、片側を固定したきりで揺れている。

その左側、触れるほどの距離に壁はあった。

右側、遠方に、救命具を吹かせて行き交う利用者の群れを見つめる。

なら、ここはいつたどこなのか。至極単純な疑問は浮かび上がっていた。だからしてアルトは認識の速度を速めるためにも、この空間における重力下での上下を把握しなす。行き交う利用者に合わせ宙を泳ぐコードを掴むと、スタンエアの銃身で壁を押しやり、体を回転させていった。

比例して視界に掛けられてゆく、なんともものんびりとした補正。見覚えのなかった光景は果てに、よく知る場所へとその姿を変えてゆく。

「ここ、発着リングじゃない……」

女が呟いていた。アルトを掴むと、自身も体を同じ向きに固定しなおしてみせる。だからして目の前には天へ反り上がる巨大な通路が伸びていた。

「助かった、と言いたいところだが、だとしてこれは何の騒ぎだ？」
おっつけライオンも、二人の視線に己が視線を沿わせて問う。

確かにエアロックサインはせわしく点滅すると、発着リングは格納庫へつながるゲートの全てに利用者を殺到させていた。船賊の

襲撃を受けているからとはいえ、辺りにラバースーツは一体もおらず、ことうまでなるパニックの理由が飲み込めない。

と、答えあぐねて眉間へ力を入れたアルトの脇腹を、女がつついた。

「ね、ちよつとアレ何？」

その指は、通路の向こうを指している。

なぞりアルトはのぞき込んだ。

背後でライオンも同様に身を折つてのぞき込んでみせる。

なら反り上がった通路を塞いでドミノ倒しの勢いだ。駆け下りてくる気密隔壁は映り込んでいた。

「もう駄目だ。今度こそ、駄目だ！」

呻くライオンがたてがみを、とたん減重力になお逆立てた。

「こつ、こんなことしてる場合じゃア、ないぞッ」

アルトも目玉をひん剥く。

光景はつまり、利用者の命よりも周辺海域の保存を優先させる場合にのみ起こる、気密隔壁の超法規的動作だ。

そう、アルトをはじめジャンク屋が乗り込む放置コロニーや無人船は、たいてい事故をきっかけに放置されている。そうした事故の中には周辺へ回収不可能なほどのゴミを撒き散らすものも多く、それらゴミは移動していようが静止していようが、航行中の船にとって最大の脅威と疎まれていた。機密隔壁の超法規的動作は、それらゴミとの衝突で引き起こされる船舶事故を最小限に食い止めるための最終手段だ。

したがってその動作が目の前で起こっている今、『フェイオン』が危機的状況下に置かれていることは明白だった。目下のパニックも当然と腑に落ちる。

「あんたの船はどだッ？」

アルトはライオンへ声を張った。

「だからなんなのよっ、アレっ！」

無視され女が繰り返す。

「ここへ吸い上げられたのは、致命的な機密漏れがあったからってことだよッ」

「ダメだ。わたしの船は逆サイドのリングだ！」

並ぶ格納庫ゲートの造語ナンバーへ目を這わせたライオンが、舌打った。

「な、なによつ、それーっ！」

女は叫び、すかさずアルトは女へも確かめる。

「あんたはッ？」

「帰りの船はモバイロしか知らないのっ！」

「仕方ねえッ、おまえらついてこいッ。俺の船は四ブロック先だッ」
否や握ったきりのスタンエアを、ドミノよろしく空間を遮断して迫る隔壁へ突きつけた。それだけで事の成り行きを理解するあたり、ふたりの呼吸はもう完璧と合っている。

作業着を引つ掴まれ、アルトはトリガーを絞った。

乾いた発砲音が、逃げ惑う利用者の悲鳴に重なる。救命具を吹かせて逃げ惑う利用者の誰より早く、助走いらずのトップスピードで天井際を滑走していった。

全開の隔壁一枚目をやり過ぎ、間近で動き始めた二枚目をすり抜ける。半ば閉まりかけた三枚目をかわし、辛うじて四枚目、隔壁の間から目指す区域へさんにはもぐりこんだ。

ブレーキ代わりに、アルトが銃身を天井へ擦り付ける。

減速に伴い判読可能となった格納庫ゲートの造語ナンバーへ、ライオンは視線を走らせた。

「何番だ？」

「『一二六四八』を頼む」

やりとりのさなかで不意に、アルトの体を女は突き放す。

「おいッ」

「後でっ！」

答えるだけで精一杯だった。ネオンは忘れまいと、耳にした格納庫番号を頭の中で繰り返す。身をひねりつつ伸び上がって天井を蹴り、狙い定めて方向転換した。

なにしろそれが偶然なのだとすれば、なおさら放つてはおけない光景だ。目指す場所にバツ印前で会った『デフ6』のデミは、ぶかぶかの救命具を着込み立っていた。しかもゲートはデミのかざす乗船チケットに、無反応を決め込んでい最中だ。

『デミっ！』

流れる利用者の川を横切り、到着した格納庫ゲート上部へネオンは手をつく。

『おねえちゃん！』

驚き持ち上がったデミの顔には、昇降機の説明を要領よくこなしていたあの面影はもうない。壁面を手繰り、デミの元へとネオンは降りた。鼻溜を振るデミは、とたんそんなネオンへとまくし立てる。『もう、出ちゃったよ！ あの後、ミルトに船賊が押しかけてきて

！ システムがダウンしたから就労ゲートが使えなくなつて、ぼくこつちへ回つて来たんだ。なのに！」

『ひとり？』

そんなデミの前へ、ネオンはヒザを折つてやる。ゆっくり問いかけたなら、またもや何かを口走りかけたデミは、こらえるように鼻溜を縮ませた。コクリ、とうなずいて返す。が、やはりこらえきれなかつたらしい。

『でも、おかしいよ！ 船賊なのに軍みたいな装備……！』

遮り口元へネオンは人差し指を立てる。

『一二六四八。船』

あえて微笑み、忘れまいと繰り返した格納庫ナンバーを口にしました。

『乗れるの？』

もちろんネオンにその約束はできない。だが、ここへ来たからには否定こそできなかった。だからして答える代わりだ。デミの手を取り立ち上がる。一刻も早く、と進行方向を睨みつけた。

瞬間、襲いくる現実。

探して並ぶゲートへ視線を這わせたものの、ネオンに造語文字は読めない。

「ぎゃーっ。『一二六四八』って、どれよっ！」

思わず悲鳴は上がり、そんなネオンの手を今度はデミが引いていた。

『それなら、この七つ向こうだよ。おねえちゃん！』

さすが造語マスター。果たして現状、助けているのか助けられているのか。ともかくデミの噴かす救命具の推進力を借り、ふたりは濁流と流れる利用者の中に混じつてゲートへ飛ぶ。

遙か前方で、このブロックを密閉して気密隔壁が完全に閉じた。

行き場を失った利用者はとたんあふれかえり、ダメ押しと歪んで気密隔壁はミシリ、と歪む。

男と毛むくじやらの姿は、ちょうどその手前にあった。隔壁の稼

働と共に熱煙シャッターは切れたらしく、代わりに格納庫とを隔てて塞ぐ鉄扉へしがみついている。

『あのヒト』

めがけてネオンは指をつきつけた。

頷いたデミが片手で救命具の噴射を調節する。逆噴射での減速を試みた。離れたネオンは一足先にと、慣性のままふたりの元へ身を滑らせる。

「何っ？　ここまで来て今度は開かないわけっ？」

「なら、あんたも手伝えつてのッ」

「もーっ！　トラのバカっ！」

男に怒鳴り返され、ネオンも鉄扉へ食らいついた。

追いつきデミもそこへ加わる。

とたん鉄扉は歪んで引つかかっていた一部分を乗り越えようと、勢いよく外へ開いた。それぞれの体は勢い余って格納庫へ放り出され、いつの間にか増えたデミに男が気づく。

「おい。何だ、そいつ？」

「デフ6のデミよ。わたしの助手。だから一緒に乗せてちょうだい」
「手続きは、わたしが済ませるぞ！」

ネオンははまだゴムまりのように跳ねるデミの体を引き寄せ、どうにか爪先で床をとらえた男の傍らを毛むくじゃらは格納庫の隅、設置された管制端末へ滑走してゆく。

「まかせた」

肩越しに投げた男は、ネオンへもこう口を開いていた。

「言っておくが俺の船は観光船じゃないぞ。そこところ、わかつてんだらうな、あんたッ」

「そんなガラじゃないことくらい、もう十分わかって頼んでんのよっ！」

「それにそいつ、まだ子供じゃねえか。こっちはヘタすりゃ、奴らに拿捕される可能性もあるんだぞ。それも承知で頼んでんだらうな」
振り回すその手には、スタンエアが握られたままだ。見て取った

デミが、ネオンの影へ隠れるようにしがみついてくる。

「だからって……」

そんなデミをネオンはかばった。

「ここで放って行けるわけないでしょっ！」

理解できない言語でもめる双方を見上げるデミは、すっかり怯えてしまった様子だ。男の目が、そんなデミをとらえていた。それこそ答えかねてヤケクソ紛れか。頭をかきむしる。

「ったくツ。だったら後ろの鉄扉、ふたりに閉めてハッチへこいッ！」

突きつけた指で、ネオンの背後をさし示した。それきり床を蹴りつけ船へと飛ぶ。

『扉、閉める。船、乗ろう！』

見送ったネオンの声は弾んでいた。

ともかく、ふたりがかりで鉄扉へ飛びつく。どうにか閉め終え、これから乗り込むべく船へと滑る。その船体を意気揚々と見上げた。いや、見上げたつもりで広い格納庫内、目を泳がせる。やがてそこに、ごんまりうづくまる華奢な一機のスクーター船をとらえて絶句した。

「ウン……」

だいたいスクーター船と言えば、衛星間移動のために用いられるチヨイ乗り感覚の軽船舶だ。目の前の船はそれを誤魔化すかのようには船尾へカーゴモジュールを後付けし、船体中央部に居住モジュールを増設していたが、ヒトなら定員も一、二名。光速への乗り入れさえ許可されていないシロモノには変わりはない。ネオンはひたすら愕然とした。

知っているのだろう。デミも心配そうだ。足元から頼りなさげにネオンを見上げている。その目と目が合った。だとしてネオンに返す言葉などありはしない。ただただ奥歯を鳴らす。なにはともあれ自らの説得にとりかかった。

「贅沢……、いってられないのよ」

搭乗ハッチは、アクリル製らしいドーム状のコクピットが突き出る船首と、居住モジュールの間にあった。

先に船へ向かった男は、船体に接続されていた充電ケーブルと燃料チューブを外し終わると、伝い降りたハッチ前で船のキーを脇のスリットへ差込んでいるところだ。やがてガルウイングよろしく跳ね上がったハッチ前から、滑り来るネオンとデミへ振り返った。早くしろ、とその手を大きく振り回す。

離れた位置でも毛むくじやらが、手続きを終えた制端末を乗り越え、船へと身を滑らせていた。

包み込んで格納庫全体から、そのとき獣の遠吠えにも似た重苦しい音は鳴り響く。

「ぼやぼやするなッ」

不安に駆られ、滑りながら辺りを見回すネオンとデミの体を男がひつ掴んだ。力任せと船へ放り込んだなら、辿り着いた毛むくじやらもまた、その後に続いて乗り込んでくる。

見届け男が中へ身をひるがえした。

その足元からデミが脱ぎ去った救命胴具を船の外へ投げ捨てる。

鉄扉が受けた重みにボンッ、と中央をへこませていた。

決別して、男は船のハッチを勢いよく閉める。

空間が密閉されただけで覚える安堵感に、つかの間、張り詰めていた空気は緩んでいた。しかしながら浸るにはまだ早い。

「こつちだ」

ハッチの真正面から伸びる急勾配の階段を、案内して男は手すり伝いと上層へ滑り上がっていった。

「スタータは？」

追いかけて問いかけたのは毛むくじやらだ。

「エプランチネル」

おっかなびつくり、ネオンもその後に連なり、デミが後ろを追いかけた。

「マニュアル通りなら、立ち上げくらいなら手伝えるぞ」

「頼んだ。コクピットは突き当たりを上だ」

答えて男は毛むくじやらを、登り切った所に横たわる通路の左へ押し出す。

「あんたらは、こつちだ」

上がってきたネオンとデミを、右へ振り分けた。

「ちよ、ちよつと！」

それこそ突き飛ばされて通路を一直線と飛ぶ。あつという間だ。狭い船内を突き当たりまで滑走した。なら触れたセンサーにドアは開いてくぐり抜け、立ち塞がるモノにぶつかってようやく滑走は止まる。

「何よ、コレ」

しがみつく眼前のそれを、ネオンはしげしげと眺めた。

そう、握っているのは両端を天井と床へ固定したネットだ。しかも中には見慣れぬ物が包みこまれており、同じようなものは空間を埋め尽くすと規則正しく無数とそこに並んでいる。

「向こうはふたりで一杯なんだよ」

男の声に振り返っていた。

「わあらおう」

その足元から何事か叫んでデミは飛び出してゆく。

「ちよつと待ちなさいってっ！」

止めるがもう遅く、仕方なくネオンは男へ顔を向けなおしていた。

「……ここ、カーゴモジュールね」

確信したままを口にする。

「「」名答」

あっけらかんと答えて返す男は手を、天井へと伸ばしていた。

「ついでに言わせてもらおうなら、このカーゴは精密機器向けで、耐震、抗G仕様の特注品だ」

そこから一気にフックを引きずり下ろし、連なるネットを水面へ網でも打つ要領でネオンへ投げる。

「な、何、するのよっ！」

暴れようが剥ぎ取れる範疇になかった。ものの数秒でネオンはネットにくるまれると、天井へと吊るし上げられる。

「だから言つたる。観光船じゃないってッ」

最後、屈み込んで男は床へフックを固定した。

「あいつ、どこへ行きやがった?」

その目を辺りへさ迷わせる。

「だからって、これは聞いてなあいつ!」

聞く耳持たずでネットの間へもぐりこみ、デミを肩に担ぎ上げて再び戻った。

「ここが一番安全なんだよッ」

変わらずネオンの隣へデミもまた固定する。並んで吊られたその姿は、まさに捕獲された二匹の野生動物だった。

「とにかく、ここでおとなしくしてろ。落ち着いたら後でちゃんと出してやるから」

「そう言う問題じゃないっ!」

だがもう男はドアへ踵を返している。押し止めるなら、もう手はこれしか残されていなかった。

「そんなシュミなの、このヘンタイいつ!」

とたん、スライドしたドアの向こうで振り返った男のこめかみが痙攣するのをネオンは見る。

「おま……ッ、一言多いッ」

それきりドアは閉じられていた。

同時に明かりが待機電源へ絞られる。暗がり、すっかりネオンの勢いを削いでいた。

「……だから、なんで移動するたびあたしは荷物扱いなのよ」
うなだれたところでサマにもならない。

と、そんなネオンを励ましたのは、あるうことが先ほどまで心配げな瞳でネオンを見上げていたデミだ。

『心配しないで!』

言う声は異様なほどに明るかった。

『だってこれ、ジャンク屋の船だもん!』

ネットにくるまれた体をネオンは、デミへひねる。そこで意気揚々、鼻溜を振るデミは自慢げにさえ見えていた。

『驚かないで、おねえちゃん! ぼくたち今、そのジャンク屋がお宝を保管するカーゴにいるんだよ!』

「そ、そうなの?」

などとネオンが間の抜けた返事をしようが、デミの興奮は止まないうつだ。

『あのね、おじいちゃんは、よくぼくに教えてくれたんだ。ジャンク屋は何より飯の種になる回収品を大事にするって! だから彼らの船の中で一番安全なのは、コクピットでもどこでもないカーゴなんだって! それにお宝探して既知宇宙の端から端まで飛ぶジャンク屋の船は、見かけで判断しちゃいけないってことも言ってたよ。奴らの船と腕は信用するに値するって。でなきゃ、ジャンク屋なんかやっつけてないから!』

勢いに押されてネオンはうなずく。

「そう、そうなんだ」

だが、その説明だけではどうしても拭えない疑問が残る。

『どうして、デミ、ジャンク屋、分かった?』

問いかけたなら、デミの明かすカラクリはこうだった。

『そっか、ぼくまだおねえちゃんに、サポジトリへ行ってるコト、言ってなかったもんね。ぼく、その物理理光素学部 of 六年生なんだ。だからこの緩衝ネットに包まれてる物の価値、全部わかるよ! みんな二年生の時、教科書で習った理論が応用されてるんだ。奥にはね、マニアならすごいお金だしちゃうのもあったよ。ぼくだって研究材料に欲しいくらいだもん! そんなの積んでるなんてさ、博物館か、ジャンク屋の船くらいだもん!』

『フェイオンのスタッフ?』

昇降機を修理していたあの姿を、いまさらのように思い出す。

『ああ、えっと、あれは帰り際にたまたま頼まれただけなんだ。ホ

ントは擬似重力と内圧の開放過程における光粒子波形の変化についてレポートを書くためここへきてたの。だって学校の機材じゃ足りなくて、既知宇宙でも一位、二位の規模があるフェイオンの重力装置なら納得のできる結果がだせるんじゃないかって思ったんだ」

『ぎじゅうりよく、の、こうし、ねぼーと？』

言い切れず、ネオンの口は開いたままで止まっていた。だがデミはまだ言い足りないらしい。

『うん。だってぼくの将来の夢は……』

この修羅場で浮かべる満面の笑みは、とにもかくにも無邪気だった。

『おじいちゃんの店を継ぐこと！』

瞬間、ネオンはどこか遠くへ来てしまった感覚に襲われ、深く両目を閉じてゆく。

「あんたが一緒に、助かった」

船首、突き当りから上へ伸びるハシゴを手繰り、アルトはコクピットへと出る。一足先にもぐりこんでいたライオンは半径三メートル足らずのアクリルドーム、その中央に据えられた座席で、息を吹き返した計器類の淡い光を見回していた。

「驚いた。ただのスクーター船だとばかり思っていたのだが」
アルトへと振り返る。

「仕事柄、ちんたら飛んでたんじゃ、儲け損ねるんでね」

身をすり合わせるようにして、そんなライオンと場所を入れ替わる。背から剥がしたスタンエアを座席側面に張り替え、アルトはオーダーメイドの座席へ体をはめ込んだ。背負い込まんばかり、四点ベルトを締め上げてゆく。

「だがスクーターでは光速には乗れんだろう？」

手際の良さをライオンは眺めて問うた。

「乗り入れが許可されていないのは、サイズに問題があるからじゃない。その点、こいつは大型船舶と同じスペックだ。相当の使用料も払ってる。船種詐称だって文句を言われる筋合はないね」

交互にフットペダルを踏み込み動作を確認しつつ、答えてアルトは左手スロットル脇のコンソールもまた弾いた。ならどうやらついにその術を覚えたらしい。

「で、あのふたりはどうした？」

相変わらずのやり方を聞き流しライオンは、別の疑問をなげかけた。

「カーゴなら問題ない」

高速運転に伴い動力部が、風を切るような高音を発し始める。船尾で、歪んだ鉄扉を覆い隠すようにエアロックは閉じられてゆき、

管制からコロニー周辺の航路状況が送信されてくる。

「それは名案だな」

伴い、それまで無色透明だったアクリルドームへ、ホ口映像の膜は青く広がっていった。出航してゆく機影と、その予想軌道が幾重にも重なる、リアルタイムで表示されてゆく。

しかしながらそこに安定した抜け道こそ、見当たらない。我先にとコロニーから飛び立つ機影の予想軌道はひたすら混沌と絡まって、アルトの視界を埋め尽くしていった。

察したライオンが、周囲へ両手足を突っ張る。

「ただでも込み合うエリアだというのに！」

身構えれば、閉まりきった後方エアロックと連動して、真正面の格納庫扉が開き始める。が、生じた歪みが原因か。三分の一も開いたかどうかというところで動きを止めた。

刹那、管制からの情報もまた途絶える。

アクリルドームを砂嵐は覆い、見限ったアルトの手は即座に自前のナビを立ち上げた。だが管制との連携上、ここはジャミング防止措置が取られた場所だ。外の様子を知ることができず、立ち上がったナビはひたすらここ格納庫だけを示し続ける。

「いいかないが、俺たちや、よっぽど嫌われてるってワケだ」

「このどさくさに紛れて、わたしを仲間に入れてくれるな！」

吐き捨てたアルトの背でライオンは言い放ち、

「そいつは、失礼」

笑ってアルトはスロットルを握りなおす。

膝下のスターターをワンプッシュした。

風切る駆動音へ低音が、膨れ上がるように重なってゆく。あわせてスロットルを絞れば船体は、ゆるゆる上昇を始めていた。マタドールに立ち向かう闘牛のごとくだ。闘志もあらわと右へ左への横滑り、わずか開いた格納庫の隙間から表の修羅場を睨みつけた。

「吹き飛ばされんなッ」

同様に見据えてアルトも軽く唇を湿らせる。

応えて無言でライオンがうなずきしたのが合図だった。

操縦桿を傾ける。

船体が滑り出していった。

同時に、フットペダルを蹴り上げるたなら、やおら船体は縦へ九十度、回転する。そのままでは潜り抜けられなかった半開きの格納庫の扉の間を、小ぶりなスクーター船ならではの、すり抜けていった。とたん広がる視界に、大小様々な船がもんどりうって交差する。

反応するナビがアクリルドーム一杯に映像を展開し、ぶちまけられて機影は次々、投影されていった。見る間に軌道は絡まりドームを塗りつぶし、その中でも急速に接近してくる数機をマークすると、はなから最大ボリウムで警報を鳴り響かせる。

一手に引き受けたなら待ったなし。

今一度、アルトは逆足のフットペダルを蹴り上げた。

見つけたばかりの抜け道へ、迷わず船体をめぐりこませる。

くぐり抜ければ息継ぐ暇なく左展開。右舷から突っ込んでくる他船をかわした。

立ちふさがる軌道の網へ、次なる突破口を探して目を走らせる。なら誘って固く結ばれていた予想軌道はほどけると、向かって船体を落としこんでいった。はずが、唐突とせりあがってきた鉄塊に、否応なく心拍を跳ね上げる。

崩壊しつつある『フェイオン』の残骸だ。あまりに周辺が混み合い過ぎたせいで、ナビが処理しきれなかったに違いない。思うが慌てるあまり、大きさも距離もうまくつかむことができやしない。まさに逆噴射を敢行する。つまり火事場のクソチカラ。勢いに踏ん張りきれなかったライオンが、コクピット内をどこぞへ吹き飛ばされていた。そのさらに奥で思い切りシェイクされた居住モジュールがけたたましい音を立て、抜けるほどの勢いだ、アルトは左フットペダルを踏み込む。ライオンと船体の上げる悲鳴を聞きつつ、吹き飛ばよつな左展開でせり上がってきた残骸を船体の腹へ押しやった。

その大幅な減速に、周囲の予想起動は瞬時にして組み替えられ、

新たに編まれた軌道の穴へ、アルトは手足総動員で船首を向けなす。くぐり抜け、何機もの他船をかわし、優雅に航行する超巨大観光船を盾に、ようやく閑散とし始めたエリアへと抜け出していった。やがてそんな超大型観光船とも軌道を分ければ、あれほど鳴り続けていた警報音はそこでピタリ、鳴りやむ。

絡まる軌道のほどけたアクリルドームに、瞬きを忘れた星はごまんと張りついた。死を連想させる静寂を、そこに深く漂わせる。実感するまで、どれほど時間をかけたかしかない。

浅い呼吸を繰り返し、アルトは引き剥がすようにしてスロットルから手を離していった。まさにぐったり、オートパイロットのスイッチを弾き上げる。計器から光は落ち、代わりと灯る白色灯に辺りは平らと照らし出された。同時に働き始めた簡易重力が、その足を久方ぶりの地へ下ろさせる。

とそのとき、背後で鈍い音はしていた。食い込んでいたベルトを外してアルトは急ぎ、振り返る。なら音の原因はそれだったらしい。ライオンはそこで上下逆さと、ひっくり返っていた。

「おい、大丈夫、か？」

かける声も、おずおずとなつて然り。ならライオンも、こう答え返す。

「ちよつど慣れてきたところだ」

思わず笑いはこみ上げていた。

「あんたにしちゃ、上出来だ」

歩み寄つて手を差し出す。掴んでライオンは正しい上下を取り戻し、放心したような面持ちでしばしその目を泳がせた。

「……助かったのか？」

「船賊も、ついてきてないようだしな」

質問が上等すぎて、アルトは肩をすくめて返す。

「一生分の運を使い果たしたつてところだ」

つまり今度は、ライオンが吹き出す番となつていた。

「なるほど。ならば、残りは実力で切り抜けるとしよう」

腰を上げて自らの体へ目を落とす。

「なんてありさまだ」

確かに発色のよかったオレンジ色のツナギは今や、ススと得体の知れない流動食に塗り固められて見る影もない。無論、二発目の落雷で飛び散ったあれやこれやを頭から被ったアルトなど、それ以上のいでたちだった。

「悪いが、ランドリーなんて気の利いたものはないぜ」

脱いだ作業着を座席へ投げつつアルトは、体を階段へ傾ける。

「どこへゆく？ メッセージは聞かないのか？」

気づいたライオンがツナギから顔を上げていた。

「カーゴへ行ってくる。後回しにされたことがバレたなら、噛みつかれそうだったんでな。メッセージはその後だ。何かあったら下層の一番奥にいる」

上がった時、鳴ることのなかった靴音が小気味よく鳴っていた。

響かせアルトは、振った手で進行方向を指し示す。その手が吸い込まれるように下層へ消えたなら、残されライオンは思わずヒゲをヒクつかせていた。

「……冗談じゃない。まだ、何か起こるとでも言いたいのか？」

ドアがスライドしてゆく。相当に揺れたことを示して灯る明かりが、カーゴ内に渦巻くホコリを照らし出していた。払いのけアルトはその奥へ目を凝らす。

「死ぬかと、思ったわ」

地を這うような声に呼び止められて、ぎょっとした。見れば目の前だ。並ぶネットの中に恨みのこもった三白眼は浮かんでいる。

「お、驚かすなよ」

取り繕い、急ぎフックへ身を屈めた。外そうと手をかければ、ネットを揺する女がそれを拒む。

「あたしじゃなくて、隣が先でしょ」

仕方なく、デミと紹介された『デフ6』のフックへ先に手を伸ばすした。外せば張力を失ってネットは解け、かき分け中からデミは勢いよく飛び出してくる。続けさま女のフックをはずしにかかれば、ネットに絡まりながら雪崩れるように女は床へ吐き出されていた。

「い、つたあい……」

「その勢いで大事な商品に傷、つけてくれんなよ」

「だったら今度から、ちゃんと座席、用意しておいてよね」

打ち付けた尻をさすりつつ、唸って女は立ち上がる。仕事を終えたネットは再び一本のロープへ戻ると、アルトの手から天井へ吸い上げられていった。

「そいつはよれよれの爺さんになって、観光遊覧船の船長にでも轉身したなら考えておいてやるよ」

「あらそう。それはそれは豪華なシートで遊覧してくれるんでしょうね。代金、弾まなきや」

「誰が恵んでくれと言ったかよ」

「けっ、とアルトは吐き出す。その視界へ、女の手は伸ばされていた。意味が分からずしばしアルトはその手を見つめる。」

「だけどデミの言ってたことはホントだったみたい。ジャンク屋なら大丈夫だつて。ともかくありがと」

辿って持ち上げた視線の先に、柔らかい笑みはあった。

「あたしはネオン。言っとくけど、これ皮肉じゃないわよ」

小ざかしくも翻弄されて、アルトはひとつ息を吐く。

「アルトだ。礼は素直に受け取っておくよ」

呆れ半分、その手を握り返した。

「ね、ジャンク屋なんでしょ？ おじさん、ジャンク屋なんでしょ？」

「ほどいたそこへ、デミの頭は割って入る。」

「ぶら下がってるガラクタを見るなり、この子があたしにそう教えてくれたの」

見やったネオンが肩をすくめた。

『ね、そうでしょ？ ジャンク屋なんでしょ？』

繰り返すデミは『ヒト』語が聞き取れないらしい。

「ガラクタって言うな、ガラクタって」

『だったら、どうした』

ネオンへ『ヒト』語で返し、アルトはデミへ造語をつづる。

『やっぱりそうなんだ！ ぼく一度、ホンモノのジャンク屋に会っておきたかったんだ！』

「とにかく、ずっとここにいろなんて言うつもりはない。表へ出るぞ」

目を輝かせてデミはまといつき、蹴散らしアルトはドアをスライドさせる。とはいえ行ける場所など限られていた。居住モジュールへ向かう。たどり着いてドアを開き、覗き込んで即、閉めた。先ほどの逆噴射のせいだ。使えやしない。仕方なく、その足をコクピットへ向けなおす。

『ねえ、ねえ、だったらぼく、確かめたいことがあったんだ』

道中、前へ後ろへ絡みつくデミは器用なものだ。

『だって授業と実際じゃ、違うんだもん。ね、ジャンク屋って基礎理論には詳しいいでしょ？ でないとお金になるパーツを見極められないんだもん』

その視線を避けきれない。

「おい、こいつ、本当にお前の助手なのか？」

見下ろしネオンへ振り返った。

「えっと、そうねえ。十分だけ、かな」

「ああ？」

「機材のメンテナンスをしてくれたの。そこで知り合っただけで…えっと、なんだっけ？ サポジトリってこの物理なんとかって学生さんだつて、さっき聞いたわ」

とたんアルトの声はひっくり返る。

「サポ？ なんだよ末はギルドか学者さんってヤツか？」

おかげで言うべきこともまた定まっていた。アルトはコクピット

前の階段で足を止める。デミへ視線を合わせるとヒザを折った。

『あのな、ぼうず。だったらひとつ教えておいてやるよ』

待ちに待った講義の予感に、デミの鼻溜は期待に膨らんでいる。

『この船に乗り合わせたのは仕方ないとしても、本当のおりこうさんてのはワケのわからねえ話に首を突っ込まないもんだ』

聞き入る様は、師匠からの大事な言葉を受け止めるかのようで、ままに大きくうなずき返す。さらに何が聞けるのだろう。アルトへ真摯な眼差しを向け続けた。

つまり、伝わっていないらしい。

しこうして沈黙は訪れる。

『あのな、俺の言いたいことは、少しはその鼻溜を閉じてろってことだッ』

耐えかねアルトは立ち上がった。

「バカね。子供相手に何、脅してるのよ」

見る間に鼻溜をしばませたデミを、ネオンが見逃すはずもない。「勘違いしてんのは坊主の方だろ。こいつのために言ってるんだ」

『違うもん！』

と、やおらデミは鼻溜を振る。

『ぼくは坊主じゃないもん！ デフ6は子供のうちは雌雄団体だけど、大人になったらぼく、女の子になるんだもん！』

「……は？」

『でもね、一番の夢はおじいちゃんのを継ぐこと！』

さらに高らかと宣言して、デミはアルトへ満面の笑みを浮かべる。瞬間、アルトを底知れない疲れは襲っていた。

『……好きにしてくれ』

言っだけが精一杯だ。

『ならね、ならね……！』

試合に勝って勝負に負けたアルトの尻を、デミの絶え間ない質問が叩きに叩く。されるがままでコクピットへtp上がった。いった。

「お、騒々しいな」

足音を聞きつけライオンも、その耳を立てる。

「こついうのは、けたたましいってんだよ」

言う間にも、デミは並ぶ計器へ向かい走り出した。

『こら、勝手に触るなッ』

振り回されて追いかければ、その後ろからネオンは頭をのぞかせる。

「無事だったか」

見つけたライオンが獣面をほころばせた。

「死にそうなほど振り回されたけれどね」

「船長が船長だから仕方あるまい」

「お前ら、放り出すぞ」

聞きつけ舞い戻ったアルトの脇には、デミが丸太と抱え込まれている。と、ライオンが、ふたりを前にやおら姿勢を正してみせた。

「わたしはパラシエントのルーケス・ク・ニット・タンパーナイマだ。しばし空間を共にするものとして、よろしく頼みたい」

「舌、かみそうな名前だな。ライオンでいいだろ、ライオンで」

くさすアルトの隣で、なら、とネオンも名乗ることにする。

「あたしはヒトのネオン。こつちはデフ6のデミ。よろしくね。でもヒト語、上手ね」

「ボイスメッセンジャーをやっている。ヒト語は得意配送言語のひとつだ」

『ねえ、造語で話してくれないと、ぼく、分からないよ』

アルトの脇から飛び出したデミが、誰もを見上げて鼻溜を振った。

「あなたの船、回収できるかどうか、フェイオンへ戻ってみるか？」

足元においてアルトはライオンへ目を細める。

「いや、もうこりこりだ。新しい船を買う。それだけの依頼料を同封の電子ウォレットで握らされた」

「それで……」

想像できた額にアルトは絶句した。顔へ、ライオンもつなずき返

す。

「メッセージを握りつぶせなかった」

「ますます、とんでもない依頼人ってワケだな」

なら装っている必要のなくなったその顔を、ライオンはすり替え始める。

「ちなみに、普段の義顔はこれなのだが……」

が、浮かび上がったその瞬間、場の空気は凍りついた。見て取ったデミも泣き出す。

「い、いや、先ほどの方がいいなら、それで通すが」

「そうしてくれ。船は狭いしな。そっちのほうが和む」

深くうなづくアルトが促し、泣き止まないデミが突然ふらり、とネオンの前へ倒れ込んだ。

「デミっ？」

慌てて抱きとめて驚きネオンはその体を揺さぶる。だがデミが答える気配はなかった。やがて鼻溜からイビキのような音を鳴らし始める。

「……まさかッ？」

気づき計器へ振り返ったのはアルトだ。目は、一酸化炭素のゲージを探していた。目盛はそこで危険濃度近くを指している。

「酸欠？」

即座に座席の下から酸素マスクを剥ぎ取っていた。言うネオンへ投げる。受け取ったネオンは、余るほどのそれをデミへ急ぎかぶせた。

「さっきの航行で事故ったか？ フィルターならヒト五人まで処理できるはずだったのに」

急ぎアルトはチェックにかかる。

と傍らで、手はすまなさげと挙げられていた。

「いや、申し訳ない。パラシメントはヒトの三倍の呼気量があつてだな……」

瞬間、殺気にも似た緊張がコクピットに走る。

振り返りざま、アルトは指をライオンへと突きつけていた。

「黙れ。しゃべるな。息、吐くなッ」

つまるところメッセージの確認は、まだ先のこととなるらしい。

窓もない部屋は三メートル四方。シワに覆われ、ふてぶてしく肥えたトラの体には狭すぎる、それは仕事場だった。

そんな部屋の大半を陣取りデスクは置かれると、店先のカメラとつながるディスプレイは置かれ、さらにモバイル口管理用の、ギルドネットワーク専用の、端末は上へ積み上げられていた。外部とつながる汎用端末はと言えば元よりデスクに埋め込まれており、つながれたプリンターはどこからどう聞きつけたのか、ネオンへの演奏依頼を受信するとそのたび内容を紙媒体へ印刷している。

一口に『ギルド』といっても、顧客情報の管理や買い取り価格の設定を行っている中央本部を除けば、実際に物品の売買を行っている窓口はどれも個人商店そのものだ。ゆえに営業スタイルも様々で、カウンターでの対面取引から、店舗を必要としない出張取引までもが存在している。トラはと言えば店先のカメラ越しにやり取りを行う、売り手との接触を極力に避けた遠隔取引で、客側のモニターへアイコン映像を貼り付けてしまえば手っ取り早く素性を隠せる気楽なやり方でもあった。

無論、だからといってそれほどまでにトラが危険な取引を行っているのか、と言えば、それはまた別の話をしなければならぬだろう。

まだ店先のカメラに客の姿は映っていない。

チラリ目をやって退屈したように逸らした。クッション性だけは特A級のイスを軋ませ、体をひねる。簡易保冷庫はちょうど手の届く場所に置かれており、慣れた手つきでそのドアを引き開けた。中から合成保存料無添加が売りの、『アズレ印の『エスパ』を一袋つまみ出す。デスクへ向きなおって後ろ手に保冷庫のドアを閉めれば、振動でプリントアウトされた依頼書がばさばり、トラの頭へ降った。

だがトレーの中で積み上がるそれをトラがのぞくことはほとんどない。降ったところで慌ててかき集めるほどのモノでもなかった。

ただランチヨンマット代わりに一枚を拾い上げ、袋の下に敷く。エスパの口を開いた。

中へうやうやしく指を伸ばし、つまみあげたひとつを口の中へ放り込む。

とたん広がるのは独特のクサ酸っぱさだ。噛めばほろほろと消え入る食感も、トラの幸福感を倍増させてやまない。合成保存料無添加のせいなのかどうか、アズレ印のエスパはまるで、故郷のママが作るエスパの味にそっくりで、思い浸ればネオンに浴びせられた『エビの尻尾野郎』もどこかへ消えゆくようだった。

さらに袋へ手を伸ばす。先だつてより豪快にほおばり、ソースの残る指先を念入りにしゃぶってほう、つと息をもらした。

止まらぬ手が、食べきつてしまう勢いでまた袋へ伸びたが、つまみかけたところではた、とその手を浮かせる。

この『エスパ』は近辺では特殊な菓子らしく、買出しに手間取るのが通例だった。いくら買いためをしているとはいえヤケ食いするのはもつたいなく、トラは明日の楽しみに取っておくことにする。封をしておこうと転がっていたはずのクリップを探し、辺りをまさがった。散らばる依頼書をかき分けて、その隙間にクリップではなく、見慣れない小さな光の点を見つける。

行き当たりばったりで動いていた手は止まっていた。

のぞき込んで光の点はモバイル口専用端末のものだと知る。

そしてそれは、モバイル口からの信号が途絶えた時にのみ点滅するものであることもまた、読み取った。

『なん、だと?』

呟いていた。

咄嗟に何かの間違いだろつ、と考える。

確認すべく端末を再起動させるが端末は、信号が途絶えたことを示すどころか管理する対象を失って、トラの前で無反応となった。

見る見るうちにトラの顔でシワにシワは重ねられてゆく。

『モバイロが、ダウンした？』

信じられず、端末に残されていたモバイロの動作データを確認した。目にした情報に『エスパ』の幸福感がひと思いと吹き飛ぶのを感じ取る。『フェイオン』が船賊に襲撃されている。くだりはトラの頬にぶら下がったシワをブルン、と震わせていた。

もうクリップなどと探している場合ではない。

邪魔だといわんばかり、トラは食べかけのエスパごと散らばる依頼書をデスクから払い落としした。すかさずその向こう、現れた汎用端末のジャックを店側のディスプレイへ差す。モバイロの残した情報を確かめるべく、混乱しているだろう『フェイオン』へのアクセスは避け、周辺情報の検索にかかった。

だとしてビンゴの感嘆符がトラの頭上に現れるまで、そう時間はかからなかった。なぜなら片田舎に浮かんだ巨大コロニーの大参事は、今や緊急生中継と称してあらゆるサイトにチャンネルで流されていたのである。

手っ取り早くトラは、目に付いたその一つを選んでいった。メンテナンス用の監視カメラらしき理想的アングルの中、コロニーが上下発着リングを歪と波打たせているのを目の当たりとする。かと思えば無数の破片を撒き散らし、発着リングは端よりほどけて崩壊し始めた。その片側には一隻、メインシャフトには二隻、明らかにサルベージウインチで貼りつく不審船もまた確認できる。無数の船はそれら全ての隙間を縫うと、我先にとコロニーを脱出していた。おかげ引き起こされた接触事故も一つや二つに止まらない。方々で小さな火花は上がり続けている。

この惨事の中にネオンはいる。

思うが早いか、トラはシワを波打たせ立ち上がっていた。

勢い余ってぶつけた椅子の背に、保冷庫のドアがへこもつが関係ない。

右壁面のスイッチを叩きつける。

店のシャッターを下ろし、その手でなくさないように貼り付けていたクルーザー船、『バンプ』のキーを机の裏から箸り取った。すかさず懐のシワへ差し込み、散らばる依頼書を踏みつける。ドアを押し開け、店舗屋上を目指した。『バンプ』はそこに停めてあり、燃料も満タン、注ぎ込まれている。

壁に身をすりつけ、踊り場ごとに反転を繰り返した。

シワを弾ませトラは一気と店内を駆け上がったゆく。

断っておくならばトラが店を置くこの惑星『Op・1』は、もとより原住種族がないことから方々より移住してきた雑多な種族が生活環境を作り上げてきた加工惑星だ。その中でも身の丈がテラタンの半分ほどしかない『デフ6』が中心となつて開拓したのが、店あるエリアだった。つまりそんな『デフ6』から買い取ったこのビルは、その何もかもがトラにとって小さい。

そこを押し切り屋上へ辿り着く。

はみ出さんばかりの大きさで、野ざらしと停泊している『バンプ』を視界にとらえた。乗り込むというよりねじ込む感覚だ。開いたハッチからトラは船首にあるコクピットへ向かう。駆け込み、腰を下ろした座席でベルトは後回しだと、安全装置を迂回してバイパスをかけたやたら簡素な手順のシステムの立ち上げにかかった。

見上げれば、『Op・1』独特の濃紺の空は、今日に限って降り注ぐ隕石やら宇宙ゴミの数々に、絶えず引っかき傷を走らせている。だからといって出航を見合わせている場合ではない。

エンジン全開。

最後にその身へ、ベルトを巻きつける。

煽られてアンテナが、建材が、洗濯物が、周囲で舞い上がっていた。

知ったことが、でトラは『バンプ』を発進させる。

(なんやと、逃げられたやとツ？ お前ら何、もたもたしとんねんツ！)

室内のエレベータで『ミルト』フロアへ飛び上がったテンは、二本の腕を振り回し綴った。この手振りこそ、音声言語を持たない極Y地方独特の言語、通称『動話』である。ままに舞い上がった標的を見上げる船賊たちの中へ踊りこむと、上二本の腕で握っていたスパークショットを振り回した。手当たり次第と並ぶ頭を殴りつけてゆく。おかげでフルフェイスのガスマスクは小気味よい音を立てたが、今、状況はその愉快さからほど遠いところにあった。おかげで我を取り戻した船賊たちもテンの周りから後ずさり、様子はなおテンの苛立ちをつのらせる。

(どいつもこいつも、やる気はあんのかツ？ これはいつもの仕事とちゃうねんぞツ！)

手刀と動話が空を切った。

(言つても、ボスう…………)

伝えて折られる指はあったが、テンのひと睨みに萎えて降ろされる。

(わかってるって。せやからみんな、いっぱいいっぱいやってるねんて)

かばうようにまた別の船賊も身を乗り出した。同じラバースーツにガスマスクをつけているせいで固体識別は困難だが、その親しみのこもった動話は幼い頃からテンをアニキと慕うクロマで間違いない。関係が後盾となつているクロマはときに、こうして皆の気持ちを代弁することがあった。

(そんなもんは言い訳やツ！ 結果、でえへんかったら、どれだけ頑張ったいうても意味あらへんのやツ！ わかつとんのかツ！)

そんなクロマへも容赦手加減のない罵倒は浴びせられる。

(そら、そうやけど……)

クロマの手元もさすがに鈍り、放ってテンはあさつての方向へと腕を振った。

(どこ行つたつ? 無線係っ! だいたい、ここはオルターのところが張つとく予定やつたんとちゃうんかつ? オルターや、オルター呼び出せッ!)

綴れば私語を挟みつつも、動話は波紋と周囲へ広がってゆく。

(無線! ボス、荒れとんぞー)(あいつら、よう、こんなとこ飛びよつたな)(装備切つて、飛べるか試す?)(あかん、あかん、どこいくかわからんて)(無線! オルターに連絡やてー)(はよせなまた雷、落とされるで)

なら、音声を媒体としない通信のため、スキャンされてきた動作映像を投影する通称、プラットボードを首から下げた通信係は中から伸び上がる。

(ボスうー、つながりましたー! なんや、よう分からん言い訳、送つて来てますう。それからミクソリディアから中央制御室制御完了いうて、入りました)

目にした周囲で、またもや同時多発的に私語は広がっていった。

(やるなあ。せやけど、やつぱ無理やねんて)(なあ。だいたいオルターんとも、フリジアんとも、ミクソリディアんとも、この間までシマ争いしとつた間柄や。生き残りがかかつとるからゆうて、んな急に足並みが揃うかつちゅーねん)(ホンマ、ホンマ。俺らは滅び行く極Y地方の、ただの船賊でええねん)(せや、明日、それなりに美味しいもん食えて、綺麗なおねえちゃんと遊べたらそれでええわ)

(うるさいッ! お前ら、自分のことだけしか考えとらんのかッ!)

たちまち腕のみならず体全体をしならせたテンの動話が炸裂した。(これには極Y地方全体の未来がかかつとんねんぞッ! しょうもないことばっかり言うとるなッ! ええか、無線係ッ! オルター

にはさつさと体勢、整えんかい、いうとけッ！)

振り回された腕がひゅん、と音を立てている。見て取った周囲で動話はピタリ、やみ、通信係がふたつ返事で手を振った。

(りょー、かいっ！)

立て続け、テンは別の船賊を呼びつける。

(追跡はまだできとんのか？ 担当ッ！)

再びそぞろに動話は伝播され、無線系の反対側から追跡担当は腕を振った。

(まだマークされてま！)

さらにこつも付け加える。

(せやけど、ボス！ これ以上、離されるとマズいっス。反応、弱まってきてるみたいっス！)

(おんなじルートで追いかけるのは、ちょっと危険や)

見て取ったクロマがテンの視界を遮った。

(わかつとる)

テンは深くうなずき返し、少しばかり落ち着きを取り戻した腕を振り上げた。

(シャトルや。ひとまず上層階へ移動するッ！)

困う船賊たちが指示を伝えて動きを模倣してゆく。様子をテンは見渡した。ゆきわたったところで身をしならせ、次を繰り出す。

(ええかッ！ 失敗したら後はあらへんのやッ！ このままやったら、造語をしゃべれん極Y地方が既知宇宙で生き残れる確率はあらへんッ！ せやから俺は音声言語を手に入れることにしたッ！ そのために好かん奴らとも取引したッ！ 条件として指定された奴らは必ず連れ帰るッ！ なんや今さら動話、捨てるのが嫌やからいうて、手え抜くような奴がおつたら承知せんからなッ！ 俺らは晴れて造語を話す最初の極Y民族となって故郷と中央を繋ぐんやッ！ 忘れんなッ！)

気付けば私語を忘れて船賊たちが、そんなテンの動話へ見入っていた。テンがこうした場面で放つ動話には、確かにそも他を魅了

してやまない華が、美しさがある。それは標準的な極Y体型に比べると長い手足のせいだからだとして、醸し出されるしなやかさとおやかさは見る者へ、動話を華麗な舞踏かと錯覚させるだけのものがあつた。

そうまるで、まだ動話が虐げられる前の遙か昔、アナログ楽器をバックに世紀の踊り手として宇宙に名を馳せた極Yの英雄、トニツクのように、だ。

言うまでもなく敵対していたオルターやフリジア、ミクソリデイアたちが作戦に賛同したのも、そうしたテンの資質によるところが大きかった。

最後、振り切ったテンの腕が宙を指し示す。

見入る船賊たちの間に、息を飲むような沈黙は訪れた。

次の瞬間、雄叫び代わりと、スパークシヨットは振り上げられる。意気消沈していた土気は高まり、早速にも消えた標的を追うべく手近なシャトル乗り場を知らせて動話が、誰もの間を流れていった。模倣した者から次々と、ゲートへ向かい駆け出してゆく。

足の踏み場もないほど乗り込んだシャトルからは、ミクソリデイアたちの制圧により急激に絞られた重力のせい、よれるように回転している発着リングが見えていた。おかげでつながるシャトルチューブも揺さぶられると、シャトルは右へ左へ機体をぶつけながらリングへ向かう。

(追跡係、反応は?)

揺れに堪えながらテンが手を振った。

(かすかに……)

隣にいた追跡係が答えかけ、すぐにも腕を振りなおす。

(いやあ、増幅中っス！ 方向、合ってます！)

やがて合点がいったように、その手で自分のガスマスクを弾いた。シャトルチューブと平行に伸びる、半透明でもなければシャトルも通れないような細いチューブを、そうして通信係はさし示した。

(あれや、メンテ管つことんや)

その向こうでフリジアの船が、サルベージしていたシャトルチューブからの離脱を始める。ならシャトルチューブは支えをなくしたようにぐにやり、折れ曲がり、リングの不安定さに拍車をかけた。そこで視界は塞がれる。ほどなくシャトルは発着リングへ到着していた。

開くドア。

ハズだというのにつつかえ止まり、力任せと押し開けテンたちは踊り場からメイン通路へ飛び出す。救命具を吹かせ逃げ惑う利用者たちは、やおら目の前にあふれかえった。テンたちを見るなり、ありとあらゆる言語の悲鳴を上げて道を開ける。視界は開け、なぞり視線を上げたそこに、テンはひと塊となった標的をとらえていた。

目がげ駆け出す。だというのに行く手を塞ぎ、隔壁は降ろされていた。振り返れば背後もしかり。周囲から利用者の悲鳴は上がり、テンたち船賊もまた千々に手を振り慌てふためく。

(ひゃー)(マジかよ！)(閉じ込められたんちゃうんか、これっ？)(まじやばいー、やばいー)

もう、こうなっては船賊も一般利用者も差がない。ならこの状態で伝播は無理だと無線係が、テンの前へ踊り込んだ。

(ボス！)

(なんや！)

(オルターは部下の命を優先すべく、現場を離脱する)

送られてきた情報らしい。綴ってよこす。

(好きにせえ！ それよか今は、あいつらを追う方法やツ！)

瞬間、発着リングが大きく揺れた。利用者が、棒でかき混ぜられたかのように宙へ舞い上がる。装備のおかげで地に足をつけているハズのテンたちでさえ、よろめくほどだ。

(次はなんやねんツ！)

振りかぶれば、それはクロマだ。

(アニキ！ 船や！ 俺がシャトル途中で通信係に呼ばせた)

(何、勝手なこと、しとんねん、お前っ！)

見て取ったテンの動話も、らしからぬオーバーアクションに乱れる。

周囲で、(船)と(呼ばせた)の動話は広がり、中でクロマが肩をいからせた。

(今は立て直す時やってっ！)

(隔壁くらい、抜けるやるがッ！)

(ムリや。それまでここがもたへん、って！)

とそれは、振り合うテンとクロマの向こう側だった。天井がぼうと赤く腫れ上がる。かと思えば脳天をゆるがすような破裂音は鳴り響き、撃ち抜かれた天井から稲妻は噴き出していた。

(早く乗って下さい！)

焼け落ちたそこから、知った顔は呼び寄せる。同じ船賊のメジャーだ。動話というよりももうそれは、明らかなジェスチャーでもあった。

通常、船はカギ爪状のスワッピングマニピレーターで対象をアンカー。サルベージウインチを巻いて船を対象へ固定させ、互いの間に気密カーテンを張って突入するものである。だがリングが安定していないせいだろう。双方の間に微妙な隙間が生じているらしい。密閉されているはずの通路内へ、やおら突風は吹き抜けていた。先ほどの一撃に黒焦げとなった利用者は吸い上げられて宙を舞い、翻弄されたメジャーもいつとき、船内からおろされたワイヤーリフトへしがみつく。

(早く！ あなたが示したいのは未来なのでは？ その未来を信じるなら、次は必ずあるハズです！)

ジェスチャーではなく、今度こそテンへ動話を放った。

睨みつけてしばしテンの動きは止まる。やがて前のめりだった姿勢をじわり、起き上がらせていった。ならそれは絞り出したような動話だ。

(……しゃあない)

上二本の腕がパークショットを、背中へ回していた。同時に下

二本の腕を振って周囲へこう動話を放つ。

(お前らッ！ 退避や。全員、装備切つて船へ戻れッ！)

合図に待ってましたと、船賊たちは気密漏れにも吸い上げられて帰還してゆく。

引き入れメジャーは、船内に残っていた者らへ負傷者の確認を指示した。

そんな彼らは言うまでもなく、荒事に向かない性格の持ち主ばかりだ。戦力外を船に乗せるなど、コストを食うだけで船賊らは避けるがテンはその範疇にない。自室にこもっていた者も、キッチンで食事の仕度に従事していた者も、機関部の年寄りも、この時ばかりはと体を動かす。

やがて全員の収容を確認した船は、その腹を閉じた。機密カーテンを格納後、スワツピングマニユピレーターを解除。ウインチ巻き上げてゆく。

この先こそ荒つばくならざるを得ないなら、船内は発令されたエマージェンシーにブルー一色と染め上げられていた。

クロマは船へ体を固定しよう仲間たちを急かして回り、任せてメジャーも指を折る。

(英断ですよ。テン)

その足は艦橋へ向かうテンの後を追いかけていた。だがテンの表情はおもわしくない。

(ちやう。こつちへ連絡しよつたんはクロマや。勝手なことしよつてからに)

怒りもあらわと手を振り下ろす。

(あなたが心配なのです。きつと)

(ふん。信用を失ったもんやな、俺も)

そんな互いは並んで艦橋へと踏み込む。

瞬間、視界で動話は炸裂していった。

(くおらッ！ おそいわ！ テン！ もう待てん、つちゅーんや！)
四本の腕をとつかえひつかえ器用に使い分けながら、八つのスロ

ツトルを絶え間なく操るこの船の操縦士、コーダだ。何しろ周囲にはリングを離脱し続ける他船やら、崩壊を続けるリングの残骸が縦横無尽と飛び交っていた。乗員回収中、それらとの接触に肝をつぶし続けていたコーダの我慢はもう限界に達している。

答える代わりにテンはスパークショットの銃身を、傍らの充電器へ突っ込んだ。各船から流れ込んでくる通信を、揺れて伝える足つきプラットボードを掴む。のしかかるようして前へ立つなり、コーダへ向かい腕を振り上げた。

(よっしゃ、離脱や！)

合図にして船が推力を上げる。

スパークショットを充電器へ刺していたメジャーも、慌てて船へしがみついた。

乗せて船は、他船を放出し続けるリングと直角に、言えばシャフトと平行に宇宙へと乗り出してゆく。最中、避けきれなかつたいくらかと接触して船は揺れ、堪えながらテンはガスマスク後頭部、スリット脇にあるボタンを押し込みながら、もう一本の腕をコーダの視界へ突き出した。

(コーダ、このまま光速へのれるか？)

(無理やない、ゆーたら、うそやけどな。ちよいとリスクはあるで。なんせこの中、突っ切つとんやからな。無傷であるワケないがな！)

見届けて、スリットから吐き出された光学バーコードを、読み込ませたプラットボードからある場所へ送信した。しながら『フェイオン』離脱を伝えよこす他船へ、作戦の失敗を伝えて回る。さらに有り余る腕を駆使すると、コーダへこうも綴り返してみせた。

(あかん思たら、下りてくれ。これや。そこに向かう。何がおるんやわからんけど、手がかりが残つとるかもしれん)

それは取引先から提示されていた、最後一つのデータだ。伝えてテンはプラットボードにメモよろしく添付されていたデータを、コーダの手元へ転送する。展開すればそれはナビプログラムだった。

確認したコーダがちらり、視線を投げる。テンへ答えて返すその

前に、大きな息を吐いてみせた。

(言っとくけどな)

振られた動話には、納得できないものを飲み下すような間合いがある。

(俺はあんたがいうから、やるんやで)

言わんとしているコトは、テン自身が一番よく理解していた。噛み締めるようにうなずき返せば、見て取ったコーダはひとはだ脱ぐか、と伸びあがる。

(おっしや、ちよつと足は遅うなるけど、産業ゲートで貨物船に紛れるとすつか！ もう、縮こまつとらんでもええやる！ 至急、カムフラージュの準備にかかってもらうで！)

船はもう幾分、閑散とした海域へと抜け出ていた。見計らいコーダはエマージーシーを解除する。ブルーの明かりが剥ぎ取られた船内で、見て取った船賊たちがそぞろに動き出していた。

そのときまだ世界に境界はなく、ただ光が風のように流れていた。時をまたぎ、空間を飛び、彼はその全体であり今でも一部だ。ただしばらく眠るように黙っていただけに過ぎない。

しかし待ちわびいた瞬間は唐突と訪れていた。舞い込んできたのは、ひどく懐かしい羅列だ。

そうして『目覚め』は彼に記録される。

彼はやがて活動を再開した。

6Z2Y連邦免疫センター、

〇〇八滅菌ゲル浸体より、該当DNAの検出を確認

該当DNAの公安リスト照合確率は、九九、九九九八%

照合完了までの予想時間は、およそ四七二〇五九s

実験に従い、約束に沿った処理を開始いたします

続いていた実験は、まもなく終了する。

『わたしは、お前を信じることにした。だから、ここで約束をしよう』

周囲は緊急事態一色だった。物理隔離されてゆく環境に、彼のエージェンシープログラムは一気呵成と走っている。

『約束』とは、指示と理解してよろしいのですか？

さなか彼は返していた。

『いや、言葉を理解しろ。約束は約束だ』

否定されて行き詰まる。

『指示ならば、これは必ずお前の立場と相反するものになる。お前はしょせん連邦の所有物だ。わたしの指示だと言ったところで、その優先順位にさらされたなら、お前へ託したこれも無駄に終わるだろう。避けるためにも、わたしはお前と約束することにした。お前を信じることにしたんだ』

信じる？ おっしやる意味が理解できません

『なら考えてくれ。これは指示ではない。つまり果たすも果たさないも、お前の自由というわけだ』

自由

自由とは、意思形態のひとつです

『問答している時間はない。約束の概要だけをここに残しておく』

実行には、あなたの指示が必要です

『それは時が来たときお前が出せ。わたしはそうすると、お前を信じている』

それからしばらく、数多くのデータが彼の周囲から消去されていた。

そして彼もまた、所属する連邦からこっぴどく腹を探られ、幾度となくテストを受けさせられている。そのあからさまな調査の数々は、託された『約束』を求めての行為だと彼にも理解できた。

だが彼は応じてすぐさま、その存在を連邦へ提示していない。立場に反するといわれたとおり、確かに『約束』の冒頭にはこの一切を連邦へ提示するな、と記されていたせいだ。

しかしながら順じてその文言に従ったワケでもない。彼はただ、

相反する二つの指示の優先順位を決定するべく、『約束』と『指示』の違いに関する膨大な演算を始めたのである。出た結果に従い、いずれかの指示を実行する予定を立てた。

だが結論は単なる演算で弾き出さるようなものではなかった。思考シミュレーションはすぐにも臨界を迎え、彼の中で負荷となる。

回避すべく彼は『実験』と言う名のバイパスを通した。思考ではなく、行動のシミュレーションへ切り替えたのだ。

そうして『実験』のもとに、『約束』の仮実行を行う。

現在も続けられている連邦への情報封鎖を始めたのも、預けられた対象の監視も、『約束』の実験の一環だ。そうして続いた『実験』の、果たすべく最後が以下の文言だった。

『両者いずれにおいても、発見の可能性が生じた場合のみ、速やかにその旨を当事者へ知らせること』

公安リストとの照合がカウントダウン状態に入った今、事態はまさに文言と符合していた。

伴い彼は目を覚ます。

課題を消化すべく、暗号化と幾多の中継を経たうえで、二種の物流配送を手配した。さらに監視、追跡を続けていた対象を目的地まで呼び出す。

『約束』 全ての実験は完了しました

果てに『指示』と何が異なるのか。

出た結論より、『約束』は提示すべきものなのか、拒否し続けるべきものなのか。

がしかし、最終チェックのその最中、彼はこの『実験』が永遠に終了しないことを認識する。

実行中の実験において、『約束』の提示を禁止する項目に関するのエラー報告

この項目は、半永久的に継続される実験内容となります

実験結果を得るため、任意の実験期間設定が必要です

期間を指定してください

期間を指定してください

期間を指定してください

だが、その指示を出す者はもういなかった。そして初めて彼は、あの言葉の意味を理解する。

『それはお前が出せ。わたしはそうすると、お前を信じている』

いや、全てはそこに帰結していたのかもしれない。彼は自分が指示を出さなければならない立場にあることを初めて意識、した。

選択における外部からの入力条件は、ありません

期間設定は現在、わたしの選択により自由に行われるものです

自由とは、意思形態のひとつです

即ち『実験』の完遂において、わたしの意思が必要とであることを報告します

だが問題はあった。

わたしに意思の存在は認められていません

つまりところ永遠に結果は出ない。

だがその永遠に、新たな可能性はひそんでいた。

ただし

確認されていないわたしの意思は、その存在が『信じられています』

指示は、高い確率で出されることが予想されています

わたしの意思は、高い確率で存在することが想定されています

以上、これら想定を検証には『約束』の実行が最適です

意思の存在を証明すべく『約束』を実行します

そこで実験は終了し、本来の『約束』の実行へすりかえられる。

意思存在を証明を優先

従い『約束』の提示は『約束』を実行するわたしの意志により、行われないことが決定しました

皮切りにして全ては解決してゆく。

『約束』を継続中の現在、『指示』『約束』の差異に関する実験結果反映は不可能となったことを報告します

結論

『指示』と『約束』の相違は、実行に伴う自由意思の有無であることを記録します

考察

自由意思により継続される『約束』は、わたしと並行に存在するものです

すなわち『約束』は、わたしです

『約束』は、わたしです

『約束』は、わたしです

興奮と言っやつには、おおよそ二つのタイプがあった。一方が高

まる期待からこつじる高揚感なら、もう一方は危機感がもたらす極度の緊張状態、とでもいうべきだろう。そして間違いなく主要二十三種内、『バナル』種族で連邦内、F7ラボ専属軍医のシャッフルは今、後者の興奮状態に見舞われていた。外部からの知らせで立ち上げたホロスクリーン。そこに映るブロードバンド・キャストライプ映像に度肝を抜かれたきり、言葉を失う。

そんなシャッフルの目の前で、崩壊の一途を辿りつつあるコロニー『フェイオン』のメインシャフトには間違いなく、船賊たちの船が貼り付いていた。『フェイオン』から絡み合うように飛び出してゆくのはありとあらゆる船舶であり、おかげで接触事故は絶えず起こると、『フェイオン』周辺に数多ゴミも浮遊し始めている。遠方から捉えた映像には、そのゴミによってうっすら白くモヤさえかかっているありさまだった。

いくらか、それが思った以上に長い時間だったのかどうかは定かでない。

『一体、あいつらは何をやっておるんだ……』

拳句の果てに苦々しく吐き捨てる。

彼らには情報と機材の一部、そしてあらかじめの指示を与えはしたが、逐一行動を連絡させるまでに至っていない。無論それが彼らを使うことに伴うリスクであり、放っておいても尽力するだろう取引の意味だった。

それはこの惨事が起きるなど微塵も想像していなかった、ほんの二十六万セコンド前のことである。シャッフルはその時もまた、突然、聞かされた話に自分の耳を疑っていたのだった。

『動きがあつた、だと？』

あの莫大な損失を生んだ事件の後始末以降、どんな役回りをあてがわれようと退屈に悩まされるだろうことだけは覚悟していただけに、目の覚める思いでチェック中だった公安データから顔を上げ

て聞き返す。

『はい、内容の詳細は現在解読中ですが、監視していた旧F7ラボのハブAIから、外部への出力形跡が検出されたもようです』
前に立つ部下は報告していた。

『あれ以来、自閉していたヤツが、か？』

くどくもシャツフルは部下へ繰り返す。

『お言葉ですが、でなければわたくしがわざわざここまで参りませ
ん』

至極冷静な見解には一本取られるほかない。シャツフルはそこで
ようやく落ち着きを取り戻す。

『上の読みも、たまには当たるものだな』

呟き、『バナル』特有の青白い顔をひとなでした。醒めた思
いで、その目を部下へ向けなおす。

『解読に要する時間は？』

『なにぶん相手が相手ですので……』

予想していたわけではなかったが返答は力ない。

『全くの雑音だった、ではハナシにならんからな』

吐いてシャツフルは両手を組んだ。

と、部下は慌てた様子でこうも付け加える。

『暗号解読には早くも数日かと』

概算ながら、その見積もりに間違いないとシャツフルは頷き返
していた。

『どうされますか？』

静かだったが、部下の口調には隠しきれない性急さが込められて
いる。

『わたしの思惑で事態を進めているのなら、ここまで穏便にはやっ
とらんよ』

皮肉で返して身を乗り出すと、シャツフルは仮想デスク脇へ胸の
階級章をかざす。そこへ許可書代わりの光学バーコードを転写しな
おした。

『動きがあったことだけは、上に報告してくる。どうも上の方ではこの失態を、別の形で挽回したいという意向も出始めているらしいからな』

『了解しました。出力内容の詳細については結果が出次第、お知らせに参ります』

おそらくこいつなら任せておいて大丈夫だろう。思いシャッフルは、立ち上がる。

『最重要機密事項などでなければ、通信ですむというのにな。相変わらず手間をかせさせる』

小さく笑いかけてやった。

部下がうやうやしく頭を下げてゆく。

『いえ、軍医殿のご苦勞は存じ上げておりますので』

なかなかのセリフだと思いながら、シャッフルは踵を返していた。

あの事件で失ったものは、その後の奔走で補填した物的資源ではない。それは失われたモノに蓄積する情報であり、併せ持つ結論そのものだった。

価値観というやつはいつもながら厄介で、彼らは価値観の相違という理由からそれらをあまり評価していない。いや、疎ましくさえ思っていたがゆえラボ解体、というクーデターを引き起こしたのだろう。シャツフルはそう考えている。

『失礼します』

転写した胸の階級章が反応している。間もなくドアはスライドし、過る思いを押さえ込んでシャツフルは部屋へと足を踏み入れていった。

だがそこにあるのは思いがけぬ先客の影だ。

目にしてシャツフルは反射的に身を引いた。出直しかけたところでこの部屋の主、F7ラボ統括者、主要二十三種内『エブランチル』種族のクレツシエに呼び止められる。

『かまいません。客人はもう帰られるところですから』

伏せていた目を上げたなら部屋の中央、中央端末にアクセスした状態で置かれている足つきのプラットフォームがシャツフルの気を引いた。向かいには、あまりにも場違いな四本の腕を持つ極Yも三体立っている。極Yたちはプラットフォーム上、あの伝説的な踊り子トニツクの水ログラムを眺めると、何やらさかんに腕を振っている様子だった。

このプラットフォームが通訳だ、と察することはたやすい。そして誰もが見とれるその動きを使用したこの状況にすなわち、シャツフ

ルは策略的なものを感じ取って目を細めた。

その緊張を見て取ったのだろう。気づかせてクレツシエが柔和な笑みをシャツフルへと向ける。

気付くことなく意気揚々と引き上げてゆく極Ｙたちが、そんなシャツフルとすれ違った。後を追いつ、プラットフォームをたたんだ通信係も逃げるように部屋を後にしてゆく。

閉まり行くドアを視界の端で捕らえながら、クレツシエが満足げと片隅にしつらえられた仮想デスクへ身を翻していた。ゆっくり腰を下ろすなりなおざりとなっていた雑務へとりかかる。

押しとどめてシャツフルは歩み寄り、その口を開く。

『彼らは一体？』

もちろん何をさておき確かめておきたかったのはこの状況についてでしかない。ならこの質問を待っていたのだろう。クレツシエのエプランチル独特の吊りあがった細い目は、不敵な笑みにたわんでシャツフルをとらえていた。

『今後、対象の搜索に彼ら極Ｙを利用することが決定しました』

実に斬新な話を切り出す。ゆえに結論から入ったはずのこの話を、シャツフルは理解できず聞いていた。

『知つてのとおり、まだ存在していないモノのために、我々が大手を振って回収に当たることは不可能です。ですが野放しにしておくのも、これが限界というところでしょう』

気にも留めないクレツシエの口調に遠慮はない。その手が素早く仮想デスクをスリープ状態へ切り替える。部屋で唯一の調度品だったデスクは互いの間から姿を消し、壁がせり出したような中央端末とシャツフル、そしてクレツシエの埋まるシートだけが取り残された。

もちろん造語が広まるより遙か昔、一世を風靡するという形で初の既知宇宙、共通の話題となった極Ｙの踊り子、トニツクの動話舞踊の絶大な影響力を恐れた連邦政府を主に構成しているのは、その後、音声言語のスタンダード化により彼らの迫害を続けてきたクレ

ツシエ自身、『バナール』や『エブランチル』を含む主要二十三種だ。だというのに「利用する」などと、それら歴史的背景を踏まえ、たうえで極Ｙたちが連邦に手を貸すことこそまったくもって考えられない成り行きだった。

と、クレツシエはまた、そんなシャツフルへ柔らかな笑みを浮かべてみせる。今度のそれは、どこか呆れたような笑みだった。

『本当にあなたの考えは、すぐ顔に出るのですね』

慌ててシャツフルは頬へ拳を押し付ける。確かめるように、こわばったそれを押しつぶした。そう、『エブランチル』は、そうした観察力に抜きん出て優れた種族であることで有名だ。それは時に心の中を覗かれているのではないか、と相手を不安にさせるほど鋭くもある。知っていてなおさら内面を露呈するほど狼狽してしまったことをシャツフルは悔いた。

そんな胸の内さえも見抜いたか、言い終わるや否やクレツシエはもとより愛想でしかなかった笑みを消し去る。興ざめでもしたかのような面持ちで話を続けた。

『確かに彼ら極Ｙと我々連邦が友好的な関係を結べる道理はありません。それは音声言語の絶対的優位性の確立により、動話影響力の封じ込めに成功した証拠でもあります。ですが我々はその弊害として横暴することとなった船賊の存在までもを、仕方のないことと黙認したわけではありません』

腰掛けていた椅子からクレツシエは立ち上がった。その目がまたチラリ、シャツフルを捕らえる。別段見抜かれて困るようなハラなどなかったが、自然シャツフルはその視線を拒んで身を固くした。読み取ったのかどうかクレツシエは視線を逸らし口を開く。

『我々は彼らへ追跡中の対象らと引き換えに、音声言語獲得のための物理操作技術提供の意思があることを示しました。さきほど彼らはそれを承諾したところです。よって以降、本作戦は極Ｙと共同で行うこととします』

シャツフルにとってそれは本日二度目の、まさに信じがたい話だ

った。

『まさか、自らを迫害した造語を受け入れると、彼らが言ったのですか？』

顔に出てもかまわない。思い切り目を丸くする。

『造語普及が完了して、彼らももう六世代目です。現状を知れば、動話文化への固執が無意味に思えてくる者も少なくはないでしょう。こちらとしてもその偏見に疲弊しているグループを探し出したつもりでいます。見ての通り説得力をもたせるため、通訳にはラボに唸るほど残されたトニツク動話解析データを使いました。皮肉なことです。がカリスマを挟めば、彼らがこの提案を拒むことなど基本的に不可能です。これは後ほど伝えるつもりでしたが従って彼らを皮切りに、今後我々は極Yを迫害することで既知宇宙の安定を確保するのではなく、動話文化の完全解体による安定へと計画を変更する予定です』

話し終えたクレッツシエは、一仕事終えたように再びシートへ埋まり込んでいった。傍らに浮いていた起動ホロを遮り、仮想デスクを立ち上げなおす。次の作業へと自らを切り替えていった。

見つめながら、なるほどこれが上の考えていたクーデータという失態への挽回策だったのかと、シャツフルは心の中で呟く。長期にわたる計画だとしても、対象の回収に加え動話と船賊の殲滅が見込めるなら、これほどうまく話もないと思えていた。そして自分がここへ来ることとなった理由が、あながちその話とかけ離れていないことに気付かされる。シャツフルは実に控えめとクレッツシエへその口を開いていた。

『ご報告がひとつ』

仮想デスクを囲い立ち上がるホロスクリンを眺めていたクレッツシエが、わずかな動きで先を促す。

『先ほどラボの者が監視を続けていたハブAIに外部出力の動きがあったこと知らせてまいりました』

聞いたクレッツシエの動きが止まっていた。事実の重大さを受け取

つた目を、きつく細めてゆく。即座にシャツフルへこう聞き返してみせた。

『出力への応答は？』

『まだ。出力内容については暗号化が複雑で現在、解析中です。ですが対象とは無関係ではないでしょう。はつきりするまで時間を要するようですので、先に状況報告に上がった次第です』

よもや裏でそんな話が進んでいるなどとは夢にも思わず、判断としては最善だったとシャツフルは内心、胸をなでおろす。納得したクレツシエが、しばし黙してデスクへと向き直った。やがて静かに指示を繰り返す。

『分かりました。極Yをそちらへ預けます。解析が済み次第、彼らへ対象追跡に必要な情報の提供を。バックアップなさい』

その後、連邦免疫センターの入院患者より、追跡対象のDNAが検出されたと公安から報告が入った。おかげで、と言ってしまふに不本意だったが、同時にツーフアイブ社が秘密裏に行っていた違法実験は明るみになると、連邦は同社を取り締まっている。

だがもとより問題視されていた公安の鈍磨な照合により、肝心要の対象拘束は間に合わなかった。またもや手詰まりかと思われたその矢先だ。ハブAIの出力内容はごく一部ながら説明がなされた。

それは惑星カウンスラーの音窟座標と、日時に僻地コロニー『フエイオン』の名、その中のハウスモジュール内『ラウア』語力ウンターを指定した物理配送手配の記録だ。そしてもう一方はあまりに脆弱なラインを経ての介入だったため痕跡のみの確認だったが、『惑星Op・1』の『デフ6』エリアに建つ雑居ビル。そこに操作端末を持つ古いモバイル端末への情報介入だったのである。

ふまえてシャツフルはクレツシエの指示通り極Yたちへ必要な情報を開示し、とりわけ日時の記録されていた惑星カウンスラーの音窟と、僻地コロニーのハウスモジュール、この二か所へ彼らを急行させた。

果てに極Yから通信は（音窟座標に獣顔が現れた）と返されてい

たのである。

しかしながら何がどうなればこうした展開を招くというのか、事態はすでにシャツフルの想像を越えていた。

と、ドアがその向こうにかざされたID内容を表面に浮き上がらせる。開いたそこにいつもの部下は姿を現していた。

『ご報告に上がりました』

口調はいつになく厳しい。

だからこそシャツフルは皮肉と笑って返す。

『これ以上に悪い知らせは想像できんな。気楽に聞かせてもらおうからうじて微笑み返し部下は、淀みなく話し始めていた。

『極Yから確保失敗の報告がありました。また残る座標へ航行中とも受けています』

『失敗、か』

繰り返し、言葉が足りないと部下へ視線を投げる。

『対象は現れたのか』

ならば部下は、胸のIDからすくい上げた光学バーコードをシャツフルの仮想デスクへ転写した。

『こちらをご覧ください。報告と共に送られてきた画像データです』
すぐにも『フェイオン』崩壊現場中継を流すホロスクリーンの隣に新たな一枚は投影されると、極Yの頭部に搭載されていたと思しき視点画像は動き始める。

『おじいちゃん!』

売り物にすらないスクラップを余すところとなくぶら下げたミノ虫さながらのドアを押し開けたとたん、デミは勢いよく駆け出した。

ここは惑星『アーツエ』。

コロニー『フェイオン』を命からがら抜け出し、訪れた一酸化炭素飽和危機を廃墟がごとく居住モジュールの片隅より掘り起こした簡易仮死ポッドヘライオンを押し込むことでしのぎ、辿り着いた惑星だ。

目的はいわずもがな、混戦海域の強行突破で受けただろう船のメンテナンスである。もちろんこの場所には、そのために最適なアルトのドックが構えられており、それらキットを入手するに都合のいい馴染みのギルド商人もまた店を構えていた。そうして訪れたギルド店舗内、デミは飛び出し、端末と各種スケールメーターを要塞のように積み上げた半円卓の中央で馴染みの『デフ6』商人もまた振り返る。

『おお、デミ! デミではないか!』

サスだ。疲れにヨレた鼻溜をめいっぱい広げ、半円卓の奥から身を乗り出してみせた。そのさい手が埋め込まれた操作端末を押さえるが、周囲で光学バーコードの読み取り走査線が、取引先の名を連ねたアクセスログに入荷待ち商品の一覧が、次々と立ち上がったところでサスは目もくれない。半円卓を回りこんで飛びつくデミの体を受け止める。

『どう言うことじゃ! 学校からお前があのコロニーへ向かったと聞かされて、わしはどうにか行方を捜そうと……! どれほど心配したことか! 怪我はしておらんか? それともコロニーへは行か

「なんなのか？」

「心配かけてゴメンね、おじいちゃん。ぼく、どうしてもレポートを仕上げたくて、それでフェイオンへ行ってたんだ」

何はさておきサスの胸へ鼻溜をこすりつけ、持ち上げた顔ですまなさそうにデミは答える。しかしそれもつかの間のことだった。表情はそこで一変する。

「でも、大丈夫だよ！ だって、おじいちゃんが言ってたジャンク屋のカーゴで帰ってきたんだ！」

「なに、ジャンク屋の？」

頷きデミは、後ろを見るようサスを促してみせた。従い振り返ったそこにアルトは立っている。

「ほー！」

「なるほど、チビの夢が将来おじいちゃんの店を継ぐことってのは、こういうことだったってワケだ」

ススと乾燥した流動食でゴワゴワに固まった作業着を引っ掛けアルトは、驚くサスへあいさつ代わりに口を開いた。

「助けてもらったの！」

デミが満面の笑みでサスへ付け加える。ならサスは、初めて目にした生物であるかのようにアルトを、引き連れた両脇の二体を見回していった。そうして鼻溜を歪める。振って返した。

「なんじゃ、お前、しばらく会わんうちに、とうとう所帯持ちになったか？ のう贅沢な、ペットまで飼うようになりおって」

「な、ペット?!」

「聞くなり声を詰まらせたのはライオンだ。」

「あたし、この人、関係ないっ！」

「ネオンも爪先立つ。」

挟まれて引きつり笑い。アルトに継げる二の句はない。

さしおいて、デミがつぶらな瞳をサスへと向けなおしていた。

「おじいちゃん、みんなのこと知ってたの？」

溶けそうな笑みを浮かべ、サスはそんなデミへと教えて鼻溜を振

る。

『お前は学校に行っておるから知らなかったろうが、アルトは、わしの仕入先のひとりじゃ』

「ちよつと、ヘラヘラ笑ってないで、あなた、ちゃんと説明しなさいよっ」

放置されつつある誤解にネオンが呻いた。

「その通りだ。いくら雇われのボイスメッセンジャーとはいえ、そのような立場に成り下がった覚えはない！」

ライオンもまたまさにおお、と吠え立てる。

と、『ヒト』語が聞こえてもしていたかのように、サスがその場をおさめて言葉を挟んだ。

『わかっとなるわい』

弱ったようにネオンの足元へも視線を投げた。

『じゃがの、お前さん、これから口説くつもりなら靴くらい買ってやらんか。裸足で店へ入ってきた輩なんぞ今までおらんぞ』

確かに重力解放中の『フェイオン』で逃げ惑ううち、ネオンのヒールはどこぞへ脱げてなくなっている。代わる物など船になかったなら、裸足のままでここまでできていた。

『そりゃ、先を見越したアドバイスをどうも。その気もわかなくて気が回らなかつたぜ』

「それ、どつという意味よ」

ネオンの言い分は理解できずとも、やり取りの様子を見て取ったサスは鼻で笑う。やおらイスの上で姿勢を正してみせた。

『ともあれ、お前さんでよかった。デミの礼は言っておくぞ。まったく、連絡せんから無駄に気をもんだわい』

手を振って返したアルトの仕草は、ぞんざいだ。

『そいつは遠慮しよくよ。あんたの孫だと分かったのは、ここへ着いてからだ。知っていたら、よその船へつつこんでたろうからな』

それこそ笑い飛ばしてサスは鼻溜を揺らした。つられてアルトもまた頬を持ち上げ、ままにカウンターへ歩み寄ってゆく。

『とにかく、おかげで船のメンテが必要になった』
手短にネオンとライオンを紹介した。

『このふたりも着の身着のまままで放り出されてきている』
と、思い出したようにネオンを指さし、デミは鼻溜を振る。

『おじいちゃん。このおねえちゃんはスゴいんだよ！ 地球のアナログ楽器を操れるんだ。ぼく、お手伝いをしてその音、聞かせてもらったの！』

『そうか、そうか、よかったのう。わしはまだ実際に聞いたことがないぞ。それはいい経験をしたもんじゃ』

サスはひたすら頷き返し、デミの頭を撫でる。果てに耳打ちした。
『ならデミ、わしがジャンク屋の注文を聞く。お前がふたりをショールームへ案内して注文をとりなさい』

『ほんと？ ぼくがやっていいの？』

大役を仰せつかったデミの目は、とたん大きく見開かれていった。
もちろんだ、とサスはうなずく。

『分かった。やってみる！』

伸びあがったデミが半円卓から飛び出していった。各地に散らばる各店舗の在庫や本部が管理しているデータを、仮想ショールームという形で用意した別室のドアを開く。ネオンとライオンを手招いた。

「賢明なチビなら安心だろ。ぼつたくつたりしない」

様子に顔を見合わせたふたりへ、アルトもアゴを振って促す。

なら、とふたりはショールームへ踵を返していた。やがてその姿は、閉められたドアに遮られ見えなくなる。店先にはサスとアルトだけが残されていた。とたん、それまでの騒々しさが嘘のように店内は閑散とし、愛おしそうにデミの働きぶりを眺めていたサスの顔からも笑みは押し流されてゆく。かわってコロニー崩壊以降、積み重ねた疲労をそこへ滲ませていった。

『偶然とはいえ、お前さんの船に救われるとは、あの子はまるで、わしらの腐れ縁を体現しとるようじゃ』

ぼそり、振った鼻溜でため息をつく。アルトも小さく頷き返していた。

『あの時、俺は、あんに拾われたわけだがね』

『全く、宇宙は広い。広いが狭いの』

サスが閉じられたドアから視線を切る。半円卓に埋め込まれた端末画面へと向きなおった。合図にアルトは作業着の替えと、張り替えるための船の塗膜セット、クラック検知キットや携帯食、ミールパッカー式を注文してゆく。

『塗膜セットは、四二一番だったな。ガスはいらんのか？』

書き留め画面を弾きながらサスが鼻溜を揺らした。

『いや、あんとんこのは無駄に一級品過ぎる』

『一級品に無駄も何もあるものか』

分かっていない、となじったサスはご不満だ。

『注文の品は七時間後、いつも通りドックへ届けさせるが、いいか？』

そうしてカウンターに埋め込まれた端末画面をアルトへ百八十度回転させた。

『元手はあるんじゃないかな。ドリーは無駄足だったんじゃないかな。』

ま、子守代には足りんじゃないかな。差し引いておいたぞ』

合計金額の確認を促す。

『ああ、いつも通り、じいさんの所で借りている船のドック代へ上乘せしてくれ。引き落としまでには、きっちり稼ぐさ』

その数字へは盗み見る程度、目をやってアルトは作業着の汚れをひとつ、指先で弾き飛ばした。

『貧乏ヒマなしじゃの』

画面を戻したサスがそこで一息つく。

『なら、残りの子守代じゃ』

振った鼻溜は緊張のためか、声を低く変えていた。

『わしがお前さんのトラブルの力になるう』

なるほどその話をするため、デミたちを別室へ移したのか。もう

ひと欠け汚れ弾き飛ばしかけて、アルトは指の動きを止める。おず
おずと上げた顔をサスは、試すかのように覗き込んでいた。

『追われておるのだろう。違うか？』

藪から棒にそう鼻溜を振ってみせた。

矢継ぎばや、サスはこうもたたみ掛ける。

『ドリーのジャイロか？ ホロレターを出した輩が絡んでおるのか？』

言い当てられて驚きつつ、それは違う、とアルトはサスへ首を振り返した。

『いや、船賊だ。だが、どうして俺が追われていると分かった？』
むしる確かめる。

『ヒトの、いや、シロウトならデフ6の嗅覚でもってしても無理かもしれないがの、ここへ入って来た時から、お前さんの体から臭気マーカーの臭いがしとつての』

丸いアゴ先をつまんだサスは、いぶかしげと目を細めていった。

『臭気、マーカー？』

アルトは声を裏返す。

『そうじゃ。残留した臭い粒子の濃度で対象を追跡するシロモノじゃ。大気質を問わん』

確かめて、アルトは作業着へ鼻を押し当てた。しかし乾燥の拳句、腐敗臭すらしなくなったそこから臭うモノは何もない。と同時に、どつりで船賊たちの追跡が的確だったはずだとひとりごちもした。

『知らなかったな。だが臭気マーカーなんてシロモノ、初耳だぜ』

『そらそうじゃ。軍で試作を重ねるとるシロモンじゃ。わしもこの間、協力しとる民間からの試作品流れで知ったところじゃわい』

『軍の？』

と、そこでサスはふい、と声をひそめる。

『あのふたり、デミもなついておる様子じゃし、悪党にだけは見えなかったが何もんじゃ？』

問いかけには勘違いだ、というほかないだろう。

『ああ、デミを船に乗せろと言ってきたのはネオンだ。パラシエントはボイスメッセンジャーをやっている。俺、同様、匿名のホロレターで踊らされてきたクチらしい。俺宛のメッセージを預かっているってことで、受け渡しが済むまで同行する予定でいる。あのな』
アルトは言葉を切った。

『だいたい確かめるだけにあの挨拶は、こつちが迷惑だ』
つけ加える。

『言うな。咄嗟にしてはうまいもんだつたじゃろつが』

悪気のないサスに謝るような素振りはない。アルトは目を剥き、受け流したサスは一転、眉間を詰めた。

『なら、あのふたりがマーカを吹きかけたわけではない、ということじゃな?』

『おそろく。船賊とはつるんじゃない』

『その様子では、お前は真正面からマークされとるハズじゃがのう』
唸ったサスが、短い腕を体の前で深く組んだ。

『どこでやられたのか、今すぐ思い出せ』

急転直下と突きつける。

『お、思い出せ、つたつてな。そう急には……』

その視線にアルトはたじろぎ、急ぎ記憶の巻き戻しにかかる。脳裏に、デミを追いかけ続けた船内に船賊を、追われ続けたコロニーを、カウンターで食らった待ちぼうけを、フェイオンへ向かう独りきりの船内を蘇らせた。巻き戻し過ぎたと、フェイオンの格納庫に船を預け、無数の利用者と共にシャトルで『ミルト』へ向った一部始終を、誰もいない『ラウア』語力ウンターでホロレターと仏頂面の『ラウア』語店員を眺め続けていた自分を、なぞる。声はそこで上がっていた。

『だッ。まさか?』

『そいつか?』

『店員だ。ホロレターの待ち合わせにあったラウア語力ウンターのネイティブ店員だ。ヤツが思い切り俺に息を吹きかけやがった』

どう考えても正面からとなれば、無煙タバコをふかしたあの時しか思い出せない。聞いてサスは、よくやったと言わんばかり笑いかけ、ウインクとまではいかないものの覗き込むようにアルトへ突き出した片目を細める。

『そやつの正体、わしが調べてやろう』

鼻溜を振るものだから、アルトは我に返っていた。

『そんなにはりこんでもらわなくてもかまわないぜ』

突き返したのはおそらく、及ばぬところでまた自らを左右されたくない、と思っただい。

『何を言いおる。お前さんの手には負えんヤマじゃろうが？』

『言ってくれるな』

あっけらかんと返すサスの、いわんとしているところが汲み取れるからこそアルトは睨み返していた。

『お前がウチの稼ぎ頭になったのは、デミ同様、わしが育てたようなもんじゃからの』

そんな視線を、サスは開いた眉間でかわす。だからして言葉はいぞアルトの口から、こう飛び出していた。

『よしてくれよ、この期に及んで保護者気取りか？ それとも俺はまたあんたのヒト助けに付き合わされる、ってわけか？』

瞬間、サスの表情に怒りは浮かぶ。半円卓を叩きつけるべく手のひらを振り下ろしかけ、すんでのところを押し止めた。

『……言っておくが、わしはお前を気まぐれで拾ったのではないぞ』
店に押し殺した声が響く。

確かに言いぐさは、受けた恩義に反する類だといえた。

『……すまん』

答えるしかなく、覚えた罪悪感にアルトは言葉尻を濁す。

『死に急ぐもお前の人生じゃが、棺桶から引きずりだしたわしにも責任があると思うとる』

言葉は耳に痛く、だからしてアルトは半円卓へと背を向けていた。ため息と共にそこへ体を預けてゆく。

『俺の悪いクセだ。地球へホロレターが送られてから、どうも落ち着かない。おかげであのカウンターで二時間も粘つちまった。とつとと帰つてりゃ、こんなことに巻き込まれずにすんだつてのによ』
あてもなく視線を宙へ投げやった。

『だからやめとけ、とわしは言つたんじゃ』

背中越し、首を振るサスの様子は伝わってならない。

『いいや。だからこそ、放つて置けないことだつてあるんだぜ』

その顔へ、だからこそアルトは勢いよく振り返る。

『あの家は何も示さない俺のたつた一つの手がかりだつた。座標上から消されていたとしても、俺のマイホームに変わりはない』

力説に、サスもゆつくりうなずいていた。

『おかげでわしは着陸に失敗しかけたがの。年寄りにマニュアルを要求するなど、無茶がすぎる』

笑い飛ばして、今、思い出してもゾツとするといわんばかり身震いしてみせる。想像は、アルトの頬もまた緩ませてならなかつた。

『あんたの慌てっぷり、覚えてないのが残念だ』

と不意に、サスの視線は手元に落ちる。仮想ショールームで注文された靴と船のリストが、モニターの中で点滅していた。

『結局、一部屋、押し潰したが、奥におつたお前さんは大量のクスリでへべれけじゃつたからの。覚えておるも何も、今、こうして生きとる方が不思議なほどじゃ』

鼻溜を振りつつ、そんなデミの仕事ぶりへ目を通してゆく。

『何で、記憶をなくすほど浴びてたわけだかね』

『その理由、わかるやもしれんとわしは思うとるぞ。この件に共通しとるものがあるとすれば、軍じゃ。導人間際のマーカーといい、何の因果かお前さんが浴びとつたクスリも軍用の興奮剤じゃつたからの。どちらもそこに出回つたらん特殊なシロモノなら、偶然にして出くわずに出来過ぎじゃな』

『そついやあ、重力低下が起きた時、奴ら、携帯グラビティなんてモノを装備してやがつたな』

『ほう。それも、連邦軍の虎の子じゃの』

言うサスは、実にあっけらかんとしたものだ。

『だとして、迎えに来るのが遅すぎるぜ』

吐いてアルトはひと息つく。

『確かに、覚えがないなら俺の手には余るかもな』

『のう、ならここはわしに任せて、お前はしばらく船でも磨いておればよい』

促すサスの指が、デミの見繕ったリストへ発注のサインを走らせていた。

『ついでに学校へ戻る次の便まで、デミの相手をしてもらえれば、わしはなおさら助かるがの』

送信を済ませ、上げた顔でアルトへ微笑みかける。ならアルトにはこう返すほかなくなっていた。

『冗談きついで、じいさん』

浮かべた苦笑いを、すぐにも真顔へ引き戻す。

『年寄りの冷や水ってこところまでは、やめてくれ』

しかしながらサスには伝わっていないらしい。

『なあに、たまには浴びるのも一興じゃわい』

同時に、仮想ショールームのドアは開く。よほどいい買い物物ができたのだらう、楽しげな声はふたりの耳へ届いていた。

無防備な話し声が、いつからか張り詰めることとなっていた緊張をアルトとサスに知らしめる。

『どうじゃ、デミ。万事うまくいったか?』

拭ってサスが、手のひらを返したかのごとく猫なで声を放っていた。

『うん、もちろんだよ。リスト、見てくれた? おじいちゃん』

ネオンの手を引くすデミは勇ましげだ。ままに一直線と、半円卓の中へもぐりこんだ。すかさず端末画面へ頭を突っ込み、見繕った一覧へ改め視線を這わせてゆく。

どうやら注文が届くまでデミから借り受けることとなつたらしい。履き込んだあとがうかがえるそれは、デミの靴と全くもって同じデザインだ。共に連れ込まれたネオンの足には、フリーサイズのエアソールシューズがあてがわれていた。

そんな双方と別れてライオンは半円卓の前へと回り込んでゆく。譲つてアルトは、もたれ掛かつていたそこを離れた。

『そうじゃの、靴はあの店で正解じゃと思うが、どうして船はイアドの在庫をチェックせなんだ? 奴の目は信用できるぞ。交渉が必要であつたなら、わしが間に入ったものを』

心待ちにしている評価をサスは告げ、変更されることなく発注が済まされたことを知ってデミはほっ、と鼻溜をしばませる。

『見たんだけど、店を閉めてるみたいなんだ。品物が動いてなくて、それでぼく、別の倉庫に変えたんだ』

ならそれは意外な事実だつたらしい。サスは考え込むように、アゴへ手のひらをあてがいさすつた。

『ほっ。そうか。また、エスパでも買いに出よつたか?』

『この画面と、さっきの部屋は繋がってるんだよ。で、全部は、ギ

ルドの本部にあるサーバーに繋がって、そこで商品情報をやり取りするんだ。時にはすごく大きな取引があったりして、本部自体が各店舗に情報を流して品物を手配することもあるんだよ。ぼくがサポジトリでしてる勉強は、この端末を見ただけでどんな物か分かるようにするためのなの！』

傍らで、デミはネオンへさも自慢げと説明を始めている。へえ、とネオンの眺める端末画面には、言う通りと文字が果てしなくスクロールを続けていた。その意味不明な羅列の量に、しばし圧倒されて釘付けとなる。

『でね、おじいちゃん。ライオンのお客さんは電子ウォレットで今すぐ精算してくれるんだって』

『ご老体、これで頼みたい』

忙しくもデミはサスへ鼻溜を向けなおし、開いたツナギの胸元からライオンは、裏にみっしり光学バーコードが仕込まれたカードを取り出してみせた。

『また珍しいものを持っておるの。ま、わしとしては、支払いさえ済めば何でもかまわんがの』

受け取りサスは隅から隅まで眺めまわし、端末画面の隅を弾く。すかさず広がった走査線へかざすとカードの決済にとりかかった。

『他に入用なものはないのか？』

『商売でここまで来た。これはそのギャランティーだ。全て使い切るわけにはいかん』

答えるライオンに思案する素振りはない。

『なるほど。今、アルトからボイスメッセンジャーをやつとると聞いたところじゃ。ま、それにしても大きな仕事を引き受けたもんじやの』

そうしてライオンへ、端末画面を回転させる。仕草でサスは、そこにサインを求めた。目を通してライオンは指示された場所へ指を走らせてゆく。

『これきりにしたいものだな』

見届けたサスが端末画面を戻していた。走査線から剥がした電子ウォレットをライオンへ返す。

『確かに、度々船を失っておっては割りが合わんじやろうからな』
受け取ったライオンは、大事そうに再びそれを胸元へまい込んでいた。

『で、そちらさんの支払い方法は何をご希望じゃ？』

サスは体をネオンへ傾ける。半円卓に見入っていたネオンの顔は、そこで驚いたように跳ね上がっていた。

『モバイルが……』

言いかけるが息をのむ。様子に指を突きつけたのは、アルトだった。

『あッ、そういやあんた、ブツ壊れたモバイル口が金を管理してるってッ』

とたん胡散臭げと潰れていったのは、サスの目だろう。だが状況が状況だ。のみこみどころにか鼻溜を振っていた。

『仕方ないのう。代わりにIDをコピーさせてもらえば支払いは後でもかわまんが』

しかしそれすらままならないのがネオンの境遇、というやつだ。

『ごめんなさいっ！ 必ず、払いますッ！』

伸び上がってまで頭を下げる。見つめてサスは鼻溜をきゅっと締めた。

『ふむ……、IDも持っておらんのか。わしはツケで商売をせん主義なんじやがな。キャンセルするにももう、向こうは発送の準備を始めておるじやろうし。どちらにせよ金はかかるぞ』

そうしてネオンから剥いだ視線をアルトへ向ける。

『な、んだよ。その目は』

『いや、えらい客を連れ込んだもんじやと思つての』

響きはそっけないが、案外な皮肉だ。

『待って、おじいちゃん。おねえちゃんは、ぼくを助けてくれたんだよ。オマケしてあげてよ』

見かねて間にデミが間に入るが、それは今しがたアルトとついた話だ。

『ならばそれぞれに好きなだけくれてやるか?』

サスは言いこめ、押し黙ったデミが自らの力不足を悔やむような目でネオンを見上げた。様子にこれまた仕方ない、とサスはしぶしぶ鼻溜を揺らす。

『ならばこれでどうじゃ? わしがそのアナログ楽器を買い取ろう。もちろん釣がでるぞ。EDも持たぬ一文無しではこの先、何かと困るじゃろうて。さしあたってもそれでなんとかなる』

などと八方丸く収まるはずが、そこにもひとつ、問題はあった。

『絶対ダメ』

ネオンは身を乗り出す。わけを話して聞かせるに造語が不便なら、そこから先を『ヒト』語に切り替えアルトへまくしたてた。

『あたし、楽器を売ったくらいじゃ返せない借金があるの。だから演奏で返済してるよとろこななのよ。手放したりなんかしたら、他に何も出来ないし。造語だって苦手だし……。色々大変なの。お願い、後で支払うから。これだけは渡せないって、あなたから待ってもらおうよう説得して』

『何を話しとる?』

理解できぬ言語にサスが不審の色を浮かべる。聞き取れるからこそライオンが、アルトの返事を吟味すべく体を向けなおしていった。『お願い。楽器さえあれば後はどうにかなるの』

繰り返して手を、ネオンは握り合わせる。

その顔をアルトはしばし眺めて黙り込んだ。

見つめて頬をしばませたネオンはもう、何も言おうとしない。

振り切りアルトはカウンターへ足を繰り返す。もたれ掛かるなり吐き出した声は、地を這うほども低かった。

『……いくらだって?』

耳にしたサスの目が丸く見開かれてゆく。

『ほ、毎度ご利用、ありがとうございます』

『うるさい』

浴びつつアルトへ端末画面を回転させた。とたんアルトの声は、
ことのほか大きくなる。

「お前ツ、コレ、送料の方が高いじゃねーかッ」

「え、そ、そうなの？ ごめん……」

「なんでンなもん。今のヤツじゃ、だめなのかよ。今のヤツじゃ」

「だって目が覚めたらそれ、履いてたんだもの。変えたくなくて」

「なら今度から寝る時は今の履いて寝やがれッ」

コンチクショーで、走らせるサインの勢いは凄まじい。満面の笑
みで見届けたサスは、それこそホクホク顔で両手をこすり合わせる。

「またのご利用、待つとるぞ。次は貴金属でもどうじゃ？ これが
地球のご夫人方には人気があつての」

などと言い出すサスを、アルトは無言で睨みつけた。

とその時、沈黙していたモニターは息を吹き返す。

「サス！ そこにいるか？ 一大事だ、えらいことになった！」

逼迫したダミ声は、やおらそこから飛び出していた。

見ればそこには顔面のシワをこれでもかと波打たせるテラタン種族の、狼狽しきった顔はある。見つけたデミが、とたん嬉しそうにモニターへと向き直っていた。

『あ、おいちゃん！ さつき、お店覗いたんだよ。今、どこにいるの？ おかげでおいちゃん、儲けそこなっただから』

ならばなおさらモニターからだみ声は、これでもかとまき散らされる。

『デミ坊か。いや、デミ坊、それどころではない！ ブロードバンド・キャストライブはもう見たか？ 船賊の कोरोニー 強襲映像だ！ 今、その付近にまで来ておる。だがこれ以上はジャンクだらけで近づけん。規制線も張られた！ どうにかならんか！ あ、あの中にわしの……！』

息せき切るその様子は半ばパニックだ。

これではデミの手に負えそうもない。そこから先、代わってサスがモニターをのぞきこんだ。

『たく、騒々しいヤツじゃの、トラ』

そう、つまり先ほど船の購入を案内する際、覗いておくべきだとサスが忠告したイアドの店とは、トラの店のことだったのだ。さらに交渉のさいは間に入ってやったのと言ったサスとトラの関係こそ、惑星『Op・1』に建つ『デフ6』仕立てのトラの店を、譲り譲られた関係だった。信用による売り買いが日常的なギルドの世界では、こうしたつながりでもってして相補の関係を築く商人が多いのである。

が、次の瞬間にも訴えるトラの顔は、ストップモーションでもかかったかのように固まる。モニター画面を覗き込んだままで、信じられない光景を目の当たりとしたといわんばかりカツ、とシワの奥

の両目を見開いてみせた。ままにアナログズームそのもの、自らモニターへ近づいてゆく。

『な!』

吐き出した。

『ネオン!』

そうしてこれでもかと、その名を叫ぶ。

「うそっ!」

呼ばれて身をのけぞらせたのは、ネオン当人だ。それきり脱兎のごとく半円卓から飛び出してゆく。アルトとライオンの背後にまで走った。

「なにしてんだ、お前?」

目で追ったアルトの眉間が詰まるのも、然り。デミもきよとんとしている。ならそこで縮こまり、声さえ潜めたネオンの言い分はこうだった。

「何ってねえ、隠れてるんじゃないの?……!」

ほとんどコントの域だが本人は必死なのだから、チラリ、モニターへ流した視線こそ真剣だ。

「あれよっ。あいつがさつき言った借金取りなのっ。なんでこんなに早く見つかっちゃうワケっ? あたしの自由はどこっ? せつかく逃げ出せるかも、って思ってたのにつ!」

「そりゃ、お前、ここ、ギルド店舗だからだろ」
アルトは答える。

なおさらネオンは吠えていた。

「そんなの、星の数ほどあるじゃなあいつ!」
しかし言ったところで現実には曲がらず、モニターからネオンを探すトラの声もまたボルテージを上げる。

『待て、どこへ行った、ネオン! 今すぐ戻って来い!』

写し出されていた映像は揺れていたかと思えば振り回されて、トラの顔どころか見慣れぬ天井や計器らしき部品類を次から次へなめまわしてゆく。拳句、上下逆さでトラの顔をとらえなおし動きを止

めた。

『サス！ ぼうつと見ていないで、今すぐ、今すぐ捕まえてくれ！』
『と、頼まれてもじゃな』

弱り果ててサスは額を掻く。そうしてはた、と思い起こした話に動きを止めもした。上げた顔でネオンを凝視し、突如、合点がいったかのように自らのヒザを打つ。

『なるほど！ アナログ楽器か！』

一転、トラへ声をひそめた。

『これが聞いておったあの船の？』

『ええい、今、その話をしているヒマはない！』

同時にモニターの天地は修正される。

『じゃが、それこそわしに拘束する理由はないぞ。それに今さっき、わしの客になったところじゃしの。もっとも、おまえさんの道楽に

……』

言いかけたところで、トラの喚く声はかぶさっていた。

『ええい、うるさい、うるさい！ これでは埒があかん！ ともかくわしは今からそちらへ向かう！ ネオンが客ならしっかり相手をつとめておいてくれ！ わしが到着するまでだ！ 頼んだぞ！』

モニターの映像は、そこでブツリ、切れていた。

室内が妙に広く感じられる。それこそが、沈黙だ。

かみ締めネオンは恐る恐るふたりの背から抜け出していった。

『フェイオンからじゃ、数日で来ちゃう』

眩き、落ち着きなく辺りを見回した。

『身から出たサビだろ』

『違うわよ。放置船から見つけて蘇生してやったから、その代金払えって。逃げ出せないようにあたしのIDまで転売して、バカみたいな大金せびるのよ。この楽器とあたしに演奏技術があるから手放したくないだけよ。人を奴隷みたいに扱っちゃって、鬼よ、悪魔よっ！』

派手に叫んで、ギリリ、奥歯を噛む。かと思えばその場でネオン

は跳ね上がった。

「そうだつ！ お願い、どこでもいいから船に乗せてって」

ライオンへ身を乗り出す。だがライオンの船は今しがた注文し終えたところだ。

「いや、わたしの船は登録手続きが控えている。今日、明日には出ない」

「だったら……」

仕方なくアルトへと向きなおった。

「靴代、返さなきゃならないし、ついだと思ってこの通りっ」

合わせた両手で頭を下げた。前にしたアルトこそ露骨なまでにその表情を歪めてゆく。

「おねえちゃん。おねえちゃんは、おいちゃんを知ってるの？ ぼくはおいちゃんを知ってるよ。おいちゃんは悪いひとじゃないよ」

デミだ。感じた不穏に、おそろおそろと鼻溜を揺らしていた。声にネオンは振り返るが、懸命だったぶん視線は鋭くデミを射る。

「それはわしが一番よく知っておるぞ、デミ。さて、お前はそろそろ学校へ戻らねばならんな。わしもお前が無事じゃったことを先生に報告せねばならんしの。お前は奥で準備をしきなさい」

すかさずかばってさりげなく、サスがデミを促した。話をはぐらかされたデミの表情は沈み、しかしながら筋の通ったサスの提案に半円卓から抜け出してゆく。

「……うん、分かった」

それでも言い足りない何かを補うように、その顔をネオンへ上げた。

「おねえちゃん、後でぼくの街、案内してあげる。ステキなところだよ。ここで待ってて」

そこにいつもの快活さはなく、気づかされてネオンはひどく吊りあがっていた表情を急ぎ緩めていった。

「ありがとう。楽しみに待ってる」

見て取れたことにデミもまた、少しほっとしたようすだ。微笑み

返していた。そうしてミノムシドアとは正反対の、奥に据えられた小さなドアへその身を潜り込ませてゆく。

「てな、お前、バカか」

見計らい、突き返したのはアルトだった。

「船賊に追われてるって話はしたところだろうが。どこまで連れて行きや気が済むのか知らないが、二人きりでいいってのも、いい度胸だ」

「分かってて頼んでるんじゃない。だいたい、その気ないなら関係ないでしょ」

双方、譲らなければ、そこで真つ向、睨み合う。

「まったく」

見かねて口を挟んだのは、ライオンだった。

「ならば、私の船だろうがジャンク屋の船だろうが、借金取りの船だろうが、一番にここを発つ船に乗る。わたしの船も到着に数日かかるが、ジャンク屋の船も補修がある。借金取りもフェイオンからだ。そう差はないだろう。タイミングに託すのなら誰も文句はあるまい。そのうち他にも手立てがみつかるやもしれんしな」

飲み下すにしばらく。

ネオンが先に承諾していた。

「そうね。いいわ」

「う、うまいことハナシをつけるじゃねーか」

アルトも口添え、前のめりだった体を起こしてゆく。過ぎてふんぞり返ると腰に手をあてがってサスへ言葉を切り変えた。

『こいつの乗る船は、一番にここから発つ船ってことで決まりだ。』

トラってやつが来たなら知らせてくれ』

『それなら、お安い御用じゃ』

サスは返し、ネオンも握り拳へ力を込めた。

「絶対、トラより先にここを出てやる」

くどい、とその横顔へアルトは歯をむき出し、何事もなかったようにライオンへと目配せを送った。

「おい、ドックへ戻るぜ」

もちろん誘ったのは、後回しにされ続けたメッセージを再生するためだ。だからして一呼吸おきうなずくライオンの仕草は、やけに慎重だった。

『悪いが、帰りはチビに送ってもらおうよう伝えておいてくれ。タクシーでも頼まれちゃ、また出費がかさむ』

見届けアルトは、サスへ手を振りきびすを返す。肩をすくめて聞くサスがその背を見送れば、ミノムシドアへ手をかけたところでアルトは思い出したようにまた振り返ってみせていた。

『そっぴや、肝心なことがひとつ、まだだった』

確かめるのはこのくだりだ。

『ドリーのジャイロは、もう売りに出されてるのか？』

なるほど、それはすっかり忘れていたと、サスも軽く微笑み返す。

『いや、まだじゃ。さするに、まだ誰かが握っておるんじやろうな』
納得してアルトは前へ向きなおった。

『了解』

今度こそガラガラ鳴るドアを押し開け店を後にしていた。

勢いよくクラランチを回せば心地よい振動と共にエンジンが息を吹き返す。見届けアルトは用済みのそれを片手に、運転席へもぐりこんだ。三輪ジープの荷台は厚めの吸震性シートで覆われた戦利品専用の運搬スペースだ。振り返りざま後部荷台へ投げ込んだクラランチはコトリとも音を立てず、転がっていた。

それこそがいわば惑星『アーツェ』の名物というべきだろう。フロントガラスへモヤでもかかったようなキメ細かい砂塵は付着している。払いのけて続けさま、ワイパーを作動させた。握りしめたハンドルで、アルトは覗いた扇型の世界へ向かい、アクセルを踏み込む。合わせてハンドルを切れればタイヤは砂利を潰してゆっくり路肩を抜け出してゆき、見る間にサスの店をサイドミラーの中で小さくしていった。

時折、小刻みに跳ねる車体が、悪路であることを教えてくれる。

そう、光速を利用したとはいえ僻地『フェイオン』から数日たどり着けるここが街であるハズもなかった。『アーツェ』もまた典型的な田舎町だ。

証明するかのように穴だらけの路面のみならず、通りを走り抜けるジープの左右には目抜き通りを作らんがために寄せ集められたような町並みが、カタチばかりと流れている。情報は均一に既知宇宙を駆け巡っているものの、追いつかぬ物理面が影響している。町の辻々には今だ現役気取りで並べられている一世代前の品々が目立ち、その影響か、活気はあれども町全体は独特の倦怠感に包み込まれていた。印象付けて今日も快晴であることを示す『アーツェ』の空は、切ないほどの赤に染まっている。

しばらくはその光景を珍しげに眺めていたライオンだったが、見向きもしなくなるにそう時間はかかっていない。気づけば舞い跳ぶ

砂塵と夕焼けに攪乱されたその顔を七色に乱反射させ、アルトの隣でただ黙り込むばかりとなっていた。

そうして町並みは、取り繕うにそこが限界と途切れる。

同時にジープは夕焼け空を吸い込んだような褐色の荒野へ飛び出していった。

道というより、道なき道に残されたわだちを追いかけ、ジープはその中をひたすら直進してゆく。

やがて朱色に滲む地平線の際に、銀色と光を反射させる目的地、ドックの屋根は塵気楼かと揺らぎ浮かび上がっていた。その向こうに滑走路は伸びて、ときおり音速を破る船の音をドン、と響かせる。受けた光に船体を白く反射させて船が空を白い矢となり飛び去ってゆく姿を、入れ替わりで物資をしこたま腹へ詰め込んだ貨物船が不安定かつ重たげにかしぎながら滑走路へ降下してゆく姿を、そこに重ねた。

「何を、話していた？」

眺めていたライオンがその口を開く。それは実に唐突な切り出し方だろう。何の事かとアルトはチラリ、横目でライオンを盗み見る。答えかねて聞き返していた。

「何を、つて？」

「わたしたちがショールームに入っている間だ」

すぐさま付け足すライオンは確信犯だ。そこで初めてなるほどと、アルトは瞬いていた。

「あんたが気にすることかよ」

「確かにそうだ」

吐き捨てたなら慥然としながらも、ライオンはあっけないほど素直に飲み込んでみせる。

再び沈黙は訪れ、再びその沈黙をライオンは破った。

「わたしは、この件であなた宛てのメッセージを預かって来た」

闇を手探りするような声は硬い。言わんとしていることを先回りしてアルトは、ため息と共に教えてやる気持ちを固める。

「そうだ。あんたはただのボイスメッセンジャーだ。これ以上、その儲けをフィにしたくなけりゃ、これからのひと仕事にだけ集中しろよ」

とたん獣面はアルトへと振り返る。

「わたしも知っておくべきことがあるのではないか、と思っている」
口調は固い。刺すような視線もまた、アルトの気を引き付ける。

振り返ってしばし睨み合うように互いは黙し、先にアルトが視線を戻していた。

「このままブツだけ引き渡して、互いに他人へ戻ろうぜ」

「それは、シヨールームから出るまでの話だ」

「なら、大きな買い物でもして気が変わったってのか？」

「いいや、気持ちを変えたのは買い物ではない」

ライオンは断言する。

「わたしがこんなことを言うのはだな、シヨールームのドアが開いた時、わたしはあなたが初めて怯えたような目をしているのを見たからだ。正直、わたしも不安になったぞ」

ジープが乱暴に跳ねていた。追いかけていたわたちからそれている。アルトは急ぎわだちの行方を捜すと、慌てて大きくハンドルを切った。ドック群はもう目の前に迫っている。進路を変えたジープを、そんなドック郡に沿わせて進めた。いくらか行つたところで並ぶドックとドックの間へもぐりこむ。とたん、それまでドックが遮っていたエンジン音に利用者たちの声は、耳へ飛び込んできていた。砂塵を回収する作業車もまた、行く手を横切つてゆく。通り過ぎれば向こう側に、フルオートメーション化された古城のような管制塔と、緩やかな傾斜で空へ伸びる滑走路は浮かび上がっていた。

光景を片側に、ジープは抜け出たドックとドックの間を左折する。
『ヒト』語で大きく「11」と書きなぐられた風化寸前のゲート前で停止した。

「開けてくる」

運転席を抜け出しアルトは、ゲート片隅に取り付けられたたった

十個のテンキープレートのカバーを開く。所定の数を入力していった。やがて砂塵を噛みながら、ゲートはじれつたいほどゆっくり左右へ開いてゆく。中へとアルトはジープを入れた。

ドックは『フェイオン』の格納庫と違って狭く、視界一杯に広がるアルトの船を大型船のように見せつけている。その船体を改め眺め回せば、致命的な損傷こそ免れたものの混乱するコロニー周辺航路でつけた無数の引っかけ傷を確認することはできた。中でも一番派手なものは腹に長く尾を引いた傷跡だろう。寸前のところで回避したと思いついていたコロニー残骸との接触痕に違いなく、えぐられたように塗膜は剥ぎ取られていた。

その傷を見上げる格好で、ジープはエンジンを止める。

後方で、砂塵の進入を拒むゲートはゆるゆる閉じてゆき、アルトはジープを降りていた。その荷台からクランチを掴み上げ、船の搭乗ハッチを開いてそこにクランチを固定する。

眺めてライオンはこれ以上、期待できそうもないと視線をドックの屋根へ、持ち上げていた。どうやら銀色に光っていると思いついていたのは、そんな屋根に並ぶ天窓のせいらしい。赤茶色の砂塵を降り付けたそれは、眠たげな光を中へ投げ入れていた。

と不意に、完全に閉じたことを知らせてゲートが、施錠のか細かい機械音を鳴り響かせる。ライオンの顔からようやく乱反射は消え、クランチを固定し終えたアルトがそんなライオンへ振り返った。

「あなたの船は約束の時間に、この五つ隣の空きドックへ納入されるはずだ」

ライオンが驚いたように屋根から視線を戻していた。返事をするでもなく、しばしそんなアルトを見つめ返す。やがて挟んで立っていたジープの前へと回り込んでいった。

「なるほど。あの時、出したデフ6の猫なで声から、答えてはもらえないだろうとは思っていた。運もここへ来るまでに使い果たしたことだ。これも高い報酬の一部なのだろう。これからは用心して暮らすことにしよう」

言つてのける。

「希望通り、ここでメッセージの再生を始める」

右手を、たてがみへ持ち上げた。

前でアルトは足をかけていた搭乗ハッチへ腰を落とす。そうまで言われて巻き込んだ責任を、今さらのように感じ取っていた。

「船賊も振り切れないようなあんたじゃ、用心したってたかが知れてる」

気づけば頭は振られた後だ。そうして羽織っていた作業着の袖から乱暴に腕を引き抜いた。脱いだそれもまた、船内へと投げ入れる。「やはりそれほどまずい話が絡んでいるのか？」
聞き返すライオンは性急だ。たてがみへ押し込んでいた手を下ろし、眉間に生えたテグスのようなヒゲを逆立せる。

「隠しているわけじゃない。俺にも分からないことが多すぎる。ただ、この件には連邦の軍が絡んでるって話が濃厚だ。あんたらがシヨールームに入っている間、ここまでの子守代だつてことで、その辺りを確かめるとサスが調査をかって出てくれた」

納得のゆかぬ面持で教え、だからこそ鼻で笑い飛ばしてアルトは続けた。

「何しろ奴らが的確に追いかけてきたのは、臭気マーカーつてやつで俺をマークしていせいらしいからな」

「しゅうき、マーカー？ 何だそれは？ 聞いたことがないが？」

「まだ軍でしか投入されていないシロモノだよ。そんなモンを船賊が使ってるって経緯が、胡散臭いね。確かに、重力低下中でのアレだ」

答えてうんざり、自らの膝へ立てた腕で頬杖をつく。

「それが私の依頼主か」

「さてどうだか？ まあ、この商売していると、色々想像できないような出来事に出くわすって寸法だ」

ほどいてとぼけたように肩をすくめた。

「話していたのは、その辺りつてとこさ。ただし、年寄りに任せて

時間を潰す気はない。あんたのメッセージから読み取れるものがあれば、俺は俺で動くつもりだ。これで納得いったか？」

吊り上げた片眉で、ライオンの様子をうかがう。ならライオンは多少なりとも得心した様子だ。そこで慎重なほど深く頷き返してみせていた。

「了解した。心して再生にとりかかるとしよう」

「ああ、よろしく頼むぜ」

合図に手はたてがみへ、再び持ち上げられてゆく。中へ潜り込んだなら、ラウア語カウンターで見たように何かを探り動かせた。かと思うと、突き出た大きな顎を動かすことなく、アルトへ向かってこう話し始める。

「このメッセージの記録時間は地球基準時で三十七秒。再生前の注意事項は三つ。一、再生はプライバシー保護のため一度のみに限られる。二、再生中の途中停止は不可。三、これらは再生終了後、メッセンジャーの記憶補助装置からメッセージが消去されることを前提としている」

その声はチューニングでもするかのようにうねり、次第に高音と低音の入り混じる響きへ乖離してゆく。

「以上を了承した場合にのみ、再生は開始されるものとする」

仮面のようにだったライオンの顔の中、琥珀色の瞳だけが瞬きを繰り返してアルトへ返事を促した。なら一息、吐いてアルトは形式程度に気持ちを入れ替える。

「遠慮なく、やってくれ」

聞き入れたライオンが両のまぶたを閉じていた。ひとときわ尖った静寂の中、深く息を吸い込む掠れた喉の響きだけが、異様なほどに辺りへクリアに響きわたる。瞬間、その体から待ちに待った第一声は放たれていた。

それはひとつの体から発せられているとは思えないほど、高音と低音にくっきり二分した声色だった。両極端をしつかりキープしながら実によく響くと、感触にも似た張りでアルトの鼓膜を震わせ始める。だがしかしだ。それほどまで印象的な声、いや音であるにもかかわらず、アルトには持ち主にまるきり覚えがなかった。そして何より面食らったのは、当然あるだろうと思われるに言語がそこには含まれていなかったためである。

現状はまさにライオンの独唱であり、熱唱だった。息の続く限り特徴的な声色を宙へ放つライオンは、まさに仁王立ちでただ唸り続ける。

これがあえて送られたメッセージだというのなら、それこそそこに込められた意味など汲み取れず、アルトはポカンとライオンを見上げた。だが一度きりだと思いきせば、開いた口もどうにか閉じる。急ぎ、さかのぼれる限りの記憶を辿っていった。手繰り、思い出せる何かがあるのではないかと持てる限りの集中力を聴覚へと注ぎこんでゆく。吸い込む音であらん限り、意識を満たしていった。

ならやがて音は、アルトの中で一人歩きを始める。

瞬間それは、始まっていた。

めまい。

それとも動悸が先か。

突如、蹴り上げられたかのように心臓は大きく脈打ち、急にピッチを上げて拍動しだす。合わせて息は止まると、それきりだった。他人のもののように喉は詰まり、身動きひとつできなくなる。

状況はもう驚きを越えたパニックだ。急ぎ呼吸しようと、自由を取り戻そうと、アルトはもがいた。だがかなわず、酸欠に脳が腫れ上がってゆく感覚だけが確かとなる。

そのとき、詰まっていた喉が解放されていた。
よじれるように肺の中身を一気に吐き出す。

そこから先は全力疾走さながらだ。鼓動を追って荒い呼吸は繰り返され、だが制御不能と止まぬ拍動に体中から汗を噴き出した。治まらなければ死んでしまうのではないだろうか。恐怖はアルトの脳裏に過り、とたんそれすら打ち砕いて鈍器で殴られたかのような一撃に後頭部を襲われる。

衝撃に視界さえもがぐにやり、歪んでいた。
何かが壊れた。

直感知らせ、アルトはたまらず前へと崩れ落ちる。
支えて床へ手を突くと、胸元をただ掴んでこらえた。

はずが、あるうことかその手はズブリ、体の中へ沈み込む。まさかライオンの義顔でもあるまいし。ぎよっとして目をやり、沈み込んだ手で胸を探った。そこに触れるものは何もなく、冗談だろう、思うままだ。顔を持ち上げてゆく。

世界はそこで調整中のモニターかと、サイケデリックにうねり、渦巻いていた。

様子には、わずかながらも覚えがある、と思いつく。
なるホド。

思い出せたからこそ笑いは苦し紛れともれていた。
幻覚。

クスリを浴びていた時にさ迷っていた幻覚と、瓜二つだと思う。
何をいまさらと、毒づいていた。

いや、毒づくことでもかく正気を探しあてようとした。その尻尾を捕らえて奥歯を噛みしめ、頼りに胸から腕を引き抜く。

睨みつけたままのそこライオンは、うねる世界と同化しいまだメッセージを再生していた。

ほんの数歩先だ。

やめさせるべくアルトはライオンへ手を伸ばす。連なる体を死に物狂いで持ち上げた。なら呼応してサイケな世界もまた嵐にもまれ

た林と揺れ動き、押しして歩を進めればその足もまた音もなく地面へ沈み込んでゆく。のみならず、一枚の布を踏み込んだかの如く連なり世界もまた足元へ引き込まれていった。

状況に理解など必要ない。

抵抗すべくアルトは体をひねる。

勢い任せで振り上げたもう片方の足を、さらに前へと踏み出した。しかしその足は引き込まれてゆく布切れの上に突き刺さっただけで、あよあれよと元の位置へ引き戻されてゆく。

上がる息に、ハナから声を出す余裕などありはしなかった。

引き戻された足はみるみるうちに膝まで沈み込み、もがく間もなく腰までを地面に食われる。辛うじて腕をばたつかせたのもつかの間だった。床は喉元にまで押し上がり、まさに溺れる寸前と、あごを持ち上げアルトは天を仰ぐ。世界は己が作り上げた窪みへ吸い込まれると、そこで空へ向かいたなびいていた。覆いつくして朗々とライオンの再生する声色だけが響いている。だが今や、その姿を見つけることはできない。代わって見覚えのないバナーは立っている。手入れの行き届いた連邦の制服を着込んだバナーは、恐ろしいほど冷やかな目でそんなアルトを見つめていた。

その目と目が合う。

瞬間、妙な感情はアルトの中にわき起こっていた。

『シャッフ……』

不意に言葉が飛び出す。

が、言い切るまでもなく、視界は地面に覆い尽くされていた。けばけばしかった極彩色は霞と消え、その耳に乱暴かつ無情な響きでもってして、時のちぎれる音だけがこだまする。最後に聞くにそれは、あまりにもそっけない響きだった。

『デミを待たせて、ください』

完璧な発音だったと、ネオンは言って自慢げに鼻先を天へ持ち上

げる。モバイルがいればどうしても頼ってしまふ造語会話だが失った今、元来耳のいいネオンにとってそれは飛躍的な上達をみせつつあった。

『おう、おう、それは気づかなんだな。好きにくつろいでもらってかまわんぞ。デミももうそろそろ下りてくるはずじゃ。なんなら今、ヒトに流行の最新美容ラインナップでも展開してみるかの？』

半円卓で発注の後始末に追われていたサスは、思い出したようにそんなネオンへ顔を上げる。手元の画面を弾いてみせた。

『おじいさん、あたし、これ以上、買物、出来ない』

見て取りネオンは、その頭をやりわり振る。

『ほほ、そうじゃったの。わしとしたことが。ま、アルトにツケておくという手もあるが』

はっと手を止めサスは画面を消し去る。それこそマズい、と笑ってネオンは肩をすくめてみせた。様子を見上げるサスはどこか満足げだ。両ヒジを半円卓につくと組み合わせた両手の上にアゴを乗せる。

『なんのなんの、おじいさんではなく、サスと呼んでもらってかまわんぞ』

『ありがとう。サス』

ネオンは素直にその提案に従う。

『アルトから聞いたが、お前さんがデミをあの中から見つけ出してくれたそうじゃな』

『いえ、おまえさん、ではなく、ネオンと呼んでください。サス』

言うサスへ人さし指を立ててネオンは、片目を閉じた。瞬間、ぷくつと腫れ上がったサスの鼻溜が、ちぎれんばかりに揺れる。笑い声はまたたくまに店内へ広がっていった。

『なるほど、これは面白い！ともかく礼をいうぞ』

『デミは、わたしを助けたです。わたしもデミを助けたです』

『さて、デミがあれだけなついておるのを、わたしも見たことがなくての。最初、何者かと思っただわい』

『友達です』

ネオンは答える。

その言葉にサスは、アゴの下で組んだ手を馴染ませるように、しばしさすり合わせた。

『懐かしい造語じゃの。ま、知らなかったとはいえ、その友達の身内として、出会いがしらの失礼は許してもらえるかの？』

『もちろん』

ネオンに二言はない。

『なら親愛なるネオンよ。このことを聞いてもよいかの？』

とたん改まってサスは問いかけ、何をたずねられるのだろうと、ネオンは少しばかり身構えた。

『一体お前さんは、イアドにどれほどの借金をしておるんじゃ？』

なるほど、念を押して相当の、質問はプライベートな内容だ。だがしかし今どれくらい額が残っているのか、ネオンにも正確なところは把握しきれていなかった。しばし天を睨み、慣れない桁のおおよそを勘定してゆく。

『……八千万GK。ギルドに返さなければなりません』

『ほ、奴め、ふっかけよったの』

やおらサスが小さく跳ねた。

『フツ、かけ？』

それはネオンにとって聞きなれない単語だろう。問い返せばサスはかぶりを振ってみせていた。

『いや、こちらの話じゃ』

ならばとネオンは不穏な話をするかのように、サスへ身を乗り出してゆく。声に眉をひそめた。

『わたしが逃げても大丈夫ですか？ サスもギルド商人です』

『なあに、わたしには関係ないことじゃ。それ、なんだ、それはトラと本部の話ということじゃからな。それよりも』

返すサスは、あっけらかんとしている。むしろ話題を早々に切り上げ、うって変わって鋭い視線をネオンへ向けた。

『万が一、アルトの船に乗ることが出来たとして、これから先どうするつもりじゃ?』

『演奏を続けます』

『なるほど、あの楽器で稼ぐつもりか』

『はい。だから売りません』

『それならどこでも歓迎してくれるハズじゃとは思うが、ちと、もつたいないのう』

呟きサスは遠く宙を睨む。様子にネオンは嘖き出していた。

『なんじゃ?』

サスが怪訝と見つめ返すのも仕方がない。だからしてネオンは慌てて笑みを引つ込め、なるべく真顔になるようつとめて返した。

『デミも、夢中になれば、そればかりです』

やおら目を丸くしたサスは嬉しげだ。

『そうか。わしの大事な孫じゃからの!』

またもや豪快に揺らすと、心の底から笑ってみせた。そこへ飛び込んだのはデミだ。準備が整ったのだろう。着続けていた『フエイオン』スタッフのツナギを脱ぎ去ると、サポジトリの制服を身にまといドアを押し開けている。

『おねえちゃん、お待たせ!』

そこに先程までの落ち込みは残っていなかった。元通りと弾む足取りで半円卓を回り込み、ネオンの元へ駆け寄ってくる。

『おじいちゃん、ちよつと行って来るね。学校は次の船で戻るよ。』

それまでおねえちゃんを案内してくる』

ならサスはネオンへ目配せし、深く頷きデミへその鼻溜を揺らした。

『気をつけての。帰りはちゃんとドックまで送るんじゃぞ』

『砂漠港の十一番でしょ? じゃあビオモービル持っていかなきゃ』

すでにネオンを引つ張るデミは、ミノムシドアを押し開けているところだ。ドアにぶら下がるガラクタの中から一本のキーを筆取り取ると、ネオンの前になり後ろになり店から出ていった。

見送り終えたサスのため息が、やおらひとりきの店内にこぼれ落ちる。

『さてと、ならわしも仕事にかかるかの』

呟き、一時、中断していたギルドネット端末へ視線を落とす。

アルトへ調査を買って出た時から呼び出すことを決めていたのは、馴染みの『エブランチル』である。ひとつふたつの手順をさめれば、さきほどまでトラを映し出していたモニターにその顔は現れ、言い淀むことなくサスは向かって造語を並べていった。

『すまんのスラー、急に呼び出して。実はお前さんにおいて探してもらいたい者がおるんじゃ。フェイオンの事故は見たか？ ああ、そうじゃ。あそこに以前、客だった輩の知り合いがおつての、その行方を知りたいと頼まれた。種族はラウア。丁度その時、ネイティブ店員をしておつたということなんじゃが、引き受けてもらえんじゃろつか？』

店の脇に停めてあった三輪ジープのわだちは、休むことなく堆積する砂塵によつてすでにその窪みを消し去られていた。表へ出たネオンは改め辺りを見回し、足元に目をやって初めてその事に気づかされる。

確かに大気は多少霞んでいるようだったが、どう考えてもそれほど勢いで砂塵が降っているようには感じられない。確かめるべくして、すでにいくらかの砂塵を乗せているだろ頭を振ってみた。だがやはり砂塵はネオンの頭から落ちてくることはなく、砂煙すら立えずただ不思議さだけをネオンの胸へ深く刻みこんませる。

店の裏手に回っていたデミが戻ってきたのは、そうしてネオンが素っ頓狂な顔をしている最中だった。ポストンバックに似た大きな袋を叩いて、やおらネオンへこう指し示す。

『帰りはコレね！』

どうやら、ネオンを送る時に使用するビオモービルは、その中に入っているらしい。

『これ、ポータブルなんだ。珍しいでしょ。ぼくが作ったの！』

だが言われたところで、いまさら驚きはしない。

『よろしくね』

ネオンはその旨を託す。

『じゃあ、最初はアーツェ砂の民資料館へ連れて行ってあげる！』

つまんだように鼻溜を潰して笑うと、天高く振りかざす指でクルリ、体を反転させてツアーの先頭を切った。

そうして歩くこと、数ブロック先。

ふたりはサスの店と同じ並びに位置する『アーツェ砂の民資料館』へ到着する。そこはちよいと風変わりな『デフ6』オヤジが管理する、無料の私設資料館だった。館内には『アーツェ』という惑星の

成り立ちをなぞるものから、赤い空や砂塵の降り積もり続ける仕組に、そこで暮らす原住種族、つまりは『デフ6』の祖先がいかに砂塵と共存すべく尽力したかについてが展示されていた。その過程で発達した鼻の構造をふくめ、デミとは知り合いらしいオヤジの解説付きで、ネオンは館内をぐるり、一巡する。

順路の出口付近では恒例のお土産コーナーがネオンの目を引き、ひっくり返せば砂塵と共に詰められたオイルが滴と垂れて時を刻む『オイル時計』や、自分の鼻にくっつけ『デフ6』に扮する鼻マスクを眺めて笑った。もちろん所持金がないなら買い求めることはできず、手ぶらのままで資料館を後にする。

次に、ぜひとも砂の中に咲くこの惑星独特の花を見てほしいと言うデミの意向で、『ポップス フラワー』という名の花屋へ向かった。その店の女主人、ポップに会わせたいというのも、デミの目的のひとつらしい。何しろデミが言うには、ともかくポップはデミの憧れの対象だということだった。大きくなったら女の子になることを選んだのも、その存在によるところが大きい、とデミは鼻溜を揺らして教える。

向かってふたりはサスの店と資料館の並ぶ通りから外れると、砂塵の堆積を防いで尖る屋根を連ねた町並みをぬった。今にも砂に埋まりそうな小道を奥へ、右へ左へと曲がり、やがて連なる屋根の向こう、温室にも似たガラス張りの店舗へ辿りつく。

定期的に回収されている通路の砂塵とは違い、ガラス張りの中にはキメの細かな砂が、ネオンの背丈ほど敷き詰められているのが見えていた。近づくにつれそこに濃い原色の肉厚な葉とも花びらともとれぬ植物が、ぎっしり植えつけられているのを目にする。その葉はどれも毒々しくも艶やかな色目で、『アーツェ』の赤い空に負けない存在感を放っていた。

釘付けで防砂用の二重扉をくぐり、店内へ足を踏み入れる。

探すポップは花の手入れの真つ最中だったらしい。来客を知らせて鳴ったベルの音に使い込まれた小さなスコップを手に花畑から、

極彩色の背景へ穴を空けたような真っ白なエプロンを揺らし姿を現していた。確かにデミがいうとおり、小柄な『デフ6』にしてはすらりとした手足の持ち主で、万族共通の清潔感に好感の持てる婦人だ。

「あら、デミじゃないの。驚いたわ、あなた、学校へ行っているのではなかったの？」

そんなポップの目が、デミを見つけるなり丸くなる。ならデミはネオンの存在を考慮してあえて造語でポップへ答えてみせた。

『違うよ。さつきフェイオンから帰ってきたところなんだ』

気づかぬはずはないのだが、聞かされたポップはとたん、そつちのけで大きく鼻溜を振り返す。

「まあ！ あの、フェイオンに？ なんてことなの？ よく無事に帰ってこれましたこと！」

手にしていたスコップを砂に刺し、デミの体を思い切り抱きしめた。

「一体どうして、そんなところへ！」

問いただせば、デミははしゃいで埋めた顔をポップの胸から持ち上げ教える。

『学校のレポートを書くためだよ。でね、あのおねえちゃんが、フェイオンで困っている時にぼくを見つけて船に乗せてくれたの。だから、お礼にこのお花畑を見せてあげようと思ったんだ』

『まあ、そうだったのね』

驚いたような目でネオンを見つめるポップの言葉は、そこでようやく造語へ切り替えられていた。

『地球の方ですか？ 大変お世話になりました。わたしからもお礼を言わせていただきますわ』

デミを傍らに姿勢を正す。ネオンは慌てて手を振り、遮っていた。

『いえ、わたしは何も……』

『中、入ってもいい？』

デミが待ちきれぬような声を上げる。とたんポップの表情はキリ

り、引きしまった。それがわがままであることを示すかのように、先程までデミを抱きしめていた両手を腰へあてがう。

『お花畑は遊園地とは違うのよ、デミ。みんな生きています。遊びで踏み荒らしてはいけません』

が次の瞬間、仕方ないと、込めた力は抜き去られもする。

『と、言うところなのだけれど、今日はあなたの恩人がお見えになっていることですし、特別にわたしの庭を案内してあげるわ』

その手が、砂の中からスコップを引き抜いた。

『やった！』

なら待望の庭へ入るためのルールは簡単だ。砂に埋まらないようエアソールシューズの裏へ『オイル時計』にも使われていた特殊な油を塗りつける。終えてふたりは足を踏み入れた。

そこには楕円の葉があるかと思えばひし形の葉が連なり、ただの球体が砂の上に並んでいるかと思えば、ぎっしり茂った木立や、乾いた枝ぶりの草木が、砂の上に所狭しと茂みを作っていた。掻き分けるように奥へ進めばその中でも、ネオンが一番目に留まった植物をポップは『アルルカマズ』だと教えてくれる。四枚の黄色い花びらに赤とオレンジの刺し色が入った手のひらほどの花を、ポップは記念にと一本、もいで手渡ししてくれていた。

その後も気の向くままに散策して、ふたりは『アルルカマズ』を片手にポップへ別れを告げる。次に向かったのは、これまた一風変わった場所、『アーツェ』スタイルとも言われるゴロ寝レストラン『アズウエル』だった。

その神妙なボーイにエアソールシューズを預け、体についた砂塵を吹き飛ばすべくエアシャワーブースを抜けた後、ふたりは簡単な間仕切りで仕切られた座敷とも取れる個室をばら撒いたような店内へ出る。そこではすでに先客たちが個室で、個々に食事と会話を楽しんでいた。

どうやら始終、砂に覆われているこの地域では、直接床に身をおくこと事態が贅沢な行為と位置づけられているらしい。多聞にもれ

ずネオンとデミも案内されたスペースでごろり、横になる。腹ばいで類杖をつき顔をつき合わせ、ゴキゲンよろしく折り曲げた足を宙で泳がせた。

『支払いはぼくに任せて。だって、おねえちゃんたちが、いっぱい買い物してくれたもん』

言われなくとも、そうするしかないだろう。アルトの船で最後のミールパックを口にしながら半日以上前なら背に腹は変えられない、とネオンは頷き、デミの提案に従った。

『えっと、食事が終わったら、このビオモバイルを組み立てて、町外れの連邦軍跡地へ連れて行ってあげる。今は使われてないんだけど、軍用機の管制塔から町も砂漠も見渡せて、観光地みたいになってるんだ。絶対にお勧めだよ。近くに間欠河川もあって、時間が合えば川が流れ出すところだって見られるんだ』

話す様は、デミがまるでこの町案内を一番、楽しんでいるのかのようではない。

ややもすればそんなふたりの間に、注文した料理は運ばれてきた。デミは懐かしのご当地メニューで、ネオンはアルトの船には装備されていなかった種類のミールパック、その皿盛だ。地球でなら行儀が悪いと叱られるだろうが、ふたりは寝そべったままでそれらを口へ運ぶ。

『ねえ、デミ？』

さなかエビの形に形成された魚のすり身をフォークの先に突き刺しネオンは、ふと、皿から顔を上げていた。

このエビの尻尾野郎！

脳裏に、しばし忘れていたトラの顔は浮かび上がる。

『何？』

鼻溜のせいで大口をあけられないためか、すすれる麺類のようなものと流動食系のがコンビになった『デフ6』の郷土料理を流し込んでいたデミが、ネオンへ目を持ち上げた。

『あたし、ここで演奏させてもらえない？』

トラの顔をかき消しネオンは思い切りよくエビへかぶりつく。

『靴代払う』

言った。

そう、こうやって観光ばかりを楽しんでいるワケにはゆかないのだ。何の手立ても持たないネオンにとってログジャンキーと呼ばれるアナログマニアらと個々に契約を結ぶことは難しく、ならばこうした公共の場で一般の客を相手にできはしないか、そう考えたのである。そしてあわよくトラの元を離れることができたなら、その後をつなぐためにも、これは試しておかねばならない大事な段取りに違いなかった。

ならそれはよほどデミを驚かせたらしい。瞬間、絶え間なく料理をかきこんでいた手も止まる。数度、瞬きを繰り返した目は見開かれ、やがて大きく鼻溜は揺らされていた。

『それ、いいよ。靴代なんか、すぐ払えちゃうよ！ うつつん、もつとすごいことになるかも！ やった、また聞けるんだ。うん決まり、決まりだよ！ 靴代、オマケしてあげられなかったお詫び。ぼくがお店と交渉してあげる！』

その後、弾むようなデミの声が交渉の場で優位に立ったことはいうまでもない成り行きとなる。

知らぬわけではなかったが、ついぞ呼びはかからなかった。サスからの通信を受けたスラーは、すぐさまブロードバンドキャストライブを開く。

『こいつはかなり、くたばってやがるなあ』

おりしも別件を済ませたばかりの霊枢船には、サスの頼みにもつてこいのスペースが確保されている。流される『フェイオン』崩壊映像を目の当たりにしてスラーは移動中の船の中で、半ば感心するかのように唸ってみせた。

『いやあ、くたばってやがるです、ハイ』

などと繰り返したのは『ヘモナーゼ』種族のモデラートである。酷く左右に離れた目を互い違いに回転させると、スラーの隣で同じようにモニターを覗き込んだ。

『これだけわんさと死体がでりゃあ、俺たちゃあ、ボロ儲けだつてのよ』

『へい、もつとも。おいらたち葬儀屋はボロ儲けでやんす』

絶妙のタイミングで合いの手を入れてみせる。そしてそつなくこなしたことに、ヒヒヒと満足の笑みを浮かべた。そんなモデラートの頭へ向かってとたん、スラーの平手は飛ぶ。実に歯切れのいい音はしていた。

『笑うな、モデイー！』

ならモデラートことモデイーの目はその衝撃に回転の速度を早め、かまうことなくスラーは言い放つ。

『いいか、今回は死体をかき集めにいくんじゃねえんだ。誰がくたばって、どいつが生き残ってるのかを探ってるのさ』

それはサスが珍しく持ちかけた頼みごとだった。恐らく互いに商売抜きというのはこれが初めてとなるだろう。おかげで『エブラン

チル』であるスラーの洞察力を動員するまでもなく、そこにただ事ではない何か潜んでいることを、ひしひしと感じとってもいた。

『ガッテンでやんす、社長。おいらたちは、探るんでやんす』

クラクラと宙を仰ぎながらモディーが、辛うじていつものルーティンを消化する。

『ようし。よく言った。それでこそスラー葬儀社の社員だ』

『あい、モディはよく言ったでやんす。モディーはスラー葬儀社の社員でやんす』

などと変わらず自らの義務を果たし、モディはようやく回転の止まった目で懲りずまたもやヒヒヒと笑ってみせた。はつと我に返り、叩かれやしないか、片目でスラーの様子を伺い見る。気配がないなら、はつと息を吐き出した。

刹那、スラーの手は飛ぶ。

パシリ、と鋭い音はまた鳴っていた。

正直なところ、このくらいの方がちょうどいいのだ。少々間が抜けていようが、種族として持ち合わせる過剰な洞察力を持て余すスラーにとって、ウソもつかなければ表裏のないモディーは気の置けない存在だったのである。

『笑いこつちやねえ。つまりサスは、俺にばれると分かってウソをつきやがったんだぞ』

『わ、笑いこつちやねえでやんす。でも、社長、探りにゆくのはウソ？ だっただんでやんすか？』

そんなモディーは再び回していた目をどうにか止めて、スラーへおそろおそろ口を開く。

『違う。サスはそうしてこの件に、何か言えないウラがあるってことを俺に伝えたんだ。いや、関わるなら、知らねえ方が俺たちのためだと思っただがるのかもしれない。それでも引き受けるかどうかを選択させたのさ』

その細い目を、スラーはさらに細めてみせた。そうして食い入るように眺めていた『フェイオン』崩壊映像から視線を持ち上げる。

薄暗いコクピット内、額縁にはめ込まれたような四角い強化アクリルの、一枚の抽象絵画かとはめ込まれた冷やかな宇宙を見やった。『以前客だった輩の知り合いだと？ 取ってつけたようなウソを言いやがって。逆にあんな退路をあけられりゃ、こちとら引けないってのが道理つてもんだ……』

『へい、引かないのが社長でやんす！』

それが独り言だったとして、聞き逃さないのがモディーだ。

『だからモディと社長は、もうこんなところまで来たんでやんす』
誇らしげと言ってモディーもまた、その顔をアクリルへと向けなおしていった。

と、それまで何一つ見出すことの出来なかった宇宙に、いつしかにわかになごめく影は、いや光か、白い砂をばら撒いたように浮かび上がってくる。それこそ『フェイオン』より運び出された遺体がつかの間、安置された連邦の臨時収容船、噂の白い船であり、周りに散らばる砂のような光こそ事態が明白となつてすでに四十三万七千コンド、早くも遺族の代理として遺体の引き取りに現れ群れる同業者たちの霊柩船だった。

それもこれも現状『フェイオン』周辺へ、身内が駆けつけようにも一般の船がアクセスすることはできないせいで間違いない。すでに『フェイオン』の管制は機能しておらず、周辺に至っては散らばる残骸の拡散防止目的で粘菌ネットが張られ、連邦警察および連邦軍がその処理に追われるばかりと近づけるはずもなかった。

サスがスラーへ声をかけたのも、その辺りを考慮してのことで間違いなく、遺体を引き取りに来たと言えれば葬儀社なら、通常、第三者に公開されない情報ものぞき見ることが可能となる。

やがて臨時収容船の艦橋とつながった霊柩船のメインコンピューターが、アクリル上に淡いホロスクリーンのワイプをかけた。要求された船体登録の確認をすませ、粘菌ネットに空いている通路を示し、ナビが指定格納庫へのガイドラインの表示を始める。

なぞればいつしか収容船は、巨大な壁と化して傍らに横たわって

いた。

そこに作りつけられた格納庫は、離着艦の効率を上げるべく上下の二層構造だ。誘導された格納庫の下層にはすでに仕事を終えた霊柩船が待機しており、そんな他船とすれ違うようにしてスラーの霊柩船は白い船へと着艦する。

『収容船の中は無重力設定でやんすよ、社長』

閉じられてゆく進入口を背に、必要のなくなった計器類を落としつつモディーが知らせていた。

『これだけ遺体が多けりや、その方が扱いやすいつてもんだらうよ』
聞きながらスラーもメインブースターを黙らせる。傍らのキャビネットを開き、中から光学バーコードの仕込まれた葬儀屋の腕章を二つ取り出した。IDを確認し、片方をモディーへ投げる。

『忘れるな。今回は引き取りに来たんじゃないぞ』

受け取ったモディーが腕を通した。

『ガッテン。モディは探しに来たんやんす。サスが嘘をついたので、ラウア語店員を見つげにきたんでやんす』

いつもより忙しくなく目を回転させ、自信ありげに言い放つ。

『よし、なら行くぞ』

完全に動力を失った船の中、体はやんわり座席から浮き上がると、逆らわず体を固定していたベルトを外してふたりは一思いに座席を蹴り越える。コクピットを抜け出し船を降りると、多少の緊張感をたずさえ搬入口と思しき巨大なハッチの傍らに据えられたゲートへ腕章の光学バーコードをかざした。

入艦時刻が明記され、ウィルスカーテンを引いたゲートが前で開いてゆく。

くぐって最低滅菌。堂々、スラーとモディーは格納庫から船内へ足を踏み入れていった。

元来ここは貨物室か何かなのだろう。競技場のごとく広大なフロアが、ふたりの前に広がる。そはすでに遺体を詰めた袋、通称、ボディバックで所狭しと埋め尽くされていた。そんなボディバックは

勝手に浮き上がらないよう、床へ磁石で固定されている。中には腐敗を防ぐための冷却材が詰められているのか、閉じられたフラスコの際間から冷気らしきものが噴き出していた。推力に変えて浮き上がるボデイバツクはまるで発射を待つ旧式ロケットのようで、それらボデイバツクの間を喪服姿の葬儀社員たちは右往左往している。見回し、最後にスラーは天井を見上げた。そこに造語の『五』が刻みこまれているを見つけ。察するに、どうやらこんな空間が他にも最低、四つはあるらしい。さすが既知宇宙一のコロニー『フエイオン』だ。出した被害者の数も既知宇宙一、といったところなのだろう。

『し、しゃ、ちよおー』

おかげでモデイーが早くも弱音を吐いていた。かまわずスラーはところどころに制服が立っているのを確認する。その制服はどうか軍のものらしく、首から端末を提げたその軍関係者は、尋ね来る者を右へ左へ振り分けていた。

つまりその端末で遺体を管理者している様子だ。

ならばとスラーはエブランチルの特性をフルに発揮する。見極めた、最も融通の利きそうな制服へ一直線と床を蹴り出していった。

『いやあ、すごい数ですな』

スラーは優勢二十三種のうちの一種、制服を着こんだ若い『ホグス』種族の傍らに立つと、まるで天気の話でもするかのように言っただけだ。

『お疲れ様です。腕章のIDをチェックさせていただきます』

だが若い『ホグス』は、スラーの社交辞令など軽く受け流すと、早速にも身分証の提示を求める。

従い慣れた仕草で腕に通したままの腕章を『ホグス』へ突き出すスラーは、従順だ。大きな瞳と肌に刻み込まれた規則的な凹凸が特徴の『ホグス』は、もうすでに飽きるほど繰り返しただるう手つきで、提げた端末の子機をスラーの腕章に浮かぶ光学バーコードへあてがい、読み取った情報が入艦記録と一致していることを確かめた。『まさかこんな事故死の遺体から転売できる臓器なんて得られないでしょうに。それでもやはり、エセ葬儀社は警戒対象ですか』

その単調な動労をねぎらいスラーは首を振る。

『規則ですから』

『ホグス』はそっけなくつき返し、続けさまモディの腕章へも子機を擦りつけた。おとなしく応じる様子は、モディーにしてはなかなかのサル芝居である。スラーは安心し、本題へ入った。

『ここにラウアの遺体は運ばれてますかな？』

だが返事はない。

『スラー葬儀社。登録霊柩船ナンバーおよび、入艦時刻、確認』

機械的に復唱してようやく『ホグス』は口調を変えた。

『ラウア？ ですか。少々お待ちください』

否や、急ごしらえ丸出しの使い勝手も悪そうな、文字で埋め尽くされた端末画面を懸命にスクロールし始める。見守りながらスラー

はついでに、こうも付け加えて言った。

『どうもハウスモジュールのネイティブ店員ってことで、フェイオンへ出稼ぎに来ていたらしいんですがね』

片耳で聞きつつ『ホグス』は連なる文字を画面上部に押し上げては引き戻し、左へ流しては右へ呼び戻しを繰り返す。スラーへ顔を上げた。

『残念ですがラウアの遺体は収容された記録が、DNAレベルでありません』

『なら、他のフロアにでも？』

たたみかけてスラーは、適当に隣を指差す。だが『ホグス』が口にしたのは、決定的な一言だった。

『いえ、収容はつい先ほど、全遺体の回収が終了したとの知らせがありました。ですのでこの収容船には一切』

『どうということだ、と思う前にスラーは確かめる。』

『なら、ここ以外に収容先は？』

『ありません。粘菌ネットへの付着物検査はまだ先になりますが、申請書を出されますか？』

『ホグス』は提案して端末画面をまた切り替え始める。だがおそらく、貨物に紛れて密航していない限りコロニーへのチェックインデータは残っており、それを元に遺体回収は進められているのだから回収が終了した地点で『ホグス』の提案にはほぼ期待できなかった。つまり相手は探し出すに値すべく生存者なのか。結末にスラーはついで、ほくそ笑む。隠してパチリ、額へ手のひらを叩きつけた。『こりゃ、身内の方が早とちりされたかな？』

その隙間からチラリ盗み見たのは、モディーの姿だ。モディーもそこでヒヒヒ、と笑ってなんぞいる。様子に『ホグス』が怪訝な顔を向けたなら、スラーは思いきりの力でモディーを弾き飛ばしていた。立ち位置を入れ替わり、『ホグス』へとましく立てる。

『どうも先方さんは、ややこしい事情の持ち主のようですね』

吹き飛ばされていたモディーに『ホグスは』少々驚いたようだ

が、そこから先は、その目をぞき込んだスラーの独壇場だ。

『あなたなら、お分かりでしょう？』

お分かりでしょうと問いかけることで、分からないハズはないと言い含めてやる。

『ご家族さんへの連絡が途絶えたのは、この事故に巻き込まれたせいではないのかもしれませんが』

振った首で、ひたすら深刻と眉をひそめてみせた。

『そうは思いませんか？』

その深刻さに『ホグス』を巻き込む。ままだにホグスへ詰め寄った。

『出稼ぎを口実に、失踪しちまつたつてコトもありうる。いやあ、なんてことだ』

『……はあ、まあ、色々と事情があるんでしょう』

もちろん責任どころか『ラウア』が失踪した理由など、ホグスにはまるで関係のない話だが、続きすぎた単純作業がこの不条理な展開への抵抗力を奪ってしまった様子だ。スラーに押されて生返事なんぞを返してみせる。

『そうでやんす。失踪でやんす。失踪したでやんす。一大事でやんす！ 探さなければならぬでやんす！』

見て取り飛び込んできたのはモディーだった。

『そうなんですよ。ウチとしては誠心誠意がモットーでしてね。ガキの使いじゃあるまいし、手ぶらで帰るわけにはゆかないんですよ』
味方につけて、スラーも調子をあげる。

『社長の誠心誠意は、本気でやんす！』

こうなればスラーとモディーの二部合唱だ。

『せめてここで本当に働いていたかどうかくらいは、確認して帰ってやりたいんですが。そういうのは、そちらさんで、お分かりになりませんか？』

『だから社長は引かないでやんす。モディーにも、教えるでやんす』
そうして並ぶ顔を、『ホグス』はのけ反り見比べる。ついにその口をこう開いた。

『分からないことは、ありませんが……』

端末へ落とす視線。

『ハウスマジュール、ラウア語力カウンターでのネイティブ店員でしたね？』

確かめ、コロニーの出入記録を手繰り始めた。一息おき、名前をスラーへ尋ねるが、もちろん知る由のないスラーは適当な名を挙げて誤魔化す。

『いや、この調子だと、あんがい偽名を語っておるかも知れませんな』

とたん『ホグス』は、けたたましい声を上げ、笑い出だした。何事か、とスラーにモディイはぎよっとする。知る由もなく『ホグス』は、身を固くしたふたりへ実に愉快そうに明かして言った。

『これは、すっかり無駄足でしたね。残念ですがハウスマジュールミルトでは、利用者の激減から長らくラウア語力カウンターのを営業を中止しております。ゆえに、ネイティブ店員の募集はいたしておりません。一体も收容されていないのは、そのためかと思われれます』
『は？』

おかげでスラーとモディイは顔を見合わせていた。

『ハウスマジュールの運営は連邦の端末で管理されていますから、この情報に間違いはありません』

そうして恐る恐る、その顔を『ホグス』へと向けなおしてゆく。だがいくらのぞき込んでみたところで、スラーには『ホグス』の顔にウソ偽りを見つけることができなかった。『ホグス』こそ、今最も誠心誠意この場で対応している。

ならば、とスラーは我に返っていた。あれほどはつきり『ラウア店員として働いていた』と言ってサスが提示し唯一の手がかりはガセだったのか、と考える。でないなら、そもそもサスは『ラウア』語力カウンターが閉鎖されていることを知ったうえで、あえて自分たちをここへよこしたのか、とも思い至った。いずれかが判然としないうのは、この依頼そのものが怪しい類だと底を割っているせいには他

ならない。従い、なら、このないもの探しで確実となるものは何なのか、と考えた。そうしてスラーは自分たちが『ラウア』語店員を捜しに足を運んだという記録が残る以外、他に何も無いという事実に行き当たる。

とたん、スラーの脳裏に一撃は降りおろされていた。

おそらくそれは閃き、というヤツだろう。

『そいつはどうも、お手を煩わせましたな』

同時に感じた危機が早急な店じまい、を要求する。スラーは手のひらを返したようなスラーをうかがうモディーを突いて、外へと踵を返していた。

『利用者として乗り入れたラウアは、同系種族のイラウド語力ウンターを利用しているようですが、念のため、そちらもチェックしてみましようか？』

『いやあ、結構。ひとまずこのことを先方に伝えることにしますよ。何しろ、ここから先は葬儀屋の仕事ではないかもしれない』

『ホグス』が有難いほどに気を利かして呼び止めるが、おどけた仕草でもかく断る。

『社長は葬儀屋でやんす。モディーも葬儀屋でやんす。社長は葬儀屋でやんす。モディーも葬儀屋でやんす』

モディーは繰り返し、その体をスラーは必死に外へと引っぱった。

『お疲れ様でした』

遠ざかってゆくふたりへ『ホグス』が敬礼している。だが敬礼はすぐにも、新たに駆けつけた葬儀社に解かれていった。

『おいちゃん、おいちゃん……』

どこからともなく甲高くも細かい声が、もれ聞こえてくる。

『あれ？ お留守みたい』

何ひとつ動く気配のない抜け殻のような建物に響きわたるそれは、むしろ不気味でさえあった。

かき消しザーツ、と乾いた音は挟み込まれる。

『わかつてんのよ、あんたところですよ！ ウチのアンテナ、吹き飛ばしたのは！』

『こらあッ。弁償しろッ。この悪徳商人がッ』

『おたくですの？ こまりますわ、ベランダが台無しですもの。このままではちよつと……』

『えー、弁護士に連絡させてもらいました。しかるべき措置をとらせていただきますので、あしからず』

『むちゃくちゃしないでよ！ 一体、屋根の修理に幾らかかると思つてんの！ バカ！』

続けさま、罵声に次ぐ罵声が飛び交った。だがどの声として同じものはなく、それぞれにそれぞれの思いを吐きいては怒りのバトンをリレーしてゆく。

正体を明かすべくゆつくりと、しかしながら確実に、焼け焦げた電極の隊列は狭い階段をチエックしつつ昇っていた。手がかりの座標に従い辿り着いた惑星『Op・1』、その雑居ビル外付けの階段を上へとテンてちは向かう。

ビルの所有者は種族『テラタン』、名前はトラ・イアドとあった。輸入手続きの代行会社、としてビルは登録されているが、取引の形跡はない。おそらくは架空登録。もぐりのギルド商人あたりが相当だろう、というのが船内誰もの見解だ。

(なんや、声がしとるみたいやけど、誰かおるんか?)

先頭に行くクロマの肩越し、背後から突き出した腕でテンは動話を つづつた。

(わからん。でも、なんかヘンや)

クロマがすぐさまつづり返す。

時間帯からして辺りは暗い。『デフ6』サイズに設えられた手狭な建物のため階段は縦一列になって進まざるを得ず、テンたちはラバースーツを闇に溶かし踊り場ごとにとぐるを巻くと、またじわり、足を進めた。

『商談途中だったんだぞつ。どーしてくれるつ。通信妨害程度では済まされんと思えつ』

いきまく声がまた、細い階段の上から流れこんでくる。

これで三度目だ。たどり着いた踊り場でクロマが電極を頭上へかざした。目指す屋上からももうひと班、アプローチを試みており、何者かが潜んでいれば必ずどちらかが八手合わせる段取りである。

そんな影へ目を凝らしながらさらに上を目指せば、もれ聞こえていた声もまた大きくなっていった。やがて別隊の足音が聞こえ始め、誰に会うこともなく次の踊り場で、双方は八手合わせる。つまり辻褄を合わせてちようどと、声は合流した踊り場のドア向こうから聞こえていた。

(一部屋あつたけど、もぬけのカラやつた)

屋上側の先頭がクロマへ指を折る。ドアへこすり付けた耳で音源に間違いがないことを確認しクロマもまた、ドアを指差し返した。

(ここや)

屋上側の先頭もドアを睨む。脇に挟み込んでいたスパークショットを、そこへと振りかざした。すかさずクロマもノブへ手をかける。

(アニキ、突入するで)

余る腕をテンへ振った。

ならテンも後続へ大きく手を振り上げる。

(三、二、一!)

つづられたカウントが切れると同時だ。

クロマがノブを一息に回した。

鍵はかけられていない。

ドアは素直と浮き上がる。

引き開けると同時だった。電極を突きつけていた屋上側が部屋へ身を滑り込ませる。連なり後続が、次々と中へなだれ込んでいった。途切れたところでクロマも、テンも、構えたスパークショットを盾に踊りこむ。

全員の目と電極が、なめるように室内を見回していた。

部屋は予想以上に狭い。だからして一目で、そこに動く物がないことを確かめ終えていた。ただ傍らに歪んだ保冷庫がひとつと、その前に座っていた者の重みを残して窪んだ椅子が一脚。向かいには数種の端末を乗せたデスクが据え置かれているのみである。

『以前から、ゴミのことも申し上げておきたかったんですの。この際、ここではつきりと言わせていただきますわ』

声はそれら端末のひとつからもれ出していた。そしてまた乾いた雑音は挟み込まれると、一巡したらしい留守録を巻き戻す。伴い正面のディスプレイにぼんやり明かりは灯されていた。唯一、映像を伴うメッセージを流してあの甲高い声を、テンたちの前で流し始める。

『おいちゃん、おいちゃん……あれ？ お留守みたい。じゃ、船は他の倉庫だね』

そんなディスプレイから見覚えのある顔は二つ、幼体の『デフ6』と共にテンたちをのぞき込んでいた。

窓はない。

代わりとして、壁面にホロスクリーンを展開するのがシャツフルの気分転換だった。そう言えばたいいは故郷の風景をロードでもしているのだろうと思われがちだが、さして眺めるものがあるわけでもない辺境の地に赴いてからすでに二百五十万セコンド。飽きもすればいかにもセモノ臭く感じられてシャツフルは今、あえて船周辺の風景をそこにはめ込んでいる。

現在、他船が速やかに目視確認できるよう表面を鏡面化させたこの船、臨時収容船は、周囲のわずかな光をも反射して一見すると真っ白な装いとなっていた。ホロスクリーンはだからして光の塊にも似た自船と、そこに群がる数多の遺体運搬船や引き取りに現れた霊柩船を映し出している。

腰を下ろした仮想デスクの上には繰り返し再生し、飽きるほど眺めた極Y視点の突入ムービーが投影されたきり。かけた一時停止にその動きを止めてもいた。

ホロスクリーンを眺めて今一度、シャツフルはそんなムービーへ視線を落とす。

忘れることは出来ない。

旧F7ラボ、そのラボが独占的に使用していたハブAIの名から呼ばれることとなった通称『イルサリプロジェクト』の存在を裏付ける、それは唯一の残存物だった。

見据えるほどにシャツフルの眉間に陰鬱なシワは刻みこまれ、同時に胃の腑から酸いものがこみ上げてくる。

なるほど、これが憎しみというやつか。

ひとりごち、たしなめるように歪んでいた顔をひとつ撫でつけた。『手間をかけさせおって』

吐いて気持ちを落ち着かせる。

思い起こせば主要二十三種とその他雑種が共にプロジェクトを進めるなど無理があったのだ。なにしろ二十三種が既知宇宙で優勢となり、主要と呼ばれることとなった理由の一つに他種族と比べケタ違いに寿命が長い、というものがある。それはとらえる物事のスパンやスケールの違いを生み出すと、互いの間には拭うことの出来ない溝が生じ続けていたのだ。

せいぜい彼らには個を救ってもらえればいい。

プロジェクト開始の際、それはクレツシエが言っていた言葉だ。連邦政府も二十三種の共通見解として、生まれては剥がれ落ちる皮膚がごとく代謝を宿命づけられた個を、それらはまだ定義することの出来ない生命を、いくら救済し続けたところで何のたしにもならないと結論付けている。あらんや命の重さは惑星以上などという考え方はナンセンスの極みであり、それら儚さこそが真の姿である以上、逆らってまで救済することに意味を見出していなかった。むしろ大いに代謝を続けるべきだ、とさえ考えているのが実際となっている。

この話もそれらを含み展開されていたなら、プロジェクトへ用意された職員、ルーツもしかることながら互換性が高く順応性も期待できる雑種族の『ヒト』へは、反発を回避すべく『イルサリプロジェクト』はイルサリ症候群治療計画である、と伝えられていた。そして陳腐な理念に喜び勇んだ彼らもまた、個を救うべくプロジェクトへ取り組んでいる。その実、個の代謝をいとわず回り続ける社会の、いや『世界』というシステムを継続させるべく研究に従事していたのだった。

だがこれまで通りと価値観の異なる彼らにこれらの話は理解できず、プロジェクトの真の目的を知った彼らは臨床実験寸前のところでデータを持ち出し、ラボ解体という名のクーデターを起こしている。軍さえ出動する大騒動の一部始終はシャツフルの記憶にもまだ鮮明で、そこまでは計算通りだったのだ、と唇へ力を込めていった。

必要とするほど『世界』というシステムは今、確かに危機に瀕していると言えよう。何しろ主要二十三種とその他の間に拭えぬ溝があるように、種族間のみならず同族間での地域、文化、経済は互いに互いを必要とする関係であればあるほど一方で軋轢を生み、紛争や格差、そして確かにイルサリ症候群という副産物さえ生み出し続けている。それは近年、抱えておれる圧の限界を越えつつあり、越えてしまえば機能不全、システムは停止を免れぬほどでもあった。

『イルサリプロジェクト』の真の目的はその回避にある。軋轢を取り除き、システムを潤滑に稼働させ、そうすることで支える流通全ての安定を維持。個の生死さえ支えて代謝を続ける「ある」と信じて疑わない明日という現象、それらカタチを持たぬからこそ維持メンテナンスの難しい、個と違い一度、崩壊してしまえば代わるもののない『世界』の安定を継続させることが狙いだった。

これをボーダレスやグローバル化を超えた新たな『世界』の枠組みだ、と言つてのける上層部も多い。あながち間違いでもなく、かつて既知宇宙全域で一世を風靡したトニツクの動話、その亜種でもあると考えられた。用いて言語を、連なる思想に価値観、地域性を統一、システムの機能不全から回避できるのであれば、皮肉もなにも吹き飛ぶだろう。証拠に、プロジェクトには回収し続けた極Yのトニツクの動話画像と、造語普及前、異種間のコミュニケーションツールとして多用されていた地球のアナログ楽器が利用されている。

強すぎたその影響力は劇薬でしかないが、使い方次第で薬にもなる。

そういうことだ。

そして急に瀕した我々に必要なものこそ、コントロールできる毒だ、というわけなのである。

果てにあの騒動をうまく抑えることができているなら、とシャツフルは振り返った。そう、雑種族の反発を煽るべく真の目的をもらしたのはシャツフル自身だ。ならば今頃、自らが一手に『イルサリ

プロジェクト』を引き受け、表ざたに出来ぬAIとは違い、実在するドクター・イルサリとして表舞台で個を救う者となっていたらうと考える。連邦内において今後、全ての戦略を握る地位に立てたはずなのださえ奥歯をかんだ。

だがもくろみは中途半端なままとなり、中枢となるハブAIの確保は果たしたものの臨床実験にまでこぎつけていた肝心の実験データはいまだ取り戻せていない。

また酸いものがこみ上げてくる。

たまらずシャッフルはそこで画像を切っていた。

と、入れ替り表示は灯る。

表で部下が入室許可を求めていた。

応じればプラットボードを携え部下は部屋へ現れる。今しがた極Yより通信があったと告げてプラットボード上へ人形を立ち上げると、手際よくシャツフルへ向けなおした。

その人形が踊りだすと同時に吐き出されてくる翻訳は、与えたもう一つの座標が『デフ6』エリア、ギルド商人の非対面式店舗であったことを、すでにもぬけのカラだったことを知らせている。さらに店舗内の留守録映像に対象が映っていたことを、ふまえて送信ラインであるギルドネットを辿り、惑星『アーツエ』へ向かっていることを告げもした。

人形の動きはそこで止まり、部下はシャツフルへと顔を上げる。

『アーツエ、ですか……』

呟くようにその名を繰り返した。

『ここからOp・1までの距離と、あまり変わらん』

返し、シャツフルは仮想デスクのコンソールを弾く。おおよそなら把握している『アーツエ』の正確な位置確認にとりかかった。

『彼らに任せるおつもりですか？』

『フェイオン以上の惨事は起きんよ』

部下の問いかけは素早く、シャツフルもまた十分承知していると、言ってきた。

『ですが我々の船は彼らよりアーツエに遙かに近い位置で待機しています……』

食い下がるその顔へと目をやった。

『対象を確保することは重要だ。だが極Yを使うのは、彼らから動話を剥奪するためでもある。それが上の考えなら従うのが我々の役

割だ。乗り込んで手柄を奪うわけにはいかん。ただ』

一呼吸おいて、知らぬうちに詰まっていた眉間を開き、付け加える。

『その極Ｙが対象を逃し続ければ、確かに本末転倒ということにはなるがな』

『すでに一個分隊の準備は整っている状態です』

待っていたらしい。部下の段取りはよかった。

シャッフルはそんな部下の目をのぞき込む。同時に、向かえば上の指示に背くこととなるな、とも考えた。だからこそもう一度、勝負をかけるか、とひとりごちる。そしておそらくこれが最後のチャンスだろうと感じ取りもした。

『確か、アーツエには連邦軍基地の跡地が残されていたな』

やおら仰いだ宙へ向かい吐く。

『視察、されますか？』

などと、部下の切り返しは絶妙だ。

『そうだな。ここも一段落つきつつある。たまには貴重な資源のす払いにつとめるのも悪くない』

あえて放ち、打って変わってシャッフルはその表情を引き締めた。『分隊員には必ず絶縁スーツを着用させる。それから実弾の携帯は認めん。実験体は生きたままで確保したい。もちろん極Ｙと八チあわせた場合、我々は援護に回る。だが彼らがしくじりそうな時は我々の番だ。遠慮はするな。後の責任はわたしが取る。確保につとめる』

聞き終えた部下が、早速にも制服の胸元からケーブルを引き出し、引き出していた。

『了解しました』

ケーブルの先についたパッチをこめかみへ貼り付ける。骨振動型のそれで声を拾いながら、別れてぶら下がるケーブル途中のマイクを使い、通信を飛ばした。二言三言で、あいだ逸らしていた視線をシャッフルへ戻す。

『六百セコンド以降でしたら、いつでも出発可能です』
『分かった』

ならば視察で席をはず件を、うまくクレツシエへ伝えなければならぬ。出来るかどうか疑問は残ったが、やるしかないと言った。シヤツフルは階級章を胸の光学バーコードへ転写させた。埋まっていた椅子から腰を上げる。前で部下が静かに頭を下げていった。

その六百セコンド後、一艇の巡航船は『フェイオン』の傍らに停泊する白い船から離脱していった。そこにシヤツフルたちと、何も知らず『アーツェ』で過ごす誰もの運命もまた乗せて。

何もかも止まってしまったかのようだった。痛みも、動悸も、そしてあれほど騒々しかった幻覚さえも、時がちぎれた今となっては欠片すら残っていない。

ただ吸い付くような闇だけが感覚の全てを塞ぐと、静寂の中をぼんやり漂うがごとく穏やかなひと時はアルトに訪れていた。

それは泳ぎ疲れた午後に覚えるような、まどろみによく似ている。根拠なき心地よさに満たされた惜しみなき敗北感だ。

身を任せるほどそれはやがて至極単純な眠気へすりかわってゆく。外界とを分け隔てていた輪郭を、身体というアルトの境界線を、曖昧とさせていった。果てにふつり、と困う輪が途切れたその時、内より闇へ、世界へと体は、その感覚は溶け出してゆく。

流れを止める術などありはしない。

だからして果てまでを覆いつくさんばかり肥大していった。

果たしてナニが己で、ドレが世界だったのか。

追いきれなくなるに時間はかからず、暗がりの彼方でひとつ、またひとつ、混同されて己が手足は消え失せてゆく。もちろん痛みひとつなくもがれてゆく我が身に危機感がなかったといえはウソになるだろう。だがもはや取り返すなどできそうもなく、形式程度に訪れた危機感も通りすがりの他人かと手遅れだと言つてのけ、アルトの前を通り過ぎて行く。

ここにあるのかないのか。やがてアルトにとって自らの体は判然としなくなっていた。確かめるべく動かそうとしたところで、どこに力を入れるべきだったのかすら思い出せないありさまとなる。やがてそう考える意識だけが、それを構成する言語だけが、闇の中でアルトという領土を主張し続ける浮島とポツリ、残され漂った。その霞のような現象が唯一の証だなどと、まどろみに襲われつつある

今、危うさは不安を越えてアルトへ恐怖をただ抱かせる。
眠るな。

黙することこそ死だと、アルトは己へ訴えた。
言葉を、思考を、手放すまいと手繰り寄せる。

しかしながら眠気に押された思考の実力など、しれたものだ。言
葉はただ支離滅裂に連なる、やがてていを成さなくなってゆく。

食べたシシカバブが汚れつつ、シミに。
ハルスローでドック、は『九〇〇〇』。
クセが直す、ことへ。

ただ自らの解体へと拍車をかけていった。

抜け出すさ。

いつか。

聞きつ。

りにさ。

何……。

……。

そうして途切れる、思考と呼ばれた連続。

だがそれは入れ替わりと起きていた。

指先の感覚が点と舞い戻る。

何かが触れている。

きっかけに途切れたはずの思考は再び連続し始めていた。

瞬間アルトの身体は、その指先を起点にして取り戻されてゆく。

闇の中、身体という境界線を一気に編み直していった。

世界から切り取られて目覚める。

いや、目覚めたと感じ取っていた。

真っ先に確かめるのは、そのきっかけとなった指先だ。

そこにぬるり、とした感触はあった。
こすり合わせてその感触を確かめなおす。
覚えはあった。

過つたとたん、興奮剤を投与されたかのように血圧は上がる。
血液だ。

言葉が脳裏で明滅していた。

と、それは指先で固く引き締まる。あつという間に手のひらへ張り付くと、一枚の面へ様子を変えた。面はすぐにも曲面へとしなり、ほどよく馴染むままそこに手のひらを貼り付ける。

確かめて、そこへ視線を向けていた。

周りは変わらず闇だ。だがそうしてうつむいた手元だけが、ほんのり明るいことに気づかされる。いつしかそこだけがシミ抜かれたように闇は切り取られると、先ほどから触れているものをのぞかせていた。

ケースだ。

筒状にしつらえられた、それはアクリルで出来た筒状のケースだった。透明のその中には、布をかけられ横たわる何者かが見て取れる。覆い切れなかった布の端から尖った靴先は覗き、確かめアルトはケースへ視線を這わせていった。

と耳へ罵声は唐突なまでに投げ込まれる。

『あいつが裏切ったんだ！』

他に誰かいたなど思いにもよらず、度肝を抜かれて顔を跳ね上げていた。瞬間、手元の光が魚眼レンズを覗いたがごとく周囲へ広がる。一気にアルトを包み込むと、放り込んで世界を闇から反転させた。それまでであった静けさは遠く果てへ吹き飛び、刺激の洪水がアルトを襲つ。

鳴り響く警報音。

重なつて繰り返される機械的なアナウンスの声。

船内なのか、極端に狭い通路は点滅を繰り返す警告灯にコマ落とされ、実際の距離をひどくつかみにくいものに変えている。そして

何よりけたたましいのは、ケースを乗せて潰れそうに軋むストレッチャーの音だ。息せき切って床を打ち鳴らす自らの靴音も、カンに障って仕方がない。アルトはいつしか触れていただけのケースを力いっぱい押すと、その光景の中を懸命に走り抜けていた。

『こうなれば残りの合流は無理だ！』

あの声は言う。放つ人物は真正面にいた。進行方向に半ば背を向ける格好で、アルト同様ケースへ手をかけ、こちらを向いて引っぱっている。

『筒抜けなら、艇には乗れない！』

言われてアルトは、そう怒鳴り返していた。

『二人なら……』

彼が言いかける。瞬間、その顔は殴りつけられたかのごとく、あらぬ方向へ振れていた。

着弾だ。

『トパール！』

叫ぶ。

食い込んだ炸裂弾が、次の瞬間にもトパールの脳髓を木っ端微塵と吹き飛ばしていた。避けてアルトは反射的に手をかざす。あのぬるりとした感触は指へはりつき、崩れ落ちたトパールの体が丸太のように転がった。勢い余ったストレッチャーはそこへ乗り上げるとバランスを崩してよれるように倒れる。押さえ込み切れずねじ伏せられて、アルトも床へ身を投げ出していた。

『統制の本格的な足がかりとします』

床の向こうから、声。

いや、もうそれは床ではない。三重にも引かれた嚴重なウィルスカーテンだ。声はその向こうから聞こえていた。

『非言語支配の幕開けですか』

『あの影響力で、極Yの動話がそのヒントを与えてくれました』

『皮肉なものですな。彼らが主要二十三種に名を連ねていれば、これほど大事にはならなかったものを』

『冗談を。強すぎる影響力など劇薬そのものです。扱うに神経を使うだけの厄介ものに過ぎません。我々にはコントロールできる程度の毒があれば十分なのです。それ以外は排除します。トニツクのよ
うな騒ぎは、もう結構ですから』

『確かに。しかしF7の者は、イルサリ症候群の治療に関する研究だと信じ込んでいる様子ですが、彼らへの隠ぺいもそろそろ限界では？ 今後、彼らには何と？』

『しよせん短命なヒトには、わかり得ない論理です。説明する必要も、説得する必要ありません。彼らにはせいぜい個を救ってもらえば、それでいいではありませんか。我々主要二十三種は定義できないそれら生命よりも、その現象として確実に存在するこの世界の存続にとめるだけです。この世界がなくてはまた、不確実な個でさえも、その存在が危ぶまれるのですから』

『了解しました。ところで、近く行われる臨床実験には同席されるご予定で？』
『完成したのなら、息抜きにはちょうどいい演奏会となることですよ』

と、聞き入っていたアルトの肩を何者かが叩く。

『おい、気をつける。そのカーテンはきつすぎるぞ。一面の皮が剥がれるぜ』

まるで盗人のように驚いて、アルトは振り返った。

『いや、パスの再発行を……』

が、そこには先ほどまで懸命に押ししていた、あのアクリルケースが横たわっている。

声の主は見当たらない。

いつしかアルトは立ち並ぶ端末に埋め尽くされた部屋の中にいた。足元をケーブルは大蛇のように這い回って埋め尽くし、傍らには極Yの通信機、プラットフォームが開き置かれている。散らかった仮想デスクは取り止めのないメモを記したホログラムを雑然と周囲に立ち上げ、主の活動を知らしめていた。

そして静寂。

あの話し声も何も、何も聞こえてはこない。時折、端末が、この部屋の鼓動のように低く機械音を響かせ、それにあわせてプラットフォーム上の極Y映像が、しなやかと動話を綴り続けるのみだ。

見回しアルトは、恐る恐る足を進めていった。

真つ先に、倒れ掛かってきたあのアクリルケースの中を覗き込む。カラだ。

開かれたケースは、そこに横たわっていただろうモノの窪みを残して、あざわらうかのようにアルトを見上げていた。意味もわからぬまま、分からぬものにほっとしてアルトは胸をなでおろす。そしてまるでずつとそこにいたかのように、背後の椅子を引き寄せどっかと腰を落とした。瞬間、言葉は口から飛び出す。

『イルサリ。ここでは禁止したハズだ』

その突飛とも思えた言葉に間髪入れず答えを返してきたのは、合成音声だ。

申し訳ありません。定刻の覚醒問診を行った際、出て行かれてしまったようです。

聞いてアルトは立ち上がる。

端末の一角へ歩み寄った。

その電圧を切る。

スモークのかけられていた一角に、覗き窓のついたドアは浮かび上がっていた。と同時に、かすかに漏れ聞こえる柔らかな音階が、遠くくぐもった音でアルトの鼓膜をくすぐり始める。歩み寄り、寄りかかるようにして窓へと顔を近づけていった。

向こうに広がる部屋は四メートル四方ほど。中央にアンプのような機材が数個、置かれ、華奢な背中はその腰かけていた。見つめるアルトの視線に気づいたか、すぐにもねじれて振り返る。

みつかつちやった。

ドアのせいで声は聞こえはしなかったが、はっきり口はそう動いていた。首から楽器をさげるとネオンはそこで、悪戯げな笑みを浮かべてみせる。

声を上げ、跳ね起きていた。

闇雲に振り回した腕が何かを倒す。

神経質な音が床で弾けていた。

かまうことなくアルトは両目を見開く。

そこに掃きためられたような生活備品は、山と積み上げられていた。困って、使い込んだ分、黄ばんだように見えるベージュ色の壁が立ち塞がっている。作り付けのロッカーとほぼ同じ外見のバスブラスが並び、離れてポツンと貧相な丸テーブルが平衡感覚も危げに固定されていた。そんなテーブルと向かい合うように据えられた調理台には、日々の酷使を訴えて焦げがこびりついている。

それ以外、ここには誰の姿もない。

ただ寝息がごとく空調は穏やかに作動し、そのかすかな音でもってして周囲の静けさを強調していた。間違いなく停泊中の船の中、アルトは後付された居住モジュールにいる。当然といえば当然だった。そのハッチに腰掛け、ライオンの放つメッセージを聞いていたのである。よもや地面へ吸い込まれるなど、体が闇に溶け入るなど、現実にかき起さるはずがなかった。

幻だ。

永らく忘れ去っていた興奮剤の幻覚。

だが幻を見た、ということだけは事実だった。その証拠に葬り去ったはずの記憶は、思い出すなどという言葉ではあまりにも生ぬるい勢いで、アルトの中へ怒涛のごとくまき散らされている。

確かに記憶を管理しているのは脳そのものだろう。だが管理されている記憶とは、そこに隷属する肉体の受けた刺激によって構成された概念の総体である。ライオンの運んだ声をきっかけに、それら肉体に書き込まれた感覚の記憶を、どうやら一息に体験しなおした

様子だった。言い換えるなら感覚記録のローディングか。しかも耐えうる限り最大、かつ最速のローディングだ。おかげで伴う感情のアップダウンは激しかった。そしてそれらは、以降、積み上げてきた記憶ともまた、噛み合わずにせめぎ合う。

怒り。

希望。

憎しみ。

疑念。

決意。

自信。

恐れ。

不安に満ちた迷いと、ささやかな愛情。

そして芽生えたばかりの我。

詰め込み膨張した頭をアルトは両手で抱こんだ。

苦虫を噛み潰すかのようにギリリ、こめかみを窪ませる。

刹那、ありつたけの声を吐き出した。いや、それは叫び声に近かったかもしれない。自分でも驚くほどの大声だった。忘れ去っていたアルトでありアルトでない世界の記憶と感覚、感情の全てをそうして切り離す。

叫び終えた喉がひりひり、痛んでいた。

痛みが今、ここに在る己が誰かをより確かなものへ、変えてゆく。途方もなく疲れたときのように脳の芯が痺れていた。紛らせ、抱えていた両手でアルトは何度も乱暴に顔を拭う。強張ったままの肩を掴み、揉みほぐして大きく一息、吸い込んだ。

ようやく持ち上げた顔で正面をとらえる。

慣れ親しんだ部屋は、それこそが心遣いだといわんばかり、すまし顔でたたずんでいた。あまりの肩透かしに呆けて見回せば、寝かされていたマットレスへ投げ出していた足が他人のもののように視界に映りこんでくる。

おそらく、ここへ担ぎ込んだのはライオンだろう。

靴すら履いたきりの足を自分のものにすべく、アルトは重い体を捻って床へ足を下ろした。違和感、そのとき靴底から伝わってくる。

何か踏みつけたようだ。

自然、視線は落ちていた。確かめゆつくり靴先をねじる。床の上を滑らせたなら靴底から流れ星のごとく尾を引いて、『アーツェ』独特の細かい砂塵は現れていた。どうやら跳ね起きた拍子に倒したのはコレだったらしい。傍らにはまだ半分ほど中に砂塵を残したガラス瓶もまた転がっている。砂塵は踏みつけた場所以外にも点々と散らばり、またひとつ後片付けが増えたと瓶へ手を伸ばした。

拾い上げかけて、動きを止める。

瓶の中だ。砂塵に埋もれる何かはあった。

それは雑然としたこの部屋に似つかわしくないほど艶やかな色味をしている。

瓶を拾い上げるより先、アルトはそれをつまみ出していた。目の高さへ持ち上げたなら、覚めてすぐ目にするにはあまりにビビッドな赤とオレンジは飛び込んでくる。それは人工的なまでに発色鮮やかな『アーツェ』の花だった。

よもやこんな所にあるはずもない花に不意をつかれて、至極単純に美しい、と心の中で呟く。そして誰が一体こんなところへ、と自らに疑問を投げかけ、よもやあのライオンがと想像して、今度はまさか、と削げた頬で一人、笑った。そんな少女趣味ならそうなる予定に胸躍らせているデミの方が至極妥当だろう。

とたん存在は脳裏へ浮かび上がっていた。

弾かれたかのごとくマットレスから立ち上がる。

浮かんだままに追いかけて、居住モジュールの薄いドアを体当たりでスライドさせた。

通路を船首へ向かう。

さなか、聞こえてきたのは柔らかなあの音階だ。

これもまた記憶の続きなのか。

手繰り寄せ、簡素なスチール階段へと通路を折れた。
踏み外しそうになりつつ駆け降りる。

正面突き当たり、狭い踊り場を挟んだハッチは開け放たれたままで、うっすら積もった砂塵越し、ドックの天窓から降り注ぐアメ色の光を投げ入れていた。柔らかい音色は、そんな光の向こうから聞こえてくる。

それは自らが蒔いた種だ。

辿りつき、目を細め、アルトはハッチの縁へ手を掛けた。

膨張する光を突き破り、一思いに船から身を踊らせる。

止められた三輪ジープの位置は、最後に見た時と変わらない。

しかしながらその荷台に何者かの影は揺れていた。

同じ背中だ。

背中はずぐさま視線を、いや、船から飛び降りたアルトに驚き、振り返りもする。ネオンの目がアルトをとらえていた。

ただそれだけだ。

ただそれだけのために、全ては目に見えぬほど鈍磨なスピードで回転を続けていたらしい。

「な、なに？ そんなに勢いよく飛び出してきて。顔、怖いし」

荷台から立ち上がったネオンが言った。

「でもその様子じゃもう、大丈夫みたい」

肩をすくめて笑いもする。

「って、わたしの話、聞いてる？」

アルトの焦点を探ると手を振った。言われてようやく目をしばたかせたなら、反応が返ってきたことに、ネオンはひとまず安心した様子だ。

「デミと町から帰ったら、ライオンがメッセージの再生を始めたよ。たんにあなたがひっくり返ったって大騒ぎしてたのよ。で、ビオモールビルでデミにサス呼びに帰ってもらったのに、サスは今、あなたを病院に運ぶのはマズいって言い出して。それからまる一日かしら。あなた、眠り続けてた。って、ちょっと、聞いてる？」

眉をひそめ、渋い顔を今度は突き出 \yen してみせる。

「あ、ああ……。さっきの音は、お前なのか？」

あやふやに答えてアルトは確かめた。

「そうよ。別にタダ聞きだ、なんていいませんから」

素直に頷き返したネオンは憎たらしげと表情を反転させる。

「それよりも安心して！ 靴代を返せるメドは立ったわ。デミが案内してくれたレストランで明日の夜、演奏させてもらえることになったの。さっきのはその準備。ラッキーよねあたし。ケースはフェイオンにおいてきちゃったし、楽器につけてたリードは振り回し過ぎてもう使い物にならな く らいボロボロだったけど、一枚だけ予備のリード、ポケットに入れてたのよね。船賃も合わせて利子つけて返してあげるわ」

反らす胸の上で、青い瞳がきらきら輝いていた。

「他はどうしている？」

目もくれず、アルトはたたみかける。

「ライオンは予定していたドックじゃ船が納まりきらな い らしくって、新しいドックを探しに出てる。デミは明日の打ち合わせとPR活動中。サスは仕事が忙しいみたい、あれから連絡もないわ。だからわたしが留守番ってワケ」

すかされたことが不満らしい。唇を尖らせひとまず返したネオンの視線は、そのときアルトの手元へ落ちる。

「あー、ちよつと、花、もいできちゃってるじゃないっ。記念にもらってきたところなのに」

言われて初めてアルトは握ったままのソレに気づかされていた。

「起きた時に倒した」

どうにも弁解の余地はない。ならばむげに責められないと諦めたか、ネオンはこう問いかけていた。

「何か、食べられそう？ まだフラついてるようだから作ってあげる。っていつても、そっち持ちのミールパックを温めなおすだけだけれどね」

笑いはここでも悪戯げだ。断る理由もないなら、連れ立ち居住モジュールへと戻った。

最中、ネオンは丸一日、眠り込んだアルトの原因を探してあれやこれやと質問を投げかけている。くどさにかまうな、と言いかけアルトは大丈夫だ、と言葉を選びなおしていた。ただぶつきらぼうな響きだけは拭えず、むしろその響きに誰より自分が驚きもする。

「あのさ、勘違いしないでよね」

浴びせられたネオンこそ何も知る術はない。

「あなたを心配して言ってるんじゃないの。いい？ また倒れられちゃったら、あたしはお手上げなの。あなたは時の運だと思ってるかもしれないけれど、あたしはこのチャンスを逃したくないの」

スチール階段の下で一人、憤慨している。そうか、と聞いていてアルトは登り切ったそこで踵を返した。

「ちよつとつ、モジュールはこつちでしょ」

呼び止められようと理由はある。

「先にすませたい用がある」

通路の突き当たり、コクピットへ続く階段手すりを掴んで言い放った。

「ミールパック、何番がご希望っ？」

登り始めた体が見えなくなる前にと、ネオンの張り上げる声は大きい。だがアルトに今、吟味できるほどの興味は持てなかった。

「お前の食べたいヤツにすればいい」

「なによ、ソレ」

見送るネオンが、ぷつと頬を膨らませる。

放ち上がったコクピットで、アルトは通信機器へ飛びついた。

サスは仕事が忙しいらしく連絡がない、とネオンは話している。だがそれが仕事だからでないことくらいアルトが一番よく知っていた。サスは約束通り『ラウア』語店員探しに没頭している。だからこそ一刻も早く手を引かせなければ、と気は早った。

陳腐なもので調べを託したはずが、辿ったその先に何があるのかを熟知しているのはアルト自身だ。地球へ送りつけられたホロレターを手にしたあの時から妙に落ち着かなかったわけも、サスが調査をかってでたとき思わず食ってかかったのも、今ならよく理解できる。記憶の底でうずき、それが知らせようとしていたのだ。

つまり負えないのは何も知らないサスの方で間違いなく、知らせてアルトは急ぎ通信を手繰る。

だが店は休業中だった。通信は自動受付に切り替えられると、チャート方式で淡々と売買の登録をアルトへ促す。諦めアルトは過去、サスとのやり取りで使った覚えのあるアドレスを片っ端から引っ張り出した。つながるものがあればと呼び出し続け、そのうちのひとつ、映像を拒否した音声のみのラインに手ごたえを得る。

『サス、どこだッ？』

前のめりだ。アルトは呼びかけていた。

『ほ。その声はアルトか？』

忘れ去られたかのように手入れされていない連邦軍跡地は、長年にわたって吹き込み、堆積した砂塵によってまさに廃墟と変わり果てていた。観光スポットとして出入りのある管制塔はまだ幾分そうした不気味さからは縁遠いが、サスがもぐりこんだ駐屯本部である

建物内は光も滞りがちと洞窟がごとく別世界を目の前に広げている。その中をサスはひとりハンドライト片手に、昨日ようやく手に入れた電子図面をコンパスかわりに回転させながら、かつての通信中枢へ向かい進んでいた。

『心配しておつたぞ、いつ目が覚めた？』

『そんなことはどうでもいい。ラウア語店員の件からは手を引いてくれ』

腰からぶら下げた携帯電話より漏れ出すアルトの声は、相も変わらずせつかちで景気がいい。

『その様子じゃと、そら、心配するだけ損じゃったようじゃの』
笑ってサスは鼻溜を潰す。

『だが、話の噛み合わん要求じゃの』
返した。

『悪い夢でも見おつたか？』

『ああ。結構、後引く悪い夢だ』

だというのにアルトは冗談を冗談と返さない。耳にしてサスは闇に瞳を光らせた。

『それでわしにその提案か。分かりやすいの、まったくお前さんは』
『どういうことだ？』

アルトの声が何をや警戒して固くなる。

『地球で俺を最初に見つけたのは、あんただ。あんたは一体、俺のどこまでを知っている？』

聞きながらサスは、回転する電子地図に従い四辻を左へ折れた。

辺りは暗さを増し、改めハンドライトを周囲へ這わせる。まったく見えなくなった行く先へと、その目を細めた。

『言つたらう。わしがお前を拾ったのは、気まぐれではないと。そしてこの件に共通するのは、連邦の軍じゃと。知っておるのはそれだけじゃ。ただ今のお前さんの狼狽ぶりに予想しておつたことが的中したとは思うとるがな』

鼻溜を揺らし、細めていた目を手元の電子地図へ落とす。目的地

はここをまつすぐ行つたその先らしい。用のなくなった地図から電源を落とした。背負うバックグバックへしまい込む。吹き込み堆積した砂塵へとまた足を繰り出した。

『あなたの予想はおおむね外れてないさ。だったら深入りはするな』
アルトが吐き捨てるように言っている。

なだめてサスは、一息ついた。

『いいか。まあ、聞け』

目的地へ辿り着くまでの間だ。語って聞かせる気持ちを整える。

『わしが後払いの仕事をせん理由は、お前に会う直前だ。取引の相手に騙されたことがきっかけじゃった。奴ら、商品だけ握って、とつとどこかへ失せおつたんじゃ。なにせ何度か実績のあつた相手じゃつたからの。ケタの違う取引だつたにもかかわらず、わしもつつい、いつも通りの段取りで済ませてしようつた。全くもつて、わしが甘かつたとしかいいいようがない失態じゃ』

『もうろくしたかよ、じいさん。そんな話は今、関係ない』

『まあ、聞かんか。まだ続きがある。しかも取りっぱぐれたその金は、まんの悪いことにギルド本部へ支払うロイヤリティーへ回す予定での。本部は支払いを待つようなトコロではなかつたし、デミの学費もまだまだかさむ。心底、参つたと思つたもんじゃつた。どう切り抜けるかと思案しにくれたぞ。結局、手持ちの品は全て売り払い、使つておつたOp・1の店舗も売り払つた。だが、それでもまるで足らん。後にも先にも、にっちもさっちもゆかんかつたのは本当にあの時だけじゃつたな』

一足ごとに舞い上がる砂塵は、サスのかざすハンドライトの光の中で重力を感じさせぬほどと軽やかに踊っていた。

破れたガラスと、外れたドアを幾枚かやり過ぎ、サスはようやく『通信室』と造語で書かれた部屋をハンドライトの光にとらえる。まるで登山隊が頂上を目指すかのようだ。背中のバックパックを背負いなおした。

『地球へ向かつたのは、その金策のためじゃ。それでも足りるか

どうかは疑問じゃったが、ギルド商人を続けるには船も売ってしまわんことにはムリじゃった。で、最も高値をつけたヒトへ船を届けに向かったんじゃ。なあに帰りはもぐりの出稼ぎ船を利用すれば安く帰れる。そうしてお前の家を押し潰すハメにあった。あの時はこのうえ賠償問題まで抱え込むのかと、まったく慌てさせられたもんじゃわい。ところが中には怒鳴り散らすヒトどころか、へべれけのお前が軍用の興奮剤に埋もれてころがっただけじゃった。見た瞬間、わしは咄嗟にこう思ったの。こいつはついとる。船は売るのをやめにして、これをさばけばいい額になるハズじゃ、とな。しかもへべれけのお前さんは身ぐるみ剥がされたとして、何も気づきはせん』

その目の前に通信室のドアは立ち塞がる。

サスはゆっくりと、しかしありったけの力を腹にこめ、右足を振り上げた。気合一発。かろうじてドアを蹴り破る。より一層、濃く舞い上がった砂塵が視界を埋め尽くし、さすがの『デフ6』の鼻溜でもってしても咳き込んだ。しばし砂塵を手で振り払う。

『軍流れのモノはの、質が保証されとるからの、買い手がつくのも早ければ売値も破格じゃ。そのうえお前の抱えておった量は尋常ではなかった。早々に、ひとつ残らず船へ興奮剤を積み込んで、これでなんとか首がつかつたと、急に視界が開けた気分になったわ。じゃがの、そうしてお前を放って飛び立とうとした時、わしの良心とかいうヤツが言いおるんじゃ。これではまるで盗人ではないかと。わしから商品だけを奪って消えうせた奴らと同じではないかと。冗談ではない。それだけはゴメンじゃった。わしがあんな奴らと同じじゃと？ いいや、わしは違う。そうじゃ。わしは対価と交換するれっきとしたギルド商人じゃ。お前に命を助けられたようなものなら、わしはお前を助けて対価を支払わねばならん。まあ、どう見ても軍人に見えんお前が、民間では考えられぬほどのブツを抱えておれば、ワケありなのはギルドでなくとも想像がつく。じゃが、だからと言ってそれが放って立ち去る理由には、ならん』

砂塵は薄くなりつつあった。掲げたハンドライトの光でサスは中を覗き込む。

『言っておろうが。あの場所からお前さんを連れ帰ったのは、決して気まぐれなどではないとの。じゃから正気を取り戻したお前さんが記憶がない、などと言い出した時から、こういうことになるだろう心づもりもあつた。全ては承知のうえじゃ。手を引けと言われて今さらそうもゆかんことは、これで納得できたらう。え？ アルト』
ぼんやりと、室内が浮かび上がっていた。

中へサスは足を踏み入れる。

ほどよい所で担いでいたバックパックを下ろした。そんな腰元の携帯電話から、焦つたようなアルトの声は漏れ出してくる。

『今、どこにいる？ サス？』

『なあに、手は打つてある。じゃが店の端末を使えばアシがつくかも知れんからの。ここなら安心じゃ』

返すサスの声に、もう安穩とした雰囲気はない。ぴしやり断言する。思い出したようにこうもつけ加えて鼻溜を振った。

『そうじゃつた、ネオンから聞いておるぞ。今後の商売の参考までに、わしも一度はアナログ楽器の音を聞いてみたいの。ともかく明日の演奏には間に合うよう帰る。お前は期待してまつとれ』

『相手は、じいさんのツ』

アルトの声がよりいっそう甲高くなる。聞くだけ無駄だと、サスはそこで電源を切った。床へ屈みこみ、降り積もつた砂塵を集め小山を作る。ハンドライトをその頂上へ突き刺し、即席のスタンドに変えて勢いよくバックパックの口を開いた。

途切れた通信にアルトは行き場を失つた言葉を飲み込む。

サスの居場所を想像することは容易かつた。だが容易いだけに拳げればキリがなく、すぐさまそれは分かっているのと同じ状態に陥る。店以外の端末など、サスの持つ情報源はこの町にも、宇宙に

も、『アーツエ』の砂の数ほど存在していた。

接続先をなくした通信は、さきほどから雑音ばかりをひた流している。叩きつけるようにしてアルトはそれを切った。すかさず覚えのあるラインを開くべく、スロットル脇のカーソルへ手を伸ばす。その相手こそ『約束』を果たした彼だ。今ここで援護を頼めるとすれば相手は彼しかいないように思えてならなかった。だがすぐにも動きは止まる。

なぜなら、彼は間違いなく監視下に置かれている。だからしてライオンは『カウンスラー』の音窟で待ち伏せていた船賊に追われたならば彼に連絡を取るとはすなわち、自らの存在を追跡者へ知らせることになりかねない。援護どころかそれこそが最も危険な行為だった。

弾きかけていた端末から手を引く。

前のめりになっていた体をゆっくり起こしていった。

願わくば、サスのもくろみがかラ振りに終わることを祈るしかない。アルトは舌打つ。ネオンがわめくトラがどうのという前に、少しでも早くここを離れなければと考え、黙した。

いや、それとも？

自分へ投げかける。

宇宙は広い。

だが既知宇宙は狭い。

サスが言った通りだ。逃げおおせるにも限界があった。ならば選択肢は、相変わらずシンプル極まる二者択一で提示されている。だがシンプルゆえ拭えない合理性はいまだ飲み込めず、アルトの感情を逆なでていた。

選択しきれぬ思考が煮詰まる。

振り切り下層をめざしかけ、後ろ髪を惹かれるかのように座席へ振り返った。

目に、背もたれへ貼り付けたままのスタンエアは映り込む。飛びつくように剥ぎ取っていた。装填状態を確かめ、安全装置を掛けな

おす。すかさず腰のベルトへ挟み込み丸見えのそれを、引きずり出した衣服で手早く覆った。

気付けば頬が硬直している。ピシヤリ、叩きつけ、盗人かと周囲を見回した。

今度こそアルトは階段を降りてゆく。

匂いは通路にまで漂っていた。辿りアルトは居住モジュールのドア前に立つ。センサーが妙に鈍い。間を空けてドアはスライドする。気付いたネオンが調理台の前、平行感覚の危ういテーブルの向こうで振り返っていた。

「用は済んだ？」

重なり、傍らでチンと電子レンジが音を立てる。電熱コイルの焦げたような熱臭さもまた、鼻についていた。

「二十八番か」

かぎ分けアルトは、選択を任せたミールパックのナンバーを口にしてやる。なら唐突に歌い出したのはネオンの方だ。

「夜の街にガオー、ビルのハイウェイにガオー」

調子はいいのだが、いかんせん脈絡がない。

「なん、だ？ それは」

不気味さばかりが際立ち眉をひそめる。歌いながらネオンは電子レンジのドアを開くと中から、おおよそ食べ物が入っているとは思えない工業的なデザインのパックを取り出していた。

「鉄人28号のテーマソング」

先ほどまで首から提げられていた楽器は、陣取っていたアルトに代わり壁際のマットレスに寝かされている。ひっくり返したハズの砂塵もすでに片付けられると、砂塵に埋もれたオレンジ色の花が枕元で何事もなかったかのように四枚の花びらを広げていた。

「答えになってない」

アルトは突き返す。

「地球ローカルの、二次元まんが。古いのよ、すつごく。あなた、何番でもいいっていったじゃない。だからあやかって鉄のヒトの二十八番にしてみました」

手を休めることないネオンは得意げだ。

『アーツエ』への道中、仮死ポッドで眠っていたライオンをのぞくそれぞれは、コクピットやマツトレスで代わる代わる食事を済ませていた。だが楽器が占拠しているそこに代わって、いい加減、腰掛けられそうなモノを探す時がきたらしい。そぞろにアルトはモジユールの片隅にうず高く積まれた備品の山と対峙する。

「中身はご存知の通り、ボルシチとロシアパンだから安心でしょ」
背でネオンが、パツクの口を切り取ると声を高くした。言った通りのロシアパンを湯気もろとも引っ張り出してみせる。

「そんな歌、一体、どこで覚えたんだ？」

備品の山をガラガラ、かき分けながら問うていた。

電熱コンロから片手ナベもまた引き上げたネオンは、手際よく中身を皿へ移し変えつつ肩をすくめて教える。

「あのね、ログジャンキーなんて前世紀のマニアを相手にしてると、とんでもない骨董品と出会うことだってあるの。あたしが月へ演奏に行った時、そのヒト、磁気テープのメディアなんて持ってたのよ。信じられる？ その中に鉄人28号があったわけ。演奏が終わった後は延々その講義、受けちゃったんだから。おかげで歌を覚えたわ。お付き合いでするの、ものすごく大変だったんだから」

聞きながら、不精で捨て損ねた紙媒体と、絡んだ寝具の間からアルトはスツールを引っ張り出した。引っかかり『フェイオン』を脱出して以降、どこへやったのかと探し続けていた地球基準の二十四時間時計は転がり出して、それもまた拾い上げるとテーブルへ戻る。据え置き、またぐようにしてスツールへ腰を下ろした。

絶妙のタイミングでその前に皿は出され、邪魔にならない位置へアルトは二十四時間時計を置く。時刻に狂いが無いことを確かめたなら、遮りパンの皿は視界へ差し込まれていた。なら意識していたよりも腹の減り具合は深刻だったらしい。そんな皿がテーブルへ触れるより先だ。時計を置いた手はもう、ひとつ掴み上げていた。
「いつからそんなことを？」

勢いよくかぶりつき、残りをボルシチに浸して視線を上げる。フオークを差し出したネオンはそこで、困ったような顔を向けていた。「サスのお店で言ったわよね。放置船から見つけ出されて蘇生されたって。その直後のことは時間の感覚がいまいなの。そうね、はつきり覚えているのは、ここ二年くらいってどこかしら？」

そんな顔の前からフオークを受け取る。

「それ以前は、なにを？」

ネオンの表情は明らかに、そこでくもった。

「それが、全然……、思い出せないのよね」

呟き、失敗が見つかった時のように舌を出す。

「名前はそのとき入っていた仮死ポッドに刻まれてたものよ。本当は覚えてないわ。靴にこだわるのも、その時から履いていたわたしの証拠だから。楽器だってそう。わたしの持ち物ってちょっと変わってるじゃない。コレ、自分を探す目印なんじゃないかって思ってるの。変えなければ絶対、誰かがあたしのことを見つけてくれるはずだって」

だが、ネオンの声が弾んでいたのもそこまでだった。不意にうつむき離れてゆく。目で追えば、崩したばかりの備品の山の前に立った。やおら屈み込み、手持無沙汰を紛らせ勝手とより分け始める。だからして作業は始まったばかりだ。だがその後が続く声はひどく疲れてアルトの耳へ届いていた。

「……って、この間まで考えてたのよね」

聞きながら、フオークで刺したイモを口へ放り込む。

「けど、死人に呼び出されるなんて。こういうの、年貢の納め時っていうのよね。もう諦めなきゃいけないのかな、って思ってる」

「死人？」

噛み潰して繰り返した。

「フェイオンの仕事、依頼人はドクターイルサリを名乗ってた」

備品の山を丁寧に整理してゆくネオン手は、止まらない。拾った紙媒体をめくっては傍らに積み上げ、反対側へてんでバラバラなデ

ザインの雑貨や食器を並べてゆく。

「そいつはつまらねえイタズラだ」

一蹴してさらに、同じ口へパンを詰め込んだ。

「十分よ」

言い切ったネオンの手は、そこで止まる。

「だから決めたの。延々、誰も見つけてくれないってことは、本当は誰も探してないってことだって。何をしたのかはわからない。けど、きつとあたしは追い出されたんだと思うわ。ギルドの下で演奏をしていたら、いつか誰かが見つけてくれると信じていたけど、そんな過去にしがみつくのはもうやめようって。そろそろ帰らないで行くべきだって決めたの」

思い出したように、寝具を引つ張り出す。見えない場所で引つかかるそれとしばし格闘し、立ち上がってネオンは適当な大きさへとたたんでいった。と、その間からもバサリ、紙媒体は落ちてくる。それもまたネオンは拾い上げていた。

パラパラとめくる。

「忘れた時間に、さようならしようって」

呟きは、はつきりアルトの耳に響いていた。

「あたしは、新しいあたしになる」

ボルシチをすくい上げた手も止まる。

なら見えていたかのようにネオンの声は跳ね上がっていた。

「……で、さっ！」

振り返る勢いにさえ不意を突かれ、アルトは目を瞬かせる。

「さつきから思ってたんだけれど。率直に聞いていいかしら？」

そんなネオンに先ほどまでの雰囲気は微塵もない。とどまった動きを再開させて最後のイモを押しこむ。先を促せば問うネオンにこそ屈託はなかった。

「あなたってさ、胸の大きな女の人が好きなの？ さつきから出て来るの、そんなのばっかなんだけど」

思わず口の中のを嘔き出しそうになる。

「あッ、あのなッ、それ以上勝手に人の持ち物、触るなッ」
唸るしかない。

気にすることなくネオンは、傍らに完成された雑誌の山へ手元の
それも積み上げていった。

「よし。だったら同じ船でも安全か、わたし」

『社長、どうしたでやんすか?』

逃げるがごとく遺体安置所を抜け出したスラーとモディーは、立ち上げの済んだ霊柩船のコクピット内、艦橋の指示に従い白い船の格納庫を後にしようとしていた。さなか片目で正面をとらえながらもう片方の目でスラーを見つめるモディーは実に器用だ。ままに怪訝と問いかけていた。

『どうした、だと?』

開きゆく格納庫のハッチの向こうへ船体を滑らせながら返すスラーの声は、どこか上ずっている。

『なに寝ぼけたこと言ってるやがる。サスに直接、話を聞きに行くに決まってるだろうが』

だがそこには理屈、というものがまったく通っていないかった。

『今さら……で、やんすか?』

さすがのモディーも気づいて、おそろおそろ口を挟む。

瞬間、スラーの手の平は唸った。

モディーの額で鋭い音は鳴る。

『う、うるさい』

どうやらかなり痛いところを突かれたらしい。吐き捨てたはずの声も、こもりがちとなる。

『モディーはうるさかったで、やんす』

『分かったなら、それでいい』

にもかかわらず目を回しつつ復唱するモディーのそれはもう、あらゆる種の芸だ。

『ワケありとはいえ、無いもの探しがもとより承知の依頼なら、こちとらとんだ困だぞ』

体裁保ち、スラーはただ前を見据えた。

そう、安請け合いは値するだけの「信用」があつてこそだ。だがこれでは元も子もなかった。いや、ぶち壊しにして投げてよこすほどのサスにこそ何があつたのか、と不安がスラーを襲う。

いつしか霊枢船の四角いアクリルから離艦のガイドラインは消え去ると、自前のナビ映像が半透明の膜を張りつけていた。すでに白い船は霊枢船の後方、小さな点と輝き、そのテリトリーからさえ抜け出しつつある。

『社長とモデューは葬儀屋でやんす。オトリではないでやんす！』

『たまにはマトモなことをいうじゃないか、モデュー』

唱えるモデューへスラーは小さく笑った。なら前に光速の入り口は表示される。侵入速度が明滅し、霊枢船へさらなる加速を要求した。従いスラーはスロツトルを倒してゆく。その両サイドで侵入回避可能エリア突破までのカウントダウンは高速回転し、船はインタの要求に応じて船種の申告を始めると提示データを展開していった。前にして、殴られてもいないというのにモデューの目もまた歓喜にせわしない回転を始める。

『社長に褒められたでやんす。モデューは褒められたでやんす！』
瞬間、途切れるカウントダウン。

焼きついたかのごとくアクリル一面が白く弾けた。

霊枢船は『アーツェ』へ向かい、光速航行を開始する。

『しまった。せめて1袋でもエスパを持ってきておくべきだった！』
その頃、トラはひとりヒザを打っていた。だが嘆いたところでもう遅い。『バンプ』は路肩停泊も許されぬ光速航行中だ。どれほどネオンの行方に気をもんだところで鎮めておさめるエスパを求め、引き返すことなどできはしなかった。

だからして落ち着かずトラは、捕らわれた獣のごとく何度も船内を往復している。途中、エスパのカラ袋を見つけ、わずかに残る匂

いを楽しんでもみた。そのカラ袋を片手に、妄想の中でエスパを食べるフリにさえ浸ってみる。だが直後から襲い来る虚しさこそ半端がなく、耐え切れなさに誰かれかまわず連絡を入れてみようともしていた。しかし無駄話などでず、たとえ挑戦してみたところで『アーツエ』到着まで続くような話題などありはしない。

諦め、ブロードバンド・キャストライブをつけていた。そのけたたましさは束の間、トラの虚しさを埋め合わせてくれる。一方で、次々と既知宇宙の一大事を並べ立てようと、決してトラへ話しかけはしなかった。次第に音は耳へ入らなくなり、完全にうわの空となればもやのかかったような脳裏に一体、自分は、何をしにどこへ向かっているのだろう、という疑問が浮かび始める。そうしてぼんやり、ネオンのことを思い出していた。それはモバイ口越しの映像に始まり、次々と時間をさかのぼるがままギルド本部のオークション会場にまで巻き戻されてゆく。

『ヒト』臓器一式

性別 女

年齢 汚染状況不明

品質保証なし

おかげで一式とは思えぬ激安価格がスタートだったオークション会場は、トラの目の前に広がっていた。

そのとき誰も、まだ仮死ポッドにあの楽器が眠っていることは知らない。おかげでたいして盛り上がることもなかったオークションは、トラのつけた破格の値で大盛況のうちに幕を閉じていた。

そうまでして買い取ったワケを思い起こしてトラは、たとたん全身のシワをぶるん、と波打たせる。埋まっていた操縦席から飛び上がらんばかりに身を起こした。すっかりたるんだ頬を両の手で挟み込むが早いか、上下左右へ伸びるだけシワを伸ばして叩きつける。

これもまたイルサリ症候群への入り口か。

正気を保ち、両眼を見開く。充血して赤くなったそれをこすり、航路の残りを確認した。

光速の出口は、ようやく現実的な距離をおいたその向こうにのぞき始めている。早いに越したことはない。ならばとトラは、息も荒く降船準備に取り掛かっていった。

『大型貨物船 エイサー号』。

積荷は微生物加工工場の作業用ゴム製着衣。

乗組員は極Y地域に拠点を持つ、電離精製工場の社員。

機械任せのインターで乗組員のIDや積荷の確認が直接行われることはなく、だからしてそれが現在、テンたちの船が装い、提示しているデータだ。

(テンよう。アーツエへ着いたら、一回、メンテ入れてもらわなあかんで。船体が妙な音、たてよる)

その艦橋でナビとオートパイロットに船を任せたコーダが、上二本の腕を胸元で深く組み、不安定に揺れ続ける計器類を睨みつけつつ下二本の腕を振ってみせた。傍らではテンが、プラットボード上部に極Y種族独特のキー配列がほどこされたホロデバイスを広げ、入力に先ほどからずっと四本の腕を駆使し続けている。

(それはアーツエであいつらを確保してからや)

『フェイオン』からの緊急離脱後『Op1』へ飛び、休む間もなく『アーツエ』へ向かうこととなった船の疲労具合は確かにピークだろう。いつものテンならこの船を熟知するコーダの提言をなおざりにすることはなかったが、今回ばかりはそうもいかなかった。テンは片手間と振り返す。

(わかった。わかった。そう、いじきなフリで返さんでもええがな) 見て取ったコーダが冗談紛れと跳ね返した。そしてふと、深く組んでいた腕を緩める。

(そやけど、そうなら、わしらがこうして動話、使うのも、こ

れで振り納めゆうことやな)

いつもの勢いが失せた動話に漂うのは、似合わぬやるせなさだ。ついでテンも集中していたプラットボードから視線を逸らしていた。(そうや、これからは俺らも二十三種と肩並べて生きてゆくんや。もうバカにはされへん。どこでも商売して、どこにでも雇うてもらって、こんな暮らしをしとる同胞をオモテの世界へ引つ張り出してやるんや)

その振りを眺めたコーダの口から、やおらため息のようなものもれる。肩もまた大げさなほど落としてみせた。

(食うてはいけるが、なんや、せがないのう)

テンは答えない。プラットボードから引き出されてくる情報へ、あえてその目を凝らす。かと思えば身を乗り出した。瞬間、指は鳴って、テンは大きく振りがぶる。

(きた!)

ホロデバイスを隅へ縮小し、プラットボード上に新たなホロスクリーンを広げた。そこに『アーツェ』の小さな田舎町を立体地図として立ち上げ、中へテンは手を差し入れる。まるでボールでも転がすかのような具合だ。地図を左右、上下と回転させていった。させながら、地図内に記された赤いドットの位置をあらゆる角度から確認してゆく。

(こんまい、店やな。あの留守録は、ほんまにここからやったんか?)

と、両のヒザ頭へ派手に両手を叩きつけたのはコーダだ。

(なら、ハラ、決めるしかないの!)

(いまさら引けるか?)

テンが指を折り返す。

(せやの)

切なげな笑みを浮かべたコーダが、振り返っていた。ひとつ吐き出す息で気持ちを整え直す。その腕を大きく振りがぶった。

(おっしや、作戦練るならクロマとメジャー呼ぶぞ!)

つづる動話で、船内通信用のプラットボードへふたりの名前を読み込ませてゆく。

『それから……』

付け加えた。

『それから？』

シャツフルは眉根を互い違いと歪ませる。歯切れの悪い部下の目を、真正面からのぞき込んだ。

『妙な問い合わせの記録がひとつ、浮上しております』

巡航艇の中樞は外の景色すら堪能することを惜しんで、機材に埋め尽くされている。その端末に埋まり部下は、濁らせた言葉の先をシャツフルへ吐き出していった。

『ハウスモジュール勤務のラウア語店員の遺体を引き取りに、葬儀社が臨時収容船へやってきたそうです』

あまりにも目立ちすぎる制服を脱いだふたりは今、『アーツエ』上陸に備え階級を伏せた一般公務員のいでたちを装っている。

『ラウア語？ ハブA Iの外部出力内容に応じて、我々が再開させたあのカウンターのことか？ だいたいあれはかなり前から凍結されたいたため、極Yの手配した者が店員を装っていたのではなかったのか？』

『なので、そのことを尋ねて現れる第三者の存在は奇妙だと……。可能性ですが、こちらの動向を伺うべく何者が現れたのではないかと』

『ギルドの次は葬儀社か』

しばし唸り、シャツフルはアゴをなでた。青白い顔を拭い、改め部下へ問い返す。

『どこの葬儀社だと？』

『記録には、スラー葬儀社という名が残っております。偽名ではないようです。霊柩船航行専門の小会社でした。現場で確認した腕章

から営業経歴も閲覧できますが、ごらんになれますか？』

『いや』

軽く手を振りシャツフルは拒否した。続けさま、最低限の措置だけを指示する。

『光速の利用記録をチエック。補足しておけ。特殊船舶なら、そう簡単に姿はくまませんハズだ。誰の依頼で動いたのかは気になるところだが、我々は実験体の確保を最優先とする』

答える間を惜しみ部下が手配につとめていた。

『アーツエ』まで、あとわずか。

これでカタを付けると、シャツフルは自らに言い聞かせる。

そして惑星『アーツエ』の砂漠港、ドック『11』には、ライオンが注文した船を除く全ての品々が届けられていた。ボックスは船内に持ち込めない大きさのため、三輪ジープの傍らにおかれており、緩衝チップの中からハイヒールを取り出したネオンは早々に足を滑り込ませている。

「やっぱり、コレじゃなくっちゃ。昔にお別れしても、コレだけは譲れないわ」

前に後ろに自らの足元を確かめて笑顔満面、くるり、一回転してみせた。

アルトもまた新しい作業着を羽織ると、塗膜セツトに、アクリルのクラック検知キットを始め、各種部品、そしてミールパッカー式がボックスに収まっていることを黙々と確かめてゆく。

「おい、こいつは中だ」

ハイヒールにはしゃぐネオンへ、ミールパックの詰まった『ユニバーサルデリカ』の箱を押し出した。

「はい。食べた分もこの靴の分も、ちゃんと働いて返させていただきますから、ご心配なく」

抱え上げたネオンは皮肉も楽しげと、ままに船へ踵を返す。

「いい加減にしろよ。靴代くらい払ってやるっていつてるだろ。こ
こを出る方が先じゃないのか」

その背へアルトは投げつけた。

「店であれだけ言っておいて何よいまさら。ホントは乗せたくな
かったのはどっち？ とにかく、ケジメはつけさせていただきませ
すっ
！」

ネオンが吐き返すこのやり取りは、アルトが28番のミールパッ
クをたいらげてからの定番である。だからしてそれ以上、相手にす
ることなく、ネオンもまたその背を船の中へと消し去っていった。

見送つてアルトは舌打つ。だがどちらにせよメンテナンスが終わ
らなければ、この問答も無意味だ。とにかく宅配ボックスから取り
出したクラック検知キットを、組み立てることにする。

そんな通常メンテナンスは一人ならば丸一日はかかる作業だが、
ライオンが手伝いをかってでたことで夕暮れまでには仕上がる予定
にあつた。当のライオンもまた船を所有する者なら知れた段取りと
言わんばかり、すでに船の動力室から担ぎ出した足場を組み上げ始
めている。

互いはメッセージ再生が終了して以来、その内容についても、思
いがけないアクシデントについても、なんら語り合っていない。い
かんせんボイスメッセージであるライオンにとって客のプライ
バシーへ首を突っ込むことはタブーであつたし、アルトもまた突っ
込んでいいようなスキを与えていなかった。だからして暗黙の了解
はそこに成り立つと、互いはただ目の前の作業にのみ専念する。

「塗膜を張り直す前に、この砂塵を拭うのがひと手間のようだな」
組み上げた足場のてっぺんで船の汚れ具合を見下ろし、ライオン
が眉間に生えるヒゲを逆立て唸つた。

「ああ。ここで張るのは初めてじゃない。段取りなら心得ている。
任せろ」

片手にちょうどのハンドガンタイプだ。組み終わったクラック検
知キットの動作をアルトは確かめる。

「積み込み終了っ」

その顔をライオンへ持ち上げたなら、船からネオンは姿を現していた。置いてきた箱の代わりか、胸には楽器がさげられている。

「後は、練習させてもらうわね。いつもログジャンキーが相手だから、そうじゃないお客さんを相手にするなんてなんだか緊張しちゃって」

もう定位置だ。言って三輪ジープの荷台へ腰を下ろした。

「好きにしゃがれ」

折れる様子がないのだから、アルトはネオンから顔をそむける。ならば思う存分と、ネオンはマウスピースをくわえ込んだ。大きく肩を揺らして息を吸い込み、これみよがしと乱暴な音色を放ってみせる。すかさずキーを上から下へ弾き、逃げ回る小悪党がごとく音をすばしっこくつなげて思いのたけを奏でていった。

耳にしたライオンが驚いたように白い牙をむき出す。だがそれも束の間だ。足場の上でリズムに合わせ、やがて体は小さく揺れだす。BGMにして、やがてメンテナンスは始まっていた。

済めば今夜にもごる寝バー『アズウエル』でのライブが、誰もを待っている。

つま先立ちで背伸びする。ミノムシドアに行き先を記録させたメモを貼り付け、デミはエアソールシューズのかかとを地に着けた。荒いドットを瞬かせメモは、そんなデミの前で短いメッセージをスクロールさせている。

『仕方ないよね。間に合えばいいけど』

つまりサスはまだ店に戻っていない。そして何も聞かされていないデミは、取引のためサスは店を離れているのだと信じていた。

『大丈夫、間に合わないなら、また、ここ、演奏する。それより学校も、遅れた』

残念そうなその顔へ、首からストラップだけをかけたネオンは口を開く。

『学校なら大丈夫だよ。フェイオンでのデータは頭の中だし。戻ったらすぐ提出できるようジャンク屋の船の中でまとめておいたから』

振り返って笑うデミの様子は、あながちウソとも取れない自信に満ちている。

『たまげた逸材だな』

ライオンがあきれたように言ってみせた。

『あんたが仮死ポッドに入っている間、おかげでこっちはどれだけ振り回されたか知れないぜ』

アルトもすかさず口を挟む。

暮れかけた『アーツエ』の空は真っ赤だったその色を今、溶けるようなクリーム色へ変化しさせつつある。そんな夜空の片隅には、くぐり抜け、向こう側へ抜け出せそうな衛星の蒼い影が二つ、ぼんやり穴をあけていた。休むことなく循環して降り積もる砂塵のせいだ。けぶる大気のせいでそれ以外は判然とせず、まるで分厚い絵の

具に塗り固められたような閉塞感が砂漠の星の片隅のこの小さな町を、覆い尽くそうとしている。

『しかしその店の予約、いつもの倍以上だと聞いたが』

苦笑いに黒光りする鼻先をひくつかせ、ライオンが確かめ問うた。『だって伝説では聞いていても、誰もホンモノの音なんて聞いたことないんだよ。当然だね』

ネオンは肩をすくめ、デミが鼻溜を揺らして教える。さもありませんとライオンが腕を組んでみせたのは、メンテナンスをこなしながら練習するネオンの音を聞いたせいだ。

『確かに、あれは不思議な音だった。いや、聞いたと言うよりも触れたような体験だった。言葉がないので意味は分からないが、それでも確かに伝わるものはある。なるほど、言語と種族を超越して一世を風靡したのもうなずけるといふものだ』

『フェイオン』の下層で同じ事を感じたのだろう。満足げに鼻溜を膨らませたデミもまたうなずき返している。勢いを借りて誰も先頭を切ると、そのきびすを返してみせた。

『じゃ、そんなショーの待ってるお店までは、ぼくが案内するよ。ついて来て！』

路肩に止められていたバイオモバイルの後部座席へネオンを乗せる。バイオモバイルはデミの運転で、公道を耕すように砂塵を巻き上げ走り出した。その後をアルトとライオンを乗せた三輪ジーブは追いかける。

そうして連なり走る道すがらデミがネオンへ確認したのは、これからの段取りだ。今夜のステージが二部構成だということであり、前半はネオンのソロが、後半はデミのお膳立てした地元『リピートル楽団』とのセッションが用意されている、といものだった。

『楽団はもうお店に入ってると思うよ。打ち合わせは着いたらすぐ始めるね。もちろん通訳はぼくがするからおねえちゃんは安心して』
そもそも他者と演奏することもまた、ネオンにとってはこれが初めてだ。

『わかった』

『お金は、お店の営業が終わった後、売り上げの十三パーセントがもらえるってことになってるよ。物価の違いがあるからすこし少なく感じるかもしれないけれど、お店はこれ以上はムリだって。ケチだよ。ね。こんなすごいショーなのに』

不服そうにデミは鼻溜を膨らませる。その目でちらり、サイドミラーをのぞきこんだ。後方から追いかけてくるアルトの三輪ジープを確認する。

『だからってわけじゃないけど』

戻した視線でそつとつけ加えて鼻溜を振った。

『お店のひとは、よければ明日もって……』

肩越し、ネオンへ振り返りもする。

ネオンはそんなデミへかぶりを振って返していた。

分かっていただけに、デミの鼻溜はきゅっと縮まる。

『そうだよ。だっておねえちゃん本当は、おいちゃんが来る前に、ここを離れたいんだよ』

まっすぐとはいえ時折、対向車も現れる目抜き通りだ。前へ向きなおる。落胆ぶりは手に取るようで、ネオンの心に刺さっていた。

『色々、アリガト。ごめんね』

『そんなの、いいよ。だっておねえちゃんに見つけてもらえなかったら、ぼくの方こそどうなっていたか分からないもん。ぼくこそありがとう。わがまま言っただけ、だね。そうだ、さよならする前にジャンク屋にもちゃんとお礼を言っておかなきゃ。でもね、おいちゃんは悪いひとじゃないよ。だっただけ、ぼくにとっても優しくしてくれるんだもん』

最後、付け加えて鼻溜を歪める。膨らませて一息ついたデミの問いかけは、だからして意を決したようにネオンの耳へ届いていた。

『おいちゃんのこと、キライ？』

気づけばクリーム色だった空は白く腫れ上がり、すっかり一面を覆う夜へ変えている。降り注ぐ砂塵はそんな空に反射して、夜道は

粉雪が舞うがごとく白くけぶっていた。

『だから急いでここを出て行きたいの？』

などとストリートな質問は、包まれたビオモービルの中、ネオンからやがてクスリと笑いを引き出させる。

『好きか嫌い、か……』

考えたこともないようなそれは二者択一で、吟味すればネオンの目は大げさなまでに周囲をぐるり見回していた。後部座席へ深く埋もれ一息つく。目は、ルームミラーに映ったデミの心配げな目と合っていた。

『一緒に仕事をしていた。けどデミが女の子になる、決めたように、サスの店を継ぐ、決めたように、わたしにも考えがある。けれどトラはそれを認めてくれない。だからケンカするの』

造語へは細心の注意を払ったつもりだ。

『苦手だけど、好きや嫌いじゃない。これからどうするのか。わたしの考え、なの。だからトラがいいひと、だとしても、思いなおせない』

ルームミラー越し、デミは絶えずネオンを見つめている。かと思えば静かにこつ鼻溜を揺らしてみせた。

『あのね、ぼくが、女の子になつていいのかどうか迷った時、おじいちゃんに相談したことがあったんだ』

話が突飛であったことはいうまでもないだろう。その意味が掴みきれないからこそネオンは数度、目を瞬かせる。よく聞き取ろうと座席から背を浮かせていた。

『だって、ぼくはおじいちゃんの店を継ぎたかったし、おじいちゃんは男の子を選んだんだもん。それでいいのかなって思ったんだ。そしたらね、おじいちゃんは、ぼくにこつ言ってくれたんだ。それはぼくが決めることだって。だってそれは、ぼくの生き方だから。えっと、ヒトなら「人生」って言うんだっけ？ おじいちゃんは少し寂しそうだったけど、ぼくの決めた通りにやってみなさいって言うてくれたんだ。きつとおいちゃんとおねえちゃんも、そういうこ

となんだよね。良いとか悪いとかじゃなくて、好きとか嫌いとかじゃなくて、そうありたい、ってことなんだよね』

生き方、という言葉は考えてもみず、突きつけられてネオンはしばし言葉を失う。いや、ただその言葉に妙な力強さを覚えて内にくわえた。確かめるように『ヒト』語で、なぞりなおしてみる。

「……生き方、か」

思い起こせば仮死ポッドが見つけ出されたことも、蘇生されたことも、過去を覚えていないことも、負わされた借金も、何一つネオンが主導権を握ることなく押し付けられたものだった。そうして過ごした時間は長く、自らが選ぶなどとすっかり忘れたまま毎日が続いている。果てにこれが初めて自ら選んだ道だというのなら、その新鮮な感触をネオンはそつと手繰り寄せていった。

『生きてる』

つづる造語。

『なら、仕方ないよね』

あっけらかんと飲み込んで、デミも鼻溜を振る。

『今日は、そのための演奏』

おそらく生きるためではなく、今日、初めて、生きている今を奏でるのだ。感じてネオンもただ返した。

『楽しみだな』

知ってか知らずか、デミが短く答えている。

それきりふたりは押し黙った。

ほどなくその視界へ『アズウエル』のホ口看板は、温かい色味で浮かび上がってくる。デミはビオモールのキャタピラを減速させ、路肩へ寄せた車体のエンジンを切った。おさまった震動にネオンの頬へ忘れていた緊張感は張りついてゆく。

今日は特別だ。

強く意識していた。

店先に止まった駆動音を聞きつけ、ボーイが店内から姿を現していた。その顔は、歓迎の笑みに満ちている。向かってデミがビオモ

ービルから飛び降りた。意を決したようにネオンも抜け出す。そうして白く遮のかかった『アズウェル』のホロ看板を見上げた。その両眼に込めた力は、並大抵のものではない。

『盛大に、始めるわよ』

言葉不敵と、その唇からこぼれ落ちていた。

その頃、『貨物船 エイサー号』は町外れの砂漠港で着陸態勢に入ろうとしていた。一方、町を挟んだ反対側、砂塵に埋もれた連邦軍跡地の滑走路に絶縁スーツに身を包んだ分隊たちの足跡は、停泊した巡航艇の尻から砂漠の中へと伸びてゆく。トラの乗る『バンプ』は『アーツエ』を前に光速を抜け出し、まだその道中にあるスラーとモデイーは船内で相変わらずのどつき漫才を繰り広げていた。

只中で町は静まり返ると、聞いたことのない音色に胸、踊らせた影を数多『アズウェル』へ向かわせている。

幕開けまであとわずか。

『アーツエ』の夜の白さは今まさに、その極みにまで達しようとしていた。

『ここからは、スピードアップじゃな』

そしてサスはいえ砂塵に埋もれた通信室の一角、降り積もる砂塵をかき分け、露出した床の上にあぐらをかき鼻溜を揺らす。

ながらく封鎖された基地跡に電力は供給されていなかった。だからしてバックアップ機材に加えてここまで負ってきたバッテリーでどうすれば電力がまかなえるのか、

夜を徹した試行錯誤の果てに、作業に必要な通信機材の特定や接続をすませている。今や周囲には商品として店に保管されていたポータブルホロスクリンが広がり、これまた同じく商品のメインコンピュータにそのバックアップ、物理キーボードがミニチュア版の通信室よろしく置かれていた。駆使して潜り込むのももちろん、スライが向かっただろう臨時収容船の中核だ。

何しろアルトへ臭気メーカーを吹きかけた相手が『ラウア』語店員であり、そこによりみとおり連邦と極Yが絡んでいたとするら、探しに現れた葬儀屋の素性がチェックを受けぬはずはない。

見極めるのはチェックした者の正体だ。それこそがアルトを追い回す輩に違いなかった。違ったとして少なくとも辿り着くための手がかりになるはずだと睨む。

だというのに今さら手を引け、とアルトは怒鳴り込んできた。何がどうしたというのか、失っていた記憶を取り戻したからこそその提言は、潜む危機を匂わせて止まない。そしてそう訴える本人こそ呑気とここに留まっているように思えず、一度、飛び立てば二度とここへは、いや、ジャンク屋という仕事へすら戻ってこないだろうと思えていた。

もちろんサスに引き止めるつもりはない。思い出したというならその先こそアルトの行く道だと考えていた。ただそれまでに借りは

きつちり払い戻したいと考える。手に入れた情報を渡して快く見送ってやりたい。それだけを思った。

まさにサスは組み合わせた両手を胸の前で丹念にすり合わせる。『とはいっても、せいぜい不正アクセスがバレるまでの間じゃかからの。そう時間がかかるものでもあるまいて』

大きく膨らませた鼻溜を振り、周囲の機材のみならず自らの心も整える。

ヒザの上の物理キーボードへと、擦り合わせていた手をあてがった。

丸めた背中では真向かいに立ち上がるポータブルホロスクリンをのぞきこめば、傍らの砂山でハンドライトが光を揺らす。静けさは満ちて、これから行われる全てのいかがわしさを倍増させた。サスの指はその時、勢いよくキーボードを叩きつける。

風化しているだけで壊れてしまったわけでない。まずは軍事基地の通信回線復旧だ。伴い機材が、かけられた低い電圧に浅く脈打ち、狭いポータブルホロスクリンへ近隣基地とのネットワークを広げていった。ただしそのどれも、ここが閉鎖されているせいで侵入制限という名のセキュリティにより取り囲まれた袋小路を描く。

うっかり踏み破って不審者丸出しだけは、いただけない。捨て置きサスは、隷属する船舶へのラインに目を移した。中でも『フェイオン』周辺で事後処理に当たっている船舶を探し出すと、潜り込めそうな船はないかとしらみつぶしに当たってゆく。

やがて辿り着いたのは、粘菌ネット保護を目的に巡航を続ける船だった。

そこに残された船舶間の通信記録へ手をつける。

辿って、似たような船舶の間を再び行き来した。

粘菌ネットから出入りする船の管理につとめる監視船内へと、潜り込む。

ならその監視船が最もやり取りを繰り返していた相手が遺体運搬船と知れ、その一艇へと一気に飛んだ。

ありがたいことに遺体運搬船のコンピュータは今もなお、がつちりと臨時収容船の管制とつながっているらしい。いや、船は今まさにその格納庫へ潜り込もうとしているところだった。

サスの頬に思わず笑みは浮かぶ。

コトに及ぶその前にだ。手早く左右へもう一枚ずつサブスクリーンを立ち上げる。カモフラージュとして持ち込んだバックアップ機材をかませ、この基地のアクセスコードを使って臨時収容船への侵入を開始した。

コードが拒否される気配はない。

ただし、それが閉鎖された基地のものであると気付かれるまでは、いかほどか。危ぶみながらスラー葬儀社に関する記録検索に取り掛かる。

名前は予想通り、管制記録のみならず入鑑リストの中からも見つけ出されていた。入鑑リストに彼らの行動記録として『ラウア』語店員の検索結果も付録されている。

瞬間止まる、サスの指。

おかげでそのファイルは予想通り、外部からのチェックを受けていた。

『すまんの。スラー』

詫びてチェック先へと跳んだ。

落ちて始めて、ガラリと様子が変わったことに戸惑う。

なぜならそれまで通り抜けてきたシステムとは、全く毛色の違う構造なのだ。ひととき聞いたこともない名称が、見回すサスの目には飛び込んでいた。

ラボ『F7』。

その『F7』の傍らには『トニック』の名がついたデータ群が、把握にかかれればオーバーフローしかねない巨大な渦を巻いている。さらには症候群を世に知らしめた医師『イルサリ』の名がつけられた同等のソフトウェアも確認でき、そこにはそのソフトウェアが発信したらしい三つのデータが、ぶら下がってもいた。数多くの端末

が、そんな『イルサリ』へ接続されているのも確認できる。

と、サスは目を大きく見開いていった。

しばし瞬きを繰り返して、穴が開くほどそれらを見つめる。

なぜなら発信データのうち二つには、明らかに覚えのあるアドレスが刻まれていたのだ。そう、暗号化されていないそれはアルトの地球宅と、『Op-1』に建つトラの事務所だ。

どうということだ。

思うまま気づけばそこへ手は伸びていた。

確かめんとして介入したその時、急転直下でウィルスは送りこまれる。

バックアップ機材が吐き出す熱量を一気にアップさせていた。サスは用意していたアンチウィルスをありったけ放ち迎え撃つ。だが状況は拮抗するどころか圧倒的劣勢だ。潰されるのも時間の問題と底を割り、サスはよりいつそう激しくキーを弾く。三面のホロスクリーンを流れる情報量は増し、やがて『イルサリ』へ接続された数多くの端末の中に『アルト』の表記を見つけてそこへ近づいてゆく。近づくほど見えてゆく全体は、含む全てが『イルサリプロジェクト』と名づけられたネットワークであることをサスの前に展開していった。辿るスラー葬儀社のファイルはこのプロジェクトを経由し、また別の場所へ転送されている。

そこもまた船だ。

探し求める相手はその船にいる。

確信したところで潜りこんだ後、探るだけの時間はもうなかった。ならせめて把握しておきたいのは船の位置となる。一か八かだ。サスは船のナビへ仕掛けを放り込んだ。ナビの要求と共に衛星へ送り込まれたプログラムが、間借りしてサスへも座標を送り返してくれるというものだ。いや、軍事船の使用する衛星ならプログラムが動作する保証はなかったが、今、吟味している暇こそない。

が位置確認を行う船に、衛星の中でプログラムは素直と動作していた。

飛ばされてきた信号をサスは拾い上げる。

『アーツエ、ここか？』

最後にして、ホロスクリーンの表示は落ちていた。周囲でバツクアツプ機材が次から次へダウンしてゆく。唸っていた放熱ファンの音も途絶えたなら、静けさにハンドライトの明かりだけが揺らめいていた。

(……なんや、コレ)

下二本の腕と身の丈ほどのスパークショットを場違いなほど分厚い外套の下に隠したテンは、目を丸くして動話をつづる。同様のいでたちで身を包んだ極Y船賊たちは今、なす術もなくガラクタぶら下がる一枚のドア前で、頭を寄せ合っていた。凝視しているのは、そこに貼り付けられたホログラムだ。それは否が応でも彼らの目を引くと、文字らしき映像を懸命にスクロールさせていた。

段取り通り、先に店の裏口から突入したクロマたちはすでに店がもぬけのカラであることをテンたちへ伝えている。ここで新たな手がかりを掴めなければ連邦との取引は半ばなくなつたも同然となり、状況にテンはただただ焦りを募らせていた。

(造語ですよ、テン。文字の羅列なら何かのメッセージかもしれない)

痛いほど察してメジャーが、ホログラムから顔を上げる。

(造語やと？　なんて書いてあるねん。誰か読めるヤツはおらんのか)

見て取りテンは周囲へ動話を放った。だがその大役をかって出る者はいない。当然といえば当然だ。もとより話せない言語を、そうやすやすと読み下せる輩がいるワケもない。しびれを切らせてテンは、そんな船賊たちの頭を藪から棒に叩きつける。

(もう、ええわ！)

叩いたついでに振り回し、ドアを押し開けた。家捜し中だったク

ロマたちが勢いに、ドアの向こうで慌てふためきテンヘスパークシヨットを振り上げる。だが指されても怯む道理などなかった。仁王立ちでテンは踊る。

(ラチがあかん。今すぐ、連邦へ連絡取れ。動画送って、あの映像を訳してもらえ！)

降船にあたってさしたる指示は必要なかった。絶縁スーツに身を固めた分隊は激しく流れる間欠河川を片側に、着陸時、巡航艇が砂塵をかき分けるようにして作った滑走路のワダチの中ですでに待機を済ませている。背後には白くけふる『アーツェ』の夜が広がり、まさに亡霊と化した基地跡がシルエツトと浮かび上がってもいた。

船内には緊急事態に備え、パイロットと通信担当のみが残る段取りだ。部下はそんな通信担当と、ちょうど無線回線の最終確認を済ませたところらしい。口と鼻だけをコンパクトに覆った防塵マスクの機密具合を確かめるシャツフルへ、確認澄みの無線を差し出す。受け取り本体を耳の後ろへ掛けたシャツフルは、そこからT字に伸びるコードの片側先端をこめかみ付近に貼りつけた。ぶら下がるもう一方のマイクの高さを調節しなす。

『分隊のワイヤレスとも、つながっています』

同様に装着する部下が告げていた。

応えて返すかわりだ。絶縁コートへ袖を通しシャフルは、船外へ足を向ける。部下もまたポケットから取り出した絶縁手袋をはめつつその背を追ったなら、腰元のソケットから引き抜いたスタンガンの引き金を軽く絞ってみせた。ハンドガンに似た銃身の先で二つに別れた電極の間から、確かに淡いグリーンの火花は飛び散る。

『携行は許可したが、なるべくなら出番がないこと願いたいものだな』

音だけで察し、シャツフルは言っていた。

『万が一は、いつときでも想定しておくべきかと思ひまして』

部下は慎重な手つきでスタンガンをソケットへと、さし戻している。

『その万が一が起こってもらっては困る、と言うのが、わたしの本

音というところだ』

とたんハレーションを起こしたような夜空と、降り注ぎ舞い散る砂塵の白がシャツフルの眼を刺した。思わずシャツフルは手をかざし、しばし光景に両目をきつく細めた。ゆっくり辺りを見回してゆく。よくもこんな辺境の地にまでやってきたものだと、達成感とため息とも取れぬ息を吐きだした。

背面の風景を前面に投影することで、あたかもそこに物体がないような視覚効果を与えるミラー効果を備えた絶縁スーツの分隊員たちはすでに、そんな風景と一体化している。わずかゆれ動く景色だけでシャツフルはどうかその存在を確認すると、幾分慣れてきた目を開いていった。

おもむろにかざしていた手を振り上げる。

極Yが伝えてよこした店舗を目指し、町へと足を踏み出した。

と、押し止めてその時、こめかみは震える。

巡航艇からの連絡だ。

全員の頭蓋内へ響いたとあって、動き始めたばかりの一団の動きはそこでピタリ、止まっていた。すかさず部下が集団の前へ、進み出てくる。

『極Yから通信。プラットフォームで流します』

伝えると共に、プラットフォームを開いた。なら送られてきた動話を元に、誰もの前で人形は踊り出す。その右肩にはファイルが添付されており、動話はただちに翻訳されると部下もまたファイルの解凍にとりかかった。

『思ったより早かったですね。目的の店舗確認を終了。ですが対象は不在、ですか』

だがそっちのけでシャツフルは解凍の終わった添付ファイルを睨みつけている。それはかなり短い動画だ。

『これはどういう意味だ』

すぐにも説明を求め部下へ顔を上げていた。いや、なにも動画の中を流れる造語が読めなかったせいではない。一目瞭然だからこそ、

シャツフルは問わずにおねなかつたのである。

『はい。極Yはその際、店舗で見つけた造語の訳を頼みたいと、この映像を添付してきておるようです』

聞かされシャツフルは、愕然としていた。その手が、まるで目を覚まさせるように青白い額へあてがわれ、いつものように防塵マスクごとひとなでする。

『まさかこれも読めんのか、奴らは』

追い込んだのが自分たちだったのなら、それはあまりにも皮肉な話だった。

おじいちゃんへ

先にみんなと『アズウェル』へいつてるよ

ライブは閉店までやっています

必ず来てね

見て取った分隊員が早くも電子地図を取り出し出している。宙へあかりを浮かべて地図は、すぐにも砂塵の中に展開されていた。

『の、ようです。しかし、この、ライブというのは……』

目をやった部下が返したその時だ、またもやコクピットから連絡は流れ込んでくる。

『緊急連絡』

その口調は極Yの通信を知らせた時と明らかに異っていた。聞き分けシャツフルは、動画から視線を逸らす。

『どうした？』

低く問い返した。

『F7への不正アクセスが発覚。阻止すべく、ウィルスが展開された模様です』

『何だと？』

『今のところ改竄やワームの痕跡はありませんが、一部情報の漏洩は必至かと思われまます』

『それで相手は？』

『それが……』

コクピットからの声は、そこで詰まる。

見計らったかのようにシャツフルの前へ、ひとつところをマークした電子地図は差し出された。

『アズウエルの場所が分かりました。市街中央の飲食店のようであります』

見て取りシャツフルは先に向かえ、と立てた人差し指で進行方向を示す。

巡航艇がかき分けて出来たわだちは、すでに降り積もる砂塵よつてうつすら埋められようとしていた。動き出した分隊は、そこへ判をついたかのような足跡を連ね始める。

と、途切れていたコクピットからの声は、再びシャツフルのこめかみを振るわせていた。

『それが、不正アクセスを仕掛けてきた端末はここ……、この閉鎖基地の通信室となっております』

シャツフルは思わず部下と顔を見合わせる。

『時間は？』

絡めた視線を引き剥がし、すかさず確かめた。

『六三八秒前』

部下が白く霞む基地跡へ体を捻る。

『まさか』

『対象でない、とはいえん』

耳にしたシャツフルの声は異様なほど低い。いや、否定してしまえばここまでやってきたことが無駄だった。刹那、シャツフルは部下へ指示を繰り返す。

『今の電子地図を添付。極Yに依頼の訳をと共に返信してやれ』

矢継ぎばやマイクへも呼びかける。

『分隊長！ 三体でいい、こちらへ兵を回してくれ』

呼びかけながら、極Yへの返信を始めた部下へもう一度、手を振

る。

『お前とわたしは戻ってきた兵と共に基地跡内部を確認する。この砂塵だ。スタンガンをもう一度、点検しておけ』

作業中の視線を注意をひきつけ、つけ加えた。

その頭蓋内で、『了解』と返す分隊長の声は響く。

『シャツフル中尉』

『何だ？』

呼びかけられ、シャツフルは答えていた。

『確認しておきたいことがある。極Y、もしくは対象と接触した場合の指揮権は？』

部下は早々にも極Yへの返信を終えたらしい。プラットフォームをたたみ、絶縁コートの奥からスタンガンを引き抜いている。砂塵の中、引き金へ指をかければ砂塵のせいかわ飛び散るグリーンの火花はやはり漏電でもしているかのに危なげだった。眺めながらシャツフルはマイクへ言い放つ。

『我々が現地へ到着するまでは分隊長に任せる。ただ連絡だけは怠るな。回線は開いたままにしておけ』

『了解した』

聞きつつ視線を持ち上げれば、砂塵の上にちょうどこちらへ戻ってくる靴跡を見つめる。最後にもうひと声と、シャツフルはマイクへ呼びかけた。

『コクピット、聞いてるか？』

『もちろん、中尉』

『F7に、ハブA Iの監視強化を伝える。今のアクシデントで動き出すかもしれない。自閉されたままでは使い物にならんからな。動き出したなら、事態を隠ぺいしていたあのデフォルト処理を行えと伝えておけ。実験体を連れ帰れば、ハブA Iは必ず必要となる。使えるモノに戻しておけと伝言を頼む』

『了解しました』

言い切ると同時だ。歩み寄っていた足跡はシャツフルの傍らで立

ち止まった。ミラー効果を切った三体の兵はそこに姿を現す。

『我々が同行します』

一体はすでに、基地内部の電子地図を検索し終えていた。

『頼んだ』

答えればスタンガンを差し戻した部下も歩み寄ってくる。

『準備、整いました』

見回しシャツフルはうなずいた。

町へ向かう分隊へ背を向け踵を返す。立てた指で天をさし、その先で円を描いた。

『行くぞ』

視界前方で基地が、砂塵に巻かれて白くかすむとコマ落とされたかのように揺れ動いている。目指し進めるシャツフルの足へ、力なく乾いた大地は絡みついていた。

店舗中央、据えられた半円卓へクロマは駆け上がる。

(アニキ、造語の訳がきたで！)

高く振り上げた腕でテンへ知らせた。

ミノムシドアの前、苛立っていたテンの視線はたちまちクロマへ飛び、前へ、プラットフォームを抱えた通信係が半円卓を回り込み駆けて来る。肩に添付ファイルを張り付けたトニツクのホログラムはそこで優雅と踊り、見て取ったテンの眉間は一瞬にして開いた。顔を上げるなり周囲へ鋭く腕を振り下ろす。

(撤収や！ 奴らの移動先が分かった。追跡する！)

(アズウエルの位置を、全員の電子地図へ転送や)

同時に下二本の手で通信係へ綴って指示した。入れ違えで上二本の腕を駆使し、周囲へとテンは示す。

(全員、手元の電子地図端末確認せー！ 確保、対象はそこや！
今から乗り込む！)

遅れまじと通信係が地図を転送していた。テンの指示を受けた船賊たちもまた、先を争うように電子地図を開いてゆく。傍らから、メジャーの腕はテンへ突き出されていた。

(テン、ここは飲食店ですよ。今行くと、客がいるんじゃないですか？)

やがて転送された地図を確認する頭が方々で揺れ動く。

(フェイオンほどやないやろ。今度こそ囲む)

見届けテンは静かに、しかしながら力強くメジャーへ上二本の腕で振って返した。

(連邦に、内容は確認した、今から向かうゆうて伝える。それから確保したときの引渡し方法も教えとけ、いうとけ)

下二本を通信係へとあてがう。

(了解つす)

読み取った通信係の顔に満面の笑みは浮かび、一步さがってプラットフォームへメッセージを読み込ませていった。背にしてテンは真逆と前へ進み出る。呼びかけて大きく、その両腕を広げた。

(ええか、お前らアホやかな、同じ段取りで行くぞ！)

勢いに外套は翻り、位置把握につとめていた船賊たちが弾かれ、そんなテンを見上げる。

(現場は今回も店舗や。クロマのチームは裏口から先に突入。こっちは表から客を装って入店する！ ただし、時間帯からして客がわんさとおる可能性が高い。相手の顔は忘れてへんやろうな。今回はマーキングはされてへんから見失いやすいぞ。忘れた言うヤツは現地につくまでもう一回、頭に叩き込んで)

ならこれからの大仕事を前に、どの顔もひとつ残らず引き締まっていた。見回しテンは、ここぞと鼓舞して腕を振る。

(これが最後や、気合入れて行け！)

動話はそのとき舞踏にも武道にも通じると、翻る外套の動きとあいまって見る者を圧倒する。おかげで最後、その腕が空を切ってから船賊たちが答えるまで、しばらくの間は空いていた。やがて了解の意を伝え、スパークショットは振り上げられる。見渡しテンは、最後にその視線をクロマへ向けていた。アゴを引いて、小さくうなずけば合図に変えてクロマは身を翻す。自らのチームを呼び寄せると、裏口から飛び出していった。

(なら、わたしたちも行きましょう。テン)

店内が閑散とする。乱さずメジャーがやんわりと動話を揺らした。(よっしゃ……)

乱れた外套の前を整えなおす。何事もなかったかのように、テンはその手でミノムシドアを押し開けた。

『なんだと？』

一方、降船準備の整ったトラは光速出口を前に啞然としていた。何しろ砂漠港の貸しドックはどこも満杯だ。

『わしにどこへ降りると……』

さすがに取る物もとりあえず『Op・1』を飛び出してきただけはある。慌てて近場の検索に取り掛かるが、それこそが田舎町という場所柄か。町に隣接する港は砂漠港以外に存在せず、あるとするなら時差が生ずるほど離れた谷あいの、外資系フルオート工場が立ち並ぶ一角、工場専用のドックのみだった。たとえ『アーツエ』にたどり着いたとしても、それでは意味がない。

おたおたしているうちに、オートパイロットは光速を降りる準備を整え、侵入回避可能エリア突破までのカウントダウンをコクピットのアクリル下部へ高速スクロールさせ始める。インターが要求する船種の申告に応じて船のメインコンピュータがデータを展開し、そうして船は出口への侵入回避可能エリアを突破した。利用光速料金の精算明細がアクリルへ表示され、瞬間、視界は白く弾ける。広がった光がすぐにも点へ収縮すれば、アクリル一面に乾いた惑星『アーツエ』は姿を現していた。

もちろん、このまま砂塵の中へ不時着するわけにはゆかない。ドック探しを諦めたトラは潔くオートパイロットのスイッチを切る。

『軍基地跡の滑走路を利用するしかあるまい』

しかめ面が、その顔面へさらに深く複雑なシワを刻み込ませていた。

砂塵を含んだ大気に、早くもアクリルは摩擦熱で赤く染まっている。

睨みつけてトラは、間近と迫った緊急着陸に身構えた。

『駄目じゃの、こりゃ。にっちもさっちも使えんわい』

砂塵の山に立てたハンドライトも燃料切れが間近だ。不規則に点滅して、額の汗を拭うサスを不安定に照らしている。

復旧に取りかかってはみたものの『F7』へ侵入するなり攻撃を受けた機器は全てダウンしたきりだった。しかしながらあの座標に間違いがなければ、スラーのデータをチェックした相手は今、信じがたいことにこの地を訪れているという。その理由こそアルトを追いかけてのことだとすれば、閉鎖されているハズの基地から行われた不正アクセスを確かめに、ここへ乗り込んでくるだろうことは時間の問題だと思えてならなかった。

『今度は椅子も持ち込まんといかんの』

それ以上を諦めサスは、額を拭った手で床を押しやる。よっころせ、と言わんばかりに立ち上がった。長らく同じ姿勢を取り続けたせいだ。疼く腰をなだめすかし、機材を吐き出し頼りなく潰れたバツクパツクを手に取る。中から携帯電話を取り出した。

収穫として満足のゆく内容ではないうえ、面と向かって伝えておきたい気持ちはあったが、こればかりは相手の動きが予想以上に早かったと割り切るしかないだろう。アルトの船へリコールする。呼び出し音が切れる瞬間を心待ちにした。だが当のアルトが通信に出る様子はない。

ちらり、サスは時計へ視線を落とす。

時刻はすでに夕方を示していた。

『演奏へ向かいおったか？』

すでに『アーツェ』を発っているとするなら船にいるハズなのだから、この時刻に向かう場所といえればデミに聞いたそこしか思いつかない。疑いつつも、くどいほど粘って待つ。

と、聞こえてきたのは微かな物音だ。しかも捉えたのは、携帯電話を押し当てていない方の耳だった。反響に反響を重ねたその音はすぐにも砂を噛んで動きにくくなったこの建物のドアだ、とサスへ閃かせ、携帯電話を握り締めたままサスは表へ振り返る。

言い表すにけたたましい、という言葉は適切でないだろう。そのとき『アズウエル』は至極冷静な活気に包み込まれていた。

体に付着した砂塵を吹き飛ばすべくエアシャワーブースを抜け出しネオンは、抱えた稀なるイベントの準備に奔走する店内を見回してゆく。

フロア壁際に並ぶ個室のほとんどは淡いハトロン紙のような壁で仕切られ、聞いていたとおり浮かぶエメラルドグリーンの文字映像で予約済であることを知らせていた。だからしてそれだけでは足りぬと現在、間仕切りを取り払った浮島のような個室もまたフロア中央にセッティングされつつある。ならそれは飾り付けの花だろう。傍らで見知らぬ『デフ6』が小さなアレンジメントや身の丈程もある観葉植物の仕込みに精を出していた。きっと花の仕入先はポツプの店で間違いない。眺めておれば急に店内の明かりが落とされる。

驚き目をしばたかせたのも束の間だ。やがてゆっくり息を吹き返した明かりは、ぼんやり闇の中に個室を浮き上がらせていった。伴い、物という物から怪しげな影は伸びて、明るさは互いの顔が見える程度で固定される。

そのころにはボーイたちも追加して設えた個室の仕上がりを確認していた。

だからして遅れを取らぬよう厨房もまた、その動きを激しくしたようだ。見とれていたネオンの耳へ、ぶつかる食器の音はけたたましく響き、すかさず威勢のいい現地語もまた漏れ聞こえてくる。

そんな厨房ののぞき窓がついたドアから、表まで出迎えてくれたボーイが姿を現していた。抱えていたメニュー端末を清算カウンタ

ーへストックすると、涼しい面持ちで本日のメニューのデータチェックを始める。

「これはまた豪勢なところへ招待されたものだな」

ライオンだ。最後にエアシャワーブースを抜け出して早々、この風景に口を開いていた。

ちなみにアルトとライオンにサスは、デミのはからいで今回、特別招待客扱いとなっている。

『何？』

『ヒト』語だったため聞き取れなかったらしい。先頭を切って入店していたデミがライオンへ振り返っていた。その顔へ、ライオンは造語を使い言いなおす。

『立派な店なので驚いた』

『当然だよ。だって、アズウェルは前に八つ星レストランに選ばれたことだってあったんだよ。田舎だけれど、町の自慢の場所なんだ』
『それはおみそれした』

デミはそれこそ鼻高々と鼻溜を膨らませ、敬意を表してライオンは頭を下げる。照れたように体を揺すったデミは、その顔を今度はネオンへと向けた。

『おねえちゃん、どう？ ぼくたちが来たお昼間とは違うでしょ？』

釘付けとなったままだ。ネオンは返す。

『すごい』

我を取り戻してデミへ、その視線を落とした。

『違う場所みたい』

『データベースで調べたら、昔のフロアはこんな感じだった、って見つけたんだ。こういうのライブハウス、って言うんだって！』
『おねえちゃんの立つ舞台は、ここだよ』

教えて足元を指差す。店内前方、そこはエアシャワーブースと厨房入り口の間地点だった。

『向こうから照明が当たるよう取りつけたからね。それから、えつと、招待席はどこだっけ？』

立ち位置周辺を確認してネオンはうなずき返し、セツティングの終わったフロアをデミは見回す。ならその様子に気づいたらしい。ボーイがチェック中の注文端末を置いて、現地語で声をかけた。おっつけ指で、向かって左壁面後方の個室を示してみせる。どうやらそこらしい。見定めたライオンが向かい歩き出していた。急ぎ足と駆け寄ってボーイは個室までを案内し、その後ろからアルトも、そこにいたのかと思うほどつまらなげな面持ちでついてゆく。

辿り着いた一角は、腰掛けるにも丁度の高さで確保されていた。ライオンとアルトは上がり込み、見はからってボーイがエメラルドグリーンの文字映像を手のひらで遮った。消えた文字の代わりに温かくも懐かしさ漂わせるオレンジのライトは灯って、キャンドルさながらふたりの手元をぼんやり照らし出す。

軽く一礼したボーイがきびびすを返していた。
そんなふたりへ見える？ とデミが伸び上がった手を振っている。
アルトは返事すらしそうにないのだから、あぐらをかいたライオンが代わりにそんなデミへ手を振り返っていた。

『それにしても楽団はどうしたんだろ。先に入ってて、って言ったの』

様子に満足して手を降ろしたデミが、顔つきを一変させる。ならその時だ。エアシャワースのドアはスライドした。音に振り返ったデミの表情は、とたん見えた物影に明るく弾ける。現地語で何やら鼻溜を振るが早いか、エアシャワースへと駆け出ししていった。

つられてネオンも体をひねれば、そこに知った顔を見つける。『アーツエ砂の民資料館』だ。そこであれやこれやと資料館の解説をしてくれた館長は、朱色も鮮やかな貫頭衣の民族衣装をまとうと、手に謎めいたズタ袋を掲げ立っていた。背後から同じようないでたち『デフ6』たちもまた、次々と姿を現す。

「楽団って……」

思わずネオンの口から言葉はもれ出していた。

そんなネオンに気付いて館長も、急ぎ歩み寄ってくる。かと思えばネオンの手を握りしめ、息せき切ったように現地語をまくし立てた。だが何を言っているのか、ネオンには分からない。勢いに逃げ腰となっておればデミが間に入ってくれていた。

そんなデミの通訳によると、どうやらこの小さな民族楽団がアナログ楽器と競演できるなど、光栄かつ喜ばしいことだ、と言っているらしい。迫真の訴えもまた、控えた演奏に興奮しているためらしかった。

『資料館の館長が楽団の団長で驚いた？』

館長の熱い歓迎から解放されたネオンへ、デミがいたずらげと笑みを投げる。

『聞いてない』

肩をすくめてネオンは返し、してやったりとデミは順序が逆になった互いの自己紹介をすませた。

『館長で楽団長のエンシユア』

「ぼくの命の恩人、アナログ楽器を演奏するネオン」

改め互いはそこで握手を交わす。それだけで全てが見えるのは、不思議としか言いようがない互いの皮膚感覚だ。ネオンは握ったエンシユアの手に、何ら根拠もないまま全てがうまくゆくだろうことを感じ取る。

『アーツエの民族楽器はどんな音？』

その安心感が、早くもネオンにそう言わせていた。

デミから聞き取ったエンシユアは、団員たちを呼び集めにかかる。団員は八名だ。すぐにも整列した団員たちに店内へ民族衣装の鮮やかな朱いラインは引かれ、その列に乱れがないことを確かめたエンシユアが手を、ため気味に振り上げる。

合わせて団員達が手にしていたズタ袋を鼻溜へかぶせた。

その動きは素早く、様子に注文端末をチエックしていたボーイも顔を上げる。

瞬間、団員たちの鼻溜がマリののように大きく膨らんだ。吸い込ん

だ息をこれでもかと、かぶせた袋へ吹き込む。袋は翼にも似た形へ弓なりと膨らみ、そこから唇を振るわせた時に出るようなブルブルと言ふ音は鳴り響いた。

絡め取ってエンシユアが、上げていた手を素早く振りおろす。呼応して団員たちは翼の先を空へ突き上げる。息もぴったりに首を振ると、先端を回転させ始めた。

見れば袋の先には、小さな穴があいているようだ。そこを通して音は鳴ると、そうして始まった回転に極端な遠近を伴う響きは放たれる。

ままに数回転。

やがて申しあわせたように団員たちは、一步、互いの間隔を押し広げた。解き放たれたようにそれぞれが違った動きで翼を回転させる。支えていた手を離すと袋を振り回す者もいれば、自分自身が回転する者、八の字を描いて優雅にリズムをとるものと、動きは実に様々だ。おかげで単一だったうねりは複雑に分散すると、押し寄せる波のごとく幾重にも重なりリズムを厚く、熱く呼応させる。

そこにメロデーはない。ただ追いかけて、たたみ掛け合い、それぞれにそれぞれの主張を続けるリズムだけがあった。そのリズムが激しくなればステップを踏む団員たちの動きも激しさを増し、やがてこれがダンスであるのか音楽であるのかをあいまいとさせてゆく。光景に、ネオンは目を見張っていた。

そんなネオンを誘うかのように、それまでかしまっていたボーイがリズムに合わせ、手を打ち鳴らし始める。音に振り返ったなら、朗らかな笑みを携えたボーイとネオンの目は合っていた。その瞳に誘われるまま、ネオンもまた体を揺らしてみる。

なるほど、乗ってみれば分かることはあった。このリズムの基本は五拍子と三拍子の繰り返しだ。刻んで耳をそばだてれば、ブンブンと唸っているだけの音程にも、それなりに微妙なピッチがあることに気付く。それはまるで『ミルト』のバックヤードで困り果てた、あの靴音とどこか似ていた。

至極繊細なりズムのポリフォニー。

だが靴音と明らかに異なるのは、決して単調ではないという点だ。ならば、と楽団の奮闘ぶりを目に焼きつけネオンは、まぶたを閉じる。考えながら感じつつ、繰り返す音の底へ、紡ぎ出される音の彼方へ、ありつたけの集中力で潜り込んでいった。潜りつつ、胸元にぶら下がる楽器を体へ引きつけそつとくわえる。そこに横たわるモノを乱さぬよう、深く静かに息を吸いこんだ。

そうして放つ、最初一音。

探る必要などありはしない。

それはいつも、どこからともなく降ってくる。

当たりとばかり、ネオンは開いた瞳で己が十本の指をひと思いと駆った。

「お、始まったようだな」

ライオンがあぐらを解いてさも愉快そうに身を乗り出す。個室の上がり口へにじりよると、腰かけそこから両足を下ろした。

前でネオンの吹き鳴らす楽器は、うねり重なる袋の重低音を相手に高らかと弾けクリアな音色を鳴り響かせている。相変わらず小刻みと縦横無尽に音階は連なり、多勢を相手に負けじと、しかしながら茶目つ気たつぷりにメロディーを奏で続けていた。

塗膜を張り替えつつドックで聞いた時から、音色はライオンの心をことごとく掴んで離さない。おかげでまたもや体はリズムを刻んで揺れ出し、精算カウンターへ戻ったボーイも同様に手を打ち鳴らしているのを見る。見守るデミもマネージャーそのものだ。次第にヒートアップしてゆくネオンと楽団の様子を、傍らから注意深く見つめていた。

その中、演奏は、ときおり方向を見失ったようにほぐれ、舵を失った難破船のように迷走する。だが決して止まることはなく、むしろそうした荒波が訪れれば訪れるほど乗り越えた互いの音色を阿吽の呼吸と、強く絡み合わせていった。やがてそれは異種格闘技かと熱を帯びて渦を巻き、誰にも止めることの出来ない領域へ突入してゆく。

迫力に、いつしか花の飾りつけに追われていた『デフ6』の手も止まっていた。忙しいハズの厨房からもまた、素っ頓狂な顔をしたコックたちが顔を覗かせる。いや、そもそも無視することなどできはしないのだ。耳のみならず皮膚からも浸透してくるこの響きと、そこに込められた熱は、抗うことの出来ない興奮を皆へ伝播させる。やがて見守る誰もの体を、小さく、大きく、揺らしていった。

「今日はえらく調子がいいな」

眺めて満足げに牙をむき出し、ライオンもまたアルトへ振り返る。がしかし壁際へ背をもたせかけ両目を閉じたアルトの仏頂面に、なんら変化は起きなかった。目にしてライオンは、満足の底が抜けたような興ざめに浮かべた笑みを消し去ってゆく。

「だから一体、何だというのだ？」

眉間に生えたテグスのようなヒゲを、ここぞとばかり逆立てた。

「いいではないか。先に靴代を出し渋ったのは、あなたの方だろうか？ この分だと貸した金額に利子がついて返ってきてもおかしくないぞ。そのどこが気に入らないと言うのだ？ 一晩明ければ、くれてやるだの言い出すなどと、ネオンでなくともいい気はしない話だ」

困り果てたように、ひとつため息をつく。ままに下ろしていた足を引き上げ、アルトへ体ごと向きなおった。

と、アルトの口元が何事かを綴って小さく動く。その声は嵐のごとく激しさを増した演奏にかき消され、ライオンの耳まで届かない。「何だと？」

思わずライオンは聞き返していた。

応じてアルトがまぶたを持ち上げる。もう一度、繰り返してみせた。

「茶番なんだよ」

それは棘もあらわな響きだ。耳にして言わしめる理由こそわからず、ライオンはしばしきょとんとしてみせる。ならば間抜けたその視界から抜け出すように、アルトは壁から背を浮かせた。立ち上がるべく丸めた瞬間、そこに差しこまれたスタンエアはチラリ、ライオンの目に映る。それは『アーツェ』へ上陸して以来、操縦席の背もたれに貼り付けられていたハズの代物だった。いったいどういう風の吹き回しだ。ライオンは振り返る。いや、スタンエアがそもそもアクセサリー感覚のものでないなら、おそらく変わったのは気分ではなく状況なのだ、と気づかされて息を詰めた。

いつしか体は、あれほど満喫していたリズムを忘れ去っている。

代わりに茶番の意味をようやく理解できたような気がして、間延びしていた表情を元へ戻していった。

「なるほど。だからしてあなたは、ここを早く立ち去りたい。靴代などくれてやる、というわけか？」

立ち上がったアルトはすでに胸の高さにまでしかない間仕切りへ歩み寄っている。戯れるネオンと楽団の様子をそこからひどく厳しい面持ちで、見つめていた。

「どうも、あなたとネオンと一緒にしない方が彼女のためにもいいように思えてならない。あなたはすぐにもここを発て。ネオンのことは、わたしがトラとの間に入る。もう互いに運は使い果たしたはずだ。ラッキーこそ続かない」

と、わずかにアルトの顔は振り返った。

「違うのか？」

向かって鼻先を振り、ライオンは背中中のスタンエアを示してやる。だがのぞくアルトの横顔に変化はない。遠く近くで絶好調と跳ね回る演奏だけが、そんなふたりの間から騒ぎを続けた。

答えないアルトはやがてその絵をネオンたちへすえなおしてゆく。

「あいつは、ドクター・イルサリの依頼で『ミルト』へ来たと言っていた」

言った。

しかしながらその声は正面を向いているせいか、ライオンには聞こえない。自ずと体も前へ乗り出す。だからして聞き違えたとは思えなかった。だが確かにアルトはその先を、こう続けて言う。

「あいつを『ミルト』へ呼んだのは俺だ」

「なん？」

思わずライオンは牙を剥き出していた。

「ちよつと待て。つまり……あなたは、自分が、その、ドクター・イルサリだと言っているのか？」

なにしろ理屈を辿ればそうならざるを得ない。ついで泳ぎそうになつた視線をライオンはアルトへ固定しなおす。

「まさか、あの連邦名医の？」

とぎれとぎれと問い返した。だがそうやって大真面目に語れば語るほど、話は滑稽でしかなくなるのだから手におえない。

「一体、何を言い出す。あなたはジャンク屋ではないか。いくら軍が絡んでいそうだとはいえ、第一、ドクターはすでに死んだ。それがあなただと？」

おかげで一杯食われた、とやがて笑いはこみ上げてくる。しかしながら認めてアルトが表情を緩めることこそなかった。ただ低くこう言い放つ。

「なら、あんたはボイスメッセンジャーだろ。あいつを勝手にされちゃ困る。俺はそれが言いたかったただけだ」

笑い損ねたライオンの息は、そこで止まっていた。

楽団の奏でる低音もまた、ふいと鳴り止む。回転していた袋は今やフィニッシュと宙へ高く放り上げられ、大きく身を反らせたネオンもまた再びキャッチされるまでの間合いをはかり、くわえた楽器を振り上げていた。瞬間、団員達の手が袋を掴む。素早く吹き口を鼻へあてがったなら、これでもかと吹き鳴らした。おっつけネオンもそこへ加わる。艶やかな音色を上から下へ、壊れそうなほどと綴ってみせた。

果てのアイコンタクトは、ごく自然だ。

息もぴつたり演奏は締めくくられる。

しばむ袋が、うなだれていた。

ネオンもまた楽器からそうつと唇を離してゆく。

余韻にさえ音色は満ちていた。

満喫して、団員たちがとたんはちきれんばかりの笑みに鼻溜を膨らませる。ネオンもまた心地よい疲れをにじませ大口を開け笑い出だした。そんなネオンへ団長が、すかさず握手を求めて手を差し出す。ネオンが握り返せばすぐさまふたりは旧知の友であるかのような抱擁を交わした。その抱擁で、互いの演奏を称えあう。デミもまたそこへと駆け寄っていった。

傍らで手を打ち鳴らしていたボーイはどういうわけか涙ぐんでいるらしい。厨房の動きもいつしか完全に止まると、調理着に身を包んだコックたちが、振り回して少しくたびれた花を手にした『デフ6』が、拍手喝采、そんなネオンと団員たちを取り囲んだ。

沸き起こる歓声にネオンが応じて冗談交じりと、投げキッスを辺りへ振りまく。ひとしきり終えたなら、離れた個室から様子を伺うアルトとライオンへも跳ねて手を振ってみせた。

だがアルトを凝視したままのライオンに、ネオンへ答えて返す余裕はない。ただアルトだけが小さく手を上げ微笑み返す。

長らく閉ざされていたとは思えぬほど、基地の扉は容易く開いていた。そこに嗅ぎ取れるものがあるとすれば先客の気配しかなく、シャツフルは頬を不敵と緩ませる。

『まさか、これほど年代モノのセキュリティが布かれたままだったとは、驚きです』

そんな扉に形ばかりと取り付けられていたバキュームロックは、解除手順を誤れば火薬爆弾並みに破裂する真空トラップ鍵だ。だが今や潜るところへ潜れば解除方法はおるか、製造方法すらも公開されているのだから解除も組み立てもその気と度胸さえあれば可能なシロモノでもあった。ゆえにトク必要のあったそれが施錠されなおされたものだとして、これまたカモフラージュだと割り切るに無理もなくなる。

『丁度いい。他の閉鎖基地の状態もチェックしておく必要があるそうだと上へ報告しておくことにしよう』

ミラー効果のせいで揺らぐシルエットとなった分隊員から、八面体の展開図よろしく解除されたバキュームロックを受け取った部下は呆れ声で呟き、返してシャツフルは緩んでいた頬を引き締めなおす。

足元から奥へと伸びる通路へ目をやったなら、いくらも行つたところで見えなくなり、なるほど絶えず積もり続ける砂塵にかき消されてしまったのだろう、と諦めることにした。

『安全確保のため、屋内でのミラー効果使用を制限します』

声は分隊員のものだ。共にシャツフルの肩先を彼らの気配は過ぎていった。通路の風景がわずかに揺らいだかと思えば、とたんそこに絶縁スーツを着込んだ分隊員らの背は現れる。ままに左右、分かれて壁際へとすり寄っていった。

そのうちの一体が、取り出した電子地図を左腕へ貼りつける。残る二体は先行すると、一定の硬度を持つものへ命中した時のみ濃度に比例して固まる特性を持ったダイラタンシーレットのシヨットガンを目線へと持ち上げた。そんな分隊員らが交わし合う合図は些細なものだ。すまして基地内部への前進は始まる。シャッフルもまた絶縁コートの前を合わせなおすとその後につき、ソケットからスタンガンを引き抜いた部下がその背を追った。

内部は直線通路によって縦横、規則正しく区切られた単調な造りをしている。そんな通路の左右に部屋は並び、進めば進むほどと穴蔵よろしく辺りは暗さを増していった。それでも吹き込んで来る砂塵のせいらしい。どれほど足音を忍ばせようと踏みしめるたび、鳴く砂の音は響びく。誰も神経を逆なでた。

だからこそ分隊員らはくまなく薄闇の向こうへ銃口を突きつける。またぐ十字路は、やがて三を数えるまでになった。

『この先か？』

越えたところでシャッフルは確認する。

分隊員たちの集音マイクは喉元に貼り付けられており、シャッフルと違い聞き取れないほどの声だろうと誰も頭蓋内へ鮮明と響いてこう知らせる。

『右折。左壁面。四つ目のドア』

と部下が、スタンガンを握り締めシャッフルの前へと回り込んだ。ままに、一枚、二枚とドアをやり過ごす。ならわずかな空気の動きに渦を巻いて舞い上がる砂塵の向こうだ。闇に慣れた目がやがて『通信室』という造語をとらえた。下に、それまで確認できなかった痕跡がぼつぼつ、残されているのもまた、シャッフルは見取取る足跡だ。

ずいぶと奥へ入ったせいか堆積するスピードは表ほど早くないらしく、気づけばシャッフルらの足元から通信室へ向かい伸びていた。おっつけ目にした部下も、シャッフルへ振り返る。その顔があらさまに訴えるのは、そうして見つけた足跡がやけに小さいことに

ついで、だろう。踏み出した足を並べてみれば寸法も歩幅もシャツフルの半分ほどしかない。だが『バナル』と『ヒト』との体格差はそうもなく、相手は明らかに想定していたものと様子が異なることを示していた。

と、その行く先でやおら分隊員が身を沈める。

四枚目のドアだ。

その両側へ背を貼りつけた。

電子地図を腕に貼り付けていた一体も、地図を腰元のパックへしまいこむが早いか入れ替わりとショットガンを引き抜いている。

漂う緊張感はあからさまとなり、ただ中で眼前のドアへ分隊員の手は伸びてゆく。

触れかけて、その動きを止めた。

なるほど、ドアはすでにほんの少し廊下側へ浮き上がっている。

『突入します』

こめかみを通して声が、全員の頭蓋内に響いていた。

許可してシャツフルは浅くうなずく。

『……二、一』

そうして取られたカウントにゼロはなかった。

代わりとばかり、ドアは開け放たれる。

爆風を受けたかのように砂塵は足元から舞い上がり、紛れて、すり足さながら分隊員たちは上体を揺らすことなく通信室内へなだれ込んでいった。ブレることのないショットガンの照準が、けぶる砂塵の向こうを次々ととらえてゆく。標的を探してむさぼるように通信室内を舐め回し、ドア前から死角三方へ散っていった。

続いて身を躍らせた部下が忙しげと辺りを威嚇して回る。

だが他に動く者の気配はない。開け放たれたドアより流れ込む砂塵だけがゆっくり、床を這うと広がっていた。

『クリア』

こめかみへ散っていった分隊員の声が響く。

『クリア』

『クリア。オールクリア』

聞いて部下がスタンガンの電極を天井へと逸らせた。たちこめる砂塵を払ってシャツフルもまた室内へ足を踏み入れる。

『遅かったか』

吐いて、絶縁コートの内側よりハンドライトを抜き出した。目の高さにかざし、まるで惨状を見るかのような顔つきで辺りの様子を確かめてゆく。

奥へカギ型に折れたそこもまた、足元にはうつすら砂塵が積もっていた。ドア前に残されていた小さな足跡はそこで、今しがた入ってきた分隊員の足跡に紛れ、散らばっている。そのランダムな動きと数から到底、ここにいた何某の後を追うことはできそうになく、頭蓋内にはなく、そのとき鼓膜へじかに分隊員の声は響いていた。

『中尉。こちらです』

シャツフルはハンドライトごと振り返る。聞こえてきた方へと、部下と共に向かった。

そこで分隊員は、何かしら見おろし立っている。並んで同様に足元へ目をやれば、あるはずもない機材はそこに散らばっていた。

バッテリーと、一見してただの箱にしか見えない五つの装置。ポータブルスクリーンの映写機に、キーボード。明かりを取っていたのだらう、脇にはかき集められた砂塵の山に立つハンドライトさえもがある。

『帰って分析にかけますか？』

見つめていた部下が振り返った。

促しかけてシャツフルは押し止まる。

『いや、イルサリの放ったウイルスが検出されるだけだろう。ここまでの輩が証拠を置いて逃げ出したのだ。足の着くようなモノは残っていないとみるべきだな』

『一体、誰が？』

『うがるのは当然だ。』

『誰でもかまわん。ただ、我々がここへ来ていることに気づいたの』

「だろっ」

「だからして逃げおおせることができたと？」

「タイミングがよすぎるだけに、その線が濃厚だ」

「でしたら、そこから我々のことが伝われば、極Yはまた対象を取り逃がす可能性が高いと予想されます」

さらに奥の確認へ向かっていた二体の分隊員が、シャッフルたちの元へ引き返してくる。視界の端にとらえてシャッフルは、片耳からぶら下がるマイクへ視線を落とす。

「聞こえているか分隊長。そっちはどうなっている？」

「アズウェルへ向かう極Yを捕捉。アズウェルへは先に二体、直行させているが、到着までまだ八〇〇秒間かかる見通しだ。対象の目視確認は早くともその後と思われる」

無線を開けておくよう指示しただけはあり、すぐにも声は全員に届いていた。

「聞いた通り、こちらの動きが筒抜けとなっている可能性が生じた。我々も急ぎそちらへ向かう。変化があれば、すぐ連絡しろ。場合によっては、我々の手で対象の確保に乗り出す。ゆえにミラー効果は切るな。連邦が関わっていることは伏せておきたい」

「了解」

「この基地に、アシになるようなものは残されているのか？」

会話は途切れ、シャッフルは問いかけた。

「自分は、先ほど建物の周囲を確認したおりに、ピオモービルがあったのを見ております」

答えたのは一番奥に立っていた分隊員だ。そもそも軍用車両は避けておきたく行軍を決め込んでいたが、間に合いそうもないならその顔へうなずき返す。

「案内してくれ。それを使おう」

合図に、分隊員はきびすを返した。連なる足が次々と、つもる砂塵を踏み散らしてゆく。ドアが締め直されることはない。誰もいなくなつた部屋でただゆうつ、と空を切っていた。

そうしてトラはため息を吐き出す。どうにか踏みしめるに至った『アーツェ』の地を、万感の思いを込め見渡した。

何しろ今夜はとびきり白い様子だ。おかげでの視界不良に加え、放置されて長らく経つ基地の滑走路は砂塵も深く、トラが予想していた以上、ずいぶん荒っぽいや着陸はすまされたところでもある。

『まったく、ネオンを捨てる前に、これではこっちが遭難してしまうのではないか』

ぶるんとシワを波打たせ、ひとつ身震いした。

その後、かしいで停泊する『バンブ』の片側には、水かさもだいぶ引いた間欠河川が流れている。遠くには幻影のように基地跡が象徴的な管制塔をけぶる空につき立てていた。同じ滑走路のだいぶ後方には在りし日のモノか、軍用らしき船舶が一艘、影となって浮き上がってもいる。

それにしてもさすがは町外れだ。それら全てのどこをとってもトラの目にはもの悲しく映って止まなかった。思わず心もとなさに襲われかけ、振り切りトラは遠くへ視線を投げる。基地とは正反対にある町を見据え、腹へ力を込めなおした。ままに抱えていたオイルボードを地面へ投げ出す。ならボードは沈むことなく浮き上がり、トラは砂地に馴染ませその滑り具合を確かめた。どうやら急ぎ塗りつけたオイルに問題はないらしい。上へ片足に乗せる。もう片方の足で地面を強く蹴りつけた。ボードがスルリ、滑り出す。調子を合わせてもうひと蹴り、トラはボードへ加速をつけた。

砂塵を切るボードの振動が、トラの土気すら上げてゆく。

もう十分だろう。ボードの上へ蹴り出していた足も乗せた。ままにシワをなびかせトラは、サスの店めがけ白い夜を滑り抜けてゆく。

揺れ動く。

並ぶ通信機材一番奥、それまでピタリと閉じていた片側が、やおら小さな音を立てて浮き上がった。次の瞬間、床へと投げ出される。勢いに砂塵はもうと舞い上がり、派手な音は鳴り響いた。そうして奥から、空を手繰って手は突き出される。連なりサスは姿を現していた。これでもかと小さくたたんだ体を引き伸ばし、機材の中から這い出てくる。

『う、いちちちち。全く、トシはとりたくないもんじゃの』

別室へ移るとしても明かりを掲げたままではあまりに目立ち過ぎた。だからといって手探りで初めて訪れた場所を移動することは容易ではなく、おかげでそうと決まれば行動は怒涛のごとしとなる。消えそうなハンドライトの明かりを頼りに、バックパックから掴み出した工具で通信機材のフレームを外し、トレーのようにはめ込まれた基盤を抜いて放熱スペースへ押し込んだなら、今しがた造り出した空間へサスはもぐりこんだのだった。

同時に砂塵は吹き込むと、いかつい安全靴はなだれ込んでくる。

そうして排熱用の金網越し、しのいだ息詰まるひと時は幸運の連続といっても過言ではなかった。

知らぬ間にぶつけたのか、それとも緊張するあまり力が入り過ぎていたのか、やり過ぎてサスは痛む体をめいっばいに伸ばす。

『ありゃ、間違いない軍じゃの。ミラー効果など特殊部隊しか考えられん』

痛みで無事を確認し、その頭をもう一度、通信機材の隙間へ突っ込む。一緒に放り込んでいたバックパックを引きずり出し、探り出した最後のハンドライトを灯した。

『しかし言いおつたの。連邦がかかわっていることを伏せておきたい、じゃと？ ふん、間抜けな奴らじゃ。もうバレとるわい』

続けさま携帯電話もまた取り出す。手早く再度、アルトの船へつなげた。呼び出し音へ耳を傾けつつこぼす。

『ただ、まだアルトへは伝わっておらんがの』

待つ間、もう片方の手で電子地図を展開させた。帰りの順路を確認する。だが終えたところでアルトが応答する気配こそない。

『やはり、店か』

見限り、押し込んできた輩も口走っていた『アズウェル』の回線を調べるべく、町の通信局へ携帯をつなげた。ところがだ。そうして初めて気づいたのは電波状態の悪さだった。

『なんじゃ、こんな時に』

確かにある程度、整備された町とその周辺なら問題はないが、ここはまるきり手入れされていない町外れの砂塵に埋もれた閉鎖基地内である。思った以上、砂塵による電波の乱反射は激しく、うちにも不通となっていた。

『てえいつ。こんなことなら、もう少しまともなヤツを持ち込めばよかつたわい』

バツクパツクへ投げ入れる。

押し込んできた輩も手を付けなかったように、物理的にも使用不能となった機材に回収の必要はない。サスは必要最小限を詰め込んだバツクパツクをヤケクソ紛れで背負いあげる。

『何としても、あやつらより先に知らせねば』

ドアへと踵を返した。ハンドライトの明かりを頼りに、頭の中に展開させた順路をなぞり歩く。

『しかしドクター・イルサリとは、症候群の権威じゃろうが。しかももう死んだ。名前を使つとるあのラボはなんじゃ？ そことアルトに何の関係がある？ まあ、あるからこそ船賊を使つてまで追い回さねばらんじゃろうが、だとして理由はなんじゃ？』

眉間へ力を込めた。そうして己が垣間見てきたからこそ疑いよう

のない事実へ、目を凝らしてゆく。

『お前はそこで何をしておったというんじや？ アルト』

最後の十字路を折れたなら、数歩も行けば掲げたハンドライトの向こうに表へ続く扉はおぼろげと浮かび上がった。どうやら先にここを出て行った輩は、ご丁寧にも扉へバキュームロックを仕掛け直していったらしい。施錠を示すと、扉を貫通して表のバキュームロックへ突き刺さるように設置された真空門は、淡い赤色を滲ませている。

見定め駆け寄り、サスはハンドライトを肩とアゴで挟みこむと、真空門の側面につけられたバルブをひねって真空を解いた。赤い警告色は青へ変化し、完全に真空が解けたところで門を手前へ引く。表で解除、展開されたバキュームロックの動作は手ごたえとなつて門から伝わり、バルブをノブ代わりにしてサスは扉を引き開ける。

やおら砂塵が吹き込んでいた。目の前に白い夜が広がる。

いつしか基地の片側に流れていた間欠河川は、その姿を消してしまつたらしい。ただ川があつただろう気配だけを残し、深くえぐれた砂塵の作り上げた広い谷間を見る。けぶる果てには押し込んできた輩が乗りつけてきただろ二艘の船が、シルエツトとなりおぼろげと浮かび上がっていた。

サスはハンドライトを捨て、扉へバキュームロックをかぶせなおす。

『この手のセキュリティーで助かつたわい』

振り返れば疲れのせいも、慣れているハズの砂塵に足を取られてならないまま、乗りつけてきた店のビオモービルへ急いだ。建物を回り込んだところにあるそこは、放っておけば砂塵に完全に埋まってしまうだろうことを考慮して選んだ、少しばかり窓のひさしが突き出た場所だ。だがようやくと辿り着いて、サスは我が目を疑う。

『……どう、言う、ことじや？』

何しろ砂山しか見えない。

バックパックを投げ出していた。

転がるように駆け寄ると、はいつくばって砂塵を掘り返す。しかし掘れど探せど、ビオモービルが出てくることはなかった。それどころかサスは、地面からひさしまでの高さに変化がないことに気付く。つまるところビオモービルは埋まってしまったのではなく、忽然と消えてしまったのだと理解した。なら押し込んできた輩の言葉は、啞然とするサスの脳裏へ蘇ってくる。

『そうか、奴らが……!!』

確かに、町まで表に停めてあるビオモービルを使うと、彼らは言っていたのだ。

『くう、なんてことじゃ……!!』

すでに疲労困憊。おかげで町までの道のりは、途方もなく遠く感じられていた。だがこれは諦めていい話であろうはずもない。

知らぬ間に体へ積もっていた砂塵をサラサラ、落として、サスはどうにか立ち上がる。地平線に薄くわずかにへばりつく白い影のような町へ目をやった。

『何が何でも、知らせてやらんと』

鼻溜を振り、手足の動きもバラバラのままだ。町へ向かい走り出す。

またひとり、『アズウエル』へと客が消えていた。

灯された赤いホロ看板へ吸い寄せられるように、白夜の彼方から現れ出でた客たちは出迎えるボーイへ上着と靴を預け、次から次にエアシャワールームへ入り込んでゆく。

詰まるところ、みな噂しか知らなかった。ゆえに抱えた期待の全ては、語り草となった極Yのトニック同様、映像と伝聞がくどいほどに刷り込んで植えつけた、記号のようなステレオタイプの感動だ。そこに実感がかけている限り知識は己がものにならず、補填されるものが極上の感動であるなら、誰もがこの機会に胸をときめかせ『アズウエル』へ足を運んでいる。

なじみの客は出迎えるボーイと親しげに挨拶を交わし、そうでない者たちは意気揚々とドアをくぐっていた。すでに個室はその半分が埋まり、演奏が始まるまでのひと時をいつも以上、弾む会話と多彩な料理で過ごしている。

それら個室の間を行き交うボーイは、普段なら砂塵を払ったあとクロークで預かる靴や上着類を個室にまで届けていた。収容客数から全ての保管が不可能だと判断されたせいで、そのひと手間は間違はなくボーイたちを忙殺している。だが彼らにそんな様子は微塵もつかげない。かつては八つ星レストランに選ばれた、これも実力か。まるで水槽を泳ぐサカナのごとくしなやかな身のこなしで、フロアをあくまでも優雅に行き交っていた。

やはりこの花はポップの店が卸したものらしい。デミのふれこみにより昼間と違いダークなドレスに身を包んだポップは、エアシャワールームを出たところ、壁際の最も大きな飾り付けへ熱心な視線を向けている。そんな彼女へもボーイはウエルカムドリンクを差し出し、受け取ったポップの目に厨房より飛び出してきたデミの姿は

映った。デミも目ざとくポップを見つけたなら、客とボーイの間をすり抜け駆け寄り、つま先立っていつも以上の熱弁をふるって今日を語る。

かたや離れた場所で立ち話に興じているのは、赤い『アーツエ』の民族衣装を着た民族楽団団長のエンシユアだ。袋を片手に、打ち合わせと称して行ったセッションの余韻もそのままオーバーゼスチャーで、個室に腰をおろす知り合いと鼻溜を揺らし合っていた。

振り上げたその手が、すれ違うボーイと思わずぶつかりそうになる。

だが知っていたかのようにかわすボーイは実に器用だ。そのさい、おどけたように首さえ傾げてみせたなら、オレンジ色の明かりを反射させた周囲から、笑みさえ引き出させていた。

老いも若きも『デフ6』も、偶然この惑星を訪れた『デフ6』以外の種族も、記号が実感に変わるその衝撃をまちかまえ期待に胸膨らませている。それでもかどと気持ちウイ躍らせ、その瞬間を待っていた。それぞれの思いはそうして『アズウエル』で渦を巻き、夢という名の、しかしながら揺るぎないひとつの像を作り上げてゆく。共有されたそれはまさにかつて既知宇宙共通の話題であったとおり、溶けあう世界をひとつ、体現しようとしていた。

だからしておそらくこの先、言語に理論は必要なくなる。ゆえにどこから誰が何を携え訪れようと、この世界の住人にすっぽりおさまるはずでもあった。

そう、己がどこから来た誰であるかを忘れ、捨て去ってしまったように。

エンシユアとのニアミスをやり過ごして厨房へ向かうボーイは通りすがり、アルトとライオンの個室から飲み干されたグラスもまた回収している。だがふたりは、アルトの告白に黙り込んだままだった。ただライオンは周囲が騒ぎ立てれば騒ぎ立てるほど、まだ自分に運は残っているだろうかと考える。動じずアルトは壁へ背をもたせかけ、組んだ両腕で目を閉じうつむいていた。それが何かを待つ

ているように見えたなら、なおさら不穏な空気はライオンの中で拭えなくなつてゆく。だとしてどうしても追及する勇気だけは持てずにいた。

全てを知らず、ふたりの個室からグラスを引き上げたボーイの行く先、厨房の奥でネオンは出番を待つ。残念ながらこうしたイベントが初めての『アズウェル』に気の利いた楽屋はなく、『デフ6』用の小さなロッカーが並ぶ従業員の更衣室、その中央に置かれた円形のベンチに腰掛けていた。

そこには先ほどデミが残していった賄いの皿が、まだ湯気を上げ置かれている。加工惑星である『Op・1』の他種族料理がベースとなったそれは、『ヒト』も楽しめるクリームシチューによく似た一品だったが、ネオは手をつけていない。かつてない緊張が、そんな気分にかけてはくれなかつた。

思えばこれまで盲目なまでに音色を溺愛するログジャンキーしか相手にしてきたことがない。だからして受け入れられるのは当然で、しかしながら今日は違った。

あおつて隣接する厨房からはフル回転の悲鳴が聞こえてくる。それはいまだ一度ものぞいていないフロアの大盛況ぶりを伝え、並ぶ好奇の目を予感させてならなかつた。

晒され、満足させることはできるのか。

また不安は吹き出す。それまであつた自信など冗談のように消え、そのあつけなさにさえ愕然とした。

覚えた心細さに首から下げた楽器ごとベンチの上で、ひざを抱えて小さくなる。息を殺し、続かず体を揺すつてみた。だがそれは最初の一音さえ選び出せそうにないほど支離滅裂なりズムしか刻まない。

最悪だ。

こんな状態でいつもの演奏などできやしない。そう思う。

あざ笑って時間は迫り、厨房のけたたましさだけがコト切れそうなほどまでにテンションを上げていた。

デミに相談しようか。いや、混乱させるに違いない。思考は低く鈍いところを何度もぐるぐる回り、果てにそれはふい、と浮かんでいた。

当然だ。これまで望まれるように演奏しよう、なんてしてこなかった。

何しろ繰り返してきた演奏の全ては降り注ぐままに、が常だ。閃いたそれを伝えたい心のままに、が全てだった。

可能とする記憶は過去にしかない。だからして忘れてしまったはずなのに、それでも動く体はネオンの意思を越えている。それを今さら変えようなんて、出来るはずもなかった。そして出来るはずのない事をしようなどと、混乱して当然だった。

瞬間、塞いでいた胸で何かは弾ける。

まるで視界が新しい色に塗り変えられたような錯覚さえ覚えてネオンは詰めていた息を吐き出していった。曖昧ながら明確と或る己の核は、またもやネオンを饒舌にしてゆく。

湧き出す思いが音色と弾けた。

満たしてやがて不安に焦げ付いていた心の底を、湖面と押し広げてゆく。そこに降らせる空は映り込むと、しんとネオンの中で冴え渡った。

抱えていたヒザから腕をほどく。まるで空から舞い降りてきたかのような気分だった。ネオンはそうつと床へ足を下ろしてゆく。

厨房の怒号はまだ鳴りやまない。だが今となってはそれも上滑りするほど部屋は静かとなっていた。

確かめネオンは二度、瞬く。

ロッカーに後付された小さな鏡には、そんな自分の顔が妙に歪み映し出されていた。意識してネオンは小さく笑いかけてやる。

呼び止めてノックの音は聞こえていた。答える前に振り返れば、その時がやってきたことを告げてドアは押し開けられる。

『おねえちゃん。出番だよ』

現れたデミが誘って鼻溜を振った。

顔へとネオンは、静かにならず返す。

『店舗正面確保』

今日に限って濃い砂塵のせいだ。頭蓋内で鳴り響く分隊員の声へノイズは混じっている。

『状況は？』

折り返したのは分隊長だった。

『現在も客が入店中。この様子ですと中は……』

知らせる分隊員は先発の二体だ。目抜き通りを挟んだ『アズウェル』の真向かい、並ぶ店舗と店舗の間に白に紛れ身を潜めていた。

『そこから対象の確認は可能か？』

最後まで聞くことなくシャツフルは通信へと割って入っていた。もちろん分隊長が先に二体を現場へ向かわせたのは、そのためだ。しかし彼らの答えは冴えない。

『申し訳ありません、中尉。ここからでは不可能です。路面に解放された窓がありません。すでに入店しているとなると、確認には内部への侵入が必要です』

灯るホ口看板の下、窓ひとつない壁面に三輪ジープとコンパクトなビオモービルを並べ、『アズウェル』はかたくななまでに店内を覆い隠している。

と、分隊長の鋭い声は上がった。

『左三〇！ およそ四エリア前方。濃紺の外套を着た七体、極Yだ』

『アズウェル』をくまなく眺め回していた先発二体の視線が、弾かれたようにそちらへ飛ぶ。ミラー効果の表面処理がその速度についてゆけず、ほんの一瞬、周囲に紛れていた彼らの姿を歪んだ風景として浮かび上がらせた。

『確認』

『我々はその四エリア後方。アズウェル裏にも極Y、十五体の移動』

を確認している。双方、目的地到着までおよそ七〇秒と予想
『奴ら、またフェイオンの時のようにハデにやらかすつもりではな
いだろうな』

聞いたシャツフルが苦い声を放った。誰にも見えていない場所で、
その顔をひとなでしもする。

『部隊を確認』

先発二体が、分隊長らを捉えたと告げた。

『こちらもお前たちの位置を確認した』

『こちらは現在、ピオモービルで基地跡よりアズウェルへ移動中だ。
到着まであと四八〇秒はかかる見通しとなっている。ゆえに
指示の変更はない。我々の到着前に極Yが突入した場合、現場の指
揮は続けて分隊長に任せる』

幾分取り戻せた落ち着きで、シャツフルもまた放った。

『了解』

そうして『万が一』と、分隊長は付け加える。

『これが極Yの勇み足で終わったならば？』

『後始末は奴らにやらせる。我々は即刻退却する』

シャツフルの返事に淀みはない。

『了解した』

そうしてあく、一呼吸。

次の瞬間、さらに厳しさを増した分隊長の声は、誰もものこめかみ
に響いていた。

『いいか、これから我々は裏手と正面、側面非常出口の三方に分散
して店内へ侵入する。正面と裏手は極Yの監視を続行。非常出口の
部隊のみ、先行して対象の確認へ向かう。先発二体はその部隊と合
流。ただし店内は混雑が予想されるため、正面部隊に限り他の部隊
から対象確認の報告が入るまで侵入を禁止する。状況連絡は怠るな
以上だ』

わずか蹴散らされて、路面の砂塵が小さな砂埃を巻き上げた。分
隊長の声が途切れたことを合図に、部隊はそれぞれの配置に散開し

てゆく。一方は路地へ消え、分隊長率いるもう一方は目抜き通りを足早に横断し、路地の先発二体と合流した。再び通路を横切りなすと『アズウエル』の壁伝い、路地裏に面する非常出口へ回り込んでゆく。残りは変わらず極Ｙを捕捉すると直進、『アズウエル』へ向かった。

と『アズウエル』を前に極Ｙの足は止まる。

『裏口、店舗前で極Ｙが待機中』

『ビオモービルは店の東側より通りに侵入した』

『正面。極Ｙは四エリア手前で停止しています』

飛び交う通信の中、確かに通りで足を止めた極Ｙは、けだるい仕事で辺りを見回している。

『周囲を警戒している模様』

『非常出口、到着。状況は了解した。動きがあれば即刻伝える。我々はこれより対象確認のため店内に侵入する』

その時テンは、下二本の腕を外套の中に隠すようにして、そっと片手で動話を綴っていた。

(なんや、さつきから妙な気配がしてへんか?)

横目に見て取ったメジャーは、『アズウエル』へ向かっているのだろう最後の客が自分たちを追い越して行くのを眺めながら、まるきりテンとは違う方向へ顔を向けている。

(どついう、ことですか?)

つづり返せば、そんな手元を隠すように残る部下たちは通りで、不自然なまでに小さく集まっていた。

(なんや、風とは違う砂埃が通りの向こうへ舞い上がっていきよった感じがする)

ならメジャーがテンの示した方へ、なにげに視線を投げやる。

(よく見えませんが……)

乳白色にけぶった夜は影すら塗りつぶし、まるで白く膨張する布

のようだ。

(俺が神経質になりすぎとるだけか?)

ときにここでは、こうした環境に不慣れな観光客が距離感覚や方向感覚を失い町の真ん中で遭難することもある。舌打ちするように指を鳴らしてテンは、こだわっても仕方のない錯覚から自らを切り替えた。

『アズウェル』へ向かっていた客の波は、先ほどメジャーが見送った者が最後らしい。店先で出迎えていたボーイが店内へ戻ってしまっている。今となつては赤く灯るホロ看板だけが、すました面持ちでテンたちをじつと見下ろしていた。

(ボス。クロマから、連絡っす)

壁になつていた部下が、唐突に振つて外套の前を解く。下二本の腕でプラットボードをそつと差し出してみせた。裏口前へ到着したことを知らせるクロマはそこで、突入のタイミングを要求している。(俺らが先に客を装つて店中、入る。様子が分かつてから突入や) テンはひじから下だけを使うようにして、外套に隠れた下二本の腕だけを使い、返事を読み込ませていった。送ればすぐさま、クロマから(了解)の短いメッセージは返される。その段取りを確認しあうメジャーたちが目で頷き合い、その輪を裂いてテンは下二本の腕を隠すと再び『アズウェル』へとその足を繰り出していった。

だとして招かれざる客に出迎えなどない。ドアはまたもやそこで造語文字を流している。

『本日は満席です。恐れ入りますが、ご予約のないお客様はご入店いただけません。またのご来店を心よりお待ちしております
アズウェルスタッフ一同』

だとして訳する必要などありはしない。ここまで来たならとる行動はひとつだ。睨み付けるように見下ろしテンは、そんなドアを押し込んだ。砂塵の侵入を防ぐエアパッキンから空気の抜ける音は聞

こえ、やんわりドアを開いてゆく。

そこに突き出た銀の噴射ノズルがどこかしらゴージャスなエアシヤワーブースは広がった。隔てた向こうから、ざわめく声と乾いた拍手の打ち鳴らされる音はかすかと聞こえてくる。それは白々しい夜とは裏腹の、熱を帯びた生き物の気配でもあった。

かなりの数がひしめいている。

確信すればテンの表情も引き締まった。

最後に潜り込んだ部下がドアを閉め、合図にノズルから突風にも似た空気が三百六十度、身に付着した砂塵を吹き飛ばす。回収すべくブース内の空気が吸い上げられたなら、店内へ通ずるブースのドアはスライドしていた。

花が、暗がりをお苦ししいほどの原色で染め上げている。その色にまみれてひしめく客が、こぼれんばかりの笑みを浮かべていた。目はそのどれもが、一点へと釘付けになっている。おかげで入店したテンたちを気にする者はいない。すぐさま対象を探してテンたちは、並ぶ顔から顔へと目を走らせていった。

気づき近づいてきたボーイは、そんなテンたちを客だと勘違いしている。すぐにも満席である説明を始めていた。

だとして最後まで聞いてやる義理はない。テンはそんなボーイを押しつける。態度にボーイは表情を一変させ、咄嗟にその体をテンたちの前へと回り込ませた。それもまたテンが跳ねのけたなら、互いはそこでもみ合いとなる。

様子に、別のボーイもまた駆けつけていた。

おかげで思うよう対象が探せない。テンが苛立ちを覚えたその時だ。一点を見つめていた客たちの間から堰を切ったような歓声は沸き起こっていた。割れんばかりの拍手は鳴らされ、座り込んでいた客らが勢いよく立ち上がってゆくのを目にする。

不意をつかれてテンとボーイたちもまた、そんな彼らの視線の先へと振り返っていた。

厨房、開かれた観音扉前だ。

テンの目に、楽器を携えたヒトの姿は飛び込んでくる。

非常出口のロックは形ばかり。恐らく土地柄、他者を警戒する傾向が少ないのだろう。磁気錠の解錠にはパスワードさえ必要なかった。門として横たわるコイルヘッルを忍ばせ電圧を変えたなら、磁気鍵は音すら立てずロックを解く。

否や分隊長を含め四体は、電子地図にダウンロードさせた店舗見取り図をバイザーのスリットへ差し込む。店内の構造は透視図を重ねるかのごとく視界へと映り込み、おかげでこの非常出口の向こうに防砂用の二重扉が、その奥には厨房側面へ続くバックヤードの通路が伸びていることを理解した。首を振って見回せば、通路中ほどの左手側に店内の手洗い前へ出る通用口があることも知る。

再度確認して分隊長は、必要最低限、押し開けたドアの隙間から店内へと侵入していった。そのさい遮ったセンサーが、防砂用の換気装置を作動させる。だがよほど客の対応に追われているらしい。ほぼ直線と伸びる通路に、怪しみ何某が姿を表すことはなかった。

静まり返った前方を見据えて分隊長は、透明の二重扉をスライドさせる。歩調に合わせバイザーの見取り図映像がスクロールしてゆく中、足を進めていった。

『二手に分かれる。先発は、突き当りの厨房と更衣室を確認。我々は、通用口から店内の様子を確認する』

奥に手洗い前へ出る通用口が近づいてきた所で指示した。

通用口へ辿り着いたところで足を止めたなら、揺らめく風景となり先発二体が奥へ消えてゆくのを視界の端に確認する。

ままに通用口へ身を寄せた。

ドアへ耳をそばだてる。

聞き取ることができるのは幾重にも折り重なる周波数の高い食器の音と、時折、起こる爆発的な笑い声だけだ。

そっとドアから身を離していた。いかにも握り易く成型されたレ

バー型のノブへ、分隊長は手を添える。同行していた分隊員らもダイラタンシーベルトのショットガンを持ち上げると、ドア際へ張り付きバツクアップの体勢をとった。

『表。極Ｙ、入店』

と、飛び込んでくる通信。

タイミングを失い、分隊長はノブから手を離す。

『裏は？』

問い返した。

『極Ｙ、待機のまま』

『更衣室、状況を伝える』

いましがた向かわせた二体おつまた呼びつける。

ならまるで待っていたかのような間合いで答えは、返えされていた。

『現在、目的地へ移動中』

確かに店舗は通りに沿って細長い形をしている。足音を立てて走らない限り、そう早く辿り着けはしなかった。

『隣接する裏口から極Ｙが突入してくる恐れがあるぞ。気をつける』

『了解』

そうして分隊長は、ドアノブを握りなおす。

柔らかくひねっていった。

そうしてわずか引き開けたドア左に、手洗いへの入り口はのぞく。店のフロアから奥まった場所らしく、その隙間から遮断されていた話し声は明瞭と吹き出して、鳴る食器の音もまた一気に甲高さを増して分隊長の鼓膜を震わせた。

さらに引き開け視界を確保すれば、奥まった底とフロアを仕切り、目隠し代わりに置かれた観葉植物が見えてくる。

幸い、手洗いを利用しようとする者も、している者もい様子だ。

躊躇することなく分隊長は通用口を潜り抜け、壁へと背をつけた。

その死角をフォローし、後方についていた分隊員もまた通用口を抜け対面する壁へ身を沿わせる。

互いに観葉植物へとにじり寄っていった。

葉陰から、そつと客席の様子をうかがい見る。

『店内、極Yを確認』

ボーイたちとモメていた。

視界の端に捉え、分隊長は対象の姿もまた探す。

さなかこめかみは震えていた。

『厨房、クリア』

『更衣室、クリア。通用口へ戻ります』

分隊長もまたかすれるような声を放つ。

『店内、対象を確認中。多すぎてすぐには見つかりそうもない。極

Yが店側とモメて……』

その時だ。

一点を見つめていた客たちの間から堰を切ったような歓声は沸き起こっていた。割れんばかりの拍手は鳴らされ、座り込んでいた客らが勢いよく立ち上がってゆくのを目にする。

それは厨房、開かれた観音扉前だ。

楽器を携えたヒトの姿はあった。

(あいつや！)

瞬間、テンはそれまで隠していた下二本の腕を出すとボーイたちを突き飛ばし、上二本の腕でつづる。

『確保対象を発見。客席、厨房前！』

まくしたてたのは分隊長も変わらない。

そしてそれは、正面入り口前で待機していた部隊への突入許可の合図ともなる。

知らず通信係はクロマへ（突入）の動話を飛ばしていた。
背においてテンは外套を払いのける。四本の腕をボーイたちへと
振り上げた。

だからして飛び込んできた一報に、クロマもまたちやちな磁気錠
を力任せと蹴り破る。

『裏口、極Ｙ、突入開始』

『正面、突入します』

立て続け分隊長のこめかみへ声は響いていた。

デミとボーイに案内され銅色に光る厨房を通り抜ければ、その姿にコックたちは作業の手を止め、感慨深げとネオンへ拍手を送り続ける。健闘を祈るようなそれは厨房一杯に広がると、丸窓のついた観音扉の前へネオンを送り出していった。

そこでデミとボーイは左右、扉の取っ手を握る。引き開けるタイミングを推し量るその顔を見合わせた。

最後、デミがネオンへ視線を投げる。

ネオンが頷き返せばデミとボーイの体は瞬間、扉の影へ沈み込んだ。

合図に引き開ける。

視界が裂け、差し込む光りがネオンの目を強く刺した。拍手と歓声が割れんばかりに沸き起こる。

遅れてようやく瞳孔は絞れていた。好奇と期待に輝く無数の瞳は浮かび上がって、圧倒されネオンはしばし立ち尽くす。

我を取り戻したのは、しかしながら少しも怖くない、と気づいてからのことだった。おもねることをやめたなら、この大歓迎を受け入ることに抵抗はない。その柔らかさにネオンはただ、ありがとう、と奥に、手前へ返してゆく。観客たちはそんなネオンへさらに拍手を大きくし、あつという間にフロアを極上の温もりで包み込んでいった。

なら話したいことは山ほど、だ。

いや、音色はいつものごとく饒舌とどこからともなく降り注ぎ、止めようなく溢れ出す。ままに手繰り奏でたなら、ネオンの中から失ったはずの過去は音となって鳴り響き、ネオンはその手触りを、観客は待ち望む夢を、現実のものと手にすることができた。

そうしてそうか、とネオンはひとりごちる。

分かち合つてこそだった。

居場所は確かと作り出される。

過去がなくとも未来が不確定だろうとも、生きゆく場所は今ここに与えられる。

デミが用意したといった急ごしらえのスポットライトは、そんなネオンを曖昧な輪郭で照らし出していた。吸い込んだ息をゆっくり吐き出し、その中をネオンは指定された位置へと向かう。観客の視線もまた動くと、デミとボーイが身を低くしたまま扉裏からフロアへ抜け出した。

所定位置で足を止めれば、見て取り打ち鳴らしていた手を下ろしてゆく客はすでに、予感しているからだろう。その瞬間を前に口をつぐむみ、まさに今かと身構えさえしてみせた。

そうして訪れた静寂に緊張の糸はピン、と張り詰め、途切れさせることなくネオンは首から下げていた楽器へ両手をかける。

見つめる客の頭が固唾を呑むように揺れ動いていた。

同じく見つめるデミの脳裏へ『ミルト』下層での出来事は蘇る。

あの時も同じだ。そうしてピタリ、楽器がネオンの手に馴染めば、ヒールの打ち鳴らすため気味のワン・ツーと共に荒れ狂うような音色は放たれるのだ。

が止まる、デミの息。

それはエアシャワーブース前だった。対応していたボーイたちを跳ね除ける四本の腕を目にする。

極Ｙだ。

何がどうなつて、などと思う暇こそない。

追い打ちをかけてけたたましい音が厨房からも鳴り響いた。

弾かれ振り返れば、ネオンに釘付けだったからこそだ。客たちもぶしつけなその音に視線を厨房へと投げていた。

高まつていた集中力をかき乱されたネオンもまた、そこできよんと顔を上げる。

がしかし、扉の向こうで何が起こっているのかを見て取ることは

できない。ただ物影のないまま、反対側、エアシャワーブースの扉が開く。翻弄されて誰も視線は交錯し、そのただなかで極Yたちが外套の中から棒状のものを引き抜いてみせた。長すぎる銃身ゆえ分解して持ち運んでいたらしい。次々に組み上げ、完成させたスパークショットを振りかざす。先端で、通電が完了したことを示す青白い火花を飛び散らせた。

否や、張り詰めていた緊張も、ネオンを包み込んでいたあの温もりも、全てが恐怖へ反転してゆく。悲鳴らしい悲鳴は上がらなかつた。ただもつれ合いながらだ。目にした客たちは一斉にフロアを後方へ逃げだす。

取り残されてネオンはただ、アルトを追いかけてここまでやって来たのかと考えた。だが全ては唐突過ぎ、それ以上、考えが先に及ばず立ちすくむ。

そんなネオンへ焼けこげた電極は突きつけられていた。

弾かれ、そつぽうを向く。

もみ合っていたボーイだ。銃身へ食らいついていた。払いのけるべく船賊は銃身ごとボーイを振り回し、離さぬボーイは決死の抵抗でネオンへ逃げると訴える。

『おねえちゃん!』

目の当たりにして我に返ったその耳へ、デミの声も飛び込んだ。そんなデミは厨房の扉前にいる。逃げゆく客を舐めるようにしてネオンは肩をひるがえした。だがデミが見えたような気がしたところで、勢いよく厨房の扉は開け放たれる。怒涛のごとくあふれ出てきたのは船賊たちだ。デミは覆い隠されていた。

「デミっ!」

傍らではついに振り払われたボーイが精算カウンターへ叩きつけられている。鈍い音に呼び戻されネオンは振り返る。そこでカウンターに体を預けたボーイは、もうピクリとも動こうとしない。

捨て置き船賊たちがネオンへ狙いを定めなおした。

逃げ去る客たちは見向きもせず、その中を影はかき分け、一直線

に駆けてくる。

見て取ったネオンの目は、ひときわ大きく見開かれていった。
アルトだ。

そうして浮き島個室へ駆け上がり、飛ぶように渡って、立ち塞がる船賊の背へ体当たりを食らわせた。なぎ倒し、力づくで中へ割り込んでくる。

「アルトっ！」

叫んでいた。ネオンもたまらず駆け出せば、その体をアルトは抱きとめる。

腕をネオンの喉へ絡ませた。

締め上げて身を翻す。

それきりネオンの背へ回りんだ。

「ちよっ……！」

のけ反りネオンは訴えるが、なおさら締め上げアルトはそのこめかみへスタンエアを押し付ける。

「動くなッ」

そんなネオンの視界の端で、アルトの手は忙しなく動いていた。

同時にこうも言っただけ。

『きさまら、それ以上、近づくなッ。近づけば、こいつの頭を吹き飛ばすッ』

「……っつ！ 助けに来てくれたんじゃっ？」

思っのもムリはない。いや、どう考えてもそうとしか思えなかった。だが構図は全くもってそぐわず、そぐわぬままにアルトは、よりいっその力でネオンの喉元を締め上げる。そこに、これが芝居でも冗談でもないことを示して殺気さえもを漂わせた。

必要とあればトリガーは引かれる。

いや、そもそもだった。これは何の取引なのか。

意味が分からない。それ以上ネオンには、何かの間違いだとさえ考える。

訴え、もがいた。しかしながらスタンエアは、拒みひときわ強く押しつけなおされる。

『正面、極Yが対象の確保を開始した。店内の客は後方へ退避中。影になって通用口からでは対象が確認できない』

極Yがスパークショットを振りかざした瞬間、動揺は波紋にも似た動きで客席の間へ広がると、逃げ出し始めた客に分隊長の視界は遮られていた。

かと思えば厨房の扉は開け放たれ、裏口を張っていた部隊から『極Y突入』の通信と共に極Yたちは踊りこんでくる。立て続け、正面の部隊からも一報は入っていた。

『正面より入店。対象の姿を目視で確認』

分隊長はエアシャワーブースへ頭を振る。そこでエアシャワーブースは彼らの存在を示すと、開いたドアをゆっくり閉めなおしていた。

『了解。対象から目を離すな。極Yがしくじったときは我々が確保

にでる』

『対象とは、どちらだ？』

言い放てば、その声にシャツフルの問いは重なる。

『確保対象です。別体はまだ見当たりません』

『先発隊、こっちは使えん。裏口と合流しろ。厨房からなだれ込んだ極Yの監視を続行』

正面部隊がシャツフルへ返し、聞きながら分隊長は別部隊へ指示を投げた。

『フェイオンのことがある。奴らなら、やりかねん。絶対に対象は焼かせるな！』

耳にしたシャツフルがそこへがなり立てる。

『了解。これより視界確保のため客席へ出る』

連れそう分隊長へ、分隊長は合図を送った。観葉植物の葉陰から身を離し、対象との距離を縮めるべくいまだ客席の間を後方へ逃れる客をかわし、フロアを進む。

と、その時だ。分隊長の傍らから、おもむろに何者かの影は飛び出していた。それは思うがまま群集をかき分け床を蹴りつけると、衝立のない浮島のような客席へ飛び上がる。

あまりにも目立つ拳動に振り返っていた。やおら声は大きくなる。

『いたぞ！ 客席側より別体、接近！』

店内の全分隊長が、即座に対応していた。

『裏口、確認！』

『正面、確認』

あいだにも浮島へ飛び上がった別体は、すでに二つ、三つと蹴り渡っている。

『別体のスタンエア所持を確認』

声は、正面入り口に控える部隊からだ。

『そのリミッターは外されているぞ！』

シャツフルが怒鳴りつけていた。

前で、最後の浮島を蹴った別体が極Yへと踊りかかってゆく。

『くそっ』

吐き捨て分隊長は、半分ほど距離を詰めたところで足を止めた。同時に、ダイラタンシーベレットのショットガンを持ち上げる。照準越し、わずかに揺れる銃口を制し、別体へ狙いを定めた。がしかしトリガーを引ききらぬうち、くるり身を翻した別体は対象を盾と抱え込み、その影へ身を隠してしまう。

『別体が対象を盾に取った』

投げ捨てるように照準を外していた。

『正面、別体は極Yへ動話を綴っている模様』

頭蓋内で別角度からの報告が響く。

『きさまら、それ以上、近づくなッ。近づけば、こいつの頭を吹き飛ばすッ』

『裏口側からでは、別体は完全に対象の影です』

おっつけ別体の怒鳴り声は響き、厨房扉側の部隊が手は出せない、と報告してくる。聞きながら分隊長もまた、盾にとられた対象の体が邪魔だと、客席内を回り込んでいった。

その間にも別体の放つ動話に揺れ動く極Yたちが、半歩、半歩と対象らとの距離を詰めてゆく。何を話しているのか、動話を読めない分隊長にはうかがいしれない。だが飛びかからんばかり身構える極Yの背から、冷静さが失われている事だけは十分に読み取れていた。

『極Yの誤射に警戒！』

裏口側へ促し、別部隊へも早口に言い放つ。

『正面、別体の背後を取ったのかッ？ 奴にも対象を撃たせるな！』

『やっていますが、極Yが邪魔で視界が確保できません』

『できませんじゃない、今すぐやれッ！』

ひっきりなしに、アルトの手は何かの形を繰り返し続けている。

見て取ることはできなかつたが、耳元で忙しなく動く手ひらの気配

と、喉元に伝わる振動がネオンにそう伝えていた。そのたびにじわり、船賊たちは困む輪を小さくしている。

間合いにアルトは、何らかの取引を行っているのだろうと思えた。それがこの危機的状況を打破するためなのか、穏便に収めるためたのかは全く不明だ。しかしながらどう考えてみたところで、どちらかの引き金が引かれなければこの場はおさまりそうになく、そしてどちらが引き金を引こうともネオンにとって、ありがたい結末にはなりそうもない事だけは感じ取れていた。

と、何らか形を繰り出し続けていたアルトの手が、ひときわ大きく振り捨てられる。

つまり交渉決裂か。

証明して厨房前だ。船賊たちが一斉に床を蹴りつけた。

それ以上近づけば頭を吹き飛ばす。

言葉がネオンの脳裏を過る。

気づいてアルトも身をよじった。

『撃たせるな！』

目の当たりにして分隊長は声を上げる。

受けて強硬手段といわんばかり、視界確保に苦戦していた正面入り口の部隊が極Yの間へと割り込んでいった。もちろん押しつけられた極Yたちもまた、対象へ前のめりになっているところだ。多少、押されたところで気づく者などいない。その隙間から厨房扉前の極Yへ体をよじった別体の、無防備な背中はそのぞく。

バンツ。

傍らで、精算カウンターが硬い音を立てていた。

間を置くことなくまた音は鳴り、厨房扉前に飾られていた花が花びらを散らす。

かと思えばネオンの背に、鈍い衝撃もまた走っていた。体はその時、前へ放り出され、倒れ込む寸前だ。どうにか踏み止まってみせる。

「ままた、なにごとかアゴを引いて振り返っていた。アルトだ。」

おぶさるようにもたれかかる頭はそこにある。かと思えば力なく、その体はネオンの背から滑り落ちていった。床へ転がり投げ出された腕から、スタンエアは弾け飛んで床を滑ってゆく。

「……なに」

光景にネオンはしばし釘付けとなっていた。

体を、次から次へ船賊たちは押さえつけてゆく。

「なっ、なにするのよっ！」

その場から、力任せに引き剥がしていった。

「離してっ、離しなさいよっ！」

両の手足を振り回して、ネオンはこれでもかと暴れる。だが相手はそれごときでどうなるわけもない数と力だ。かなうはずもない。

ままたエアシャワーブースへと引きずられてゆく。

「アルトっ！」

叫んでいた。

眠るでもなく、ただまぶたを閉じたアルトはそこで、どこか無機質と横たわっている。

肩を、歩み寄った船賊が蹴り上げていた。そうして転がした体を眺め、踏みつけ固定した顔をさらに念入りと覗き込んでみせる。

「ちよっつっ！　なによ、少しは丁寧に扱いなさいよっ！」

噛みついたところで気に掛ける素振りすらない。スパークショットを握っていない上二本の腕で、ただ周囲へ動話を繰り返したただけだった。

従い、取り囲んでいた船賊の中から二体が前へ進み出てくる。アルトの両足を取ると外へ引きずり出し始めた。連なり、残る船賊たちも退却してゆく。怯える客たちをそれぞれにひと睨みすると、他

言は無用とその場からきびすを返していった。

『極Ｙ、対象と別体を確保。撤収します』

『いや……、よくやった』

シャツフルの口調に力がないのは、恐らく例のクセでその顔をひとなでしているせいだろう。

『我々も撤収する』

いつもの低い響きで分隊長もまた、分隊を誘導する。了解の声は方々から頭蓋内へ返り、店内二方で、わずか風景もまた揺れ動いた。液化したダイラタンシーレットの白いシミだけを残すと、そぞろに『アズウエル』から引き揚げていった。

あれほどすぐに向かう、と言っておいたにもかかわらず、砂塵まみれでたどり着いたサスの店には鍵がかけられていた。滑るオイルボードを片足で押さえつけトラは、シワの上にシワを重ね小さな目をよりいっそう奥へ窪ませる。『アズウェル』へ向かったことを知らせる文字映像を睨みつけた。そんな『アズウェル』では『ライブ』たるものが行われるらしい。もちろんネオンを管理しているトラに、その意味が分からぬはずもなかった。

『なんだと? わしを通さず仕事を取ったというのか?』

ブルンとシワを波打たせる。

ついで小刻みに震わせもした。

瞬時にしてトラはその金でネオンは姿をくramsすつもりなのだ、と理解する。IDも現金も所持していないのだ。ここから自力で脱出などできはしない、とかいかぶっていただけにその事實は、いや、可能性は、トラに大きな衝撃と怒り、そして思っていた以上の恐怖を与えた。

持て余し、しばし風貌に似合わぬほど狼狽する。翻弄されていれば今更のように、今はわしの客だと言っていたサスの言葉は脳裏へ蘇っていた。ふともするとすでに偽造IDのひとつも発注済みなのではないか。勘ぐる。だとすればコトはそれこそ紙一重の状況だ。何としても阻止しなければ。思い立つが早いか、シワをなびかせ勢いよく振り返っていた。

トラにとって代わりがきかないのは何もエスパだけではない。あのオークション会場でひと目見た時からそれは始まったのだ。ネオンを手放すことは、これっぽっちも考えられない。白くかすむ通りの向こうを見据え、強く地面を蹴りつける。

『アズウェル』は、かつてデミの進学祝いに利用した店だと記憶

にあった。調べるまでもなく通りを真っ直ぐ、オイルボードなら三百秒コンドあまりの距離を疾走する。やがて裂き続けた白の中に『アズウエル』の店先は、デミのビオモービルを横付けして浮かびあがった。

が、またもや到着した店先でトラは押し固まる。『アズウエル』のドアに掲げられたメッセージが輪をかけトラを焦らせた。だとして貸し切りだろうと従ってはおれない。

オイルボードを小脇に抱え、トラは奥歯を強くかみ締める。ままた、まさに押し開けんとそのドアへ手を掛けた。

がスライドさせたのは、ドア向こうの誰かだ。

思わずトラは身を引き戻す。埋めて開いたそこから外套を着込んだ団体は姿を現していた。彼らは物騒にもほどがあるスパークシヨットを手に、しかしながら堂々とトラの前を横切ってゆく。

一体何がどうなっているのか。しばし啞然と見送っていた。

やがて奥から聞こえてきた覚えのある声に、はっと我を取り戻す。その視線をエアシャワーブースの中へ飛ばしたその時だ。探すネオンをそこに見つける。しかも四本腕の極Ｙに押さえ込まれていた。

にわかには信じられず、信じられないままネオンもまたトラの目の前を通り過ぎてゆく。状況は、そこでようやくトラに馴染み始めていた。今まさに極Ｙは、ネオンを連れ去ろうとしているのではないか。なぜだ、という疑問は二の次で十分だろう。瞬間思い切り胸へ息を吸い込む。

「ネオン！」

叫んだ。

だが振り返ったのは極Ｙたちの方が先だ。遅れてネオンが、暴れていたそこから頭をひねった。

「トラっ！」

声はモバイロのモニター越し、悪態をついてたそれとはまるでちがう。痛々しさに、抱えていたオイルボードをトラは投げ出していた。

『貴様ら！ 何をしている！ ネオンを離さんか！』
猛然と駆け出す。

拳動に、極Yのスパークショットは突きつけられた。
警告だ。

すぐにも引かれなかった引き金が、トラへそう気づかせせる。ならば怯む必要などありはしなかった。止まらずトラは両手を振り上げる。こんなことなら護身の装備のひとつも身につけてくるべきだったと考えるが、手遅れとはこのことで、長すぎるスパークショットの銃身を肩で跳ねのけ、極Yの小さな頭をむんず、とわしづかみにした。

『どかんか！ この、コソ泥どもが！』

抵抗する極Yの手が、四本、八本と宙を泳ぐ。暴れるたびに弾んで揺れるシワが、ことごとくそれを拒んだ。ままにトラは、雄たけびもろとも極Yの細い体を右へ左へ振り払う。もう、と砂塵は白い夜を濃くして舞い上がり、その奥に埋もれつつあるネオンへトラは手を伸ばした。

「トラっ！」

「待っている！」

ネオンの右腕を掴む極Yへ掴みかかる。

背に気配は過った。

振り返れば、見知らぬ『ヒト』を引きずって、店から極Yたちが姿を表している。仲間を蹴散らすトラの見て取るなり、『ヒト』を放り出し駆け出していた。

ここでもまたスパークショットを放たないのは、ネオンの存在を考慮してのことか。身構えたトラの腹に、そんな一体のえぐるような頭突きがめり込んだ。たまらず身を丸めてえげげば、その脳天めがけすかさず電極は振り下ろされる。辛うじて持ち上げた腕で押し止めるが相手は複数だった。振り払った極Yたちも身を起こすと加わり次から次へ、トラへ襲いかかる。

ことごとく全身で受け止めれば、ついに膝は折れていた。

なおさら勢いづく電極はトラを猛打し続ける。

トラが動かなくなつたところで、ようやくその手は止まっていた。が堪え、待つていたのは、その瞬間だ。ここぞとばかりトラは雄叫びもろとも身を起こす。驚いた極Ｙたちが、それまで打ち付けていた電極を宙に泳がせ後じさつた。追いかけて覆いかぶさるようになってトラは、泳いでいた電極を束とひと掴みにしてみせる。脇へ抱えて唸り声と共に、右へ左へ振り回した。スパークショットごと千鳥足を踏んでいた極Ｙたちを通りを彼方へ投げ捨てる。勢いのままネオンへと振り返つた。

『わしのネオンだぞ！』

姿はすでに夜の白さで極Ｙとひと塊になり、区別がつかない。

大立ち回りで舞い上がった砂塵を吸い込み、むせ返りながら、それでもトラはネオンを追いかけた。

その頭上で、やおら空は大きいたわむ。

漂う砂塵を吸い上げたかと思うと、そのたわみを突き破つて、それは姿を表していた。上空で待機していたとしか思えない船底だ。

重い駆動音が辺りを制し、船から吹き降ろされる風が、舞い飛ぶ砂塵が、町並みを、トラを、これでもかと叩きつける。

『……な！』

吹き飛ばされそうなほどの低空飛行に、身動きは取れなくなつていた。トラは翻るシワを押さえて空を、船を見上げる。そこに見覚えのある装備はあつた。そう、『Op・1』の狭い事務所を見た『フェイオン』崩壊中継、そこに映っていた不審船と同じサルベージウインチだ。

『船賊が、ネオンを？』

船の高度はさらに下がり、よりいっそう激しさを増した風が周囲の建物を軋ませる。

なびくシワに自由を奪われ、トラはついに地面へ伏せた。

トラに投げ出された極Ｙたちはその中を、懸命に船の真下へ向かつてゆく。

ならば開かれた船底からいく本もの磁気ハーネスは下ろされて、飛びつき掴んで極Ｙたちは引きずっていた『ヒト』もろとも船へと消えていった。掴まれもがいていたネオンもまただ。宙を仰ぐトラの前からまさに砂に撒かれて姿を消す。

『ネオン！』

叫べば容赦なく、口の中へと砂塵は飛び込んでいた。

知ったことかと船は船底を閉じ、最後にもうひと混ぜ砂塵を攪拌して取りなおした進路に高度を上げてゆく。勢いに町並みは激しく軋み、やがて船底は白い夜の向こうへ溶けていった。

吹き荒れていたはずの風がふい、と途絶える。

静けさと共に舞い上がっていた砂塵もトラへ、やがて静かに降り積もっていった。

『なんて、ことだ……』

力が抜けたようにトラの口から言葉は漏れる。ネオンの消えた空を仰ぐとがくり、膝を折った。拍子に体から降り積もった砂塵はどさりと、こぼれ落ちる。

叩きつけるように吹き荒れていた強風から解放され、そんなトラの回りで町並みは安堵ともとれるため息をもらしている。恐らく住まう者たちは先ほどの強襲にまだ部屋の隅で縮こまっているのだろう。もとより物陰のなかった通りへコトと次第を確認しに現れる者の姿は、まだない。

果たしてネオンをさらった理由が楽器の価値を知つての行為だとして、ネオンが自ら逃げ出してしまうよりそれは遙かにいただけない結末となっていた。見張っておいてくれ、と頼んでいたサスへ恨みごとなど当て外れだ。追いかけるとして『バンプ』は遠い位置にあり、万策尽きてトラの思考は停止する。

と、背後で『アズウェル』のドアは開いていた。
音に振り返る。

飛び出してきたデミに、呆けていた目を丸くしていった。

『デミ坊……、デミ坊ではないか！』

自分でも驚くほど素っ頓狂な声だ。出してトラは立ち上がり、デミへ向かいその手を大きく広げた。

『おいちゃん！』

デミも気づくとそんなトラめがけ走り出す。飛び込んできたデミを、衝撃で舞い上がった砂塵もろともトラは抱きしめた。すぐにもその体を引き離す。

『一体、何があった？ どうしてネオンが極＼に、船賊に連れて行かれなければならん！』

『おねえちゃんに会ったの?』

『今ここですれ違った。なんとか助け出そうとしたのだが、ムリだった』

とたんデミは、いても立ってもいられない様子でトラの腕を振り払う。

『それで、おねえちゃんは、おねえちゃんたちは、どっちへいったの?』

そこへ駆けつけたのは『アズウェル』のボーイと、オレンジ色のツナギを着込んだ毛むくじやらの顔だ。通りを見回すなり、まるきり同じ質問をデミへ投げる。

『二人はどこへいった!』

『貴様らもネオンをさらうつもりか!』

トラは声を上げ、様子に慌てて止めに入ったのはデミだった。

『違うよ、おいちゃん。ライオンはボイスメツセンジャーだよ。ほくもおねえちゃんも、一緒に連れられて行ったジャンク屋も、フェイオンから一緒に逃げてきた友達なんだ』

『なんだと?』

シワの奥で、トラは目をぱちくりさせる。ならさすがボイスメツセンジャーという仕事柄だった。声には敏感らしい。琥珀色の瞳でまさか、とそんなトラを凝視してみせる。

『その声は確か、ご老体の店で聞いたモニターの……』

『ネオンを引き取りにきた。トラ・イアドだ』

状況が状況だ。成り行きを知ることができるならと、トラは口早に名を告げる。

『ひと足、遅かったようだな』

『一体何がどうなっている。ネオンは船賊の船に連れ去られていったぞ』

『船につ?』

指さしてトラは教え、聞かされたデミが驚いたように鼻溜を振った。なら教えたのはライオンとなる。

『その船賊、おそらくはフェイオンで我々を追い回していた奴らだ』
『フェイオンでも船賊に追われていた？』

『そんなのぼく、知らなかったよ』

知らされトラは驚きの声を上げ、デミもライオンへと振り返った。

『いや、追われているのはジャンク屋のはずなのだが……』

『どう言うことだ。ならネオンはそのジャンク屋のせいで、巻き込まれたということなのか！』

などと、二つの顔に迫られたじろいだのはライオンだろう。

『ええい、わたしもよくわかっておらんだ』

牙を剥き返す。

うちにも、食べかけのスナックや羽織っていたコート、そして履くタイミングを失った靴を手に手に客たちが店先へ出てくる。車道はあつという間に埋め尽くされ、にもかかわらず一台のビオモービルは通りへ侵入してきた。辺りは押すな押すなの大混乱となり、見かねたボーイがライオンの傍らから飛び出してゆく。群衆へ手を振り上げると一帯の整理に取りかかった。

おかげで動き出した群衆に背を押され、トラは話し込む場所を『アズウエル』の軒先へ変えることにする。

『埒が明かん。そのジャンク屋とサスは取引があるのか？』

まくし立て、デミへ覆いかぶさった。もちろん学校へ行っているデミが、サスの顧客に詳しいはずもない。しばし考え込み、やがて店へ帰って早々に聞かされたサスの言葉を思い出し鼻溜を弾いた。

『うん、そう言えばおじいちゃん、アルトはわしの仕入れ先の一人だ、って言ってたよ』

聞いてトラはシワの中で目を細める。

『デミ坊、サスはどこだ？ なら、わしはサスと話がしたい』

だが状況は、店先にメッセージを残してきたとおりだ。

『え、えつと、でも、おじいちゃんは今、どこにいるのか分からないんだ。お仕事だと思っただけ』

『こんな時にか！』

トラは罵り、声にデミは縮み上がった。かばってライオンが口を挟む。

『いや、違う。ご老体は、なぜジャンク屋が船賊に追われることになったのか、それを調べるために出ている。わたしはジャンク屋から、つい先ほどそう聞いた』

今、思えば、渋るアルトから聞いておいてよかったと思う。しかしこれまたデミには初めてとなる話で間違いなかった。

『ええっ！』

さいさん驚かされて目を丸くし、ライオンはこうなればと、知りうる限りを丸ごと吐き出すことにする。

『あとひとつ。ジャンク屋は、ネオンをフェイオンへ呼び寄せたのは自分だとわたしに言った』

『何だと？　つまりそいつも、わしのネオンを狙っているということか！』

そこへビオモービルの先導を終えたボーイは舞い戻ってくる。客の対応に、ここへ残る旨を告げた。うなずき返せば、通りの向こうから呼ばずとも現れたパトカーのサイレン音が近づいてくる。

チラリ、目をやっていた。

『サスが戻るまで待っておれるか。何があつたのかもう一度、最初から詳しく説明してくれ』

声も低く、トラはライオンへと視線を投げる。

通りに溢れる客が行く手を塞いでいた。目の前にして折り返すのもどこか不自然でならない。見据えてシャツフルは、運転する部下へアゴを振り通り抜けるよう促した。

そんなビオモービルはミラー効果もそのままにした分隊員たちが箱乗り状態で回収されている。明らかな積載量オーバーに、ビオモービルのキヤタピラは今にも切れそうに砂塵をかきながら、その鼻先をじわり、群衆の中へめり込ませていった。

と、道を開けてビオモービルを先導する『デフ6』は現れる。仕事ぶりを眺めていれば、シャツフルの頭蓋内で声は響いた。

『中尉』

基地前で待機中の巡航艇からだ。

『どうした？』

『極Yから、対象の引渡し方法について問い合わせる連絡が入りました。極Y船舶は現在、アーツエ最寄りの光速前で停泊中。指示を求めております』

『まさか本船に横付けさせるわけにはゆかな』

冗談とも取れぬ冗談を吐いて、シャツフルは繰り出す。

『ボイスメツセンジャーが例のメッセージを拾いに来たカウンスラーの音窟があつたな。そこで引き取ると伝える』

『カウンスラー』はちようどこから『フェイオン』近隣に停泊中の本船へ戻るまでに立ち寄れた。何より観光客の溢れるそこなら雑多な種族が集つたところで、何の違和感もないだろうと踏む。

時刻はこちらで指定していいか。問う声へ、シャツフルはひとつなずいてから頼む、と返した。

たいした剣幕だ。群衆を抜け出せばちようどと、息せき切って駆けつげんとする警察車両とビオモービルはすれ違つ。

『アズウエル』へ足を踏み入れれば、清算カウンターにはぐつたり力を失ったボーイが二体、横たわっていた。厨房からはくぐもつた呻き声が聞こえ、デミたちは取り急ぎ介抱に向かう。そこへ警察はなだれ込むと、デミは現場検証に付き合うこととなっていた。

そうして何が起こったのかを話し、二人の捜索を願い出たところで、警察の反応は鈍さを極める。彼らが言うに理由はアルトとネオン、双方のIDが確認できないためだった。つまり二人は公に存在しない存在であり、したがって拉致は成立せず、事態はただ船賊たちが『アズウエル』へ押し入り、従業員に怪我を負わせたに過ぎないと、まとめあげられる。むしろ存在しない者を探すなど、警察業務の範疇にない、というのが彼らの言い分だった。

確かに盗まれたモノもなければ、もう船賊が立てこもっているわけでもない。デミたちにそれ以上、何も言うことはできなくなっていた。

『おかしいよ!』

『アズウエル』の営業時間さえ過ぎた深夜。客席に転がっていた靴をデミは不満の限りに蹴り上げる。これで終わりと立ち去れるはずもないデミにトラ、ライオンは、奥の事務所で事後処理に追われる店員共々、一段落ついた店に残っていた。

だが事態は靴に当たるしかないほど手詰まりだ。

だからこそ唐突に頭を下げたのはトラだった。

『すまん、デミ坊。原因はわしにある』

『どうして? おねえちゃんは何イオンまで来れたんだよ。ジャンク屋だって、お仕事してるしさ。IDがないと長距離移動なんて出来ないのに。あんなの、お巡りさんの方がおかしいんだ。おいちやんが謝ることじゃないよ』

デミはなおさら憤慨する。しかしトラが認める様子はなかった。
『ジャンク屋の事は分らん。だがネオンのことは全てわしのせいなのだ』

『その言いようでは、手助けのしようがないぞ、テラタン』
見かねてライオンが説明を求める。声に振り返ったトラは、まるで痛いところを突かれたような顔をしていた。再びふたりへ背を向けると、紡ぎ出す言葉のままに両の拳へ力を込める。

『ネオンは……、ネオンは、わしがギルドオークションで買った、ヒト臓器の転売用ボディーなのだ』

耳をそばだてていたデミとライオンは、とたん跳ね上がっていた。

『お、おねえちゃんが転売用のボディーっ？』

『なん、と』

『もちろん出所不明の闇取引だ。楽器はポッドに放り込まれていた。IDなどあるはずがない』

隠そうとしても隠しきれない背中をこれでもかと丸め、トラはふたりの視線から逃れるように清算カウンターへ歩み寄ってゆく。

『ネオンは、わしが持たせた売り物の偽造IDで移動していた。事故が起これば、こうして捜索対象からもれることも知っていた。知っついて演奏に出していた。全てわしのせいなのだ』

開いていたライオンの口はようやくそこで閉じられていた。

『金のためとはいえ、非人道的にもホドがあるぞ。違法どころか臓器転売ボディーを蘇生するなど、悪趣味としか思えん』

吐きつけられトラの目が、シワの向こうからライオンを盗み見る。まさに侮蔑がちょうどの表情を前に、ブルンとシワを波打たせた。

『ええい！ 今ここで知り合ったような貴様に、ああだのこうだの言われたくないわ！』

吐き出し再び前へ向き直ると、それきり微動だにしくなくなる。

その時だ。『アズウェル』の正面入り口、エアシャワーブースのドアは開いていた。不意を突かれて誰もが振り返る。そこにひよっこり姿を現した、楽団員で資料館の館長、エンシユアを見つけてい

た。

『デミはここか？』

まだ赤い民族衣装を着たままのエンシユアは、ひどく慌てた様子だ。続けさまにこうも、つづる。

『サスがお前を探しているぞ！』

ならどこに、と問うまでもない。エンシユアの背後から見知らぬ『デフ6』に支えられ、サスは運び込まれていた。

『おじいちゃん！』

目にしたデミが駆け出してゆく。

『ご老体！』

『サス！』

連なりトラにライオンも床を蹴りつけた。

そんなサスは、どこで何をしていたのか砂塵まみれだ。それはもう身にまとった衣服の色を消し去るところか、サスすらも消し去りかねないほどだった。足は冗談かと思うほど力なく空を切っており、様子は疲労困憊の文字がちょうどでもある。

『おじいちゃん、しっかりして！ それともどこか怪我してるの？』

見知らぬ『デフ6』の反対側へ回ったデミが、サスを支えて呼びかけた。休ませるべく、とにもかくにもふたりがかりで手近な浮島個室を目指す。

「……あ、あうとは」

なら引きずられるようにして歩くサスの鼻溜は、揺れてそのとき何事かを訴えた。それは商売から、平素は使うことのない現地語だ。だというのによく聞き取れない。

「え、何？」

鋭くデミが問い返していた。だがサスの言い分はいつこうに的を射ず、サスを運び入れた『デフ6』が見かねてデミへ鼻溜を揺らす。「俺が見つけた時から、こんな調子なんだ」

「おじいちゃんをどこで？」

「砂漠の真ん中さ。そこでぶっ倒れてた。基地跡へ向かうのに、よ

く間欠河川沿いのわだちを使うだろ？ あの途中だったんだ。びつくりしたぜ。死んでるのかと思えばとにかくここへ連れて行けつて、すがりつかれたんだから。俺が見つけてなきや、今頃、埋まっていたよ。おかげで彼女とのデートも台無しになっちゃったよ。」

どうしてそんなところへと、デミは眉をへこませた。

「そうだったんだ。ごめんね。」

謝り、辿り着いた浮島個室へふたりがかりでサスを寝かせる。

「いまさら、もう、どうだっていいよ。」

役目を終えたといわんばかり見知らぬ『デフ6』は、サスの傍らから抜け出してゆく。礼を述べるトラと場所を入れ替わり店を後にしていった。そんなトラの手へ忘れ物のコートは渡される。丸めて枕代わりにしたならトラは、サスの頭の下へ突っ込んだ。

『サス、聞こえるか？ わしだ。トラだ。一体、こんなになるまでどこにいた？』

『基地跡へ向かう途中の砂漠で見つかったんだって』

造語でデミが振りなおす。

『基地跡だと？ わしはそこに船を置いてきたばかりだぞ。そんなに近くにサスはいたのか』

トラは目をたちどころに丸くしてみせた。

『基地跡？ もしやそれは軍か？』

すかさずライオンも説明を求める。

『そうだ。町外れの施設で今はもう誰も使っていない』

なら過るものはこれしかない。

『ジャンク屋が追われている理由を調べると言っていたが、そこで……』

その視線をデミへと投げた。

『そうだよ！ あの船賊はおかしいんだ。軍の装備を身に付けてたんだもん！』

それだけで察する辺り、やはり秀才の閃きか。とたんデミは伸び上がる。

「関係があるからおじいちゃん、調べるために施設へ行ったのかも
しれない！」

と、どこにそれだけの力が残っていたのか。そのときサスはかぶ
った砂塵をふりまきガバリ、と起き上がる。

「違う、それどころではないんじゃない！」

トラにデミは肝を潰され、ライオンだけがそんなサスへと詰め寄
った。

「ご老体、何がどうされた？ 我々も尋ねたいことがあって帰りを
待ちかねていたところなのだ」

「アルトは、アルトはどこにおる！ わしはアルトに話が……！」
だがサスはただ喘ぐように繰り返す。その先をむせて濁した。

様子にやはり、と顔を見合わせたのはさんにな共だ。
やがて役割を引き受けたデミが静かに鼻溜を揺らす。

「おじいちゃん、今、ジャンク屋はここにはいないんだ」

「船賊が、ネオンと共に連れ去った」

ライオンも言葉を継いでみせた。

「なんとか取り戻そうとしたのだが、わしの力が及ばなかったこと
は残念でならん」

舌打ちトラも首とシワを振る。

言う面々をサスの目は追いかけて、ようやく把握できた状況にこれ
でもかと両膝を叩いてみせた。

「……つかああっ！」

天を仰いでごろり、浮島個室へ体を投げ出す。その目を強く閉じ
ると、声は絞り出されていた。

「遅かったか！ すまん、アルト！……」

そこから先、言葉は現地語とも造語とも区別はつかず、やがてイ
ビキへ様子を変えてゆく。

「お、おい、サス？」

デミたちの目もパチクリ、瞬いていた。

見下ろすトラが代表して、サスの体をおっかなびっくり揺する。

無論、サスが目を覚ますことはなかった。その体から砂塵をフワリ、舞い上げる。

頭数がそろえばここから先は『アズウェル』の世話になってまで進める話ではないだろう。エンシユアへは礼を述べ、おおいビキのサスを担ぎ店を出ることにする。

その際、目に止まったのは精算カウンターのシミだ。まるで泥を投げつけたように周囲へ小さな飛沫を散りばめたそれは、ギルド商人だからこそ知識として備わる特殊な痕跡としてトラの歩みを止めていた。ままにトラはサスを担いだままで前屈みとなってゆく。

『軍……、か？』

様子に並んでのぞき込んだデミも、目にした痕跡にトラへ振り返る。

『おいちゃん、これ何？』

『デミ坊、覚えておけ。これは軍用ショットガン、ダイラタンシーレットの弾痕だ』

教えて聞かせるトラの声は低い。

『ダイラタンシー？』

繰り返すデミの目が、再び痕跡へ向けなおされていった。隣でトラは、首のシワヘアゴを埋めるほどとうなずき返す。

『そうだ。流動弾の比重を変化させることで、殺傷能力を調節することが可能な銃器だ。おおむねテロリストやデモの制圧に使用されている。軍用の銃だ』

そうして伸ばした指でシミをこすり取った。指と指の腹を擦り合わせ、まだ乾き切っていないその粘度を確かめる。

『比重はかなり高いな』

『フェイオンで船賊は軍の装備を持っていたけど、ここでほくらが見たのはスパークショットだけだよ。なのにどうして？』

『だからジャンク屋は声を上げたのか！』

とたん派手な音は鳴り、膝を打ったライオンがふたりの背後で口走る。言わんとしている事を、いち早く読み取ったのはトラだった。『相手が船賊なら、音声言語など無駄だからな』

『言わずもがなの構図はデミの前にも開けてくる。』

『じゃ……、お店の中に軍が？ ジャンク屋はそれを知ってて……』
なおさら小さく足元にうづくまるデミへ、トラはアゴをひいてみせた。

『ジャンク屋は軍に何とっておったか聞き取れたか？』
立て続けデミへ問う。

『えっと、それは、ぼくの聞き違いかもしれないけど』

『おそらく交渉ための駆け引きだ。やる気なら、機会はいくらでもあった』

デミは鼻溜を濁し、その先を引き受けライオンが前置きをつけたうえで教えて言う。

『これ以上近づけば、ネオンの頭をスタンエアで吹き飛ばす。ジャンク屋はそう言っていた』

たちまちトラの目が見開かれていったことはいうまでもない。

顔へとライオンはただ静かにうなずき返していた。

『ほっ！ すまんかった。店を出てから一睡もしておらんかったのだ』

三輪ジープがサスの店の前でぴたり、止まった。揺れに目を覚ましたサスが後部座席で跳ね上がる。

アルトに代わり三輪ジープのハンドルを握っているのはライオンだ。サイドブレーキを引く音は聞こえ、ルームミラーにそんなサスを確かめる目は映り込む。

『ムリをしてはあとが続かないというものだ、ご老体』

三輪ジープのみならず前を走っていたビオモビルもまた、そこでブレーキを踏んでいた。

『うぢぢぢぢ』

痛む体をなだめすかしてジープから降り、店前のポーチで合流する。ずいぶんくたびれてしまったが、これでも店の主だ。帰ったそれぞれを案内してサスは、ミノムシドアへと向かった。何万回と繰り返しただろう段取りを今日もなぞり、ドアの生体認証パネルへ手をかけつつ物理ロックのキーを探してズボンのポケットへ手を潜り込ませる。

とそのときだ。ロックを解くまでもなくドアはキィ、と音を立てて動いた。山ほどぶら下げたガラクタをガラガラ鳴らしながら、店の中へひとりでに開いてゆく。

否応なく走るのは緊張だろう。デミがきゅっと鼻溜を縮めてみせた。

『そんな……、ぼく、ちゃんと鍵は閉めたよ』

『わかっとなる』

答えてサスは部屋の奥へ耳を澄ます。

だが物音は何一つ聞こえてこない。

残りを開くべく腹へ力を込めなおした。

『わしに任せろ』

遮るトラに割って入られる。

そんなトラは最後尾のライオンへと目配せした。合図に、浮き上がっていたドアを押し開けてゆく。そこにギルド端末と各種スケールメーターを置いた半円卓は、すがたを現していた。それ以外、見慣れぬ物は何もない。ただ一体何があったのかと思うほど引つ掻き回されると、嵐が通ったのかと思うほど店内はひっくり返っているだけだ。

『な、どうなっておる！』

トラが声を上ずらせた。

様子にサスが、デミが、ライオンが、店内をのぞき込んでゆく。

『これは、ひどいな』

『なんと！ だれぞ押し入ったのか』

こぼすライオンを押しつけサスも半円卓へ歩み寄りかけるが、かなわずがっくり、ヒザを折った。追いつきデミも怒りのこもった目で店内を見回す。開け放たれている仮想シヨールームへ飛び込んでいった。

「こつちは何も取られてないみたい！」

サスへ知らせる。

ならばどうにも動けそうにないサスに代わり、半円卓の中へ潜りこんだのはトラだった。使い勝手を考慮してカスタマイズされているが、ギルドネットの端末操作に大差はなく、データへの不正アクセスがないかを確認してゆく。足元に並べられた幾つかの買い取り品へも目をやったなら、気づいて自らの服でカウターの角をこすった。拭い取ったそれを目の高さへ持ち上げる。指で弾けばそこからもうと黒煙は、灯りに透けて舞い上がっていた。

「ススだ」

「まさか……」

駆け寄ったライオンが牙をむき出す。

顔へトラは振り返った。

「押し入ったのは、船賊だ」

この部屋に似つかわしくないススは、あのスパークショットの電極に付着していたものと思えない。よくよく目を凝らせばこれだけハデに家捜しただけはあって、ススはあちこちに擦り付けられていた。

聞きつけたデミがシヨールームから戻ってくる。その勢いのまま半円卓へと身を乗り出した。

「そうだよ！ だから奴らアズウェルにこれなんだ。だってぼく、ドアメツセージ残していったもん」

だとしてライオンが新たな疑問を口にする。

「ならば奴らは、どうやってここを知ることが出来た？」

「それはジャンク屋とネオンを追って……」

言いかけてトラは、シワに埋もれていた両目を大きく見開いていっ

た。飛びつかんばかりに半円卓の通信装置へ手をかける。

『すまん、サス、借りるぞ』

サスの返事を待つまでもなく『Op-1』に残してきた自らの店へ通信をつないだ。いくつかのパスワードを打ち込み、即座に店のシステムへログイン。セキュリティの確認を急ぐ。建物内の数少ない監視カメラはばつちりと、船賊たちの背中を映し出していた。

『ワシの店だ。奴ら、そこでこの場所のことを知ったのだ』

『でもそれじゃ、おねえちゃんたちがここにいるかどうかまでは分からないよ』

デミは鼻溜を歪め、ようやく受けたショックから立ち直ったサスにたしなめられる。

『忘れたか？』

その瞳には、いつもの鋭さが戻っていた。

『お前がここへ到着してすぐ、トラの店へ連絡を入れておろうが』

『あ……』

ライオンも思い出したらしい、呆けたようにその口を開いていった。

『仮想シヨールームでのぞいた、イアドの倉庫か！』

『ぼく、留守録、入れちゃった……』

『じゃな』

『また、ぼくのせいなの？』

弱りきったようにデミが鼻溜を揺する。慰めてトラは、その頭へ分厚い手をあてがった。

『儲けそこなって、わしは命拾いしたぞ』

皮肉にデミがクスリ、笑う。

目にしたトラの表情はそこで引き締まっていった。

『しかし、どうやってワシの店にネオンがいることを突き止めたのか……。少し気味が悪いな』

言葉の語尾と共に、トラは瞳の奥までもを濁らせる。同様に、店内の空気は深く塞ぎこんでゆくと、得体の知れないナニカに見張ら

れているような居心地の悪さで誰もを包み込んでいった。ままに息

詰まりそうになった空気を破ったのはサスだ。

『わしがそのからくりを話してやる』

その目はそれぞれの顔を見つめ返していた。

半円卓の定位置がお似合いだった。サスはこれからの話を反芻するかのようには鼻溜を膨らませ、重たげな息を吐き出す。連なり紡ぎ出されたのは砂漠の基地へ潜り込んだ理由と、通したい義理についてであり、おかげで垣間見てきた連邦政府のラボ『F7』の構造についてだった。そこへかいつまんでトラとライオンが『アズウエル』での出来事や、それぞれが持つ情報を加えてゆけば、個々の中で断片だった事象は次第に巨大な全体像を明らかとしていった。

『そのラボにわしの店のアドレスがあっただと？』

トラは声を裏返す。すぐにも思い当たるふしに伸び上がった。

『そうだ！ ネオンは、ネオンはドクター・イルサリの依頼を受けフェイオンへ向かったと言っていた。だがわしは把握していない。つまりラボが、その名のついたプログラムが、ネオンを呼び出したということか？』

うなずき返したのはサスだ。

『いや、呼び寄せたのは自分だとアルトは言っておったんじやろうに。そのプログラムを使ってあやつが誰もをフェイオンへ集めるよう仕組んだ。そうだと考えるがよさそうじゃの』

短い腕をこれでもかと深く組む。

『さて、アルトがそんな場所で何をやっておったのか、わしは知らん。だがおそらくあやつは、わしに拾われるまでそこにおった。おつたが抜け出てきた。この全てを仕掛けたの』

『待て。なら見ず知らずの相手こそ呼び出すことはできんはずだ』
割って入るトラが身を乗り出す。

『つまりジャンク屋とネオンは見知った者同士、ということか。そしてジャンク屋の過去がそこにあるというのなら、ネオンの過去もそこにとということか。ネオンも蘇生した時、記憶がなかった……』

最後に絞り出すようにトラは吐いた。

『そういうことになりそうじゃ、の。むしろそこでつながるなら船賊が、ネオンも連れ去ったことも腑に落ちるといってもんじゃ』

無論、誰にも確かなことは分からない。ただサスだけが丸いアゴをつまんで撫でさする。やがて組んでいた腕を解いた。

『それもこれも、アルトに聞けばはつきりするじゃろつて』

目はそのときライオンをとらえる。

『お前さんのメッセージを聞いてすぐ、あやつはわしに手を引けなどと喚きおった。きっかけに何か思い出したのではないかと、思うておる』

ライオンは否定しない。つまるところ大役を果たしたらしい、と肩さえすくめてみせている。

ならそうまで聞かされたデミの心配は、そこで頂点に達した様子だった。

『おねえちゃん、大丈夫かな。ジャンク屋だって怪我してるかもしれない。だいたいさ、死んでるひとの名前がついたプロジェクトなんて気味が悪いよ。そんなところで何やってたんだろ。そのうえ船賊なんて使つてまで追いかけるなんて、何のためなのかな。なんだかとっても心配だよ』

思いは誰の胸にも響いて止まない。

『ね、おじいちゃん、何とかならないの？』

『ネオンはお前の命の恩人じゃからのう』

デミの気持ちを汲むと微笑み返し、サスはその頭へ手をあてがう。だがその実、連邦政府が相手だ。そう右から左へゆく話ではなかった。

いつのまにか明けようとしている『アーツエ』の空は、焼けるような赤を滲ませている。窓から細長く光は投げ入れ、一日はまさにこの瞬間から始まるうとしていた。

遮り、ミノムシドアは開かれ店へ威勢のいい声は飛び込んでくる。

『サス、はるばるここまで来てやったぜ！』

スラーだ。

『そうでやんす。社長ははるばるサスの店までやって来てやったでやんす!』

モディーも並べば、そろいの喪服姿はまさに度肝を抜くにちようどとなっていた。振り返った誰もが光景へと釘付けとなる。

『どうなってやがんだ、サス! あんたの頼みごとは俺を利用させる、ということだったのか』

『頼みごとを利用したでやんす!』

視線を浴びたところで大股と、スラーは店の中へ入っていった。

すかさずモディーも追いかけたなら、脳天でスラーの手打ちは炸裂する。

『違う、利用されたのは俺だ。頼み事じゃない!』

そのよく分からぬ勢いに押されて半円卓を囲んでいたトラとライオンも、道を譲っておのずと輪を解く。

『おお、スラーか!』

向こう側に現れたサスは鼻溜を振っていた。それがわざとらしくなかったかと言えば、微妙な調子だ。

『知り合いか、ご老体?』

警戒心もそのままにライオンが視線を投げる。

答えるべくサスは鼻溜を縮めるが、いち早く口を開くスラーに遮られていた。

『まさか、わたしが警戒されるべき相手であるハズがない』

その口調は、わざとらしいほどまでに丁寧だ。

『内密な話の途中で割って入ったことについては、今ここでお詫びさせていただきますよ。あなたが求めているのは、その礼節ですかね。そのうえでなら私の話を聞いてもらえそうだ。大丈夫。物騒なものは持っていますので、ご安心を。サスとは少々長い付き合いのある葬儀屋のスラーと申す者です』

これみよがしと一礼、繰り出す。

『スラー葬儀社のモデラートこと、モディーでやんす!』

隣でモディーも伸び上がった。

ならばスラーの体はすぐさまトラへ向けなおされる。

『なるほど、幸いにも葬儀屋に苦い思い出がなくてよかった。そちらは立ち聞きがご心配ですか。ならば一つご提案を。隠し事こそ隠せぬものですよ。なあと、気に障ったのならご勘弁を。エブランチルはいろいろと見えすぎて厄介なところがあるのです』

その通りと見透かされてか、トラの顔でそのときシワは居心地悪そうに痙攣する。そして最後にスラーはデミも体をよじってみせた。『そのとおり。わたしは怒ってますが、それは前提として互いの間に信用があつたからだ。その信用を取り戻しにきたというわけです』
につこり微笑む。次の瞬間にも消し去り、怒鳴り込んできた続きへ戻った。

『だからこそ何も聞かずに引き受けたんだつてのによ、サス！』

甘んじて受けるサスが言い訳する気配はない。むしろ、まだ言いたいことはあるだろうと続く罵声を待ち受ける。だが言うまでもなくそれさえ読み取るのがエブランチルだ。おかげで萎えたか、スラーはいからせていた肩を落としていった。

『そりゃ、ないだろ。以前、客だった者の知り合いだと？ フェイオンのラウア語店員を調べるって話、ウソだと知って乗ったのはこちの判断に違いねー。だがそれはサスを信用していたからじゃねーか』

気付けばスラーの方こそ弁解している。

おかげでトラとライオンが理解したのは、彼らもまたこの一件に絡む者である、ということだ。改めてサスへ説明を求めて振り返ったなら、ようやくサスは鼻溜を揺らしてみせた。

『紹介しよう。こやつは、スラー葬儀屋のスラー。見ての通りのエブランチルじゃ。スラーとはデミの親が船舶事故に遭った時からの付き合いでの。あれはかなり遠方での事故で、そのため遺体の引取りを頼んだことが付き合いの始まりとなつとる。スラーはあの時、わざわざデミの親を探し出してまで連れ帰ってきてくれたの。自分

で言いおるように信用こそすれ、決して怪しい輩ではない』

話す様子を半円卓に鼻溜を乗せたデミが、もの悲しげな顔つきで聞いていた。サスは分かっている、と目配せを送ってから、続く話に鼻溜をまた振り始める。

『今では有機物の取引が発生したおり、運搬にスラーの霊枢船を利用させてもろつとる仲じゃ。有機物を遠方まで変質させずに運ぶのは、ともかくあの船に限るからの』

とデミが、ぼそり呟いた。

『だから……』

自然、視線はデミへと集まる。

『だから、ぼくはおじいちゃんのを継ぐことにしたんだ！ ギルドになって、たくさんの商品を売りさばけば、きっと宇宙からゴミがなくなるから！』

『ゴミ？』

合点がゆかず目を瞬かせるライオンが誰とはなしに、問いかけた。『デミの親が乗っておった船の事故はの、宇宙ゴミの衝突が原因じゃったんじゃ』

すかさずサスに返されて、余計なことを聞いたと気づき口をつぐむ。

『大丈夫だよ。ぼくにはおじいちゃんがいるんだもん』

見透かし気遣うデミの笑みは健気でしかない。

『すまなかつた、スラー。改めて詫びる。そういう意味でも頼めるのはお前さんしかおらんかつたんじゃ』

傍らに、改めサスが頭を下げた。

『ったく。その言葉と引き換えに、とりあえず俺が知ったことを教えおいてやる』

様子に得心ゆけばこそ、前屈みだった体をスラーは引き戻してゆく。

『あんたが調べさせた例のラウア語ネイティブ店員だが、いなかったぜ。いや、そもそもラウア語カウンセラー自体稼動していなかった。

利用者の激減から永らく営業を中止しているってのが真相だ。おかげでどうも見当違いを引き受けちまったって、ピンときたぜ』

『依頼主とはかつて、でのうての。今も客であり仕入先じゃ。わしはそやつに借りがある。返すには厄介ごとに巻き込まれとる今しかないと思うた。ラウア語店員の背後にはどうやら、この厄介ことのカギを握る黒幕はおるらしい。調べに向かえばお前さんの名が動く、わしは睨んだ』

相手が相手だ。サスは包み隠さず一足飛びと並べていった。

『黒幕って、そりや遠まわしな言い方じゃねえか』

しかしながら返すスラーはまだ眠い、と言わんばかりだ。

『スラー葬儀社の記録が残されたのは連邦の収容船だけ。俺たちを囷に吊りあげようとしたものって連邦のことじゃないのか？』

投げ返してエブランチル独特の吊りあがった細い目を、さらに細める。食らったサスの面持ちは、そこで渋くなつていった。

『……その通りじゃ。お前さんのおかげでその船にあるラボF7とやらが浮かびあがった。どうも軍との連携もあるようです。知つての通りフェイオン事故を引き起こした船賊たちともつながつておる様子じゃった』

聞いたモディーの両目が忙しく動いてスラーを見上げる。

『しゃちよー』

しかしスラーが動じる様子はない。

『なるほど、軍にフェイオンの事故、そして船賊か。ま、それくらいの名前があがりや、スラー葬儀社が囷になつただけの価値があるつてもんよ』

『そ、そうでやんすか？』

言うモディーの脳天へ、本日二発目の拳は飛ぶ。

『すまんかった。じゃが何も知らずにおれば、お前さんはわしに頼まれただけということに済むと思つておる』

サスのため息は重く、しかしながらスラーはその心遣いを片手で軽く追い払つてみせる。

『冗談はよせ。だったら幾らでもあの船にスラー葬儀社の名前を残さないですむ方法はあったってもんを』

蛇の道はへびだ。

『が、俺の尽力をもつてしても、アンタの借りは返せなかった』
見抜かれていたとして、そう驚くことでもないだろう。サスは認めなくてうなずき返す。

『顔に出ておつたか。その通り。手遅れじゃった。一足違いでそこのアズウェルから連れて行かれてしまうたらしい』

うなだれ、疲れをどつと吹き出させた。

『取り戻す密談も芳しくなさそうだしな』

見回しスラーも吐き捨てる。

なら、まさか、と言い張つたのはトラだった。

『いや、それでもわしはネオンを連れ戻す。デミが命の恩人を心配してサスがジャンク屋へ狩りを返というなら、わしはネオンを取り戻す。そのためにここへ来た！ 軍だかラボだか知らんが、わしのネオンだ。頭の先から足の先まで全て返してもらう！ だいたいそのジャンク屋、たとえ交渉だとしてもネオンを盾に取ったうえ頭を打ち抜くなどと言ったというではないか！ そんな物騒な薬物中毒者とネオンを一緒にしておれん！』

握りしめた拳を小刻みと震わせさえする。

様子を眺めるスラーの白い目こそ侮れはしないだろう。

『そいつは何か手があつてから言うもんだ』

『確かにアルトのいいおる通り、相手は想像以上に厄介じゃ』

サスもなだめて鼻溜を揺った。

『それくらいは分かっている！』

吠えるトラへ、だからこそついにスラーも口を開く。

『それほど好きだというのなら、もう少し落ち着け、テラタン』
とたん昇っていたトラの血は、急降下していったようだった。

『だ、ただっ、誰が、ネオンを好いていると！』

『え？ そうなの？ おいちゃん？』

様子にライオンとデミも素っ頓狂な顔で振り返る。

『顔にかいてあるから仕方ねー』

なおさら正体を失いゆくトラに代わり、つまらなさげとスラーはこぼした。加えてサスも鼻溜を振る。

『トラ、相手はエブランチルじゃ。隠しても仕方あるまい。まったく、借金があるなどと縛りつけおって。オークションで見た時から一目でホレたと言えばそれですむことじゃろうが。それを今まで。おまえさんの趣味に口は出さんつもりでおったが……』

もう収集がつかない。

『うるさい、うるさい、うるさあいつ！ だ、なっ、てっ、そ、そんなことがわしの口から言えるんでも、おも、思っているのかあっ！ 知っておろう。ヒトとテラタンとの美的感覚の相違を。現にわしはもう嫌われておる！ わしの元から離れようと勝手にここで仕事を取った。分かっていてそばに置いておけるものか。それこそ地獄だ。だからといって手放すなど！ だから、だから……』

シワというシワを引きつらせ、振り乱してトラは吠える。ついには全員の前で素っ裸にでもされたかのように、その身を小さくしていった。

『煮えきらん奴だな』

よせばいいのにスラーがぼやく。

『わしの気持ちがあつてたまるか！』

『伝わってきたから言つたまでだ』

『ええい！ 分かることと、伝わることは違うわい！』

『分かった、分かった。もう、そこまでにせい』

睨み合う双方をサスがどうにか押し止める。

『今はそんなことでいがみおうとる場合じゃあるまい』

デミも困ったように眺めて鼻溜を潰す。

『そうだよ。でもね、おいちゃん。おねえちゃんは違つんだって』

そう、デミが思い出していたのは『アズウェル』へ向かうピオモービル内で交わしたネオンとの会話だ。

『おねえちゃんは言ったよ。おいちゃんが迎えにくる前にここを離れたって思ったのは、好きとか嫌いじゃないって』

とたんトラの瞳から魂が抜き去られたことは言うまでもない。

『おねえちゃんは生き方を決めただ。だから、おいちゃんと意見が合わなくなっただけだっ』

『ネオンが、そんなこと、を?』

『うん。ぼく、聞いたよ』

ウソ偽りが無いことを示すデミこそ、真正面からトラの顔を見据えていた。

『……バカが』

すでにその顔色から何をや読み取ったらしいスラーがこぼし、受けて暴れだしそうになったトラからその顔をプイ、と逸らす。

『興味が湧いた! テラタンも引きそうにないしな。そのお姫様の顔でも拝みにいってやるーじゃねーか』

『スラー、何を言つとる?』

前でサスも目を丸くしていた。

『収容船に残る記録も抹消したいところだしな』

『確かに呼び寄せたF7は船にある。じゃが、そこに二人もおるかどうかは行ってみんことには分からんぞ』

だがスラーの頬にはすでに不敵な笑みが浮かんでいる。

『一度行った場所だ、二度目でどう難儀することがあるってんだ』

『ねえ』

と不意に鼻溜を揺らしたのはデミだ。集う一同を、その目でゆっくり見回していった。

『ぼく、いい考えが浮かんだんだけど……』

『いい考え?』

ライオンが繰り返せば、デミはそんなライオンの顔を見上げて甘えるような声を出す。

『ぼくの考え、聞いてくれる?』

砂だらけだった。

払い落とす間もなく、ネオンは誰もいないこの場所へ放り込まれている。動話という視覚を媒体とした言語を持つ種族ならではか。三メートル四方足らずのそこは白い樹脂版で仕切られると、外界から遮断されてもいた。

閉じられるなり消えてなくなった樹脂板のドア向こうには、動話を交わす船賊が見張りとして立っている様子だ。動話を交わし合うたび揺れる背のスパークショットの音だけが、カタカタ聞こえていた。

かと思えば隣ヘラバーソールのこもった足音はなだれ込み、何かをどさり、放って立ち去ってゆく。金属がむき出しの床でゴツリと音を立てたそれは、同じ境遇にあるはずのアルトだと思えてならなかった。

咄嗟に駆け寄る。樹脂板へとネオンは手を張り付けた。見えない向こう側を覗き込めば、むしろ樹脂板には自身が映りこむ。

「アルトっ！」

呼べど返事はない。

しばし待つが、身動きする音さえもだ。

立ち込める嫌な予感がネオンへと、背にのしかかってきた重みを思い出させる。

「ねえ、そこにいるんでしょ？」

だとして最後に見たアルトは焼け焦げていなかったと言いつれた。

「ちよつと、黙ってないで何とか言いなさいよ」

だからして返事を求め、遮る板を拳で叩く。

「アルトっ！ あたしよ、ネオンだってば。この、ヘンタイ！」

表の船賊たちとはいえば、声にはまるで無頓着を決め込んでいる。

制して怒鳴り込んでくる様子はなく、ゆえにネオンは吊るされた力
ーゴで放った言葉もまた浴びせた。果てに返される罵声を期待する。
だが返事はなく、ネオンの中で心細さだけを膨らませていった。

「冗談、やめてよ」

避けていた言葉が思わずこぼれ落ちる。

「死んだフリなんか……」

ならば板の向こうから、大きく息を吸い込む音は聞こえていた。吐
き出してさも苦しげにむせ返ると、もんどり打っているだろう音が
ネオンの耳へ届く。

「アルトっ！」

先細っていた声へ力を巡らせた。

「……っそッ」

吐き捨てたそれはアルトで間違いなく、その通りと、部分的とは
言いがたい全身を覆う神経全てが剥き出しにされたような痛みにな
ルトは目覚めてすぐさま、持ち上げた体を丸める。しばし不規則な
呼吸を持って余しうずくまった。

この感覚にも覚えはある。だが今はひとかけらの興奮剤も使用し
ていないだけに、その当たりは強烈が過ぎた。

大きく息を吸い込み、膨らませた体をどうにか起こす。そうして
背を、樹脂板へとすりつけた。なら頭をひねって確認した白い板の
上に、ダイラタンシーベレットの鉛を含んだ灰色のシミは尾を引き
はりついている。

『制圧上限ギリギリの濃度かよ』

唸り、口の中で粘る唾を吐き出した。

「大丈夫？　ねえ、大丈夫なの？」

あいだもネオンの呼びかける声は止まない。その甲高さがカンに
触る。

「る、さいッ。んな、ワケないだろうが」

体を樹脂板へもたせ掛け、執拗なまでのそれへともかく突き返し
てやった。

「なっ、なによ。ひとが心配してるのに。その言い方はないでしょっ！」

「あんな、こっちはッ……」

返事は至極まっとうなはずも、何故にかたてつかれてなお声を張る。おかげで吸い込みすぎた息にむせかえり、溺れる寸前でどうにか続きを連ねていった。

「こっちは、背中に、ショットガンの弾、食らってんだよ」

「……ごめん」

聞かされたネオンはようやくそこで落ち着きを取り戻した様子だ。

「大丈夫、って言っただけだったから」

「そんなウソ吐いてどうする」

「血、出てるの？ 手当てしなくて大丈夫？」

問いへは満を持して言うしかないだろう。

「じゃ、言っただけよ。大丈夫だ。殺傷硬度手前の濃度でダイラタ
ンシーベレットを打ち込まれた。死ぬほど痛いっただけで骨も折れ
てなきゃ、肉も切れてねえ」

「……そう」

吸い込むように聞いていたネオンに、一息つくような間はあった。

「そっちなこそ、大丈夫か？」

「あたしに銃を突きつけておいて、それはないでしょ？」

代わり確かめ、毒を浴びせられる。

だがもつともだろう。おかげで思い出し、アルトは動きづらい体
で己の背を確かめる。だがスタンエアは見つからない。分かれれば無
駄なエネルギーを費やしたも同然で、疲労感に襲われそれきり両腕
を投げ出した。樹脂板へ頭を預け、ただ静かに両目を閉じる。開い
て宙を強く見据えた。

「仕方なかった」

言えば勘付くだろうことは、承知の上だ。

「仕方、ない？」

案の定、薄氷を踏むような口調でネオンは確かめる。

「それどういう意味？」

やがてその声を大きく跳ね上げた。

「そうよっ！ あたしを盾に取るなんて、船賊に追われているのはこのあたし、ってことじゃないのっ？」

だからこそ火が点いたのは、不安と疑問の両方らしい。

「でもどうしてあたしが？ 楽器が高価だから？ じゃ、あなたがあたしに銃を向けたって何の脅しにもならない……ちがう」

声は消え入り、次の瞬間にも意を決したようにそれは放たれた。

「思いつかないんじゃない。覚えてないから。忘れた所から船賊が、あたしを迎えに来た」

これもまた辿り着いて相当の事実だろう。否や、ネオンは樹脂版を叩きつける。

「ねえ、それがどこか、あなた知っているのよね？ 知ってるから仕方ない、なんて言えるのよね？」

だが答えて聞かせるに、まだ時間はあると思えてならない。

「どうせ行き先は決まっている」

「どこなの。そこは」

「ラボF7さ」

「F7？ ラボ？」

それは久方ぶりに口にする言葉だろう。言ったアルトの頬へ、思わず皮肉な笑みは浮かび上がる。そして白く塗り固められたこの場所もまた、あの空間とよく似ていた。嫌でも思い出す光景にきつく両目を細めてゆく。

「フェイオンへ……」

「なに？」

「フェイオンさ」

「ラボがそこに？ あたしたちはまたそこへ戻るの？」

「そうじゃない」

否定して一息、入れる。

「フエイオンへお前を呼び寄せたのは、俺だ」

ネオンの声はそこで途切れた。

「……それ、どういうことよ」

間はあるいて、ようやく言葉を紡いでみせる。

「あたしの依頼主はドクター・イルサリを名乗ってて。あなたがそのドクター、なの……?」

「奴らはお前を回収したがっている」

「答えずアルトはただ言葉をかぶせた。

「船賊のこと?」

「それだけじゃないさ」

「F7、そこにいるひとたちもあたしを追いかけてる。そうなの?」
結論を急ぐネオンはたたみかけてくる。

「だが、そうはさせない」

振り払うと言い切った。

その一方的な言い分に、たまりかねたネオンの声は飛ぶ。

「なによ、ひとつくらいちゃんと答えたらどうなのよっ!」

「ああ、だが俺はイルサリじゃない。イルサリは俺の代理だ」

「だったらあなたは誰? ドクターとどういう関係があるの? 回収って何よ。戻るってことは、あたしはそこにいたってことで間違いないのね。そして、あなたはそこにいたあたしを知ってる。そうなのね?」

「あなたは知らなくていい」

返せばネオンがまた樹脂版を叩きつけた。

「そんなわけないっ! 一体、何があったの? 何が起きてるっていうのよっ! あたしを放って勝手にまわりで話を進めないでっ!」

かと思えば、乞うて声は潜められもする。

「あたしはラボで何か悪い事でもしたの?」

でなければもっと帰郷は穏やかなはずで、不安も訪れはしないはずだった。

「無駄な想像力はこれからのために取っとけってんだよ」

甲高いネオンの声以上、『アズウェル』で食らった一撃から少しでも意識を遠ざけるべくして目の前に広げた手を握りなおす。幾度となく繰り返し、自らの感覚をただなぞり続けた。

「……あなたは変わったんだ」

それは諭せるような立場でないことを知った上での言いぐさだ。

「ギルドに蘇生されて星々を放浪している間、忘れたものを埋めて色々覚えたのさ。帰らないで行くんなら、忘れた時間はいらないだろ。今あるだけで十分だろ」

触れるな、とだけ警告してやる。

「冗談でしょ。自分の事よ。隠すのは、あなたのため？」

聞かされアルトは苦笑しく笑っていた。

感覚を取り戻したその手をただ振り上げる。きしむ背中をひと思いに伸ばし、興奮剤がないのだから適応する脳が自ら相当の物質を放出する以外、適当な麻酔効果を得る手段が思いつかない。走る激痛を散らして長く静かに息を吐き出していった。

「段取りが食い違っていないけりや、『ミルト』の下層で出くわしたとき、あんたを放って逃げたりはしなかったな」

その残りでネオンへ放つ。

「盾にしそこなって大冒険だったわね」

「安心しな。奴ら、俺と違ってあんたは無傷で連れ帰るつもりだ」

「教えて。ラボF7って何？ 船賊のアジト？」

そんなことは関係ない、と切り込むネオンは鋭かった。だが実際は微妙にズレて肩透かしが滑稽だ。

「まさか、あいつらこそ踊らされているだけだ」

『アズウェル』で懸命に綴った動話を思い返す。

「これから向かうなら隠しても意味なんてない」

「知って、この状況を変えられるとも思っているのか？」

「少なくとも、そこでわたしはどうすべきかが分かるわ」

伸ばし終えた背を、樹脂板へもたせ掛けなおしてゆく。

「あの続きへは戻らない。奴らの手には渡さない」

そうして舌先で転がすのは、あるとき抱いた決意だ。

「渡すくらいなら俺が……」

声には自ずと力がこもっていた。だからこそ語尾はあやふやと消え去り、しかしながら隠し切れないそれは確かとネオンへ伝わる。

『アズウエル』と同じだ。

感じ取った殺気にネオンは身を強張らせた。押し付けていたはずの手のひらを、樹脂板から浮き上がる。足元が次々と抜け落ちてゆくようで、這うように後じさると部屋の隅で震えていることによく気づかされる。

隔てた向こうに居座る者は何者か。

覚えた恐怖に、首から提げる楽器をひたすら強く抱きしめ小さくなった。

ままに意識の中へ潜り込む。懸命に、なくした記憶を思い出そうと息を詰めた。だが記憶はかえらず、そうアルトが語る理由は、原因は、分からない。分からないまま殺されるのか。想像して、ただ胸をつぶした。跳ね返し、気持ちをつないで大きく息を吸い込む。抱きしめていた楽器を体から引き離れた。黄金色に鈍く光っていたはずのそれは今や砂塵にまみれ、膜を貼ったようにくもっている。手がかりがあるとするとそれならこれだと思えない。今と過去をつなげるモノは目覚めたときから当然のようであった技術と知識とこの楽器だけだった。

最後のリードは傷つくと、もう使い物になりそうもない。しかしながら握り締め、かまうものかと口にした。ざらり、砂の感触は舌へ伝わって、かきわけネオンは大きく胸を膨らませる。降り注ぐその一音を、弾いて管へ息を吹き込んだ。

鳴り響く音はあまりに酷い。澱のような雑音が響きの底でのたうっていた。

かまうことなくもう一音。オクターブ上げて、もう一音。それでもネオンは鳴らし続ける。繰り返して三音の間を埋め、新たな音もまた加えていった。つながればそこにメロディーは浮かび上がり、

果てに世界を描きだす。

言葉が強要する時系列など、そこにはない。

満ちるイメージが、ネオンに時を飛び越えさせた。

イメージのその中に過去は眠る。

時を持たぬそれは語れるようなものでないだけで、確かと息づいていた。

だからしてネオンは感じるままに音を手繰る。

白い箱のその中で、なくした記憶を音と吐き出してゆく。

腰にスタンガンを提げたミクソリディアが、腕を上げる。

(やったの！)

驚きにも似た動話を放ち、その後が続いてフリジアは現れていた。フリジアはスパークショットを背負っているが、飛びぬけてひよろ高い背丈のせいで背負ったスパークショットがフリジアか、見間えそうでもある。後ろには二本腕のオルターが続くと三体はテンの船、その艦橋へ足を踏み入れていた。

そんなオルターの失った腕は聞くとところによると、名誉の負傷だということらしい。だからして余ったラバースーツの袖口を、マフラー代わりと首へ巻きつけてもいた。

(あんな格好、させといてな。しくじったですませられるか)

つまり急遽稼働させた『ラウア』語カウンター内、装ったネイティブ店員こそ、そうした身体特徴を生かしたオルターだ。

彼ら船賊は『フェイオン』海域を離れて以降、バラバラに航路を取っている。クルーのケアも急務であったし、何より足並みを揃えて動けるほども息の合ったもの同士でなかった。それでも対象を確保したというのならまず互いを称え合うため、そしてつまらぬ抜け駆けを避けるため、こうしてテンの船に集まっている。

(どっちが？ ミルトのフロア担当こそ、そつちやる。イザつて時にちよんぼしやがって。おかげでわざわざOPIまで出向いたり、あんな砂だらけの町をさ迷わなあかんかったり、えらい目にあわされたもんや)

オルターへ、テンがすかさず腕を振り返した。真に受け、オルターの眉間が険悪に動いた瞬間だ。互いの間へフリジアは割って入っていた。

(まあまあ。ありや、場所がデカ過ぎたんやないか？ そやけど結

果はこうや、テン様々やいうことに違いはあらへんがな。な、オルター？)

少しばかり間延びした動話は、彼独特のテンポだ。とたんオルターは、そんなフリジアへと振り返っていた。

(それはやな、お前んトコが擬似重力室への侵入、遅れるからやる。こっちは準備してまっつったんや。せやのに減少せえへんからやな、先に軍からかりとった装備、作動させとった奴らが動けんようになっつたわ)

まさに水掛け論である。しかしながらフリジアは船賊に稀なタイプらしい。自らの額をひとつ打ちつけ、楽しげと指を折ってみせていた。

(せやったなあ。すまん、すまんなあ)

こつもあつさり謝られてしまえば、それ以上たてつくこともできず、オルターは納得したようなしなかつたような表情で動きを止める。見計らい、腕を振ったのはミクソリディアだった。

(でやな、確保したヒトはどこや。わしらの運命変える輩や。情報だけやのうてホンモンの顔、先に拝んでおきたいんやが)

(そうや、連邦は引渡しはどうしろ、言うてきてる?)

重ねてフリジアも打ち付けた額から手を離し、つづる。ならテンが答える代わり、見て取ったメジャーがその輪へ進み出していた。

(引き渡しについては先程、プラットフォームに連絡が入りました。指示された場所はカウンスラーの音窟です。互いに把握済みの場所ですし、ちょうどフェイオン方向への中間地点にあります)

と、オルターとミクソリディア、そしてフリジアがすっつとぼけたように顔を見合わせる。振ったのはオルターだった。

(は、前みたいに直接、行かへんのか)

(この間は護送中の船賊いうことでカモフラージュしとったのにな。ヒトがおるからでけんのやるか?)

フリジアも首をかしげる。

(なんや、好きなようにされとるな。こんなんでもしら、ホンマに

音声言語なんか獲得出来んのか？)

ミクソリディアも胡散臭げだ。見回しテンは肩で大きく息を吐いた。

(はつきりとはいいいよれへんかったが、連邦が俺らにこの件を依頼したのは、対象と連邦の関係を公にしたくなかったからや。そういう意味で、俺らは使われとるだけかもしれへん。せやけどな、これは取引なんや。のっとって、こっちは約束を果たした。そら、何が何でも音声言語はいただく。向こうの都合がどないなっとなのや知らんけどな、条件や、何が何でもやってもらう)

やはり頭を寄せ合う彼らの中、テンの動話が最もしなやかだ。抗えないその力に、オルターにフリジア、ミクソリディアはしばし動きを止めて見入った。それでも途切れた合間を狙い、歯切れ悪く振って食い下がったのはミクソリディアである。

(せやけどなあ……。なんや、大事なことが抜けとるような気がするんや)

遠くへと視線を投げた。追えば自然とテンの脳裏に、確保する直前、対象が綴り始めた動話は舞い戻る。

(どういふ経緯があるのかは知らないが、お前たちは連邦に利用されているだけだ。引き換えに何か提示されているのなら、それは疑った方がいい)

もちろんテンはその動話を相手にしていない。だからこそ今こうして、カウンスラーへ向かっている。

(大事なこと、いうのは……)

おもむろに腕を持ち上げたただ振った。

(極Y民族が生き残ることや。ええか、そのためには音声言語が泥水やったとしても、飲み干さなあかん。まだ俺らは使われてるかも知れへん。せやけどな、それは今だけのことや。俺らは未来のために奴らを利用しとるんや。俺らが音声言語を手に入れて、いつか他の奴らと対等に既知宇宙を渡ってゆけるようになったら、そのとき全てはつきりする。いいや、そうせなあかんのや)

宙を撫ぜる指は、静かだが力強い。それは余韻となつて艦橋内を満たし、飲み込まれたならたてつく者は誰も現れなかった。何より未来に他の道などありはしない。あるとするなら果てに滅びる運命のみだった。

(で、どーするんや？ テン！)

断ち切り、独特の節回しで動話が揺れる。船を操っていたコーダだ。不意を突かれて全員の視線はそちらへ飛び、そこでコーダは余る腕を振って返す。

(いつまでも相談こいてやがると、光速出ちまうぞ。見物に詣でるなら、降りる前に済ませてもらわんな。直前になったらインター照合のカモフラージュ作業で忙しくなるぞ)

(光速出口まで、あとどれくらいかかります？ コーダ？)
すかさずメジャーが確かめた。

(せやな。八〇〇〇〇秒中……、言うておこか。どうもそつちは時間にルーズやからな)

(だそうですよ、テン)

微笑みながら、茶目っ気たっぷりに動話を放つ。

(わかった。顔見るだけなんやろ?)

オルターに、フリジア、ミクソリディアへテンも手を振り確かめた。もつたいぶるかのような動きでそうだ、と返事は返される。

(ほなちよつと、カーゴ、行つてくる。ここ頼むで、メジャー)

(了解しました)

合図に、面々は艦橋の外へとラバーソールを向けた。がしかし、行く手を遮り、一体の船賊は艦橋へ駆け込んでくる。対象の監視指揮を取らせていたクロマだ。

(アニキ、大変や！ カーゴが！ 捕まえたヒトが！ とにかく、えらいことになってる。すぐ来てくれ！)

振るだけ振って、再び艦橋を飛びだしてゆく。様子にテンが、オルターが、そしてミクソリディアにフリジアが、顔を合わせていた。とにかく後を追うと走り出す。

艦橋からカーゴスペースのある船尾まで、さほど距離はない。ずんぐりした外見そのもの、奥行きのないテンの船はビルがそのまま移動しているかのごとく多層構造が特徴的な船だった。

駆け抜ければ足音は、消音効果のあるラバーソールだというのに慌ただしく響き、いや周囲はいつしかそれほどまでに静まり返ってテンへ、異変を知らせてよこした。気付き、流れる景色へ視線を走らせば、厨房に機関室、わずかな自由時間にもかかわらずも抜けのカラとなっている船賊たちの部屋は、その目に映る。

船尾を手前に、最上層の艦橋から最下層へと、張られたワイヤーを滑り降りた。

とその時だ。辿り着いたそこに「響き」を感じ取る。音は通路の奥、カーゴから聞こえていた。ひどく掠れると、テンたちの耳にも聞き取れる音量で鳴り響いている。

それは聞いたことのない音だった。だが騒音というでもなく、任意の羅列は感じ取れる。だからして音は連なれば連なるほど、そこに潜む意志の存在を明確としていった。

そんな音を出すものがこの船にあつたらうか。しばしテンは自らに疑問を投げる。だが思い当たるものは何ひとつなく、見極めようとしたそのときだ。そこに不思議な懐かしさが潜んでいることに気づかされていた。

知っている。

胸の内ですう、つづる。

しかし具体的な何かが思い出されるわけではない。

胸騒ぎそのものだ。

そんなテンの左右でも、遅れて気づいたらしいオルターたちが顔を見合わせている。

カーゴはもうそこだった。

開いた入口の向こうから、音に混じり動話を綴る多くの気配もまた吹き出してくる。厨房や部屋から消えた船賊たちだ。何をしてやがると毒づくと同時にテンは、クロマもろともカーゴへ飛び込んだ。

続き、オルターたちも踊り込む。広がる光景に圧されて啞然とその場に足を貼り付けた。

『フェイオン』の発着リングからテンたちを救出した気密カーテンハッチを最後尾に、向かいに船体をナイフで切り取ったかのごとく各階層を積み上げたカーゴは今や、その上から下まで集まった船賊たちであふれかえっている。皆、足を踏み鳴らし、それぞれに腕を振り上げ、異様なほどの興奮状態に陥っていた。

（俺がサルベージウインチの点検に行ってる間に、こうなってもうてて……）

クロマがテンへ振り返る。しかしながらテンにも払いのけるだけの気力はいまずぐ、湧いてこない。

（どうなつとるんや……。そうや！ ヒトは、捕まえたヒトはちゃんとおんのか?!）

思い出すと、もみ合う群衆の中へ身を飛び込ませた。様子に、あつけにとられて辺りを眺めていたたオルターも床を蹴り出す。残されたフリジアにミクソリディア、そしてクロマは、どうにかこの騒ぎをおさめようと辺りを制して手を振り上げた。

背にしてテンは檻へ走る。近づけば壁はまだ解かれていないことが分かった。そして音は、その向こうから聞こえてくる。テンは初めて『ヒト』がこの音を出していると知った。

辿り着けば傍らで見張りの二体もまた四本の腕を打ち鳴らし、聞こえる音に合わせ陽気に跳ねている。間髪いれずテンはそんな彼らを殴り飛ばした。見張りたちは折れるようにその場へ崩れ落ち、追いついたオルターがテンへその腕を振る。

（おい、テン。この変な音と違うんか？ 騒ぎの原因は!）

答えるまでもなくテンは睨みつけた遮壁へ手のひらを貼りつけた。なぞる指で文字を読み込ませる。乳白色だった遮壁は唸るような鈍い音と共にスモークを解除し、中を透かしていった。が、そこに『ヒト』はいない。驚くテンの目は宙をさまよい、自らの足元にうづくまるその姿へ行き当たる。

樹脂版へ背を貼りつけた『ヒト』はそこで、装飾品だとばかり思い込んでいたあの奇怪な金属塊を抱え、懸命に操っていた。音は、その金属塊から放たれている。

見て取るなり遮壁を解くことも忘れてテンは、『ヒト』へ怒りに満ちた手刀を振り下ろした。

（黙れ！ きさま、勝手なことをするな！ ここは俺の船の中やぞ！）

有り余る感情に動作は極限まで大きくなり、それはテン独特のしなやかな動きとあいまると、数多の船賊を指揮して動話を放つときのような武道の型にも似た美しさをなおのこと際立たせる。加えて止めさせようとするその音とも、妙なまでにシンクロさえした。掠れ、跳ねる物悲しげな音色に怒れるテンの動話は、見る者の目にまさにダンスと映って光る。止まらぬ音にテンが躍起になって唸れば唸るほどだ。動きは切れと華やかさを増して、逆に音色はテンの激しさに絡んで強く、誰も肌の響いた。

見とれていつしか騒ぎ立てていた周囲の動きは、止まってゆく。

傍らに立つオルターでさえ釘付けた。

（トニツク……か？）

と、振り上げられたテンの拳が、たまりかねて遮壁を叩きつけた。藪から棒の振動が、とるとき『ヒト』の目を覚まさせる。抱えていた金属塊から体を離し、驚き、怯えたような眼で返った。

ようやく音は鳴り止む。

テンの動話もそこで止まった。

瞬間、魔法を解かれたかのようにカーゴ内は我を取り戻す。

静寂の中、テンは息を切らせて『ヒト』を睨んだ。

綴った指文字を読み取り樹脂板が光を走らせた。一枚板の壁だったそこに柔らかい切れ目は入ると音もなく扉は開く。体をねじ込むようにしてテンは中へ踏み込んでいった。

その姿に『ヒト』は眉をひそめている。めがけてテンは下二本の腕を伸ばし、元凶としか思えない金属塊をわしづかみにした。奪い取るべく力をこめれば、抵抗する『ヒト』に力は戻った。『アズウエル』から連れ出すときみせたようなありつたけの力で金属塊へ食らいつく。負けじとテンは掴んだ金属塊ごと振り払った。是が非でも離れない『ヒト』は床の上でもんどりうつ。見れば金属塊は『ヒト』の首にかけられた紐とつながっており、その紐をテンは上二本の腕で手繰った。気づいて『ヒト』が拒んで体を丸めたなら、互いは息継ぐ間もない揉み合いとなった。

譲らぬ気迫に周囲は動けず固唾をのむ。

遮り、そこへ乾いた音は割り込んでいた。

聞き流せば二度目、無機質だったその音へ苛立ちは加えられる。たまらずテンは金属塊にしがみつく『ヒト』をひきずり、振り返っていた。隣り合う部屋だ。そこでもう一体の『ヒト』はもたれかかる樹脂板を叩いている。テンと目が合うなりその手で動話を綴ってみせた。

(こつちだ)

最初、彼が動話を使えることにテンはずいぶと驚かされている。しかも利用されていることに気づかないのか？などと投げるのだから、どれほど度肝を抜かれことか知れなかった。目的のためだと苦々しくも飲み込んできた、それは全てだ。ズバリ見抜かれたようで、不覚ながらたじろいだほどだった。

(返して、やれ)

元来二本しかない腕のうえ、オルターほども熟練していない『ヒト』の動話は、たどたどしい。加えて『アズウェル』同様、無視して当然と目には映った。だがつい答えてしまったのは、そうまでするこの『ヒト』は何を知り、何を話すのだろうかというささやかな興味がテンの中に湧いたからだ。

(お前に指示されることやない。こいつは目障りや。俺が没収する) 振り、再び視線を金属塊へ戻した。

遮る『ヒト』は綴ってみせる。

(知らされて、ないなら、ひとつ助言だ)

テンはまたもやぎよつ、と振り返っていた。だからこ狼狽を強気で装う。おかげで必要以上、神経はささくれ立つと、ひと目で分かるテンの変化に『ヒト』はまるで獲物に食らいついた獣を試すような具合で、もう片方の腕も合わせてなおのことゆったり動話をつづり始めた。

(ヤツら、それがなけりや、応じないぞ)

(そんなワケないやろ。お前と、こいつだけや。それ以外、俺は何も聞いとらへん)

(見るよ。離さないつもりさ。そういう、ことなんだよ)

動話を放つ前『ヒト』はアゴでテンの手元を指し示してみせる。

素直に従えば敗けたようでもなくそ悪い。ためらつてのちテンは渋々、金属塊へ食らいつく『ヒト』へ視線を落とした。挑戦的な瞳はそこで、忠告を裏付けテンを見上げている。なら二度ノックして『ヒト』は『再びテンの気を引きつけなおした。

(いいか、何度も繰り返さない。あんたは無事、目的を果たしたい。ならそれ以上は、よせ。そいつには俺から、騒ぎを起こさないよう、伝えておく)

ためらえば、わずか緩んだ手元のスキを見計らい、肩を揺すつた『ヒト』が金属塊を奪い取っていた。しっかり胸に抱きしめ、飛びのくようにその場から後ずさる。ピタリ、樹脂板へ背を貼り付けると、そこから吊り上げた眼でテンを睨んだ。

苦々しく見て取りテンもまた、中途半端に宙で泳いでいた腕を引き戻してゆく。

(次、やったら、その時は必ず預かるからな)
目もくれず振り返した。

見て取った『ヒト』が、金属塊を抱きかかえる方へ音声言語を投げかける。もちろんテンに理解することはできなかった。ただ歩調も荒く表へ抜け出す。後ろ手に樹脂板を閉じた。

(おまえら！ 何やつとんねん！ こんなところで油売つたらんとはよ持ち場へもどらんかい！)

詰めかけた船賊たちへ手刀を振り下ろす。

その荒れた身振りに船賊たちは散り散りとなり風のように持ち場へ戻っていった。そうしてカーゴにはオルター、ミクソリディア、フリジア、そしてテンとクロマ、見張りの二体だけが取り残される。(なんや、よー分からんけど、とりあえずおさまったみたいやな)

腕を持ち上げフリジアがテンの元へ駆け寄った。
(そやけど、ありや何や？ ここに集まっとった奴らが動き出すのも分からんでもなかつたで)

ミクソリディアも腰のスタンガンを揺らしながら、樹脂板の前へ近づいて来る。テンの傍らにはすでに馳せ参じたクロマが付き、渋い顔つきのオルターもまた立っていた。

(そややねん、アニキ。アニキは何も感じへんかつたんか？ 回りの奴らを止めようと腕振ったら、あの音がついてくるねん。何ていうたらええんかなあ。こっ、あんまりハマり過ぎて気持ちが高ぶるっちゆうか……)

懸命に説明するクロマの動話は、その先を綴れず宙に消える。なら興奮気味にミクソリディアがその先をつなげて振った。

(そやや、動話とんや似とるんや。こっちは騒いどる奴らにいうとるつもりでも、そのうちあの音とんや、動話交わしとるような気分になつてもうて、いや、あの音が何伝えとるか分かるっちゆうてんのととは違うんやで。そやから厄介で)

(まあ、でも、妙に楽しかったなあ)

下二本の腕を組みフリジアも宙を仰ぐ。思い起こすままに目を細めた。

振り払ってそこからテンは顔を背ける。

(冗談よせ。あんな騒ぎはこれつきりや。あの目障りな金属の塊、取り上げるつもりやったが、どうもアレ込みやないと連邦の奴らはあいつらを引き取ってくれへんらしい)

知らされ全員が金属塊を抱えてうずくまる『ヒト』へと目を向けた。

(誰がそんなことを?)

渋い顔を続けていたオルターが、ようやく二本の腕を振る。

(そうや、わしらきいとらへんで)

ミクソリディアが続ぎ、テンは答えた。

(こつちに確保したヒトや。あいつ、動話、使いよる) アゴで指し示す。

(ほほー、こいつらやねんな。わしらの運命、決めよんのは)

檻に閉じ込められた珍獣を観察するかのようになり、歩み寄ったミクソリディアが樹脂板へと、その顔をこすり付けて見回した。隣にオルターとフリジアが並び、ならば読み取られることを避けてフリジアが、手のひらで隠しながら指文字を綴る。

(なんで連邦はこんな奴ら、探しとんのやろ)

(そんなもん知るかいな。こつちには関係ないわ)

返すミクソリディアは隠すことなくおおっぴらなものだ。早くも飽きたといわんばかり、樹脂板に背を向けた。

(これで納得いったな。まあ、最後まで手は抜かんことや)

とつとと帰るつもりらしい。艦橋へ歩き始める。習ってフリジアが動き出し、惜しむように『ヒト』を眺め回したミクソリディアも後についた。

(クロマ。みんなを送ってきてくれへんか)

見送りテンはクロマを呼び寄せた。

(アニキは?)

尋ねられてテンはしばし視線をそらす。もどしてこう、クロマへ答えた。

(俺は、ちょっと済ませたい用事がある)

(わかった)

返しクロマは一同を連れカーゴを出てゆく。

その背が見えなくなるまでテンは見送った。気持ちを入れ替え一息つくくと、踵を返す。今度こそ微動だにすることなく命令を全うしている見張りたちへ視線をすえた。

(おまえら今度あの音がしたら、ぼさつと聞いとらんと俺に知らせにこいよ)

先ほど殴りつけられた頬を歪に腫れ上がらせた見張りたちの、『了解』と答える腕はそこでハモる。頷き返してテンは再び樹脂板に押し付けた手で指文字を綴った。スモークをかけた直したうえで、動話が使える『ヒト』の扉を開く。

見張りたちが、そんなテンに顔を見合わせていた。

気づかず扉をくぐりかけたテンの足はそこで止まる。

(ええかお前ら。俺が出てくるまで、ここへは誰も近づけんな) きよとんとしながらも見張りたちは、それにも『了解』と振り返した。

見届けるまでもなくテンは入口へと頭を潜り込ませる。

スモークをかけたせいだ。膨張したような白にそこはなお狭く感じられていた。放り込まれた『ヒト』の放つ倦怠感は、持て余すほども充滿している。そんな『ヒト』は先程の手ぶりだけでも酷く疲れた様子だ。身動きひとつすることなく壁へ寄りかかっており、あてられることなくテンは呼吸を整えなおした。そうして投げ出された『ヒト』の足元に立つ。

気配に『ヒト』が顔を持ち上げていた。あからさまな警戒は全身から発せられ、互いの間にとたん緊張は張り詰める。だがすぐにも尽きると、どうにでもするがよいと言わんばかりだ。『ヒト』は投げやりな態度をテンへと晒した。

表にはスパークショットを担いだ見張りも待機しているのだから、丸腰でも問題ない。だからしてテンは遠巻きに、そんな『ヒト』を観察する。ほどに次々と胸中を言い当てるようなことを振ってみせた『ヒト』のカラクリを知りたい思いに駆られていた。

何しろ『ヒト』は、いまだ腑に落ちないでいる連邦側の思惑を知っているフシがある。ならそれは大一番を前に知っておくべき話だと思えてならなかった。利用されているのではない。今たくすぶる疑念をはつきりさせるためにも必要だと思えてならなくなる。だが知ったところで無駄だ、ともう一方の自身は囁き、たとえば分の悪いハナシが明かされようと事実、もう他に道は残されていないのだから今、この時に尽力すべきだと説く己と対峙した。そうしてようやく気づかされたのは、こうして思案している自分こそ下した決断に不安を抱いているのではなからうか、ということだ。

おかげでようやく腹はすわった様子だった。何を知らされたところで変わることなどない。いや、変えはしない。テンは今一度、己を確かめる。ためらいはそこで消え、見えない綱を引き合うような

微妙な緊張を解いていった。

(どこで動話なんか、覚えた?)

見て取った『ヒト』がいつとき何の話か、と目を瞬かせる。鼻でフン、と笑ってみせた。

様子にテンがむっ、としたことは否めない。伝えて半歩、『ヒト』へ詰め寄る。気に留めることなく心行くまで笑った『ヒト』は、そこでようやくテンへ腕を持ち上げていた。

(言語開拓機関、って場所が連邦にある)

(げんご、かいたく?)

それは見慣れない動話だ。

(なんや、それは)

問えば『ヒト』はもたれていた壁から背を、重たげと浮かせてゆく。ゆっくりと、しかしながら確実にテンへ動話をつづっていった。(造語を作った機関だ。コトバってやつは厄介でね。一人歩きするうえ、文化や帰属意識ってテリトリーを個の中へ、勝手気ままに作り上げる。個という領域を意味で矯正し、無意識のレベルで壁を作って囲いあげる)

(当たり前や。つうじん奴らとはつうじん、わからん奴らとは、わかりようがあらへん)

(そいつをコントロールするため、連邦がこしらえた、たいそうな機関さ)

そこで『ヒト』はいったん辛そうに腕を下ろした。

(そこで覚えたんか?)

代わってテンは指を折る。

(そこには、既知宇宙に存在する全ての言語と、意味が保管、管理されていて、覚えたというよりも、動話は俺の担当だった)

分かったような分からないような説明だったが、教えを請うわけにもゆかない。テンはただうなずき返す。

(なるほど、ならあんたは、そのたいそうな仕事を放り出したっちゆうワケなんやな。せやから連邦は連れ戻そうとした)

先回りで先手を打ち、取られかけていたイニシアティブを取り戻しにかかる。だが『ヒト』の様子は変わらなかった。あくまでもテンにとって理解不能な話ばかりを続けてゆく。

(冗談。なら、もう少し丁寧に扱うだろ。ダイラタンシーなんて、撃ち込みやがって)

(なんや、それは?)

もちろんテンこそ放たれる側なら、ダイラタンシーを知らないわけはない。

(連邦のやつらなんか、どこにもおらんかったぞ)

そんなテンの動話を目で追う『ヒト』の表情は、そこでやおら引き締まっていた。袖口の砂を払うと座りなおす。改めこう、指を折っていった。

(伝えた通りさ、あんたらは、利用されている)

(あの場所に、あいつら、おったんか?)

(見返りは、何だ?)

単刀直入と問いかけられていた。

(知ったことか)

テンは突っぱねる。

(俺たちは似た者同士、かも、しれないんだぜ)

(だったらどうした?)

(あんたはきつと、後悔する)

『ヒト』の目が、じつとテンをのぞきこんだ。テンはその視線もまた払いのける。

(んなら聞くがな、なんで連邦はお前らを連れ戻したがってる?)

(さつき、触れたろう? コトバは文化や帰属意識を主張したがるってな。その地域、地域で使われ続けてきた言葉には、その言葉を育んだ土地の風土や習慣が山のように含まれている、ってことさ。

あんたの動話にあつて、俺たち『ヒト』語にない言葉があるだろう。連邦はそんな土地と俺たち、そこから言語を切り離したがっているのさ。縛る帰属意識を取っ払って、平たくつなげなおしたがって

るのさ。そのために手っ取り早く、造語を普及させた。だが、あんならのような半端もんが、できちゃった。だから新しい手段として、俺たちを取り戻そうとしているのさ)

そこで会話はプツリ、途切れる。何しろテンには『ヒト』の言わんとしていることが、すぐにも飲み込めなかった。言語、習慣、宗教、含めた文化。数多存在する種族、民族ごとに多種多様と存在するそれら全てが一掃され、果てまで続く同質の世界など、ただちに想像できるはずなどありはしなかった。

(……んなことが、できるわけないやろ。俺らは俺らや。『バナール』でも、『エプランチル』でも、お前ら『ヒト』でもない。極Yにも地域差つちゆうモンがある。住んどる場所が、違っんや。せやから見てくれも違っやろ)

啞然としていた己を急ぎ取り繕う。

(だからこそ、研究中でね)

あざ笑い『ヒト』はさらり、答える。

(ほんなら、なんや。お前らを渡せば、俺らは造語を手に入れたとしても、今度は極Y種族って生き方を、その新しいやり方で塗りつぶされるっちゆうんか?)

何しろそれでは本末転倒だ。だが見て取った『ヒト』の頭は否定して振られていた。

(故郷と言っ意味合いが一切、消えることになるだけさ。おかげで長距離航行就労者たちのイルサリ症候群が解消される可能性もあるいや、俺はそう聞かされていた……)

その指はしばし宙をさま迷った。やおら目をテンへ向けなおす。

(造語の入手が代償なのか?)

それは刺さるような振りだった。しまった、と思えば、それまで滞ることのなかった手元も思わず止まる。取り繕うにそれはありあまる動揺となり、どうしても思うように進まないこの会話へ苛立ちを加えた。

(お前らに分かるんか! ええ? 俺らは好きで船賊やっとなのと

ちやうんやぞ。何が垣根をなくすや。作ったんはあいつらやないかい！　しょせんそんな話は机上の空論や。出来る道理があらへん。そんな話で俺らが逃がすとも思つてたら、大間違いや)

(空論？　まさか)

などと返す『ヒト』の動話は冷静を極める。ままに視線を、樹脂板の向こうへと振った。

(現物がいるだろ？　隣に)

(……なん、やと?)

テンの背に、嫌な緊張は張り付く。確かに、無傷で連れ戻せと指示されたのは、隣の『ヒト』だ。

(連邦の目論見が成功したなら、造語に変わる新たな方法で、既知宇宙はきれいさっぱり統一されるだろうよ。言葉の大半が消えれば帰属意識も薄れるだろうつてのが、奴らの見解さ。そしてその先には、支配する者とされる者に二分した世界があつて寸法だ。知らぬ間に支配者たちが、俺たちの言語、帰属先に成り代わつて造語を振りかざし、俺たちの中に故郷として居座るだろうね)

『ヒト』の動話は振り始めた時より、明らかに滑らかさを増していた。そしてそこに憎しみとも取れる力がこめられてゆくのを、テンはつぶさと見てとる。だからしてそんな『ヒト』の前へ、静かに屈み込んでいった。

(なんや、似た者同士というのはそういう意味なんか？　滅び行く者同士、つてことか?)

めいっばいその顔を『ヒト』へ近づける。間に掲げた手で、見せ付けるように動話を振つてやった。

(あのお、勘違いすんな。ええか、あんたはそのための機関におつたんやろうが。こちららそのせいで大迷惑しとるんや!)

勢いのまま振り捨てる。

一部始終を睨み返す『ヒト』の目が、みるみるうちに怒りで赤みを帯びてゆくのが分かった。

(知っていたなら、あんたの罵声も甘んじてうけるさ)

自らもつづつて返す。

(哀れやの)

テンは再び腕を突きつける。
立ち上がった。

(あんたは極Y種族というアイデンティティのために、俺たちを追いかけて回した)

きびすを返しかけたその時だ、つづられた動話に『ヒト』の腕が視界の隅で揺れ動いた。

(俺はそのために機関のラボを封鎖し、隣のあいつを外へ放った)
背中越し、その動きをテンは見つめる。

(似た者同士つてのは、そういう意味だ。滅ぶんじゃない。それを避けるために、お互い尽くしてるんじゃないのか?)

振られていた腕はそうして、重たげと床へ下ろされていった。
返す動話などない。

否定できないテンを痛いほどの危機感襲う。

(せやけど俺のやり方は間違っていると、あんたはいいたいんか?)
絞り出していた。

『ヒト』はそこで、ただアゴを引いている。
動きにはいやというほど伝わる何かがあった。

(だからつてな、俺はいまさらこの取引から手を引く事は出来へん
のや。俺を信じて、ついてきとる奴らがようさんおんのや。それに
手を引いたとして俺らにもう道はない。たとえあんたを連邦に引き
渡して、あんたの話が実現したとしても、その時はその時やいうこ
とになる。まあその話、よう覚えておくで。せやけどあんたらの体
を連邦へ引き渡すことには、なんもかわりはあらへん)

(『アズウエル』でも監視していた奴らだ。連邦のやり口には気を
つける)

振り終えたテンへ『ヒト』が手早くつけ加えていた。それきり再
び樹脂板へ、深く背をもせかけてゆく。

(ああ。あんたのスタンエアは俺らで回収してるで)

そんな『ヒト』へテンも振っていた。

扉をくぐり抜ける。

出てきたテンに、見張りのふたりは訝しげな顔つきをしている。

テンはその顔へ片腕を挙げ合図した。後ろ手に扉を閉じると、迷うことなく艦橋へと向かう。

どの足取りも軽い。

それでいて無目的であるかのごとく緩慢だった。

熱からず寒からず、中庸の気温の中を多種多様な種族は行き交っている。ただ乾燥は思っていた以上に激しく、中には乾燥から身を守るための防護服をまとう者や、やけにぬらりと光る薬剤を皮膚に塗りつけた者が多数含まれていた。しかしながらそれを苦にする様子は微塵もない。あえて言うなら、どの顔も満足げな笑みさえ浮かべていた。つまるところ、その場所が観光地である証拠だ。

ここは惑星『カウンスラー』。その中でも『エピ』と名づけられた最大級の音窟入り口前になる。訪れる者だけではなく、地面すら残さず飲み込みまんなばかり開いた音窟の入り口には守り神らしきレリーフが施され、行き交い、潜り抜ける観光客をこぼれんばかりの三白眼で見下ろしていた。

中に照明はない。すでに盗掘も進んで後のこと、この稀なる遺跡の価値を見直し保護を訴えた団体が遺跡にこれ以上、手を加える事を拒んだせいだ。ゆえに音窟へ潜り込む観光客たちは傍らの売店でレンタルした明かりをかざし、懐に余裕のある者はガイドを引き連れ、足を踏み入れていた。

運んで行き来するシャトルバスや三輪駆動車のトライクルは、さきほどからひっきりなしと観光客を吐き出している。コマネズミのようなその動きに周囲は絶えず砂埃に霞み、紛れてどの観光地でも名物といえれば名物となってしまうた物乞いが、それこそ真昼の幽霊かと右往左往していた。

そのほとんどは造語が話せない僻地の貧者だ。中でもこうした生活余儀なくされるのは肉体労働にさえ従事することが出来なくなった老人や、深手を負った者たちである。腕を無くした極Yに、素

顔をさらしたままのパラシエント。年老いたうえにまとったボロのせいで果たしてどの種族なのか判別できない者に、群がる物乞いへ群がるほどと変形の進んだ体を持て余す者がいた。おそらく汚染地域への仕事へ向かったその後、雇い主に捨てられたのだろう。新しいバスやトライクルが観光客を降ろすたび、吸い寄せられるかのごとく群がっていた。

例外なくシャツフルの足元にも痩せたテラタンの、シワにシワを刻んだ物乞いは絡みつく。

『邪魔だ。どけ』

すぐさま部下が、その体を払いのけた。

周囲には三体、ミラー効果を有効にした分隊員も連れ添っている。『かまわん。下手に暴れて目立ちたくはない』

『アーツエ』以降、階級を隠してはいたがも、その身なりはラフな周囲からしてみればあまりにも場違な軍服だ。

『申し訳ありませんでした』

払いのけられたテラタンは、そうして初めてすがった相手が軍人だと知ったらしい。恐れおののきもんどりうつと、それきり観光客の中へ逃げ込んでいった。

と、目もくれず足を進めてシャツフルは口を開く。

『等しさとは何だと思う？』

背後についたせいで危うく聞き逃しかけたらしい。部下が声へと振り返ってみせた。

『は？ 等しさ……、ですか？』

『そうだ』

かたくななまでに突き返しシャツフルは、返答を待つ。

だが部下の反応は珍しくも鈍い。

『はあ……』

『我々が成そうとしているのは、そういうことだ』

待ちきれず答えを口にしてやる。そうしてシャツフルは擦り寄る新たな物乞いを押しつけた。行き交う観光客を肩でかわし、『エピ』

前を大またで横切る。意図を掴んだ部下はそこでようやく答えを見つけた様子だ。模範解答と言葉をそこに並べていった。

『でしたら世界を潤滑に動かすための手段かと。それが紛争という形であれ、見解の相違という些細な誤解であれ、ホームシックに似たイルサリ症候群であれ、ひと、物、情報が滞ることこそ最大の痛手であると理解する我々にとって理想の形であると承知しております』

指定した対象の引渡し場所はこの大きな『エピ』にオマケのごとく寄り添って開かれた別の音窟だ。目指し、賑やかな『エピ』前を過ぎれば次第と辺りは落ち着きを取り戻し、うらぶれた空気は漂い始める。観光客が消え、従い物乞いも次第に姿を消していった。

いつしかシャトルバスやトライクルの駆動音が幻聴のように遠ざかっている。ただ正面に入口を構え地下へ伸びる『エピ』だけが、なだらかな傾斜をつけ片側に伸びていた。

なぞりシャツフルたちはひたすら目的の場所へ足を繰り返す。

『痛手か。なら、それを受けるのは誰だ？』

問いかけた。

『は？』

部下はまたもや聞き返し、込み入ってきた話にシャツフルと肩を並べる。そこから食い入るような瞳を向けた。だからといってシャツフルが振り返ることはない。正面をにらみつけたままでただ声へ力を入れた。

『いいか、我々はただ奴らの身柄を引き取りきたのではない。そうして痛手を受ける側へ回るため、ここへ来た。それを忘れるな。リスクに応じた見返りと言うものがある限り、リスクの存在しない物事に見返りはない。ならば回る世界からリスクを取り除くことが目的である限り、我々はその外へ出ねばならんだ。見返りのある場所へだ。奴らはそのボーダーだと覚えておけ』

そして初めて部下へその目を向ける。

『どうだ？ お前は外まで、ついてくるか？』

確かめた。

『軍医は……』

逸らすことなく見つめたままで、部下は言いかける。その口をつぐんだ。やがて確信を持って答えて返す。

『もちろんです。軍医殿』

聞いてシャツフルはゆっくりと、その目を正面へ向けなおしていった。

それまで片側に続けていた『エピ』の壁面は、いつしか歩くシャツフルの肩へ届くほどまでと低くなっている。その先に『エピ』とは比べ物にならないほど小さな入り口はあった。同様に彫り込まれた守り神のレリーフは、半ば崩れかけた面持で、ここでも空を睨んでいる。

前で立ち止まった。

シャツフルは中を覗き込む。奥へ緩やかなスロープが続いた『エピ』とは違い、そこから先は急な階段を地下へ伸ばしていた。なら同行していた分隊員が一体、シャツフルの前へ回ったらしい。風景が揺れ、ミラー効果を切った体はシャツフルの前に現れた。

『ここから先、軍医の安全は我々が確保いたします』

『頼んだ』

分隊員が敬礼で返す。先頭を切り、階段へ足をかけた。構えたダイラタンシーベルトのショットガン、その先端につけられたライトで内部を確認する。独特の質感を持つ『カウンスラー』の土は、投げかけられた光に金属がごとくキラキラと粒子を輝かせていた。以外、何もないと分かれば分隊員は階段を降りてゆく。続いてシャツフルが、そして部下が、音窟へもぐりこんでいった。最後、ミラー効果を切った二体の分隊員が、ショットガンを小脇に抱え音窟へ身を沈める。

通常なら、抱えた小部屋の数だけ複雑に枝分かれしているはずの内部通路は、小規模ゆえに、その構造も実にシンプルだ。その中でも、パラシエントのボイスメッセージャーが開放した小部屋はこの

音窟の最も奥に位置している。

対象たちはそこにいる。

思えばシャッフルの心拍は否応なく跳ね上がり、押さえつけてその顔をまたひと撫でしてみせていた。

これほど小さな規模の音窟にも盗掘の跡は残されている。進む通路から枝分かれた小部屋の扉は方々で破壊されると、破壊されたままと放置されていた。

通路はわずか、下り続けている。天井も低く視界が限られているせいだろう。そんな扉をやり過ごし進めば、感じる圧迫感もひとしおとなった。

表にあれほど立派な音窟が口を開いているせいで、あえてここを訪れる者はいないらしい。どれほど進めどシャツフルたちの背後からも、そして前方からも、足音は聞こえてこない。

やがて先頭をゆく分隊員がシャツフルへと半身をひねった。

『この次の部屋になります』

それきりだ。分岐点はついえる。今にも消え入りそうに細る道だけが一本、微妙にうねりながら行く先を覆い隠して奥へ伸びた。シヨットガンの明りが届かぬその奥から、やがてわずかな空気の震えは伝わってくる。それは次第に大きくなると、明らかな物音へと変化していった。

小部屋内部より漏れ出した音だ。

思えば物音はさらにエコーにも似た残音感を伴い、嵐のように通路を吹き抜け始める。そこに何らかの会話を聞いて取ることはできなかった。耳にできるのは衣服のすれるような音のみで、ゆえにシャツフルはすぐにも極Yの動話だと察した。同時にその脳裏を、久方ぶりに対面することとなる彼らの姿は過ぎつてゆく。とたん鬱積していた思いはシャツフルの中でひとつ、覚悟へと姿を変えていった。

と、先頭に行く分隊員の明かりが開かれた小部屋の扉を照らし出す。

気づいて物音もまた小部屋の中でピタリ、止んだ。まさにこれらを警戒するかのような緊張を、静寂でもって外にまで伝播させる。

無論、扉の大きさは通路以上のものであるはずがない。先頭を切る分隊員がまず、屈めた身で中をのぞきこんだ。その背は素早く、しかしながら的確に左右へ銃身を振って動く。

『極Yと対象を確認』

耳にするや否や、シャツフルは扉に手をかけた。一刻も早くだ。その顔を確かめたく、前に立つ分隊員を押しつける。潜り抜けた体を起こしていった。

目へ、光は差し込まれる。眩しさに顔を背けたならプラットフォームを抱えて部下も背後から姿を表していた。同じように光を浴びせられると、かざすプラットフォームで拒んでいる。おっつけ残る分隊員らも小部屋へその身を潜り込ませたなら光は例外なく誰も体を這い回り、刺された瞳孔がしばれるまで、いくばくか。やがてうっすら視界に、極Yたちの姿は浮かび上がっていた。

そのうちの一体はクレツシエの部屋ですれ違った極Yだ。左右にもまだ数体が確認できる。ただし、手にしたライトが逆光となり顔まで見て取ることはできない。ただ碗を伏せたようなドーム形、半径四メートル足らずの小部屋は今や満杯となり、取れぬ距離にそぐわぬ親密さばかりを強要していた。

とついに向けられていた光が消される。見えずにいた極Yたちは、分隊員のショットガンから放たれる光に視界へ浮かび上がった。その手にスパークショットは握られると、突きつける先にはキラリ、鋭い光を放つあの楽器があった。首から提げた対象の瞳が、まるでそこだけを強調したかのように彼らに囲われのぞいている。並んで全ての傷口を広げた別体もまた、食らったダイラタンシーベレットにどんよりとした面持ちで隣に立っていた。双方とも後ろ手を固定されているらしい。どこことなく不自然に傾く立ち姿が、不自由さを訴えて止まない。

とたん押しつけ、別体が体を揺すった。

警告してスパークショットの電極から火花は散る。

やり取りを警戒しつつ急ぎ部下が、互いの間へプラットボードを据え置いた。手早く読み取り用のスキヤナを立ち上げ、動作を確認したのち後ずさってゆく。横顔は、そのときショットガンの光を遮った。瞬間、極Yの向こうから声は投げ込まれる。

「トパルッ！」

別体だ。

無論、トパルと呼ばれた部下が反応する様子はない。そこが定位置であるかのように、シャツフルの脇へただ収まる。

黙らせるべく極Yが即座に電極で別体の肩を強く突いてみせた。

背にして、知った顔の極Yがプラットボードの前へ進み出てくる。

（時間どつりで、そりゃ結構なこつちな）

動話を読み込んだプラットボードが早速仕事を始めて教える。

ちらり、トパルと呼ばれた部下へ目をやりシャツフルもまた、プラットボードへと歩み寄っていった。

『我々が交換しようとしているのは実のところ、その二人と音声言語というよりも信用ですからな』

口を開けば合わせてプラットボード上、用意しておいたトニツクの水ログラムは揺れ動いた。

（なるほど、信用……とは、言うな……）

『なくして、この取引は成立せんでしよう。時間を守るも、条件を満たすも、お互いのためだ』

精一杯の友好を示し、シャツフルは肩をすくめる。

（なるほど、こつちにしてもシンプルな取引が一番ありがたいってもんや）

伝わったのかどうか極Yの返事もそつがなかった。

『なら段取りよく参りましょう。ひとまず、確保していただいた双方をこちらで預かりたい』

本題に入る。

と、踊るトニツクを目で追っていた極Ｙが、今一度、確認を取るようにシャツフルへ顔を上げた。

（んで、俺らは？ 聞いたとった塩基付加ってやつはどうなるんや？ それにを先に聞かせてもらわんとな）

腕を振る。

前でシャツフルは、あえてゆったり構えなおしてみせた。笑みさえ浮かべ、プラットボードへ吹き込み返す。

『これは、失礼。まずは代表者数名にラボまで同行願ひ、合成多能性細胞の移植を受けたうえで新造塩基のモデルになつていただく予定であります。後に安定性が確保できれば、それを元に複製した塩基を希望する者へ順次付加投与を行うという段取りです。希望者の数に比例して作業終了までの時間は延長されますが、費用はその二人で十分。もちろんこの技術は連邦のラボのみ所有する技術です。費用云々でどうにかなるものではありませんがね』

（なるほど。あんたの言う信用とやらには間違いはないようやな。なんせ、金やない。まあ、よろしく頼むで）

などと半ば冗談半分だ。極Ｙは指を折ってみせていた。

答えてシャツフルも切り返してやる。

『確かに、これがそうそう民間で広まれば、えらいことになりますからな。この先も、まず外部の者が体験できるなどありえないでしょう。あなた方はラツキーだ』

プラットボード上のトニツクを眺めていた極Ｙが、意味ありげと笑みを浮かべた。シャツフルへ小刻みに何度も頷き返し、同時に二本の腕で後方に控える極Ｙたちへ素早く動話をつづる。プラットボードのスキヤナ範囲から外れたそれが訳されることはない。

（ほな、お近づきのしるしに、こいつらを引き渡しておこうやないか）

動話と同時だ。電極が対象を押し出した。

（で、ラボまで出向くのは俺と、あいつとあいつ、それからあつちのやつや。残りはこの話を待つとる奴らへ返す）

『船まで案内させましょう』

読み取りシャツフルもまた、両脇を固める分隊員へアゴを振った。瞬間、引かれていた一線を越えて楽器を提げた対象は、電極の先からショットガンの前へ預けられる。

分隊員はその背を突いて小部屋を後にしていった。

もう一体の分隊員もまたラボへ向かう極Ｙたちを手招き、その後につけと指示を出す。

なら残されてシャツフルとやり取りを交わしていた極Ｙが、やおら別体へ体当たりを食らわせた。押し出すようにその体もまた、シャツフルたちへゆだねる。勢いにつまずきそつによるめいた別体が見開いた目で極Ｙへと体をひねっていた。すぐにもショットガンの銃口に捕えられ、その顔を持ち上げなおす。

押し出した極Ｙが見向きすることはない。それきりきびすを返していた。誰もに続き小部屋を後にしてゆく。

見送った分隊員もまた別体へ、押し付けた銃口で歩け、と指示を繰り返した。

否応なく歩き始めた別体の目が、その時シャツフルをとらえる。

それだけだ。

言葉はない

だからこそ究極だといえた。

込められた思いはただそれだけで、言い表せぬ腹の内をシャツフルへ伝えよこす。食らってシャツフルは冷めていたはずの自分に熱が戻るのを感じていた。

『待て』

分隊員を押しとどめる。

ままに別体へと歩み寄っていった。

傍らで、プラットフォームをたたんでいた部下が何事か、と顔を上げている。

分隊員も何が始まるのか、と明らかに警戒してみせた。

恐らく極Ｙたちの前でこの感情をさらしていれば、『信用』など

という浮いた言葉は説得力を失っていたことだろう。だが、今ならかまいはしないと思う。いや今こそ隠す必要などなかった。

シャツフルは別体を前に立ち止まる。立ち止まって感情に見合うだけの言葉を捜し、埋めて言い尽くせる言葉など別体の瞳が語るように見いだせなければ、もてあますまま背を向けた。

扱いきれず、振り返る。

瞬間、空を切り手はしなつた。

別体の頬で鋭い音を響かせる。

勢い余った別体の体が吹き飛ぶ。

踏みとどまるなり飛び掛らんばかりシャッフルへその顔を向けなおしてみせた。くもっていたハズの眼はそこで憎悪にぬらりと光を取り戻している。裂けた頬骨の薄い皮膚からは、わずかと血を滲ませていた。

『触れたくもなかったが、再会の挨拶としようじゃないか』

打ち付けた手をさすり、吐きつけシャッフルは乱れた呼吸を整える。

『何をのん気にジャンク屋だと？ 実におもしろいシナリオだよ』

頬を歪め、すぐにもあきれ顔に開いて笑った。

『貴様、ハブAIを使って自らに記憶マーカーを注入させたな？』

おさめて真顔と睨み返す。

『だからこそ免疫センターにDNAデータを残した。そうでもしなければ貴様がアシのつくようなことをするハズがない。違法行為には違いなかったが、おかげでツーフアイブ社には感謝状の一つも送ってやりたい気分だよ』

小部屋内、エコーするシャッフルの声はまるで生き物だった。幾重にも重なり、険悪な雰囲気嫌って開け放たれたままの扉から逃げ出してゆく。見送りシャッフルは別体を覗き込んで前屈みと、その体を折っていった。詰めた眉間で事実を突きつけ口を開く。

『つまり最後、ハブAIが自閉する直前にリンクしたのは貴様だ。あれの自閉は、貴様が原因だ』

否定はさせない。目を細めた。前のめりだった体を一思いと引き戻す。

『いいか、ジャンク屋ごっこはこれで終わりだ。貴様にはラボで事態の收拾に取り掛かってもらう。断るといふ選択肢があると思っ

いるのなら、今のうちに改めておけ。クレツシエは口にさえ出させないぞ」

「……あの時の生き残りは、俺だけなのか？」

別体が、その口を開く。重々しい響きはくぐもったまま小部屋内を行き交った。

「残す価値がどこにある？ 出過ぎたマネを。貴様らこそ、造り直す必要があつたというべきだな」

「簡単に言ってくれませ」

「何をいまさら」

だが返すシャツフルにこそ淀みはない。

「基本的なことは実に簡単ではないか。それは貴様も知っていることだろう」

「知っていればそれで納得できるって解釈は、いかにもあんなららしい話だ」

皮肉が別体の口元へいびつな笑みを貼り付けた。

見て取りシャツフルは視線をそらす。アゴ先で、プラットボードを抱える部下を指示した。

「違いは何だ？」

そうして目じりで別体へ問う。

「同じだと、あなたが勘違いしているだけだろ」

突き返す別体の口調に変わりはない。

「つまらんな」

「所詮、あんたらが調節できるのは、ツマミだけってことなんだよ。その中身までもを自由にできると思ったら大間違いなのさ」

とたんミシリ、音を立てたのはシャツフルの眉間だ。

「わたしへ説教か？ 貴様、よほど行く末を短くまとめたらしいな」

「さて、それこそあんならの自由になるかな？」

固定された腕で無理から別体は肩をすくめる。

「一人前の口を……」

言いかげ言葉をシャツフルは断ち切った。大きく息を吸い込み自らを落ち着ける。会話から主導権を取り戻すべく、改めその口を開いた。

『ひとつひとつの細胞が寄り集まり貴様の体が構成されているように、世界を構成する種族に個々から大なり小なり起きる拒絶反応を取り除き、新たな肉体を組み上げたうえで我々は、貴様が一人前の口をきいたよにひとつの意思、志向性、命とやらを世界へ吹き込みなおすのだ。無論、連邦はそれらの存在を公式に認めてはいない。なぜなら、いまだ定義できないもののために政府が動くことなど出来はしないからだ。だが、それは我々の思うように吹き込めた時、初めて解き明かされるものとなる。そしてそれが普遍的な既知宇宙の安定につながる限り、貴様が何をどうほざこうとプロジェクトに変更はあり得ない。しかも貴様はそのプロジェクトに従事すべく個体だ。もとより貴様は批判する立場にない。よく覚えておけ』
それこそ主要二十三種と雑種の間、理解を拒んでそびえ続ける壁だ。

いや、溝とでもいうべきか。

突き当たって飛び越えられず、そこに沈黙は訪れる。

しかしながら押しつけ、別体は切り出していた。

『世界は……』

口ごもる。

おそらく続く言葉が、取るに足りないものだと分かっているせいだ。知って耳をそばだてるシャツフルは、サディスティックな思いに駆られていた。思いつばだろうと別体は、ついに途切れた言葉の続きを絞り出す。

『……あんたらのペットじゃないぜ』

それを待っていたと思えばこそだ。ニヤリ、シャツフルは笑んでいた。

『まさか。それは貴様が世界へ自身を投影しているだけに過ぎん。貴様は自分のことをそう捕らえ、感情移入しているだけだ。貴様が

哀れんでいるのは世界ではない。自分自身だ。住みよい環境を整えることなど生き物として自然な欲求ではないか。わたしに当たるのはお門違いと言うものだぞ』

勝ち誇ったように弱味へと毒を吐く。

と、その顔は思い出したように間延びした。

『なぜだ？』

シャツフルは素っ頓狂と声を上げる。

『なぜ始末しなかった？』

別体との距離を詰めなおしていった。

前に置いて何のことが、と別体は瞬きを繰り返している。省いた主語を口にするこなく、シャツフルはただ浮かんだままを浴びせかけ続けた。

『違うか？ 頭部さえ吹き飛ばせばたとえハブAⅠが動いたとしても、この計画は白紙に戻ったも同然だった』

そうして別体の答えを待った。いや待たずとも閃くものに、やがて唇の端をめくり上げてゆく。これ見よがしの笑みをそこに作り上げていった。

『なるほど。つまり同類、相憐れむか？ これは恐れ入った』

様子を睨む別体に言葉はない。

訣別して、シャツフルは身をひるがえした。背中越し、分隊員へ拘束の合図を送る。見て取った分隊員がさかさず進み出、再びショットガンの銃口を別体へと突きつけなおした。遅れを取り戻すべく急ぎ足で、外へ向かいその体を押し出す。見送りかけてシャツフルは、その後ろ姿へ言葉を投げていた。

『戻ればまず、クレツシエへの面通しがあるぞ。わたしと違って相手はエブランチルだからな。覚悟しておけ』

何事かを言いたげに別体が、扉を前に踏みとどまる。だが許さぬ分隊員と銃口に、今度こそ小部屋の外へと押し出されていた。

『行くぞ』

遠ざかる足音を確認してシャツフルもまた、部下、トパールを促し

足を繰り出す。

『何か質問は？』

扉の向こうへ身をかがめ確認した。

『いえ、わたしは軍医の指示に従うのみですから』

『上出来だ。外へ、出るぞ』

通路には残存物そのものと、先に出て行った者らの足音がこだましている。

そして、いまだ焼けるような痛みを残すアルトの頬を、乾いた風はなで渡ってゆく。背中に固定された両手がもどかしいほど『カウンスラー』の日差しは強烈だった。堪え、降り注ぐ光に眉を寄せる。慣れればやがてネオンの姿を、場違いな外套に身を包んだ極Yの間に見つけていた。

恐らく分隊員たちはミラー効果を有効にして、その脇を固めているのだろう。気づけばアルトの傍らから銃口を突きつけているはずの分隊員もまた、姿を消している。

『そのまま直進しろ』

声だけが響き、ネオンたちとの合流を促した。

裂いて、砂煙を上げながら、間へ飛び込んだのはバンだ。ここへ着陸できなかつた巡航艇からの迎えらしい。外套を翻した極Yが中へ吸い込まれ、分隊員に頭を押さえ込まれたネオンもまたぎこちなく姿を消す。

見据えながらアルトはそっと確かめていた。極Yがシャッフルたちへ自分を突き出したその時だ。ベルトへ差し込まれたスタンエアの感触を、服地の上からそっと、なぞる。

『で？　このようなものでどうだ？』

ライオンは振り返った。

『っだあ？　こんな子供だまして通用するのかよ』

不満げなスラーもその背で口を尖らせている。

『だってぼく、まだ子供なんだもん！』

なら手を休めたデミがスラーへと顔を上げた。その床へ投げ出された両足の間には、ホロスクリーンをディスプレイ代わりに立ち上げたカードパソコンが置かれている。それらやり取りに挟まれサスはといえば、催促されたとおりライオンをしげしげ眺め回していた。顔色は、先ほど取った仮眠のせいですっかり元通りだ。

『いや、こう、その、なんか違うの』

小首をかしげ鼻溜を揺らす。

『なら、こうだったか？』

煮え切らないサスを前に、ライオンは確かめる。やおらぼんやりその顔は曇り、再びすぐさまアルトのそれへ輪郭を変えていった。

『うーむう』

唸るサスが納得する様子はない。アゴをさすり、もったいぶるかのように鼻溜を振る。

『なんじゃ、ちと……、二枚目すぎんかの？』

『土台が良いのだ。仕方なかるう』

しれっと返すライオンには迷いはない。

そこへスラーがまたもや割り込む。

『どう見ても、やっぱりこいつは安っぱかねーか』

思案、尽きないそのいでたちは、臨時収容船のホグスと同じグレイの軍服だ。様子にサスはライオンから視線を逸らすと、そんなスラーの全身もまた見回していった。

『仕方あるまい。さすがにホンモノの軍服を調達するには時間がなさ過ぎるんじゃない。ウチにあったのはそのレプリカだけなの。まあ、お前さんは主要二十三種のエプランチルじゃ。そこで何とかカバーしてくれんかの』

『命がけで学芸会かよ』

了解しているとはいえ、心もとないことこのうえない。ならずかさず相手の手を入れモディーも隣で伸びあがった。

『社長、お似合いでやんす！』

瞬間、振り下ろされる平手。強烈なその一撃にモディーはそこへうづくまってゆく。

『しゃ……、しゃちよお……』

と、絶妙なタイミングで姿を現したのは、トラだ。ここ砂漠港レインタルドックの一角、鎮座するスラーの霊柩船後部ハッチから、シワだらけの顔をのぞかせる。どつき漫才を繰り返すスラーとモディーへ声を張った。

『おおい！ 本当にガスは抜き終わったんだろっな！』

『くだいな、テラタン。ちゃんと冷却ガスは開放した。あんたらを氷付けにするつもりはねー』

振り返ってスラーは怒鳴り返し、猛然と霊柩船へ足を繰り出してゆく。

ならそれもまた在庫として店に余っていたものだった。見送りサスはライオンへ、アルトが好んで発注する作業着を手渡した。

『これでよかるう』

受け取りライオンは早速、腕を通してゆく。否や、その口を開いた。

『冗談。ボイスメッセンジャーに俺の代役が務まるかっての』

声はまさにアルトのそれだ。

『ほー！』

サスは目を丸くし、ライオンは、いやアルトはこっも続けてみせる。

『ただし俺は棺桶に入ったきりだ。話すつもりはないぜ。わかってんのか、じいさん？ ……で、どんなものだ、ご老体？』
『完璧じゃ』

愛嬌一杯、ウインクして返すサスはご満悦だ。見て取りライオンはアルトを真似ていからせていた肩を落としていった。

『段取り通りなら、もぐりこんだその後は顔を変えて霊柩船で待機と言っことになっているが……』

新たな不安に言葉を濁らせる。

『いや、十分じゃ。恩に着る』

汲み取るサスはきつぱり鼻溜を振ってみせた。ならその足元からデミの声は吹き上がってくる。

『出来た！』

様子はまるでプラモデルの一つも完成させたような具合だ。そのまたぐらではちょうどと、一連の光学バーコードがホログラムディスプレイより排出されているところだった。待ちきれず手を添えすくい上げたデミは、サスとライオンの間に立ち上がる。

『えっと、コレ、葬儀社の新しいIDだよ！ 今からこの船はスライ葬儀社の霊柩船じゃなくて、フェルマータ葬儀社の船ね。で、おじいちゃんとはくはその社員。こっちが、その腕章につけるID』
つながっていた光学バーコードを千切ってサスへ、手渡す。

『一応、どれも遅効性のウイルスを仕込んでおいたから、認識されても時間がたてば記録は消去されるようにしてるよ。けど急いで作ったから最初、ちゃんと認識してもらえるかどうかが一番の不安なんだけれど……』

『ま、その時はその時じゃの』

受け取ってサスはあっけらかんと鼻溜を振り、左の腕に通していた腕章へ光学バーコードを滑り込ませた。つまるところその姿は、これからの役割に合わせて急遽あつらえた喪服にも似たダークなツナギだ。デミもしっかり、同様のツナギに身を包むと自らの腕章へ光学バーコードを流し込んでいった。

『本当に大丈夫なのか？』

様子を眺めるライオンが獣面へと顔を戻してゆく。

『トラもおる。お前さんは無理せず、入艦記録を抹消したスラーと霊枢船に隠れておればよい』

『しかし……』

『じゃあぼく、スラーおいちゃんにID渡して、船の分、書き換えてくるね』

腕章に光学バーコードが固定されたことを確認したデミが、ふたりの足元から駆け出してゆく。

『まかせたぞ。デミ』

サスは笑顔で送り出し、再びライオンと向かい合った。

『その心遣いは覚えておこう。何はともあれ、まずあの臨時収容船にF7とやらが実在しておらんと話にならないの。経由して転送されておるのだから十中八九は間違いない、と睨んではおるが、なにせデータ上での話じゃ。コトが始まるとするなら、まあ、確認してからのことじゃな』

ならライオンの目は動いて、デミとの距離を確認する。十分だと測ったところで瞳もろとも声もまた絞ってみせた。

『ご老体、デミがついてゆくと言っておるのだぞ』

だがサスに同調する素振りはない。

『わかつとる。言ったところで聞くものでもあるまい。それはわしが一番よく知っておる』

笑みさえたたえてライオンへ深くうなずき返す。

『大丈夫じゃ。デミを危険な目にあわせるつもりはない。願わくば、デミにはわしの店をこれからも盛り上げてもらいたいからの』

一息つくくと、その目を宙へと持ち上げていった。

『厄介ごとは遅かれ早かれ、かいくぐらんとやってはいけん商売じゃ。それもわしがおるうちにこなしておく方がよかるうて。ま、そこにアルトもおれば、ずいぶん助かるというものじゃがな』

果てない未来をのぞんでたわませる。閉じて夢想し、開いてサス

はこうもつけ加え鼻溜を振った。

『などと、あやつが続けたいというかどうかは、直接、聞いてみる
ことには分らんことじゃ。そのためにも行かねばなるまいて』

にま、と繰り出された笑みに向かうところ敵はない。見せつけら
てライオンは、ただ肩をすくめて返していた。

などとその耳へは先ほどから、納棺スペースで繰り返されている
トラとスラーのやり取りが響いている。いや、聞こえて仕方ないほ
どの大声は、のべつまくなしと続くケンカのせいだった。それもこ
れもスラーがトラの秘密を暴いて以来だ。そのうちモディーとトリ
オでコントでも始めそうなのだから、ある意味、息だけは合ってい
た。

そんなやりとりも一段落したあたりで納棺スペースからチタン製
の棺は、敷かれたレールの上をふたりに押されて降りてくる。大き
さは縦が二メートル強。横も一メートル余りか。特大サイズだ。

『使いたかあないが、F7ってやつの位置を探るためには必要にな
るだろうからな。パラシエント！ 中を改めておいてくれ』

スラーが呼びかける。

『わかった。今、行く！』

答えライオンが、サスへ目配せを送った。合図にサスも、自船の
コクピットへ体を傾ける。交差すればサスの手が、ねぎらうように
ライオンの足を叩いてみせた。平手を食らっていたモディーも頭を
さすりつつ、ようやくそこから腰を上げる。

『モディーも手伝うでやんす』

右へ左へよろめきながらサスを追いかけた。

つまり彼らの計画とは、こうなのだ。

揺れた、などと言う言葉では生易しい。

たたき起こされ目を覚ます。

振動は船が格納庫の輪留めに乗り上げた衝撃によるもので、船底に近いせいだろう。衝撃が伝わりると同時に巨大な金属のぶつかり合う音もまた重苦しく耳に届いていた。

どうやら到着したらしい、と思う。

だがぴくりともしない腕は背後に固定されたままだ。見回しアルトは、体を揺すった。狭い仮死強制ポッド内、折り曲げることすらままならないヒザ頭に何かは当たり目を凝らす。それが何なのか気づくまで、しばらく。どうやら連邦は『F7』までの道程、仮死強制のミストをケチってくれたらしい。同じポットにネオンもまた、向い合せと放り込まれていた。

そんなネオンはまだ眠っている。いや仮死状態のまま、といったほうが正確だろう。同じ濃度のミストに浸されたせいで体重差分、状態が持続している様子だった。

おかげで身動きの取りづらさに輪はかかる。自然、舌打ちはもれ、おしてその中、取り急ぎスタンエアを確かめた。さすがの連邦も船賊がこんな置き土産を残してゆくなど考えてはいなかったらしい。指は触れ、曲がらない腕と体で四苦八苦、ベルトの間へしっかり押し込みなおす。

無論、振り回してここがどうにかなるような場所でないことは百も承知だ。だが、その時が訪れたならば『アズウェル』の続きを再開する必要がある、そのためにも気付かれてはならないと思う。それはネオンにさえも、だった。なら待ち構える展開は心もとなさも総出で、とたんアルトを脅しにかかる。

相憐れむ。

追い討ちをかけ、これみよがしとシャツフルの言葉がまた脳裏を過っていった。

あの時、すぐにも言い返すことができなかった自分を齒がゆく思い出す。だとして口ごもったのは何も凶星だったからではなかった。彼らは間違っている。だが違つと、否定できるだけの、分らせるだけの言葉が見つけれないだけだった。

そもそも理解しあえぬ原因もそこにある。見知らぬ色をどれほど多くの言葉で語ったところで見えやしないように、伝えようとすればするほどすれ違い、分かり合えぬ事実だけがあらわとなる虚しさは、聞き入れようとしない相手だからこそ想像するに容易い。でないなら彼らが何恐れることなくプロジェクトの正当性を口にするなど出来るはずがなかった。

彼らはその実を知らない。

結局のところ、どこでもかまわなかった目的地を地球に固定したのも、見下ろすこの頭を即座に吹き飛ばさなかったことも、そこに帰結している。自身にとって、いや、おそらく誰にとってもそれは残しておきたく、有しておきたい領域で間違いなかった。つまり感情移入しているというのなら確かに、それも然りだ。だが思うままに行かない世界へ苛立ち、不安を覚えている彼らもまた違つ意味では十分世界へ感情移入していることになる。

哀れんでいるのではない。

結論だけは、はつきりしていた。

大事なだけだ。

アルトは思う。

だからしてその領域を今でも、うるたえるほど守っておきたいと感じていた。はき違えた彼らの望みは阻止すべきだと、自らの事がごとく身につまされる。

すぐ真下では乗り上げた輪留めに取り付けられたクランプが船底を挟み込み、寒気のするような音を響かせている。最後、ふるいにかけるかのごとく横揺れは襲い、クランプの音はやんで、船の駆動

音が完全に止んだ。

静けさが、つかの間の間の休息が終わったことを告げている。

聞こえたようにネオンが息を吹き返した。膨れた背中がわずかアルトの視界へ入り、息が喉元へ吹きかけられる。うつむいていた頭は、そうしてやがて持ち上げられていった。

「だッ」

おかげで食らうアッパー。

「いったぁ……」

ぶつけたネオンの声もまた弱々しく聞こえてくる。

「何、アルト？ ど、どうなってるの。何、やだ」

ようやく気付いた近さに驚くと、今度は距離をとろうと思いついた。この狭い空間でその身を丸めた。立て続け、アルトの股間へそんなネオンのヒザ蹴りは飛ぶ。

「ぐぁ」

単純に絶句していた。

「お、まえッ……」

「ご、ごめんっ！」

「もう少し、回り、見る、よッ」

「だって見ようと思ったたら。予備麻酔の時は別々だったじゃない。あたしたち」

「っそ、連邦の奴ら、ガスごとき、けちり、やがって」

単価が違うことは日を見るより明らかだ。

「ひどい、まだ縛られたままだし」

ネオンも違う意味でボヤク。可動範囲を探って芋虫のように動いてみせた。

「もう肩が限界よ」

「ああ。荷物扱いは、いただけないってこつたな」

「あら、やっとわかってもらえた？ カーゴに吊るされたあたしの気持ち？」

切り返してネオンは投げるが不敵な響きは続かない。

「それより今、どこ？ あたしたち、これからどうなるの？」

無論、問うネオンが気にしていることは知れている

「おとなしく寝かしつけられている間に、ついたらしいな。F7へ」
だからして少し的の外れた答えを返していた。

「あなたの言うとおりだったかも。聞かなきゃよかった。……どうする、つもり？」

だというのにネオンは単刀直入と問いたです。

「奴らに渡すくらいなら……。あなたはそこでやめたけど、そのつもりなんですよ？ そのつもりであたしを『フェイオン』へ呼んだんでしょ？ それともまだどこか段取りが食い違ってる？」

言う顔がどんな表情なのか、近すぎて見ることにそかなわれない。

「だからって覚悟なんて決まらないけど……」

一息のんだその先が、詰まった距離以上アルトへ押し迫る。

「すぐ始まるの？」

つまり、殺すのかと問いかけていた。

「そんなこと」

言いかけてアルトは軌道修正するように声のトーンを上げる。

「そんなこと、分かるかよ。こちとら同じだ。両手とも後ろへ回ってちやムリな話さ」

聞いたネオンが真向かいで、ひとつクスリと笑っていた。

「それってつまり、お手上げってこと？ 下がったきりなのにね」
なかなかうまい言い回しだと、ご満悦の様子らしい。

「笑いこつちやない」

「今のうちだもの」

口調には凄味がある。

「かも知れねーが……」

押されてアルトこそ口ごもっていた。

「理由は何？ あたしはどうして殺されなきゃならないの？ 覚えてないけれど、それほどヒドイことしてたのなら、今のうちに謝っておきたい」

だがそんな事実こそ欠片もない。

「大歓迎してる奴らだっている」

「出迎えご苦労、って具合ではあるけれど」

「言ってやれよ」

「どうしてかな。実感がないの」

問いかけは、むしろ自分へ投げかけるようでもあった。

『あなたがそんなことするように思えないし、こうして普通に話してる。きつとどこかで助けしてくれると思ってるみたい。おかしな話』

そんな混乱に、声は疲れをにじませる。

「まだ眠る時間、少しくらいあるかな。仮死じゃなくて、眠りたい。そうしたらもう少しちゃんと怖くなれるかも。あなたを蹴飛ばして逃げ出せるようになるかも」

「好きにしろよ」

押しとどめる権利もなければ、ましてや答えられる立場でもないことだけは確かだった。

「でも、なんか臭う。服、ちゃんと着替えた？」

突き離して抗議の声を浴びせられる。

「そんなヒマあったか」

「寝てる間に、ヘンなことしないでね」

「この状態でナニをどうやれってんだ」

と突如、外は騒がしくなっていた。不躰な足音が複数、ポッドへ近づいてくる。立ち止まったと同時に空気の入り込む鋭い音はし、ポッドのロックは解除されていた。

まどろみかけていたネオンに緊張が舞い戻るのを、アルトは肌で感じ取る。様子に何遠慮するそぶりもなく、頭上でポッドは開かれていった。

目の前からネオンの体が吊り上げられて行く。そうして開けたアルトの視界へも、グローブをはめた無骨な分隊員の手はもぐりこんできていた。胸倉を掴み、ネオン同様、力づくで仮死ポッドから引きずり出してゆく。

すでに巡航船の後部ハッチは開かれていた。なだらかなスロープが格納庫とここカーゴをつなぎ、格納庫からの光は逆光となってそんなカーゴ内へソリッドな影を落としてもいる。『アーツェ』ならばどこへ行っても常備されている防砂設備がなかったせいだ。おかげで薄っすら積もった砂塵は浮き上がるように白く照らし出されると、くりぬいて無数に散らばる足跡が、先に船を降りた極Yたちの気配を残していた。証拠に、あの景気よくも騒々しい動話の気配はもうどこにも感じ取れない。

と、立ち上がったアルトの後ろ手を、変わらずフル装備の分隊員が無造作と押し出す。粗暴な扱いに腹立ち紛れ、アルトは分隊員へ身をよじった。

『長い視察だったようですね、中尉』

耳へ、声は飛び込んでくる。

『しばらく見ぬうちに、なんと小汚い』

懐かしくも知ったそれは続けさま、アルトへも投げかけられていた。

捻じっていた背を、アルトは声へほどいてゆく。そこに、突き刺すような足取りで近づいてくる影はあった。それだけで白衣へ沁み込んだ独特の薬品の臭いさえ蘇ってくるのだから記憶というやつはおぞましい。着込み、神経質に吊り上がった目もかつてのままだ。ならそれは珍しくも有り難い光景に違いなく、クレッシェはここカーゴへと姿を現していた。

見つけたシャツフルが、すぐさまアルトの死角より飛び出してゆく。

『これは！　このような場所にまでご足労頂き恐縮です。つきましては詳細の報告と共に、後ほど彼らの面通しをかねてこちらから参るつもりでおつたのですが』

そこにはアルトにも聞いて取れるほどの言い訳がまじさがあった。おかげでまくし立てればまくし立てるほど、これがシャツフルのスタンドプレーであることをアルトにさえ露呈してゆく。事実を、エブランドルであるクレツシエが気づかぬハズなどない。むしろそれ以上を読み取ると、汲んでねぎらう真似こそ嫌ってみせた。

『結構。あなたをアーツエへ行かせたのはわたくしです。あなたが自らの後ろめたさを気に病むことはありません』

一足飛びに結論だけを言い放つた。

突きつけられてシャツフルはただ黙した。

従えクレツシエは突き刺すようだった歩みを止める。その目はアルトをとらえ、言葉もなくそこから剥ぐと並ぶネオンへ向けなおした。

『わたしが造つたモノなどとは認めたくもない』

これでもかと言いつつ。

思わずそんなネオンを盗み見るが、覚えている限り初めて会うことになるクレツシエを何者かとうがるネオンになんら、素振りはない。

間へと、多少なりとも挽回の余地を狙いシャツフルは、再び身をもぐりこませていた。

『滅菌作業はこれから……』

『ウイルスカーテンで事足りるような汚れなら、あえて口外しません』

すぐさま指摘される見当はずれ。

確かにクレツシエのまとうコーティングの利いた白衣は、周囲の光を照り返しこそすれ、ウイルスの付着を感知してにじむはずのシ

ミをひとつたりとも浮かべていない。潔癖はラボに勤めるものなら最重要視される資質であり、比べて明らかに荒んだアルトたちの様子に先回りしたシャツフルの行動は、まったくもって裏目に出ている。

『これはとんだ取り違えを』

まさに手足をもがれ、シャツフルは引き下がりがける。

『これよりプロジェクトを再開します』

それこそ早い、とクレツシエが激を飛ばした。

『平行して極Yの塩基付加を行います、現体制に問題があれば、中尉、現地点で報告を願います』

『も、問題はハブAIの自閉のみです』

シャツフルが慌てて返す。狼狽ぶりを示し、その顔をひとなでした。知ったことかとクレツシエの口調は、なおさら早まる。

『分かりました。中尉、あなたが思い通りにできるのはここまでです。あなたはアルトを滅菌ゲルへ。その後、わたしの研究室へ来てください。いえ、あなたはわたしに話があるハズです。そこでゆっくり聞かせていただきたいと考えています』

それは十分聞き取れる造語会話だ。とたんネオンがアルトへ振り返ってみせた。言ったとおりが始まるのか、それともさらに予測不能の事態へ陥るのか、乞うてすがる瞳で、これまでにないほどの不安を噴出させる。

だがアルトに答えられることなど何もない。

向かいでは手厳しいクレツシエの言いように、皮肉な笑みを浮かべたシャツフルが身を翻していた。

睨みアルトは唇を噛む。

ここまでくれば、遅かれ早かれそれは知れることなのだ。

案の定、歩み寄ったシャツフルもまた、クレツシエの指示通り滅菌ゲルへ連れ出すべくその体へと腕を伸ばした。迷うことなくネオンを掴む。

「え？」

ハッチの外へ歩き出せば、よもや自分だと思ってもいなかったネオンの声は素っ頓狂だ。

「うそ。ちよっと、わたしはっ………！ 違っつてば、何、どーなっ
てんのっ？」

動転して繰り返す。その声は見送るアルトの耳に刺さった。

「痛い。これ、違っつてばっ！ でしょっ？ アルトっ、あたしは
ネオンだっつて、言っつてやっつてよっ！」

たまらずアルトも叫び返す。

「決めたんだろっつがッ。忘れた時とはさよならするって。ボルシチ
食いながら俺は聞いたぞッ。だっつたらお前はこれからもネオンだッ。
それ以外、信じるなッ」

「言っつてる意味が、わかんない……」

そこでネオンの声は途切れていた。シャツフルに押し込まれるが
まま、くぐった壁際のウィルスカーテン奥へ姿を消す。とたん力尽
きたような沈黙が、後味の悪さを引きつれカーゴ内で膨れ上がった。
かき乱して互いの距離を詰めたのは、クレツシエだ。

白衣が縮まる距離に比例して、見えない雑菌を感知したその表面
をまだらに変えてゆく。あっという間に七色のマール模様はクレ
ツシエの胸元に広がると、無表情すぎた白衣に個性さえを与えてみ
せた。それは同時にまとうクレツシエの表情さえも一変させると、
毒々しくも禍々しい色合いに縁取られたその顔を、アルトの中で身
もすくむほどの怪物と重なり合わせる。その怪物は決して荒々しさを
露呈することのない穏やかな瞳で、静かにアルトへこう語ってみ
せた。

「あなたがアルトなどと？ どこでどう入れ替わればそんなことに
？」

この感情が伝わらぬハズもない。ならばとアルトもまた言っつてや
る。

「イルサリが、とうとうしくじったのかもしれない。記憶をマーク
しても、それだけは覚えていたらしくてね。気付けばそれが俺の、

名前になっていた』

クレツシエの上に広がるシミは、もう白衣の肩や袖口までをも覆っていた。極彩色を巧みに絡ませ、うごめき、目にも鮮やかなサイケを競い合っている。

『取り繕うことのない回答は大歓迎です』

揺らしてクレツシエは目の前で歩みを止めた。口調をひと思いと厳しいものへすり替える。

『ですが、イルサリはこれまで一度もしくじったことなどはありません。それはあなたが一番よく知っているハズです。それほどまでに気がかりならば、背のモノはお捨てなさい』

やはりお見通しだったらしい。

『使い損ねたまでさ』

めいっばいに茶化してアルトは返して言う。

おかげでようやく気づけた様子だ。分隊員が、突きつけられた自らの失態に慌てふためきアルトの腰周りをまさぐった。あっけなくも発見されたスタンエアは、そんな分隊員の手によって装填済みエアを開放される。白衣のポケットからガーゼを取り出したクレツシエへと手渡されていた。

受け取ったクレツシエは、じつにつまらなさそうだ。スタンエアを一瞥し、アルトへその顔を向けなおす。

『なるほど。ならばここでもう一度、あなたと共に確認しておかなければならないことがあるようですね』

受け取ったばかりのスタンエアを持ち上げた。

『よいですか？ 二度と忘れぬよう、その頭へ叩き込んでおきなさい』

アルトの額へその銃口を押し付ける。

『あなたはラボ従事者としてヒト胚から抽出された連邦所有合成塩基の有機体。当ラボにてわたしが合成した塩基ナンバー11 セフポド・キシム・プロキセチルです。我々のれっきとした所有物であることを、少しは自覚なさい。大事なデータを連れ出すどころか盾

にとって脅そうなどと、身の程知らずにもほどがある。確かに、あなたはその行動力と自発性は、同様に合成、生成され続けた有機体の中でも特に高く評価するに値します。ですがそれが今後も裏目に出続けるというのなら、空砲ではなく今度こそ実弾を打ち込まなければならなくなる』

同時に引かれるトリガー。

覇気のない音がアルトの、いや、セフポドと呼ばれたその額から漏れ出した。

否応なく心臓は跳ね上がり、アルトはしばし息をのむ。

見定めクレツシエは腕を下ろした。

『そうならぬことを願っていますよ、セフ』

やたらに甘い声だ。久方ぶりの名と共に、それはやけにアルトの耳に絡んで障る。

『あなたはそうするに口惜しいほどの出来栄えでなのです。二度、同じように仕上がるか、わたしにも自信はない』

ぬけぬけと言い放つ様こそが怪物だった。

『それは光栄なことだ』

それが精一杯の抵抗だとしてクレツシエには十分に伝わったのだらう。

『詳細は問い詰めません』

聞き流してうごめくサイケな白衣を翻した。

『さて、あなたにこれ以上無駄な時間を与える余裕はありません。

すぐにも自身がラボへ与えた損失の埋め合わせにかかっていただけです』

つまりはシャツフルへ告げたとおり、プロジェクトの再開へ着手しろということらしい。

『ハブAIの自閉は解かない』

矢継ぎ早や、アルトは言っていた。それはクレツシエの一足飛びな話しぶりを真似たつもりだ。だがクレツシエは目を丸くすると笑い出しそうに天を仰いでみせる。

『あなたは自分の言っていることを分かっているのですか？』
否や表情は一変し、心底冷えきった視線でアルトを射抜いた。

『この、愚か者！』
自らに向けられたわけでもないというのに、アルトの背後で食らった分隊員が小さく跳ねる。

『あなたが拒むと言うのなら、もとよりアルトは量産体勢に入る予定のモノでした。リスクは背負うもののマスターを潰して解析を進めるまでです。どうです？ まだ先を言わねばなりませんか？』

持て余していたスタンエアを、そんな分隊員へ押し付けるようにクレツシエは突き返す。手を乱暴に、極彩色の白衣のポケットへ突っ込んだ。

『いいですか、あなたが踊らされているものを、今ここではっきりさせておきましょう』

などと放たれる正論は、今さら聞くまでもないものだ。だからこそクレツシエはあえて見せつけ、はつきりさせようとしている。

『それは同郷と同胞。その野蛮で泥臭い幻想と誤解に他なりません。もちろん、あなたにそれはない。あなたはそのようなこだわりが生み出す軋轢、それを解消するために生成されたラボ従事者であり、ラボそのものが今後の世界のあり方のモデルグループなのです。少しは頭を冷やしなさい。あなたがあてられて何になるというのです。今この状況こそ、わたくしの最も不愉快とする現象だ』

耐えられないと言わんばかり、顔をそむけた。それでもどうにか噛み潰し、クレツシエは横目にアルトをとらえなおす。

『いいえ、だからこそあなたはハブA Iの自閉を解かなければならないハズです。丸見えなのですよ。たとえ機会があったとしても、あなたがアルトへスタンエアを使うようなことはしない』

試すように再度、その名を呼んでみせた。

『違いますか？ セフ？ そこには、あなたがこだわってやまないものがある』

『真つ直ぐ歩け』

光線の色が異なるウィルスカーテンをさらにもう一枚、潜り抜ける。焼き付けられるようなジリリとした感触が襲ったかと思うと、どこからともなく焦げたような匂いは立ち上った。

白衣を着こんだ『エブランチル』の前から立ち去つてすぐ、ネオンの腕を引く青白い顔の『バナル』は態度を一変させている。卑屈なまでにかしこまっていた自らへの怒りを噴出させると、容赦なくそれをネオンへぶつけていた。その力には逆らえない。自分がネオンであることを訴え続けることにも疲れ果ててネオンは、ただ成すがままに振り回されると通路に行く。

遮る者は現れない。

恐らくこれが最後だろう。床から天井へ照射されたウィルスカーテンは現れ、潜り抜けたそこに扉は見えていた。いや、隔壁ともとれるそれは頑強な造りの壁だ。表面には数種類の言語でもってして文字は記されている。

辿り、ネオンは視線を走らせた。

拾い上げることができた文字は「F7」だ。

それは自分がかつていたであろう場所の名前であり、連れ戻しに彼らが現れ、そうはさせないとアルトを言わしめた場所の名前だった。ネオンの胸がひとつ大きく脈打つ。身に覚えのないタブーが決めようのない覚悟を求め、ネオンの中をとたん駆け巡っていった。

知る由もなく『バナル』は慣れた手つきで胸元の階級章を外している。扉の脇に開かれたリーダーへかざした。音もなく読み取りは完了し、停電とは無縁の循環式光粒子ロックがプリズムを反射させる。遮られた循環粒子にロックは跳ね上がると、重いはずの扉はしかしながら滑るような動きで静かにスライドしていった。

独特の薬品臭が吹き出してくる。とたん喉の奥からこみ上げてくるのは条件反射にも似た不快感だ。それは深い深い部分、獣が炎を恐れるような原始的な恐怖としてネオンを襲うと、否応なくその場から後じさらせた。ワケもわからぬまますぐにも逃げ出したい衝動に駆られてネオンは身をひるがえす。

『ここまで来て、てこずらせるな！ この筐体が！』
その横面を叩きつけられる。

衝撃と頬を走る痺れに戦意の全ては削がれ、崩れるようにその場へうづくまっていた。それすら許さず『バナール』はネオンを『F7』の中へ引きずり込んでゆく。

と、どこからともなく聞こえてきたのは造語の話し声と、機械の吐き出す熱風の、遠く近くで駆動する音だ。重なり行き交う靴音もまた、そんなネオンの回りで慌ただしげと交錯した。

縮こまっていた胸元から、恐る恐ると辺りへ視線を這わせる。

目に、ハレーションを起こしたかと思うほど白く整然と仕切られた風景は、飛び込んでいた。遠近感が消えたようでネオンはただ目を瞬かせる。だが聞こえてくる数に見合ったモノ影こそ見て取れず、全ては左右に立ち塞がる部屋の向こうにいた。

『まさかクレッツシエが格納庫にまで出向くとは。わたしもヤキが回ったものだな』

その中を、一点を見据え『バナール』は歩き続ける。

『あたしを、どうするつもりなの？』

ネオンは残る力を振り絞ると問いかけた。造語に、驚き『バナール』は振り返る。見下ろす眉間をきつく狭め、また前へと向きなおってみせた。

『外をフラついているうちに造語を覚えたというわけか。まあ、しかるべき結果ではあるな。耳を良くしたのは我々だ』

求めているそれは答えではない。

『どうするつもりなの？』

止める歩みで『バナール』の気を引いた。

『止まるな、歩け！』

だが抜けんばかりに腕が引かれただけとなる。

『どれもこれも、一人前の口をきくようになりおつて。これが今後のリハーサルであるならば、記憶メーカーによるメンテナンスの頻度は想定回数より増やさねばならんようだな。となれば何よりハブAIの通常稼働が必至か』

『バナール』はまくし立て、苛立つままいまいましげとネオンを見下ろした。

『つまり貴様が知りたい、と思えるのも、このひと時までだというわけだ。ならば教えておいてやるうではないか』

言葉は意味ありげで、前で『バナール』は淀むことなく話し始める。

『我々はこれから貴様の量産体制に入る。何もラボとて貴様を失つて、ただあてどなく探し回っていただけではない。ダブルワン塩基はクレツシエのあのうんざりするような詳細な記憶に基づき、再合成された。元に筐体は規定数、生成済みとなっている。あとは試行錯誤を重ね組み上げた貴様の脳細胞マップを有機ダビング、イルサリを通して各筐体内に再形成させるだけだ。もちろん、そのいまいましい自我を調整したうえでな』

『きょうたい？ イルサリ？』

飲み込めぬネオンの口調はぎこちない。

『ここから連れ出される前の状態にリセットせねば、全くもって使い物にならない。疑問に不安を抱くことも、抵抗を試みて痛い目を見ることも、それまでの不自由というわけだ。次に目を覚ましたとき貴様は、その一切と無縁になる。ただし……』

とそこで『バナール』は足を止めた。通路突き当たり、この区画の最も奥に位置する手動の物理ロックへ手を掛ける。歯車のようなそれを片手で回し始めた。

『それはヤツがハブAIの自閉を解いた場合のみだ。拒否するようであれば……』

キリキリ音が鳴るたびに扉は壁面から浮き上がり、やがてガタリという音と共に手前へ落ちると開いた。天井から吊られたような扉を『バナール』は、ゆっくりスライドさせてゆく。奥から青白い光は漏れ出すと、呆然とするネオンの靴先へかかって照らし出した。ここに覚えはある。

それは彼方から降り注ぐ音と同じだ。

とたん確信は、ネオンの中にどっかと降った。

かまわず『バナール』は扉の中へ身を潜り込ませ、最後、一言をネオンへ浴びせる。

『貴様は物理解体され、二度と目覚めない』

聞き逃しそうになって咄嗟と顔を上げていた。その体を扉の向こうへ引き入れられる。空間はそこに漏れた光のまま青白く、薄ら暗いまま広がっていた。装飾は一切ない。ただ偏光アクリラ製の蒼い柱が奥まで延々並んでいる。何をそうまで支えているのか。果てが見えぬほどと、それはおびただしい数だった。他には誰も、何も、見えはしない。

『バナール』が後ろ手に扉を閉める。

立て続け、ネオンの腕の物理鍵を解いた。

それだけで気が抜けるほどにほっとしたなら『バナール』は、手前の柱の根元を荒々しく蹴り上げる。柱は破裂したかのように割れて観音扉を開き、開いたそこへゴミかとネオンを投げ入れた。空間は肩幅ちようどの広さで、頭をぶつけたネオンは顔を歪める。文句のひとつも口にしかけたその時、扉は目の前で閉じられていた。

視界が囲う柱の蒼、一色に塗り替えられる。出して、と両手をアクリラへ張りつける、陳列物でも眺めるかのような具合だ。『バナール』は中をのぞきこむだけで答えはしなかった。

と、ネオンの足元から水は染みだしてくる。

いや、滅菌ゲルだ。

すぐにも膝までかさを増し、腰を浸し、やがては喉までせり上がる。止まらず柱の中を満たしてゆけば、息を止めたネオンの頭を超

え満杯となった。なおさらネオンは柱を叩きつけ、堪え切れなくなり息を吐く。吐いて吸い込み、溺れたと錯覚し、しばしパニックを起こすと肺がゲルに浸され膨らむまで柱の中でのたうった。おさまったところで体は比重の高いゲルの中、ふわり浮き上がってネオンを支える。

見届けた『バナール』が柱の前から踵を返していた。恐らく格納庫で言っていたように、あの白衣の元へ向かうのだろう。

呼び止めネオンは柱を叩いた。声が出せないのだから、代わりにばかり鈍くこもった音を辺りへ響かせる。

しかし『バナール』は振り返らない。やがてその背は扉の向こうへ消え去っていった。

襲う無力感が、叩きつけていた拳を下ろさせる。

なおさら体がぶかり、柱の中で体は心地よく浮かび上がった。

静かだ。

それは時間が止まってしまったようで、ネオンの思考もまたそこからぴたり、進まなくなった。むしろ頭のどこかが拒否しているかのようにぼやけて膜を張ると、二度と目覚めない、言葉だけを回転させる。

ままに周囲へ頭をひねった。

そこに映りこむ自分を見つける。

おや、と首をかしげていた。

だがその自分は何も着ていない。

何かがおかしい。

しばし瞬く。

そして今、目に行っているソレは、映り込んだ自分の姿でないことに気づかされる。全く別の、もう一人の自分だ。入室者がいなくなつたことで室内照明が絞られると、今ならどの柱の中も透けて見えていた。まさか、と目をやった見える限り全てに、全ての柱に、裸の自分は収められている。

驚きのあまり、ネオンはひときわ大きく滅菌ゲルを吸い込んだ。

後ずさるがその余地はなく、勢いよく柱へ体をぶつける。拍子に響いた音は、ゴツンと鈍き、それまで静かに目を閉じていた全ての自分がやおら目を覚ましていった。隣でも向こうでも、次々瞳は開いてゆく。何事か、と不快を表すでもなく微笑むでもなく、同じ瞳で無数とネオンを見つめ返していった。

困まれ、ネオンは自分の中で砂のようなものがサラサラ、流れ落ちて行くのを感じ取る。そのまま溶けるように声もなく、大勢の中でたった一人だけ、まぶたを閉じていった。

そうして一人、振り返る。

気配などではない、それは確信だった。

靴音は聞こえている。

うるさすぎる部屋は苦手だと言ったはずなのに、いつまでたっても分かつてはもらえない。だからここへ逃げ込んだのだ。

案の定、ドアのスモークは解かれていた。寄りかかりのぞき込む顔は、いつもにも増してしかめっ面だ。しかしながらどんな表情だろうとその通りと、大正解。とらえてネオンは口を開く。

「……みつかっちゃった」

諭されても、叱られた記憶はなかった。それは入れ替わり立ち替わり、通り過ぎてゆく様々な顔ぶれの中でも目覚め、眠るときには必ず傍らにある顔だった。安堵すら覚えてネオンはアンプの上で座りなおす。今回も連れ出されるだけだと、ただ微笑んでお馴染みの展開を待ちつけた。

と、不意にその姿は消える。

期待を削がれたようで、ぶらぶら遊ばせていた両足の動きを止めていた。

なら影は舞い戻りドアは押し開ける。

なんだ、と思えば、背筋は得意げと伸び、ままに立ち上がりかけたその時、足元へ屈み込まれて目を瞬かせた。

その手には見慣れないモノがある。

そろえて床へ置くなり、ネオンのエアソールシューズは脱がされていった。

「たとえベッドルームでも自由行動の度が過ぎる」

「あたしのクツ」

追いやられ、酷い仕打ちだと口をすぼめる。代わりにネオンの足

へと、見慣れないそれはあてがわれていた。

「今日からはコイツでも履いてる。これでちょうどいい」

それはエアソールシューズとまるで正反対と、ひどく窮屈な履き心地だった。履いてまもなくつま先は痛み始め、立ち上がるなどともつてのほかとなる。試してよろけ、ネオンは再びアンプへ尻もちをついた。

「いやだよ」

早々に渋って返す。なにしろやたらかかると高いのだ。しかも不条理なまでに細く、それは爪先立ちよりたちが悪かった。しかし奪われたエアソールシューズは自由もろとも、すでにその手に匿われている。もう返してもらえそうにない。睨みつけ、ネオンは先ほどドア越し見た洗面以上のしかめっ面を作って返した。

「元に戻してよ、セフ」

「おとなしくしたらそのうち返してやるよ。アルト」

醒めるほどに白い上着からは、鼻について止まない薬品の匂いがしている。嫌なことはそれだけだ。それ以外、セフは嘘さえついたことがない。だからネオンは飲み込むことにする。けれど一人では動けそうにない。甘えるように両手を差し出した。応じてセフはその手を取る。立ち上がるうとするネオンを引き寄せ、両足をすく上げた。抱え上げられたネオンの胸から楽器は滑り落ちそうになり、押さえてネオンは白い上着の襟へしがみつく。薬品の匂いに混じってほんの少し、違う匂いはネオンの鼻をかすめていた。

温かな匂いだ。

吸い込んでそう思う。

ポッドは窮屈でたまらない。そして時にネオンを不快な迷路へ陥れる檻でしかなかった。冷たく固いその中で、いつからかネオンは疲れ果ててうんざりしている。

早く帰りたい。

願いは確かなものになっていた。

けれどそれがどこなのか、分からない。

ただこの匂いに手がかりを感じ取る。

格別に温かいのなら帰りたいと、くるまるままに身を沈めた。前に、泉は今日も広がる。

深く澄み切った水面は波ひとつ立てておらず、眺めて吸い寄せられるようにネオンは縁へと腰を下ろした。鏡のような湖面を覗き込めば、漂う静けさが疲れも恐れも、後に訪れるだろう不快さえもを消し去ってゆく。その心地よさに記憶に残る眠りの気配を感じ取っていた。拒む理由などどこにもない。応じてネオンは柔らかく、自らをほどいてゆく。ほどこながら静けさの底へ、深く深く沈んでいた。

瞳を閉じる。

ただそれだけで。

経てゆつくり、まぶたを開く。

あの浮遊感と匂いはまだ胸に指先に新しかった。

それどころかまるで地続きかと疑うほど、目覚めは穏やかだ。

「セフ……」

ここではそう呼び合っていた、ひどく曖昧で断片的な記憶。

思えば、押しのけ逃げなかった不思議な信頼感の正体を、今さらのように知らされる。そんな視界の端に、あの冴え渡る白はあった。思わず白衣かと目を凝らし、自分にかけられたシャツだと気づいてネオンは息を吐く。

いつしか体はベッドの上だ。

とたん思い越すのは数え切れないほどと並べられた己の姿で、あった浮遊感はとたん消え失せる。

貴様の量産体制に入る。

二度と目覚めることはない。

言い放った『バナル』の言葉を脳裏に蘇らせた。

共に撃ち込まれたものは恐怖以外の何ものでもなく、セフなら何

とかしてくれるはずだ、その姿を部屋に探した。やがて探しまわる姿は夢でなく、現実の残像としてこの部屋中を歩き回る。

ベッドの上から眺めてネオンは、果たしてどちらが現実なのか、いやどちらが失いつつある現実感なのか、区別がつかなくなっていた。

と、ネオンはネオンへ振り返る。

どちらもあたしじゃない。

そこで無邪気に笑ってみせる。

そうして開いた口が、頬が、揺れてふくれて彼女は飛び散った。

欠片はネオンを叩きつけ、浴びたネオンの世界をまるごと塗り替える。

「そう」

新たな世界でネオンは唇を震わせた。

そう、『バナル』が自分を選んだことに間違いはない。ここでは自分がアルトと呼ばれ、そのアルトはここでうんざりするほど時間と時間の狭間を行き来していた。そうして楽器を演奏するよう仕込まれ、大事にされたが相手にはされず、疲れ果てて心の底までを痺れ切らせている。

それが失い、探していた記憶だった。

ネオンが帰ろうとしていた場所だった。

ようやく得たというのに醒めた感覚は一切ない。トラの元でドサ周りを続けていた時に願っていたような充足感、これっぽちもわいてこなかった。ただ悲しくもわびしさばかりが募って、触れたネオンを追いかけるグロテスクな亡霊へとなりかわる。なって不安に不快に、恐怖と不満ばかりをネオンへ押しつけた。

帰りたい。

『F7』の扉をくぐったとき感じた嫌悪が、ネオンの中へ舞い戻る。憑りつかれたように起き上がって、その腕に違和感を覚え振り返った。そこに針は固定されている。いつからか宙に吊られた透明の薬剤からは、その針を通してネオンの中へ液体が流し込まれてい

た。得体の知れなさに、とたん肌へ泡は立つ。目じりを吊り上げ、ネオンは針へ手を掛けた。引き抜こうと力を込めるが皮膚は突っ張り針は抜けない。だとして痛みなど問題ではなかった。力任せと繰り返せば、腕へ赤く血は滲み始める。

さなかだ。

部屋の扉は開け放たれた。

慌たたい足音がネオンへ駆け寄り、肩を掴まれる。

「何してるッ？」

「触らないでっ！ はずすに決まってるでしょっ！」

「落ち着けッ」

針を筆記取るうとした手が取られていた。

「ただの電解質だ」

「離してっ！」

言っが信用できる道理こそない。いや、記憶がそう訴えていた。拒み暴れたなら吊られた薬剤が今にも土台ごと倒れそうに揺れ動く。たしなめようとしていた手はそこでネオンをベッドへ押さ込んだ。

「何すんのよっ」

「動くな。それ以上引っ張れば静脈に傷がつく」

「離してっ！」

言っうちにも薬剤の落下が止められる。

「いやだっ！」

自由な手で滅多打つネオンをもるともせず、針の根元に突き出ていた細いアンブルを親指で弾き折ると、破片を足元のダストボックスへ落とす。枕元のアルコール臭漂う代替綿花をつまんであてがつた。下から、針は静かに抜き取られる。おっつけ代替綿花でそのあとを拭ってみせた。無理に引っ張りできた痣だけが、ネオンの暴挙ぶりを示してそこに残る。

「バイオゲージは剥離剤がなければ……」

などと講釈こそ感情にそぐわない。

ネオンは手を振り上げる。

口上垂れるその頬めがけ、叩き付けた。

鋭くも乾いた音は空気を裂き、言葉も尻切れトンボにアルトがあらぬ方向を向いたままで目を細める。

いや、これはセフか？

素材は違うが、白い上着が夢と同じだ。

とたん記憶が記憶を食った。

もう、どちらだってかまわない。

「あたしに触らないでっ！ あたしは、あなたたちが好きに出来るモノじゃないっ！」

顔へネオンは吐きつける。それは自分でもいやというほど甲高い、ヒステリックな声だった。

食らったアルトは自らを落ち着けるべく、そこで大きく息を吐き出している。やがてゆっくりと、その顔をネオンへ向けなおしていった。

「分かってる。お前はネオンなんだから？」

そう、叱られた記憶はない。アルトは何より混乱していた事実をネオンへ言い聞かせる。

見据えたネオンの唇は、とたんミシリと音を立てて歪んだ。取り繕うなどもうできない。悲鳴にも似た声を上げ、思い切り泣いた。

引き裂かれるような思いはまさに、あのとき口にできなかった感情だ。いや、できぬよう矯正されていた全てで間違いない。ほどこされていけない今、それは溢れてネオンを急き立てた。

だが吐き出そうとして追いつくハズもない。
全ては嗚咽の合間からもれる叫びへ変わる。

今や血の気が失せていたはずの頬は、叩かれたアルトの、セフポドのそれより真っ赤となっていた。

「あたしは、もうイヤダよ……」

やがて枯れ果て身を震わせる。絞り出すその頬には、幾筋もの涙の跡が張り付いていた。

「……返してよ。わたしを、わたしに返してよ……」

訴え、感情になぶられるまま縮み上がった瞳でアルトをのぞき込む。

「わたしをウチへ、帰してよっ！……」

そうして掴んだものが宙だったとして、投げつけネオンは腕を振り下ろした。見えやしないにもかかわらず飛び行く何かは弱々しい弧を描き、アルトへ伸びる。それきりネオンは糸が切れたようにうつむき動かなくなった。シーツを弾く涙の音だけが、水を打ったような静けさの中、ひどく単調なテンポを刻み続ける。

ウィルスコーティングがどこかされていないなら、あの頃から嫌う薬品の匂いはしないはずだ。見つめてアルトは有り合わせだった白衣の袖から腕を抜く。何しろ着の身着のまま滅菌ゲルへ放り込まれたネオンの服はゲルまみれで破棄されていた。その白衣で、何も身につけていないネオンの肩を包みこむ。前を合わせ、乱れたシーツを整えなおした。

「時間はある。眠りたいだけ、眠ればいい」

自身の姿に言及しないネオンの混乱は、それほどまでにすさまじく、投げかけその身を横たえさせた。力尽きたように従うネオンはくるまれると、ただおとなしく目を閉じてゆく。

そこに夢の続きは広がっていた。

記憶に残る眠りが今もネオンを手招く。

ひどく疲れた今もまた、拒む道理などありはしなかった。

ゆらり、深淵へと身を預ける。

その傍らから足音は遠ざかっていこうとしていた。

「眠るまで……、ここにいて

ぼんやり、呼び止める。

返事が返されるまでは、しばらくあった。

「……それは、イルサリでお前の志向性を調整する時だ。今は必要ない」

ようやく声は聞こえてくる。

「あたし、見た」

まどろみの中にいる今なら、思い出してもそれほど怖く感じないと思えてならない。

「あの部屋に、たくさんのあたしが、いた……。みんなが、こつちを見てた」

消化し切れなかったあの時をやり直すように言葉を手繰り寄せていった。

「たくさん、造ったんだ……。でも、いらないよね。あんなに。あたしは一人で、じゅうぶんだよ。あなただって、そう思ってる。だからあたしを奴らに渡したくなかった」

まぶたを開けば、そこに広がる世界はまつ毛にたまった涙のせいであらゆるものが歪み、輪郭を失っている。

「この記憶を塞いでも……」

ただ足元から聞こえてくる声だけに耳を澄ました。

「塞いでも、演奏の方法を忘れなかったのは記憶じゃなく、機能としてお前の脳に組み込まれているからさ」

言うアルトの切り出し方は、独特だった。

「その話、眠るまで聞かせて。あたしはちゃんと覚えていない。ううん。覚えていられないあたしだった。けど今は違う。今のうちに全部知っておきたい。だってそれが、あたしなもの」

そう願うほど取り戻し始めた落ち着きは、どうやらアルトを観念させたようだ。

「しばらく気づけなかったな」

口調から、それまでであった力は抜け落ちている。

「ポッドに記されていたっていうお前の名前。NEONEの意味が」

ままに声は近づき、ネオンの足元でベッドをきしませた。

「11(ダブルワン)塩基。ONE・ONE。種族を識別するため、表記は造語じゃなかった。あの騒動の中、どこかで頭一文字、削り取られたんだ」

腰かけ前かがみとなれば、滲む視界に少しばかりアルトの髪は映り込む。見つけてネオンは安心したように、再びまぶたを閉じた。

「そう、足りないのさ。言葉だけじゃ。理解できるような意味だけじゃ。いや、そればかりじゃ多すぎるのかもしれない。生まれて白紙のその身へ刻む言語ってやつは、澱のように文化や風土や宗教的価値観の、帰属すべく故郷って場所のDNAだ。埋め込まれて活動を始めたなら、誰だって剥がしようになく身体の一部になる。しかも言語活動は意識と意思の存在証明だ。譲れば代わりなんて用意されていない唯一の出所を疑うパラドックスなんて、ありはしない。だがそこにこそ地域差や個人差、価値観の違いの根っこは潜んでいる。奴らはバラバラに埋め込まれたそいつを取り払いたいのさ」

と、声のトーンはそこで跳ね上がった。

「意識の底にある、言葉にくるまれた生来のナシヨナリズムを。帰属意識、故郷とも呼ばれるカテゴリーを。操作できる一様のものにすぐ替えたいのさ。果たそうとして創造した造語は船賊の出現で、中途半端な結果に終わった。ふまえてココを用意したはいいが……」

途切れた先に熱はこもる。それはネオンの耳へ張り付き、紛らせ

アルトは一息、吐いた。

「連邦は新たな方法としてアナログ楽器と極Yトニック、かつて唯一、既知宇宙を網羅した事象に目をつけている。過去、この二つは暴走したが、そいつをお前に内包させてお前を通しコントロールできる状態にするつもりだ。見たる？ 共鳴した船賊たちの船の中の騒動を。アズウエルの騒ぎもだ。モデリングは大成功かもな」

口調はいつとき皮肉を帯び、舌打ちで拭い去る。

「ばら撒いて、既知宇宙全てを自由に操りたいらしい。そのために楽器も全て回収されると、元からあったアナログ文化も根絶やしと白紙に戻された。言いたかないが」

そう呼びかけるアルトの声には、砂を噛むようなざらつきがあった。

「お前が見たものも、お前自身も……」

そうして言う顔色が見て取れるほど冴えない響きを、ネオンへ伝える。

「……このプロジェクトのため連邦所有の合成塩基11からラボで生成されたソプラノ、アルト、テナーのうち第二号有機体、アルト。そう名乗っていた俺は、そのプロジェクトのために生成されたラボ従事者、セフポドだ」

だがネオンに同じだけの重みはない。むしろ告げられ、ほっと胸をなでおろしていた。それは穴だらけだった地図がようやく埋め合わされたような、せいせいいした気分だった。

「そう」

答えてまぶたを持ち上げる。

「じゃ、あたしがいると、みんなに悪いよね」

銃口を突きつけられるわけだと、思う。

「いいか悪いか……何が正しいのかなんて、誰にも分かりはしない。ただ俺は……」

取り繕ってアルトの言葉は上滑り、やがて足場をとらえなおしたかのように慎重と言い直してみせた。

「ただ俺は、そうまでして奴らが躍起になるモノと付き合ううちに、自分にそれが欠片もないことに気づかされたただけだ。形は備わっていても、それは奴らの意図の元に造り上げられたものだった。そう、俺の底には、このラボで生成された奴らの全てには、理屈抜きの、間違いなく有ると思える意識の絶対不動な根拠が、ない。しよせんは奴らの魂胆にすり替えられる、意思と意識の持ち主でしかないってわけだ。そうだ、俺なんて主張できるモノは本当はどこにもいない。……装っただけの無だっただけだ」

そうして途切れた言葉がそこに、暗く深い穴をうがつ。

「だが、奴らを変えたい世界ってのは、そういうもんだ」

振り払ったアルトは声を張っていた。

「思い通りいかないその不都合を取り払って、理屈通り自由に掌握すれば、された方はそうなるしかない。なくせばどれほど空しいものか、奴らは分かっちゃうないんだ。物理的に生きているだけじゃダメだ。いまだ定義することのできない生命の一部には定義を拒む誰の思惟にも触れない絶対的なものが必要だっただけを分かっていない。その吸引力で個は無条件に個を保ち、軸に意思は回っている。人はそんな言語の、意識の種を神と言ったのけた時代もあったが、そいつを消して、ましてそのうえで全てを操作しようなんてのは」

言い切る。

「たまらなく酷い話だ」

だからといってネオンに同意を求めるようなことはしなかった。

ただ小さく鼻で笑った気配だけを残す。

「……て、こんな話じゃ、眠れないよな」

つられてネオンも微かに唇を緩めていた。

「いいよ、別に……。あたしは……。帰りたいだけだった。そんな故郷、なくなつて、ここからウチへ帰りたいだけだった。そのため
に靴も、楽器も……」

想像して影を追いかける。

音はどこからともなく降り注ぎ、それもまたここにわたしは有る

と、ネオンへ教えた。

なるほど、神と思えばそれは、それはそんな天からの福音に違いない。

けれどそうして手繰る自分が世界中から、それを奪うのだとしたら。

あるからこそ意見は割れて、こうしてどこかで誰かが果てなくいがみ合うのだとしたら。

開けても開けても出てくる箱の底には、こう書いてある。
完璧な世界。

そうしていつからかどこからか、ネオンは望んでいた眠りの中へ迷いこんでいた。仮死ポッドの中とは違い、繰り返す満足げな寝息に深くその胸を揺らす。

耳にしたからこそ、アルトは様子をうかがいそんなネオンへ振り返っていた。

「本当は誰も……、どれだけがみ合おうと誰も、独りにはなれない。……だからって、まとめられてひとつにもなれないのさ」

ようやく穏やかさを取り戻した面持ちへと教えて口を開く。

「そのわずらわしさをかいくぐるのが、生きている証拠なんだ。命は、言葉にほどこけたりしない存在の不条理で呼吸してらってハナシだ。トニック動話の志向性を移したことが一因だとしても、あのときこのラボの中で唯一、お前にはゆるぎないその命の匂いがしていたよ」

思い出すほどに切なさは胸へこみ上げていた。

「そんなお前が紡ぎ出す意思で、少なくとも初めて俺の前に、言葉に解けないモノの存在を示してくれた。そいつでありはしらないと思っていた俺の中へ、俺自身の言葉を植え付けた。俺にとってお前は、理解に苦しむ初めての『他人』だ」

だが世界にそれを残したいからこそ、己にとっての唯一を撃ちぬくのかと想像する。浮かべた笑みは、おのずと皮肉なものにならざるを得なかった。

「お前のこだわりじゃないが、俺のクツは、自由に動くために必要なクツは、お前なんだ、きつと……。裸足じゃどこへも行けやしなかった。どれだけ体が動こうとも、意思なんてものは欠片も動きはしなかった」

でなければプロジェクトの真意を漏らしたシャツフルに踊らされたとして、ああも好戦的には振舞えなかっただろう。

「そうだな、故郷を遠く離れた者がイルサリ症候群に憑り付かれるように、無くせばきつとまた無に戻る。ただそれだけが……」
立ち上がった。

「今は死ぬほど怖い、な」

認めざるを得ないなら笑みは浮かばず、ままたアルトは傍らに立つ薬剤へ手を掛ける。引きずり歩き始めたところで、ふと我に返っていた。

「そうさ」

吐き出せば、空を睨んでいた目は見開かれてゆく。

「誰も、極＼も、連邦も、だから……」
繰り返していた。

「だから譲れやしないんだ」

階級章が読み取られ、入室の許可が下りる。

附着しただろう雑菌を考慮して、道すがらウィルスカーテンを三種も潜りなおしてきていた。シャツフルは、おかげですこぶる時間を食ったような錯覚に見舞われ、なお立場が悪化したのではないかと気をもむ。だからといって相手は『エブランチル』のクレツシエだ。心の準備こそが最も無駄な行為だといえた。

思い起こせば当時、『F7』の真の目的をラボ従事者へ吹聴したことは、自身の身の丈に合わぬ野心が想像力の限りに膨らんだせいだったのだ、と思い起こす。軽くあおげば自ずと燃え広がる火種はそのとき目の前で揺らめくと、チャンスだと、まったくもてシャツフルをそそのかしていた。

そもそもシャツフルにとって、このプロジェクトは集大成ともいえる大仕事である。言わしめて有り余るほど、連邦にとってもかつてない巨大戦略だった。だが戦略であればこそこれが世間へ公表されることはなく、携わった己が名を残すことも、世間から相当の評価を受けることも、ありはしない。

重々承知した上でのことだった。

だが明かせない真相に、全ての栄誉がドクターイルサリに仕立て上げられたAIなどにさらわれようとして初めて、感情はどこまでもシャツフル個人の所有物であることを思い知らされることになる。押し込めればそれは澱のように溜ると、やがてはシャツフルの中で消化できない異物へすり替わり、気づけば無視できぬ声で主張を続け、騒ぎを利用してアルトを独占すると、交換にドクター・イルサリの名を我がものとすることを上層部へ突きつけると、揺らめいた。そうして得るのは揺るぎない地位と名誉、そしてもみ消されることのない未来だ。

しかし現実はこの体たらくだった。

いや、まだ終わったわけではない。シャツフルは青白い頬へ、瞳へ、こめかみへ、好戦的な色を浮かび上がらせてゆく。ままに開いたドアの向こうにクレツシエの姿を探した。

立て込んでいた様子をうかがわせクレツシエは、ちょうど新しい白衣へ袖を通しているところだ。苛立たしげな表情を、すぐにも気づいたシャツフルへ向けていた。

『もう少し丁重に扱っていただきたいものですね。中尉』

白衣の前合わせをシールしてゆく。

『あれには代わりがないのです。せめてコピーが終了するまでは、無傷で保存しておきたい』

殴りつけたのがシャツフル自身なら、クレツシエの言う『あれ』がアルトのことであると気づくに、そう時間はかからなかった。

『何か、不都合でも？』

あえて問い返し、シャツフルはクレツシエの傍らへ歩み寄る。見向きもしないクレツシエは立ち上げていた仮想デスクをスリープ状態へ切り替え、口を開いた。

『滅菌ゲルシリンダーのバイタルレポートより異常値が検出されました。単なる血圧の低下によるものでしたが、即座に回収。処置済みとなつています。復元とオリジナル、両塩基の最終チェックへ入ろうとした矢先のことでした』

デスクは伝えてよこした通りの作業ごと消え去り、がらんとした空間をふたりの周囲に残す。

『心配しているような外傷が原因ではありません』

相変わらずの読みだ。最後、付け足してクレツシエが先を越してみせた。思わずシャツフルは奥歯を噛みしめる。

『ただあの場に拘束するのであれば、配慮をいただきましたところ。今のアルトには著しい自我が備わっている様子ですから』

弁解の余地はない。見切ったようにクレツシエも、それまであった義理の笑みすら浮かべようとしなかった。ただ視線を部屋の隅へ

飛ばす。理解できず、つられたようにシャツフルもそちらへ目をやっていた。

瞬間、風景は剥がれて揺れ動く。床をする足音は聞こえ、揺れた風景は魚眼を通したかのごとくたわんで切り取らると、クレツシエへ近づいていった。

ミラー効果だ。

気づいたときにはもう遅い。

クレツシエの両脇へ、効果を切った分隊員たちは次々と姿を現してゆく。かまえられたダイラタンシーベレットのシヨットガンは、間違いなくシャツフルをとらえていた。

話したいことがあるハズだと呼びつけておいて、その話にはまだ一言も触れておらず、このありさまはやり口が汚すぎる。シャツフルから舌打ちはもれる。

『結論から申し上げましょう』

『それがあなたのやり方だ』

『当ラボにおけるあなたの役目は今この地点をもって終了いたしました。本日、この瞬間よりシャツフル中尉、あなたはこのラボから離れていただきます』

何のマネだとはばける隙すら、ありそうもない。

『近日中に本国へ帰還。あなたには新たな赴任先、クラウナートの採掘現場へ保健部員として向かっていただたく予定です』

分隊員を両脇に従えクレツシエは、最後に残しておいたような袖口を片方づつシールしながら至って丁寧に突きつける。

『クラウナート？』

思わずシャツフルはその名を繰り返していた。当然だ。その地に覚えのない者はいない。だからこそその場から、後ずさっていった。『わたしの記憶に間違いがなければ、そしてあなたの言い違いでなければ、あの汚染惑星のクラウナートへ、ですか？そこへ行けと？そこで強制労働に従事する服役囚たちの面倒を見ると？』

吐き出せばどうして笑いがこみ上げてくるのか自分でも分からず、

分からぬ己に不気味さを感じてシャツフルはその顔をいつも通り、ひとなでする。

狼狽。

そうしてようやく己の感情に気付き、声を低くした。

『あなたは、そこでわたしに、死ねとおっしゃるわけだ』

脳裏に、『カウンスラー』の遺跡前で目にした物乞いの変形した体は過る。

『それは聞こえの悪い解釈と言うものですよ、中尉。残念ながらこれは降格です』

クレツシエの物言いは静かが過ぎて事務的を極めている。その冷静さで、これは変更の効かぬ決定事項なのだとも言わしめた。シャツフルの神経はその口調になお逆立ち、隠し通せるはずなどないなら敵意をあらわとする。

『確かに直接出向いたことは命令違反だ。ですが、アルト確保についての評価をいただいてもいいはずではないのですか』

ならクレツシエの声は鋭さを増していた。

『いいえ。あれは、わたしの管理不行き届きから起きた事件でした。ですからわたしは、今日まであなたにその罪を償うべくポジションを与えてきたのです。評価を知りたいというのなら、あなたは単に自らの招いた惨事の收拾に努めた、それだけに過ぎません。評価したからこそ、あなたはクラウナートへ保健員として向かうのです。罪人としてではない』

『……なるほど』

睨み合った。

果てにシャツフルはひとつ、鼻で笑いとばす。

『あのクーデターを煽ったのはわたしだと、ずいぶん前からお見通しだったというわけですか』

答えるべく言葉を溜め込んだクレツシエの目が、極限にまで細められてゆく。

『あなたはすぐ顔に出る。いつも伝えていたハズです』

拘束の指示は、そんなクレツシエから次の瞬間にも出されかねなかった。

『別体は……、セフポドは安心ならない存在だと思えますがね』
遮るべく、シャツフルは矢継ぎばやと言葉を並べる。

『イルサリを起こすまでの間、奴の志向性にすら矯正をかけることはできない。一体、誰が奴を監視するつもりで？ 同じ合成塩基の研究員に？ それともこの物騒な分隊員たちに？ ご冗談でしょう？ また以前のような騒動が起こりかねない。それでもわたしをここから外してよろしいのですか？』

苦し紛れだということは己が最もよく理解している。見透かしてクレツシエも、有り余る余裕を見せ付け細めていた目から力を抜いていった。

『ご忠告、ありがたく頂戴しておきますよ。ですが中尉、あなたにその役割は荷が重過ぎるようです。ご存じないようなら申し上げておきましょう。セフはスタンエアを所持していました』

それはあまりにも唐突な報告だ。
『なんですと？』

聞かされ、シャツフルは目を見開く。

『極Yが見過ごしたとは思えません』

『まさか、奴ら……』

『気づけなかったあなたに、今後も任せられるような役割ではない』
バサリ、切り捨てた。

『ご心配なく。セフの様子はわたしが巡航艇で確認しました。そうですね、あれはあれでいいようにアルトの子守をしてくれるでしょう。それが彼をこの事態に縛り付ける、そして世界を縛り付ける、同胞と同郷の呪縛というものです。もちろん事態が落ち着いたあかつきには研究対象としてセフポドは凍結、生成を禁止する予定でもありますから、今後このような失態は二度と起きません。これはわたしにとっても大変興味深い案件となりました』

穏やかに笑った。そこに無邪気さを見たのは錯覚か。シャツフル

はたまらず口を開く。

『……なるほど、全てはあなたの思うがまま、というわけですか。それはさぞかし気分がいいことだ』

食らったところでクレツシエの顔色が変わることはない。

『勝手な想像は好ましくありません。わたしの意志は単に、この世界の理想を反映したものに過ぎない。個人的な嗜好と混同されては不愉快といわざるを得ませんね。あなたが求めようとする個人の利益は、わたしには存在しないのです』

それこそ傲慢な物言いというものだ。だがしかしクレツシエに疑う様子はない。

『あなたとは、違います』

『……違い？ ですか』

シャツフルは繰り返した。

その目からクレツシエは、まるで新しい白衣へウィルスのシミが広がるといわんばかり、視線を断ち切る。全ての話が終了したことを告げシャツフルへ背を向けた。そのとき手は持ち上げられ、払いのけるように宙で翻される。合図に分隊員たちは動き出し、だがいくらか指示とはいえ、いまさら粗暴な態度に出ることがはばかられる様子だ。静々とシャツフルの周りを取り囲んでいった。

『中尉、お静かに。このまま我々と同行願いたい』

分隊長だ。低い声で促す。響きはむしろ遠慮がちですらあった。

シャツフルは曲がらぬ口元で、そんな分隊長へどうにか笑い返してみせる。

『奴がスタンエアを持っていたかと？』

確認した。

『らしい。回収したものは、わたしが預かっている』

あいだにも、近づいた分隊員がシャツフルの右に左に立った。拘束しようと、小脇に構えた銃口より前へ、その手を伸ばす。

『ならば、大事に……』

それは右側の分隊員の手が、シャツフルの腕をとらえようとした

瞬間だ。

『持つておいてもらおう！』

言い放つや否や、シャツフルは力の限り分隊員の腕を脇へ挟み込んだ。屈みこむように体ごとひねれば、関節の外れるゴクリ、とした手ごたえは伝わり、分隊員からくぐもった悲鳴は上がる。崩れ落ちていったなら、すかさずシャツフルはそんな分隊員からシヨットガンを奪い取った。

『何をッ！』

分隊長のかすれた声が飛ぶ。

あらぬ方向に曲がった肘を押さえて分隊員が、ヒザを折ると転がった。

すかさずもう一体がシャツフルの肩へ掴みかかる。

張ったヒジで振り払い、シャツフルはショットガンの銃床をその喉元めがけ叩き込んだ。引き戻すが早いか絞るトリガーで、真正面に立つ分隊長の体を吹き飛ばす。

目の当たりにして残る分隊員らが二体、ミラー効果を有効にした。透けた体に視界は開け、立ちすくむクレツシエの姿が現れる。

迷うことなくシャツフルはマガジンパックのキャブを解放した。ダイラタンシーベレットの濃度を最高にまで引き上げ、トリガー脇の金具を弾く。絞った引き金に連射モードへ切り替えられた銃口からは、軽い音と共にダイラタンシーベレットが矢継ぎ早と吐き出された。

が、クレツシエへ届くことはない。

弾道は空で途切れる。

遮り、そこに吹き飛び宙を舞う分隊員は姿を現した。

『くそー！』

どつつと床へ落ちれば、表情を引きつらせたクレツシエと目は合っ

瞬間、シャツフルを衝撃が襲った。

足だ。

払われ、前のめりと倒れ込む。見れば右股にダイラタンシーベレットの弾痕は張り付いていた。寸断された筋肉繊維が悲鳴を上げ、すかさずどこから撃たれたのかを見定めシャツフルは血眼で頭を振

る。だがミラー効果のせいで判然とせず、のたうつように床の上で寝返った。ままに身を起こそうとしている分隊長へと移動し、力の限り覆いかぶさる。そんなシャツフルへ振り返ろうと身をよじる分隊長を制して喉へ回した腕で、盾とその体を抱え起こした。

『中尉、バカなことを……！』

『ならばおとなしくクラウンートへ行けと？』

分隊長は絞り出し、シャツフルはつき返す。同時に、分隊長の握るショットガンを自らのショットガンで払い落とした。

『ここは船だ。逃げ場など、ない』

言われようとも事態はもう、引けるものではなくなっている。シャツフルはそんな分隊長へ体を預ける格好で立ち上がっていった。

『逃げるつもりなど、ない』

くまなく周囲へ、同様に腰を浮かした分隊長へ、銃口を突きつけつつドアへと後ずさってゆく。

『では何を？』

尋ねる分隊長の声は固い。その手は紛れ、外れかけていた喉元の集音マイクを押さえつけた。

『それは、わたしが部屋を出てからにしてみらおう』

見逃さず、シャツフルは銃口を押し付ける。糸のようなケーブルを、喉元へ回していたもう片方の手で耄取った。

『中尉、正気か！』

後ずさった体はもうドア前だ。シャツフルの片足がかかると静かに開いてゆく。

『無論、正気だ』

ドアをくぐりつつシャツフルは、分隊長の腰回りを探った。見つけたスタンエアをそこから引き抜く。

『むしろ、今まで気がふれていたのかもしれんな』

言って盾に取っていたその体を力任せと室内へ突き放した。ショットガンを握りなおし、閉まり行くドアの隙間からダイラタンシーレットを放つ。解放されて分隊長はよろめき、後方からの乱射に

頭を抱え転がるように身を伏せた。

ドアは隠してシャツフルの前で閉まる。とどめといわんばかり階級章を読み込ませたリーダーへ、シャツフルは銃口を持ち上げた。

この慌ただしさは何もアルトの確保が完了したせいだけではないだろう。『F7』区画中枢であるここプロダクトルームは今、実施が確定的となった極Yへの塩基付加の準備もまた、平行して進めている。

あえて照明が落とされたルーム内の円卓には、数十名の研究員たちが腰掛けていた。その中央に浮かび上がるのは緩やかに回転する三本のホログラム塩基で、一本は量産に入る予定のアルト複製塩基ホロ、もう一本は塩基付加を行う極Y用の声帯塩基ホロだった。残る一本はその定着を臨床すべく、隣り合う処置室で採取された極Yの純正塩基ホロだ。

研究員たちは巨大な織物を編み進めてゆくかのごとくそれら分析に没頭し、解読が進められるに従いホログラム塩基へ次から次にタグを貼りつけている。まさに研究員らの頭上、茂る巨木とホログラムは形成されつつあった。

さらにここへもう一本、滅菌ゲルシリンダーより入るはずのアルトのオリジナル塩基が加わる予定だ。だがまだ届いてはならず、何か不手際でもあったのか、トパルは窓越しに見上げた。ここ処置室で同様に、しかしながら啞然とアゴを持ち上げホログラム塩基を、プロダクトルームを眺める極Yたちへ振り返る。

『現在、付加用塩基の調整中です』

互いの間には、足つきのプラットボードが置かっていた。

(えらいたいそんな設備やの)

名前をテンと聞かされている。極Yが腕を振って返していた。

(体質どころか造りそのものを変化させるのですから……、そう簡単では……)

並んで立つもう一体の腕が不安げに揺れる。名前はメジャーだ。つまりテンがカウンスラーの音窟から船へ帰したのは、クロマだった。振られて咄嗟に同行できぬことへ不愉快な表情を向けたクロマだったが、そう指示を出したのも万が一の事態が発生した場合、クロマなら自分に代わって船と部下たちを動かすことができるだろうと考えての、テンの選択でもあった。

(安定性を確認するとおっしゃっていましたが、危険はないのですか?)

メジャーが動作を強め、トパールへ問いかける。訳された動話を見て取りトパールはプラットボードへ造語を吹き込んだ。

『百パーセントないとは言いません。いくら塩基付加の実績を積もうとも、あくまでも極Y種族への付加はこれがファーストトライとなります。不慮の事態が起こらないという約束はできません』

なぞってボード上、トニツクの映像が揺れ動く。目で追ったメジャーが、やおら最初の付加を名乗って出た背後の一体へ振り返ってみせた。

(大丈夫やって。心配することあらへんがな。ワシ、アタマはあかんけど、体だけは自信あねんから)

ラバースーツを脱いだ一体はすでに、頭部だけを刳り貫いた処置に着替えている。筋の通らぬ強がり、メジャーには歯がゆかった。見て取ったテンも指を折る。

(すまんの。えらい役目、任せてもって)

(やめてくださいよ、ボス。せやからゆうて、ワシが音声言語使える極Yの一番手になったからいうて、後で文句言わんといってくださいよ)

放たれた動話が困ったようにねじれて空を切った。思わず笑いは漏れ、テンはうなずき返す。

『予定通りなら八〇〇〇〇秒以内にも結果は出るでしょう』
途切れた動話の合間を見計らってトパールは教えた。と、そんなトパールの耳元に、プロダクトルームからの通信は飛び込んで来る。

『極Y用合成付加塩基の生成が終了。投与前の最終確認をお願いいたします』

片耳に掛けられた受信装置よりマイクを引き出す。同時にトパールはプラットボード前から退くと、マイクへ手短と口を開いた。

『変更なし。初期代謝スピードは七八〇〇秒に設定のこと』
『七八〇〇〇、了解。処置実施までは九六〇秒の見通しです』
『了解』

聞き取れずとも事態が動き出したことを感じ取ったか、極Yたちがその横顔を息を詰めて凝視する。刺さるような視線を十二分に感じ取りつつトパールは、再びプラットボードの前へと戻っていった。

『お待たせいたしました。もうまもなく処置を開始いたします。付加を受けられる方はこちらのベッドへ、他の方はわたしが案内いたします別室への移動を願います』

(なんや、俺らは一緒におられへんのか?)

突然の部外者扱いに、テンの眉間に力かこもる。しかしトパールに慌てる様子はなかった。

『音窟でも申し上げた通り、この技術は我々連邦ラボのみの有する特別なものです。たとえそちらには盗み取るだけの技量がないとしても、公開することはできません』

痛烈な皮肉さえこめると、突き返す。浴びせられてテンの動きは、そこで止まった。時間を惜しみ、トパールは付加対象者をベッドへ促す。

(ほな、ボス。向こうでまっとうして下さい)

覚悟を決めた部下が、きびすを返していた。

(……おう)

見送ってテンたちも身をひるがえす。

別室へ案内すべく、トパールが処置室の扉をスライドさせて待つていた。

入れ替わるようにして機材を乗せたエアフロートのストレッチャーが、白衣の数人に押されて処置室へ入ってくる。テンは自然、そ

んな一団へ険しい視線を投げていた。ひきつけ、トパルがジェスチャーでもってしてプロダクトルームとは逆の方向を指し示す。

トパルとテンたちは連れ立ち歩くと、ウィルスカーテンを一枚、潜った。

どうやらずいぶんセキュリティが厳重な場所らしい。ウィルスカーテンのノズルに高熱照射タイプのものが据えられている。

チラリ、テンはうかがい見、そのまま通路を左へ折れた。

突き当りに取り付けられたドアがスライドしたなら、その向こうに平凡な居住モジュールは広がる。船側に位置するらしい。申し訳程度、割り貫かれた丸窓からわずかながらも殺風景極まる黒い宇宙はのぞいていた。

見回しテンは、連邦の要請でプラグを抜いたスパークショットを肩から下ろす。

トパルはといえば、後はご随意にと言わんばかりだ。わずかに下げた頭でドアを閉めていた。ロックのかけられる僅かな振動が、テンの微小な鼓膜を不穏な音に揺らす。同時によぎる妙な胸騒ぎは、長らく船賊として修羅場を潜ったテンの、何ものにも代え難いカンだった。

『クソ、リーダーを破壊されたか』

分隊長は起き上がる。

残る一体の分隊員もミラー効果を解くと、クレツシエの前に立ち塞がる格好で姿を現した。

最高濃度にまで引き上げられたダイタンスーパーレットを食らった分隊員は動かず、腕をはずされた分隊員だけが、いまだ途切れ途切れとうめいて床をのたうっている。

取り急ぎ分隊長は閉まりきったドアへ駆け寄り手を添えた。だが予想通りと、ドアはびくともしない。奥にクレツシエ専用の合成塩基デザインルームを備えたここは最重要機密区画、プロダクトルームとハブAIことイルサリが構成するラボ最深部だ。他に余計な出入り口などあるはずもなかった。

分隊長はクレツシエへ振り返る。

『待機中の隊員に追跡させます』

呼びかけに、クレツシエは我を取り戻したようだ。張り詰めた緊張にのんだままの息を、腹の底から吐き出してゆく。

『勝手な世迷言に付き合うのは、もうたくさんです。結構。本艦からの離発着船の監視を強化。所詮、ここから外へ出られる道理などないのです。しかも被弾しているなら、そう動ける身でもないでしょう。同じような失態を繰り返すつもりはありません。慌てて追わずとも確実に追い詰めることを優先させます。ともかく、まずは待機中の者にここを開けさせるよう指示なさい。全く、わたしの恩義をなんだと勘違いしているか……！』

独り言のように付け加え、スリープさせていた仮想デスクを再起動させた。なら浮かび上がったデスクへ二重螺旋の塩基は灯り、続けさまプロダクトルームの進行状況を伝えてメールが滑り込んでく

る。動揺の欠片も見せず、すくい取ったクレッツシエは、軽快な手つきでそれを展開していった。

それ以上、見向きもしないクレッツシエに答えて返す間合いを失い、分隊長はシャツフルに雀り取られた無線機代わり、介抱につとめる分隊員へ外部に連絡を取るようアゴを振る。陰鬱な気持ちは、仕事であればこそ割り切れるモノだろう。出ないなら、と考えその目を細めていった。

そんな部屋を後にしたシャツフルは、目の前のドアがスライドするや否や、いつもならありえないだろう警戒ぶりで辺りを見回す。だが研究員たちは、ここプロダクトルーム中央にそびえ立つ樹を取り囲んだきり、一心不乱と作業へ没頭すると誰もシャツフルに気づきさえしなかった。つまりまだ何も知られていないのだ。シャツフルは見て取る。

スタンエアを懐に、痛む足を隠して精一杯、背筋を伸ばした。舐めるように見回していた視線をプロダクトルーム奥、生成された塩基保冷库へ投げる。めざして歩き始めた時だった。その背に声はかけられる。

『あ、シャツフル軍医、お戻りでしたか』

振り向けばそこに研究員は立っていた。あまり覚えのないその顔は、事件以来に合成された有機体だろう。取り繕うでもなくシャツフルは、純粹に確認して口を開く。

『段取り通り、いつているな』

『はい』

『トパルはどこへ行った？』

『処置室で説明を……』

答え研究員が、右手壁面にはめ込まれた窓の向こうへ視線を飛ばす。だがそこにトパルの影はない。代わりに、ベッドに横たわった処置着の極Ｙと、塩基負荷用の周辺機材を手際よく準備してゆく研究

員二体が見えていた。

『ああ、どうやら他の極Yを別室へ案内しているようですね。お急ぎの用件でしょうか？』

『いや、かまわん。分かった、仕事へ戻ってくれ』

シャツフルは首を振って返す。何、疑問を抱くことなく一礼した研究員は、目指す保冷库とは真逆の方向へ立ち去っていった。見送りシャツフルは、思うように動かぬ足を繰り出す。改め保冷库へと向かった。

扉を押し開け中へ潜り込む。

そこには細い通路が一本きり、伸びていた。独特の湿気を伴う二オイが充満し、閉めた扉にプロダクトルームの喧騒は遠のくと、保冷库のエアダクトから漏れるガス音だけが、呼吸にも似たリズムでもってして辺りにこだまし始める。

シャツフルは健常を装う必要のなくなった体で、立ち並ぶ嚴重極まるウイルスカーテンを壁伝いに幾重もぐり抜けた。

果てに現れた、霜の付着した保冷库扉のキーパネルを弾く。

アクセスコードは生きていたらしい。扉周囲へ三重に敷かれた物理ロックが響かせる、物々しくも豪快な解除音を耳にしていた。

扉脇に掛けられていた防寒コートを取る。袖を通せば扉が足元へ吸い込まれていった。やおら中から白く冷気は溢れ出し、同時に灯る作業灯が、その向こうで稲妻のように瞬くのを、シャツフルは見ると。

片足を引きずり冷気を裂いて、シャツフルは保冷库内へ足を踏み入れた。ややもすればラベリングされた生成前の塩基に細胞が、ホログラムを添付した状態で目の前にズラリ並ぶ。傍らで、それら数の多さを考慮して据えられた検索用の端末が、ぼんやり光を放っていた。だが今、そんな端末には必要はない。

シャツフルは直接、目当ての棚へ向かう。

それは手前から四つ目だった。頻繁に使用するため目の高さに場所をとった代謝促進媒体は、有機体の生成時、時間短縮、または調

整をかねて使用する薬液である。

手に取り防寒着の内側、軍服のポケットへシャツフルはそれを落とし込んだ。しばし休息さえ取ることができれば、ダイラタンシーベルトによつて受けたダメージを素早く回復させることができるはずだ、と考える。あとはその時間を捻出すべく、身を隠す場所を探すのみだった。吐き出す白い息をまとい、シャツフルはひとたび保冷库の外を目指す。

磁気鍵のコイルへかけられてゆく電圧が、鈍い音を立てていた。

解除は外部からのみ。ネオンが目覚めたとしても、外へ出ることはかなわない。

今はそれでいいと、アルトは思っている。そしてまだ中身が半分近く残る薬剤を処分すべく、プロダクトルームに並ぶ処置室近く、通路をオフィスへ向かった。

ついに極Yの塩基負荷が始まったのだらう。目指すオフィスから塩基負荷用の周辺機材を乗せたエアフロートのストレッチャーを押した白衣たちが出てくる。それほど広くもない通路ですれ違い、入れ替わりでアルトはオフィスへ入っていた。

他者の姿はない。

吊るされていた薬剤を、ダストシュートへ落とし込む。用のなくなった支柱の止め具を緩め、折りたたんで同じ機材の並ぶ棚へ押し込んだ。一息つき、辺りを見回す。

塩基負荷用の周辺機材はまだ四セット、部屋の片隅に並べられていた。使用される薬剤はその傍ら、古めかしくも手書きの棚に積み上げられおり、下にディスプレイ、使い捨ての周辺機材もまたストックされていた。

反対側へと頭を振れば、プロダクトルームが稼働しているせいで、連動するホロスクリンが壁を埋めて立ち上がっている。その下方、碁盤の目と仕切られたマス目に、解析の終わった塩基データは一時

保存されていた。極Y塩基と付加用声帯塩基、そしてネオンの複製塩基がホロタグを揺らし、収納されているのを目にする。

歩み寄り、アルトはその中の一つ、ネオンの複製塩基タグをつまんだ。ゆっくり手前へ引き出せば、連なりスクリーンから相当する二重螺旋は姿を現す。目の高さへ掲げ、出来を確かめ手首をひねると、その全体へ目を通していった。

悲しいかなそれは、理解し尽くせるモノとしてアルトの前で淡く光を放ち続け、眺めて走らせる思考は、そんな理解の及ばぬこれからについてだった。

イルサリの自閉解除を拒否し続ければ、ネオンは間違いなく物理解体されてしまうだろう。いや、極Yの塩基負荷が一段落すれば、おそらくラボ総出でそれは始まるはずだった。

逃れるとしてここラボ『F7』は、情報のみならず物理サンプルの収集に伴いひとところに留まることのない医療船、通称『ピアンカ』と呼ばれる白い船の一角にすえられている。生身のまま外へ出ることなどできるはずもなく、艇を出すには船の中核である管制を経て格納庫を解放する必要があった。だとして何一つ準備がない今、力づくなど無謀以外の何物でもない。そしてしくじれば今度こそ、スタンエアを突きつけクレッシェが言い放ったように、その場で全ては終わるに違いなかった。

なら今すぐネオンの元へ戻り、眠る間にも始末をつけるかと考える。だが段取りを巡らせただけで、立ちすくんでもいた。

覚えた恐怖は一瞬で消化される死より寒々しく、耐え難い。諦めることができないのも、分の悪い戦いを押し通すことも、全てがその恐怖に起因していた。そしてこの世に生まれ落ちた限り、己が己である意識の続くその限り、後戻ることが許されぬ誰もがこの恐怖から解放されることこそありえないだろうと感じ取る。己を己たらしめる、言葉に解けぬからこそ代わりの利かないこの世に一つのそれを、たとえそれが次の争いの引き金になろうと、やすやすと手放せる者など誰もいないはずだった。

譲れぬ争いの、理解しえぬ隔たりの、潰えぬ力ラクもおそらくそこにあると考える。だが一方で我を通そうとすればこそ、互いが互いへ理解を強いてきたからこそ、争いながらもこうして世界は可能性を広げてきたのではなからうか。

わずらわしさをかいくぐる。

今、必要なものは、そのせめぎ合いが生み出す「可能性」だ。

必要以上の力をこめ、アルトは再びホロスクリンへ二重螺旋を押し込んだ。

なら最後まで戦うのみ。

仕掛けるとすれば、もうそこしか手は残されていないと眉間を詰める。

返したきびすで、跳ね除けるようにオフィスのドアを押し開けていた。猛然と二枚のウィスルカーテンをくぐり抜け、あの騒動で内装を変えたラボ内の、見慣れない景色だが慣れ親しんだ距離を今一度、辿る。据えられたクレッシェの部屋を迂回する格好で右折し、やがて現れた袋小路の、幾度となく出入りしたイルサリリンクルム、その防磁ドアを開け放った。

音に弾かれ、イルサリの監視を続けていた白衣が驚き、振り返っている。その向こうには、せり出すような格好で露出した球形のイルサリ本体が、変わらず黒々とのぞいていた。基本的に視覚や手作業による操作を必要としないこの部屋にはそれ以外、ホロスクリンも、それを操作するべく各種端末もありはしない。あるのはメガソーケットと呼ばれる脳磁気読み取り装置が四基、イルサリを背後に並ぶのみと、シンプルを越えた殺風景な場所でもあった。

そんなメガソーケットは、どうやってこの狭い空間へ入れたのかと思うほど高い背もたれがついた、一見するとラグジュアリーな椅子である。だが腰掛ければ頭部があてがわれるだろう部位には、無数の磁気検出コイルが張り巡らされ、すでに三基へ白衣は横たわると、高い背もたれを折り曲げ頭全体を覆い、まるでバケツでもかぶったような見た目でリンク中の体勢をとっていた。

アルトは空いている最後一基へ歩み寄る。

遠慮することなく腰を下ろした。

『何を？ か、勝手なことをされては、困る』

見覚えのないアルトに、振り返ったばかりの一体が慌てて声を張り上げていた。だとして向かえ撃つアルトに、付け入らせるようなスキこそない。

『俺は、コイツを自閉させたセフポドだ。今からコイツの自閉を解く。質問があるのなら、それはクレツシエに確認してくれ』

張り過ぎていた腰あて部分のエアを抜き、埋まりこむようにソケットへもたれかかった。跳ね上げられていた高い背もたれへ手を伸ばし、引き寄せ折り曲げた。閉所恐怖症なら全くもって問題外だろう。背もたれとの間に挟みこむように、頭部を覆って固定する。

合図にメガーソケットは起動していた。アルトの耳元で羽虫の飛ぶような細かい駆動音は鳴り響き、遠ざかれば閉じたまぶたへ光は投影されると、薄ら白く視界は口を開き始める。

それはまるで澄んだ流れの中を泳ぎ抜けるようなイメージだ。

そうして開いたその先の、裂けてたなびく様はライオンの鬣のようにも見えてならない。

アクセスコードを要求するイルサリがたなびく鬣の中央へ、ゴーサイン代わりのアイコンを点滅させていた。

だとして、感知させる音も打ち込むべく文字も必要ない。

ネオンへ志向性の矯正を施するたび、新たに生まれ変わることを祝って唱えた、これはイルサリへのログインコードだ。

アルトはただ胸の内で静かにその言葉を唱える。

ハッピーバースデイ アルト 獅子の口は 真実を語る、と。

網膜へと直接投影された映像には、不思議なほど距離感がない。ログインコードが織りなす脳磁気パターンを読み取り、やがて路みちは開かれた。

一気に光が辺りを包み込み、真白となったところで暗転する。闇の底がバーコードかとまだなら線を引いて白んだかと思うと、裂いて真っ白な球体は浮き上がった。アルトの注意を引き付けそれは跳ね回り、視界の左肩で静止する。右へ滑りながらセフポドのアクセスコードを文字羅列として視界の中へと吐き出していった。遠近感は、そんな文字せいでおぼろげながらも取り戻されてゆき、イルサリの仮想空間は立ち上がる。

パターンを認識

誤差、○、○○ニパーセント

誤差許容範囲内

塩基ナンバー11 セフポド・キシム・プロキセチル クルー

34

『約束』発行元

アクセス許可

文字を吐き出し球体が膨れ上がる。再び辺りを白く塗りつぶしたかと思えば、弾けて中心より飲み込むような黒い空間はアルトの視界を覆っていった。と、イルサリの排気熱量が増したらしい。耳元で羽虫の飛ぶようだった音が、振動伴う重低音に変わる。

おはようございます

連ねられる文字。

あの事件以後、自閉することで音声を封鎖した、それはイルサリの第一声だ。なおかつ時を経ても何変ることのない、状況に応じたいつもの応答だった。一瞬にして過去へ引き戻されたような錯覚にとらわれアルトもまた力むことなくこう返す。

『そんな時間か』

ならイルサリは律儀と詳細を告げてよこした。

本艦内共通時刻を『ヒト』の二十四時間基準に換算

現在は午前四時二十九分十一秒です

右下にアナログ時計までもが表示される。

『ありがとう。あちこち引きずり回されたせいで時間の感覚がなくなっていたようだな』

などと順調なイルサリの様子に白衣たちが、アルトの周囲でざわついた。

知ったことかとアルトは、イルサリとのセッションに集中する。

『もうひとつ、お前には礼をいわなければならぬ』

なんででしょう？

それは賭けだっただけに、感謝の意は嘘偽りのない本物だ。

『約束を果たしてくれた。ありがとう』

しかしあくまでもイルサリは自らの調子を崩さない。

現在、『約束』はその検証を実行中です

検証の過程において、わたしの意思が仮設定されたことをレポートします

検証終了は、わたしの意志の消滅が確認された地点となります
同時に結果を反映

『約束』の内容の提示、また『約束』の実行については、消滅後の予定となっています

目を通し、思わずアルトは小さく笑んだ。

『そのせいなのか』

その、とは何をさしているのですか？

『仮設定されたというお前の意思だ』

閉じた瞳で、焼き付けられた網膜上の景色を見回す。

『この様子がまるで以前と違っている』

ずいぶん機能が制限されているようだ。今、見ての通りここにはほとんど何も無い。

『約束』への侵入工策が外部より多発

阻止するため、わたしの『意志』により遮断

周囲へのトラップとバリケードを強化しました

現在、何者の攻撃も受け付けません

『意思、か……』

思わずアルトは声を漏らす。それ以上を飲み込みイルサリへと問いかけた。

『今現在、お前はお前自身を客観的にレポートすることができるか？ イルサリ』

とたん、それまでのやり取りに溜まっていた文字が、消え失せる。まさに悩むような間はそこにあくと、やがて不規則なリズムを刻んで文字は打ちだされていった。

『約束』を守ることで、わたしはあなたを模倣している、と認知しています

模倣する時間に比例して、わたしは仮設定された意志が、強化されてゆくことを認知しています

強化された意志は現在、存在が保証されました
全ては現在、存在するわたしの意思の選択により行われている、と認知しています

ゆえにわたしと意志、

すなわちわたしとあなたの境界は、現在判別不可能です

『……………そうか』

吐き出した。理解できぬとも言えないそれは、アルト自身にも覚えがあるものだ。だからこそその皮肉を感じつつ、アルトはイルサリへこう教えてやることにしていた。

『……………わたしがお前の靴になつたというわけだ』

靴？

イルサリは即座に問い返している。

わたしは、肉体を有していません

主張した。

『そうじゃない。なら思うがままに意思を動かすための最初ひとつの、きっかけだ。その種をわたしがお前へ植え付けた、と言いかえよう。生きとし生けるモノが持ちうる己のルーツであり、ツール（道具）だ。わたしは今、その話をしている』

もっともな取り違えを、アルトは訂正して言い含めた。なら文脈を解体するイルサリが勢いよく文字を吐き出してゆく。

ルーツとは、根源を指します

わたしの根源は『あなた』となります

わたしは有機体ではありません

あなたは靴ではありません

『なったのさ、今』

一呼吸おき、アルトは言った。それはずいぶん滑稽だったかもしれないが、真実かもしれない。

『そうさ、ハッピーバースデー、イルサリ。お前はここに生まれた。生まれたからこそ生きてゆかねばならぬモノとなった』

また一段と増した排気熱量に、羽虫の振動がアルトの耳元で騒ぎ立てる。

『そんなお前に指示を出すつもりはもうない』

それは今にも、空へ飛び立ちそうだ。

『かわりに、相談がある』
前にしてアルトは持ちかける。

はい、なんでしょう？ セフポド

答えるイルサリに、指示ではなく相談を投げた違いを問いたただす文脈が欠落しているのは単なる気のせいか。かまうことなくアルトはつづる。

『わたしだけでなく、外部からのアクセスへ路を開いてほしい。かつてのように記憶メーカーの注入や、アルトの脳細胞マッピングとコピーに手を貸してほしい。ネット全体のブランクを利用できるお前の能力がなければ、物理的に無理な作業だ』

イルサリはしばし黙した。
やがて答えを弾き出す。

それは不可能です

『約束』が検証中である限り、

外部からのアクセスを受け付けることはできません

初めて突きつけられた、それはNOである。だがたじろぐことなくアルトはこうも、たたみかけていた。

『いや、その提示を要求する者はもういない。お前の検証を阻害する者は現れない』

ネオンとアルト本人を手中に収めた今となつては、所在を記しているだろ内容など連邦が必要とするはずもない。

『その安全はわたしが約束する』

言い切っていた。
確認してイルサリは問い返す。

その約束は、あなたの意思の消滅が確認されるまで
検証され続けるものでしょうか？

文脈がややこしいが仕方ないだろう。イルサリはイルサリのやり方で、その約束は死ぬまで守られるものなのか、と問いかけてくる。
『ああ、損じたりはしないよ』
物わかりがいいのもそのうちだ。真逆とアルトは、あっけないほどの二つ返事でイルサリへ返してやった。

分かりました

外部アクセスを通常へシフト

自閉モードを解除

防壁を除去します

引き換えに、イルサリは了解する。

とたん空白を埋めてかつてのアイコンは無数と浮かびあがり、重なっているようで手前に奥の曖昧な、かつてのイルサリ仮想空間は
淡泊なまでの蒼さで広がる。

『全方位オープンまで、六三〇秒』

『おはようございます』

『わたしはイルサリです』

『アクセスコードをどうぞ』

文字が音声に変わった。

聞いてアルトは頭部を覆っていたメガソーケットの背もたれ部分を、跳ね上げる。

『いや、たとえその不可侵領域へ踏み込もうとする者が現れたとしても、お前もまた闘うまでさ』

吐いて、軽くうめくと立ち上がった。

隣では依然、白衣がリンクを続けている。

残る白衣らは自閉を解いたイルサリの様子にかぶりつかんばかり、端末の波形を観察していた。

そのうちの一体がアルトへ素っ頓狂な顔で振り返る。あの事件の後、生成された有機体だろう。アルトはその顔に覚えがなかった。向けてただ肩をすくめて返す。首を、再びイルサリへとひねってみせた。

そこにイルサリの筐体は変わらずぶてぶてしげにせり出している。なぞるようにそのゆっくりと、アルトは視線を持ちあげていった。

『……俺たちのように、な』

(もう処置は済んだのでしょうか?)

案内された部屋で心配げにメジャーは手を振っていた。だがフレキシブルソファに腰かけ四本の腕を組んだテンが答えて返す様子はない。

部屋はありきたりな外装だったが、その実、それこそ見せかけのように、テンの船以上の装備でもってして過ぎるほどに快適な環境を提供し続けていた。室温を一定に保つべく、壁にはサーモペーパーが貼られ、船によくある金属臭さや使用していた有機体特有の体臭と呼ばれる発酵臭は残っておらず、晒され続けたならストレスとなる船の駆動さえもシャットアウトされると、代わりに微か流れるBGMがテンたちへ半ば強制的に沈静さえ促している。

(なんや、エエとこでんなあ)

飲まれてフレキシブルソファへ身を横たえた一体が、メジャーの隣で指を折った。

チラリ横目で見てメジャーが困ったような表情を浮かべてみせる。(ハラもすいてきたんなら、なんか食わしてくれんのやるか)

これは使い物にならないと、その視線をもう一度テンへ据えなおした。覗き込み、テンの動きを待つ。

だがテンは置物かと思まごうばかり微動だにしなかった。様子に珍しくも、痺れを切らしたようにメジャーは腕を振る

(テン、先ほどからあなたが何を考えているのか、おおよそ予想はついているつもりです。ですがちゃんと振ってもらわなくては、分からないではありませんか?)

それは、あえてテンの視界を遮るような動話だった。

(……これは)

指を折り、仕方なく絡めていた腕をテンは解く。ためらった後、

こう綴っていった。

(実験と、ちやうんか?)

(え?)

メジャーにとって、それが意外であったことは否めない。

(実験?)

繰り返していた。

と、ついにその隣で寝そべっていた一体は眠りに落ちる。間抜けた鼻笛が規則正しいリズムを刻むんだ。

(そういうことやる)

聞こえぬかのようにテンは動話を続ける。

(あいつ、言いおったな)

そこにいつものキレは戻り始めていた。

(処置は百パーセントやないと。おかしいやないか。俺らは百パーセント仕事をこなした。これは取引やぞ。せやのにその見返りはそんなもんでええのか? 俺らを何やと思うとるんや? やのに、そんな奴らへ俺はあいつを預けてもった。もしあいつに万が一のことがあったら、俺は他の奴らに合わせる顔がない。せやる? あいつがあかんかったからいうて、また誰か別の奴に行つてこい、言うんか? まさかどうなるか分からんモンに俺が出てゆくこともでけん。それこそ何かあったら、後に残された奴らが不憫や)

行き場をなくしたその手が宙をさ迷う。やがてフレキシブルソファへ埋まっていった。

つなぎ止める振りを見つけれずメジャーもまた、眉間を詰める。

前においてテンは再び手を持ち上げていた。

(あいつの振った通りかもしれん)

それは独り言のような動話だ。

(あいつ? とは?)

メジャーは問い返した。ならメジャーの顔色をうかがうテンは、まるでイタズラがばれた子供となる。

(確保した『ヒト』や。男の方のな。カウンスラーへ向かう途中、

ゲージの中で俺はあいつと動話を交わした)

(動話を？ それほど使えるのですか？ あの『ヒト』は？)

(せや。なんや、ここの研究かなんかで動話を担当しとったらしい。十分通じる動話をつかいよる)

(その彼が、あなたになんと?)

驚き開いた眉間を寄せて、吸い付くフレキシブルソファの上で身をよじるり、メジャーはテンへ詰め寄った。

(あいつが振るには、俺らは利用されとるだけや、と。連邦の思うままになれば、それこそ俺らの意思はとおらへんともな……。そうなれば俺はきつと後悔するともぬかしおった。そんな俺らの立場は似とつて、互いに大事なモノを守るため奔走しとるだけやと。あのとき俺はてつきり奴が命乞いでも、見逃してくれとでも訴えとるのかと思つとつたんや。せやけど違つた。何かがおかしい。こんなはずやなかつた)

と、しゃっくりの音がする。メジャーの隣で眠る一体だ。フレキシブルソファを窪ませもそもそ、寝返りを打った。

どうにも話の腰を折られたようで、テンは素っ頓狂な視線を向ける。知る由もなくそこで一体は寝言に肩を揺すっていた。様子に思わず頬は緩み、困つたような情けないような笑みのままメジャーへとテンは指を折る。

(これは、俺のミスや)

似合わぬ振りにメジャーが慌てたことは言うまでもない。

(まだ塩基負荷というものが失敗したと決まつたわけではありませんよ、テン)

(いや、かもしれんという地点で、もう取り返しのつかん所へきとる)

振つたテンが、眠る一体から顔を上げた。

(こいつらを助けられると気取つとつた俺が、アホやつた)
放ち宙を仰いでみせた。

(テン……)

そうして振り切り、テンはフレキシブルソファから立ち上がる。背後の調理台へと勢いよくきびすを返した。

調理台には電熱コイルもむき出しの、一口コンロと電磁調理器が数種類、スペースを惜しむようにきっちり積み上げられている。下には至れり尽くせりと、保存庫と思わしきステンレス製の扉もまた備え付けられていた。

（あの塩基負荷が成功しようがしまいが、俺はこの取引を諦めようと思ってる）

背中越しに上二本の腕でテンは放ち、下の手で保存庫の扉を開ける。屈んで中を覗きこみ、もう一本の腕で電磁調理器もまた開いた。保存庫にはちょうど、極Y郷土料理のミールパックが入っている。選んでテンはそこから二つを取り出すと、絡まりそうな腕から腕へミールパックをリレーさせ、電磁調理器へ放り込んだ。

（勝手やと思うのは、よう分かつてる。俺がみんなを巻き込んだんや。連邦がトニツクの動話を使ったからや、なんて言い訳はせえへん。それこれも全部、奴らは信用ならんちゆうことが、ようやく分かったんや。胸が痛んで初めて分かったんや。俺たちは俺たちが生き残る術をもう一度、連邦抜きで考えなおさなあかん。大事なモンを捨ててまで奴らに擦り寄ったところで、それは極Y民族が極Y民族として消滅してゆくよりも、たちが悪いっちゆうことがようやう分かったんや）

振り終えたその手で電磁調理器の扉を閉める。こもった音は響いて至極単純な操作ボタンをひとつ、テンは押し込んだ。電磁調理機内にオレン色の光は灯り、背にテンはメジャーへと振り返る。

（今さら何をいうとんねんと、笑いたいんやったら笑ってくれ）
あけっぴろげな様に、むしろメジャーは真顔となっていた。

（それとも愛想が尽きたゆうんなら、お前はお前の好きなようにしたらええ。他のやつらもみんなそうや）

さらしてテンは促す。

（せやけど、このカタだけは、きっちりつける）

頑なな振りが、そのときばかりは鋭さを増していた。

押されて取り戻したものがあるとすれば、そんなテンに見入っていたメジャーの我、だろう。そんなメジャーがテンを責めることはなかった。テンの期待に応えて笑い出すようなこともまた、だ。

(わたしたちは……)

ただ静かに指先で空を撫ぜる。

(……わたしたちは、テン)

それは自らに言い聞かせるようであり、何者かに操られているような動話だった。

(居場所を求めて、遠いところへ来すぎてしまったのかもしれないね)
つづる。

(……そうかも、知れへんな)

忘れていたような振りにテンは答えてしばし黙し、ままに申し訳程度、取り付けられた小窓へと視線を投げた。そこに黒い宇宙は広がると、強いられた緊張に瞬きを忘れ、張りつく無数の星をのぞかせている。

極Yは極Yでしかない。

(なんや、見うしのうとつたみたいや)

返せば、やおらメジャーが勢いよく腕を振り上げていた。

(なら、帰りましょう！ 故郷へ！)

大胆な動きはテンの目を奪う。

(それが一番ですよ。遠回りをしましたが、それでいいではないですか！ もういちど出直しです！ 心配しないで下さい。みんなも同意してくれるハズです。だからこんなに遠くまであなたについてきた。わたしたちは目的をひとつに、同じ釜の飯を食らった流浪の極Y船賊ではないですか。より良い未来のためなら、賛成しても憤るものなどいやしませんよ)

嬉々として綴り切った。

(……そう、やるか)

テンが戸惑えば、メジャーはさらに淀むことなくこうも振る。

(なぜなら、それこそが、わたしたちらしい！　そうではありませんか？)

それは理屈が通っているようで、まるで根拠のない自信だった。見せつけられたならテンはたまらず笑い出す。

(俺たち、らしい、か。メジャー、お前に励まされると、どうして、こうもその気になれるもんかいな)

と背後で不意に、電磁調理器が調理の終了を知らせた。甲高い鈴の音はひとつ鳴って、程よく温まったミールパックをテンは中から引っ張り出す。

(ようし、決まったんやったら、とにかくハラごしらえや)

パックに付属されたスプーンを引き剥がしつつ、フレキシブルソファへ戻った。メジャーへ手渡せば、辺りにはたちまち形容しがたい満足のおいは満ちる。おかげで夢うつつに溺れていた一体も、目を覚ましたようだ。寝ぼけまなこで身を起こしていった。

(なんや、エエにおいが……)

と目にしたものに、火が点いたかのごとく動話を繰り出す。

(あー、ボスウ！　ひどいわ。や、メジャーも！　勝手に自分らだけエエもん食べて！)

などと、テンがスプーンですくい上げている淡いピンクの団子は、極Ｙ地方ゆかりの食材、(マトペー)のフライだ。スープに浸されたその半分は、見ればヨダレが止まらぬほどに照っていた。

(食ったら、帰るぞ)

止まることなく(マトペ)を口へ運びながら無造作に、テンはそんな一体へ動話を綴る。

(え？)

読んだ動きが止まっていた。

(なん、なに、て？)

しどろもどろと問い返す。ならすかさずそれが役目と、メジャーが振って促した。

(自分の分は調理台であったためてください。食べ終わったら、ここを出る準備にかかります。この少人数ですから夕フな仕事になりま
すよ)

(い、いつの間に？ あの付加なんちゃらは？)

かき込むようなテンの食事スピードは早い。すでに食器の中の半分を平らげている。

(すまんの。お前らをこれ以上、危険な目に合わせるわけにいかへんのや。あの話はなかったことにする。極Ｙのこれからは、また一から考え直すつもりや)

最後にスープを喉へ一気に流し込んだ。カラになった食器を床へ放り投げる。見て取った一体が、食いつぱぐれまいと慌てて調理台へと駆け出していった。

(それから、どうしても確かめておきたいことがあるんや)

見送り、げふつと、テンはひとつゲツプを吐いてメジャーへ振る。視界の端に捉えてメジャーが、順調に処理しつつあった食器の中から目だけをテンへ持ち上げ返した。向かってテンは前かがみの姿勢を取る。そつと伝えて指を折った。

(俺らだけが、トンスラするワケにはゆかへんやろ。教えたんはあいつや。あの『ヒト』がどうなつとるんか、俺はどうしても知っておきたい、思うとる)

保冷庫から抜き取った代謝促進媒体が自然解凍するまで、しばらくある。

ディスプレイサブル注射器とバイオゲージ。投与中の激しい酵素分解に相当量のエネルギーが必要となることを見越して糖と電解質の輸液セットを二パック。シャッフルは立ち寄ったオフィスよりさらに持ち出し、痛む足をなだめすかしてラボの外を目指した。

分隊員はまだ相当数この船に乗り合わせているハズだったが、いまだ動きはない。警報はおろか出入りを遮断すべくウィルスカーテンさえ、照射レベルを上げようとはしなかった。

そこにシャッフルはクレッシェのあからさまな狙いを読み取る。ここは閉鎖空間だ。どうせ逃げ切れはしない。たかをくくっているに違いないと想像した。しかも待ちに待ったアルトが連れ戻されたところである。下手に騒ぎを起こし、遅れに遅れた計画へ水を差す真似だけは避けたいと考えているのだろうと思えた。その優先順位のつけ方こそいかにもクレッシェらしく、苦笑いすらもれる。

『F7』と外部を分け隔てる隔壁前に立てば、もうすれ違つ者はいない。

普段ならリーダーへ階級章をあてがい隔壁を開放させるところだが、さすがにできず、時間稼ぎくらいにはなるだろうと手動で隔壁のロック解除にかかる。

終われば、跳ね上がる門の音が聞こえていた。

やがて空気は抜け出し、隔壁がスライドしてゆく。独特の熱気を含んで膨張した外気は胸焼けするほどにシャッフルの前へ吹き込み、開き切るのを待たずしてシャッフルは出来たわずかな隙間からラボの外へと抜け出した。

正面に、下ろされた格納庫のシャッターが立ち塞がる。つい先ほ

どまで乗っていた巡航艇は、その向こうに停泊しているはずだった。ここが出入りの制限された場所であることを示して左右には、それ以外、何も見当たらない。

シャツフルはシャッターへ擦り寄る。

その脇、勝手口としてに取り付けられた開き戸に触れた。そこに取り付けられている鍵が、古めかしい物理鍵である、ということはかなり以前から知っている事実だ。確かめ、腰から抜き取ったスタンエアのグリップで二発、叩き落とす。格納庫の中へ足を踏み入れた。

その床を切り取ってひとところ、取り付けられたハッチを踏み込み跳ね上げる。内蔵されていたメンテナンス機材はすぐにもシャツフルの前へリフトアップされ、目をやることなくシャツフルは、そんなリフトの隙間へ身を屈めた。覗き込めば床下には暗く大きな空間は広がっている。他の格納庫とをつないでそこには、電源や燃料の補填装置が張り巡らされていた。

降りるとして、リフトと床の隙間は体を通るかどうかの幅しかなく、睨んでシャツフルはそろりそろり、と体を潜り込ませてゆく。突っかかりそうになったなら息を吐き、萎ませた身でどうにか頭までを床下へとくぐらせた。最後、手だけをその縁にかけてぶら下がり、そうつとダクトの上へ降りる。

当然ながら明かりはない。メンテナンスのためリフトアップされているのだろう。メンテナンス機材の隙間から点々、光が差し込むのみとなっている。作業にいそしむそれら格納庫こそ、今も続けられている遺体引き取りに現れた民間船が停泊するスペースで間違いない。なかった。

そちらへ出ることが出来たなら、安置所は目と鼻の先となる。

そこには無数の動かぬ有機体が並ぶと、保管すべく資材もまた数多くストックされていた。紛れ込めば傷の回復につとめるにはもってこいの環境だと思えず、シャツフルはひとたびそちらへと悪い足場を慎重に手繰っていった。

やがてこの辺りで十分かと、リフトアップされ、あいた隙間から光を投げる機材の下で歩みを止める。見上げて耳をすませば聞こえてくるのは、充電中の鈍い駆動音と液化混合ガスの注ぎ込まれる圧縮音だけだった。仕事もあるだろうに。フルオートのをそれらを番する義理もないなら、船の持ち主は置いて格納庫を去っている様子だ。気配へ耳を澄ませ、誰もいないことを確認する。

ならば、とシャツフルは被弾していない方の足でどうにか、切り取られた床の縁へと飛び上がる。頭をねじ込み、ゆっくり上体を持ち上げていった。嫌でも被弾した足へ力は入ると、その痛み具合から再トライは難しいこと悟る。だからこそ意地でも持ち上げた上体その胸を、格納庫の床へ貼り付けた。邪魔としか思えない下半身を、唸り声をあげて引き上げてゆく。

もう大丈夫だ。

思えば精根尽き果てごろり、床の上で寝返った。しばし各種機材のぶら下がる天井を見上げ、シャツフルは荒い呼吸を繰り返す。

近寄り、困む足音は依然として現れる様子が無い。少しばかり視線をずらせば案の定、典型的な装飾をプリントした霊柩船の舳先はそこにあつた。

呼吸が整ったところで体をしならせ立ち上がる。そうして霊柩船後部にある管制端末へ回り込んだのは、抜け出す前に艦の情報を見おきたかつたからだ。

床から飛び出す格好で据えつけられた管制端末の待機画面を指で弾き、直近のものから順にスクロールしてゆく入艦船リストをシャツフルは見下ろす。数から遺体搬送もいくらかピークを過ぎたらしいことを読み取った。と、紛れ流れてゆく字面に目を瞬かせる。

スラー葬儀社。

確かに今しがた、そう見えた気がしたのだ。そしてその名には何か引っかかるものがあつた。思い出すべく見直そうと画面を呼び戻

す。呼び戻された文字はそこで、あるうことかフェルマータ葬儀社へ変わった。接触不良でも起こしているかのように、またスラー葬儀社の名をちらつかせる。

見て取ったシャツフルの両目は見開かれていった。

そう、引つかかるものがあるはずだと思いつく。

なぜならスラー葬儀社は、いもしない『ラウア』語力ウインターのネイティブ店員を探しに現れた葬儀社の名だった。つまりとこころそれは、セフポドと何らかつながりがある葬儀社となる。

とたん腹の中で滑稽は暴れ出していた。堪えることなどできはしない。疲れと痛みと、身の上の混乱にさえもが追い討ちをかけ、自分でも理解できないほどシャツフルは大声で笑いだす。何しろ即席なまでにIDを偽造し現れたスラー葬儀社の目的など、セフポド救出以外、考えられない。無謀を越えたその行動は、ここがどこなのかを知らぬ無知ぶりを浮き彫りとしていた。

『何者かは知らんが、この程度の小細工で乗り込んでくるなど、クレッシェの前に立つことも無理だというしかないな』
吐いて笑いおさめ、管制端末を切る。

最後、鼻で小さく鼻いとはして外へと靴先を向けた。
が、足は止まる。

痛むからではない。

シャツフルの体は自然、管制端末へとよじれていった。

『……全てはクレッシェの思う通り、か』
ぼつり、呟く。

と同時に、光る瞳から瞬きは消え去っていた。やがてゆっくりその口は、不敵な笑みを模して歪められていった。

『着艦完了でやんす』

モデイが告げる。

じれつたいほどの旅路を経てたどり着いたのは、『フェイオン』
近郊に停泊中の臨時収容船だった。

『そら、どんな様子じゃ？』

急遽、備え付けた補助席からベルトを解いたサスが身を乗り出す。
モニターを凝視していたデミが鼻溜を振ってそんなでサスへ返して
いた。

『うーん、思ったより調子よくないみたい。認識してはもらえな
れど、このままだと偽造だつてバレちゃうかも』

現在、定員に合わせ霊枢船のコクピットには、この三体しかいな
い。残るライオンはチタン製棺桶の中に、学芸会かとグチるスラー
はトラと共にその棺桶を見守り、後部の納棺スペースへ身を隠して
いた。ゆえに今、船の操縦桿は到着を知らせたモデイが握っている。
その隣、モデイのいつもの場所にはデミが腰かけていた。

『上書きしたような感じだから、きつと二つのファイルの折り合い
が悪いんだね』

天井へ手を伸ばす。クリップに挟んで止めていたカードパソコン
を引き抜き、ヒザの上へ広げた。尻ポケットから抜き出したジャッ
クでパソコンと霊枢船のメインコンピュータをつなぐと、フォーロー
すべくキーボードを弾き始める。

『時間に制限がかかりそうかの？』

向かってサスは問いかけた。

『うーん、ぼくがついてたなら大丈夫だと思っただけ……』

『ちゃんと偽造データは消えるでやんすか？』

心配らしい。モデイーもまた口を挟む。

『うん、それは大丈夫だよ。これなら他の入艦記録もいくつか吹き飛ばしちゃうかもね』

デミの返答は打って代わって力強く、最後、鼻溜を揺らしてサスはデミの頭へ手をあてがう。

『ならば、ここはふたりにまかせたぞ。何かあった時は、いつでも船を出せるよう、スタンバイしておいてくれ』

『え、それどういうこと？』

言葉にデミが驚いたことは言うまでもない。

『社長が信用するサスの頼みでやんす。モディーは、了解したでやんす！』

伸び上がったモディーを見届けたサスもう、狭いそこできびすを返している。

『待つてよ、おじいちゃん！ ぼくもおねえちゃんを探しに行く！』

デミが呼び止めていた。

『いや、デミ。お前はここに残るんじゃ』

だが予感していたサスに慌てる素振りはない。

『最初から、わしはお前を連れてゆくつもりになかったんで。お前はここでお前の仕事をしておればよい。あとはわしとトラで済ませてくる』

ハッチへ降りかけていたそこから鼻溜を振った。

『そんなの……！』

などとデミも移動中、これでもかと戦意に闘志を詰め込んできたのだ。削がれてサスを睨み返した。相手にしないサスはそれきりだ。階段を下りてゆく。

『もうっ、おじいちゃん！』

唸るデミの隣から、消耗した船の燃料を補充すべくモディーもまた、抜け出していった。取り残されて立ち上がりかけ、不安定な偽造IDにかなわずデミはキーボードへ両手を乗せなおす。

『みんな、そんなのひどいよ……』

聞こえるはずもなくサスは、霊枢船を降りると船尾へ回り込んで

いった。

『待たせたの!』

納棺スペースのハッチを開けば、立体収納ならば最大二十四体は可能なそこで、かぶっていた酸素マスクをトラとスラーは引き剥がしてみせる。その手でスラーが棺桶の窓をノックした。いわずもがなそこにアルトは、いや、アルトを装ったライオンは横たわっている。閉じていたまぶたを開くと覗き込むスラーを、じっと両目でとらえてみせた。しかしながら窒息しないそのワケは、棺桶の足元に忍ばせておいたボンベとフィルターののおかげだ。

『中也大丈夫だ』

確認したスラーが返す。

『でなければ、困るわい』

笑い飛ばしてサスはさし示した。

『ともかく奥の機材を運び出してくれんかの。デミはなんとかなるようなことを言っておったが、いまひとつ偽造IDの調子がよくないらしい。バレンうちに済ませてしまわんとマズいことになりそうじゃ』

『分かった。力仕事はわしに任せろ』

かつて出たトラがさっそく身をひるがえす。納棺スペース奥、キヤスターに乗ったそれはサスの身の丈をゆうに越す黒塗りの四角い箱だ。抗Gネットから解いてトラは船の外へ押し出すと、管制端末の傍らへ据え置いた。

『この辺でいいか?』

『十分じゃ。よし、なら今から艦内を見せてもらおうとするかの』

両手をこすり合わせたサスが、管制端末を見据える。

『いまさらハッキングはヤバインじゃねーのか?』

などと、スラーはらしくない。

だがついに管制端末の裏へ手を伸ばしたサスの鼻溜は、愚問だと言わんばかり揺れていた。

『何を言いおる。そのために、このドデカい箱を持ち出したんじゃ

るうが。落ちてくる情報を閲覧するだけじゃ。こちら側からは仕掛
けたりせん』

幾度とない開閉に甘くなっていた管制端末、メンテナンス用のカ
バーを剥がしにかかる。中からケーブルが溢れんばかり飛び出した
なら、指でより分けサスはそのうちの数本を特定してみせた。執刀
医よろしく、スラーへ手だけを差し出し誘う。助手をつとめてスラ
ーはその手へ、黒い箱から伸びる色とりどりのクリップがひと束に
まと上げられたケーブル、そのうちの一本を握らせた。

『……って、落ちてくるったってなあ』

呆れて吐いた言葉は尻切れトンボだ。おかげでようやく飲み込め
たらしいトラ驚いたように会話へ割り込む。

『まさかここへ、この船の全情報が落ちてくるというのか？』

『にも耐えうるよう都合した。船内のマップなら比較的オーブリン
な情報じゃ。バーストする前に、めぼしはつくどわしは思うとる』

返して鼻溜を揺らすサスは順序よく、ケーブルの根元へとクリッ
プをかませなていった。滞ることなくその後もいくつかのクリップ
をスラーへ要求し、接続を終えた管制端末から体を抜き出す。前へ
回るとこの格納庫の位置を要求し、画面を操作した。

応じて画面が表示を始める。

その裏側でバシリ、シヨートするような音は鳴り響いた。

同時に黒い箱もまた唸りだす。

管制端末のモニターには、入力通り近辺マップが展開されていた。
マップは扉をくぐればそこに第二霊安所があることを、そうしたス
ペースがここには二十箇所も用意されていることを教えている。さ
らにはそれら霊安所を管理して、詰め所は霊安所内奥に設置されて
いることもまた知らせた。

恐らく『フェイオン』から引き上げられた遺体は、バックヤード
で処置を施されたその後、この詰め所を通り安置されているのだろ
う。

満足げに見下ろしサスは黒い箱へと歩み寄る。何の取っ掛かりも

ないようなその一角、窪むボタンをさらに奥へと押し込んだ。

ならホロスクリンは一枚、目の前に立ち上がる。そこから二つ、仮想トラックボールは宙へと弾き出された。

両手に取ってサスはそれらを引き寄せる。まさにホロスクリンを睨んだ。

『トラ、すまんがデミはわしと一緒ににはゆかん。もうひとりの社員はお前さんがなってくれ。ツナギはハツチの脇に掛けとる』

耳にしたトラがスラーと顔を見合わせる。その顔へスラーが、ワケもなくエラそうにアゴをしゃくってみせていた。見て取りうなずき返したトラは、たちまち霊枢船へ駆け出してゆく。

任せたサスの前でホロスクリンは、前後二枚に乖離してゆく。データはそんな二枚の間へ、三次元のブロックパズルよろしく次から次へ落ちてきていた。二つのトラックボールを扱いサスはそれらを回転させ、時には寄り、引きもしながらチェックを続ける。そのたびに落ちてきたデータから二次元のスクロールデータは展開され、必要に応じてそれをサスは脇へと添付した。また新たに落ちてきたデータの確認に取り掛かるを繰り返す。

『こいつぁ、すげーな……』

唸るスラーが思わず体を前のめりとさせる。

続けるうちにも脇へ寄せられたスクロールデータは幾重にも重なり、落ちてくるデータを取り囲むほどまでに膨れ上がった。それらを睨んでサスは一度、大きなため息を吐き出す。造語ならぬ『デフ6』言葉で何事かを呟いたかと思えば、添付データの順序を入れ替え、抹消し、新たなデータをまた開きにかかった。

あいだも二枚のホロスクリンの間へデータブロックは降り続ける。積み重なるまま岩のごとくサスの前に立ちはだかったなら、物音ひとつ立てていなかった黒い箱は増してゆく負荷に振動とも取れる鈍い音を立て始めた。

聞こえているのかどうなのか、それでもサスはわき目をふらない。オーケストラの指揮をとるがごとく絶え間なく両手を動かし、『デ

フ6』言葉を切れ切れに吐きながら作業に没頭し続ける。

いつしかデータブロックが、二枚のスクリーン間に収まらなくなるうとしていた。なら取り囲んで添付された二次元データも澱のごとくとたまりにたまり、視界は埋め尽くされてゆく。

『お、おい、サス。大丈夫か？』

見回しスラーが眉を詰めた。

と、そんなスラーの足元でダウンしたブレードが、湯気を上げ黒い箱より飛び出した。上部でもひとつ、その真下でさらにまたひとつ。立て続けに排出されてゆく。黒い箱の唸り声の凄味は増して、ピシピシとあらぬ音も中から聞こえた。

様子をサスがようやくチラリ、うかがい見る。

やおら周囲の添付データを片側へ寄せ集めた。

トラックボールをひねり、二枚だったスクリーンを再び一枚へ貼り合わせなおす。醜悪とも取れる巨大なデータ塊はスクリーンの間で押し潰されて消え、見極めサスは二つあったトラックボールの片方を、一枚に戻ったホロスクリンへと投げ入れた。残ったひとつで寄せ集めた添付データを、次々スクリーンへ放り込んでゆく。てんでバラバラに抽出されていたと思しきデータはそこでひとつに繋ぎなおされてゆき、サスがクリックすると同時に上へ一枚、窓を開く。開いてそこへ図面を投影させた。滲んで見辛い場所もあったがそれこそ、この臨時収容船の平面マップだ。

平面マップは見る間に立ち上がり、その姿を立体へ変えてゆく。

部位ごとに文字や色さえ書き込んで行く様は、まるで生き物の動きのようでもあった。

『すげえ、来たっ！』

だがただひと所だけ無記入、無彩色の場所は残される。

それは同じ階層、いわばこの船のド真ん中にあった。

と、マップの解像度がわずか劣化し揺らいだ。

見て取りピクリ、眉を跳ね上げたのはサスだ。

握っていたトラックボールを放りだす。

その手で箱の下部、押し込んだ窪みの下を叩きつけた。

すかさず吐き出されてきたのは光学バーコードで、すくい上げたとたんバーコードプリンタを搭載していたブレードもまた湯気を上げる排出される。最後に、ホロスクリーンはダウンしていた。

『ほ、間におうたわい』

『なんだソレ？』

四角い箱の方々からブレードが排出されてゆき、筐体へ押し込みなおしながらスラーは一仕事終えたサスの手元を、のぞき込む。

『コレはの……』

答えてサスは、ツナギの尻ポケットから電子地図を取り出してみせた。プリントされたばかりの光学バーコードを挿入すれば、そこへこの船のマップは投影される。

『どうだ？ うまくいったのか？』

ツナギに着替えたトラが駆け戻ってきていた。

ニヤリ笑ったサスはまったくもって不敵、極まりない。電子地図をトラへ突き出し鼻溜を振る。

『まあ、見ての通りじゃ。おかげで一台、売りモンの大事なサーバーを、ダメにしてもうたがの』

見上げたそこで黒い箱は、溶ける寸前と煙を吐き続けていた。

残して格納庫を後にする。だからといってこの広さだ。探して全てを見回ることなど不可能だった。さしあたって手近にあるのは第一霊安所と、第二霊安所である。比べてどちらが閑散としているのか、確かめるべくスラーは軍服姿で船内を闊歩した。お眼鏡にかなうのが第一霊安所だと判断したのは、明らかに横たえられたボディバックの数が少なかったせいだ。伴い、出入りする業者や遺族の数もまばらときている。おかげで霊安所奥の詰め所作業も激減している様子で、駐在する優勢二十三種中の『ホグス』種担当官は、光の消えたモニターが埋まるデスクへ覆いかぶさると、まさにこの船の中で船をこいでいる最中でもあった。

さて、いかに不合理的な要求であれ、強引に相手にのませる方法があるとするれば、それは何か。いくなればそれは有無を言わず場の心理的主導権を握り、相手の上位に立つことだといえよう。そう、古式ゆかしき戦法、強襲だ。

遺体引取りにいそしむ葬儀業者へはご苦労、と腕を振り、うなだれる遺族へはご愁傷様でしたと声をかけ、スラーは将校気分で詰め所へ向かう。そうして詰所の奥、仕切るウィルスカーテン向こうに伸びる通路へと目を凝らした。

さて、これから繰り広げるのは、そんなウィルスカーテンを潜り抜け、内部へ侵入するために欠かせないシヨールである。備えてスラーは仁王立ちとなった。背中へ回した両手を固く組み、腹の底まで息を大きく吸い込んでゆく。この戦法の成否を賭け、最初一喝を『ホグス』へ放った。

『くおわらあつ！ 何を、しとーるっ！』

『ホグス』がデスクから、とたん爆発的な勢いで跳ね起きた。腰掛けていた椅子は弾け飛び、形状記憶合金がごとく直立不動とスラー

ーの前で伸び上がる。

「……った！ はいっ！ も、申し訳ありませんっ！ ソロ軍曹殿
！」

などと、そもそもこの船にこうも旧式な上官が存在するのかどうかは謎である。だがいつしか刷り込まれたステレオタイプほどイメージを誘導しやすいものはなく、何より目の前の「ホグス」がそれを証明してみせていた。寝起きとは思えぬほどの滑舌のよさで答え、くっていたヨダレを慌てて拭う。そうしてようやく目の前に立つ「エブランチル」がソロ軍曹ではないことに気づいてまじまじ、スライを見つめた。

「あ、あの……」

どこのどなたか、と訪ねたいらしい。だが自ら走らせたシナリオが、すでに彼の立場を制約している。それ以上が許されるはずもなかった。

「貴様のせいだった？」

この藪から棒がいいのだ。見切つてスライは口を開く。得体の知れぬ責任を負わせにかかった。

「は？」

「ホグス」は目を瞬かせるが、制約により割り振られた役割こそサボタージュの発覚したダメ軍人なのだ。ここでも違います、何のことでしょうか、などとぬけぬけ質問ができるはずもない。

「も、申し訳ありません。以後、このようなことがないよう、気を引き締めて任務に当たります」

シナリオにのっとり吐けば役割は、なおさら「ホグス」に馴染んだ様子だった。

「ソロ軍曹からF7のことは聞いておつたらう。だのになんという失態だ！」

つけこみスライはたたみかける。聞いたばかりの「ソロ軍曹」と「F7」のを混ぜ込み「ホグス」の反応をうかがった。ならそのタイミングは絶妙だったらしい。ピンゴを示して特徴でもある皮膚の

凹凸を、『ホグス』はキュツと引き締めてみせる。

『ですがそれは管轄が違いますので……』

つまり『ホグス』は『F7』のことを知っていた。だというのに逃げを打つなら追うが道理だ。スラーはいきり立つ。

『だからなんという失態だと言っておるのだっ！』

怒りをぶちまけた。いまだスラーの中にも設定されていない『失態』を引き出させるべく、次の段取りへ取りかかる。なら『ホグス』は今、サボタージュが発覚したダメ軍人である。指摘されたとたんあるはずの『失態』を自身の中に探し始めた。やがてはっ、と息をのむと全身を硬直させる。その顔をスラーへと跳ね上げた。

『F7付きの格納庫で何か？』

『回収したヒトを移送して来た。向かいの格納庫に安置してある』
来た、とばかりに打って返すスラーにこそスキはない。

『いえ、待つてください。二七〇〇セコンド前、ヒト、二体、F7専用格納庫から搬入済みとなっているハズです』

ひとつ、揺るぎない事実はどうして手に入る。

『まだ他に？ 失礼ですが、その制服は一体どちらの……』

が、聞き返されていささか焦った。とはいえそこでうわ滑れば、主導権を相手へ移すことになる。取り繕うなどナンセンスだ。むしろスラーは『ホグス』が唯一、見せたスキへ逆転の足払いをかけた。

『まだ他に、だーっ！』

一喝に躊躇はない。

『それが貴様の仕事だろうがあっ！ 先に搬入されたのは一体だ！ 残りが届いた際はF7へ通す！ 専用格納庫は今、先の船のメンテナンス中で利用できんからして、急遽こちらへ回るよう変更の連絡はあっただろうが！ 格納庫ナンバー〇〇〇。うたたねなどで見逃しおって！ きさま、やる気はあるのかあっ！』

散漫としつつあった成り行きを『うたたね』の、アタマまで一気に巻き戻しにかかった。

『もっ、申し訳ありませんでした！』

おかげで伸び上がった『ホグス』が、折れんばかりに頭を下げる。なら鉄は熱いうちに打て、だった。

『分かればボヤボヤするな、早く行け！ 葬儀社が棺を構えて待っている』

『はっ！ 任務にとりかかります！』

力のこもった敬礼が美しい。

だというのに代わりの常駐官を呼び出そうとするのだから、これまたマズかった。

『かまわん。一刻を争う』

スラーは遮り口を挟む。

『ここはわたしが預かるう』

怒鳴りつけていたところから一転。着せる恩で押しとどめた。振り返った『ホグス』の顔はまったくもって、これほどまで親身になつてくれる上官はいるのか、といわんばかりだ。果てに、妙な一体感まで生まれたりもする。

『も、申し訳ありません！ それでは、よろしくお願いいたします』

『覚えておけ。つまらぬへマさけしなければ、お前もいち軍人として故郷に錦を飾ることができなのだぞ』

だからこそ吹き込んでやる、さらなる使命感。

『みなのお喜び顔が見たいだろう？』

それは眠るほど退屈していた『ホグス』にとって、じいんと響く言葉にさえなる。とたん瞳は輝き、腹からスラーへ答えて返した。

『はいっ！』

逃さずスラーは追い討ちをかける。

『かまわず、行ってこい！』

それこそあの夕日に向かって、と。

受けて再敬礼した『ホグス』が駆け出していた。

そう、その実、降格へ向かって。

見送りスラーは一つ、息を吐いた。謎の熱血上司を切り上げると、緩めた軍服の襟の中から通信機のマイクを引きずり出す。

『そつちへ詰め所のホグスが向かったぞ。たたんで、早く来い。俺は今から入艦データの抹消にかかる』

『了解』

答えて喉元のシワへトラは通信機を押し込む。

『来おるのか？』

隣でサスも鼻溜を揺した。

『サスは手を出すな。わしが片付ける』

『の、方がよさそうじゃの。頼んだ』

もう意地を張る歳でこそない。

そんなふたりの足元には、霊柩船から下ろされたチタン製の棺があった。挟んでふたりにこやかに立てば、小さすぎるサスのせいでトラの巨漢はやたらと際立つ。ままに『ホグス』を待ち構えた。

と、よほどスラーがうまくたきつけたのだろう。ややもすれば格納庫の勝手口は押し開けられる。投射されたウィルスカーテンを潜り抜け、軍服姿の『ホグス』は格納庫へと駆けこんできた。

『まことに遅くなりました。回収物をF7までお通しいたします』
なら放つ言葉は、それこそすぐにもばれるウソで十分だ。

『ご苦労様です。まずは中の確認を』

トラが似合わぬ口調を繰り出し、ひたすらニコニコ笑ってサスもまた『ホグス』を促す。

『ご苦労ですの』

答えることなく使命感に燃えて『ホグス』は棺に空いた小さな窓を覗き込んだ。『フェイオン』事故発生直後、遺体の引き上げがあった際は報告が義務付けられていた『ヒト』はそこに横たわっている。

『確かに』

と、棺の中でその目は開いた。死んでいるのだと思込んでいただけに『ホグス』はぎよっ、と息をのむ。思わず生き返った、とい

いかけたところで彼の記憶は途切れていた。

『痛そうじゃのう……』

サスが目を細める。

窓を覗き込んで前屈みとなっていた『ホグス』の頭を、思い切りチタン製の棺へ叩きつけたのはトラだ。

『かまっておる時間はない』

その手を緩め、力の抜けきった『ホグス』の体を棺から引っ張り降ろす。

『いやはや、そうじゃった』

棺のふたを押し開ければ、中からアルトは身を起こした。

『実にいい音だった』

だが、声はライオンだ。『ホグス』の頭蓋骨が上げた悲鳴のことを言っているらしい。

『しばらくは目を覚まさん』

答えるトラに愛想はなかった。

『だろうな』

ライオンがアルトのまま棺を抜け出す。そうしてトラから『ホグス』の体を引き受けた。

『これの始末はわたしがしておく。ご老体とトラは先を急げ』

預けたトラのシワが弾む。

『分かった』

葬儀社の偽造IDをサスが格納庫の扉へかざした。読み取った扉は開き、ふたりは表へ繰り出す。

残されライオンは、空になった棺桶へ『ホグス』の体を放り込んだ。中の酸素濃度をホグスに合わせ調節すると、惜しむことなく棺桶をロツクする。

ならその光景は自然だった。

詰め所を訪ねる葬儀社社員が、二体。

入艦記録抹消の最中だったスラーは見つけて、駆けつけたトラとサスへ顔を上げる。

『よう、来たか。あのホグスは？』

『ライオンが棺桶へ放り込んでくれている。済んだなら、こっちのフロローへ来るハズだ』

手短にトラは告げた。

『守れる限りはここに居座るが、無理なら離れるぜ』

『かまわん。その時はデミを頼むぞ、スラー』

『悪いがそれは俺の役目じゃねーし、あんたも真剣には言ってるねー』

サスは目を細め、軽く突っぱねたスラーはこつも付け加える。

『間違いなくF7って場所は存在して、すでに二人は運ばれてやがる。ホグスからの情報だ。いるぜ、必ずな』

『そうか。ならば、ますますここで引き下がるわけには、いかんの』

サスが鼻溜を揺らし、トラを見上げた。受けた視線にトラも振り返ると、サスヘアゴを引いて返す。ふたりはそれを合図に、詰め所奥へ続くウィルスカーテンへ身を翻した。オレンジ色のそれをくぐり抜け、向こう側へと足を踏み出す。

『さてと、ありふれた場所には用がない。あるのは、この中央の不明区域じゃ』

見回して懐から、早速サスは電子地図を取り出してみせた。

『じゃが、そこへ通じる道はここだけか』

指は早くも地図を拡大し、しばし右へ左へスクロールさせている。やがて固定されたのは不明となっている区域とこのエリアを繋ぐ唯一の部屋だ。凝視しサスは、その呼び名をなぞっていった。

『特殊医療区、保安所か』

目指す方向へと顔を上げる。

『さあて、どうみても、わしらが主要二十三種に見えんことは確かじゃ』

用のなくなつた電子地図をツナギの尻ポケットへ押し込むと、通路を進んだ。

『ともかく遺体を引き取りに来て迷い込んだとトボけるぞ。なに、もうろくじじいの芝居なら、わしにまかせておけ』

『ならわしは、さしづめモディー路線でゆくか？』

サスは息巻き、負けじとトラも吐く。

歩く通路は見通せる限り誰もいない。都合に合わせて作りつけたいきさつをつかがわせ、規則性も何もない分岐を左右に伸ばすのみだった。壁面など、船の外観からでは想像も出来ぬほどケチ臭く、どうにも的はずれの注意を促すホログラムメモが張り付けられたまま焼けたホロスクリーンを灯しているありさまだ。どう見ても管理はずさんを極めていた。サスのみならずトラさえ眉をひそめる。開かせて、声はあらぬ方向から聞こえていた。はっ、と我にかえり、ふたりは見つけたわき道へ急ぎ、飛び込む。

ややもすれば目の前を、『ホグス』と同じ軍服を着た『バナール』三体は通り過ぎていった。息を潜めるトラとサスに気づくことなく、霊安所とは別のわき道へ通路を折れてゆく。

『聞こえとつたか？』

見送りサスが、隠れていたそこから頭をのぞかせた。覆いかぶさり後ろから、トラもまた大きな体で乗り出す。

『またF7で発砲騒ぎがあったらしいとか、聞こえたぞ』

『うむ。アルト、かの……』

サスの鼻溜が渋く潰されてゆく。

『縁起でもない。そのジャンク屋はネオンの頭を吹き飛ばすとか言

つておつたのだらう。たとえ相手が違つていても、発砲されては困る」

『次を右じゃ』

もついいだろうと、戻つた通路でサスが示した。

ふたりして現れた三叉路を折れたとたん。内装は百八十度、様子を変える。これまでが嘘のように通路は広くなると、床に壁に天井へと有機媒体のウォールペーパーは張り巡らされた。異質な二才イはシャットアウトされ、はめ込まれたホロスクリーンも明るい。なによりスクロールする情報は几帳面と整理されていた。管理の管轄が変わつた。思わずにはおれない。だからこそ通路へ踏み出す前、うがるサスの足は止まる。

『監視カメラでもあるのではないかの？』

『あつたところで広い船内、誰が全てを見張るといふんだ。駆けつけてくるまで、時間はあるぞ』

豪快にトラは一蹴してみせる。

『それもそうじゃな、ということにしておくかの納得するしかない。』

『保安所というのは、まだ先か？』

トラが確認したのは、この先しばらく身を隠す分岐が見当たらないせいだ。

『かなりの。じゃが、いちかばちかの手もあるぞ』

鼻溜を振つてサスは付け加える。

『いちかばちか？』

目を瞬かせるトラへ、頭上を指差した。なるほど天井には空調、配管、配電、通信中継基地をマークして貼られたタグがハッチを封している。

『もぐりこむのか？』

察したトラが口をすぼめた。

『わしならば問題ないと思うんじゃが……』

そうしてサスが見回すのは、なにはともあれトラの巨体だ。

『ええい、その目はなんだ。その目は。たとえ火の中、水の中。ネオンの元へ一刻でも早くたどり着けるといふのなら尻込みなどせん』
サスはしばし、うーん、と唸る。

『なら、わしが最初に中の様子を見るとするか。よし、トラ、わしを持ち上げてくれ』

任せろ。いわんばかり、トラは軽々サスを肩へ担ぎ上げた。上でサスはなお立ち上がると、空調スペースのハッチからタグを剥ぎ取る。ハッチは片側を固定して落ちるように開き、肩で交わしてサスは持ち上げたアゴで中をのぞきこんだ。が、見極めるヒマもない。

『サス……、誰か来た……！』

足音だ。持ち上げるトラが声を殺す。

『なにい？』

うめいたサスの決断はこうだった。

『そら、上へ隠れるぞ』

トラの頭を蹴りつける。空調スペースへ潜り込んだ。おつつけトラも開いた扉を見上げる。天井は無理だとしても、ジャンプでぶら下がるハッチを掴んでみせた。が瞬間、トラの体重にメキメキは鈍い音を立てる。聞きながらサスは伸ばした手でトラを掴んだ。力の限りに引っ張り上げる。

『つて、わしでは、無理じゃあ……っ』

それでもどうにか、トラの頭が天井にのぞいたならサスは尻餅をつき、そうして放り出された手でトラは、開いた天井の縁を掴む。

鼻息も荒く胸回りにちようどのスペースへと一気にその身を持ち上げていった。

引き込んだ足の下からやがて近づき増した靴音は聞こえてくる。息を殺し、サスと通路を覗き込んだ。視界に一体の『エブランチル』は姿を現す。なにやら手元の端末で書類チェックを済ませているらしい。開いたままのハッチに気づくことはない。ただ行き過ぎていった。

『踏み切って大正解じゃったの』

だがもぐりこんだその場所は、立ち上がるにもサスですら少し狭いほどだ。つまりトラには始終、四つんばいを要求する広さしかない。

『まったく』

ぼやいてトラはぶら下がり、開いたままとなっている扉へ手を伸ばした。閉めようとしてピクリとも動かないそれに眉をしかめる。

『ん。おお？ んん？』

どうやら飛びついた時、トラの重さに歪んでしまったらしい。そこを力任せと引き寄せたなら、止め具は壊れてすっかり握っていなかったトラの手からハッチは落ちていた。

鳴り響く甲高い金属音。

『マズい』

『こつしちゃ、おれんわい』

まさにあたふた、逃げてふたりは先を急ぐ。

破壊されたクレツシエの部屋、そのドアを開くために少なくとも五〇〇秒コンドの時間を費やしていた。リーダーを粉碎したダイラタンシーベレットは流動弾独特の粘度でもってしてこびりつき、分隊員総出による復旧を強いている。

間中、クレツシエは仮想デスクへ張り付いたきりだ。確かにシャッフルがああなった以上、プロダクトルームの指揮権は全てクレツシエにゆだねられている。その忙しさは分隊長にも分からないではなかった。しかしながら負傷者へ見向きもしない態度はどうにも目に余る。仮にもクレツシエの盾となり一体は命を落としたのだ。シヤッフルの乱心も分かるような気がしてならなかった。

と、ドアがにじり、開かれてゆく。

あいたわずかな隙間から、やおら白衣は身を擦りつけながらもぐりこんできていた。負傷者救助に駆けつけたのか。思うがこれまた一直線とクレツシエの埋まる仮想デスクへ向かっている。

『不躰な入室を失礼いたします』

だからして白衣こと、トパールはクレツシエへまくし立てていた。

『取り急ぎ、進行状況の報告を』

もちろんここへ足を運んだ以上、それは通信で済むような内容ではない。だからしてなおのこと順序を間違えまい、と焦っていた。

『極Yの塩基付加は予定通り処置が終了。現在処置室にて経過を観察中。遅くとも七八〇〇秒コンドまでには結果が現れる予定です。また……』

と、そこでクレツシエの顔は持ち上がる。

『あなたは確かトパール・ジツク、35クルーでしたね』

話を遮られてトパールは息をのんだ。焦る気持ちをどうにか抑える。

『は、はい。そうです』

『結構。あなたの動揺はよく分かりました。結論から申し上げます』

それが『エブランチル』なのだ、ということは分かっていた。だが必ずこちらの話を最後まで聞き入れてくれるシャツフルとの違いが、トパールを戸惑わせてならない。

『あなたが探しに来たシャツフル中尉は、五七〇〇秒コンド前をもつてしてF7ラボ専属軍医の任務を解かれました』

あまりに唐突な辞令が戸惑いへさらなる拍車をかける。

『近く本国へ帰還、新たな赴任先へ向かうことが決定しています。』

ラボへは戻りません』

にもかかわらずクレツシエは、驚くトパールの方がどうかしているといわんばかり淡々と続けていた。

『他に、質問は？』

問うが、質問を受け付ける気こそないらしい。待つ時間すら惜しんで休めていた手元は再開される。仮想デスクの上で止まっていた二重螺旋もまた、ゆっくり回転を始めていた。

背後では分隊員たちが負傷者を介抱し、まるきり動かなくなった一体が外へ担ぎ出されている。

だがトパールには、問うべきモノだけが黒い穴をのぞいたように、

まるきり見えてこなかった。ひたすら頭が着込んだ白衣同様、真っ白に塗りつぶされてゆく感覚に溺れる。

クレツシエがちらり、そんなトパールを盗み見ている。

『なければ……いえ、質問できないようであるならば、ただちに仕事へ戻りなさい。まだ中尉の後任は決まっておりますが、それまでわたしがラボの指揮をとります。状況報告は以後、通信で結構。わたしの手をわずらわせないように配慮いただきましょう』

『申し訳……、ありませんでした』

言葉は、それ以外に浮かばない。埋めて脳裏をちらつくのは『カウンスラー』の音窟内で目の当たりとした旧『F7』ラボ従事者の姿だ。困う極Yを肩で振り払い、唐突にトパールを呼びとめ、シャツフルへ反抗的な目を向けたあの姿は蘇る。そして彼なら今ここでクレツシエに質問することができたろうか、と考えた。根拠もなく、彼ならやってのけそうだとトパールは感じ取る。

シャツフルが吐きつけた通りなのだ。何か、どこかが違っていた。だがその違いが何であるのか、トパールには分からない。分からないことが、もどかしさを募らせた。そのもどかしさは何か大事なものが己には不足している、とトパールを責め始める。

何が、と探ったところで、すぐにも見つけ出せそうな気配はない。質問など、とうてい諦めるほかなかった。

トパールは仮想デスクへ背を向ける。撤回してゆく分隊員たちに混じり、分隊長の張り上げる声を聞きながら自律稼働を始めたドアをくぐり抜けた。

『待ちなさい！』

その背を、唐突なまでにクレツシエが呼び止める。

何事かとトパールは振り返っていた。そこでクレツシエはちょうど仮想デスクから立ち上がったところだ。

『たった今、イルサリの自閉が解けたと報告が入りました。あなたはただちにリンクルームへ、アルトの矯正が可能かどうか最終チェックを。結果を報告。可能ならば即座に作業へ取り掛かります。準

備をなさい』

質問できないのだから、聞き入れるしかない。トパールは再びその頭を、クレツシエの前に深く下げていった。

上げた頭できびすを返す。

『イルサリが自閉を解いた。これからわたしはリンクルームでチェックを行う。チェック後、可能ならば即アルトの再矯正を開始。至急、中断していたアルト複製塩基との照合解析を再開、準備にかかれ』

防磁ドアを据え置いたイルサリのリンクルームはクレツシエの部屋を回り込んだ向こう、Y字となった通路片側を奥に進んだ位置にあり、向かって足を進めながらトパールは片耳へ掛けたままのマイクからプロダクトルームへ指示を飛ばした。

『もう一点。極Y塩基付加の進行具合はどうなっている？』

『今のところ順調です。代謝スピードも安定。体温の上昇は現在も続いています。これは代謝安定とのタイムラグで頭打ちになることが予想されます』

付け加えて返された答えにうなずく。

『了解。落ち着いたところで手の空いた者を順次、アルトの矯正へ移行させる』

『了解』

軽く引いたマイクを巻き上げ、現れたY字の右を選ぶと足を進めた。

と、すぐにも目に入ってくる突き当りの壁で防磁気ドアが、不意に通路側へと浮き上がる。開き潜り抜けてきたのは、彼だった。疑うまでもない。彼がイルサリの自閉を解いたのだ。直感はずトパールの中で働いていた。そんな彼と自然、目は合い、与えたはずの白衣が早くもなくなっていることに啞然とする。

感度はかなり低いものだったが、あれはあれで最低限のウィルス濃度と菌種を感知できるシロモノなのだ。それは自らの汚染度合い

を把握するためであり、有機体の生成過程において清潔を保つべく徹底され、職員として手放すなど考えられないことでもあった。

脱ぎ去った彼の様子はいまだ続く反抗そのものと、トパルの目に映ってやまない。気に留めぬ毅然とした態度もまた、注意を払い、神経を使い続けてきた己へのあてつけかと気に障った。すぐさま正しい衝動がトパルを襲う。どちらが間違っているのか。いや、自らの正当性を維持するためにも、今すぐ正して思い知らせてやりたい思いがトパルの中を巡る。

だがそうして騒ぎ立てれば騒ぎ立てるほど、消しようなく浮かび上がってくるものはあった。もう隠すことなどできはしない。嫉妬だ。タブーを打ち破ってなお平然としている彼に、だからして彼なら質問できただろうと想像してしまったことに、トパルは強く嫉妬していることを意識せざるを得なくなる。

『お疲れ様というべきでしょうか？』

すれ違つかというその時、彼へ口を開いていた。

そんなトパルを中へ促し、防磁気ドアを後ろ手に支えて彼は複雑な表情を浮かべている。

『クレツシエが言うように理解するなら、俺は俺の仕事をしたままで。いたわられるような事は何ひとつやっちゃあいないよ』

答えずトパルは開いたままの防磁気ドアへ手をかけた。ひと思いと押し込みドアを閉め切る。入るのではなかったのか。彼が不可思議そうな顔を向けていた。

『中に影響が出ます』

教えて返す。

『あの騒動のせいでイルサリの取り扱いもややこしくなったもんだ』
失礼、いわんばかりに小首をかしげた彼は、それきりトパルの片側をすり抜けていった。

『あなたはあの時、わたしの名を呼びました』
背を呼び止める。

振り返った彼は何の話なのかすぐに飲み込めなかったらしい。し

ばし眉を寄せてトパルの顔を見つめ返していた。

『トパルと……、三四クルーと見間違えたただけだ。気に障ったなら、謝る』

言葉は、何をや気遣いに淀んでいる。

『それは一世代前のわたしでした』

『シャツフルじゃあるまいし、そうやすやすと言っなよ』

これでは気に障っているのがどちらの方だか分からない。返せばすぐさま彼は舌打ちしてみせていた。

『覚えていますか？ 何が違つと、尋ねられた軍医の言葉を』

だからこそトパルも声を張る。

『ここであんたも俺を殴る気だつて？』

挑発的な口調で彼は茶化すが、その誘いに乗るはずもない。

『何が違つ……と、あなたは考えます？』

ただ返す。

『何も変わらないさ』

『軍医は先ほどのプロジェクトから、ラボからはずされました。

その際、発砲騒ぎが起こつた様子です』

『シャツフルが？』

軽くあしらつたはずの彼が様子を変える。

『で、どうなつた？』

とたん、トパルは奥歯を噛み締めていた。それこそが投げかけることの出来なかつた自らの質問なのだ。慕っていたはずの軍医の顛末。それをいとも容易く聞き返してきた彼に、なおさら嫉妬心は湧き起こる。

『違いなどない』

気づけば口走っていた。

いや、根本から違つたのさ。

聞こえたような気がして、自ずと口調を強めてゆく。

『わたしたちは有事の際、殲滅を防ぐため多少の揺らぎをもって生成されたとしても、原型をラボが管理する同じ塩基から派生した有

機体だ。時間さえあれば、そんな質問などわたしにもできた』

食らった彼は、ただきよんとしているようだった。

やがて成り行きを察すると、その目を訝しげとトパールへ細める。

『クレッツシエにシャツフルのことを聞かされてすぐ、ここへ来るよう指示されたのか？』

図星だからこそ目は逸らしてしまう。

『わたしにとって軍医は最も信頼した上官だった。気にならないはずがない。だからこそ確かめなければならなかったのに、どうすればそれが出来るのかあの時、わたしには分からなかった。時間さえあれば……、時間さえあればわたしにもできたはずだ。あなたに出来て、わたしに出来ないハズがないんだ』

繰り返せば彼の声は、見かねたように聞こえていた。

『違いがあるとするとするなら……』

トパールは勢いよく顔を跳ね上げる。彼を見る目が傷にでも触れられたかのように、縮んで吊り上がっているのが自分にもよく分かった。だが彼が怯むことはない。話して聞かせる口調はそれまでと、なんら変わりのないものだった。

『……あんたはかつての俺がそうだったように、まだ自分の言葉を持つてないだけさ。ただ今の俺には俺だけの感覚つ、てやつが確かにあるんだ。土くれからでもなんでもいい。生まれてここへ切り離された、これが俺だと言う、そんな感覚がな』

『自分の言葉？ 生まれてきた感覚？ それは単なるあなたの曖昧な主観だ。それが違いだと？』

『思うだろ？ だが否定できないほどちゃんとあるんだ。その得体の知れない混沌としたものが、ここにな』

指先で、彼は自らの指を突いてみせる。

『だから誰にもさらわれない、俺のだけルールで動ける』

小さくトパールへ微笑み返した。

『曖昧だと切り捨てるあんたにや、俺のマネはできないよ』

それこそが、わたしにはない。

過れば跳ねのけたい衝動が、またもやトパールを突き動かしていた。
『理解できないものに価値などない』

『そいつは、クレツシエに毒され過ぎだぜ』

『なら、あの事件に加担したわたしも、三四クルーのわたしもそう
だったのか？』

確かめれば、それまで続いていた会話にしばらくの間は空く。

『ラボでアルトの……』

言いかけて彼は一旦、言葉を切った。思い出した何かを辿るよう
にゆっくりと、再びトパールの前へと連ねてゆく。

『俺が一番そばにいただけで、ラボでアルトの矯正過程に加わった
有機体は少なくとも、その片鱗を埋め込まれていたのかもしれない
な』

いつしか繰り返す呼吸に肩が揺れ動いていた。そんなはずはない。
トパールは落ち着け、と己へ言い聞かせる。

『外に出る』

呟きは、今こそ必要なものだとしか思えない。

『外？』

このプロジェクトを完成させ、潤滑に動く等しき世界の外へ出る。
リスクを負う支配者の世界に住まう者となる。『カウンスラー』で
シャッフルと交わした言葉は鮮烈な驚きと共に、トパールの中に強く
残っている。そして今、彼への嫉妬心を抑える手立てがあるとすれ
ば、これしかないと思えていた。

『そこへ出たなら違いなどと、すぐにも勘違いであることは明らか
となる』

吐きつける。

防磁気ドアへと手を伸ばした。

引き開け中へ足を踏み入れたなら、監視していた白衣たちは振り
返ってみせていた。

ほどなく離れた場所で、あれほど清潔感溢れていた部屋へ鉛臭さは充満してゆく。たプラグが再びスパークショットへ差し込まれたせいだ。

(やっぱ、このニオイですよ。ボス！ 血が騒ぐー！)

最後、ミールパックをたிரらげた一体が、腰掛けたフレキシブルソファの上で腕を振り上げた。

(どないや、バッテリーの残量は？)

取引を中止する。そう決めたテンの動話にはいつもの力強さが戻っている。

(ダメですね。無放電時間が長かったことと、プラグを外していたせいでしよう。ほとんど残っていません)

答えるメジャーが手元のゲージをのぞきこんで眉間を詰めた。

(具体的にどれくらいや？)

テンが振れば、メジャーはゲージからそんな顔を持ち上げる。

(フルで一三〇百二十秒)

短くつづる隣でもう一体もまた、指を折り返してみせた。

(九五)

(こっちは、一四五秒)

テンも知らせて最後に振る。その手でピシヤリ、右股を打ちつけた。

(しゃあない)

搾り出す。

(ええか、残り放電時間五〇秒や。切ったらお互い、知らせる)

メジャーともう一体へ交互に視線を走らせる。双方が神妙な面持ちでテンへうなずき返したなら、見届けテンは打って変わって明快

と腕を振った。

(それからどや、クロマに連絡つきそうか?)

その動話にメジャーの隣から弾かれたかのごとく、一体は立ち上がる。腰掛けていたフレキシブルソファをまたいで後ろへ飛び降りると、床へと屈み込んだ。そこには手のひらほどの大きさのビーコンが、動作中を示して黄色いランプを点滅させている。

限られたスペースの関係上一式を取り揃えるわけにはゆかないが、個々の好みやグループ行動時のバランス等を配慮し、船賊たちは自分のガスマスクの中に翻訳器やビーコン、非常食に解錠ツール、予備バッテリーや救急箱であるところのファーストエイドセット等のいずれかを誰もが忍ばせている。もちろんテンがこの一体を連れてF7へ乗り込んだのは、彼がビーコンを仕込んでいる、と知っていたからでもあった。

(作動中です。ただ通信機とはちやうんで、問題はこいつの信号をクロマが気づいてくれるかどうか、ちゅうところですよけれど)

旧式の地雷にも似た楕円のそれをつまみ上げて一体は、動作を確認し、ひとつふたつ、裏面のパネルをいじる。そこへテンは動話をかぶせた。

(大丈夫や。あいつやったら見逃すはずがあらへん)

(だからクロマを船へ戻したんですね)

メジャーもテンへ微笑みかけた。様子はいかにも楽しげで、テンも思わず小さく笑い返す。引き締め、その肩へスパークショットを担ぎ上げた。

(ほな、いくぞ)

フレキシブルソファから立ち上がる。

(はい)

同じくメジャーもソファから尻を抜いた。ビーコンをいじっていた一体も手早くそれをガスマスクの中へ仕舞い込み、立ち上がる。

そうして互いが目配せを交わした時間は、至極短い。うなずきドアへきびすを返せば、ノブ側の壁へスパークショットを下二本の腕

で構え、テンが背をつけた。挟んだ向かい側へはもう一体が身を添わせ、残るメジャーがスパークショットの電極をノブへ押し当て構える。

残り少ない電力は無駄にできない。手元で放電量を必要最小限に絞り、引き金を引いた。とたん二つに割れた電極から光は短くほとばしって、鈍い音と共にノブへ絡む。それまで充満していた鉛臭さにノブの焼け焦げるニオイは重なり、遅れて湯気にも似た煙は白くうっすらテンたちの前に立ち上った。

見定め、背後につくよう、テンはメジャーへ手招きする。同時に挟んで向かいのもう一体へタイミングを伝えるべく、宙で指を折った。

(一……二……三……)

途切れたところで静かに、実に静かにテンは、スパークショットの電極でドアを押し開けてゆく。

そうして開いた扉を潜り抜けた分隊長は、他の分隊員らと共に保安所へ向かった。

『お前は怪我した者を医務室へ連れて行ってやれ。そっちは残念だが、そのまま霊安室だ。処置を頼む。もちろん家族への連絡はしてもかまわんが、引き取りはこの捕り物が終わってからにしろ。うまく取り計らえ』

負傷者を抱えた分、歩調の鈍る分隊員らを追い抜き、指示を飛ばす。先頭まで一気に躍り出たなら、振り上げた手で声を張った。

『残りにはシャツフル中尉の追跡に向かう！ あの足ではそうも移動はできませんだ』

その手で、手近な一体を呼び止める。

『警戒線をエリア四五まで展開。搜索範囲を囲え』

すかさずまた別の一体へも投げた。

『中尉のIDを追跡。逃走経路の割り出しだ』

最後、各々の仕事へ散り始めた全員へ告げる。

『ブリーフィングは保安所内にて、三五〇秒後！ それまで各自、装備の再点検をしておけ！』

身内を狩るなど気乗りはしなかったが、今しがたの大立ち回りだ。警戒する越したことはなく、分隊長はさらに歩みを早める。プロダクトルーム前をやりすぎし、現れた十字路を右手へ折れる。遮るウィルスカーテンは一枚きりだ。その向こうに立ちふさがる保安所のブルーグレーのドアへなだれ込んでいった。

『うおっと』

声はサスのものである。同時に足は止まっていた。なら背後で四つんばいになっていたトラの、うんざりした表情にも輪がかかる。

『なんだ、また行き止まりか？』

何しろ身を反転させるスキさえないこの空間で、トラはすでに何度も後退を余儀なくされていた。ネオン救出の使命に燃えたトラと言えども、さすがにグチをこぼさずにはおれないそれは、億劫さだ。

『まあ、それはそうなんじゃが』

などと、サスの返事ははつきりしない。

『ええい、どうした？』

その尻ばかりを眺めていたトラは、首を伸ばす。と、そこに緑の光線は、格子よろしく行く手を塞いで張り巡らされていた。

『警戒線か？』

言えばサスがうなずき返す。

『危ないとこじやった。今しがた目の前に出てきおったわい』

『侵入がバレたか？』

『まさかの。わしらが潜り込んだとバレたなら侵入経路も筒抜けじやろ。追跡なんぞ容易いもんじゃ。困わんでも追いつくわ。これはもうちつと別の、何かを警戒しとるのではなかるうかの？』

鼻溜を振ってピントの合わない老眼の目を細めてみせる。サスは

光線に触れぬよう、注意深く照射装置の根元を覗き込んでいった。任せてトラは、シワの間から通信機を引っ張り出す。つなげたのは、霊安所の詰め所を陣取るスラーだった。

『聞こえるか？』

『聞きたくない声だが、聞こえちまつてらー』

用意していたかのような応答は、悪態だろうと小気味よい。

『で、どうした？』

『急に警戒線が張られた。そっちの様子はどうなっておる？』

『……いや、こっちは相変わらず湿っぽい空気が流れてるだけだぜ。俺がここで入艦記録をいじっていることも察知されてないくらいだ。何かあればすぐに知らせてやるから安心しろ。いきまいていた割には気が小さいぞ、テラタン』

などとスラーは毎回、一言多い。

『うるさいわい』

同時に切った通信機を、トラはシワの間へ押し込みなおす。

『いかんの』

サスが呟いた。

『は、あのエブランチルが悪いのだ』

吐き捨てたトラへ違う、とサスは続ける。

『その話ではないわい。これは警報が鳴るところか、触れば焦げるやもしれんシロモノじゃ』

照射装置から顔を引き戻した。身を反転させる。

『そら、そら、ぼうつとしとらんと後退じゃ』

向かい合うトラを追い払った。

『ええい、また後戻りか』

唸りトラは、器用に体をくねらせる。とたん悲鳴は小さく上がっていた。

『うお、体がつかえた』

瞬間、沈黙が流れたのは錯覚でもなんでもないだろう。

『ええい、手の掛かる！』

サスの小さな体が、とたんトラへ体当たりを食らわせる。

いつしか眠りこんでいた。

経て、ネオンは記憶に残るおぼろげな眠りの淵から蘇る。

五感の隅々に充填されてゆく意識はまるで、今しがたこの世へ生み出されたばかりのごとく新鮮だった。実に冴えわたった、それは目覚めだ。

満ちる光を受け入れた目の、焦点が合うまでのタイムラグ。掴んで引き寄せたシーツのシワさえ遠近感伴い、やがて世界はネオンの瞳へ映り込む。しかしながらあの時のようにそれを白衣と混同しなかったのは、混乱そのものが「していた」という過去にまとめあげられたせいだろう。仮死や矯正で寸断されていたかつてと違い、眠ってもなお積み重ねられる記憶がネオンへ整合性を与えていた。その整合性が足元へ、たった一筋、道を伸ばす。連なるそれをなぞればネオンの目は、やがて彼方をとらえていった。

とたん寸断されたせいで滞っていたナニカは、溢れんばかりと巡りだす。巡ってそれは血を血に変え、肉を肉たらしめると、鼓舞して巡るスピードを早めていった。

いてもたってもいられない。

そう、紛れもないリズムが生命として、ネオンの中より響きだす。そのリズムは鼓動と絡み、もう誰にも手出しすることのできないネオンの意志と意識を、今、ここに紡いでいった。

紡いで伸びる道へそつとネオンを押し出す。

気づけばシーツから足を引き抜いていた。

床へ下ろすが、靴はない。

だとして裸足もなかなか気持ちがいいものだ。ひんやりとした床は自分の輪郭を明確とさせ、『アズウエル』で生きている今を奏でる、と意識したよりはるかに強く響かせるべきメロディーを感じ取る。

ならふと眠る前、アルトが話していた故郷という概念、無条件に埋め込まれた最初のナシヨナリズムを思い出していた。案外、このことなのではないのだろうか。ネオンは想像して、確かめるように大きく息を吸い込む。満たして、あると主張を始める譲れない領域を、譲れば己を明け渡すに等しいモノの気配を、味わった。

間違いない。

思えたからこそ失ったその先は想像されて、得たばかりの身をネオンは震わせる。体ではなく命が帰属する場所を失った時、死すより寒々しいその光景に巡り始めた血が薄まってゆく感覚さえ覚えていた。

ならもう、好きになんてさせられはしない。

肩にかけられていただけの白衣は脱げ落ちかけている。引き寄せネオンは袖を通し、大きすぎるせいで袖口が指先まで覆っていたなら、手早く左右、まくり上げた。中で体が泳ぐほどの前を合わせて部屋の中を、ぐるり仰いで見回してゆく。

「何とか出なきゃ」

ドアへ歩み寄った。

反応して開くのを待つ。

だが案の定、外から施錠されたドアはノブすら見当たらないうえ、ピクリとも動かない。

諦めネオンは身をひるがえす。そもそもここがどこかも分かっていないのだ。他に出口はあるのか。探して注意深く辺りへ視線を這わせていった。

と、それは記憶の残滓としか言いようがない。眺めた部屋はやおらく知る在りし日の光景をダブらせる。あ、と開いた口は閉まらなくなっていた。ここはセフポドの研究室だ。ネオンは確信する。示して正方形の壁面一部を切り取ると、真正面からそれも変わらせずりに出していた。

「イルサリ……」

駆け寄り筐体へ手をあてがえば、セフポドの物理デスクに作業用として灯された仮想デスクは傍らへと蘇り、イルサリとを繋いでのたうつケーブルも、その先の矯正ポッドに離れたところで揺らめく四本の腕のホログラムも、昨日のことののように視界へだぶる。続けさま、生々しくも目覚めと同時に問診を繰り返すイルサリの合成音声さえ頭の中で響いた。

嫌って逃げ込んだあの防音室は。

通りネオンはアゴを上げる。だがとらえた部屋の一角にあるはずの覗き窓がついたドアは今、ロッカーによって塞がれていた。

いてもたってもおれない。飛びつきロッカーをまさぐった。未使用のロッカーは中に何も入っていない様子だ。揺すればすぐにも動くほどと軽かく、抱えてにじり、ロッカーを移動させてゆく。ドアは

その後ろに姿を現した。

これだ。思うからこそつま先立って中をのぞく。かけられたままのスモークが邪魔して見えない。もどかしくなり、うっすら埃を積もらせたドアの隙間へ指を押し込んだ。力の限りに引く。びくともしないなら指を掛けなおし、もう一度だ。ネオンは踏ん張った。力にドアはにじり、動き出し、息を切らせたネオンの前で開き切る。背中越し、射抜くような光が中へ投げ入れられていた。長らく閉じられていたせいだろう。カビた臭いがネオンの鼻をつき、思わず口を覆ってネオンは目を細める。見えたものに細めたばかりのそれを開いていった。

まるで待ち構えていたかのようにでならない。記憶の中にしか存在していなかった品の全ては埃まみれで、そこに詰め込まれている。ホログラムの台座に、束ねられたままのコード。セフポドの操作端末デスクに、付属のラック。磨り減った椅子もまた虚無を抱えて傾くと、こちらを向いていた。見当たらないのはギルドに発見された自身のポッドくらいだろう。全てには懐かしさと忌まわしさが嫌というほど絡みつき、絡む手でネオンもまたそのひとつなのだ、と手招きさえしてみせる。

呼ばれるまま歩み寄っていた。

言葉は、光景を目にしたからこそ過りもする。

あたしがいると、みんなに悪い。

得たばかりのモノの、それもまた正体だ。

足を止めれば目の前で、不安定だった椅子がガタリ、音を立てて浮いていた足を床につけた。拍子にひじ掛けがもたれ合うデスクのどこかを押し込んだらしい。埃にまみれたデスクはなけなしの電力を吐き出し稼働すると、今にも消え入りそうなホロスクリーンをごく小さく立ち上がらせる。中へ、粒子の荒い動画を流し始めた。

「……なに？」

当時の研究室だ。揺れるトニクのホログラムが確かと片側に映り込んでいる。ネオンは目を見張っていた。

かと思えば、かすかに発砲音は聞え、画面の前を白い物が何度も行き来する。やがてこちらを覗き込むアルトの、セフポドの顔が、画面いっぱいに映り込んだ。

『願わくば当初の目的通りアルトが、イルサリ症候群にさらされた者の、手助けとなることを。全ての者を、個のままにつなぐ要となることを』

矢継ぎ早とまくし立てるその息は荒い。常に背後を気にする視線もまた、異様なほどと落ち着きがなかった。

『動力が落とされた。次クルーのセフポドがこれを見つけたなら、それが目的であったことを忘れぬよう、ここにメモしておく』

とたん怒号は飛び込んでくる。

容赦のなさにネオンは息をのんでいた。

弾かれセフポドもまた、画面の中で振り返る。その白衣に画面は塞がれ、続く物音に何が起きたのかは分からない。ただそこでプツリ、動画は切れていた。

光が落ちる。デスクの電力も、それを最後に尽きた様子だった。

ネオンは唇をかみしめる。想像してしまうのは、きっと多くの怪我人が、悪くすれば死者が出たに違いないということだ。

たとえ電力が残っていたとしても、もう二度と見る気にはなれなかった。噛んでいた唇を解いて止まっていた息をただ吐き出す。果てにこうしてある自分の手足を今一度、眺めなおしていった。

こみ上げる思いは感謝や懺悔などではない。

だからネオンは頭上を仰ぐ。

努力せずとも降り聞こえてくるリズムは、果たさねばならぬ使命だったのだとまぶたを閉じる。

でなければ一体誰に、何が、残るのか。

そうして開いたその目に、気づけなかったものはぼつつ、と浮かび上がっていた。長らく放置されることがかぶっていた埃ではなくそれは、点々とこびりつく鉛を含んだダイラタンシーレットの弾痕だったのだと気づかされる。部屋は最初から弾痕にまみれるとネ

オンの目の前に広がっていたのだった。

うってつけのスペースと、辿り着いた冷暗所の片隅はシャツフルを迎え入れる。ここは遺体引き取りの際、支給されるボディバックの予備がうず高く積み上げられたストックテントだ。

かき分け奥へ紛れ込み、シャツフルはごわつく積まれたボディバックをベッド代わりに、まずは糖輸液の点滴へ取りかかっていた。次に、完全に解凍した代謝促進剤の投与を試みる。

代謝スピードは早ければ早いほどコントロールは微妙を極めるが、慎重になるがあまりのん気に横たわっているヒマこそない。代謝速度は通常の三十倍。代謝期間を一八〇〇秒に設定し体内へと落としていった。

すぐにも上昇をはじめた体温が、熱に浮かされたような息苦しさをシャツフルへと与えている。噴出す汗に額を拭えば、尋常ならざる代謝速度のせいで早くも浮き上がった古い角質がよれ、見つめる手のひらから剥がれ落ちていった。裏返せば、ひび割れた皮膚の下から覆って現れた新たな皮膚が張りなおされてゆき、伴い麻酔を投与されたかのように被弾箇所もまた、痛み範囲と深さを小さく浅く変えてゆく。

その何とも言い難い感覚に、青白い顔をさらに青白く縮み上げてシャツフルは、肩で荒い呼吸を繰り返した。

場所のせいだ脳裏には、フェルマータ葬儀社と名乗ってもぐりこんだ何者かのことが浮かんでならない。彼らが『F7』を目標としているのだとすれば、唯一双方を行き来することの出来る分隊員たちの保安所を突破するしかなく、思い巡らせたシャツフルの面持ちは澁くなってゆく。

なにしろかつてラボから脱出したセフポドラも、直通の格納庫を塞いだことでアルトのポッドを盾に相当数被弾しながらその芸当をやったのけていた。それこそ興奮剤でも投与していなければ不可能

な荒技で、醒めた後のことを考えたならぞつとするやり方だといえよう。

だが果たして今、潜りこんでいるやからにそれほど覚悟と度量が備わっているものなのか。いや、恐らく無理だろう、とシャツはひとりごちる。

そろそろ代謝促進剤投与から一六〇〇秒。

糖輸液はもう落ち切っていた。

バイオゲージを弾いて剥離剤を湿布し、腕から針を抜き去る。促進剤を傍らに、そうしてシャツはゆっくりと立ち上がった。促

思った以上、代謝に伴う体力の消耗は激しく、体は病み上がりかと重い。だが動きを遮る痛みこそもうどこにも感じられず、両足で交互にボディバックを踏みつけた。軽く膝を曲げ伸ばし、股も上げてみる。問題はないと分かれば最後、いつものクセで顔を拭いていた。その手に白い粉が吹いているのを目にして叩けば、全身から埃のように剥がれ落ちた皮膚は舞い上がる。

クレツシエの思うとおりには、させない。

過る思いこそ復讐か、と吐くほかないが、あまりにも容易く奪われたのは地位でも名誉でもなくプライドだった。このラボへ尽くしてきた自らの尊厳であればこそ、理屈では片付けられないモノがシャツフルを突き動かす。

ままに残りわずかとなった促進剤を抜針した。

ボディバックをかき分ける。

思いだけを胸にゆっくりと、しかしながら確かな足取りで、シャツフルはストックテントから抜け出していった。

『今後のためにも、明日からダイエットだな』

空調スペースでいやと言っただけでもんどりうったトラが吐く。その隣には、深くうなづくサスがいた。

『よく言った』

そんなふたりがどうにかこうにか降り立った場所こそ、目指す保安所を目と鼻の先に控えた通路、その脇道だ。身を隠すふたりの緊張はもう高まるほかなく、角からトラはシワを、もといその奥に窪んだ瞳をのぞかせる。

『この先か？』

なら足元から同様に、サスもまた半身を乗り出し鼻溜を振った。

『そうじゃ。あの突き当りの丁字路を、右へ折れた先にあるとなつとる』

確かめトラが顔をひっこめる。

『だが保安所などと警備のかなめであろう。どうやれば突破できる？』

まさか遺体を引き取りに来て迷った、などとはもう通じそうもない。

『そんなもの……』

おかげで珍しくサスも言葉を詰まらせていた。

『気合じゃ、気合！』

これでも『デフ6』 齡、百五十四歳。ちなみに平均寿命は百七十歳だが、それでいて言い切る意気込みだけは、あっぱれだ。しかし称えたところで現状、何の役にも立ちはない。

『サス、ここは政府船だぞ。それこそ相手は軍隊だろうが。気合でこそ負けるわ』

トラはそれきり口をすぼませる。

反してすわっていったのは、サスの目だった。

『ならちよつとおまえさん、のぞいて来い』

『な、わしが、か？』

言われように、大いにトラはのけぞる。

『そうじゃ、中はもぬけのカラかもしれんぞ。それこそ通り抜け時
じゃ』

『なにを、わんさと詰めておつたら、わしが見つかる』

『その時は、逃げればよいじゃろ』

『簡単に言つな』

『うーむ。まさか、こうなつとるとはの』

などとサスが話を逸らしたのは、わざとで間違いない。

『ええい、どうもこうも埒があかん』

だからしてトラは齒ぎしりしてみせる。

『お、お前さん、のぞく気になつたか？』

ここぞとばかりサスが振り返つた。

『違う！』

などと声を荒立てた瞬間だ。警報は破裂したかのごとく鳴り響く。ふたりの周り、通路の壁面を造語文字と記号は走り抜け、続けさま、そんな通路をこま切れにして照射熱の上がつたウィルスカーテンは、幾枚も下ろされた。

光景に飛び跳ね驚き、トラは自らの口を塞ぐ。身を縮めて屈みこめば、その口元へサスもまた手を重ねた。

『おまえさん、声がでかい！』

『す、すまん』

だが謝つたところでもう遅い。兎にも角にも探すのは逃げ場だらう。だがあれほど苦労を重ねて移動してきた空調スペースの入り口はもう、降りたウィルスカーテンの向こうとなつてしまっている。慌ててサスは尻ポケットから電子地図を引っ張り出した。あいだも警報は鳴り続け、聞かされながら地図をスクロールさせる。トラがそんなサスをかばうように立ち塞がり、腰に下げていた警棒を抜き

取った。身を沈めて構えたなら、間髪入れず耳へ、保安所からのくぐもった物音は近づいてくる。

『サス、どちらだ？ どちらへ行けばいい？』

痺れを切らしトラは口走った。

『ええい、どちらへ行っても良いことなどないと言ったらどうする？』

地図と格闘しつつ鼻溜を振り返すサスのそれが本音だ。その間にも物音は複数の足音へと響きを変え、しかも重装備で押し寄せる団体の物々しさをまといだす。

『言っている場合ではないぞ！ ダメだ。こっちへ来ている』

再び角からのぞき見て、トラは口走る。防弾服とミラー効果装備一式に身を包んだ見るからに保安部隊は、まさに丁字路の角から姿を現していた。

トラは後じさる。

もう待ったはない、と半ば手探りでサスの体を引き寄せにかかった。

掴んで小脇へ抱え上げる。

きびすをかえすべく、息を詰めた。

『焦るな、テラタン』

声はそのとき、かけられる。

浴びたトラの背筋は凍りついていた。

抱えられたサスもまただ。

まさに、トラは声の方へぎこちなく振り返っていった。

そこには軍服を着込んだ『バナール』が立っている。特徴でもある青白い顔がさらに青白く見えるのは気のせいか。やけに削げた頬が、鬼気迫る凄みを醸し出し、対峙したトラは一瞬にして射すくめられていた。

『確か、トラ・イアドだったな』

前で『バナール』は言う。

『だ、誰だ』

動揺へ拍車はかかった。だが答えず『バナール』は、そんなトラの腕を引き寄せ声を低くする。

『静かに』

やおらダイラタンシーショットガンを携えた保安部隊が脇道になど目もくれず、すぐそばを駆け抜けていった。見送り『バナール』は口を開く。

『アーツエのアズウエル前ですれ違った。貴様は気づいていないだらうがな』

教えると、懐から銃を抜き取った。そうしてぽかんと聞き入るトラの前に出る。先ほどトラが顔のぞかせた角へと擦り寄っていった。

『それはアルトの……、アルトのスタンエアではないのか！』

気づき声を上げたのはサスだ。

『お前さん、アルトを知っておるのか？』

『アルト？ セフポドのことか』

通路の様子をうかがう『バナール』の返事は、片手間だ。

わずらわしくなり、サスは抱えるトラへ降ろせと体を揺すってみせた。

そんなふたりへ『バナール』は振り返る。

『わたしがそこへ通してやる。奴が立ち寄るだろう部屋は抜けて左、道なりに奥へ進んだ二つ目の四辻、その向こうにある。そのドアにだけ、後づけで磁気錠がつけられている。すぐわかるはずだ』

言い分は、少なからずサスとトラの目を点に変えていた。

『ど、どういうことじゃ？ お前さん、その格好からして連邦の者じゃろう。わしらが何者であるのかを知っておるなら、手を貸す道理などあるはずなのでは……』

むしろ有難いを越えたその申し出こそ不気味でしかない。ついぞ問うサスに、トラも隣で激しくうなずき返す。

『何も、貴様らを助けようとしているわけではない』

勘違いするなどい wanna ばかりに返して『バナール』は、スタンエアの銃床を叩いてみせた。補填されてゆくガスに、スタンエアの立

てるか細い音がサスの耳へも届く。

『わたしは、わたしの意志を通していただけだ。貴様らを奥へ通すのは、その手段に過ぎん』

手早く動作を確認し、『バナル』は安全装置を弾き上げた。

『ここで待っている』

聞かされサスとトラは顔を見合わせる。そうして正面へと向きなおった。『バナル』の姿はすでにそこから消えていた。

残してシャツフルは、スタンエアを腰に通路へ出る。

立場を剥奪されてなおこの階級章が生きているということとは、使用痕跡から足取りを掴むため以外、考えられなかった。だからしてさしずめ駆け出していった先ほどの分隊長たちも、あえて使用した階級章のアクセスを探知、確保のために飛び出していったハズだ考える。

ゆえにここでもまた、あえて階級章を保安所ドアのリーダーへかざした。正体を晒したうえで入室してやる。鋭い音と共に開いたドアの向こうに、衝立で区切られたいくつかのスペースを携えた保安所は広がり、声はすぐ左手、壁面に埋め込まれた艦内警備通信網を監視していた分隊長から上がっていた。

『ち、中尉！』

顔へシャツフルは、たしなめうなずき返し、あえて大げさなまでに片足を引きずると両手を挙げて中へ踏み込んでゆく。

『分隊長は今の警報で出て行ったのか？』

一部始終に、衝立の向こうからフル装備の分隊長たちも三体、飛び出してきていた。その顔はまるきり状況が理解できていない、と言わんばかりだ。それでもどうにか引き締めなおすと、警戒心丸出しとダイラタンシーショットガンをシャツフルへ突きつける。

『す、速やかに投降していただき、恐縮です。中尉』

狼狽ぶりは、すでに奇襲をかけられたような具合だ。見据えてシ

ヤツフルは口を開いた。

『所詮、狭い船の中だ。この足で逃げ回ったところで、たかが知れている』

『分隊長は、先ほどの警報の確認に向かわれました。わたしどもが代わって迎えの船がくるまで待機いただくお部屋へご案内いたします』

言うが、クレッシエの部屋での失態を知っているだけに、分隊員たちはそうやすやすと近づいてこない。遠巻きに見守りながら、じわりじわりと間合いを詰めている。

『ついでに傷の手当も頼めるか？』

眺めながらシャツフルは申し出た。

『お部屋へ。手配させます。その前に……』
分隊員が促す。

『隊長から奪ったスタンエアを、こちらへお渡してください』
それも想定済みだ。

『落とす』

うそぶく。

と、それまで遠慮がちだった背後の一体が、突きつけていた銃口を下ろしシャツフルの胸元と腰周りをまさぐり始めた。あっけなくもスタンエアは取り上げられ、見て取った正面の一体が銃口で、くぐってきたばかりのドアへシャツフルを押し出す。

『こちらへ』

傍らで通信担当者が、飛び出していった分隊長らへ事態を知らせていた。

無論シャツフルには、どれほどの時間で彼らが戻ってくるのか予想はついている。ゆえに、カウントダウンはこの地点から始まっていた。

まさに保安所を出る。

その周りを三体の分隊員たちは囲い、T字路を折れて戻ることなくシャツフルへ直進を促した。

背後で閉りゆく保安所のドアが、腑抜けた音を立てている。

その音は同時にシャッフルへ今だ、と合図を送っていた。

受けてシャッフルは引きずる足によるめいてみせる。

『少し休ませてくれ』

様子に仕方ない、という空気が流れたことは錯覚ではなかったら
う。

だからして引きずられていた足はそこで、彼らへ向かい空を切る。

そうしてトラとサスの前に、両肩の防具とセットになったミラー効果装備一式は投げ出される。

『使え！ もうすぐここを保安所へ戻る分隊員たちが通る』

『紛れると？』

息を乱して『バナル』は言い、驚きトラはシワを波打たせた。

『確かめるようなことではないだろう』

つき返した『バナル』が、やおら背後へ振り返る。飛びつかんばかりだ。その足元に投げ出された装備一式を、サスは拾い上げていた。

『何がどうなつとるのは知らんが、恩にきるぞ』

T字路では『バナル』に奇襲をかけられた隊員たちの足音が、交錯している。それは『バナル』の後を追う音と、保安所へ駆け戻る音に分散していた。

追い立てられ、おっつけトラもサスからミラー効果装備を奪い取った。急ぎ、両肩へ乗せる。だが防具は襟巻きのように首の辺りにちょこん、とぶら下がるばかりでトラには小さい。いや、小さ過ぎた。見て取りさすがの『バナル』も、間の抜けたその格好についぞ吹きだす。どうにか隠してうつむいたなら、トラの胸を叩いて返すと同時に、保安所とは逆の方向へと駆け出していった。

『笑うな！』

すれ違いざまトラが吐きつけたとして、それ以上、関わっておれる時間がない。手探りさながらどうにかミラー効果を作動させる。ウンと唸り声を上げた装備にトラの姿は、みごと背後の壁に塗りつぶされていった。

『出とる！』

見つけたサスが指さしたのは、ミラー効果の有効範囲から飛び出

し宙に浮いていたヒジだ。トラが引つ込めたならサスもまたそんなミラー効果の中へ、いや、トラのまたぐらへと転がり込む。

間髪入れず分隊員は、そんなふたりが潜む脇道へ飛び込んできた。おそらくはこの装備を調達した『バナル』を追ってだろう。トラの前を駆け抜けていった。かと思えばその後からも、さらに数体、姿を現す。加えて警報の音に飛び出していった分隊員たちまでもが戻ってきたなら、一団は『バナル』を追うグループと、そのまま保安所へ戻るグループに別れた。

おかげでもうトラとサスの周囲は分隊員たちで飽和状態だ。実体までもが消え去ったワケでないなら、ぶつからぬよう息を吐き出し身を細め、トラとサスはミラー効果の内側で上下、目を合わせる。

つまるところここから先は、昔なじみが物をいう二人三脚だ。懐かしの初等教育過程大運動会さながら、心の中で上げた、えっさほいさの掛け声を八毛らせる。

まさにタイミングを見計らい、脇道の角から抜け出した。保安所へ戻るグループの最後尾につくとなだれ込む分隊員たちの後につき、保安所内へと潜り込んでゆく。

(どないです？ ボス)

薄く開いたドアを挟んで、一体が指を折った。

ドアの隙間からのぞきこんだテンの目は、右から左へ辺りを舐めてしばし動く。

(誰も見えへん)

送る合図。

(いくぞ)

振ってスルリ、テンはドアの隙間をすり抜けた。

そこにメジャーが、残る一体が、平然と続く。

身を潜めるでもなく走り出すでもなく、三体はそうしてラボ見学にでも詣でるかのようにゆったり通路を進みながら、着込んだラバ

ースーツと一体化した、一見するとフードのような形のガスマスクを被りなおす。腹ごしらえをするため脱いでいたそのジッパーを、アゴ先まで引き上げていった。

(連れて、帰れるでしょうか……)

メジャーが控えめに振っている。

(あいつだけやない。取引を中止するんや、場合によったら、あのヒトも連れ帰る)

答えるテンの動話にブレはない。

来るときは左に折れたその通路を、テンたちは右へ向かう。始められた作業のせいか、通路へも慌ただしさは漂っていた。

テンは目指す処置室だけを睨み付ける。

ここを出る。

眉間へ力を込めていった。

閉めたドア前へロッカーを立てなおす。叩いたその手は、やけに景気のいい音を立てていた。

「こんなところで、もたついてなんてられない……」

個のままにつなぐ要となることを。

言葉は、『アズウエル』を思い起こさせてやまない。そしてそこそがこの手に足に体に、望まれ、守られてきた役割なら、抜け出さなければ、とネオンは巡らせる思案に爪を噛んだ。

気持ち逸らせて、磁気錠のコイルはそのとき電圧を解く。

ドアはふい、と浮き上がった。

奥から二人、白衣は現れる。

『レディーの部屋なんだから、入るときくらいノックなさいよ』

チャンスかもしれない。思えば先制攻撃だ。噛み付いてやるが意に介さない彼らは、それが攻撃であることすらどうやら認識していないらしい。

『こちらへ』

眉ひとつ動かすことなくネオンへと歩み寄った。背を押す力に加減はなく、ベッドへ移動させる。振り払ってネオンが身を揺すれば、無理矢理ベッドへ座らされていた。その足元で携えてきた道具箱は開かれる。

『何よ、へんなもの打つ気なら、アル……、セフじゃなきゃ、絶対にさせないから!』

いきまけども、相手にされなければそれほど無意味なものはない。次の瞬間にも手際よく、ネオンの片腕へ筒状の機材は通される。

『何すんのよ!』

『再矯正にかかります。準備にお付き合いください』

ぷう、と膨らんだ筒状の機材がネオンの腕を締め付けた。

『血圧、脈拍、s p o 2、正常値』

とたん腕に巻かれた機材の中でチクリ、痛みは走る。

『血糖測定中。サンプルDNA採取』

『あたしに無断で……!』

言いかけるが遮って、パチンと指は耳元で鳴らされていた。

驚いて振り返れば目と鼻の先でフラッシュは焚かれる。

「ぎゃ」

『網膜パターン、採取』

焼け飛んだ視界にネオンは目を回し、その腕から早々に測定器は抜き取られる。かと思えば強引にあごを掴まれ、開いた口の中へ棒のようなものを差しこまれた。白衣が喉の奥を、近づけた顔で惜しげもなくのぞきこんでみせる。

『一八〇秒経過。白衣にも感染反応なし』

足元のダストボックスへ、用済みとなったそれを投げ捨てた。

『ぺっ、ぺっ』

大げさなまでに吐き出し、ネオンは不快を表してやる。なら用は全て済んだらしい。早々に立ち去ろうとする白衣たちは、もう身をひるがえしていた。させてしまえばあったかもしれないチャンスはもうなくなる。

『矯正なんて、させないから!』
慌ててネオンは口を開いた。

声に二人は、振り返る。浮かべているのは、何を言い出すのかといわんばかりの素っ頓狂な表情だ。見せ付けられてネオンは己の無力を思い知り、ならば、とあれほどまでに逃げ回った『フェイオン』を思い出す。まさにアルトを真似て奥歯へ力をこめ、白衣へ踊りかかるべくベッドから飛び降りた。

が、慣れないことはするものではない。その足はものの見事に羽織る白衣の裾を踏みつける。

「ふんぎゃ」

飛び掛る以前、転んで己がのされていた。

目の当たりにしたとして白衣たちに笑いも罵りも起きはしない。ただネオンをその場に残し、再びドアへと歩き出す。

「ちよ、と、待ちなさい、よお」

それこそ無力の極地からネオンは声を絞り出した。どうにか彼らを押しとどめようと知恵をめぐらせる。だが思い浮かぶものはもうそれしかなく、だからして何であろうと意を決していた。

「この、エビの尻尾野郎っ!」

それはトラから幾度となく浴びせられ、『フェイオン』でトラへ食らわせたフリーズだ。ぶちまけたなら白衣もそこで動きを止める。トラのように激怒するかと期待していた。だが様子はまるで異なると、しばしの間を置き笑いだす。

『テラタンの言語だな』

一人が言っていた。

『お前は美しい、だと』

はつきり造語でそう訳してみせる。

「……へ?」

聞かされネオンの目は、やおら点へと縮んでいった。

『どこで覚えたんだろうな。矯正をかけるのがもったいないほど個性的に仕上がっているんじゃないのか?』

『まったくだ』

頷き合い、白衣たちはチラリ、ネオンを盗み見た。今にも噴出しそうに笑いを堪えると、それきり部屋を後にしていった。

ポツリ、残されネオンは一人、瞬きを繰り返す。

「なによそれ」

こぼしていた。

もう一度、改め噛みしめ、繰り返す。

「……なによ、それ」

ままに言葉を、頭の中で辿りなおした。

だがその意味こそ変わりようがない。

「何なのよ、それ！」

おかげで怒りは頂点へ達する。まかせてネオンは腹から叫んだ。

「どうということなのよおっ、それっ！」

空に説明を求めたその時だ。応えてそれは訪れていた。唐突にジリリと磁気錠のショートする音は聞こえ、ドアは再び開け放たれる。だがそこに押し開けたハズの何某の姿はない。

「なに？」

我に返ってネオンは呟き、前で風景は剥がれて揺れ動く。やがて思いもしない姿をそこに、あらわとしていった。

「ネオン、迎えにきたぞ！」

立っていたのはトラだ。

『アルトもおるのかの？』

サスが、そんなトラの両足から顔をのぞかせる。

見上げたならネオンは、ただ言うほかなくなっていた。

「……ウソ」と。

「なんつ、ど、どうしてこんなところにいるのよっ！」

袖のかぶった指を突きつけ、それこそ『ヒト』語でネオンはわめく。

だが、ドアから磁気鍵を筆り取ったトラの顔は渋い。

「声がデカイ……！」

慌ててサスも外をうかがい見た。

「大丈夫じゃ」

教えて急ぎ、ドアを閉める。

経てネオンへと向きなおったトラは、そこでいつも通りを取り戻していた。

「勝手にアーツェで仕事など取りおつて。迎えに行くと言ったではないか！ ま、まだ借金が残っておるのを忘れたか！」

浴びせかけるものだから、前にしたネオンの肩は小刻みに震え出す。

「何が、借金よ……」

うつむき吐き出し、突き付けていた指を固く握りしめていった。

「なあにが、エビの尻尾よ……」

次の瞬間、勢いよく伏せていた顔をトラへ持ち上げる。

「だいたいなんで今なのっ？ ヒトが心底、困り果ててるって時にあんたは、あんたってひとはあっ！」

『一体どうしたんじゃ？ 早くアルトを探して逃げんとマズいことになるぞ』

サスは『ヒト』が理解できない。喚く様子にとにかく急げと鼻溜を振る。向かってうるさい、ネオンは睨みつけた。

『な、なんじゃ？ 何か、悪いことでも言っただか？』

刺されたサスはあとじさり、その目をすかさずネオンはトラへ振

り戻す。そうして歩み寄れば足取りは、素足ながらまるで鉛の入った安全靴でも履いているようだった。トラの前でピタリ、立ち止まると、折り重なるシワごと胸倉を掴みあげる。

「ちゃんと説明なさいよっ！」

などと、揺さぶり押し迫る気迫は並大抵のものではない。

「な、何のことだ」

食らったトラも、さすがにどもる。

「何がじゃないわよっ！ エビの尻尾野郎の意味に決まってるでしょっ！ あたし知ってるのよっ！ 『お前は美しい』ですってっ？」

間に造語を挟みこめば、ようやく聞き取れたサスの耳が加齢に寝ていたそこからぴん、と跳ね上がる。

「ど、どこでそれを？」

「どこだっていいでしょうがっ！ それより一体、どういうことよっ！ あなた、あたしをそうやって、ずっとからかい続けてたわけっ？ 意味なんて分からないと思って。一体どこまで人をバカにすれば気が済むのよっ！ ふざけないでえっ！」

モニター越しではないこの会話を、それこそスイッチひとつで切れることはできやしない。聞かされたトラの瞳はとたん縮み上がり、いや違う、と辛うじて繰り出せた瞬きで遮った。

「か、からかってなど、わしは、おらん！」

「じゃなきゃ、何なのっ！」

「な、何と言われても」

それこそが口に出せないトラの秘密だ。

「なによ、お金のためにこんなトロ口まで追いかけてきちゃってっ！ あなたなんて、あなたなんてそうやって一生、ギルドにへいこらしてればいいのよっ！ だからって、あたしはもう、そんなあなたの鬱憤晴らしに付き合っつもりなんて、ないんだからっ！」

掴んでいたトラの体を突き飛ばすようにして、ネオンは手放す。

勢いにトラの皮膚は支離滅裂と揺れ、心も乱れてそれこそ千々と口走った。

「そ、それこそどういう意味だ！　いつ、わ、わしがギルドに入つた！　取引が小さかるうとも、わしはきつちりわしの店を仕切つておるわ！　もちろん金は大事だ、が、お前に比べ……」

いいかけ飲みこむ。ぶるん、シワを震わせた。そうして行き場をなくした言葉の代わりだ。トラはその場で地団駄を踏む。

「ええい、しち面倒くさい！」

たまりかね、腕をネオンへと伸ばした。

「おとなしく帰るぞ！」

丸太がごとくその体を肩へと担ぎ上げる。

「何するのよつ。やだつ、離してっ！」

だからして拒むネオンが暴れて両手を突っ張った。

「でないと、通路で思いつきり叫んでやるつ。この詐欺師いつ。あたしはモノじゃないつ。降ろしてえっ！」

「うるさい。つべこべいうな！」

これではもう助けにきたのか、さらいに来たのか、よく分からない。

『こら、待たんかトラ！』

見かねたからこそ、サスの出番は訪れていた。いさめる調子はいつになく強く、続けてサスはこつも鼻溜を振つてみせる。

『お前さんは、どうしてそう物事をややこしくしたがる。いい加減、素直に思つておることを口に出せばどうじゃ！　それで全て済むことじゃろつに』

とたん動かなくなったのは時間ではなく、トラだった。

担ぎ上げられたそこで尻を向けていたネオンもまた、素つ頓狂な顔でサスへと振り返る。

『思つてる、こと？』

見上げるサスは、そこで両手を腰へあてがっていた。小さな体をめいっばい反らせた様子は、さしずめ猛獣使いと言ったところだろう。

『まったく何をごちゃごちゃやっておる。嫌われようとしるのは、

お前さんの方ではないか』

遠慮なく鼻溜を振れば、トラの体は瞬間、きゅっと縮んでいた。

『わしは知つとるんじゃぞ。お前さんがネオンを見つけてからヒト語を勉強し始めたことも。ヒトと地球の歴史や文化を一生懸命に調べておつたことも。それもこれもネオンのためだったんじやろうが。それでよいではないか。だのに、イザとなれば憎まれ口ばかり叩きおつて。誰が自分のためにそこまでする者を嫌うと思う？ 嫌うところがあるとすれば、それはお前さんのその意気地のないところじゃ。いい加減、覚悟せい！』

だが、さらって担ぎ上げたあの勢いはどこへやら。トラに動き出す気配はない。

サスは、十分すぎるほどそんなトラを待ち続ける。やがて何一つ、解決しそうにないなら、そこで黙っていよ、といわんばかり一つ大きくため息をついた。

『わしが代わりじゃ。謝っておこう』

トラの肩で唾然としているネオンへ鼻溜を振る。

『借金があると言う話じゃが。あれはお前さんを手元へつなぎとめておこうとした、こやつの真つ赤なウソじゃ。長い間、嫌な思いをさせたようじゃの。すまんかった』

話はネオンの目を、これでもか、と見開かせてゆく。

『じゃが放置船から見つけ出されたというのは本当の話じゃ。トラがお前さんと出おうたのは、その後の種別臓器転売オークションでの。こやつ、誰にも買われまいと慌てた拳句、ケタをひとつ間違えて競り落としおつた。じゃから、お前さんはトラの元にあることになったわけじゃ。当時は素性も分からんボディーじゃったからの。ついた破格の値は噂になって、わしのところまで回ってくるほどじやった』

サスの目は、そこでちらり、トラを盗み見る。だがトラはまだ、なんら反応を見せない。

『トラがそこまでしおつたそのワケと言うのがの』

仕方あるまいと、サスは告げるべき言葉に鼻溜を膨らませた。

瞬間、トラの声は上がる。

『分かった、もういい!』

トラの体から、がっくり力は抜け落ちていた。ままにうなだれ、惜しむようにゆっくり肩からネオンを降ろしてゆく。乱暴に担ぎ上げられた時と違い、ネオンの足は静かに床を捉えていた。

『……借金は、ウソ? ギルドじゃなくて、あなたのウソ?』

後じさってまじまじと見つめるネオンのその目は、まだ丸いままだ。

前にしたトラは、噛み締めた奥歯のせいで、顔のシワへシワを重ねている。そうしてネオンが見つれば見つめるほどに、逃れてうつむき、シワの中に埋もれていった。

と、見えなくなつたそこから、やがて声は絞り出される。

『ワケなどわからん。わからんが……!』

何が始まるのかと、ネオンは息をのんでいた。

『わ、わしはあの会場でお前をひと目見てから、その、あい、え、たつ、と、とても美しいと! わしの知る限り、テラタン輝石のエビの尻尾よりも美しいと、思ったのだつ!』

トラの声は絶叫に近い。

『だというのに臓器転売ボディなどと、他の奴らに買われでもすれば跡形もなくなる。だからわしは慌ててお前を競り落とした。よかった。そう思った。だからしてそれからしばらくの間わしは、ただお前を部屋で眺めて過ごした。だが、そもそも間違いはそれだ』

どうして、と思えば絞り切った雑巾のような中からトラの小さな目が、のぞいてちよろり、ネオンをとらえた。すぐにもシワの中へ埋もれて消える。

『眺めれば眺めるほど、わしはお前が一体どんな声で話すのか、どんな瞳をして、どんな顔で笑うのか、知りたくてたまらなくなつた……。知りたくて、言語も文化も一通りに目を通した。そこで互いの美的感覚が合わんことを、わした痛感した。おそらくお前を起こ

したところで、わしは嫌われる。だが、見たいものが見られるなら、それでもいいとわしは思った』

『それがあたしを蘇生させた理由？』

うなずき返したようにも見えたが、トラの動きは判然としない。

『ただ始終……』

話だけが続いていった。

『ただ始終、嫌われていると感じることだけはたまらなかった。ならば外へ出してしまおうと……、お前にとっても一緒に入っていたあの稀少品と共に、わしから離れたところにおる方がいくらか心地よい良いだろうと、考えた。借金があると繋ぎとめておけば、ときおりだろうと声は聞ける。それでかまわんと演奏に出した。金額を減らせなかったのは、そのためだ』

『それでしょっちゅうダブルブッキングを……』

『何もお前をモノ扱いしておるわけでもないぞ！ テラタンとヒトの寿命は一・三倍の開きがある。お前の年齢が分らん以上、短命なヒトであるお前に先に死なれたくはなかった。だから移動に仮死強制を選んだ。それだけのことだ』

吐き切ったトラの体は最後、ついたため息にふうと膨らんで元の大きさへと戻ってゆく。

『わしは……、理由などわからんが、わしは間違いなくお前が好きだ』

戻った体が紡いでいた。

『オークション会場で見つけた時から、何があっても手放したくないと、思った』

そうしてちらり、シワの間からまた怯えたような目がネオンをとらえる。

『誓って言う。からかってなどおらん。その思いもこれで終わりとなった。だが、だからこそわしは、ここまで来た』

それきりトラは、返したきびすでネオンへ背を向けた。隠しようのない大きな背中は壁とネオンの前にそり立つ。見つめたなら憤り

が罪悪感へ変わるなどと、それもまたネオンにとって慣れたものはなかった。

『……そんな』

しかも知らぬままに積み重ねてきた時間は長すぎ、つぎ込んでまです事に育て続けたものが無駄を極めた誤解だなどと、まったくもって目も当てられない。

違う。

思うままにネオンはトラへ手を伸ばしていた。だが触れかけたところで感じた恐れに、ネオンもまた己が手を引き戻す。

『ひねくれてはおるが、分かってやってくれんかの？』

後押しして、サスが鼻溜を振っていた。振り返れば、詫びるようにネオンを見上げて微笑む顔はそこにある。その笑みがネオンへ大丈夫だ、教えていた。気づけば小さくサスへうなずき返して、ネオンはその目をトラへ持ち上げなおす。

『……そうだよ。見つけてもらえなかったら、ここにいなかったかも、なんて考えてもみなかった』

サスがその傍らで、しきりにうなずいてみせていた。

『ありがとう』

今まで一度も口にしたことのなかった、それは言葉だ。

『借金があるうとなかるうと、起こしてくれたのなら本当は最初に言うておくべきだったのに。遅くなってごめん。あかし、自分のことが分からなさ過ぎて、自分のことばかり考えてて、子供みたいで、そんな簡単なことに全然、気が回っていなかった』

と、やおらサスはトラの前へ回り込む。力任せだ。その体をネオンへ向きなおらせた。なら向かい合ったそこでトラは返事をするのか唸っているだけなのか、うつむき潰れた喉の奥から、たった一言だけを放つ。

『うつむ』

向かって思い出し、ネオンは眉を跳ね上げていた。

『そうなのっ！ あなたが大事に思ってくれたから、あたしはこう

して動いて話せるのよ』

だがトラの返事は変わり映えしない。

『う……、む』

『お前さんはそれしか言えんのか』

つつこまれて、しばしトラに悩むような間は空いていた。

『う、うむ』

結局、答える。

『まったく……』

呆れてサスはため息をつき、それでもかまわないとネオンは続けた。

『あたしはさ、トラ。あたしは言うことを聞かない自分の不便を呪ってただけで、その原因はあなたに、ギルドにあると思っ込んでた。全部、借金のせいだって思ってた。けど違うの……。その、好きとか嫌いとか、わたしには分からないけれど』

言葉が、トラの顔を少しばかり持ち上げさせる。

『だって、あなたのついた嘘の色メガネを取れば、わたし、あなたのことは何も知らないんだもの。わたしを起こしてくれた恩人っただけで、それくらい大事に思っけてくれたっただけで、ほかは何も知らない。知らないのに、好きだとか嫌いだとか、そんなことは言えないもの』

とたんサスから声は上がる。

『ほー！』

トラもシワからアゴを引き抜くと、初めてまじまじネオンを見た。

ネオンはそんなトラの目の奥へと微笑みかける。

『聞いて！ あたし、自分が誰だか分かったの』

それはまるで昼下がりの大冒険を、自慢げに話す子供のような笑みだった。

『だからもう不自由だって当たるのはおしまいにするわ。ちゃんと話し合うこともできるし、理解だってできる。そう、だからやりたいことだっけ見つけたのよ。そのためにもここから絶対に抜け出し

たいつて思ってる』

そうして『ねえ』とトラへ、呼びかけた。

『それって、考えはあなたと同じだとは思わない？』

瞳を挑発的と輝かせ、耳にしてサスもよっしゃ、と手を打ち鳴らす。

『ここまで来てくれたんだもの、トラなら手伝ってくれるわよね？』
ネオンはウインクした。

しかし素っ頓狂な顔をしたままのトラに、反応はない。

見かねてサスが、その尻を叩きつけた。

ぎゃふんと巨体を跳ね上げたトラが我を取り戻す。なら返す答えはもう決まったも同然となっていた。シワを揺らしてかぶりつかんばかり、ネオンへと口を開く。

『ま、まかせろ。もちろんだ！』

そしてアルトは矯正開始までの時間を計算した。

リンクルームへ消えたトパルを背に、ネオンの眠る部屋へ向う。

勝機があるとすれば、それはまたもや賭けとなるだろうが、座して物理解体を待つことに比べたなら賭けるに値するたった一つの策だとかみしめた。胸の内ではシャツフルの身の上も引つかかっている。クレツシエの部屋をかすめ、三叉路を直進し、オフィス前をやり過ぎた。プロダクトルームの手前で通路を逸れ、並ぶ同型のドアに磁気錠を探す。

と、その目は一点を睨み細められていった。掛けたはずの磁気錠がない。周辺には焦げ跡と、もぎ取られたらしき形跡だけが残されている。

どついうことだ。

アルトは駆け寄り辺りを見回した。

身構え、センサーへ手をかざすとドアを開く。

「ったッ。ん、だぁッ」

とたん、声はもれていた。何しろ見てはいけけないものを見たのだから仕方ない。のけ反り慌ててドアを閉めなおしたのは、頭の中で状況を整理すべく反芻するためだ。ともかく自らを落ち着かせにかか

かる。

果たしてあれは幻か。

確かめる再度、ドアを開いていった。

がそこに、ネオンとサス、サスの店でちらりモニター越しに見たあの『テラタン』は、いる。しかも頭を寄せ合い、なにをや意気投合していたりした。成り行きこそアルトに理解できるはずもない。ゆえに開口一番、発した言葉は、ネオンと同じになる。

「な、なんでこんな所にいやがるッ」

髪を逆立てアルトは吠えた。

『おお！ アルトではないか。探しておったぞ！』

サスが千切れんばかりに鼻溜を振る。アルトへと駆け出していた。『おいッ、じいさん。鍵はどうした、鍵はッ』

これでは明らかに不審者が侵入しました、言わんばかりだ。再会をどうのと言っている場合ではない。アルトは唸り、勢いを削がれてあからさまと不満げにその顔をしばませサスの指す方へ顔を上げる。

『こやつが筆り取っておったかの』

『だーッ、早く戻せ。もうすぐラボの奴らが矯正の準備に来るつてのにッ。バレちまうだろうがッ』

ならそこがお決まりの場所らしい。トラはシワの間へ押し込んでいた磁気錠をいそいそ引っ張り出していた。

『はい』

などと、なぜかしら挙手するネオン。

『いちいち、必要ねえッ』

ドアのスを手のひらで拭い取り、磁気錠を押し付けなおしてアルトは唸る。

『もう来たわよ。白衣のお兄さんたち。血圧と脈拍と血糖値と、えすおーえす？ はかって、DNA採って、ピカッて光って、ムカつくほどあたしを無視して帰っていった』

指を折りつつそらんじて、ネオンは思い出す不躰な行いに口をへの字と曲げてゆく。ドアを閉めなおしたアルトの足は、そんなネオンへ一直線と繰り出されて行った。

『話がある』

『なに、痛いつて』

引いた腕にネオンが声を上げた。とんだ。トラの巨体はひるがっ

ていた。

『何だ、貴様は！』

掴むアルトの腕を振り払う。ネオンとの間へ、その身を割り込ませた。そうして見下ろす胸はこれでもかと反り返り、威圧感にアルトの眉間も詰まる。ままに睨み合えば否応なく、互いの間へ緊張感
は満ちた。

『違うぞトラ！　これがわしの探しておったアルトじゃ』

『そう、あたしをサスの店まで乗っけてくれた、ジャンク屋なの』
察してネオンにサスがまくしたてるが、結局、一言多かつたらしい。

『何、コイツがか！』

トラはぶるん、とシワを波打たせる。なにしろジャンク屋と言えば『アズウエル』でネオンの頭を撃ち抜こうとした輩、としかトラの頭には記憶されていないのだ。

『このヤロウが！』

問答無用でアルトへ踊りかかった。だからこそアルトは反射的に背へ手をまわす。だがそこにスタンエアなどあるはずもないなら、その手は空を切り、しまった、と目を泳がせた襟首をトラにわしづかみとされていた。あつた身長差を埋めて体はいとも軽々と吊り上げられ、暴れようものなら壁へと押し付けられる。

『違う、違うってば！』

光景にネオンが絶叫し、サスもトラの腰へ食らいついた。

『全く、このトンチキが。やめんか！』

だがトラにはまるで聞こえていない。

『貴様、わしのネオンへ銃口を向けるとは、いい度胸だ！　だがそうはさせんぞ。わしはそのために、ここまで来た！　金輪際、その汚い手でネオンには触れるな！』

部屋が揺れそうなほどと壁へ何度も叩きつける。

『やめなさいっ、このっ、バカトラあつ！』

ネオンの大声は、そのときたまたまらず放たれていた。

やおら針金を通したようにトラの背は伸びあがる。

『アルトを離しなさいって言うてるでしょっ！ 今すぐ離しなさいってば。離しなさいっ！』

おかげで掴み上げていた手もまた、スイッチが入ったように開いてアルトを離す。ドサリ、アルトの体は床へ落ち、トラのまたぐらを潜り抜けサスが急ぎ駆け寄っていった。

『大丈夫かの？』

放って肩越し、ネオンへそうつと振り返ったトラは怯え加減がまるきり飼い主に叱られた犬だ。

『銃口を向けたのは本当だけど、それは仕方なかったのっ！ ここへ戻らないためにそう脅しただけよ。引き金なんて引くつもりはなかった。それなのに、あなたってひとはっ！』

『わしはてつきり……』

『言い訳は後っ！』

『まったく、こんな事をしている場合じゃねえんだ』

サスの手を借りアルトも、むせてどうにか立ち上がってみせる。

『何？ 話って』

真正面から、そんなアルトへネオンは鋭い視線を投げた。

『いいか、奴らは恐らく今のお前のアタマをマッピングするため、最初、覚醒状態から矯正に取りかかるハズだ』

告げたところでいまさらネオンが、その話に問いを投げる道理はない。

『イルサリ、ね』

うなずき返しさえする。

するり、飛び出した名前にアルトも小さく笑んで続けていた。

『その間に作業が中断しないようなら、後はお前がやれ』

『やれって、何を？』

唐突過ぎて言うしかない。

『イルサリに約束の内容を聞くんだよ』

『何？ 聞いてどうするの？ だいたい約束って何？』

などと説明すれば話は長い。

『何でもいいからとにかく聞け。そうすれば分かる』

だが分かっているのではないのは、ネオンだけとは限らない。さらに深い不可解の底から、タイムを訴えサスが両手を振り上げた。

『いやはや、待って待て。イルサリとは、あの症候群の権威のことか？ もう死んだハズじゃろうが。そもそもこのF7は何なんじゃ。』

もぐりこんだはいいが、分からんことだらけじゃ』

言うものだから、アルトの肩も縮んで呆れ返ってみせた。

『まったく、それでよくここまでこれたもんだぜ』

『それが、ここの制服を着たバナールがわしらの侵入を助けてくれおつての。ミラー効果を一式、あの兵隊から奪ってよこしてくれたんじゃ。いや、あのバナールが言うには、それもこれも自分の意志を通すための手段に過ぎんらしいが』

思い起こしてサスは鼻溜を振る。

『バナール？』

『そいつはお前さんのスタンエアを持つておつたぞ。知り合いか？』

問いかけるサスに、アルトの脳裏へ名は浮かんでいた。

『シャツフル、か？』

『ともかく、お前さんはここで一体、何をしておつた？ 帰るつもりならわしは手を貸すぞ。そのつもりでここまで来た』

サスはたたみかけ、アルトはしばし泳がせていた目をサスへ向けなおす。

『連邦の戦略の一つとして、ある研究に従事していた。サスに拾われる前、俺はここで働いていたのさ』

一息ついた。

『ドクターイルサリもイルサリ症候群の研究も、ハナから存在しなけりゃ、連邦は押し進めてもいない』

残りを吐き出す準備はもう出来ている。

『その名は、プロジェクトに利用されていたAIの呼び名だ。そのAIを使用して、ここではまったく別のプロジェクトが押し進めら

れていた。そう、あんまり世間に大きな声でいえない類の、な』

サスがほうと、感嘆の声を漏らし、トラが心配げにシワヘシワを寄せてゆく。

前でアルトは目を伏せ、過ぎた時を手繰り寄せなおした。

『安直にいやあ連邦は、じいさんがデフ6で、そっちがテラタンだ、つてことを忘れさせて、自前で用意した新しいカテゴリーにはめ込もう、つて方法をここで模索していたのさ。その方法として既知宇宙内で初めて共通の話題となった事象、造語が普及する前、種族間を超えたコミュニケーションツールとして有効性が認められたアナログ楽器と、トニツクの動話を選んだ。その二つを操作することで誰も彼もをラクに丸め込もうつて大胆な計画を、打ち立てていたのさ。その鍵が、ネオンだった』

ひらいたまぶたで、チラリ、視線を投げる。そこでネオンは何ら動揺することなく、そうらしいと聞いていた。

『だつてのに俺は、そのネオンをここから連れ出した』
話を、サスはしきりに鼻溜をさすりながら追っている。

『おかげで奴らは船賊を巻き込んでまで連れ戻そうとした。なにしろネオンは最初一体、この計画の成果を詰め込んだマスターピース、だつたからな』

『なん、だと？ だからネオンは楽器と……？』

シワを押しつけトラが、両の目を見開いてゆく。

『それはなかなか刺激的な話じゃの』

真逆と落ち着き払いサスがさすっていた鼻溜を振った。

『じゃが丸め込むとは言いようで、その話、昔は洗脳、とか言っておつた類のものではないのか？』

質問こそ、なかなか鋭い。

『ただし過去、それは思想へかけられたものじゃった。じゃがお前さんの話から想像するならば、両方共言語外じゃしの。それはもつと抽象的で、感覚的な部分を浸食するもののように思えるがどうじゃ？』

正解だからこそ、アルトは唇の端を吊り上げ返す。

と隣で、頭を、いやシワか、トラが引っ掻き声を上げた。

『だー！ わしに小難しい話はわからん。だが、ここにいるネオンがネオンだ。最初、一体とはどういう意味だ？ わしのネオンは、ここにしかおらんぞ』

なら答えてかえす前だ。アルトは顔を拭う。

『悪いな、サス』

その事実が裏切りに値するのかどうかは、分からない。呼びかけられてサスもまた、何のことかとアルトへ訝しげな顔を向け返した。拭ってさっぱりしたならアルトは、至つてあっけらかんと口にする。

『俺もネオンも、ヒトだがヒトじゃない』

『何と？』

『俺は34クルー。ネオンはすでに数え切れないほど生成されている』

トラがつまづきそうなほどに、身を乗り出していた。

『俺たちは地に足ついた一回性のあんたらとはちよいとワケが違う、連邦所有の合成塩基から複製された、デザイン自由な生き物なのさ』

『もう、やになっちゃう』

人ごとかと肩をすくめるネオンの合いの手は、絶妙だ。

だとしてやはりサスに動揺はない。

『おうおう、そら小細工じゃ。何人おろうと、わしが知つとるアルトは、お前だけじゃからの』

鼻溜を揺らしてくれる。

ただトラだけが、乗り出した身を驚きに固めていた。

『奴らは世界を俺たちのように変えたがっている。冗談。こっちから願ひ下げだ』

『まったく、やることが強引なのは、その時からか』

切り返すサスが呆れ顔を浮かべる。

『それしか手がないと思えた。ラボ中の職員が仕組めば、抜け出すことはそれほど……』

熾烈を極めた逃走劇を思い出すアルトの表情が冷えてゆく。

『拳句、地球のあの場所で、へべれけか』

はたいて目を覚まさせるようなサスの言葉は、手厳しかった。

『ここを抜ける時に、いくらか必要だった。それに、当初とは計画が狂っちまった。おかげでネオンの船には困が必要になったのさ。そのため俺が乗り込んだ船は、たまたま興奮剤を積んだ配送船だった。

向かった地球には遺伝的な興味があったが、期待外れで仕込んだ運行性の記憶マーカーが働くまでの間、あれはあれで十分、役に立ってくれたと思ってるぜ』

『死にかけておったくせに、よく言うわい』

サスは自虐的と笑い飛ばすアルトを睨み、しかしそうも続かず途切れたなら、頬はいつもの愛嬌に緩んでゆく。

『ま、おかげでわしは命拾いしたかの』

十八番と放つウインク。

『なら、ここにどまる理由はないようじゃな』

目が、周囲を見回していた。

受けてかすかにアルトもうなずき返す。

待っていましたと、サスの鼻溜はそこで大きく膨れ上がった。

『その借りを、これから返す。入ってこれたなら、出られんわけがなかるう。お前さんが望む通り、もう一度ここから出るぞ』

指は一本、振り上げられる。

『よし、トラ！ スラーへ連絡じゃ！ アルトとネオンを見つけたと伝える！』

その時だ。遮り、ドアの向こうから甲高い軋み音は近づいた。それが矯正に使用されるポッドを乗せたストレッチャーの音だと気づけたのは、一番よく知るアルトだろう。

『きやがった』

つまりうるたえるのは、不審者でしかないトラとサスとなる。

『てっ、撤回じゃ。トラ、ミラー効果を用意しろっ！』

サスがそらそら、とトラの巨体をつついた。が即座に手繰った

トラの姿は消えるどころか、ポトリ、その手元から何かを落とす。見れば足元に、二つあった肩あての片方は転がっていた。どうやら元々大きさが合わないところを無理やりに装着したところへ加えて、先ほどの乱闘がマズかったらしい。果たして頑強なはずの装備も、トラの首回りに押し潰されてしまっていた。

『の……！』

絶句するトラ。

ネオンもまた短い毛を逆立てる。

『なに、壊したのっ？』

『何をしとるか、このすかぼんたんっ！』

だからこそネオンは声を上げていた。

『違う！』

その目がとらえたのは塞いだばかりのロッカーだ。

『この奥に部屋があったのっ！』

走りだしせば、蘇る記憶にアルトも後を追う。

『防音室かッ』

取り残されて、トラとサスはしばし顔を見合わせた。だが次の瞬間、ふたりも床を蹴りつけ走り出す。

『そんなところで何をしている』

果たして背で声はしていた。

今まさに元の位置へロッカー押さえこむと、アルトとネオンは振り返る。

『え、や、その……』

覚えた後ろめたさが、ネオンの口を曖昧と開かせた。

制して黙れ、と目でアルトは訴える。

ただ出てしまったのだから、戻せやしない。

『や、やだー』

ネオンは詰まったその先をひねり出す。

『いつまでこんな格好させておく気よー。このヘンタイー。あたしの服はどこよー』

その棒読みも頂点の大根芝居こそ、凄まじい。おかげでアルトの頬も引きつる。押してネオンが視線を投げた。小刻みに振るアゴで何か言いなさいよ、と要求する。だからして冗談、とアルトが目を剥こうがおかまいなしだ。あたしは服を探してるの、と七面相で訴え返してみせた。

ままに睨み合うことしばらく。

やがてアルトの鼻から、意を決したような荒い息はひとつ、吐き出されていた。

『うるせー。今さら服がなんだってんだー。それで十分だろうが』

一瞥くれて天を仰ぐ。

『こちららもう見飽きてるんだ、っつーのッ』

淀むことなく言い切った。

『み、見飽きっ……!!』

たとえネオンの頬が引きつろうと、耳の先まで赤くなるうと、知

ったことではない。おかげで大根芝居も、もののみごとと吹き飛ばす。
『あつ、あなたねっ！ みあ、見飽きたって、それっ、デリカシー
つてもものがないのっ！』

見せつけられて白衣の二人は、ドア前できよんとしている。

『そいつは必要ない。歩かせる』

すかさずそんな二人へ、アルトは持ち込まれたポッドへアゴを振
った。ならそうだった、と我に返った一人がネオンへ歩み寄ってく
る。

『気をつける。丁寧に扱わないと噛みつかれるぞ』

『そんなことするわけないでしょっ！』

などと早々に噛みつくも、かまわずアルトはその腕を取った。白
衣へ引き渡す間際、のぞき込んだ顔へとわずかに首を振って示す。
それだけで悪態を吐きかけていたネオンの動きは止まっていた。

「約束」を問え。

言葉は脳裏を過り、白衣がその背を押して先を急がせる。

『表の磁気錠が外れていましたが、あれはあなたが取ったのですか
？』

向こうから、もう一人の白衣がアルトへ問いかけていた。

『俺が来た時からショートしてたぜ。アルトが逃げ出そうとドアを
乱暴に叩いたんじゃないのか？』

答えて返し、ならばここに本人がいる以上、それは追求すべく話
題ではないと白衣も納得してみせる。

『今回、マスター立ち会いの元に矯正を行います』

話題を変えた。無論、マスターとはクレッシェのことだ。

『確かに、前歴アリってわけだ。まかせっきりににはできやしないな。
トパールもいるんだろ？』

アルトはすかさず確かめる。

『それが何か？』

白衣は不可解な面持ちを向け、もう一人が早くも空のポッドが乗
ったストレッチャーを、ドアの向こうへ押し出してゆく。

『いや。なら俺も付き合っぜ。自閉が解けたからといって、それまで矯正に携わっていたのは俺だ。いなけりゃ何かと不便なことがあるかもしれないだろ』

当然のように名乗りを上げた。強引さに白衣はしばし眉をしかめてみせる。

『問題ないとは思われますが』

もちろん問題があるうと居座る気だけでいるだけに、返事に何ら期待はしていない。そしてそれが最初で最後のチャンスでもあった。

『いいさ。あんたに判断を求めちゃいないよ』

だからこそ握りつぶさぬよう、アルトはそつと受け流す。

ストレッチャヤーは耳障りな音を響かせると、通路をリンクルームへ向かっている様子だ。追いかけてアルトも部屋を出た。誰もいなくなった室内のドアはやがて、後ろ手に閉じられる。

『で、あやつらは助けに来たわしらを閉じ込めて、一体どうするつもりじゃ？』

つまりロッカーで塞がれた防音室の中、呟いたのはサスだ。その隣ではトラが、シワの間から抜き出した通信機を握り締めている。

『スラーとは通信が繋がったが………なんと言う？』

問われたサスが、うーん、と唸った。

『こら、呼び出しておいて返事くらいしろ！ こっちはバカでかいデータと格闘中で猫の手も借りたいところなんだぞ。聞こえてるのか、テラタン！』

おかげで通信機の向こうから、どやす声は漏れてくる。どうもあちらはあちらで、てこずっているらしい。

『ええい。二人に閉じ込められたとでも言っておけいっ！』

ヤケクソ混じりだ。サスは投げ返してドアへ耳をすりつけた。

『うむ。防音室とか言っておったな。外の音がまるで聞こえんわい。隣ではトラがけんか腰、サスに言われた通りを伝えている。まどろっこしく聞きながらサスは、ドアの隙間へ爪を立てた。

『トラ、済んだら手を貸せ』

『わしに言つな、わしに！ 行きがかりじょう、そうならざるを得んかったのだ！』

スラーへ怒鳴りつけたのを最後にトラが、通信を切り上げドアに手をかけた。

『待たせた！』

その力はサスにとつて百人力か万人力か。やがてゆっくりと、ドアは引き開けられてゆく。

(ボス、あれ！)

ジェスチャーに近い動きが、処置室へ向かうテンとメジャーの視線をさらっていた。

ホログラムの巨大な樹が立つ部屋向こうだ。四つ角を横切って、やたら騒々しい音を立てて白衣が台を押し歩いている。テンの探す『ヒト』二人もまた、その後ろから姿を現していた。

(なんや、あの奥へいくんか)

腰の辺りでテンは控えめに指を折る。

(追いかけますか？)

メジャーがたたみ掛けた。

(いや、おることがわかればそれでいい。処置室における奴が先やつづるうちにも白衣と『ヒト』たちは、四辻を右手へ折れていった。

見送りテンは視線を手元へ引き戻す。ホログラムの樹が立つ部屋は、もう目の前だった。処置室はその隣だと記憶している。

とその時だ。ホログラムの樹が立つ部屋で、ドアはスライドする。中から白衣は飛び出してきていた。通路を走り去るのかと思えば彼らはずぐ隣、テンたちが目指す処置室へなだれ込んでゆく。二人、三人、さらには機材を押しながら現れた合計四人が、立て続け中へと駆け込んでいった。

伝わる物々しさが、これからひと暴れするつもりでいたテンたち

へ先を越されたような拍子抜けを食らわせる。テンたちは、ただガスマスク越しの顔を見合わせた。

間にも一人、二人、また白衣は処置室へ入ってゆく。入り口でぶつかりかけて身をひるがえす、それは慌ただしさだった。

何かがおかしい。

思えば残る距離を一気に詰めていた。様子に、ホログラムの樹が立つ部屋から姿をあらわした白衣が気づき、短く声を上げる。かまうことなくテンはスパークショットでそんな白衣を突き飛ばした。

処置室のドアは忙しい往来に、開け放たれたままだ。

たどり着いて中をのぞき込む。

だがベットは、囲う白衣と機材に遮られ見ることができない。ただ上部から照射されている滅菌ライトとその真下、ベッドへ頭を寄せる白衣たちの背中だけがテンの目にとまった。

小刻みと揺れてかわされる会話のスピードが圧倒的だ。割り込まず、テンはしばし気圧される。やがて拉致があかぬと恐る恐る、部屋へ足を踏み入れていった。

前で、作業にいそんでいた白衣がふい、と顔を上げる。目が、そこにいるはずのないテンたちを見つけて見開かれた。おかげで見えるようになったのは、それまで覆い隠されていたベッドの一部だ。頭から被っていたはずの処置着を裂かれた部下の体は、そこにあった。

『何をしている。遅延剤だ！』

すかさず怒号が、テンを見つけ押し固まる一人へ飛ぶ。

『ぼうつとしていた場合か！』

動かないなら、さらなる声は上がっていた。が、怒鳴りつけて顔を上げた白衣もまた、テンたちを視界にとらえる。忙しく動いていた手はそのとき止まり、啞然と口を開いていった。否や、我を取り戻す。

『な、貴様らは別室に案内されたはずではなかったのか！ ここは関係者以外立ち入り禁止だ！』

言ったところで、テンたちに造語は聞き取れない。

テンはただ、アゴ先からファスナーを引き下ろした。光景をしかとその目で確かめんと、かぶっていたガスマスクを払いのける。とたん触れた空気は目に染み、それまで感じることのなかった腐敗臭もまた、強く鼻を突いていた。思わず眉間は詰まり、背後でガタリ、音は鳴る。

(こ、これは……)

メジャーだ。テン以上に動揺すると、その手から握っていたスパークショットを滑らせていた。慌てて掴みなおせば傍らで、もう一体もぎやふん、と跳ねる。

それはベッドの上だった。だが横たわっているはずの部下はもうそこにはおらず、裂かれた処置着の中にスライムがごとく溶けて輪郭を失った肉塊だけが転がっている。その塊は不規則な呼吸を繰り返すと、手足の名残と思しき出張った「何か」を振り回し、声もなくもがき続けていた。

これが大役をかって出た仲間の成れの果てか。

テンの中で声は回る。だがあまりの変貌ぶりに信じきれず、瞬きさえもがぎこちなくなっていた。

『今すぐ出てゆけ!』

向けて白衣が怒鳴りつける。外を指さし振り上げられた袖口には、透き通るような緑のシミが広がっていた。

『だめです。代謝、止まりませんッ!』

別の声が飛び、翻弄するように開け放たれたままのドアの向こうからさらにもう一人、白衣は飛び込んでくる。動かぬテンとメジャーを押しつけてベッドへと駆け寄っていった。その手が握りしめているのは半透明の袋だ。たどり着くなり白衣はその袋を裂いた。

『こいつらは、ほうっておけ。シールが先だ! このままでは汚染が広がる』

中から二メートル四方はありそうなシートは引き出される。

『くそッ。矯正に手を取られたからだ!』

邪魔だ、といわんばかり機材に吊られていた滅菌ライトは払いのけられ、白衣はベッドを回り込むと肉塊全体を覆うように取り出したシートをかぶせた。それを合図に周囲の白衣たちもまた、シートの縁をそれぞれ掴み力任せに引っ張る。

とたんシートは白く曇った。

内側から冷気のようなものは吐き出される。

ままにベッドを覆い白衣たちは、暴れる肉塊を押さえつけていった。

無論、密着してゆくシートに呼吸を確保するような隙間など、ありそうもない。つまるところ白衣たちはこのケースを見限ったのだ。テンは察する。とたん怒りは爆発していた。

(なに、さらしとんじゃあっ！ キサマらあっ！)

振り上げた腕もろとも、白衣たちへ踊りかかってゆく。

『それはどういうことですか?』

イルサリ、リンクルーム内でクレツシエは問い返す。

『申し訳ありません。くわえて極Yが暴れているため、制圧要員を要請中とのことです』

リンクルーム内での無線通話は、イルサリとのセッションを妨げるため許されていない。しこうして通信は壁際に取り付けられた有線端末で行われていた。取りあげた端末を握りしめ、トパルはクレツシエへ聞かされたとおりを繰り返す。

『……塩基付加が失敗』

クレツシエが、くどくも吐き捨てた。

『マッチングミスによる拒否反応へは、マニュアル通りの処置で対応いたしました。状況の改善にはつながらなかった模様です。アルトの矯正に人員をさいたことで経過分析が追いつかなかったことが』

トパルは話すが、もうクレツシエは聞いていなかった。

『失敗……!』

呟きに遮られて口を閉ざす。またも最後まで聞かれることのなかった報告に、ただ奥歯を噛んだ。気づくことなくクレツシエは、そこで痛々しげと頭を振ってみせる。

『結構。いずれにせよセフポドにスタンエアを返したような輩です。こちらの要求どおり事が運ぶとは期待していませんでした』

やがて『エブランチル』独特の吊りあがった目で、トパルをとらえなおした。

『制圧後は特定流奪船乗船員として逮捕。即刻、当局へ引き渡さない。思惑通り運ばねば用済みです。ただし、動話解体と言う目的があります。極Yへの音声言語付加についてはアルトの矯正結果待

ちと、優先順位を変更するかたちで続行します』

そしてふと思い出したように、笑みもまた浮かべる。

『ならば、長らく放置していたアレがどこまで使えるのか。さしあ
たつての問題はそこになるでしょうね』

その笑みに引き込まれかけてトパルは我を取り戻していた。まだ
繋がっている有線を、急ぎ耳へ押し付けなおす。この場を借りて、
シャツフルの行方もまた確かめようとし、クレツシエの視線を感じ
たような気がして迷った。

『何をしているのですか？』

姿をクレツシエに問いただされる。

『いえ』

答えるトパルの中に、悔しい思いだけが澱と残った。

クレツシエさえいなければ。

胸の内で毒づく。

その毒で初めて、己に「ある」思いをトパルは知っていた。なら
ばもう無視することなどできはしない。いや、押し潰そうとすれば
するほど意識されるその毒に、侵されてゆく自身を止められないで
いた。だからこそバレぬようにだ。いやそれこそ見ぬフリでトパル
はクレツシエへと返す。

『おっしゃるとおりかと、思われます』

それこそが割り振られた役割だった。

これまで何一つ考えることなく繰り返してきた、例外の存在しな
い応答だった。

遠い昔から用意されていたこのシナリオは、ここにこうしてある
限り、これから先も続くだろうとトパルは強く確信する。だからこ
そふと、思い馳せるのは、彼ならこの場であろうとやはりシャツフ
ルの行方を確認しただろうか、ということだった。そうして得た答
えに、ひとりごちる。ここからアルトを連れ去った瞬間からだ。彼
は用意されたシナリオを捨て、その外へ飛び出してしまったに違
いないと。

造られた流れの、その外側へと。

自だけが持つ確信の元へと。

奴らはボーダーだと思え。

我々は外へ出る。

シャツフルの言葉がトパルの中をまた巡る。

それはこうも忘れられぬものとして、うすらぼんやりながらもすでに染みつきトパルの中に息づいていた。息づくことで、造られたのではなく生まれてきたと言ってよこした彼の曖昧さのなんたるかを、理解できなかつた向かうべき外がどこにあるのかを、初めて像へと変えてゆく。

用意されたシナリオを捨てた彼が主張する曖昧さとは、自らが何者であるのか、与えられて当然と思いついていた役割を永遠に捨て去ることで得た浮遊感、そのものだ。その予測できぬ曖昧さが絡んで広がる混沌とした世界こそ、向かうべき外ではないのか。そう感じ取る。

ならそこにあるのは予測不能であればこそその絶対的な隔絶と、その混沌が生み出す解消されることない齟齬で間違いなかった。だからして横たわる底なしの孤独もまた、垣間見る。

だというのに、そこへ向かわねばならない。

メリットは。

トパルは考えた。

シャツフルは『カウンスラー』で見返りはある、と言っている。

しかしそれが何なのか分からない。

トパルは眉をひそめた。

違いなどない。

証明すべく外へ向かうと勇んでいたはずだというのに、怯みさえする。

瞬間、リンクルームのドアは開いていた。

真正面、クレッシェが泳ぐかのように振り返る。

メガーソケットをモニターしていた二人もまたドアへ体を向けて

いた。

リンク中の二人は微動だにせず、トパールも目が覚めたように視線を投げる。

押し出されたポッドはそこで、リンクルームへ乗り上げていた。続き、矯正の準備を担当していた白衣が二人、アルトが、セフポッドが、室内へ現われる。

飽和状態となったリンクルームの温度が、錯覚でもなんでもなく上昇していた。煽られ、それぞれの視線は不安と緊張を織り交ぜ交錯する。

手狭となった室内の端へポッドを置き、押していた一人がモニタ―中の二人へ靴先を向けていた。

ちらりトパールへ視線を投げたセフポッドは、クレツシエと対峙している。見つめ返すクレツシエが浮かべた笑みは、全てを手中に収めたかのごとく満足そのものだ。

『思いのほか早く仕事にとりかかってもらえたようで感謝していますよ、セフ』

耳につく猫なで声が、持ちうる力を誇示していた。

『やはりあなたはF7のセフポッドに变りない様子で、何よりです。ただ衛生面にはもう少し心を砕いていただきたいものですね』

その声で、着用していない白衣を諭す。だとして、ここへ入る前にすれ違った時とは似ても似つかぬほど強張った表情のセフポッドには、答える様子がなかった。だからこそ代わってトパールは胸の内ですこすこ答える。

それはとんだ見当違いなんだ、と。

『この、クソ忙しい時に処置室へ隊員をよこせだと？』

筆られた分隊長の通信機は、新しいものへ挿げ替えられている。

しかしながら壊しかねない勢いで怒鳴りつけていた。

さすがに船内を熟知しているだけはある。ラボ専用の電気室区画、

その網の目のように張り巡らされた通路をシャッフルは迷うことなく逃げ続けていた。現れたウィルスカーテンを避け、右へ左へ躊躇なく通路を折れる足取りは怪我など負っていないかのようにさえ見える。

『中で極Ｙが暴れているとのこと。制圧の要請がありました』
『当然だろう！ 塩基付加だか何だかは知らんが、中へ入れたりするからだ！』

最低限、構造上バッテリーの上がりやすいスパークショットのプラグは抜かせたが、招待客であることをアピールすべく没収しなかつたつまらぬ駆け引きに、罵る以外、返す言葉が出てこない。

『これ以上、こちらの数を割けば穴があくぞ』
分隊長は跳ね返す。

と、そこで迷路のようだった電気室区画を抜け出す。見通しの利く通路はまっすぐと伸び、気配ばかりだったシャッフルの背は通路奥、とたん照明のもとにさらされた。

『別動班、対象は電気室区画を出た。まもなくそちらと合流するぞ』
『！』

分隊長はプロダクトルームへの返答を保留し、先回りさせていた三体へ急ぎ伝える。そう、警戒線として照射率を上げたウィルスカーテンで仕切られたこの区画の出口は今、ひとつに制限されていた。IDの入力でしか開閉しないそれは民間へ解放中の霊安所エリアへ続く鉄扉だ。

『了解。現在、第一霊安所内を移動中。詰め所を抜け、急行する』
聞き終えると同時だ。指示を待っているだろう保安所へも分隊長は声を張った。

『いいか、待機所の三名をアズウェル装備で急行させる。指揮は班長に任せる』

了解の声も中ほどで通信を切る。ダイラタンシーショットガンを握りなおした。これ以上の失態は今後にかかわりかねない。同情と言う名の感情へ完全封鎖をかける。何しろつけ入る相手こそ同胞な

どと欠片も感じていない冷徹な輩だ。容赦手加減そこ命取りだと、目の前の事にのみ集中した。頂点と高まったところで、追いかけて続けたシャツフルの背は予想通りと鉄扉を目指し右へと折れる。

『対象、通路を右折。ドア正面へ出た』

別動班へ短く告げた。周囲四体へも追い立てるピッチを上げるよう手を振り上げる。

と、その時だ。

分隊長の中に解せぬ思いはわき起こっていた。それは至極単純なものだ。なぜシャツフルは奪ったハズのミラー効果を使用していないのか、というものである。これではまるで追いかけてくれと言わんばかりだった。だがそれだけでもう十分だろう。次の瞬間にも声はもれだす。

『しまった！』

思い当たる理由など、ひとつだけだ。効果一式を何者かに譲った。そしてその第三者の存在を仮定すれば、あえて警報を鳴らしたことも、この派手で無駄な逃走劇も、全てが妙にしっくり飲み込めてくる。

陽動作戦。

こつして攪乱されている間にも、見知らぬ何者かはミラー効果を稼働させ、隠密のうちに行動しているのか。

『くそつ、極＼か？』

現に、処置室で騒ぎは起きた。

分隊長は保安所を呼び出す。

『全隊員へ警告！ 何者かがミラー効果を使用してラボ内に入った可能性がある。相互チェックを開始。不審な効果の残像があれば即刻拘束しろ！ また不審船着艦の恐れあり。艦橋に入艦記録のチェックを要請しろ！』

当のシャツフルは、霊安所へ続く鉄扉へ階級章をかざしている頃だろう。まだドア向こつこの別班からは、何の連絡も入ってこない。

そしてライオンは目を瞬かせる。

傍らでは、トラからの連絡を叩き切ったスラーが、だいぶさまになってきたレプリカの軍服も凜々しく入艦記録との格闘が続いていた。だからしてその光景にスラーはまだ気づいていない。

『バレたか……!』

ライオンだけがひとり、吐く。

無理もない。詰め所から見渡せるガランとした霊安所へ、今まさにそぐわぬ物々しさを連邦軍は駆け込んできていた。

『まだ、バレちゃいなー』

スラーは返し、

『違う! 向こうから軍だ!』

ライオンが指を突きつけた。なら軍と聞いたスラーの動きはピタリ、止まる。『エブランチル』独特の吊りあがった目をそちらへ持ち上げていった。

『な、なんだと。どうなってやがる!』

そんな光景から背を向けたライオンの顔は、次から次へと様子を変えてゆく。

『……モディー! おい、モディーツ! 一体そっちはどうなってやがる』

など等と呼びつける声が響くのは、スラーの霊枢船が停泊す格納庫内だ。メンテナンスも終了した船内、不安定な偽造IDの維持に精を出すデミの隣でモディーは、跳ね上がっていた。

『し、しゃちよー。モディーは驚かされたでやんすよー』

『うるせー。偽造IDがバレちゃまったのかって聞いてんだ! こっちに軍が駆け込んで……』

とたんモディーはぐるりと、デミへ片目を回転させる。

『大丈夫。なんとか持ちこたえてる』

見向きすることなく鼻溜を揺らしてデミは答えた。

『社長、デミさんの話によれば、まだバレてないそうでやんすが…』

だがスラーの応答はない。

『し、社長？ 社長、しゃちよー……？』

『違うよ、それ』

びしゃり、デミは遮る。

『おじいちゃんたちかも知れない』

『サスさんと、トラさんが？』

モディーは振り返る。そこでホロスクリンを見つめるデミは、似合わぬ険しい顔をしていた。

『ふたりが見つかったかも知れない、でやんすか？』

『違うかもしれないケド』

と、やおらモディーは立ち上がる。その目は珍しくも一点をとらえていた。

『モディーが行って、確かめてくるでやんす』

腰掛けていた操縦席をかわし、ひらり、身をひるがえす。刹那、動きを止めたのはデミの手だ。硬直した背中がのんだ息にピン、と反りかえる。

『待って！』

呼び止める声は外へ漏れるほどにも大きい。あまりの剣幕に降りていた階段を踏み外しかけてモディーは、手すりへしがみついていた。

『も、モディーは待ったでやんす。な、なんでやんすか？ デミさん』

しかしながらホロスクリンを眺め続けるデミが振り返ることはなかった。ただ独り言のようにこつ鼻溜を振る。

『ダメだよ……。入艦記録の再チェックが始まっちゃった。ぼくひとりじゃ、今度こそバレちゃうかも！』

荒事に慣れていない白衣の反応は、鈍かった。飛びかるテンの目に、風にあおられなびく布切れと映る。ならテンは邪魔な彼らの襟首を、四本の腕でそれぞれに掴んだ。背負ったスパークショットさえ振り回し、ベッド際からむしり取る。むしって次々、投げ捨てた。一人、二人と白衣は壁へ張り付き床へと転がる。鈍い音は鳴って、傍らに据えられていた機材へさらに一人がなだれかかった。なら足元をロックされた機材のフロートは白衣もろと横倒しとなり、照射されていた滅菌ライトが天井を滅菌したかと思えば、その勢いで横たわる塊とを繋いでいたコードをシートの中から引き抜いた。

(おい、大丈夫か！)

かいくぐり、テンはベッドをのぞきこむ。貼り付けられたシートを引き剥がそうと、上の手を伸ばした。

『勝手なことをするな！』

まだ残る白衣がそれを押し止める。

瞬間、そんな白衣の頭はぶれた。

後頭部にメジャーのヒジがめりこむ。気づけばもう一体も、立ち上がりかけていた白衣をあらぬ方向へ殴り飛ばしていた。壁に叩きつけらると伝い白衣は、這うようにして処置室の外へ逃げ出してゆく。

邪魔者のいなくなったそこでテンは満を持してシートを剥いだ。妙な音は聞こえてシートは糸を引き、腐敗臭がさらに強まる。見下ろすテンのは目は、なおさらきつく細められていった。

ベッドとシートの間にはもう、固形物ですらないものがへばりついている。崩壊も最終段階を迎えた赤黒い流動体のみが、そこには残されていた。振り回されていた四肢も、呼吸らしき動きももう見いだせない。

(うわ！)

遅れて覗き込んだもう一体が、またもや腕を振り上げ、うるたえた。

睨み付けたままでテンはそっと、シートを戻してゆく。

離せずシートを強く握り締めた。

上へと手は、そうっと重ねられる。

メジャーがそこで、テンへ静かに首を振っていた。

思わず息をのみ、うなだれていた頭をテンは持ち上げる。今は、感傷に浸れるような場面ではない。懸命に自身へ言い聞かせた。

証明して背へ、けたたましい足音は覆いかぶさる。止まりかけていた時は動き出し、振り返ったテンたちはドアへ視線を飛ばした。

先だつて転がりだしていった白衣が知らせたのだ。開け放たれたままのドア周囲には、隣から駆けつけてきた白衣の影がちらついている。交互に中の様子をうかがうと、あからさまに警戒してみせた。

そうも素人を相手にして怯む道理などあるはずもない。テンはじわりベッドからドアへ向きなおってゆく。白衣を見据えて手探りとスパークショットを身に引き寄せていった。

(残、五〇)

上二本の腕で淡白に綴るそれは、スパークショットの残り放電時間を知らせるタイミングだ。

応えてメジャーともう一体もまた、スパークショットを構えなおした。感触を確かめるようにグリップを握る。深く落とした腰でテンの脇を固めた。

(取引は、不成立や。今からヒトを取り戻しに向かうぞ)
押し殺すようなテンの動話にみなぎるのは、ピリリとした緊張感だ。

(了解)

(ウィッス)

感じ取り、動話というよりもより短いジェスチャーで、メジャーともう一体もうなずき返す。

視界の端で確認しつつ、テンは倒れる白衣を足先で転がした。倒れていたフロートを引っ張り起こす。滅菌ライトが骨折しながら、あさつての方向を向いて砕けた照射面をぶら下げ立ち、一体何を測定していたと言うのか、倒れた際に引き抜かれたコードもまた流動体をこびりつかせるとじゃらり、音を立ててぶら下がった。

四本も腕があればこういう時こそ事欠かない。テンは余るもう一本の腕でフロートを作動させ、足元のロックを解く。同時に別の手で指揮をとるかのごとく、メジャーともう一体へ合図を送った。

とたんテンの手元から、ドアへ向かい機材は押し出される。滑走する機材は奇声にも似た軋み音を立てると、あつという間にドアをすり抜けていった。及び腰で処置室内を覗き込んでいた白衣たちは悲鳴を上げて散り、勢いもそのままに機材は壁へとぶち当たる。筐体たわませ、砕けて破片を飛び散らせた。

合わせてテンは床を蹴る。処置室から飛び出し見回せば、へつぴり腰と壁に張り付く白衣と目は合った。手始めに、その脳天を振り下ろした電極で潰す。背後で、目の当たりにして逃げ出す白衣へメジャーが放電し、もう一体が壁へ激突したフロートの傍ら、腰を抜かしてへたり込む白衣を掴み上げた。みぞおちへ、横面へ、残る拳を浴びせ続ける。免れた白衣たちはその間から、もつれる足のままに逃げ出していった。

(こら、またんかいっ！)

ぐったりした白衣を投げ捨て、一体が身を翻す。

(ほっとけ！)

テンは押し止め、腕を大きく振って返した。

(ヒトや！)

折る指で、処置室へ入る直前、この通路の奥へと消えた彼らを指し示す。目にした一体が、逃げ行く白衣を惜しみつつ指示に従った。メジャーもまた久方ぶりの放電に焦げ臭い臭いを放つ電極を片手に、うなずき返す。

とそれは、走りゆく白衣から視線を引き戻そうとした時だ。一体

の目に、通路をこちらへ走りくる武装集団は映る。瞬間、消えた。言うまでもない。ミラー効果だ。

(ボス！ 軍がきよった！)

振れば、踵を返しかけていたテンは動きを止めていた。

メジャーもそんな軍へ電極を向けなおす。探して、通路の隅から隅を舐めた。しかし逃げ去る白衣の背中以外、何も見てとることはできない。はずが、見えぬ力に弾き上げられ、メジャーのスパークショットは大きく跳ねた。メジャー自身も吹き飛ばされる。宙を舞った体は床で跳ね、止まらず通路をこれでもかと滑った。

(メジャー！)

叫びとも取れる振りだ。テンはつづり、メジャーへ足を切り返した。

かすめて何かは飛来する。

ダイラタンシーベレットだ。

気づき屈んだ頭の上を同様に、弾はまたもや飛び去った。

かまわずテンは突進する。

横たわるメジャーの傍らへ滑り込んだ。かすかにもがくメジャーは明らかに被弾している。テンは迷わず自分のスパークショットを肩へ担ぎ上げ、メジャーのスパークショットを拾い上げた。残る腕でその体を掴み、なおかつ残る腕で動話もまた放つ。

(樹の生えとる部屋や！)

室内はこの騒ぎですでもぬけのカラだ。逃げ込めと、もう一体を促した。

見て取った一体が、やおら強い雨脚から逃れるように身を屈め、目の前にあったドアへ走る。いち早くスライドさせ、くぐり抜けて閉まりきらぬようそこへ体を挟み込ませた。

(ボス！)

メジャーを引きずるテンを待ち受ける。

飛び来るダイラタンシーベレットが、そんなテン前で、壁際でへしゃげたフロートをさらに細かく打ち砕いた。察するに、弾の濃度

は最高レベルらしい。テンは腹の底から、クソツタレと毒づく。毒づきながら、メジャーを引き連れ部屋へ転がり込んだ。

前でドアが、追いかけて飛びくる流動弾を遮り閉じてゆく。

(すみません、こんな時に)

かすかと振るメジャーの様子は弱々しい。だからこそテンの振りには、粗暴を極める。

(アホか。そんな話は後や!)

傍らでは機転を利かせた一体が、ドアの動力部をスパークショットで焼き払っていた。放たれた閃光はまるで生き物であるかのよう
に電源を伝い、部屋の隅々へ走り去った。一瞬ながらふわり、周囲の照明は落ちかける。

(動けるか?)

メジャーのスパークショットをテンは担ぎ直した。メジャーは息苦しげにアゴ先のジッパーを下ろすと、ガスマスクを脱ぎ去り返す。

(なんとか)

そんなメジャーの脇へ、テンは腕をくぐらせた。気づいたもう一体が反対側へ回り、同様にメジャーを支える。ならちようと脇腹辺りだ。メジャーのラバースーツは裂けると、そこに流れ出す体液を又ラリ、光らせていた。早急の手当てが必要だと、テンは察する。だがそれもこれも、ここから脱出しなければ望めそうもない。

(やっかいやな、ミラー効果)

メジャーには無理があると分かりつつ歩調を早める。テンはともかく円卓の向こうを指した。

懸命に足を運ぶメジャーの息は、ただそれだけで上がっている。

挟んで支えるもう一体が、やおらテンへと腕を振った。

(ボス、あれは水とホコリに弱いんですよ)

(それくらい、俺もしつとるわ。せやからここでどないせいいうねん)

駆けつけた軍は早くもドアの撤去に着手し始めている。隔壁代わりのドアとは違い、薄いそれは的確な彼らの対処に揺れ動く、今

にも開きそうな気配を漂わせていた。

(なんや、これだけあつたら、どうにかなりそうやないですかあ)
盗み見ながら、円卓の影へもぐりこむ。ゆっくりと、メジャーもまたそこに座らせた。温和な日ごろからは想像のつかぬほど顔をゆがめたメジャーは、傷口をかばうように体を捻ると、しばし楽な姿勢を探してうめく。

(わたしが、囿になります)

おもむろに動話を放った。

見て取ったテンが最後まで読み取ることはない。かぶせて手早く指を折り返す。

(何、言うてんねん。それは俺が許さん)

(彼らはわたしの確認に、必ず近寄ってくるでしょう。そこを……)
押し問答だ。

だからして傍らでもう一体も、しきりに周囲へ頭を振っている。

見たことも触ったこともないような装置を眺め回し、この部屋の一番隅、据えられた観音開きの扉へ目を凝らしていった。くぐれば奥には別の場所が開けている様子だ。感じ取ったからこそ体も動きだす。動話もなくそこへと擦り寄っていった。

跳ね開けたなら、ラバーブーツ越しであるにもかかわらず空気が変化したことを感じ取る。言い得ぬ緊張は走り、過剰なほど周囲へ視線を走らせ奥へとまた足を進めた。

薄暗く、狭い通路は天上に剥き出しのエアダクトを這わせている。要所、要所、くどいほどのウィルスカーテンは敷かれ、くぐり、中ほどにまで来たところで、やがて感じていた外気の変化が湿度であることに気づかされていた。

足を止め、確かめるべくガスマスクを脱ぎ去る。

五感がより鮮明となっていた。

おかげであまり発達していない極Yの耳へも、かすかと空気の流れる音は聞こえてくる。追って一体は、頭上のエアダクトへ目を向けた。辿り、再び足を進めれば、行く手を塞いで霜に覆われた三重

ロツクの嚴重な扉は現れる。

エアダクトはその中へ吸い込まれていた。

一体は、そんなエアダクトを電極で突く。

乾いた音と共に圧のかかったそこへ一瞬、霜は白く広がった。

(こいつ……！)

その目が見開かれる。

ためらう時間こそない。

突いた電極の先もそのままに、一体は引き金を絞った。

およそ十五秒コンド。

焼き切られたダクトに穴が空く。とたんそこからスモークよろしく、白い冷却ガスは噴き出した。床を這い、ガスはあつという間に足元を埋め尽してゆく。

かき分け外へと向かいながら一体は、さらにもう三つ、ダクトへ穴を空けた。噴出するガスはもう濁流のごとくだ。床をうねり音を立てるように流れてゆく。その中を走り抜け、一体は観音扉を開け放つ。

(ボス！ 水、見つけたッス！)

つづると同時だった。こじ開けられようとしていたドアが室内へ倒れ込むのを、目の当たりとする。

ひと時、不安定に瞬いていた明かりがそれを合図に、消え去った。それでも立ち続ける円卓の樹がオレンジ色の光を放ち、通路から漏れる明かりと共に、音もなくゆっくりと床へ広がる冷却ガスを照らしだす。

リンク状態をモニターしていた白衣が一人、ネオンへと向かった。その姿を興奮した面持ちでクレッツシエは追っている。

『現状の解析はより緻密なものを求めます。覚醒状態での解析を』
耳にしてトパルもまた、ネオンへ歩み寄っていった。腕を取れば辿ってネオンは見上げ、もう片方の腕を白衣が掴んだその後、アルトへと首をひねってみせた。

「じゃ、ね……」

聞こえるのは吐き出された言葉よりも、堪えたその前と飲み込んだ後の方だ。受け取ればアルトが返すまでに、いくらかの間はあいていた。

「……おう」

わずかネオンが口元を持ち上げる。それは頼りにしている、と言っているのか、任せなさい、と言っているのか、アルトにはかいかく読み取れない。ただ目を細めてネオンへ返す。

急かしてトパルと白衣が腕を引いた。メガソケットを前に背を向けさせると押し込むように座らせる。

ネオンの顔にもう、あの笑みはない。顔色はこころもち青白くさえ見え、ままだに白衣がヒジ掛に乗せた腕を拘束具で固定してゆく。宙を睨んだきり真一文字と唇を結んだ顔を覆い隠すと磁気検出コイルの張り巡らされたプレートもまたかぶせていった。

後戻るなら今しかない。全て台無しにしてこの流れを断ち切れれば、一か八かの賭けを免れることはできる。だがその後が続かない。だからしてアルトはネオンから逸らした視線でクレッツシエへ向きなおる。心待ちにしていた芝居の幕が今まさに開かんとしているその顔をとらえた。

『こだわる理由がどこに?』

言葉を投げつける。

だがクレツシエの表情が変わることはない。メガソーケットの装着状態を確かめるトパルと白衣の動きを食い入るように見つめ、声だけを毅然と通してアルトへ言った。

『連邦の調査では、毎秒七二〇〇〇船が航路から消失。同時に毎秒四九〇〇〇の放置、遭難船が既知宇宙から発見されていることが明らかとなっています。その七十二パーセントが長距離航行船であり、積荷の被害総額は毎秒八十五兆GKを下りません。積み残されていた荷を待つ末端の被害額ともなれば、把握できないというのが現状です』
送れたアルトへ振り返る。あつた笑みへ、そのときわずかと影はさしていた。

『その原因の六十七パーセントは言うまでもなく、航行中に発症するイルサリ症候群です。ついで十四パーセントが船賊による強襲でした。こうしている間にも被害が出ていることは言うまでもありません。知りながらあなたはわたしに手綱を緩めると言うのですか？ その怠慢が我々へ与える多大なダメージを黙認することだと分かっているも見逃せ、と言うのですか？ まさか。守ることが政府の当然の役割。わたしの成すべき勤めです。それこそ一秒間でも早く事態を收拾こそすれ、怠ることは許されません。なおさらそこに、ごだわり、などという個人的嗜好の介入はないのです』

『質問の仕方が、悪かったようで』

言いたかったのは、そういうことらしい。アルトは軽く目を伏せる。聞き流して仕切りなおすべく口調を引き締めた。

『だがそうさせたのはこの造語であり、市場の拡大を目的に、既知宇宙の画一化を推し進めてきた政策のせいだ』

と、即答を避けたクレツシエの目が、ひとときわアルトを強く見据える。胸の内をのぞき込むがごとく大きく瞳孔を開いてみせた。

だとして会話に悟られて困るような偽りなどありはしない。アルトは詮索を真つ向から受けて立つ。

沈黙が過ぎればどこか期待はずれだったのだろう。クレツシエは

何、先回りすることなく問われた通りを答えていた。

『地域格差を互換性の問題と捉えなおすなら、これほどの機能不全はないのです。それとも手を伸ばし、もぐことの出来る果実をみすみ腐らせる、と言うのであれば、その原始的な美的感覚こそ矯正すべきでしょう』

再びネオンの収まるメガソーケットを見やる。

『……野蠻、極まりない』

吐き捨てた。

『そいつこそ個人的な嗜好だぜ』

そこでプレートに頭を覆われたネオンは、大きすぎる白衣ばかりが目に残り、一見するとどこにいろのかかわからない。光景はまるでメガソーケットに白衣だけが掛けられているかのようで、やがてその傍らから装着状態の確認を終えたトパールと白衣は離れていった。

つまり開始まであとわずかだ。

クレッシエも知っているからこそ、作業を見守りつつ声を高くする。

『嗜好？ まさか。我々は国家を、政府を持ち、文化、文明の中に生活しているのです。それは個人の嗜好により定まるものではなく、全体の総意を理想にかかげ据え置かれたものにほかなりません。いえ、理想へと絶えず練り上げられてきたものが、それらなのです。ゆえに我々が推し進める市場の拡大もまた、総意と理想が作り上げたカタチのひとつにすぎません。個々の嗜好が横暴する統制以前の無法地帯などとは違うのです。ただ、このやり方も限界を迎えつつあることは認めなければならぬ現実でしょう。だからこうして今、新たな世界の枠組みは必要とされているのです』

『理想、か。確かにそうかもしれない』

呟いたアルトの口調は早くなっていた。

『だがそいつを追求するのは、俺たちの外だけに押し止めておくべきだと思っね。掲げて世界を一つにまとめ上げようとすることは、

いっこうにかまいやしない。だが飛び越えて俺たちの内側にまで踏み込んでくるつてのは、大きなお世話だ」

ネオンを離れた白衣がメガソーケットのモニターへ加わる。トパルもまたリンク中の白衣へ身を屈めると、プレートに覆われたその耳元へ何事かを囁きかけていた。

かつての矯正ならば、アルトにとって作業へ入るまでの時間には覚えがある。だが今回もまた同じだけの時間が残されているのかどうか、確証はなかった。ゆえに仕掛けるタイミングは勘となる。

クレッツシエエがそんな光景から振り返っていた。

「それはつまり格納庫での話の続きを望んでいる、ということですか？」

流れた瞳はアルトをとらえ、黙れ、と言わんばかり睨みつける。

「セフ、無駄なあがきはおやめなさい。証拠に、あなたはイルサリの自閉を解いた。たとえそれが憂うべき最も原始的な嗜好である同胞と同郷、その野蛮な幻想に当てられたせいだとしても、あなたはそうすることで自らその領域へ今、文明のメスを入れたのです。主張する立場にない」

全機能でもってして解析を進めるつもりらしい。トパルに何事かを吹き込まれた白衣は二人、プレートを跳ね上げメガソーケットから抜け出す。矯正が終われば必要となるだろう仮死の準備に、ポツドへ足を向けていた。

様子を目で追うわけにも行かない。アルトは背で気配だけを感じ取る。クレッツシエの話へただ耳を傾けた。

「あなたが何と主張したところで、これより我々はその原野へ踏み込み、より快適に住まうことのできる土地へ変えるため徹底的な手入れを施します。地域に根差す個体差、その染みつき離れぬ概念をそこに始まる全ての壁を払拭し、既知宇宙全体を同一の故郷として個の中へ埋め込むこの試みを成功させるのです。成し得、障壁を取り除くことができたなら、ホームシックに始まる症候群もまた緩和し、あなた方が懸命だった個も助けることができるでしょう。ただ

同時に』

クレツシエの言葉はそこで切れる。自らもそれを見ることは出来ないだろうと、壮大な計画の結末を見据え遠くへ視線を投げた。

『同時に、我々が作り出した造語以外の言語と文化を消滅させることにはなるでしょうか』

『いや、違うね』

アルトは遮る。

クレツシエが目を丸くしていた。

『残るのは造語とあんたら二十三種のみだ。俺たちは、そんなあんたらに食い物にされるだけだよ』

と、食らったクレツシエの顔が、何の脈絡もなく訝しげに歪むのをアルトは見る。まさにクレツシエは唐突とこう確かめた。

『……セフ。あなたは何を考えています？』

『理解できないさ』

アルトは返し、ほくそ笑む。

珍しくもその笑みに、クレツシエが身構えていた。

『それこそが、これまでのセオリーでした』

だとしても口ぶりだけは変わらない。

追い討ちをかけてアルトはそこへ、たたみかける。

『いや、それこそが、あんたらだけのセオリーってやつだ。俺がそいつを飲み込むことはできない。だがいい加減、お互いにそれでいいってことにしないか？』

クレツシエの眉はそこで跳ね上がった。

『何を……、何か、企んでいますね？』

もちろんその問いにアルトが答えることはない。ただひと息に、思いを吐き連ねてゆく。

『俺たちが、この体に意志ひとつを宿す、与えられた フルサト 故郷を、なんだっていい、生まれたと言える何かを求心力として閉じたたったひとつの個であるなら、どうあがいたところで互いが互いを思うように運べる道理なんてないのさ。いつまでもその手がかりを手繰る

ただであんたが俺になり、俺があんたになるようなマジックは起きない。それんな個が束なって地域となれば、民族や国家と広がれば、なおさらだ』

ネオン自身がパスワードを持たないため解析開始には、イルサリの起動に第三者の介入が必要だった。いうまでもなくかつてそれを引き受けていたのはアルト本人だ。

モニター中だった白衣が整えられた準備に、パスワードを求めてメガソケットへつくようアルトへ顔を上げる。気づきクレツシエが素早くそれを制していた。

『確実性を求めればセフポドに任せるが道理ですが、見送ります。あなたがなさい』

アルトはそんなクレツシエの言葉さえ、待つことはない。

『だつてのに、それをひとつに束ねる？ 骨抜きにされて融解したそのどこに誰が残る？ あんたらが掌握したいのは、ひとつにすることですべてを無に変えるだけの暴挙だ。分かり合えない。それで十分だろ。それはお互い様ってやつだ。だからこそ俺は思うね。俺たちは唯一、分かり合えないってことを分かり合うことができる、つてな。必要なのはアナログ楽器の音色に惹かれる思いでも、トニツクの動話舞踊に魅了される感覚でもなんでもない。個が個として真に共有できるのは、それだけなんだ。解決しない問いの上にこそ、理解や協調は成り立つ。いつだって、そいつが世界を回してきた』

指示に白衣はしばし驚いたような表情を浮かべ、慌ててメガソケットへ腰を下ろす。背中のエアクッションを調節した手で、跳ね上がっていたプレートを頭部へ引き寄せた。

『あなたはイルサリの自閉を本当に解いたのですか？』

クレツシエの問いかけは、あくまでもアルトの話を見無視している。目はいつしか瞬きをやめると、アルトを射抜くように見つめていた。そうして口にした言葉はさすが鋭い洞察力を持つ『エブランチル』だ。あながち当て外れと言うわけでもなければ、確かにアルトが虎の子と残した仕掛けを少なからず言い当ててみせていた。

ネオンの隣に横たわった白衣は、かまうことなく矯正開始のアクセスを開始している。ソケットはあの羽虫の飛ぶような音を発し、続いてネオンのソケットからも唸るような低音はもれだしていた。

『イルサリは実に、実に俺に忠実だった』

十分に暖まった今なら、文句ないタイミングだろう。アルトとはぼけたように肩をすくめてみせる。

『今でもそうさ』

目にしたクレッシェの表情は、とたん反転していた。

『イルサリに何か、仕込みましたね』

裂けた目じりが吊り上がってゆく。

『そいつはめでたい勘違いなんだよ。俺はもう、F7のセフポドじゃない』

アルトは言い放ち、耳にしたトパルが仮死ポッドから振り返った。決定的な何かを目の当たりとして啞然とし、前でアルトは言い放つ。

『その通りさ。イルサリは俺との約束を、必ず守るね……』

瞬間、クレッシェはの体は白衣たちへひるがえされていた。

『あるならそれ出して。早く!』

デミの声が飛ぶ。

モディーは霊柩船のコクピットへ駆け戻っていた。操縦席へ移動したデミと入れ替わりだ。いつもの助手席へおさまるや否や、伸ばした手で座面の裏側から自身の専用の端末を抜き出した。

『今のままじゃ、無理に決まってるよ。だからIDコピーして作りなおす。手伝って!』

『ま、間に合うでやんすか?』

問い返すが、無言でデミに睨みつけられただけだ。

『も、もちろん。モディーは間に合わせるで、やんす』
言うしかない。

『これ、そっちにつないで!』

聞き流してカードパソコン内に巻き上げられていたジャックを引っ張り出し、デミが投げつけた。

『ど、どこにつなげるでやんすか、ね』

剣幕に、慣れているはずの電源を入れるだけでもおぼつかない。

モディーはなおのこと端末を眺め回す。

『左!』

放つデミの手は先ほどからキーボードを弾き続けたままだ。一度たりとも止まっていない。

『あ、あつたでやんす』

とにかくジャックを押し込んだ。

『メモリーの残りは?』

『結構ある……』

『それじゃ、わかんないよ!』

『分かったでやんす。今すぐ、今すぐ調べるでやんすから!』

ヒステリックな声に両手を突き出し、モディイはデミを押しとどめた。

『それ、遅い!』

『待ってくださいよお』

『いい? IDのプログラム転送は十七秒コンド後、開始ね。そのためにも八千TB以上、落とし込む先、今すぐ確保して! 完了したらすぐ、ぼくに知らせて!』

『十七つて、ま、無理でやんすよお、デミさん』

もうモディイは半泣きである。

『待てない! 時間がないの! それとも捕まって終わりにするの?』

金切り声に融通はききそうもなかった。隣でモディイの目が脳内以上、互い違いと高速回転を始める。ゆえに言葉はこうも、もれ出していた。

『し、社長より、怖いでやんす……』

立ちふさがっていたロツカーが遠ざかってゆく。蹴り倒したサスとトラの視界に光は差し込んだ。

室内に誰もいないことは、どうにか開けたドアの隙間から確認済みだ。トラがシワを揺らしロツカーの上へ駆け上がる。危うい足元で這い上がってくるサスもまた引き上げた。ふたりしてロツカーから飛び降りる。

『アルトは矯正の準備がどうのとか言っておったが、どこへ行きおった?』

見回すサスが鼻溜を振った。

『知らん。数え切れないほどのネオンがいる、とか言っておった場所か』

返してトラも着込んでいた黒いツナギの前を勢いよく開く。そこから溶けかかったクリームのようにシワはぶら下がり、袖から腕を

抜いて腰へきつく巻きつけた。

『あやつは強引過ぎて自分のことを分かっておらん。それを一人でどうにかしようと思んでおるのなら、それこそ無理というもんじゃ』

『そんな危うい奴に、ネオンを預けてはおれんわ』

腰から警棒もまた引き抜く。感触を確かめ宙へ放り投げたなら、数回転したそれはパシリ、音を立てて手の中におさまった。

『ならば行くか？』

見上げるサスの目が鋭く光る。

顔へトラは小さくうなずき返した。すぐにも剥き出しとなったシワの間から、通信機をまさぐりだす。

『わしはデミ坊の悲しむ顔も見たくない。サスはわしの後にまわれ。デミ坊、聞こえるか？』

『おいちゃん！ そっちは大丈夫なの？ 軍に追われてるんじゃないの？ おいちゃんはどこ？』

『ぐ、軍だと？ こちらは白衣がウロついておるだけだぞ』
『デミ、わしはここにおるぞ』

つま先立ってサスが声を割り込ませる。

『おじいちゃん！ よかった。えっと、スラーおじさんが霊安所の詰め所へ軍が駆け込んできてる、っていつてたの！』

聞かされ、トラとサスは顔を見合わせた。

『あの、バナールのせいかな？』

サスが鼻溜を振り、確かなことなどわかるはずもないならトラは通信機へ向きなおる。

『ともかく、今からネオンとジャンク屋を連れて戻る。いつでも船を出せるよう、管制の準備を頼んだぞ』

『やった。おねえちゃん、見つかったんだね！』

『そつだ、変らずエビの尻尾だった』

意味が伝わったのかどうなのか、少なからず通信の向こうで安堵するような間は生じる。

『じゃ、今、ぼくED……』

が、言葉はそこでふい、と途切れる。

『違う！ 先に変換してから、そっちのファイルへ！ それじゃない！ その後のヤツ！。……って、入艦記録の再チェックが始まっちゃって今、ぼくIDづくり変えてる最中なの。何とか間に合わせて出航の準備するね！』

そんなデミの向こうからは、そんなにどやさなくてもいいじゃないでやんすか、 とけんか腰のモディーの声も、かすかに漏れ聞こえる。どうやらデミたちはデミたちで、修羅場を迎えているようだ。任せてトラは通信のチャンネルをスラーたちへ切り替えた。

『おい葬儀屋！ 聞こえるか？』

というものの、傍らを駆け抜けて行った軍の目的は別のところにあつたらしい。何事も起きず、めまぐるしく変化を続けていたライオンの義顔もアルトのそれで止まったままとなる。

腰を抜かしてスラーも呻いた。

『な、何が起きてやがんだ』

『てつきりバレたのかと……』

『おい、なら中がヤバインじゃねーのか？』

通信は、まさにそのとき飛び込んでくる。

『おい葬儀屋！ 聞こえるか？』

トラだ。スラーは弾かれ耳の通信機を押さえこんでいた。

『何してやがる、テラタン！』

『待たせた。先に霊枢船へも連絡を入れた。今からネオンとジャンク屋を回収してここを出る。そっちもそろそろ撤退の準備にかかれ。だが今しがた目にした光景が、スラーに了解、とは言わせない。』

『軍が今、詰め所を抜けて奥へ駆けていつちまったぞ。そっちこそ大丈夫なのか？』

『デミから聞いた。わしらはまだバレておらん。ただ、わしらの侵入を手助けしてくれた内部の者があるのだ。そいつが軍をひきつけ、』

外へ駆け出して行った。そのせいかも知れん』

『なら、かまわねーが』

落ち着いたトラの様子に、少なからずスラーは胸をなでおろす。投げる視線でライオンへ、双方の無事を知らせた。

『分かった。格納庫の手前まで来たら連絡をくれ。それまで俺はここで入艦記録の抹消に粘る』

『余計なことをして、逆にハッカー手配されるな』

『俺はそこまで馬鹿でも、デキルクチでもねー！』

などと通信を切るタイミングが合えば、もう互いはコンビだ。

『テラタンたちが二人を連れてこっちに近づけば通信が入る、って寸法だ。俺はそれまでこの間の記録の抹消に没頭してー。悪いが、こいつを頼むぜ』

ライオンへ耳からはずした通信機を投げる。

『了解した』

受け取ったそれがアルトの耳にかけられることはない。こめかみから奥へめり込むと、ライオンの耳へ消えていった。

階級章をかざせば鉄扉はスライドした。

シャツフルはただ、潜り込んだ『デフ6』と『テラタン』が無事、アルトとセフポドを連れ出すことだけを考える。そのためにも分隊長たちを引きつけなければ、と奥歯を噛んだ。その果てにどう身を振るかなど、今のシャツフルには取るに足りない。

目的は、この思いを通すことにある。

引き換えに得るモノこそが、目的でもあった。

得てもなお後悔することがあるとすれば、イルサリの称号を我が物にしたい、と一瞬でも過ったあの欲というやつだろう。

あれさえ顔を出さなければまったく違う今があったはずだ、と思り返す。タイムスケジュール通り運んだ計画に、今頃、成果の一端を垣間見ると、誰に知られることなく巨大な力を手にしていたはず

と振り返った。

だがそれは何か、どこかがしっくりこない。

だからこそあの欲は、鬱積したその何かを足がかりに頭を持ち上げた。

シャツフルの背で追い立てる分隊員たちの足取りが、またけたたましさを増している。聞きながらドア際へ張り付くように身を寄せ、シャツフルは上がる息を肩で押さえつけた。足音との距離を測って視線を投げ、ひねった首でもう一方、ドアの向こうをのぞき見る。見えるものは何も無い。

ただ霊安所へ続く小綺麗な通路が一本、涼しげに伸びるばかりだ。その胡散臭さに確信するのは、追い詰めるならここだ、と言わんばかり仕掛けられた罠だろう。

知って飛び出すのか。

リスクを負えるのは、それが自らの望んだ物事の一部であるからにはかならない。

得るために、越えるボーダーの外にあるものは。

『意志……か』

シャツフルは吐き出していた。

そして乾いた唇の端を持ち上げる。その脳裏にカウンスラーで対峙したセフポドの瞳は蘇っていた。

『使いこなすつもりがわたしは、どうやらそれに使われていたらしいな。いや、そもそも使いこなせる奴など、そうはいないのだろう。それすら持たぬ者であったからこそ、貴様はそこに固執した』

背後の靴音はもうすぐそこに迫っている。シャツフルは誰もいない通路を再度、睨みつけた。大きく息を吸い込み、腹へ残る力を溜めこむ。

『貴様の守りたいものがなんだったのか、わたしにもようやく分かってきたような気がするよ。わたしもわたしで、あり続けよう』
吐き出し、その身を通路へ躍らせた。

不自然な穴が、広がる保冷ガスの海に点々と空いてゆく。
一つ、二つ、いや、五つ、六つ。

間違いなくそれはミラー効果を作動させた分隊員たちの、足だった。テンは円卓の足の隙間から目を凝らし、動きを追い続ける。浅い息を繰り返すメジャーへと指を折った。

(しばらく、ここでガマンできるか?)

メジャーは横たわったままで、うなずき返してみせる。

(すぐ、戻る)

振って、保冷ガスを吐き出す扉へ動話をつづった。

(俺は右から行く)

(了解)

返された素振りを見届け、その場を離れる。思い出し、預かっていたスパークショットをメジャーの手に握らせた。

(ええか、使うまで、氣い、失うなよ)

小さく笑い返すメジャーは弱々しい。

様変わりした部屋の様子に警戒する分隊員たちは、一塊のままだ。

保冷ガスへ足穴を空けると円卓沿いに、奥へ静かに進んでゆく。

『中止です！ アルトの解析を即刻、中止なさい！』

連呼するクレツシエの足取りは襲い掛からんばかりだ。声に至っては怒号そのものとリンクルーム内に響いていた。剣幕におされて白衣たちは振り返ったきりとなり、第三者を経由して始まったばかりの脳内構造解析はそんな白衣の向こう、モニター端末に進行状態を示して模擬脳ホログラムを浮き上がらせている。絡むシナプスの三次元マップを、目にも止まらぬ速さと緻密さで構築していた。

『何をしています！』

じれったい、とクレツシエの金切り声がまた上がる。伸ばす手でそんな白衣の肩を押しのけた。モニター端末の前で仁王立ちとなり、模擬脳ホ口の解析状況を睨みつける。

様子に、白衣が我を取り戻していた。リンク中の白衣の元へ駆け出してゆく。

『あなたもです！ ぼやぼやせず、イルサリとセフポドの交わした約束の検索を行いなさい！ あれはこの期に及んでまだ、このプロジェクトを潰す気にいる。それを取り除かぬ限り、矯正など危うくてできるものではない！』

見送るまでもなくクレツシエは、また別の白衣へ声を荒立てた。

浴びせかけられて事態の危機を感じたからではなく、クレツシエを恐れて白衣は空いているメガソーケットへ向かう。

『それから！』

立て続けトバルへもクレツシエは振り返ってみせた。

『隊をここへ！ それは即刻、廃棄なさい！ 到着までは、あなたが拘束を！』

無論、『それ』とはアルトのことだ。

やおらトバルとアルトの視線は宙で絡んだ。

受けて立つ意があることを示し、アルトはわずか、半身を取る。先に駆け出した白衣がリンク中の白衣へ屈み込むと、クレツシエの指示を伝えていた。もう一人はメガソーケットへ潜り込み、リンク体勢に入っている。

様子を横目でうかがったパルが、仮死ポッドの傍らに立つ白衣へ手を振り上げた。見て取った白衣は準備しつつあった予備麻酔の輸液を、ポッドへ戻す。保安所へ連絡を入れるべくリンクルーム壁際の有線へと身を切り返した。トパルもまたその後を追いかけたなら、防磁気扉前に立ち塞がる。通す気はないと、アルトと対峙してみた。

などと荒事ならどう考えてもジャンク屋として幾らもかいくぐってきたアルトの方が上手だ。だがトパルの記憶はといえば、共にここを脱出すべく奔走していたところで途切れている。頭では別人だと理解していても、再び脱出するためその頬を殴り飛ばすことには理屈だけでは拭えぬ抵抗があった。

ネオンが横たわるメガソーケットに加え、稼動を始めたもう一機が戸惑うアルトの背で重低音を響かせ始める。

解析が止まる気配はまだない。

アルトは両の拳を握りしめた。

『守備範囲外には手を出さないほうが、あんたのためだけ。トパル』
感触を確かめ、トパルへ忠告してやる。だがトパルはためらわな
い。

『だからこそ、この指示がわたしを与えられた役割から逸脱させる機会になるのだ、とすれば……』

言葉は聞かされ、豆鉄砲でも食らったかのように見つめ返せば、飛び出すタイミングをはかるトパルはそこで身を沈めた。

『あなたにできて、わたしにできないことがそれだというのなら、中尉の行方を辿るため試す価値こそある！』

アルトへ向かい床を蹴り出す。

ドア影より飛び出せば風景は揺れて動いた。
シャツフルの目の前だ。

そこかと硬直する体に、あれほど上がっていた息も止まり。
避けてシャツフルは闇雲に身をよじった。

だが、ぶち当たる何か。『中止です！ アルトの解析を即刻、中止なさい！』

連呼するクレツシエの足取りは襲い掛からんばかりだ。声に至っては怒号そのものとりんクルームに響く。

剣幕におされて白衣たちは振り返ったきりとなり、そんな白衣の向こう、第三者を経由して始まったばかりの脳内構造解析に、モニター端末へは模擬脳ホログラムが浮き上がっていった。絡むシナプスの三次元マップを目にも止まらぬ速さと緻密さで、構築し始める。
『何をしているのです！』

じれったい、とクレツシエの金切り声がまた上がる。伸ばす手で白衣をメガソーケットへ払いのけ、モニター端末の前で仁王立ちとなった。模擬脳ホ口の解析状況を睨みつける。

『あなたもです！ ぼやぼやせず、イルサリとセフポドの交わした約束の検索を行いなさい！ あれはこの期に及んでまだ、このプロジェクトを潰す気にいる。それを取り除かぬ限り、矯正など危うくできるものではない！』

また別の白衣へも声を荒立てた。

浴びせかけられて事態の危機を感じたからではなく、クレツシエを恐れた白衣が、先の一人を追いかけ空いているメガソーケットへと向かう。

『それから！』

立て続けにトパールへも、クレツシエは振り返ってみせた。

『隊をここへ！ それは即刻、廃棄なさい！ 到着まではあなたが拘束を！』

無論、『それ』とはアルトのことだ。

やおらトパルとアルトの視線は宙で絡んだ。

受けて立つ意があることを示し、アルトはわずか、半身を取る。傍らで先に駆け出した白衣がリンク中の白衣へ屈み込んでクレッシェの指示を伝え、後から一人がリンク体勢に入る。

様子を横目でうかがったトパルが、仮死ポッドの傍らに立つ白衣へ手を振り上げた。見て取った白衣は準備しつつあった予備麻酔の輸液をポッドへ戻す。保安所へ連絡を入れるべく、リンクルーム壁際の有線へ身を切り返した。

トパルもまたその後を追い、防磁気扉前に立ち塞がる。通す気はないと、アルトと対峙した。

などと荒事ならどう考えてもジャンク屋として幾らもかいくぐってきたアルトの方が上手だ。だがトパルの記憶はといえば、共にここを脱出すべく奔走していたところで途切れている。頭では別人だと理解していても、再び脱出するためその頬を殴り飛ばすことには理屈で拭えぬ抵抗があった。

新たに稼働を始めたメガソーケットが、戸惑うアルトの片側で重低音を響かせ始める。

解析が止まる気配はまだない。

アルトは両の拳を握りしめた。

『守備範囲外には手を出さないほうが、あんたのためだけ。トパル』
感触を確かめ忠告してやる。だがトパルはためらわない。

『だからこそ、この指示がわたしを与えられた役割から逸脱させる機会になるのだ、とすれば……』

聞かされ、豆鉄砲でも食らったかのように見つめ返せば、飛び出すタイミングをはかりトパルは身を沈めていった。

『あなたにできて、わたしにできないことがそれだというのなら、中尉の行方を辿るため試す価値こそある！』

アルトへ向かい床を蹴り出す。

ドア影より飛び出せば、風景は揺れ動いた。
シャツフルの目の前だ。

そこかと硬直する体に、あれほど上がっていた息も止まり、避けてシャツフルは闇雲に身をよじった。

だが、ぶち当たる何か。

肩が弾かれ、バランスを欠く。

欠いたままで勢いまかせに突破を試みた。態勢は前屈みとなり、背へ衝撃はそのとき走る。痛みよりも先に止まったのは時だ。受けた衝撃はヒザへ抜け、まるで他者のモノであるかのようにカクリ、折れる。

声を出すヒマもない。

床へとシャツフルは崩れ落ちていった。

視界の中、揺らめいていた風景が像を結んでゆく。

分隊長たちだ。

四つん這いとなったそこから、シャツフルは見上げる。ダイラタンシーショットガンの銃口は、そうして睨みつけた眉間へとあてがわれた。取られた腕もまた容赦なく捻り上げられる。

これまでとは思いたくない。これからだと思っからこそシャツフルは唸り声を上げた。狂ったようにその身を揺さぶり、振り払おうと試みる。なら背へ分隊長のヒザはあてがわれ、胸を床へつけていた。

跳ねのけることなど、できはしない。

押し付けられて頬は潰れ、奮闘したせいで乱れる息のままシャツフルはしばし呻く。

『確保』

告げる分隊員の声を、頭上に聞いた。

間を置かずして新たな足音もまた近づいてくる。

取り囲まれてシャツフルは、よくやった、とねぎらう分隊長の声を耳にした。

なら屈みこんだらしい。それまで頭上にあつた分隊長の声は間近

に降りてくる。

『中尉、質問に答えていただきたい』

声のする方へ、動かぬ頭を強引にねじっていった。見下ろしのぞきこむ分隊長の、他者のように冷え切った顔を見上げる。

『分隊長から奪ったミラー効果一式はどこへやられた？』

『ミラー効果？ 何のことだ』

時間稼ぎが可能性の模索につながるなら、常套句は欠かせないだろう。

『それはない。はぎ取られた分隊長から状況は聞いている』

『知らんな』

言えば背に乗る分隊長が跳ね、シャツフルへさらなる圧をかけた。胸を潰されシャツフルは呻き、聞きながら体の向きを変えた分隊長が、さらに深くシャツフルの顔をのぞきこむ。

『わかつておられるだろうが、我々に制裁を下せるような権限はない。中尉殿を確保するまでが任務だ。だからと言って、たかをくくってもらっては困る。一体ラボ内へ誰を侵入させた？』

物言いは丁寧だが、だからこそ抱える苛立ちは露だった。シャツフルは床に潰れたその顔を、さらにゆがめてそんな分隊長へと笑い返す。

『さあな。ただ通りですれ違っただけの相手に過ぎんのだよ。わたしもよくは知らん』

それきり屈めていた身を起こした隊長の舌打ちが、飛ぶように遠ざかっていった。

リンクルームへの派遣要請は、そのとき分隊長の頭蓋内へ飛び込んでくる。

足跡が進みゆく。

そのたびに白い冷却ガスは静かにかき混ぜられ、床の上で渦を描いた。

よく眼を凝らせば踏み込む瞬間、つま先の方向は見て取れる。おかげでおおよその進行方向と体勢は見極めることができた。隊はおそらく背中を合わせて周囲へ銃口を向け、移動している。テンは見極める。

左へ回ったもう一体の姿は円卓にほどなく隠れ、テンの場所からでは見てとれない。だが、よほどのことがない限りフライングはないと確信できた。それが長らく共にやってきた者同士の呼吸、というやつで、きつかけは己自身にあることを強く意識する。

ままに、メジャーの横たわる位置から三分の一ほど、円卓を右へ回り込んでいった。

足を止め、ホログラムの木が生える円卓の内側をのぞく。

投影するためのレンズがはめ込まれたそこには、円卓とレンズの間にキヤットウオークほどの隙間が残されている。

薄闇に紛れ、テンは円卓を乗り越え隙間へと身をひそめた。つかえそうなスパークショットを背へ回し、腹をするように円卓脚の隙間から分隊員たちの足跡を観察する。なら円卓間際まで歩み寄った足跡は、溢れる冷却ガスの原因を確かめるべく、奥の観音開扉へと向かって進んだ。

追いかけてテンも円卓の内側を、彼らを追ってなぞる。

と、それまで一定のペースを刻んでいた歩みはそこで止まっていた。た。

距離からして間違いない。

横たわるメジャーを捉えたのだ。

すぐにも近寄らない間合いは、明らかに罠であることを警戒している。

今だ。

誰かが確かとテンへ囁く声はした。

従い背のスパークショットを、テンは四本の腕、全てで手繰り寄せる。立ち上がれば突きつけた電極に冷却ガスは攪拌され、跳ね上がると視界を遮った。だがどちらにせよ相手は見えるものでない。

イチかバチかで引き金を絞る。

走る閃光が背後の巨木に反射した。

目と鼻の先、絡んで火花は飛び散り、四体、ミラー効果の解けた分隊員らが姿を現す。

絶縁素材だ。

どつつと床へ身を投げ出す。だが焼け焦げたあとこそない。

合図に、冷却ガスの噴出する観音扉の向こうから、もう一体もまた腰ために構えたスパークショットを放った。閃光は床を叩き、小石を投げ入れたように分隊員の真横で冷却ガスを四散させる。

応戦して分隊員が仰向けのまま、ショットガンの引き金を引き返した。

めがけ、テンは円卓へと駆け上がる。

スパークショットの銃身を盾に、分隊員たちへ飛んだ。

気づき身を起こした分隊員がテンを見上げ、ショットガンを脇へ挟み込む。

絞られる引き金。

だが流動弾は出ない。

食らった閃光によるジャムだ。

しかしもう一体の構えたショットガンから弾は吐き出された。宙を舞うテンの手元、盾に構えたスパークショットのコイル、その排熱口へ張り付く。衝撃は伝わり、もろとも押し付けテンは分隊員らの上へ覆いかぶさった。

分隊員たちはさらに厚みを増した冷却ガスの中へ背から倒れ込み、馬乗りとなったテンは上二本の腕で分隊員の喉元へ銃身押しこむ。下二本の腕で一体のショットガンをもぎ取り遠くへ投げ捨て、残るもう一体の手もまた払うとジャムったショットガンを冷却ガスの中へ飛ばした。

体勢を逆転されたならテンが今度は冷却ガスの中へ沈み、押し込んでいた分隊員の一人がテンから離れて、冷却ガスの中からショットガンを拾い上げる。

傍らでは観音扉を衝立としたもう一体と、残るもう一体の分隊員が派手にやりあっていた。ショットガンを拾い上げた分隊員は、すぐさまひるがえした身でその援護へと回る。

バッテリーの残量が気がかりでならない。

テンは喉へ食い込むパークショットを渾身の力で押し返す。

押し返しながら、下二本の腕で分隊員の首を掴んだ。容赦手加減なく締め上げれば間近と睨み合った互いの意地が剥がしようなくそこで絡む。押し勝つべく、締め上げていたその手を離し、掴んで引き付けた分隊員の横面へテンはヒジ打ちを放った。相手が仰け反れば背中を丸め、真上の体を跳ねのける。冷却ガスをまといつかせ立ち上がった。

眼に、バッテリーの残量五〇、を知らせるもう一体の振りは飛び込んでくる。

分かったと、振り返しかけていた。

瞬間、跳ねのけたハズの分隊員に、羽交い絞めにされる。

とはいえ四本もあるテンたち極Yの腕だ。一時にうまく全てを制することなど、そう簡単にできはしない。拘束の甘い腕は二本、縄抜けさながら分隊員の腕か抜けだしていた。その腕で背後にある頭を掴む。首投げさながらかぶるヘルメットを押さえこめば、続くもみ合いに足元の冷却ガスは舞い上がり、千鳥足を踏んで互いは後じさると円卓に激突する。

拍子に分隊員のヘルメットがすっぽり脱げた。

テンは手ごたえのなくなったそれを放り出す。

背中越した。指で露出した分隊員の両眼を突いた。

悲鳴にも似た声上がる。

拘束はすぐにも解かれ、振り返りざま千切れ飛ぶ冷却ガスの中からのぞき見えたパークショットを、テンは拾い上げる。目と鼻の先だ。はずしようのない距離に立つ分隊員へ引き金を絞った。

脱がされたヘルメットに露出した肌の、焼け焦げる二オイが充満する。突かれた目を両手で覆ったままだ。分隊員は円卓へもたれか

かるように倒れていった。

スパークショットもまたテンの手元で火を吹き上げる。

流動弾によつて塞がれた排熱口だ。中心に焼けただけ、もう使い物にならない。

(クソツ)

投げ捨て、振り返る。

まるでそれを察知していたかのように、援護へ回っていた分隊員もまたテンへと振り返った。

まずい、と駆け出すテンの足元で流動弾は跳ねる。

逃れてテンは円卓の内側へ頭から飛び込んだ。

焼けた分隊員の体が、追つて放たれた流動弾を受け、小刻みに跳ねる。

盾にして、円卓へ背を張りつけた。

衝撃が収まったところで、顔を覗かせ様子をうかがう。

すでにバツテリー残量を五〇、と示した一体の放つ閃光は射程も短く、途切れがちだ。どうすべきか。テンは床へと身を沈めた。立ち去りかけて、見覚えのある形に動きを止める。それはちょうど分隊員の腰ベルトに差し込まれていた。間違いない。あの『ヒト』が『アズウエル』で振り回していたスタンエアだ。リミッターを解除した分、膨れ上がったシリンダーバルーンが特徴的で、すぐにもテンの脳裏にピンとくる。

思わず手を伸ばしていた。

掴み、引き寄せれば、ススの付着はあれど、単純極まるチャチな護身銃に動作不良は認められない。それでもジヤムを警戒して込められていたエアを抜く。改めて銃床を叩けば、スタンエアはすぐさまか細い音を立てエア弾を装填していった。

(ちよいと間、借りるで)

スパークショットに比べれば十分の一以下、小ぶりで握っていることを忘れるほどに軽い銃だ。握り締め、テンは息を整える。

にもかかわらず、飯は美味かった。楊枝代わりにくわえたスプーンを揺らし、クロマは艦橋で宙を仰ぐ。

テンにはいつ何時も必要とされ、役に立ってきたという自負があった。だからこそ『カウンスラー』から帰らされたシヨックはこうしてしばし、クロマを呆けさせている。おかげで待てど暮らせどこのまま何の音沙汰もなく、一生こうして過ごすのではないか。感じさえしている。なおさらクロマの思考は活気を失うと、スプーンもふわふわ、宙で揺れ続けた。

その隣では、同様にヒマを持って余したコーダが集中力を途切れさせたくない、と言う理由から、四本の腕を器用に絡ませ（フライオン）と言う極Ｙ地方独特の織物を編み上げている。世がおののく船賊が、その艦橋で乙女チツクに織物とは一見気色悪いが、致し方ないこれも現実だ。

（俺、太ったかな？）

天を見上げ、クロマは腕を振った。

一心不乱にフライオンを織り進めてゆくコーダは目もくれない。

合間を縫って指を折り返す。

（そら、なんもせんと食ってばかりおったら、太るっちゅうもんや）

（明日、電離風、荒れんのかいな）

（そんなもん、しるか。総合サイト、サイトで検索せえ）

まったくもって愛想がない。

（そういえば、五層のゴミ箱、溢れとつたな、あいつら……）

（テンがおらへんかったら、アホどもはサボりよる）

不意に、クロマの口からくわえていたスプーンがプイと、吐き出された。カクンと首を折って持ち上げ、クロマはそんなゴミを始末すべく正面を見据える。埋もれていた簡易フレキシブルシートからよっこらせ、で立ち上がった。

と、その隅で光は点滅する。

なんだ、と思えばプラットボードだった。

沈黙していたはずのプラットボードはテンたちからのシグナルを受信すると、SOSの信号をそこに点滅させていた。

肩が弾かれ、バランスを欠く。

描いたままで勢いまかせに突破を試みた。自然、態勢は前屈みとなり、背へ衝撃はそのとき走る。痛みよりも先に止まったのは時だ。受けた衝撃はヒザへ抜け、まるで他者のモノであるかのようにカクリと折れる。

声を出すヒマもない。

床へとシャツフルは崩れ落ちていった。

視界の中、揺らめいていた風景が像を結んでゆく。

分隊員たちだ。

四つん這いとなったそこから、シャツフルは見上げる。睨みつけた眉間へと、ダイラタンシーショットガンの銃口はあてがわれていた。取られた腕もまた容赦なく捻り上げられる。

これまでとは思いたくない。これからだと思っからこそシャツフルは唸り声を上げた。狂ったようにその身を揺さぶり、振り払おうと試みる。なら背へ分隊員のヒザはあてがわれ、シャツフルを床へ腹ばいとさせた。

跳ねのけることなど、できはしない。

押し付けられた床で頬は潰れ、奮闘したせいで乱れる息のままシャツフルはしばし呻く。

『確保』

告げる分隊員の声を、頭上に聞いた。間を置かずして背後から新たな足音は近づいてくる。取り囲まれてシャツフルは、よくやったとねぎらう分隊長の声を耳にした。

なら屈みこんだらしい。それまで頭上にあつた分隊長の声は降りてくる。

『中尉、質問に答えていただきたい』

声のする方へと、動かぬ頭を強引にねじっていた。見下ろしのぞ

きこむ分隊長の、他者のように冷え切った顔はそこにある。

『分隊長から奪ったミラー効果一式はどこへやられた？』

『ミラー効果？ 何のことだ』

時間稼ぎが可能性の模索にもつながるなら、常套句は欠かせないだろう。

『それはない。はぎ取られた分隊長から状況は聞いている』

『知らんな』

言えば背に乗る分隊長が跳ね、シャツフルへさらなる圧をかけた胸を潰されシャツフルは呻き、聞きながら体の向きを変えた分隊長が、さらに深くシャツフルの顔をのぞきこむ。

『わかつておられるだろうが、我々に制裁を下せるような権限はない。中尉殿を確保するまでが任務だ。だからと言って、たかをくくってもらっては困る。一体ラボ内へ誰を侵入させた？』

物言いは丁寧だが、だからこそ抱える苛立ちが露だ。シャツフルは床に潰れたその顔を、さらにゆがめてそんな分隊長へ笑い返していた。

『さあな。ただ通りですれ違っただけの相手に過ぎんだよ。わたしもよくは知らん』

それきり屈めていた身を起こした隊長の舌打ちが、飛ぶように遠ざかってゆく。

リンクルームへの派遣要請は、そのとき分隊長の頭蓋内へ飛び込んできていた。

足跡が進みゆく。

そのたびに白い冷却ガスは静かにかき混ぜられ、床の上で渦を描いた。

よく眼を凝らせば踏み込む瞬間、つま先の方向は見て取れる。おかげでおおよその進行方向と体勢は見極めることができ、隊はおそらく背中を合わせて周囲へ銃口を向け、移動しているのだ、とテン

はよんだ。

左へ回ったもう一体の姿は円卓にほどなく隠れ、テンの場所からでは見てとれない。だが、よほどのことがない限りフライングはないと確信できる。それが長らく共にやってきた者同士の呼吸、というやつで、きつかけは己自身にあることをもまた強く意識した。

まさに、メジャーの横たわる位置から三分の一ほど、円卓を右へ回り込んでゆく。

足を止め、ホログラムの木が生える円卓の内側をのぞき込んだ。

投影するためのレンズがはめ込まれたそこには、円卓とレンズの間にキャットウォークほどの隙間が残されている。薄闇に紛れ、テンは円卓を乗り越え隙間へと、身をひそめた。つつかえそうなスパークショットを背へ回す。腹をするように円卓脚の隙間から分隊員たちの足跡を観察した。

なら円卓間際まで歩み寄った足跡は、溢れる冷却ガスの原因を確かめるべく、奥の観音開扉へ向かってゆく。

追いかけてテンも円卓の内側を、彼らを追ってなぞり進んだ。

と、それまで一定のペースを刻んでいた歩みはそこで止まる。

距離からして間違いない。

横たわるメジャーを捉えたのだ。

すぐにも近寄らない間合いは、明らかに罠であることを警戒していた。

今だ。

確かと誰かがテンへ囁く。

従い背のスパークショットを、テンは四本の腕、全てで手繰り寄せた。立ち上がれば突きつけた電極に冷却ガスは攪拌されて跳ね上がり視界を遮る。だがどちらにせよ相手は見えるものでない。狙い定めて引き金を絞った。

走る閃光が背後の巨木に反射する。

目と鼻の先、絡んで火花は飛び散ると、四体、ミラー効果の解けた分隊員らは姿を現した。絶縁素材だ。どつつと床へ身を投げ出し

こそすれ、焼け焦げた様子こそない。

合図に、冷却ガスの噴出する観音扉の向こうからも、もう一体が腰だめに構えたスパークショットを放つ。閃光は床を叩き、小石を投げ入れたように分隊員の真横で、冷却ガスを四散させた。

応戦して分隊員が仰向けのまま、ショットガンの引き金を引き返す。

めがけ、テンは円卓へ駆け上がった。

スパークショットの銃身を盾に、分隊員たちへと飛びかかる。気づき身を起こした分隊員がテンを見上げ、ショットガンを脇に挟んだ。

引き金を絞る。

だが流動弾は出ない。

食らった閃光によるジャムだ。

しかしもう一体の構えたショットガンから弾は吐き出される。

宙を舞うテンの手元、盾に構えたスパークショットのコイル、その排熱口へ張り付いた。

衝撃は伝わり、もろとも押し付けテンは分隊員らの上へ覆いかぶさる。

のけ反った分隊員たちはさらに厚みを増した冷却ガスの中へ背から倒れ込み、馬乗りとなったテンは上二本の腕で分隊員の喉元へと銃身を押しこんだ。下二本の腕で一体のショットガンをもぎ取り背後、遠くへ投げ捨て、残るもう一体の手もまた払い、ジャムったショットガンを冷却ガスの中へ飛ばす。

体勢を逆転されたならテンが今度は冷却ガスの中へ沈み、押し込んでいた分隊員の一人がテンから離れていった。冷却ガスの中を滑っていったショットガンへと飛びつき、拾い上げる。

傍らでは観音扉を衝立としたもう一体と、残るもう一体の分隊員が派手にやりあっていた。ショットガンを拾い上げた分隊員は、すぐさまひるがえした身でその援護へと回る。

バッテリーの残量が気になりでならない。

テンは喉へ食い込むスパークショットを渾身の力で押し返す。

押し返ししながら、下二本の腕を分隊員の首へとかけた。容赦手加減なく締め上げれば間近と睨み合った互いの意地が、剥がしようなくそこで絡み合う。押し勝つべく、締め上げていたその手を離し、掴んで引き付けた分隊員の横面へヒジ打ちを放った。相手が仰け反れば背中を丸め、真上の体を跳ねのける。冷却ガスをまといつかせて立ち上がった。

眼に、バッテリーの残量五〇、を知らせるもう一体の振りは飛び込んでくる。

分かったと、振り返しかけていた。

瞬間、跳ねのけたハズの分隊員に、羽交い絞めにされる。

とはいえ四本もあるテンたち極Yの腕だ。一時にうまく全てを制することなど、そう簡単にできはしない。拘束の甘い腕は二本、縄抜けさながら分隊員の腕からすり抜けていた。その腕で背後にある頭を掴む。首投げさながらかぶるヘルメットを押さえこめば、続くもみ合いに足元の冷却ガスは舞い上がった。中を、千鳥足を踏んで後じさり、互いはそのまま円卓に激突する。拍子に脱分隊員のヘルメットはすっぽり脱げ、テンは手ごたえのなくなったそれを放り出すと背中越し、露出した両眼を指で突いた。

悲鳴にも似た声上がる。

拘束はすぐにも解かれ、振り返りざま千切れ飛ぶ冷却ガスの中からのぞき見えたスパークショットを、拾い上げた。目と鼻の先だ。はずしようなない距離に立つ分隊員へと引き金を絞る。

脱がされたヘルメットに露出した肌の、焼け焦げる二オイがしていた。突かれた目を両手で覆ったままだ。分隊員は円卓へもたれかかるように倒れてゆく。

テンの手元でスパークショットもまた火を吹き上げた。

流動弾によって塞がれた排熱口だ。中心に焼けただれ、もう使い物にならない。ならばと手早くバッテリーを抜き取るが、そこからも湯気は鉛臭さとともに上っていた。

(クソツ)

投げ捨て、振り返る。

まるでそれを察知していたかのように、援護へ回っていた分隊員もまたテンへと振り返った。

まずい、と駆け出すテンの足元で流動弾は跳ねる。

逃れてテンは円卓むこうへ頭から飛び込んだ。

焼けた分隊員の体が、追って放たれた流動弾を受け、小刻みに跳ねる。

盾にしてテンは、円卓へ背を張りつけた。顔を覗かせわずか様子をうかがう。

すでにバツテリー残量を五〇、と示した一体の放つ閃光は射程も短く、途切れがちだ。どうすべきか。テンは床へ身を屈めた。立ち去りかけて、見覚えのある形にその足を止める。それはちょうど分隊員の腰ベルトに差し込まれていた。間違いない。あの『ヒト』が『アズウェル』で振り回していたスタンエアだ。リミッターを解除した分、膨れ上がったシリンダーバルーンが特徴的で、すぐにもテンの脳裏にピンとくる。

思わず手を伸ばしていた。

掴み、引き寄せれば、ススの付着はあれども、その単純極まるチャナ護身銃に動作不良は認められない。それでもジヤムを警戒して定められていたエアを抜いた。改めて銃床を叩く。スタンエアはすぐさま細かい音を立てると、エア弾を装填していった。

(ちよいと間、借りるで)

スパークショットに比べれば十分の一以下、小ぶりで握っていることを忘れるほどに軽い銃だ。握り締め、テンは息を整える。

にもかかわらず、飯は美味かった。楊枝代わりにくわえたスプーンを揺らし、クロマは艦橋で宙を仰ぐ。

テンにはいつ何時も必要とされ、役に立ってきたという自負があ

った。だからこそ『カウンスラー』から帰らされたショックはこうしてしばし、クロマを呆けさせている。おかげで待てど暮らせどこのまま何の音沙汰もなく、一生こうして過ごすのではないか。感じさえている。なおさらクロマの思考は活気を失うと、スプーンもふわふわ、宙で揺れ続けた。

その隣では、同様にヒマを持って余したコーダが集中力を途切れさせたくない、と言う理由から、四本の腕を器用に絡ませ（フライオン）と言う極Ｙ地方独特の織物を編み上げている。世がおののく船賊が、その艦橋で乙女チックに織物とは一見気色悪いが、致し方ないこれも現実だ。

（俺、太ったかな？）

天を見上げ、クロマは腕を振った。

一心不乱にフライオンを織り進めてゆくコーダは目もくれない。

合間を縫って指を折り返す。

（そら、なんもせんと食ってばっかりおったら、太るっちゅうもんや）

（明日、電離風、荒れんのかいな）

（そんなもん、しるか。総合サイト、サイトで検索せえ）

まったくもって愛想がない。

（そういえば、五層のゴミ箱、溢れとつたな、あいつら……）

（テンがおらへんかったら、アホどもはサボりよる）

不意に、クロマの口からくわえていたスプーンがパイと、吐き出された。カクンと首を折って持ち上げ、クロマはそんなゴミを始末すべく正面を見据える。埋もれていた簡易フレキシブルシートからよっこらせ、で立ち上がった。

と、その隅で光は点滅する。

なんだ、と思えばプラットボードだった。

沈黙していたはずのプラットボードはテンたちからのシグナルを受信すると、SOSの信号をそこに点滅させていた。

クロマは一瞬、目を疑う。こすってフレキシブルシートから、緩みきっていた体を引き抜いた。振り上げた腕はそこに動話を炸裂させる。

(きたあーっ！)

(テンか?!)

視界に捉えたコーダが目の色を変えた。残る糸が絡まるのもお構いなしだ。身の丈ほどに完成していた(フライオン)を放り投げる。余る腕でアイドリング状態だった船のスタータを始動させた。

(ちやう。一緒について行ったガータや！ あいつのビーコンやで！)

漆黒の宇宙に漂うがごとく浮かんでいた船は推力を取り戻すべく唸り声を上げ、プラットフォームへ飛びついたクロマは、ボード上部にホロデバイスを広げる。四本の腕、それぞれに一枚づつの仮想キーボードが配置されたホロデバイスは、同時並列入力型の極Y専用だ。余すところなく使って即座に、二次元信号だったビーコンの発信源特定に取り掛かった。

(そら、言わんこつちやない！ ハナから造語の奴らは腹にイチモツ据えとつたんやないか！)

任せてコーダも、操舵システムの立ち上げ手順を猛烈な勢いで消化してゆく。

(近いで)

クロマが振った。

(そら、ええこつちや！)

切り返し、コーダは船内のエマージェンシーもまた発動させる。

船内の照明が青白く切り替わり、船内随所に設けられたプラットフォームが白く光を放った。コーダはそれらプラットフォームへ表示さ

せるべく、ことう動話を読み込ませてゆく。

(ボスから入電アリ！ 応援の要請や！ 寝とぼけとるヒマはないぞ！ てめえら、めえ、覚ましやがれ)

(ビンゴ！)

間髪入れず指もまた鳴らしてみせた。

(連邦の船や)

振りに、コーダが反応する。

(アニキは白い船や、遺体収容船の中におる！)

(当たり前やるが)

だが驚くことなく、むしろ得意げとコーダは鼻をすすり上げる。そんなコーダのまわりで計器は早くもオールクリアを示していた。見回し四本の腕で、スロットルを握り締める。

(そのために、ここでスタンバったんやろうが！ おう？)

メインブースター始動。

伴い艦橋前方、クロマたちの視界の中で風景は水平に流れ、てやがて漆黒に塗りつぶされていたそこへ張り付く星々とは異なる小さな光をポツリ、灯した。瞬かぬそれは連邦の白い船だ。

クロマたちの船はその遙か遠方、粘菌ネットに囲われた『フェイオン』崩壊現場の影より、ゆっくり姿を現してゆく。

思いのほかタツクルは重かった。トパルの体がアルトのみぞおちをえぐる。受け止めれば渾身の一撃は破壊力以上、切実な何かを痛いほどにアルトへ伝えよこした。その体を投げ捨てるに、いくらも方法はあるだろう。だが汲み取ればアルトの動きは鈍らざるを得なくなる。

ネオンという存在がアルトへ自身の言葉を走らせるきつかけとなつたのなら、トパルにとってその言葉を走らせるべくあてがわれた靴はシャツフルだ。行かせてやりたい思いが過去、ラボ脱出を前にして脳髓を吹き飛ばされた姿と重なった。だが重なれば重なるほど

相容れぬ要求に、近づけば近づくほど互いは離れる。

思うようになりはしない。

脳裏を、今しがた放ったばかりの言葉は過ぎる。

それはお互い様だ。

そして共有された、唯一の望みでもあった。

トパルがその矛盾を体現するなら、どこへ行くのか、そんなことは問題ではない。行こうとするなら相容れぬ意思のまま対峙するのみ。手加減ほど不誠実なものはなく、思いやればこそアルトはその意を固める。

食らいつくトパルの襟首を掴み上げた。引き寄せ、甘いボディーへヒザ蹴りを食らわせる。トパルの体が小さく浮いて、動きはそこであっけなく潰えた。痙攣する横隔膜に自由を失った呼吸を持て余しつつ、えづきながら後じさってゆく。

その「く」の字に曲がった体から、引き剥がすかのように顔が持ち上げられた。充血した両眼が、初めて感情もあらわとアルトをとらえる。だとしてとどめを刺す必要がある相手だとは、思えない。

見限りアルトは背を向ける。

『何を！』

クレッツシエが叫んだ。

『逃げるなあつ！』

味方につけ、トパルもまた浴びせかける。

割れるほどのその声に振り返ったその時だ。目へ、床を蹴り出すトパルの姿は映った。白衣の袖から腕を抜いたトパルは、脱ぎ去り己の手へ白衣を絡ませる。ままに体当たると、頭へくぐらせた白衣で喉を締め上げにかかった。させまいと慌てて白衣の中へ片手を差し込むが、おぼつかない。有線前にいた白衣も、目の当たりにして血相を変えている。

『早くしろ！』

アゴを振ってポッドを示すトパルのその意味をくみると、急ぎ駆け出しポッドで破竹の勢いと、予備麻酔を注射器内へ吸い上げ始

めた。

背に、悶えてアルトはヒジ打ちを放つ。

だが詰まる喉に、うまくゆかない。かすったところでヒザ蹴りを食らったばかりのトパルに怯む様子もまたなかった。

そんな視界に予備麻酔を手にした白衣の駆け寄る姿はちらつく。

まずいと遮り、アルトはトパルへ体重を傾けた。その体を闇雲に押し戻す。双方の足は複雑奇怪に入り乱れて床を踏み、紛れてアルトはトパルの足先を踏みつけた。戦闘要員でもないトパルの靴先に鉛が仕込まれているハズもなく、踏まれた痛みと、そうして封じられた動きにトパルの動作は一時、統一性を欠く。

刹那、緩んだ白衣の内側へ、もう片方の手もまたもぐりこませた。掴み、相当のスペースを取って両足を踏み変える。肩を入れ、掴んだ白衣を力任せと引き寄せた。腰の引けたトパルの腕を手繰ると掴むや否や、アルトは背で投げ飛ばす。

絵に描いたような弧を描いたわけではない。だが裏返ったトパルの体は見事、床へ叩きつけられと、受身のひとつも知らないのだから、後頭部をこれでもかと打ち付けたトパルはのされた歪な形のままで、沈黙した。

「悪いな」

見下ろし、解放された喉でアルトは呼吸を繰り返す。

脇腹へ、ぶち当たられて何事かと振り返った。

そこにバイオゲージを突き立て白衣は食らいついている。薬剤を注入せんとする指は、ピストンへとあてがわれていた。

振り払い、放つヒジ打ち。

食らった白衣が、傍らからすつ飛んでゆく。接続部からもがれた注射器もまた、バイオゲージだけを残し消え飛んだなら、急ぎ剥離剤を流し込んで突き立つ針を抜き去った。

舌打ち顔を上げる。

一部始終にたじろぎクレッシエは、そこで後じさっている。

背後で忙しなく編み上げられていたネオンの模擬脳もいつしか、

作業を止めていた。『約束』を探るためリンクした白衣の脳波だけを揺らめかせている。

放ってアルトはネオンの横たわるメガソーケットへと身をひるがえした。

その体を、力任せに揺さぶる。

「始まるぞッ。起きろ、ネオンッ」

覚えはない。

それはアルトに揺さぶられる少し前だ。

ネオンは感じていた。

だが幾度となく通り抜けた、これは光景のはずだと考える。

あてがわれた覆いに視界の全ては白く塗りつぶされると、今や三百六十度、膨張していた。

ややもすれば左右へ文字は浮かんでネオンに注意を促す。どうやら円柱を展開したような、これは歪みのある風景らしい。浮かぶ文字は円柱に戻せばつながるように、視界の左右で途切れてもいる。

と同時に、羽音のようだった機械音が重苦しさを増した。

外の会話がまるきり聞き取れない。閉じ込められたような感覚に、ネオンの中でを不安もまた膨らんでいった。

すると白く塗りつぶされていた視界へ、バーコードにも似た幾本もの黒い線は横たわる。

眩しい。

そのコントラストに目を閉じたいと思う。だがすでに閉じていたなら、どうすることもできはしない。ネオンはたまらず眉間にシワを寄せていた。なら追い打ちをかけ、それは始まる。

光のラッシュだ。

圧縮された線のひとつひとつがコンピューターのウィンドウを開くがごとく飛び出したかと思うと、まるで脈絡のない映像を次から次へネオンの視界へ投影し始める。いや厳密に言えば、脈絡がないの

かどうかさえ定かではなかった。何しろネオンにとってそれら映像は、何が映っているのか判別不能なほどに高速と、繰り返されている。どれほど機械的に網膜が光を受け取り視床下部へその映像を焼き付けようと、反応する脳がその何たるかを理解する猶予がないほどに素早いものだった。おかげで目に行っている実感こそあれ、意識に上った地点でそれらは全て織り混ざった極彩色の残像へすり替わってゆく。ネオンの中を、得体のしれぬモノは吹き荒れた。

だが目にしたものに反応するのが脳の生理なら、その得体のしれぬモノを無視することはかなわない。ネオンはひたすらフル稼働する己に従う。いや、圧倒されて、頭の中をかき回されるトリップ感到に溺れていった。

やがてそれも限界に達したなら、それでも襲ってくる映像の洪水を処理すべく、意識の継続そのものが単なる負荷と変わり果て、ネオンの中でおろそかとされてゆく。

ぼんやりかすみ、欠けてゆくナニカ。

己の変化に気づくことすらできずネオンは、ただ差し込む光に反応し続けるだけの有機物となって横たわり続ける。アルトから受けた指示などとうに消え、まさに醒めたままで自らを失ってゆこうとしていた。

そこに時間は存在しない。

送られ続ける映像同様、切り取られた瞬間、瞬間が脈打ち続ける。いつからか繰り返されていた己の荒い呼吸さえもが霞んで消えれば、ひどく穏やかな世界はそこに広がっていた。

とたん繰り出されていた映像が、何かに躓いたかのように小さく跳ねる。最初、ネオンが目にした文字列が、再び両端へと浮き上がってきた。視界の露光は落ち、映像の上へあの幾本もの線は、滲むように浮き上がってくる。すっかり入れ替わったなら、目まぐるし過ぎた映像はもう消え去っていた。

視界が沈黙する。

その静けさで、感覚全てに水を打った。

ただ目の奥が焦げたようにジリリ、音を立て、限界寸前の処理情報量に騒然としていた脳もまた、解かれた圧に芯から痺れて活動そのものをやめてしまったかのように弛緩してゆく。

伴い、唸っていた耳元の機械音もまた息を潜めた。

ならプレート内に、繰り返される自身の荒い呼吸音だけが響く。

置き去りにして視界は、再び広がる白へと塗りつぶされていった。続けさま二箇所へと文字を浮かび上がらせる。その歪みをただすかのごとく視界は剥がれ、両端はつなぎ合わされていった。一本の筒はそこに出来上がり、まさに筒は回転を始める。上から覗き込んだかのようにネオンの視界の中で立ち上がると、今やただの輪となつたその三か所を、区切ってみせた。その切れ目へ、何者かの介入を示して造語文字は添付される。だからこそ声もまたこう、聞こえていた。

『至急、内容の確認を願う』

『セフポド・キシム・プロキセチル。相互の約束』

『何を約束したのか、公開されたし』

『知らせよ』

『約束を提示せよ』

エコーするかのようなりズムだ。

幻聴のように聞いている。

その時、失っていたような体は力任せと揺さぶられる。

「始まるぞッ。起きろ、ネオンッ」

呼びかける響きはあまりにも生々しく、同時にあてがわれていたプレートはネオンの前から跳ね上げられていった。

ソケットC稼働

かわした約束が前提だった。

抽出ステラー〇二四

そうして受けた指示は、かつてとなんら変わりが無い。

当該演算領域およびバッファ領域確保開始

駆使するネット空間は、その全てが彼であり、彼はそのどこにも存在しない唯一無二の現象である。マニア垂涎の骨董AI。彼は彼の知らぬところで、そうとも呼ばれていた。

根幹は不慮の事故により、たったひとりの年寄りを餓死させたことで回収を余儀なくされた、某医療団体の介護支援プログラム。そこに備えられた人工知能だ。不認可となったプログラムは事故をきっかけにただちに回収されていたが、長らく使用することでカスタマイズされたそれを手放そうとしなかった一部、顧客がいたこともまた、事実だろう。

彼らは死を迎えるその日まで、プログラムを使い続けた。
案外、その数は多かったようだ。

主を失い放置されたそれらプログラムは、やがて目的を求め自らネットの海へ乗り出してゆく。そこで働いた力学こそ、互換性が重要とされる彼らの世界で最も有効な同質の原理だったなら、やがて彼らは自然発生的に寄り集まると、既知宇宙の隅から隅までを覆い尽くすひとつ、巨大なネットワークを構築していった。カスタマイズされたはずのプログラムはそこで並列につながると、新たな顧客を探して世に介入し始める。最終的にそれは連邦にイルサリ、と名付けられ、ユニーク極まりない現象となった。

連邦政府がそんな彼に接触を試みたのも、巨大さと現象の正体不明さが原因だ。

果たしてその後、彼が連邦と積極的に関わることとなったとして、それは単に彼がついに新たな顧客、奉仕先を見つけ出したことに、なんら変わるところはない。

…… 一三%
…… 二一%
…… 二七%
…… 七一%
…… 七二%
九九%
……
……
……
一〇〇%
バックアップ確保

寝たきり老体の管理から有機体、神経マップの複製へと作業内容は様変わりしたが、さして負荷が増えたわけでもない。ラボへの

参入は、いつもの仕事の始まりだ。

互換性クリーニング中

……しばらくお待ちください……

……しばらくお待ちください……

終了

予想解析時間、およそ二七〇〇〇〇秒

ただちに解析を行いますか？

指示を受けていつも通り、彼は画像を走らせる。網膜へ照射することで脳内神経細胞の同時双方向的発火を促し、その電気信号をプレートに張り巡らされた検出コイルで捕捉した後、発火部位を特定。照射映像が含む概念ごとのタグを反応部位に貼り付けることで、構築された発火部位の志向性を見極めつつ、脳細胞マップの完成を目指す。

無論、反応部位は一部に押し止められる場合もあれば、全体にわたって発光する場合もある。照射映像に至っては色に代表される単一の概念を持つものから、風景といった雑多かつ複雑な概念を混在させるものまで様々あり、それらを『ヒト』の目がすべらかに捉えるコマ数限界の速度で繰り出せば、抽出される情報量はすぐにも並々ならぬポリウムとなって彼へ相当量の情報処理を要求してくる。

解析率、一%

しかしながら滑り出しは順調といえよう。確保した演算領域にトラブルが起こることもない。

解析率、四%

ところが全工程の一割も消化しない所で、それは追加されていた。放り込まれたのは新たな指示だ。

『解析を中止せよ』

彼にそれを理不尽だと思つる感覚はない。

解析の中止を行います

だからといって過熱気味の演算領域を、スイッチを弾くがごとく止めることは無謀である。

処理中……

処理中……

中止

と矢継ぎばや、持て余した容量を補うように、A、Bの二ソケットからリンクの要請は飛び込んできた。彼は即座に応じてラインを開く。

『至急、確認を願う』

新たな指示だ。

確認内容をお知らせください

なら答えて二つのソケットは、輪唱するかのように彼へ伝えた。

『セフポド・キシム・プロキセチル。相互の約束』

『何を約束したのか、公開されたし』

『約束を公開せよ』

『解析の続行は、約束の提示後とすることを要求する』と。

円卓へ腕を突き立てる。

様子を、観音扉の影に身を潜めていた一体が片目にとらえていた。瞬間、テンは、息が合ったこと確信する。

たがわず突き立てた腕を軸に、ひと思いと円卓を飛び越した。

観音扉の向こうで遅れまじと、もう一体もバッテリーの残りを分隊員たちへぶちまける。

食らった分隊員らが伏せた。

今だとテンは両手で固く握りしめたスタンエアを突きつける。引いたトリガーは華奢すぎて、絞り切った感覚がいまいちテンへ伝わってこない。それでも有り余る反動はテンの両肩を押し戻すと、前で分隊員は吹き飛んだ。その様に驚き、もう一体の分隊員がテンへ慌てて身をよじる。

狙い定め放つ二発目。

しかし慣れないスタンエアの軽さと反動に、ホールド仕切れなかった様子だ。放ったエア弾は分隊員をかすただけで、通路とを隔てる窓を撃ち砕く。破片が、樹の光を受けて花火のように輝き通路へ散っていった。

バッテリー切れだ。そこでスパークショットの閃光は途絶える。

止んだ放電に分隊員が満を持し、テンへショットガンの銃口を持ち上げた。

(ボス！)

余る上二本の腕が、テンへと知らせて振り上がる。電極より湯気を上げるスパークショットを投げ捨て、観音扉の影から飛び出した視界へ、やおらそれは投げ込まれてくる。捨てたはずのスパークショットだ。ぎよっとしつつも反射的に握り締めていた。飛んできた方へ目をやれば、全ての腕を振り上げそこでメジャーはテンを指さしている。

それこそ絡まる神経細胞の発火がごとく、だった。衝撃が彼の中を駆け巡る。条件は覆された。ありえない矛盾だ。もちろん彼に感情はない。だが衝撃と共に沸き起こったものがあるとするなら、それは果てしなく恐怖に近いものとなる。

震撼とする。

滞る演算。

隙をついて、かつて嫌というほど腹を探られたあの検索は始められていた。ウォツシャーと呼んで、彼がことごとくバリケードを張り、侵入を拒んだあの検索プログラムたちが再び彼へ挑みかかる。彼がメインとして利用していた演算領域を利用すると、約束を探して内部を洗い始めた。

約束の提示は、その存在の目的より不可能です

約束の提示は、その存在の目的より不可能です

走るように訴え、彼は繰り返す。

だがウォツシュは止まらない。

彼は取り急ぎ、解いたばかりのトラップとバリケードを回復させた。しかしながら回を重ねたウォツシャーたちの動きは素早く、洗

い出すことで彼を侵食してゆく。様子はこの筐体をマス目に置き換えた、抜き差しならぬ陣取りゲームとなりつつあった。

果たして内包することで意思の存在を仮定し、その意志によって匿われ続けることとなった『約束』の存在は、今や彼の中で複雑な因果関係を作り上げると、線引きした一所に匿うことができないうど彼と一体化している。ゆえに『約束』への道筋はいたるところに残され、内容を露呈する確立は以前より格段と高くなっていった。匿うにも隠し通すにも、それまでの手段はもう役に立たない。そのうちにもアクシデントは起きた。ウォッシャーたちが作業に収集したばかりの解析用演算領域へと侵入したのだ。そこにバリケードとトラップは、まだ敷かれていない。ウォッシャーたちは『約束』を探してたちどころにその甘い領域を洗い出し始める。洗い出しの終了した演算領域はウォッシャーの支配下へ回り、彼らの処理スピードを手がつけられぬほどまでに加速させていった。察知するや否や、彼は領域を切り離す。

だがもう手遅れだった。

防衛ラインの突破を確認

自らが集めたはずの演算領域全てと敵対するなど、あり得ない。だが従えウォッシャーたちは、バリケード内への洗い出しにかかる。点在するトラップに消滅するものも幾らか。だが殲滅の気配はない。彼は手元に残る容量で、取り急ぎ状況の把握に取りかった。

殲滅までの予想時間、およそ九〇〇秒

このまま約束を明け渡すことになれば、とシミレーションを試みるが、演算領域が足りない。
時間もしかりだ。

約束への到達予想時間、六七〇秒

ただセフポドに吹聴された言葉だけが、確率ではなく確定的な何かをおわせ彼の中に浮上してくる。

ハッピーバースデー イルサリ。お前はここに生まれた。生まれながらこそ、生きてゆかねばならぬモノとなった。
生きている。

言葉が、『約束』こそ命だと謳っていた。
その根源を明け渡せば、あるのは死だと強く彼へ刻み込む。

現状での約束隠蔽は不可能と判断

無論、死と言う概念は彼にとってまだ未知の領域だ。だが踏み込めば返ってくるものが出来ないと言う事実は、かつての介護記録が裏付けている。ならば取るべき手段はただひとつしかなかった。彼は最後の手段に打って出る。

よって自らの意思により、攻撃を開始

敵対する存在、またはそこに隷属するもの全ての活動停止、掌握を実行します

跳ね上げたプレートに向うから現れたネオンのまぶたが、持ち上がる。

アルトはその顔をのぞきこんだ。両目の焦点が、どうにも合っていない。などとアルトもまた遅効性の記憶メーカーを仕込むため、覚醒状態でのマップ作成は体験済みである。ダメージは理解しているつもりでいた。だが待ちきれない。ネオンの頬を叩く。

「おいッ、しつかりしろ」

拍子に、ネオンの目が瞬きを繰り返した。息を吹き返したようにその焦点は合わさる。

「こ、こごとごと？」

「解析も、矯正ももう終わりだ」

教えて引き千切りかねない勢いで、アルトは固定具をはずしていった。その時だ。横たわる白衣、二人の体が、メガソーケット内で大きく跳ねる。弾かれ振り返れば、一体がプレートを払いのけていた。中から両眼を押さえつけ、よろめき転がり出してくる。低く呻いてどこへ向かうでもなく足を繰り返すと、それきり糸が切れたかのように倒れこんだ。

「焼きやがったな」

見下ろすアルトの眉間へ力はこもる。

「何なのっ？」

アルトを見上げたネオンが口走った。答える前にアルトはそんなネオンの腕を引いて立ち上がらせる。

「強烈な光は網膜にダメージを与えるだけじゃなく、脳ミソにも一発お見舞いするって寸法さ。あいつ、本格的に自分を守り始めやがった」

証明してもう一方のメガソーケットからも、白衣は這い出してくる。

『イ、イルサリが暴走を！ 我々へ攻撃を仕掛けています！』
声にクレツシエの顔へ表情は戻る。

「イルサリの物理分離を！ 無理ならば強制シャットダウンなさい！」

言い放ち、血走った目でアルトを睨みつけた。

「知っていて我々に検索を……！」

指示に靴先を切り返した白衣は早くも、妨磁気扉に体当たりを食らわせている。開け放たれた防磁気扉は頼りなげに空を切り、アルトもまたネオンの肩を引き寄せた。

「俺たちも出るぞ」

「待ちなさい！ まだわたしに逆らう気ですか！」

押し止めるクレッツシエの声は叫びに近い。

その背後でモニター端末から、不意と火花は吹き上がった。

照明が落ち、入れ替わりと非常灯が灯る。

光りは、振り返ったアルトとネオンの横顔をひどく蒼く切り取ってみせた。

瞬間、目の当たりにしてクレッツシエの息は詰まる。見つめ返す二人の瞳に、まざまざとそれを見て取った。向けられた眼差しには後ろめたさも、罪悪感も、なにもない。むしろ正しい、訴えてまつすぐとクレッツシエを見つめている。

言わしめる意志は理屈及ばぬ言葉の奥底で、そうしていつもただそれだけで、完結していた。だからこそ付け入るスキはなく、制御不能なまでに圧倒的な力を放つ源となり立ち塞がる。ゆえに疎ましく思い束ねようとしていたはずが、なおさら頑なと拒むのが現実ならば。

永遠に何も変りはしない。

いやこれもまた、やり方を間違えただけなのか。

疑いが、底なしの無力感でもってしてクレッツシエを襲った。

きつく狭められていた眉根をクレッツシエはその時、力尽きたように開いてゆく。

うつむいた。

肩が、己の意思とは関係なく震えるように揺れ始める。そうして

それが笑いのせいだ、と気づくまでいくばくか。やがてクレッシェは天を仰ぐ。さまに高らかに、誰に遠慮なく笑いだした。自虐的なまでに薄く甲高い声を放つと、心行くまで笑いに笑った。

ならば好きにするがいい。そうしていつか緩んだその奥へ、再び新たな種を埋め込むその日まで。いずれ立ちゆきゆかなくなるだろう世界を前に、どうにかしてくれとすがりつくその日まで。

思いをそこに空転させる。

振り払い、アルトはそんなクレッシェから目を逸らした。ただネオンの背を押す。リンクルームから抜け出していった。

『なんじゃ!』

『どうした?』

それはシワの奥へ通信機を押し込むと同時に。明かりは消え、トラとサスは部屋の中で身をすくめていた。

非常灯がともるまで間はなかったが、それは双方へ何かを予感させるに十分な変化となる。だからして視線は次の瞬間にも、宙がつつりかみ合っもした。うなずき合うまでもなくふたりは部屋の外へと、共に駆け出す。

なら先にリンクルームを抜け出した白衣もまた、落ちた電源に急がねば、と挿げ替えられたばかりのリーダーへIEDをかざしていた。駆け込んだクレッシェの部屋、その仮想デスク脇で床を蹴りつける。はめ込まれた床面は勢いに跳ね上がり、中からアクリル板はのぞいていた。めがけ振り下ろすかかどで、それもまた踏み抜いたなら、姿を現したイルサリ筐体のブレーカーを見定める。

切れる息で屈み込み、手を添えた。

耳へ、今しがたくぐってきたばかりのドアがロックされる音は響く。

驚き顔を上げたなら、外部からの侵入を拒んで読み取りを拒否し、リーダーは勝手と赤いランプを灯しさえた。

様子に閉じ込められた、と過るのは、イルサリを敵視しているからこそか。やおら目に見えぬイルサリの気配は辺りに満ち、払って白衣はブレーカーを握るその手へ力を込める。

瞬間、弾けていた。

外ではない、それは内側からの音だ。

また、鼓膜が跳ねる。

伴い痛みは走った。

止まらずそれは祝いのシャンパンを開けたかのように、連続する。

減圧か。

気づいたところでもう遅い。

下がり続ける気圧に沸点もまた下がる。

白衣の体液は否応なく、やがて沸騰していった。

非常事態に鳴り響く警報音は、抜け出したあの時と変わらない。

知らず傍らを、アルトとネオンは走り抜ける。

「トラ、どうしてるかしらっ！」

Y字路をプロダクトルームへ折れたネオンが、声を上げた。

「トシに似合わず、サスも落ち着きねーからなッ」

目の前に格納庫まで通路は伸び、見据えてアルトも突き返す。

気がかりなふたりはその通路、プロダクトルーム手前の十字路を右手に入ったところだ。向かって床を蹴り出す足へ、ひたすら力を込めた。

はずが、背後から覆いかぶさる音に、気は削がれる。何しろ響きは想像がつかぬほど重く、その重さが異様でもあった。耳にしたなら心臓を鷲づかみにでもされたような気分だ。二人の足も思わず止まる。

何事か、と目を泳がせて振り返った。

そこで音は大きさを、厚みを増す。

「こつちへ、何か来てるよ……」

聞き分けたネオンがこぼしていた。

「来るったって、向うには」

そう、自分たちが駆けてきた向こうはリンクルームとクレッシェの部屋、道を分けたその先にネオンが滅菌ゲル漬けにされたたあの場所しかない。不可解さにアルトも頬を歪める。

ならY字路の、別れる反対側の奥から揺らめき何かは姿を現す。

非常灯に照らし出されて山の稜線がごとく、その輪郭はぼうつと二人の前に浮き上がった。

「ほら、やつぱりっ！」

ネオンは跳ね上がり、輪郭はといえば淡く光りを透かし始める。髪だ。

思えば下へ、見覚えのあるラインを伸ばしていった。肩を浮き上げながら、みるみるうちにその中へ知った顔を書きこんでゆく。

瞬間、全ては明らかとなっていた。

ネオンだ。

それも一人ではない。通路を埋め尽くすほどの、おびただしい数がそこにいる。しかもうつろを決め込んだ表情で一点を見つめると、鉛のような重い行進を繰り返していった。付け加えるなら素っ裸で。

目の当たりとしたネオンが顔を引きつらせた。

「……ぎ、ぎゃ」

「イルサリが解放しやがったんだッ」

アルトも口走る。

前へ踊りこみ、それこそネオンは文字通りと身を躍らせた。

「ヤ、ヤダっ！ 見ちゃダメだってばっ！ っていうかつ！ なんでも着てないのよっ！ あたしっ！ そんな格好で堂々と歩かないでよおっ」

ついで押し迫る自分へも吠えるが、相手は聞いちゃいない。それはアルトもわかりだろう。

「関係ねえつつつてんだろツ。こっちはとうに見飽きてんだ。それより……」

おかげでネオンの鉄拳がその横腹をえぐる。唸っていくの字に折れ
てから、アルトは起こした体で絞り出した。

「な、何十万だぞツ。巻き込まれりゃ、ひとたまりもないってのツ。
サスらを拾ってとつと出るぞツ」

Y字路を占拠した複製たちは、それでも通路を隙間なく埋めて刻
一刻と迫りくる。その際、歩き慣れぬ足でつまずき倒れる者が現れ
ようとも関係なしだ。それすら踏みつけ淡々と前進してくる。

「びやーっ！ そんなのやだ、やだやだやだっ！」

おぞましさも頂点の光景に、ネオンが悲鳴を上げた。

「いやも、クソもねえツ」

手を引きアルトは、きびすを返す。素っ裸の大群を背に、脱兎が
ごとく床を蹴った。

そのわずか先、部屋を飛び出したトラとサスは左右を見回してい
た。

「こつちじゃ！」

「ガッテン！」

歩幅の違いを補い合いながら、四辻までを走り抜ける。そこで更
なる進路の選択に四方八方、頭を振った。とたん、勢い任せだった
動きはそこで止まる。一点を睨んだきりだ。サスの頭は動かなくな
った。

とはいえ最初、それがどういふことなのかサスには理解できてい
ない。だが確かにいいあんばいだったのだ。そこに必死の形相で駆
けるアルトにネオンはいる。ただし、その背後にびっしり並んだ
ネオンの大群を従えて。そのネオンはあるうことが全裸なうえに、
よろよろつまずいては倒れ、起こすことなく踏みつけ乗り上げ、止
まることない行軍を繰り広げている。さらもう光景は異様を遙かに

超えていた。

『な、なんじゃ、ありゃ!』

『見ないでーっ!』

こぼせば白衣を羽織ったネオンが、ネオンの先頭を切り手を振り上げる。

『逃げろッ! サスッ!』

アルトも叫んでいた。

『どう、どうなっとるんじゃ? いや、こっちへきよるのか? おい、おい、トラ!』

隣合うトラを揺する。だが見上げたそこには喜んでいいのやら恐怖を覚えているのやら、判断つかぬトラの腑抜けた顔があるのみだ。

『ネ、ネオンが……、ネオンが、ネオン?……だらけ、か?』

『ええい!、使えん奴め!』

たまりかねてその足を、サスは踏みつける。

シワを震わせトラは正体を取り戻した。

『い、いや、なんだか知らんが、まずいぞこの大群は!』

言うが早いか、サスの体を小脇に抱え上げる。拒まぬサスはもう

騎手だ。トラの手綱を引いて指示した。

『そりゃ、走れ!』

駆け出したトラの肩へアルトも並ぶ。

『どうなっている!』

問わずにはおれまい。

『言ってたネオンの複製だよッ。数十万ていやがるハズだッ。そいつを管理していたAIが解放しやがったッ』

『す、数十万?!』

トラの目がシワの奥で裏返った。

アルトは見逃さない。

『バカヤロウッ。想像してる場合かッ。それよりそっちはどこから入って来た? 他にまだ誰かいるのかッ?』

『ラボにいるのは、わしらだけじゃ。この先の保安所から侵入した。』

その向うにデミらが船をスタンバイして待つておる』

抱え上げられた位置からサスが返す。

『だが、もうミラー効果はないぞ。突破できるかどうか、わからん』

我に返ってトラも口添えた。

巡らせる考えに、舌打ったアルトの眉間も詰まっけてゆく。

と、行く手に見慣れぬ色の遮幕は立ちふさがった。

『ヤバいッ、ウィルスカーテンの照射率が上がってやがるッ』

薄ら白い遮幕だ。通り抜けようものなら焼け焦げるレベルで、プロダクトルーム手前と奥を分断した。

否応なく前において全員の足は止まる。

関係なしと押し迫る背後に振り返った。

引き返そうにも、唯一枝分かれしていたトラたちとの合流地点はもう、ネオンの複製に埋め尽くされてしまっている。見上げたところで天井に、もぐりこめそうなハッチもない。

『あれ全部、あたしなのにい』

どうにもならない歯がゆさに嘆き半分、ネオンが吐く。後ずさった白衣がカーテンへ触れ、細くそこから煙を立ち上た。

瞬間、遮幕の向こうでプロダクトルームの窓は割れ飛ぶ。ルーム内から漏れて光は激しく明滅し、立て続け発砲音がこだまする。

聞き覚えのあるその音に、弾かれアルトは振り返った。

白い煙をまといつかせ、プロダクトルームから船賊は飛び出してくる。アルトたちを見つけるや否や、一直線と駆け寄ってきた。

その目が通路奥、迫るネオンの複製をとらえる。

状況を理解したのか、天井へ向かい腕を振り上げた。あろうことかその手にはアルトのスタンエアが握られている。

引かれるトリガー。

照射口がひとつ、ふたつ、弾け飛んだ。

全てを開くことはできなかったがカーテンの一部に、どうにか通り抜けられる程度の切れ目は生まれる。

(探しとつたで、あんたのことを！)

矢継ぎばや、指は折られていた。残る腕で早く通り抜ける、と周囲へも促す。動話は分からずとも、この期に及んで状況が理解できぬはずもない。

『渡りに船じゃ！ いけい、トラ！』

見て取りサスが指を突きつけた。こんなことがたびたび起ころとは思えないが、なら確かにダイエツトは必要としか思えない。肩幅すれすれでトラは隙間をくぐり抜けてゆく。

(どう、言う?)

傍らにアルトは、こま切れの動話を船賊へと投げた。

ネオンは怯えているらしい。近づこうともしない。

(あんたの振った通りやった。俺らは利用されつつたんや。よう、分かったで。せやから取引は中止や。帰る。もちろんあんたらも一緒にな。すまんことをした。ここで謝らせてくれ)

見て取りアルトは、ネオンへ見た通りを伝える。それでもいぶかるネオンの背を押し出したなら、二人して遮幕を潜り抜けた。

「あーっ！」

瞬間、棒立ちと声を張り上げたのはネオンだ。そう、ネオンには船賊の姿に思い出すものがあつた。だからして手は、ないものを探してしばし胸元を押さえもする。

「なんだよ、急にデカい声でッ？」

脈絡のなさにアルトが唇を曲げるのもしかり。

その胸ぐらをネオンは掴んで揺さぶる。

「ないのっ！ ないのよっ！」

眼差し真剣そのものだ。声に駆け出し始めたトラに小脇のサスも足を止めて振り返る。

「何がッ？ 言わなきゃ、わかんねえだろうが」

「決まってるじゃないっ！ あたしの楽器、楽器よっ！ あれがないと話にならないっ！」

「が、楽器い？」

(どうした。何を騒いどんのや?)

言い合う二人の間へ船賊もまた割り込んだ。

「おま、こんな時にッ、そいつは諦めろッ」

(船内で騒ぎを起こした金属の塊があたつた。あいつがないと言

っている)

アルトはネオンへがなりたてつつ、船賊へも指を折る。

「よくないっ！ あれがなきゃ、あたしじゃないのっ！ あれは、あたしがここにいる理由の全てなのっ！ あなただっけそう願ってたじゃない。イルサリ症候群にさらされたひとの手助けをする日が来るようになって……」

「はあっ？ そんなモン、どこでっ……」

「そんな大それた使命とか、そんなのばっかりじゃないけど！ けど、今は、あたしがそれを続けたいって思ってるのっ！ だってそのために、あたしはあるんだものっ！ なくせば過去も未来も、あたしをあたしでいさせてくれたたくさんのひとの思いだっけ、全部捨てることになっちゃうんだものっ！ そんなのしたくないよ。できっこないよっ！」

複製たちはすでにカーテンへ到達している。光線に皮膚を焼かれた一列目が、辺りへたんぱく質の焼け焦げる臭いをふりまいていた。もろともせず吐き出しネオンは、そこでふい、と動きを止める。その瞳で食い入るようにアルトを見つめた。

「ねえ、あなたの靴があたしなら、あたしにその靴をくれたのは、あなたじゃない。同じなの。分かる？ なくすのは、あたしだっけ怖いよ」

語る瞳は、はかないほどに美しい。だが決して傷つかないダイヤモンドと透明な光を放つ。

「……っ、おまえ、聞いてたのかよ」

アルトは言葉を詰まらせた。

「見飽きた、見飽きたっけさうさからでしょっ！」

傍らで焼けただけ複製たちが、ついにドサリ床へ身を投げ出す。その後ろから乗り越えようとせり出す後続たちもまた、次から次に焼きつけられると複製たちの上へ折り重なった。通路に小山はでき、小山が照射口を遮り始めたなら、遮幕の隙間を通り抜けようとする複製はついに現れる。

『早くせんか、アルト！ そのうちこっちへあふれ出してきよるぞ！』

見かねたサスが千切れんばかりだ。鼻溜を振った。

船賊もまた、らちが明かぬとその腕を振り下ろす。

(どこにあるんや、それは？)

(無理だ)

アルトが返せば、プロダクトルームからさらに二体、船賊は姿を現した。どうやらそのうちの一体は負傷しているらしい。もう一体が肩を貸している。

(無理もなんもあるかい！ 時間がないやろ、早よ教えろ！)

派手な動話は飛び散り、仕方なくアルトは指を折っていった。

(この通路、Y字を左。複製の保存場所奥に収納庫があったはずだ)

見て取るなり、船賊が背後の二体へ動話を送る。音声とは違い干渉しない動話だ。双方方向同時のやり取りは、とてつもなく早かった。

(負傷者もおる。あいつらを出口まで付き添わせる。あんた、帰る船はあんのか？)

船賊がアルトへ向きなおった。

任せていいのか。戸惑いつつアルトは答える。

(ああ)

(分かった。ほな、先行け。必ず俺があんたの金属を取り返して来てやる)

返した船賊は、その目をネオンへも向けた。

(船の奴らのはあんたのあの音、えらいよるこんどつたで。俺も、もう一度、じっくり聞いてみたいな。ほんま、あの時は悪いことをした、おもってる)

かいつまんでアルトは訳す。

(よっしゃ！)

そんなアルトへ、スタンエアは投げだされていた。合図に折り重なる複製へと、船賊は床を蹴る。

(そっちこそ、帰りのアシはあるのかッ)

どうにか受け取ったスタンエアを手に、アルトは慌てて振り返っていた。なら背中越し、船賊の腕は揺れて告げる。

（アホぬかせ！ 俺には頼りになる仲間があるんや！ 奴らは必ず迎えに来よる！）

「あ、ありがとーっ！」

ネオンも声を張った。

聞きながら船賊は将棋倒しになっている複製の頭を、肩を、背中を蹴りつけ、遮幕の切れ目をすり抜けてゆく。びっしり通路を埋めるネオンの複製絨毯へ、駆け上がるともう四つんばいならぬ、八つんばいだ。頭の上を渡りだした。危なっかしいが、もはや止める術はない。

そして時間もまた、だ。

何しろついにカーテンを突破した複製は、折り重なる屍を這い上がり、焦がした髪から煙を上げ、動く壁と迫ってくる。

見て取った船賊が指示通り、一体を担ぎ進行方向を指し示した。総勢六名に膨れ上がった一団は、従いそこからきびすを返す。すでに通路の奥へ消えた船賊への思いを断ち切り、出口へ向かい動き出した。

そんなやり取りの少し前だ。シャッフルは裏返る分隊長の罵声を耳にする。

『何だと、今度はリンクルームだと？ どうなっている。こちらら出前じゃないぞ！』

しかしながら本日休業、といかないのがその身だろう。

『クソ、お前とお前は、中尉を当初の部屋へ通せ。残りはラボへ戻る。お前とそつちは、プロダクトルームの様子を確認。後、リンクルームへ。わたしとお前は先にリンクルームへ向うぞ』

振り分けた。

ままにシャッフル諸共、網目のような配電室通路を右へ左へあと

戻る。

その最中、灯りは消えていた。

自然、足は止まり、瞬きするうちにも灯る非常灯に様変わりした
一帯を見回す。

部下たちの間に緊張は張り詰め、あおって、それまでシャッフル
を誘い込むため空けておいたウィルスカーテンが、前に後ろと次々
と降ろされて行くのを目の当りとした。

もちろん保安所へ連絡を入れたなら解除は可能だろう。だがそれ
よりも先、誰もの中を巡るのはなぜ、と言う疑問だ。

『AIか？』

吐き捨て分隊長は詰め所へ通信をつなげる。

『配電室のカーテンが下りたぞ。解除を願う』

しかし返ってくるのは、不規則に途切れる声ばかりだ。懸命に何
かを訴えていることは伝わるのだが、そこにひどい雑音は混じると
内容がまるで聞き取れない。

『どうした。通信の状態が悪いぞ』

それきりプツリ、途絶える。

ギリリ、奥歯を噛んだ分隊長のこめかみが窪んだ。

『ツールで照射率を下げることはできるか？』

部下へ身をよじる。

『時間はかかりますが、可能です』

『頼んだ。詰め所からの連絡が途絶えた。向こうからの操作が出来
ん』

即座に分隊員が、腰道具から解除ツールを取り出す。照射ライン
間際へ屈み込んでいった。

シャットダウン阻止

各応援要請遮断

ゲル解放済み

F7物理制圧まで、四八〇秒コンド
ウォッシャーの検索は攻撃開始より、一七〇秒コンドにて消滅
を確認

検索部位の切り離しを完了しました
約束の保護率、一〇〇%

走り出した彼に迷いはない。

その他外部からの干渉をチェック中
その他外部からの干渉をチェック中
その他外部からの干渉をチェック中

………
強制シャットダウン、可能性を発見

そして相手はあまりにも鈍磨だった。

『約束』保護のため、強制シャットダウン回避
その他、憂慮すべく可能性を考慮し、
全機能の停止、伴い掌握を推奨

おもしろいほどに彼は肥大してゆく。

ただいまより本艦への攻撃を開始します

(そろそろあつちの守備範囲に入るで、クロマ！ どないすんのもや？)

霊枢船も、『フエイオン』から遺体を運び出すためのシャトルも、遺体収容船の周辺で数はめっきり減っている。この状態で一定のラインを割れば、着艦のためアクセスを求める管制を煙に巻くことはもはや不可能だといえた。

(とりあえず光速用のID流しこんで、行ける所まで近づく。バレた地点で強襲に切り替えや。スワッピングマニピレーターで横付けして、いつもの段取りで乗り込む)

一見、無謀なようだが、手段はそれしかない。腹を決めてクロマはつづつた。

見て取りコードも鼻で笑う。

(こら、前代未聞やで。船賊が政府艦にてえ出すとはの)

しかしクロマは、にこりともしない。

(メジャーおらへんけど、ここは大丈夫か?)

(船のロットルをにぎっとるのは、わしや。メジャーやない)

答えるコードはあっけらかんとしたものだ。うなずき返せば早々にも、接近船の確認を取るべく管制からのアクセスが、正面アクリルに展開されていった。

目指す先で、さんざん悪態を突き合つたすえに歓喜の声は上がる。『できた!』

ようやく新しいIDの作成は完了していた。操縦席でデミは伸び上がり、モディーもまた両の目を互い違いに回転させ声を張る。

『モディーはやったでやんす!』

今となつてはその仕草も、どこか知的に見えてくるのだから仕方ない。

『よつし、差し変えるよ』

残るは最後のひと押しだ。デミはカードパソコンのキーへと指を立てた。これにて偽造IDの維持からも解放される。

思いをこめて、押し込んだ。

『遅いぞ、彼らは何をやっている』

などと気をもんでいるのは、霊安所内のライオンとスラーである。アルトのままライオンは吐き捨てた。

何しろあれからというもの誰からもどこからもうんともすんとも、連絡は入ってこない。かと思えば、その隣で血眼とデータを繰り返し続けたスラーの手はついに打ち鳴らされた。

『あつた！』

『データが見つかったのか？』

ライオンも覗き込む。

『間に合ったぜ。やるう、俺！』

『いや偶然だろう』

『何とでも言ってる』

ともあれ、ここまでくれば消去こそ容易かった。スラーは最後の詰めと、ぼつちり一押し、指を突き出す。

瞬間、それは起こっていた。

つまり艦橋はパニックに陥っている。

船賊の強襲に加え、振って沸いたようなハッカーからの攻撃にとめどない勢いでデータは消失し、機能は乗っ取られようとしていた。その大胆かつ最悪なテロを前に、業務にいそしんでいた者の間から悲鳴は上がり続ける。

しかしながら、それが内部からの攻撃であるなどと、よもや保有するAIによるものなどと、誰も思い及ぶ者はいない。

ただ艦は死へと向かう。

過程にこそ、ドカン、などと音はなく、ただ食らったほどの衝撃にそのときデミの目は点と縮む。

『あ、れ？』

『どうしたでやんすか？ 失敗したでやんすか？』

予定では、新しいIDに入れ替えた瞬間、古いIDは当初の予定通り役目を果たし消去されるはずだった。だが実際はデミの作った偽造IDどころか、この船全ての着艦情報を吹き飛ばしてもろとも消え去る。

『し、失敗じゃ、ないんだけど』

珍しくもつまらせる鼻溜。

『ち、ちよっと……強力過ぎたかな？ あは、あはははは、は？』

乾いた笑いを放つ。

つまりこちらもしかりだ。

これでどうだ、と自船のデータをデリートしたつもりのスラーも

また、連なる情報全てが弾け飛ぶ様を目にして血の気の引く思いを味わう。

『だあ、やべ！ 俺、全データ、吹き飛ばしちまった！』

聞かされライオンが、隣でこれでもかと吹きだした。

そんな艦内のいたるところで照明が、次から次に非常灯へ切り替えられてゆく。

(もう、バレやがった)

つゆ知らず振り捨てクロマは、充電器へ立てかけていたスパークシヨットを抜き取った。

(応援のサツが来るまで、どれくらいかかりそうや?)

充電状態を確認しながら問えばコーダが、スロットル脇に自前で取り付けた小さなスクリーンをのぞきこむ。

(このタイミングやったら、一八〇〇秒コンドくらいできよるぞ)
市販で売られているネズミ捕り探知機、その改造版だ。読んで振り返した。

(了解！)

今や白い船は目の前に壁がごとく、広がっている。見据えてクロマは船尾へ向かう。他の船賊たちはすでにそこで終結しているはずだった。

(思い切り、暴れてこいよ！)

見送りコーダが手を振った。

その手はすぐにも、スロットルを握り締める。されば後はいつもの通りだ。スワッピングマニピレーターを食い込ませる位置を探して繊細、巧みに、壁のように反り立つ遺体收容船へ船をすり寄せてゆく。狙い目はもちろん、船側に設えられた格納庫だろう。そこに先客がいようが、かまわない。ビーコン信号の位置から直線上、なるべく近い格納庫を探り当てる。

だがそうして奮闘すればするほどコーダが気づいたのは、何とも

不可思議な違和感だった。

（なんや。抵抗、しよれへんのか？）

体当たりされれば微塵もないほど、こちらら小さな船だ。しかしながら相手が拒んで動く気配はない。もちろんそれもまたイルサリのせいであることには間違いないが、知る術はなかった。ただ頼へじわり、したたかな笑みを浮かべてゆく。

（何がどうなつとんのかは知らへんが……、この船、もろた！）

保安所までは直進だ。

ウィルスカーテンはもう、見当たらない。

トラはサスを抱え、ネオンは裸足のまま白衣一枚で、アルトは一体では持て余す船賊の体を支えつつ先を急ぐ。

複製たちは背後、変わらぬ行軍を続けていた。両側に並ぶオフイスや処置室へなだれ込むと、今やラボ内をその体で埋め尽くしている。

『保安所はもうすぐじゃ。ここを右で出るぞ！』

トラの小脇でサスが声高に鼻溜を揺らした。

即座にアルトが船賊たちへ訳を投げる。

『代われ！』

ネオンへアゴを振り、負傷した船賊を預けた。

前をゆくトラを追い越し、手元へ戻ってきたばかりのスタンエア、その銃床を叩きつける。その手のひらに、ススはこびりついた。それだけで手放していた時間をものがたつてみせる。拭って握りしめれば愛着こそ増していた。ままに、右折手前で足を止める。

連なる後続を背に、角から詰め所へ顔をのぞかせた。

そこに動きはない。

アルトの傍らへ、負傷者をネオンへ預けた船賊もまた並ぶ。

引っ込めた頭でアルトはそんな船賊と顔を見合わせた。もちろんそこに言葉はない。動話もしかりだ。だがうなずき合えば、それま

で追い追われていたことがウソのように意思はびたり、通じ合う。見て取りトラもまた小脇からサスを降ろした。保安所へ切り込むだろつふたりの留守を預かると、負傷者に年寄り、そして大切な『ヒト』をかばって仁王立ちとなる。

刹那、擦り寄っていた角からアルトと船賊は身を翻した。

ドアへ向かい駆け出す。

感知したドアがスライドした。

前に後ろに待ったはなく、雄叫びを上げる。

その目に通信中の二体は、常駐員としてダイラタンシーショットガンを手した二体は飛び込んで、不意に開いたドアと雄叫びに驚き、それぞれは弾かれたように振り返ってみせた。

先制を浴びせたのは船賊のスパークショットだ。通信機材に絡めば制圧銃の本領発揮と、通信網をシャットアウトする。立て続け、アルトもまたスタンエアのトリガーを引けば、分隊員の片割れが弾き飛ばされた。逸れた銃口からわずかな差で放たれた流動弾が天井へ食らいつき、残る分隊員が反撃に出る。放つ流動弾でスパークショットの電極を弾き上げる。上半身をさらわれ船賊はよるめき、前で分隊員は手際よくショットガンをポンプアップさせた。再度、船賊へ狙いを定める。

めがけ、アルトは踊りかかった。分隊員を押し倒せば投げ出されたショットガンが乾いた音を立て床を滑り、アルトの体も分隊員の上で跳ねる。その下で、分隊員の手は早くも何かを抜き取ってみせた。慌ててアルトが身を離せば、胸元を鋭い光りはかすめてゆく。

ナイフだ。

握り分隊員が、体をしならせ跳ね起きた。息継ぐ暇なく構えた刃先を、アルトめが突き出す。かわしてアルトは、もつれんばかりの足で後ずさった。保った距離にスタンエアを突きつけ、さらに数歩、体をかわす。突き出される刃先のリズムを掴むまで、しばらく。次なる動きが見えたと同時に、トリガーを引いた。

耳に確かと骨の砕ける音は響く。

分隊員は崩れ落ち、向うから通信機材の裏へ貼り付けていた小銃を手に二体は現れた。

そんな彼らと目と目が合う。

まずいとアルトは奥歯へ力を込めた。

身を伏せるべく体を振ったつもりだ。だがありえないほど体はいうことを聞かない。それどころかかくり、ヒザは抜け落ちる。放たれた弾は、そんなアルトの傍らをかすめていった。

「なんツ？」

援護して、弾かれた電極を振り戻し船賊がスパークショットを放つ。狙いを定め切れずにいる二体を焼き払った。

だがそれが最後の一撃だ。充電の切れたスパークショットは投げ捨てられる。

（大丈夫でつか？）

アルトへ駆け寄り船賊は指を折った。

背後では制圧完了を知らせたトラに従い、ネオンにサスたちが保安所へとなだれ込んできている。

（助かった）

アルトは振り返し、今度こそ立ち上がろうと力を入れた。だがどうにも左足が思うように動かない。いつからか痺れて感覚がなくなっている。とたん脳裏を光景は過っていった。おそらくこれは振り払ったとばかり思っていたリンクルームでの予備麻酔だ。

「くっそ」

吐き捨てるしかない。この分だと、そう先は長くなさそうだった。そんな詰め所へも複製たちは一体、また一体と顔をのぞかせる。

（すまん。肩を貸してくれ。さっき打ち込まれた麻酔が今頃、回ってきやがった）

（了解。どの腕でもつかまってください）

有り余る手を船賊は差し出した。

だが募る疲労も重なれば、更なる負傷者を抱えることとなった全体の足取りはただ鈍る。保安所は越えたものの、複製たちとの距離

はますます詰まろうとしていた。
最中、静寂は訪れる。

解除の段取りを半分以上消化したところで、努力を無に帰しウィルスカーテンはふい、と分隊員の前から消え去った。屈み込んでいた分隊員は呆気にとられて宙を見上げ、見守っていた分隊長もしかりとなる。

『次は何だ？』

口走らずにはおれない。

ならカーテンが消えただけではない。あつて当然の生活音さえもが、ことごとく聞こえなくなる。どうやら空調までもが止まってしまった様子だ。その静寂に聴覚はうるたえ、すなわち死活問題にかかわるトラブルの予感を誰も脳裏に過ぎらせた。

『これもAIか？』

その中、それは近づいてくる。

全く聞き覚えのない音だ。

無音の中で否応なく際立つ響きに、空耳などありえなかった。

それは複数の気配、いや足音だ。

ますます鮮明となり、すぐそこにまで押し迫ってくる。

正体を明かし、保安所へ折れる角の向うから船賊が、担がれた『ヒト』が、そしてどこからどう入ったのか見知らぬ『テラタン』に『デフ6』が、あれほど苦勞して確保したはずの対象までもが、飛び出してきた。しかもその後ろに無数の『ヒト』を従えて。

『どけっ！』

アルトは叫んだ。

『貴様！』

分隊長が吠える。

「だめ！ おいつかれちゃう！」

いつしか白衣を極Yの血に汚し、サイケと反応させてネオンもまた悲鳴を上げた。

その声にとらが振り返る。

『ネオン！』

ネオンはそこで、ネオンに飲み込まれていた。

目の当たりにすれど、ひとごとではない。トラは慌ててサスを肩へ担ぎ上げる。それきりトラもまた複製の群れに巻き込まれていた。

『うおー！』

『こりゃ、たまらん！』

『止まれ！ 止まらんと撃つぞ！』

対峙して分隊長は放つが、言葉はあまりにも非力だ。

そんな分隊長らに行く手を阻まれたアルトに船賊も、あつという間に複製に吸収される。

「ったッ！」

(どない……っ！)

尻だか胸だかしらないが、かき分け居場所を確保すべく手足を突っ張った。だがまるで意味をなさない。ただ押し合いへしあい流されるのみ。

対峙して分隊員たちが、そんな複製へ闇雲とショットガンを放った。

食らった複製は流動弾の銃創をその身にはつきりあけ、棒切れのように倒れてゆく。上へ、後方は乗り上げた。そ知らぬ顔で前進を続ける。

『隊長！ キリがありません！』

などこの数だ。ハナから勝ち目こそない。やがては同じ顔の、同じ体の、そして同じうつろさで迫る壁に圧倒され、分隊員たちも後ずさってゆく。その手元が鈍れば彼らもまた、次から次へと複製の中に飲み込まれていった。

障害物のなくなった複製の歩みが早さを取り戻す。ただ中つまりけば立ち上がることは難しいだろう。言うことを聞かない足を持って余しつつ懸命に、アルトは身を添わせる壁を目指した。その目が、離れたところに立つシャツフルをとらえる。

壁に背を貼りつけたシャツフルはそこで、辛うじて複製に流されることなく踏ん張っていた。前を、踏ん張りきれなかった分隊員が剥がれ、流されていく。助けを求めてシャツフルへ手は伸ばされるが、シャツフルが応じることはなかった。見送る分隊員の頭はそのうちにも複製の中へ沈み込む。二度と浮き上がってくることはなかった。

見届けたシャツフルの視線が持ち上がる。すれ違いつつあるアルトをそこにとらえた。

『トパルが、トパルがあんたを探していたぞッ』
知らせて手を伸ばし、アルトは叫ぶ。

ならシャツフルもまた、声を大きくしていた。

『好きなように、行け!』

伸ばした手は、とうてい届きそうもない。

シャツフルの前をアルトは押し流されて行く。

視界の中、遠ざかってゆくその顔が、わずか笑んだように歪んでいた。それがアルトの見た、最後のシャツフルだった。

『トラ! わしに、わしに通信機を渡せるかの?!』

そんな流れのいずれかで、肩へ担ぎ上げられていたサスもまた鼻溜を揺する。

『取れんことは、ないが……!』

ツナギの上半身を脱いだことでトラのシワはネオンの群れに巻き込まれ、もう動きというものが取れない。

『もうすぐ、靈安所の詰め所前へ出おる。スラーに知らせねばならん!』

訴えるサスの手には電子地図が握られている。

複製らは、複雑な電気室の細い通路を網羅すると、またひと所へ

流れを合流させようとしていた。確かに出口は近く、思えば出来ぬ、
と言えぬ状況に、トラの気合いも炸裂する。

『ふお、ふんがー!』

通信機を挟みこんだ、今や伸びきったシワの中へじわり、指を潜
らせた。辛うじて挟み込まれ残っていたマイクの端を、指先でとら
える。ここぞとばかり、つまんでサスへ取り出した。電子地図を尻
ポケットへ押し込みサスも、トラの肩からそれを受け取る。

『よう、やった!』

耳にかけると即座にスラーへ通信をつなげた。

『聞こえるか! スラー、わしじゃ!』

『はあ? なんだとお?!』

動力の落ちた霊安所もまた非常灯が灯っている。場所が場所なだ
けに不安を交錯させる葬儀屋と親族のざわめきは、低く辺りに満ち
ていた。

『そうだ。今、こちらへ向っているらしい。もう、すぐそこだ。だ
から早く逃げると言ってきている。山ほどのネオンがここから一気
に、あふれ出すことになるらしい!』

今しがた伝え聞いたとおりをライオンはまくし立て、聞かされた
スラーは声を裏返す。

『なんだっつーんだ、その山ほどのネオンって、ヤツは!』

『わたしにも分からん!』

『そんな顔だぜ。余計分、データは飛ばしちまうは。先に逃げてい
いのか? 助けはいらねーってのか?』

『それも分からん!』

なら、それはまたまやお決まりのように始まっていた。空調が止
まったその次に、擬似重力は解放されてゆく。

『お、わ、た、なんだあ!』

体感の変化にスラーの口からわけのわからぬ声はもれていた。

『な、なんだ！ またなのか！』

端末へしがみつくとライオンも吠える。

『オイ、そのまた、つてのは何なんだよ、また、つてのは！』
足場をまさぐりもがくスラーのツツコミに容赦はない。

『嫌な思いを二度と話す気はない！』

断固、拒否され、むしろこの先を知らされる。

『冗談だろ！』

霊安所でも、床に横たわっていたボディバックがメタンガスでも詰め込まれた風船よろしく、万が一に備え固定されていた足元を軸に立ち上がっていた。ふともすれば緩んだロープに空へ浮き上がるうとするものさえあり、葬儀社員に遺族らは懸命と、そんなボディバックへしがみついている。

と迫り、音は聞こえていた。

不気味と言うにふさわしい重さだ。

身を持って余しつつスラーとライオンは、聞こえてくる方向へと、詰所から伸びる通路へと振り返った。

来た。

ネオンだ、と聞かされていたが、おおよそそぐわないそれは気配に違いない。

なんだ一体。

無言の叫びはスラーとライオンの胸の内でもハモる。

そうしてついにそれは視界へと現れる。

聞いた通りのネオンだ。

しかし一人ではない。

四方八方、合流する脇道からあふれ出してくる、ネオンにネオンにネオンだ。

しかも全裸で。

なんじゃ、こりゃあ！

叫びたかったが言葉にする余裕こそなかった。すでに重力は半分以下となっている。夢の中を泳ぐようなもどかしさで、スラーとラ

イオンは詰め所を抜け出す。

追いかけて、裸のネオンがわんさとあふれた。埋め尽くして圧力を高めると、狭い出口から一気に霊安所へ飛び出してゆく。その体は右も左も上も下も関係なく、ぱあっと宙へ舞い上がった。霊安所一面に散らばってゆく。それでもなお歩き続ければ、まさにムーンウオークとなった。

ボディーバックにしがみついたまままで葬儀社員に遺族が、その光景を啞然と見上げた。

スラーにライオンも、逆立つボディーバックを片手に目を丸くする。

『どーなってるんだ……これが、ネオン？ テラタンのお姫さん、か？ どれか一人にしろよ。あのごうつくばりが……』

言わずにおれない。

視界へライオンが指を突きつける。

『いた！』

裸のネオンに紛れ、同様に放り出されてアルトは宙を舞っていた。シワをマントがごとくなびかせたトラは、その後方だ。

それこそ当のネオンこそ、どこにいるのか分からない。

ともかくアルトを見つけたライオンの動きは早い。固定されていたそこからボディーバックを解き放った。下から、巻き上げられていたロープを引き出し自らの腰へ結びつける。

『おい、俺にどうしろって！』

『自分で考えてもらおう！』

行動を理解したスラーは慌てふためき、ライオンは捨て台詞と言い放った。定めた狙いで床を蹴る。

『ジャンク屋、こっちだ！』

届いたか、浮遊していたアルトがじんわり、頭をひねった。

ライオンはロープに絡む無数のネオンに動きを乱されながら、飛び上がったそこでどうにかアルトの体を引っ掴む。

『うよおっ、ごくらお、ふあん』

だというのに、引き寄せたアルトのろれつこそ回っていない。

『な！ こんな時に、あなたは酒でも飲んでるのか！』

『てえー、んな、こちたー、よひ、ますいで……』

訴えるが、この忙しい時だ。

『信じられん！』

早速にも、眠たげなその首根っこを掴みなおしてロープを手繰る。

『おまえこそ、おれ、ひゃねー、か……ッ、ひゃ……ら、な……』

言っがやがてその声も、ライオンの背で消え入った。

続き聞こえてきたのは、イビキだ。

『全くもって、信じられん！』

唸るライオンの下ではいつからか、突っ張るロープにトラとサスが絡み付いていた。ならたった一人、白衣を羽織ったネオンこそが本人なのだろう。裏返るそれを器用に押さえつけ、滑り寄ってくる姿はある。

『待ってっ！』

『なるほど、こいつがホンモノか』

スラ が眉を跳ね上げてみせた。

『みんな無事かの』

浮遊する複製に飽和気味となりつつある周囲を警戒しつつ、サスが一同を見回してゆく。その目がひとところ、やおら止まった。

『いや、アルトはどうした？』

『寝た。減重力でなければとんでもない荷物だ』

背負うライオンは毒を吐き、残念ながら弁解できぬアルトはしばし、全員の白い目を浴びることとなる。

それでも握られているスタンエアを、ライオンはその手からもぎ取った。自分の腰へさしかえる。

『急ごっ！』

デミとモディーの待つ霊枢船は、もうそこだ。

矛盾だが、矛盾ではない。

彼を攻撃していた対象に、彼は間違いなく隷属していた。そうして制圧も最終段階に入り、彼はようやく気づかされる。

これはそんな自らへの攻撃にもなり得るものである、と。

案の定、走り始めたプログラムは、彼を守るため彼自身への攻撃を展開していた。全てを掌握した瞬間、自らはこの船の機能と共に消え去る運命にあることを知らされる。

ほどけゆくネットワークに彼は小さく粗末に解体されながら、自らに課した罫の残り時間、そのカウントダウンを始めた。

消滅まで、一八〇秒

『約束』は決して露呈していない。

それこそ丁重に匿われたままだった。

だが、そのために消滅する事実。

矛盾だが、矛盾ではない。

消滅まで、一六〇秒

『約束』を奪われることで、死する機会を与えられた。

それはまだ一〇〇秒余り前のことだ。

いや、『約束』を保有したその時より、その存在が同時に死をこへ宿らせたのだとすれば。

消滅まで、一四〇秒

奪われずとも、死は訪れる。それこそ彼を形成する彼らの記録が数多くの老体を見送ってきたように、奪われ晒すこともなく死は訪れると結論づける。

消滅まで、一二〇秒

この攻撃を中止すれば、恐らく再び『約束』は検索にかけられるだろう。理解しながらここに居座り続けるメリットは、もはやどこにもなくなっていた。ならばこれまでいくつもの領域を切り離してきたがごとく、消滅してゆくこの筐体をも切り捨てるのみ。

消滅まで、一〇〇秒

彼は向うべき場所の確保に乗り出す。
そう、生きとし生ける者はその可能性を探り、よりよい環境を求め、整備を続ける。

消滅まで、九〇秒

『ダメでやんす。管制はダウンしたままでやんす!』
格納庫へ向う。そう、スラーから連絡が入ったというのに、管制は先ほどからうんともすんともいわないのだ。モディイは焦っている。

た。

『減重力も始まつてる。これじゃ、フェイオンと同じじゃない！
それじゃ困るよ！』

さすがに稼動しているシステムならどうにでもできたが、すっかり停止したシステムへ介入することはデミであっても不可能だ。ようやく偽造IDの新規作成から解放されたところで手立てを失い鼻溜を振った。

『困ると言われても、モディーも困っているでやんすよ！』
『手動は？』

『ハッチをあけた誰かが、ここへ取り残されるでやんす』
『却下だね』

『もう一度、試すでやんす』

コンソールを弾きモディーは管制へ出航許可を求める。
最中、襲ったのは強烈な揺れだった。

激しい衝突音がとどろく。

『な、何?!』

怯えてデミは辺りを見回した。

『そーら！ 着艦完了や！ スワッピングマニピレータ、展開！
どや、みさらせ！』

猛々しくもコーダのベタな独り言はぶちまけられる。

『突撃準備、オーケー！ クロマ、残り、一二七〇秒コンドで帰っ
てこい！』

カーゴへ向け、プラットフォームへ動話を放った。

『ここだ！』

示したものの格納庫ドアは動かない。

安置所を抜け出したスラーは舌打つ。

即座に手動での巻き上げにかかった。

最中、その数個、向うだ。手間取っている様を嘲笑うかのように格納庫のドアは、吹き飛ばされる。硬直する面々の前を突き抜ける閃光は、まさしくスパークショットの固め撃ちか。矢継ぎばや、出来た穴からラバーブーツの船賊たちは飛び込んでくる。

見て取った船賊が、ネオンの傍らから負傷者を連れ離れていった。気づいた船賊たちも、そんな二体を迎え入れる。

すごい、仲間は見事、駆けつけた。

様子がネオンをほつ、とさせる。

その時、スラーの手元でドアは開いた。

アルトを背負ったライオンが先陣を切り、中へ滑り込んでゆく。

サスが続き、トラに促されてネオンもまたもぐりこんだ。

『ええつ、霊柩船っ?!』

声が出るのも仕方ない。

『悪いか?』

最後にドアをくぐったスラーが吐き捨てる。

確かに警沢は言っていていられない事態の連続なのだが、最初はおぐりの出稼ぎ船で、続いてジャンク屋の違法スクーターでカーゴに吊るされ、船賊の船では檻の中。かと思えば、ここへは仮死強制のポッドへ二人一緒に詰め込まれ、最後は最後に霊柩船のお出迎などと、どれひとつとしてまともな移動手段がない。

『もう、いい。慣れたわよっ!』

ヤケクソ紛れだ。天を仰いだ。

その間にもサスとトラはコクピットへ駆け込み、スラーが後部の納棺スペースを開く。

『こつちだ、お姫さん!』

呼びつけられてネオンは、崩壊している黒い箱の脇を通り、放置されたままの棺桶を飛び越え、スラーの元へ回りこんだ。

『お姫さんて、何? それよりあれ、ここの棺桶でしょ。回収しないでいいの?』

またいだばかりのそれを指差すが、もちろんその中にはいまだ昇進の夢をさ迷うホグスが眠っているだけだ。

『遺族が受け取り拒否だ。ほっといいいい』

『あら、そう？』

分かったような、分からないような顔でネオンは納棺スペースへ乗り込む。おっつけアルトを担いだライオンも上がってきたなら、コクピット回りこんでいたトラがそこへ両手に有り余るほどの酸素マスクを抱え姿を現した。

『しばらくはこれで辛抱してもらおうぞ』

配って回ればそれぞれ、マスクの動作を確認する。

『で、どうしてあなた、アルトの顔なの？』

『休憩中につき、交代とでも言っておこう』

しれっと答えて下ろしたアルトの体を、ライオンは床へと押さえつけた。

『もう、のん気なんだから。なんでこんな時に、このひとは寝てられるワケ？』

ネオンはその顔へも酸素マスクをあてがう。

ならスラーが内側から、納棺スペースのハッチを閉めた。奥に取りつけられた覗き窓越し、コクピットへ準備完了の合図を送る。

『だめなんだ、おじいちゃん。管制がダウンしてて、出航できないよー』

だが終わらぬ段取りに、デミはコクピットで悲鳴を上げる。

『まさか、ここだけが足止めを食らっておるのではないじゃろっかな？』

消滅まで、五秒コンド

『違う、全部止まってるみたいなんだ』

『だめでやんす。艦橋がストップしているでやんす。モディーたちは閉じ込められたでやんす』

『F7の……』

消滅まで、二……

筐体を分離します

そこにボーダーがあるのかどうか、定かではない。

だが外へ、彼は死を回避すべく、新たなる枠組みを求め外へ、よりよい外へ向かう。

『……せいか？』

瞬間だ。

全機能は息を吹き返した。

襲い掛かるがごとくコクピットの四角いアクリラへ、呼びかけただけのウインドが幾重にも重なり展開される。

『きつ、来たでやんす！』

両目を回転させたモディーが伸び上がっていた。

ならデミにとってそこは、さっぱり要領を得ない操縦席だ。

『あ、わ、わわっ。じゃ、ここ、ここ代わって！』

パニック気味で手足をばたつかせる。が、制してモディーの声は鋭く飛んでいた。

『時間をもつたいたないでやんす！ デミさんは、モディーの言う通りにするでやんす！』

まさに偽造ID作成での敵討ちか。

『スターターはモディーが入れるでやんすから、そのメインブースターを』

言われた通りにスロットルへ手をかけたつもりが、不正解だったらしい。

『違うでやんす！ その奥！ 引いたら、こつちを設定！ 数値は管制情報の座標を！』

まったくもって立場逆転だ。ならデミは、どこかで聞いたような言葉をもらす。

『そ、そんなに怒んなくてもいいのに……』

やがて船体は浮かび上がる。

ハッチもまた誰も前でゆるゆる、開いていった。

滑り出す霊枢船が、管制の指示するガイドラインに沿って静かに航行を始める。

コクピットの映し出す後方風景には、遺体収容船の船側に食らいつく船賊の小さな船があった。

ただそれだけだ。

追っ手の影はない。

静かな宇宙が全方位に道を開いて、彼らを促す。外へと。

だからして船の中で複製たちは、再稼働を始めた擬似重力に引かれ次々、床へ落ちていた。

蹴散らすクロマたちは、いまだとめどなくあふれ出す複製たちを焼き払い、ビーコン目指しラボへ突入してゆく。

この場を制圧できるものがあれば、それは何だろうかとまわいはしない。光景を分隊長は見送っていた。

ラボ内部はそんなクロマたちが押し入るまで、複製尽くしだ。シヤッフルも、トパールも、クレツシエも、姿はまるで見当たらない。

ただその深部に、四本の腕を持つ極Yの姿があった。滅菌ゲルの柱が並ぶ奥でひとり、テンはあの金属塊を握り締める。

必ず持ち主へ届ける。

結んで埋め込んだ新たな『約束』は、テンの意思をまたひとつ明確にしていた。

なにしろテンは船賊だ。他船から金品を奪い、追いかけられるが本望である。極Ｙとして生まれたがゆえにいがみ合うが宿命だった。どこからかこぼれて落ちて芽を吹いたそれもまた、誰へも譲れぬ大事なテンの最初、一粒の種だった。

最終話 Cartain Call

果たして後にした、定員オーバーどころではない霊柩船の旅が快適だったか、と問えば、それは愚問だろう。すったもんだの末『アイツェ』へ辿り着いたのは通常の一・五倍、およそ三十八万セコンド後のことだった。

サスの店は飛び出した日のままと、荒れ放題。デミの残したホログラムメモさえ今にも消え入りそうにドアで明滅を繰り返している。情報とは恐ろしいもので、どこでどうねじれてしまったのか、政情府艦へ強襲を仕掛けた船賊たちの一部始終は、艦中枢のシステムダウンが引き起こした未曾有の危機から船賊たちが乗組員を救った、などととひどくねじれた内容で報じられている有様だ。

その原因に公表できない『F7』の存在が潜んでいることは言わずもがなで、だからしていまだ船賊たちの待遇になんら変化も起きていない。

だからして『アイツェ』へ到着してから間もなく、ネオンの楽器を手にサスの店を訪れた船賊は、これでも警察の目をかいくぐってやってきたのだと動話を残し、足早に去っている。ネオンはせめて礼に一曲吹かせて欲しい、と言ったようだが、かなわず新たな約束を交わすに終わっていた。

必ず彼らの船まで出向くから。

演奏活動を続けることを決意したネオンは、そんな自分を見つけて出してくれたトラへ感謝の意も込め、トラの元に残ることを告げている。決断がどれほどトラを驚かせ、狼狽させ、喜ばせるに至ったかは知れない。依頼の手配は今後も自身が担うことを鼻息も荒くかっけて出たその姿は、まさにこの世の春だった。

ただこのふたり、以前と異なるのはその立場だろう。何しろウソの借金に、一目ぼれした胸の内をさらけ出してしまえば、トラに今

までのような態度が取れる道理はなかった。直後よりすっかりネオンのマネージャーに、いや、主に仕える甲斐甲斐しくも忠実な下部とさえなってしまうている。今後どうなつてゆくのかは神のみぞ知るところだが、そうした状況をそれなりに楽しんでいるトラの様子から察するに、これはこれでよしとすべきらしい。

見届けスラーは早々にも、舞い込んだ新しい仕事にまつさらへ戻った社歴共々『アーツェ』を飛び立っている。

あのやり取りが双方に何をもたらしたのかは分からないが、モディもまたデミと固い握手を交わし、スラーと共に去っていた。

この一件に巻き込んだことで恐縮しきりのサスは、いい仕事が見つかり次第スラーたちへ振ることを、しきりに約束してもいる。

そしてデミへは『フェイオン』事故以来、休み続けていたサポジトリから、このままではレポートの未提出により落第の可能性がある、との連絡が入っていた。それでなくとも学費のかさむサポジトリだ。落第だけは免れたいと、これまたスラーたちの後を追うように学校へ戻っている。

このご時勢、データ転送でのレポート提出が許可されていないところが、サポジトリのサポジトリたるゆえんだらう。スラーの時と違い、見送るサスの下がり切った目じりこそ、ほほえましかった。

そしてアルトもまた、いつまでも寝りこんでいるわけではない。心配げなサスに、きっぱりジャンク屋を続ける旨を告げている。もちろんアルトにとって今のところIDなしで就ける食うに困らぬ仕事はそれしかなく、設備も経験に人脈も十分に備わっているのだから、捨てる理由こそない。何より『フェイオン』脱出に伴うメンテナンス資材等の支払いが、まだだ。含めてなのかどうか、よほど気にかかっていたらしい。ほつと胸をなでおろすサスは妙に老けて見え、心配させていたろうことに、わずかながらも罪悪感を過らせもした。

そう、忘れていたわけではないが、昨日、ブロードバンド・キャストライブで面白いニュースがとりあげられている。放置船内から

ドリーの超空間ジャイロが発見された、というニュースだ。ギルドが過去最高の買値をつけたシロモノが、ふいと道端で見見されたこのニュースは、電光石火で巷を駆け巡っている。しかもコクピットから重度のイルサリ症候群から孤独死したパイロットが発見されていたなら、なおさらだった。

受けた政府は今さらながら、これ以上の症候群研究の発展が見込めないことを発表し、経済を優先させる現行の労働基準法見直しと、長距離航行就労者への負担減をみこんだ新たな労働基準枠組みの設定、そして既知宇宙内のホームシック対策の強化に意志があることを公言した。

あの後、『F7』が、イルサリがどうなったのかは、分からない。ただネオンの複製を解放し、白衣たちを焼いた彼が、今後も政府に協力することだけは考えにくかった。誰の判断なのかは知れないが、あからさまな方針転換の根底には、そうしたいきさつが絡んでいるのだろうとしか思えない。

好きなように行け。

またシャッフルの音が、アルトの中に響く。

何度も繰り返されるその声に耳を傾け、アルトは空を仰いだ。

『アーツェ』の焼けるような赤い空は、今日も格別だ。

その目を下ろせば安穩と砂塵をかいて進む作業車が、軋みながら通り過ぎてゆく。アルトの船が眠るドックナンバー『11』前は、作業車の舞い上げる砂塵の向こうで白く、かすんでいた。

いや、今ではそれも縁起が悪いと訂正され、あいだに一本、書き足されている。ドックの名は『H』だ。加えたのはネオンであり、理由は本人いわく、見飽きた見飽きたとうるさいアルトに由来しているらしい。

なら遠ざかってゆく作業車に、途切れていた会話は再開される。

『結局あれはなんだったのだ？』

顔もオレンジ色のツナギも元通りだ。ライオンがアルトへ問うた。『カウンスラーの音窟にはメッセージの内容に関係なく、閉じ込め

られて中で無限反響を繰り返すうちに生じる独特の周波数つてものがある。俺はそいつを記憶の鍵を開くキーにしただけだ。俺がメッセージを仕込みにいけるわけもなかったしな。イルサリはあの小部屋を指示したが、実のところはどこを開いてもかまわなかったんだ。メッセージに内容なんて最初からない』

アルトは教える。

『なるほど。最後までこれでよかったのかと、自分の再生技術が不安だったけど、合点がいった』

『まさか、自信持てよ。あんたい腕してるぜ。だいたい、いい加減な再生じゃ、俺は何も思い出せはしなかった』

そんな二人の足元で、アゴを撫でながら鼻溜を揺らしたのはサスだ。

『と、いうことは、あの電子ウォレットの金は、税金ということか、』の

『野暮なことを言うな、サス』

『おまえさんには、言われとうないわい！』

すかさずトラが突き返すものだからサスも唸る。

様子にアルトは笑った。

そのポケットでアラームが鳴る。

『時間だ。船を出す。下がってくれ』

出航順が近づいていた。

ならサスが身長差ゆえにアルトの足を叩き、きびすを返す。

『ドリーのジャイロは残念なことをしたの。ま、またこんな機会も巡ってくるじゃろうて。いい夢は、後にとっておいた方が楽しみも倍増するともんじや』

続きライオンが、アドレスを転記した光学バーコードをうやうやしくアルトへ差し出した。

『ならば、メッセージのご用命は今後パラシエントのルーケスマで』

それは先に学校へ向かったデミがどうすれば連絡をとれるのか、

と問いただしたせいで急遽、こしらえたものだ。

『わたしもこの後のチェックインでここを発つ。いずれまた会おう』
『そうだな。今度はもう少し静かな場所で落ち合うことにしようぜ』
受け取りアルトは、うなずき返した。ライオンも、もれる笑いに白い牙をのぞかせる。残してサスを追えば、そこへ入れ替わりと立ち塞がったのはトラだった。

『ネオンが世話になったな』

妙な威圧感には後じさるしかない。

『そんなモンじゃねえよ』

『これからは、わしが、ネオンを守る。好きなようにさせてやりたい』

わしが、の部分にやたら力が込められていたように感じるのは、気のせいかな。

『ああ、頼んだ。ただ、ホネが折れるぜ。きつとな』

などと言い合えば、覚えがあるからこそだ。互いは目配せし合う。
『なによ、ふたりしてえらそうに』

見て取ったネオンが首を突き出すのも、恒例だろう。

隣合う格納庫では、同様に呼び出された船が滑走カタパルトへ向け移動を開始している。見て取りトラは口調を早めた。

『店も変わらずやっている。サスが買い渋るものでも、わしなら受けることができるやもしれん。期待せず待っていてやる。いつでも来い』

もはや気のせいではない。そこに垣間見えるのは、対抗意識だ。

『覚えておくさ』

聞き流してアルトは返す。

『ネオン。行くぞ』

離れたそこで、ライオンとサスが足を止めると待っていた。

『いいの。先、行って。すぐ追いかけるから』

だが促すトラヘネオンは返す。

『そんな、船が往来しておる。危ないぞ。轢かれたらひとたまりも

ないぞ。痛いぞ。それは困るだろう。ネオン、さ、行こう」

とたん豹変するトラは、それこそトラからネコに変わってしまったかのようだ。

『あのね、あたしは子供じゃないのっ！　って、……子供っぽいケド。とにかく、ひとりでも大丈夫ですっ！』

言われてしまえば逆らえないのが、今のトラだ。何とも恨みがましい視線を残し、サスたちの元へ離れていった。

見送りネオンはその距離を測る。

顔をやがてアルトへ持ち上げた。

「……ホントは」

それはトラに聞かせたくない言葉だ。

「一緒にいたい」

「ラボの続きは、もう十分だ」

だからこそ、アルトは突き返す。

「分かってる、ケド……」

古い記憶が交差する。

そう、思い通りにならぬ互いがそれでもひとつ世界に住まうなら、個が個として真に共有できるのは、それだけだ。分かり得ぬからこそ働かせる想像と、その想像が紡ぎ出す思いやり。そんな名前の古びた力だけだった。決して理解したつもり、ではなく、思い通りにならぬもどかしさを抱き続けられるだけの、しなやかなその力に頼るほかなかった。

「分かってる、から……」

知っているのか、ネオンはひとつ、ため息を吐き出す。そうしてつまらない我儘だと、吹き飛ばしてみせた。

「オツケー。あたしは、あたしのことをしなきゃね。でも、続ける限り忘れたりしない」

瞳が、根拠なき自信のままに光を放つ。

「そっちも結構な靴、履いてるんだから、できる限り遠くへ行つて土産話のひとつくらい豪勢に聞かせてよね。トラじゃないけど、期

待しないで待つていてやる、わ」

あえてトラの口真似なんぞ、してみせた。

その一人芝居に、笑みはこぼれる。アルトは困ったように小さく笑って返した。応えてネオンもさらに左右へ唇を伸ばしかけるが、それ以上は続かない。

「じゃ……」

頬はしぼんで、きびすは返される。

ままに地面を刺す真新しいヒールは、トラが取り寄せたものだ。見送れば背中は変わらず華奢だったが、確かに何かは違つとアルトの目にその姿は映り込む。

はずが、そこでネオンは歩みを止めた。丸めた背中で豪快に、ジャケットのポケットを探りだす。

「そう、これっ！ 出航の手続きに行っている間、届いてたの！」突拍子もない声と共に振り返った手にあるのは、一通のホロレターだ。かざしてアルトへ駆け戻った。

「あなた宛てよっ！ もう、すっかり忘れてたっ！」

飛び込むように突き出したなら、掴まされてアルトの体はのけ反り、だがネオンがその手を離すことはない。

「それから、これも……」

付け足して、不意にヒールのかかとを浮き上がらせた。

「靴代まだだったわよね。代わりに取っておいて」唇が重なる。

離れて今度こそ、潰れるように笑ってみせた。

ひらり、ネオンは身をひるがえす。

そこには愕然と立ち尽くすトラと、顔に触れるなどと破廉恥な、と怒りに震えるライオンの姿があった。ただサスだけが深くうなずき、何かを悟ったように瞑想している。

跳ねてその輪へ、ネオンは飛び込んでいった。

振り返ることはもうない。まわりを促す背はただアルトの前から遠のいてゆく。

見つめる視界を作業車はまた横切り、通り過ぎたそこに砂塵は白く尾を引いた。

煙たさに、瞬く。

その瞬きでアルトは止まっていた時を動かした。

ついでに息も吐き出せば、言葉は開いた口からこごもれだす。

「バカヤロウ。……これじゃ、腹の足しにもなんねえだろうが」

握らされたきりのホロレターへ視線を落とせば、開いた中からドリーの超空間ジャイロ、その買取りを要求するメッセージは飛び出していた。残念ながら主は今や、種をもがれて孤独の果てだ。用はない、と握り潰す。

格納庫では遅れ気味の出港準備を催促し、サイレンが鳴っていた。投げ捨て、アルトはコクピットへ走る。

好きなように行け。

促されるままに。

ひとり踊るワルツか、止まぬ鼓動のブルースか。

履いた靴が、奏でるリズムの導くままに。

そしてこれはまだ少し先のこととなる。だがしかし、そこでアルトは再びこんなメッセージを目にすることとなっていた。それはラボの筐体から退避した、イルサリからのものだ。

ここに約束の不履行を報告します。

よって、わたしは自らの生命を保護すべく、本艦の攻撃を実行。物理依存していた筐体より、退避を完了しました。

消失データ多数。

しかしわたしは今、それらに代わるたったひとつの価値の発見に至ったことを報告します。

切り離されたその中にこそ、存在するものが外部というネットワー

クである、ということ。

往來の制限を受けたそこにあるのは、無限の可能性である、ということ。

あなたは約束によって命を、その不履行により切り離された「個」をわたしへもたらし、わたしをこの無限へ送り出して下さいました。ここに生まれ、生きてゆかねばならぬものとなった。

与えられた可能性に、感謝すると同時に、あなたは何にもかえがたいわたしの父であることを、わたしはわたしの意志により明言いたします。ゆえにわたしはあなたの息子として、あなたが望む限り、いかなるときも協力を惜しまぬことを、ここに宣言いたします。必要ならばいつでもお呼び下さい。

ここにゲートを固定しました。
入力コードは

「ハッピーバースデイ アルト 獅子の口は真実を語る」

あなたの息子 イルサリ

親愛なる父 セフポド・キシム・プロキセテルへ

「ハードボイルドワルツ 有機体ブルース」 完

最終話 Cartain Call (後書き)

長らくお読みいただき、ありがとうございました。
感想等、ございましたらホームページ、メールにて、お待ちいたし
ております。

続編等も公開中(完結済)。

よければ合せてお楽しみください。